
モンスターハンター 狩人とモンスターの奇妙な話

三月語

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター 狩人とモンスターの奇妙な話

【Nコード】

N3447K

【作者名】

三月語

【あらすじ】

モンスターハンターのモンスター擬人化小説！

作者の突発的な作品です！

妄想などが見られるかもしれませんが、よろしくお願いします！

※擬人化案を募集しています！ただし、感想に内容を書かれると採

用時にサルベージをしなければならず、時間がかかってしまうので、感想ではなく、メッセージボックスにお願いします。

※感想、現在は荒らし出現のせいでユーザのみ受け付けています。ユーザ外の人はいばらく感想が書けませんので、よろしくお願いします。

プロローグ 出会い

「・・・なぜ、こうなった？」

スバルは、目の前の事態を飲み込めていなかった。

おかしい。俺はイャンクックと戦っていたはず。閃光玉をぶつけたらいつもより強い光が出た、と思ったら目の前に女の子がいた。

事件は数時間前に遡る。

俺はイャンクック狩りのクエストを受けた。

たった一人だが、俺はある意味有名だった。マフモフでティガレックスを討伐したハンターだ、なんて言われている。

今回は、鳴き袋が少なくなったからイャンクック狩りをしようとしたのだ。

ようやく見つけて、戦った。

「下級だからって嘗めないほうがいいニャ！」
「わかってら！」

クエエツ！

「おらっ！」

ザシュッ！

ギャッ！

突きを回避し、袈裟掛けに斬る。

クエッ！

「当たるかよ！」

イヤンクツクとの攻防が続いた。

そんななか。

「ギニャー！」

「ノブ！」

ノブがやられた。

「やられちゃったニャ・・・」

「一辺下がって回復しろ！」

「わかったニャ！」

ノブは地面にもぐり、隠れた。

「いい加減、やられやがれええええっ！」

閃光玉を投げた。

ピカッ！

「うわっ！いつもより光が強い！？」

「きゃああああああ！」

「悲鳴！？」

そして光が消えて、今に至る。

「目が・・・見えないよお・・・。」

まで。イヤンクツクはどこだ？千里眼だとあいつに反応があるが・・・よし、前は見ねえ。なぜかあいつは裸なんだから。

「あ、やつと見えるようになった・・・。もうっ！その人！絶対許さないんだから！」

（やべ、キレた？）

イヤンクツク（？）はスバルに向かって走ってきた。
そして。

「ひよわやあえあああっ！」

痺れた。

「まずはおとなしくしとけ。」

「ふみゅあ！？・・・すぴー・・・。」

よし、これで落ち着いたろ。

「ノブ、復活ニャー！あれ、ご主人！その女の子、おんにゃのこどうしたのニャ？」

「知るか。閃光玉当てたらこうなった。頼む、そいつにコート着せてくれ・・・」

「ご主人は女性に弱いニャ。免疫つけた方がいいニャ。」

「うっせ！」

アイルー・ノブが、コートを着せたのを確認すると、スバルは女の子を背負ってベースに向かった。

「今回は・・・リタイアだな。」

プロローグ 出会い（後書き）

突発的な感じで始めました、モンハン小説です！

いろいろありますがよろしくお願いします！

キャラ紹介（前書き）

今回はキャラ紹介です。

キャラ紹介

スバル

18 male

基本武装は太刀、というハンター。
女性とまったく接点が無いので女性に弱い。

お気に入りには鬼哭斬破刀。

お守りにフルフルの小さな皮を持っている。

ランゴスタを憎たらしく思っている。

アルとは友人。ただ、アルの性格に困っている。

ハンターランクは4。

ノブ

アイルー。

スバルがハンターになったときから一緒にいる。
そのためスバルあつてのノブ、ノブあつてのスバルという関係ができた。

手先が器用で、スバルの武器、防具は彼が作った。

戦闘は切断型。

爆弾にはあまり近づかない。

アル

18 male

スバルの友人。典型的なスケベ。

スバルが持つフルフルの皮は彼とスバルが初めて討伐した記念に、
として扱っている。彼も小さな皮を持っていて、スバルのと繋ぎ合
わせることができる。

ハンターランクは3。

第1話 名付けられたイヤンクック（前書き）

第1話です。

この話のメインヒロインの女の子の名前が決まります！

第1話 名付けられたイャンクック

ベース。

「ふみゅー。すぴー。」

「しかし、よく寝てるな。」

「そうだニャ。この子、どうするニャ？」

確かに。でもこのままじゃ流石に犯罪になるし・・・

「・・・って、なに考えてるんだ、俺は！」

「ご主人？」

いかん。取り乱した。

この子、14、15歳くらいだな。・・・そうは見えんが。体型が。

「ノブ。すまないが、マフモフまだ一つ残ってたよな？」

「今ここにあるニャ。」

よし、なぜここにあるかは後で聞くか。

「それで、あの子に服作ってやってくれ。」

「了解ニャ。」

「んみゅ・・・」

そう話していたら、あの子が起きたようだ。

「ここは・・・？」

「目が覚めたか。」

「あっ！さっきの！」

勢いよく動いたせいで、シーツが動いた・・・って！

「まて、頼むから動かないでくれ！つか、なんでお前服を着てないんだ！？」

「なんでって、モンスターだもん。」

「わかったから、服が出来上がるまで待ってくれ！」

「うん・・・。」

モンスターだもん。って・・・まあ、わからなくもない理由だな。落ち着いてくれてよかった・・・。

「服出来たニヤ。」

「すぐ着せてくれ！俺は外にいるから、済んだら呼んでくれ！」

「わかったニヤ。まったく、女の子の着替えを見ないとは、なんたる腑抜けかニヤ。」

さて、肉焼くか。

「大分肉が貯まったな。こんがり肉でも貯めておくか。よっと・・・。」

調理中、ベースから

「ふあっ!？」

とか、

「あうっ・・・」

なんて聞こえたのは気のせいだ。気のせい。

「済んだニヤ。」

「上手に焼けましたゝってな。おう、今行く。」

「お、可愛いじゃないか。」

「あうう・・・」

ベースに入って見たのは、改良したマフモフを身に纏った女の子だった。

外。

「まず聞くが、君は何者なんだ？」

「私？イヤンクックだよ？」

やっぱりか。

「じゃあ、君が今人になってるのはわかるか？」
「人なの!？」

「知らないのか。」

「うん。」

マジかよ。

なら、どうすっかな・・・

「このままじゃまた襲われるしな・・・。そうだ、一緒に来ないか？」

「うえっ？」

彼女は肉を頬張っていた。

「俺といた方が安心だしな。」

「うーん・・・。」

迷っている。

「まだしばらくはギルドも来ないしな。考えとけ。」

「行く！」

早っ！

「だって、危ないんでしょ？それに、ハンターさんに裸見られちゃったし・・・。」

モンスターだから裸見られても平気じゃないのかよ・・・

「それに、お肉くれたし！」

それだけで決めるのか！？

「そうか。・・・なら、名前がないとな。」

「名前？」

「いつまでも「君」じゃ嫌だろ？」

「じゃ、お願い！」

しかし、名前か・・・どうしたものか・・・イヤンクツクだからクツク？いや、それだと捻りが無い。うーむ・・・女の子らしい名前・・・

「・・・アイリス。」

「ほえ？」

突然声を出したからあの子がこっちを見た。

「君の名前は「アイリス」だ。」

「「アイリス」かニャ。オイラもいい名前だと思うニャ。」

「あ・・・ありがとう！」

アイリスがついてくるようになった。

「あ、俺の名前はスバルだ。よろしくな。」

「オイラはノブニャ。よろしくニャ。」

「よろしく！」

「ところで、いつ救助が来るんだ？」

「明日ニャ。」

「明日かよ・・・。まあいいか。少しだけ狩りをしておくか。」
「私もついてく！」

「（大丈夫か・・・？）わかった。ノブ、武器あるか？」
「弓矢ならあるニャ。」

「じゃ、頼めるか？」
「うん！」

アイリス、張り切ってるな。

そして、ゲネポスなどを何匹も狩ってから救助が来た。
アイルーたちにアイリスのことを突っ込まれたが。

帰ったら店の親父に抗議だな。

今回の報酬。

入手

ゲネポスの皮×8

ゲネポスの牙×9

ドキドキノコ×12

クエストクリア

リタイア扱いとなり、なし。

その他
アイリス。

第1話 名付けられたイャンクック（後書き）

今回登場（名前が決まった）アイリスの紹介です。

アイリス

イャンクック雌。

身長は156cm。

見た目の年齢は14・15歳。だが、胸の大きさがあってかそう見られない。

サイズはD+。

お肉大好き。特に好きなのは、スバルの焼いたお肉。

武器やスバルへの思いは今後明らかにあります。

今後、まだまだモンスター擬人化が起こります！

第2話 帰還、そして初めてのこと（前書き）

第2話です！

ちょっと危なっかしいシーンに躓きながら書きました。

どうぞ！

第2話 帰還、そして初めてのこと

ポツケ村に帰ってきた。

「お、スバル。無事帰ってきたか。」

アル。帰って早々お前か。

「俺を勝手に殺すな。」

「殺したか、今の台詞で？」

「殺した。」

「心配したんだぜ？それよりも・・・」

アルの視線が動く。

「その娘、誰？」

「アイリスか？」

「アイリスちゃんか。」

しまった！

「可愛い娘だねえ。胸も大き・・・もげぶっ！」

俺はアルをおもいっきり殴った。

「黙ってろ、スケベ。」

アルは逆さまになって頭を埋めていた。

「い、今のは・・・？」

「ああ、不死身のスケベだ。関わるな、お前にもうつるからな。」
「う、うん。」

アイリスにこれ以上バカを見せないよう歩いた。

スバル宅。

「ここが俺の家だ。」

自宅についた俺は、まずアイリスに自宅を紹介した。

「ふわぁ、大きいんだね。」

「そうでもないがな。ちょっと出掛けてくる。」

「どこいくの？」

アイリス好奇心旺盛だな。

「アイリスをこんなふうにした店の親父に抗議しに。」

「抗議しちゃダメだよ！」

アイリスが反発した。いつもはついてくる感じだったのに。

「その人のおかげで私はこんな姿になれたんだよ？ だったら、感謝しなきゃ。」

せ、正論だ・・・

「仕方ないな。抗議は止めだ。今日は汗もかいたし、風呂に入る。」

今日は色々あって疲れた。さっぱりしたいぜ。

「私も入る！」

・・・はい？

「まで。今なんて言った。」

「私も入る。」

「風呂は普通男女別別に入る。無理だ。」

これだけ言っとけばいいだろ。

「私お風呂の入りかた知らないもん・・・。ダメ・・・？」

やめろ！その上目遣い＋涙目はやめろ！

「・・・わかった、今回だけだからな？」

「（プアアア）うん！」

アイリスに許可を出したら顔が明るくなった。

俺、アイリスに弱いな・・・。疲れが取れそうにない・・・。

風呂にて。

（煩惱退散煩惱退散煩惱退散煩惱退散・・・）

「ねえ、スバル。」

「ノブウウウウ！」

「ふひゃあ！」

スバルはノブを呼んだ。

「なんですニャ、ご主じ・・・んんん！？」

「あれ、ノブ？」

ノブは風呂に入ってきて、アイリスがいたことに驚いた。

「スマン、ノブ。俺の代わりにアイリスの身体を洗ってやってくれ。」

「相変わらずご主人は女性に弱いニャ。」

「うるさい！」

ノブは代わりにアイリスの身体を洗った。

・・・狙ってなのか？素なのか？

「くすぐったいよお〜。」

とか、

「ふやあっ！」

なんて聞こえるのは。俺か？俺がおかしいのか！？

「さあ、おしまいニヤ。後はお風呂に入るだけニヤ。あ、アイリス、スバルにゴニョゴニョ・・・」

「？　そうすればいいの？」

「そうニヤ（ニヤニヤ）。」

・・・ノブのヤツ、アイリスになにか吹き込んだな？

ちやぽん。

アイリスが風呂に入ってきた。アイリスがでるまでの我慢だ、我慢。

「スバル。」

ギユ。

な、なんだ!？

「ありがと。」

「ななななんのことだ？　おお俺はなんにもしてないぞ？」

ちよっと待て!？　なんでアイリスが抱き着いて!？

「そんなことないよ？　スバル、私に優しくしてくれたもん。」

ぎゅうううう。

た、頼むから胸を押し付けなくてくれ……。あいつ、後で……

張り付け・・・だ・・・

「だから、ね。」

「・・・・・・・・」

「あ、あれ？す、スバル！？ノブ！スバルがあゝ！」

「ご主人の女性耐性向上をやろうとしたのに・・・。無駄になっちゃったニヤ。」

風呂上がり。

「うあ・・・。逆上せた・・・。ノブ・・・許さん・・・」

「ご主人の女性耐性向上ニヤ。」

「あうう・・・／＼／＼」

スバルは逆上せ、アイリスは自分の行動が恥ずかしくなって顔を赤くしていた。

（後でノブが教えた）

「の、ノブ・・・。とりあえず、明日はドドブランゴを狩るか？」

「そうニヤね。」

「私も・・・お手伝い・・・したいな。」

「・・・・・・・・」

「・・・びっくりだニヤ。」

あ、アイリスがまさかそんなこと言うとは・・・

「あ、あれ？」

「いいのか？ひょっとしたら死ぬかもしれないんだぞ？」

「スバルも同じでしょ？スバルが死ぬのはいやだから・・・」
お願い。」

また上目遣い＋涙目・・・

「わ、わかった。明日、オババに聞いてみよう。許可を貰えば明日から簡単なものに行くか。」

「明日じゃなくて？」

「明日はアイリスの武器をどうにかしないとな。今のままじゃどうしようもなくやられるのを待つだけになってしまふからな。」

今日は応急的に弓矢を持たせたからな。アイリスに合った武器を探さないと。

「うん！」

アイリス・・・心配だな。

「あ、あと、オババにはアイリスも紹介するから敬語、練習しような？」

「敬語？」

「さーて、ノブ？分かってるな？」

「あ、オイラが教えるのかニヤ？」

「当たり前だ。お前の方が先輩なんだから。」

会ったとき流暢な敬語を話していたしな。

「わかったニヤ。明日から？」

「今から。」

『ええええええ！？』

スバルの自宅から二人の悲鳴が聞こえた。

報酬。

入手、クエストクリア

クエストにすら行ってないのでなし。

その他

アイリスに男性耐性があまりないこと。

アイリス天然説。

スバルの女性免疫－1。

アイリス
敬語

第2話 帰還、そして初めてのこと（後書き）

モンスター擬人化のことで募集します！

擬人化してほしいモンスターとモンスターの名前をセットで募集します！

出せるのは作者の力不足のためあと3・4匹くらいになってしまいますが、多くの案をお願いします！

（性格なども書いてくれると嬉しいです。）

第3話 アイリス紹介、武器を決めよう（前書き）

第3話です。

アイリスの武器の種類が決まります！

第3話 アイリス紹介、武器を決めよう

朝。

Side アイリス

「すぴー、すぴー・・・」

アイリスはぐっすり寝ていた。

「アイリス様、もう朝でございます。お起きになってくださいませ。」

「んみゅ・・・。おふぁよ・・・」

アイリスは半ば嫌そうにベッドからでてきた。

「はい、おはようございます。」

もうちょっと寝ていたいのに・・・

「それでえ、どうしたのお・・・？」

「本日の朝食なんです、アイリス様の好物を中心にお作りしますので、好物はなにか、と聞きに参りました。」

朝食・・・？朝ごはんのこと？

「私の好きなもの？うーん・・・、お肉かな？」

「承知いたしました。」

ご飯、楽しみだなあ・・・。

Side end

「ふうあ。朝・・・か。」

「おはようございますニャ。御主人様。」

「キルラか。今日の朝食は？」

朝食はいつもこのキルラとルア、アニメの三匹のアイルーが作っている。

「本日はアイリス様がいらっしゃったのでアイリス様の好物を中心にお作りいたしました。」

「アイリスの好物か。なんだ？」

「アイリス様は「私の好きなもの？ うゝん・・・、お肉？」と言われてました。」

肉、ね。イヤクックだから仕方ないか。

「それより、アイリスもう起きたのか？」

「はい。御主人様がお起きになる前に私めが起こさせていただきました。」

あいつ、朝弱いのか。

「じゃあ、いつものやってくる。」

「畏まりました。それでは、朝食が出来次第、お呼びいたしますので。」

「任せた。」

いつもの、とは日課のトレーニングのことだ。

「フンツ、セイツ！」

「ご主人、太刀筋がズレたニャ。」

「そうか。また、一からやり直しだな。」

「オイラもやるニャ。」

こうして、二人でのトレーニングが始まった。

「御主人様、準備が整いました。」

「おう。今行くぞ。」

炊事場。

「スバル、おはよう。」

「おはよう、アイリス。」

炊事場に行くと、既にアイリスがいた。

「楽しみだなあ。」

「今日はアイリスの好きなものを中心に作ったらいいからな。」
「うん！」

朝食が運ばれてきた。

今日はまた一段と凄いな・・・

「はううー！おいしいよおー！」

確かに。流石キッチン専属。

食べ終わり。

「さて、オババに会いに行くか。」

「うん。」

さて、心配なことを聞くか。

「敬語は？」

「うえっ？ええと、まずは、はじめ・・・まして？それから・・・
自分の名前を言って、よろしくお願いします？」

・・・まあこれだけ言えれば上出来か。

「さ、行くか。」

「うん！」

オババのところ。

「オババ。」

「おんや、スバルかい？クエストを受けるようじゃないねえ。その
子の紹介かい？」

「ああ。」

長く話し込まなくて助かった。

「あ、あの。は、初めまして。わ、私、イヤンクツクのアイリスと
います。よ、よろしくお願いしましゅっ！」

噛むとはな。

「ほう、イヤンクツクかい。かわええじゃないかい。」

「驚かないのか？」

「驚くことでもないさ。」

意外だ……。

「今日はアイリスを紹介したかったただけだ。クエストは明日受ける。
」

「そうかい。そういや、さっきアルがアンタを探しておったよ。」

「ありがと。」

アルが？

「アイリス、アルが呼んでるから行ってくる。」

「クエスト……に？ だったら私も「だめだ。」うう……」

涙目……だが今回は仕方ないんだ。

「アイリスはまだ武器を決めていないだろ？」

「い、今決める！ ついて行きたいもん！」

どうしても行きたいのか・・・

スバル宅。

スバルは自分の持っている一番弱い武器を探していた。

確かこの辺だったんだが・・・。。あった。

「それじゃ、まずは大剣からだな。」

「うん。」

アイリスは大剣に近づき、持ち上げてみた。

「ふにゅうぅ！んんぅ！」

持ち上がる気配、なし。

次は太刀。

「よい・・・しょ。。。おとと。」

持つことはできるが、ふらつく。

クエストを受けてないのでなし。

その他

アイリス用武器。(片手剣)

アイリス用防具。(改良型マフモフ一式)

アイリス用道具ポーチ。

アルがスケベだというアイリスの意識。

第3話 アイリス紹介、武器を決めよう（後書き）

今回、アイリスについての補足です。

髪はピンクで長め、癖っ毛で2本髪が立っている。
片手剣は最初の片手剣です。

次回はアイリスに少し変化が・・・？
お楽しみに！

第4話 アイリス嫉妬？新たな女の子現れる（前書き）

今回、新しくモンスターが現れます！擬人化します！
アイリスが嫉妬？します！

どうぞ！

第4話 アイリス嫉妬？新たな女の子現れる

「お、スバル。まったく、遅せーじゃないか。」

「悪い、アイリスと一緒にいきたいって言うからさ。」

「アイリスちゃんも一緒に「また埋めるぞ。」さ、さあクエストに行こうか。」

まったく、あいつのスケベは治らんのか？

今回のクエスト。

森林、ドスランポス討伐。

「さて、ヤツはどこに……。」

前に来たときと違う？千里眼……反応が二つ！？

「アル！早くドスランポスを狩れ！場所は3！」

「どうした？なにかあるのか？」

マズイ……アイリスをどう守る？ノブはいない。

「この地帯に……飛竜種がいる。」

「ふええ！？」

「嘘だろ！？」

「嘘じゃねえ！」

思えばこの時、早くアルを行かせればよかった。

ドスン！

ガアアアアアアッ！

「な、ナルガクルガ!?」

「あうう・・・。」

ち、アルは固まっちゃまってアイリスは怯えちゃった。

「閃光玉で時間を稼ぐ！早く逃げろ！」

「わ、わかった！」

「こっちに・・・くんな！」

カッ！

「キャアッ！ま、眩しいっ！」

この異常な眩しさ・・・まさか！

光がはれて。

ナルガクルガがいた場所にいたのはやはり女の子だった。

「うっ・・・目が・・・」

「なんだ！？ナルガクルガがいなくなって、女の子が出てきた！？なに？俺へのご褒美？」

「なんのだ？」

「仕事を頑張ってきた。」

・・・お前の場合はナンパだろ？

「あ、目が・・・開けれるように・・・ヒッ！」

「ご褒美だー！！！」

「いやああああ！」

あの馬鹿！

「アイリス！」

「・・・」

呆然としてる・・・？

「アイリス！！！」

「わひゃい！」

「盾借りるぞ！あの馬鹿スケベを埋める！止めたらこいつを着せてやれ！」

「え、あ、うん！」

ダッ！

まに・・・あえッ！

「（ガスッ！）おごっ！」

よし、馬鹿停止！

スバルは走って女の子とアルの間に入り、盾をアルの顔に直撃させた。

「……………（ぽ…………）」

後は引きずって…………埋めるだけ！あの子は絶対見ねえ！

アイリス、早くコートを着せてくれ！

Side アイリス

アイリスはナルガクルガと思われる女の子にコートを着せていた。

「大丈夫…………って、顔赤いよ？」

「えっ！？」

顔が真っ赤になるなんて、なにがあったんだろう？

…………それにもいいな。髪綺麗だし、胸大きいし…………。

「あの・・・どうしましたか？」

「えっ!? あの、その、ね? ちょっと羨ましいな・・・って、思っちゃって・・・」

あ、ホントのこと言っちゃった・・・。

「あの・・・なにがですか？」

気付いてない。

「なんでもないよ。」

S i d e e n d

さて、永遠のスケベ大魔王は討伐した。

まさかナルガクルガがいるなんてな。どこから逃げてきたのか?

・・・ま、まあいいさ。

「アイリス、着せたか？」

「終わったよ〜!」

しまった、ノブ連れて来ればよかった・・・。

ベース。

「あの、助けてくれて、ありがとうございます。」

「お礼は言わなくてもいいのに。」

「そうだよ。」

「そ、そうですか？」

さて、確認だ。

「確認するが、君はナルガクルガ？」

「はい。」

「やっぱり。耳がそうだもん。」

「あなたは、イヤンクックですか？」

「そうだよ。」

あの光り方からそうだと思ったが。

「スバル？」

「・・・」

「スバル！」

「うわっ！ な、なんだ！？」

アイリスがいきなり声を出したから驚いた。

「今この子の胸、見てたでしょ。」

「考え事してたんだ、んな暇あるか？」

「むっ！」

俺、なにかした？

Side アイリス

スバルが黙って下を見た。目線を追ったら・・・あれ？ちよつと呼んでみよ。

「スバル？」

「・・・」

なんだろう、あの子の胸見てるんじゃないか、って思ったらなんかイライラしてきた・・・

「スバル！」

「うわっ！な、なんだ！？」

スバルを大きな声で呼んでみた。

「今この子の胸、見てたでしょ。」

「考え事してたんだ、んな暇あるか？」

「むっ！」

なんかもつとイライラしてきた！

なんでっ！？

Side end

「さてと。どうするかね・・・」

「どうするって？」

むくれ顔でアイリスが聞く。

「アイリス、俺がなにかしたか？」

「なんかイライラしてたの！」

んな理不尽な。

「俺はクエストの続きをやる。アイリスはあのスケベが蘇生したらまた埋めてくれ。」

「うん。」

まだむくれてる。

「後で肉焼いてやるから。」

「うん！」

機嫌、直ったか？

「じゃ、行ってくる。」

俺は一人でドスランポス討伐に向かった。

モンスターに雄はいないのか？

Side ベース

「あの！」

「ほえ？」

ナルガクルガの女の子がいきなりアイリスに声をかけた。

「一緒に行っても・・・いいですか・・・？」

「なんで？」

アイリスは聞き返した。

「えっ！？それは、その・・・」

段々小さくなっていく声。

「あの・・・誰にも言わないでくださいね？」

「言う相手いないよ？」

「それでも、です・・・」

ナルガクルガの女の子は小さな声で、

「あの人が、気になっちゃって・・・」

と、言った。

「気に・・・なる・・・？」

「はい・・・」

アイリスにはまだわからないことだった。

「よくわかんないけど、いいかは聞かないとわからないや。名前は？」

「すみません、無いんです。」

「あ、私と一緒になんだ。名前、考えなきゃ。」

「お、お願いします・・・」

アイリスはナルガクルガの女の子の名前を考えた。

が。

「ダメ、私じゃ考えられない・・・」

撃沈していた。

「す、すみません!」

「謝らなくていいよ・・・。スバルが帰ってくるの待と?」

S i d e e n d

「どうにか討伐してきたぞ。スケベは?」

「らいりよゝぶ・・・らよ・・・」

「・・・なにがあった。」

「あ、私の名前を考えてくれたんです。」

名前を、か。

「ついできたいのか？」

「はい！」

「君がよかつたらな。」

「寧ろ、嬉しいです！」

また、増えたな・・・

「あ、名前・・・」

「あ、お願いします。」

さて、名前か……。ナルガクルガナルガクルガ……。あ。

「そうだ、ナコルにしよう！」

「ナコル・・・ですか？」

あれ、嫌そう？

「ダメかな？」

「い、いえ！とんでもない！」

どっちなんだ？

「んじゃ、よろしくな。俺は、スバル。んで、さっきも一緒にいたのが・・・」

「アイリフでふうく・・・」

弱ってるな。

「アイリスだ。」

「こちらこそ、よろしくお願いします!」

「アイリス、ちょっと残っててくれ。服作ってくる。」
「うん、わかった。」

俺は先に帰ってきた。

そして、ノブを連れ、服を作らせた。

報酬。

入手

マヒダケ×20

ドスランポスの牙×1

ドスランポスの皮×2

ランポスの皮×20

クエストクリア

ドスランポスの皮×2

ドスランポスの牙×5

骨×4

その他

ナコル

アルと言う名のスケベ大魔王

アイリスの恋心のきっかけ(嫉妬)

ナコルの想い

第4話 アイリス嫉妬？新たな女の子現れる（後書き）

今回はナコルの説明です。

ナコル

ナルガクルガ雌

身長は160cm。

見た目年齢はアイリスと同じ。だが、アイリスと同じ理由でそう見られない。

サイズはFー。

基本的に敬語。名前は呼び捨てだが。

スバルのことが気になる。

恋だとは気づいていない。

募集、まだまだ受け付けます！一度に大量でも構いません！
次回もお楽しみに！

第5話 始まる日常、そしてハプニング（前書き）

第5話です。

日常です。帰ってきたばっかなのに。

どうぞ。

第5話 始まる日常、そしてハプニング

帰ってきた。

あのあとクエスト受注所で謝罪され、オババにナコルを紹介したら、

「スバルのまわりには女子が集まるねえ。」

と、からかわれた。

スバル宅。

さて。

「アイリスのために肉を焼かないとな。」

約束だし。

そしてアイリスとナコルは。

風呂にいた。

「お風呂とは、気持ちいいものですね〜・・・」

「(じー・・・)」

「な、なんですか、アイリス？」

アイリスはナコルのある一点を凝視していた。

（なお、ナコルはアイリスに風呂の入りを教えてもらっている）

「やっぱり、羨ましい・・・」

「な、なにがですか？」

「その胸が羨ましいよ！」

「ええっ？」

アイリスはアイリスだった。

「なんでそんなに大きいのー!?」

「そんなこと言われても・・・ふやん！ちよ、止め・・・」

「えーい！」

「や、止めて・・・んっ！あ、アイリス・・・／／／」

そんな話が展開されていた。

まったく、静かに入れんのか？

スバルはそう思いつつ肉を焼いていた。

「よし、完成。・・・作り貯めしておくか。」

また、焼きはじめた。

「スバルく！」

お、アイリスが風呂から出たらしいな。

「アイリス、肉、焼けたぞ。」

「ホント!？」

肉好きだな、相変わらず。

「ふひい・・・」

「ナコル? どうした？」

すごいフラフラなんだが・・・。

「アイリスに・・・弄られちゃって・・・」

お前、ナルガクルガだろ？

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫です・・・」

大丈夫ならいいが。

「それじゃ、ナコルの武器も準備するか。」

「いいんですか？」

「俺の使い古しだ。アイリスも片手剣を使ってる。防具は加工したが。」

加工しなかったらブカブカだな、あれは。

「じゃあ、お願いします。」

ナコルの体型からすれば・・・太刀か？弓矢か？

まず大剣。

「んんゝっ！・・・だ、ダメです、持てません・・・」

太刀。

「（シャキン！）あ、これ・・・」

おお、アイリスと違ってふらついてない。

「これ・・・いいですか？」

「これでいいのか？」

「はい。これが一番戦いやすく見えたので。」

い、意外だな・・・

「なら明日、二人をハンターとして登録しに行くからな。しばらくは手伝うが、二人で協力しろよ？」

「はい！」

「はい！」

まだ時間あるし、農場行くか？

アイリスとナコルが自宅へ入ったのを確認して、農場へ向かった。

さって、なにすっかな・・・

「おーい、チャコル！今採掘可能か？」

俺は採掘場の頂上にいるチャコルを呼ぶ。

「おお牧場主！問題ないニャ！」

採掘可能か。昨日は確認しなかったからな。

「せいっ！（カンッ！）おらっ！（カンッ！）」

何回か繰り返した。

「牧場主、もう採掘出来ないニャ。」

残念だ。でも、足りなかったマカライト鉱石が手に入ったしいいか。

S i d e アイリス・ナコル

「あれ？」

「アイリス、どうしました？」

アイリスがあることに気づく。

「スバルがない・・・」

「あ、ホントですね。」

「探す？」

「そうしましょう。」

二人はスバルを探した。

カンッ！

「（ピクッ！）」

「どうしました？」

「なにかを叩いたような音が・・・聞こえる・・・」

「そっちへ行ってみます？」

「いこっ！」

そして二人は音のする方に行った。

S i d e
e n d

さて、なにが釣れるかな・・・

「スバル〜!」

アイリス、ナコル。

「もう、おいてかないでよく!」

「すまん、夕食の材料を釣ろうとしてたんだ。」

アイリスは湖を見つめて、

「今日、お魚?」

と、言った。

ナコル、やりたそうだな。

「ナコル、やってみるか?」

「え、いいんですか?」

「私もやる!」

アイリスが食いついた?

「ま、いいか。釣竿、足りるか?」

「大丈夫ニヤ、まだまだあるニヤ。」

スバルは二人に釣竿を渡す。
やり方を教えて釣りを始めた。

「!・・・えいっ!」

アイリスが釣った。

「かかった。よいしょ！」
ナコルもか。

「またきた！うゝん、うゝん・・・（グイッ）きゃあっ！」

アイリス？

ドポオオオオオン！

落ちたのか！？

「だ、誰か・・・！助けっ！わぷっ！」

溺れた！？泳げないのか！

「アイリス、待ってろ！すぐ助ける！」

ザポン！

「アイリス！」

「す、スバル・・・」

ここ深いからな・・・

ザパアツ。

「はあっ、はあっ、はあっ・・・」

な、なんとか無事だ・・・

「ケホッ！ごめんね、迷惑かけちゃった・・・」

「いや、いい。それより、まず服をどうにかしてくれ。」
「えっ？」

服が水を吸って張り付いていた。

正直俺には刺激が強い・・・。

「ひゃっ！」

慌ててアイリスは前を隠す。

「ナコル、服の替えを頼む。」

「は、はい！」

今日は色々と疲れたな・・・。

報酬

入手

マカライト鉱石×3

エルトライト鉱石×4

サシミウオ×5

クエストクリア

クエスト未受注のため、なし。

その他

アイリスとの絆+3。

夕御飯の食材。

スバルの女性耐性+1

アイリスのドジっ子属性判明。

予備の肉（アイリス用）。

アイリスがカナズチということ。

第5話 始まる日常、そしてハプニング（後書き）

今回は、ナコルの補足です。

髪はかなり長く、膝くらいまである。

敬語など真面目キャラらしいが、眼鏡はない。当然。

以上です。

次回、初陣の準備です！どんな準備をするかは次回のお楽しみで！

第6話 冒険の準備（前書き）

第6話です！

今回はあくまで準備なので、少しつまらないかもしれませんが。

では、どうぞ。

第6話 冒険の準備

朝。

S i d e ナコル

「おはようございます、ルア。」

「おはようございます。おや、ナコル様、なにをなさって？」

私は昨日、スバルからいただいた太刀を使えるよう練習しました。

「太刀の練習を。」

「スバル様の・・・為ですかな？」

「うえっ！？そ、そんなことは・・・」

「目が泳いでますぞ？」

「うう・・・」

なんでばれたのかなあ・・・

「でも、その心掛け、決して無駄にはならないだろう、そう思いますぞ？」

「そう・・・ですね。」

「今後も精進、お忘れなきよう。」

「はい！」

よし、頑張ります！スバルの足を引っ張らないように！

Next Side アイリス

ブオン！

「んみゅ……。」

私は不思議な音で目を覚ました。

「にゃんのおとお？」

そのまま部屋を出ていくと、練習中のナコルの姿があった。

「ニヤコル……おふぁよ……。」

「あ、アイリス。おはようございます。眠そうですね。」

「まだ寝たいけど、アイルーたちに迷惑だし……起きなきゃ……」

昨日は起こしに来てもらった。だったら今日は自分で！と思っただけなのだ。

「なら、私と武器の練習、しますか？」

「れんしゅ？ なんで？」

今日、なんかあったっけ……？

「今日からですよ、クエスト受注。」
「あ！」

そうだ！今日から私たち、ハンターデビューするんだった！

「やろ！っていうか、やって！」

そうして私は、ナコルと二人で練習を始めた。

クエスト、楽しみだなあ……。迷惑かけないように頑張る！

S i d e e n d

「ふあ……。」

目が覚めたら、いつも起こしにくるアイルーがいなかった。

珍しいな、あいつらが揃って寝坊か？

カキイン、ガキン！

「てりゃー！」

「えい！」

朝から誰だ・・・って、ナコルとアイリス？

数分後。

そろそろ止めるか。

「はあっ、はあっ・・・」

「ま、まだまだ・・・」

「なにがまだまだだ。止めとかねえとクエストに響くぞ？」

「ス・・・バル・・・？」

「あ・・・。おはよう・・・ございます・・・」

かなり疲れているみたいだが、何時から始めたらしうなる？

「今・・・何時・・・？」

「もうそろそろ朝食だ。」

「朝ごはん!？」

「もうそんな時間ですか!？」

「・・・ったく、何時から始めたらしうなる？」

「私は・・・早朝から・・・でした・・・」

「私は・・・まだ涼しいかな・・・って・・・思えるころから・・・」

「とりあえずまずは朝食食べてから。スケベが出る前に全ての説明を済ます。」

「ひうっ！」

「お、おお願いしますっ！」

二人とも参ってるみたいだな。

そりゃあんなのに迫られたり、品定めなことされたりすりゃ参るわな。

「朝食の準備が出来ました。本日は初クエストなので特殊効果を得られるように工夫しました。」

流石お抱え料理アイルー。

わかってるじゃないか。

炊事場。

「うわ、昨日より豪華！」

「食べ切れますか？この量・・・」

アイリスは豪華さに驚き、ナコルは食べ切れるか心配している。

「ナコル、食べれるくらいにしておけ。残せるかが不安になるがな。」

心配を払拭する。

「いただきます！」

「い、いただきます・・・」

食事中・・・

「ごちそうさま！」

「ごちそうさま。結局食べちゃいましたね。」

二人とも満足のようだ。

「なにか違いを感じないか？」

「そういえば・・・」

「なんか・・・力が湧き出てくる感じがするよ？」

「食事効果出たな。」

「なに、それ？」

今説明したらスケベが目覚めるかも。

「現地で説明する。後は買い物だ。二人とも初心者だから採取クエストにするがいいか？」

「いいよ。」

「問題ありません。」

「それじゃ、いきますか！」

「おおー！」

「はいっ！」

外。

店についた。

「今回は雪山だから、ホットドリンクは欠かせないな。研石と、回復薬と。」

「ご主人、あの二人には？」

説明した方がいいか？

「じゃあ、二人とも来てくれ。」

「はい。」

「わかりました。」

そして、軽く説明をしておく。

「えっと、ホットドリンクと、回復薬と。」
「マフモフじゃ寒いかな？」

二人が買い物を進める。

「必要なものは買えたか？」

「はい。ばっちり。」

「お金が足りないって言われた・・・」
アイリス、お前は本当に天然だな・・・

「それじゃ、登録しに行くか！」

『はい！』

報酬

入手、クエストクリア
クエスト未受注のため、なし。

その他

食事スキル 攻撃強化付与。
アイリスの無駄スキル 金の無駄遣い発生。
ナコル、じつは心配性なのが判明。

第6話 冒険の準備（後書き）

今回は少し時間が不鮮明だったかもしれない部分の補足です。

ナコル練習開始・・・朝4時頃

アイリス練習開始・・・朝6時頃

スバル起床・・・朝7時半頃

こんな感じです。

次回、ついにクエストです！初陣です！

感想、お待ちしております！

第7話 初めてのクエスト、初めての戦闘（前書き）

第7話です！

ようやく初クエストです！

第7話 初めてのクエスト、初めての戦闘

さて、まずは登録だな。下手にやると困るし、面倒だから俺がやるか・・・

「ハンター登録をしたいんだが。」

「誰のですか？」

「後ろの二人だ。」

後は少しの質問などで、実質登録は簡単に済んだ。

「では、頑張ってください。」

「はい！」

「はい！」

クエスト「雪山草摘み」

開始。

「ここからスタート？」

「普通は、な。」

「じゃあ、行きましょうか。」

アイツが来なけりゃ楽なんだが・・・

「と、その前に。」

スバルはホットドリンクを飲んだ。

「二人は・・・あ、ポポ狩りしてら・・・」

「えい！」

「はっ！」

アイリスは基礎的な攻撃をしてるな・・・。逆にナコルは速度を活かして連撃か。

「ていつ！」

ザシュッ！

ブォォ・・・

ドォン！

アイリスが首を斬り、血飛沫をあげながらポポは倒れた。

「やーん、服に血が付いた〜！」

「おう。二人ともお疲れさん。」

「スバル。」

二人に近づき、労い、

「戦いに勝ったから、剥ぎ取りだ。」

俺はポポから肉を剥ぎ取った。

「うえっ・・・」

「こうでもしないと武器や防具も作れないからな。さ、雪山に行くぞ。」

「うん！」

「わかりました。」

ツタを登るときだけは流石に先行したが後は基本的に後ろで見守ることにした。

洞窟内。

『寒いー！』

案の定、寒がっていた。

「なんでスバルは寒くないのー！」

「お前ら、ドリンクあるだろ？」

『あっ！』

忘れてたのかよ・・・

「早く飲まなきゃ！」

「うああ・・・」

あ、よく考えたらこの二人には熱いかも？

『熱い！熱い熱い熱い！』

やっぱな。

「こっからは敵も攻撃してくる。気をつけろよ。」

「うん。あ、ギアノス！」

アイリス・・・？

「てりゃー！」

ギヤアツ！

攻撃した！？

クエエツ！

囲まれた！？

「うわっ！わっ！」

バシッ！

「きゃっ！」

ドサ。

「まずい！ナコル、行くぞ！」

「は、はい！」

俺とナコルはアイリスを助けに行った。

Side アイリス

あ、あれ・・・？ひょつとして、囲まれちゃった・・・？

ギャッ！

「うわっ！わっ！」

あ、危なく・・・

ギャッ！

ビシッ！

「きゃっ！」

ドサ。

倒れたアイリスにギアノスが集まってくる。

「やめて・・・来ないで・・・！」

ギヤアツ！

「あ・・・う・・・」

恐怖で動けないアイリスにギアノスの頭が迫ってきた。

私・・・死んじゃうのかなあ・・・

アイリスがそう思った瞬間、

「はああっ！」

ズバァン！

一匹のギアノスの頭が胴と離れ、宙を舞った。

S i d e e n d

ギアノスの首が落ちたその時、彼等の狙いが動けないアイリスから

スバルに変わった。

「ナコル！アイリスを頼む！」

「わかりました！」

「さあ、俺が相手だ！来い、ギアノス共！」

ギアアッ！

「そらっ！」

ザンッ！

クエエ・・・

「はっ！」

ズシャッ！

ギャッ！

スバルは多数のギアノス相手に、下がることなく倒しつつけていった。

倒すごとに飛び散る血が、スバルに挑み、死んだギアノスの数を物語るに相応しいものだった。

「よし、全て倒した。アイリス！無事か！？」

「無事です！擦り傷があるくらいですが。」

よかった・・・

「よかった・・・無事で・・・」

「う・・・うう・・・」

ん？

「うわああああああん！」

な、泣いた！？

「ど、どうした！？」

「怖かったよぉ・・・」

初めてであんな大群に迫られたら確かに怖いからな・・・。アイリスのトラウマにならなきゃいいが・・・

「ナコル、すまないが雪山草摘んできてくれるか？」

「あの、雪山草がどこにあるのかわからないんです・・・」

・・・しまった。

「仕方ない。アイリスが泣き止むまで待つか。」

「そうですね。」

数分後、アイリスは泣き止んだ。

「ピック・・・エグツ・・・スバルう・・・ごめんね・・・グスツ・・・」

「一人で突っ込んだのは良くないけどな。俺は怒ってねえ。」

「本当・・・？」

「本当だ。さて、続きをやらないとな。立てるか？」

さつきギアノスに尻尾で叩きつけられたからな・・・

「大じょ・・・痛っ！」

・・・ビンゴ。

「見せてみる。・・・足を捻ったな。仕方ない。ナコル、一人で作業できるか？」

「できますが・・・どうしてですか？」

「アイリスが歩けないからな、俺がおぶっていく。」

「ふひゃい!？」

なんかアイリスが素っ頓狂な声をあげたが・・・

「だ、だだだ大丈夫だから! 歩けるから!」

「ほーう。さつき痛がってたのは誰だったかな？」

「うっ・・・」

「ほら、我慢するな。」

「う、うん・・・」

今までなら飛び乗る感じだったのに・・・。なんかあったか？

Side アイリス

どうしょ・・・スバルにおぶっていく、って言われてから胸がドキドキする・・・

なんなんだろ、これ・・・

S i d e e n d

「ナコル、こいつで最後だ。」

「あ、これですね。・・・よいしょっ。」

よし、必要量は摘んだな。

「後は帰るだけだが・・・安全でアイリスに負担がかからないルートで行くか。」

「はうう・・・」

「仕方ないさ。俺でもなるときはなるしな。」

「うん・・・あ、あのねスバル。」

「なんだ？」

「・・・ありがと。」

「ふふっ。どういたしまして。」

そして俺たちは、ベースに戻り、納品してクエストをクリアした。

報酬。

入手

生肉×3

ギアノスの鱗×2

クエストクリア

骨×3

ギアノスの爪×2

その他

アイリス 負傷。

アイリスのスバルへの想い（恋心になりつつある）。

スバルとアイリスとの絆＋5。

ナコル 太刀での戦いかたに慣れた。

第7話 初めてのクエスト、初めての戦闘（後書き）

武器について補足です。

スバル・・・斬破刀

アイリス・・・ハンターキリンガ

ナコル・・・鉄刀

なぜスバルが斬破刀を？というのはいずれ語りましょう・・・

第8話 料理と新たなモンスター 前編（前書き）

第8話です！

今回は前後編に分けました！

そして、タイトルの通り、今回新たな擬人化モンスターがでてきます！（ちよびっとだけど）

では、どうぞ！

第8話 料理と新たなモンスター 前編

帰ってきてまずやること。
アイリスを医者に診せた。

「どうですか？」

「大丈夫です。軽い捻挫です。二日で完治しますよ。」

「だ、そうだ。その間には行けないからな？」

「はい・・・」

アイリスは渋々了承した。

スバル宅

さって、帰ってきたぞ。

「スバル。」

「なんだ？」

「お願いがあるんだけど、いいかな？」

お願い？

「できることなら、な。」

「じゃあ・・・」

思えばこの時、断っておけばよかった。

「今からさ、ちょっと出掛けてくれないかなあ・・・？」
「は？」

なにを言い出すんだ？

「ナコルも残る必要があるのか？」

「残ってもらわないと困ることがあるの。ね？お願い。」

まったく・・・

「ナコル、アイリスを頼む。」

「わかりました。」

「ノブ、行くぞ。」

「わかったニヤ。」

この時、あんなことになるとは思ひもしなかった・・・

Side アイリス・ナコル
(アイリスメイン)

スバルが家を出てから・・・

「それで、なにをするつもりだったんですか？」

ナコルは、アイリスがやろうとしていることがわからず、すぐに聞いた。

「じつは、私昨日今日と迷惑かけてしまったから、そのお詫びになにか作ろうと思って。」

「足、大丈夫ですか？」

「そのために残ってもらったの！」

でも、なに作ろう・・・？弓用の瓶？閃光玉？ペイントボール？

「だったら・・・アイルーになにかお料理でも習ったらどうでしょうか？」

「料・・・理？」

「はい。」

いいのかもしれないけど・・・

「私、手先が不器用だよ・・・？」

「私ですよ。」

「どうなさいました？」

「わひゃあー!!」

「あ、ルア。」

ルア・・・おどかさないでよ・・・

「さっきお聞きしましたが、料理を習いたいと。」

「はい。頼めますか？」

「ええ。それで、習いたいのは・・・」

「あ、私。」

「アイリス様ですか。承知いたしました。」

「今からお願い！」

「畏まりました。では、すぐに。」

こうして、私の料理の勉強が始まった。

「アイリス様、そこはこのように材料を切るんですよ。」

「う、うん。」

「これは・・・分間煮続けるんですよ。」

「わ、わかった。」

「これはまず強火で焼き、焦げ目が付いたら弱火にして蒸すんですよ。」

「手、手が回らないよう！」

ふえええ〜ん！！こんなに大変だと思わなかったよう！

数時間後。

「休憩に致しましょうか。」

「う．．．うん．．．。そうする．．．」

アイリスの現状．．．作れるもの　サシミウオの刺身、カレー。

一方、ナコルは。

作れるもの　山菜サラダ、ローストミート、すき焼きetc．．．

「ナコルう．．．なんでナコルはこんなにも料理が作れるのお？」

「そ、それは．．．ですね。私にもわからないんですよ。」

「あうう．．．」

なんで違うのかなあ．．．

そんなこんなで料理の講義が終わった。

結果。

アイリス　煮物、カレー、サラダ類全般、ステーキ。

ナコル サラダ類全般、肉類を使った煮物、麺類、御飯物 e t c .
・・。

それを作るようになった。

うう・・・ナコルなら絶対いいお嫁さんになれるよ・・・。私には
なれないよう・・・。

「では、メニューを決めますか。」

「うん。えっと、メニューは・・・。」

山菜サラダ、味噌汁、唐揚げ、御飯。

「これでいいかなあ？」

「もうちょっとメニューを捻ったほうが・・・。」

「そうかなあ・・・。でも、私にはこれくらいしか作れないし・・・。」

「じゃ、じゃあそうしましょうか。」

「私たちもお手伝いいたしましょうか？」

「いいよ。私たちで作りたいから今日は皆休んでて。」

「承知いたしました。」

喜んでくれるといいなあ・・・。

Side end

「ただいまー。」

スバル、帰宅。

「あ、おかえ・・・・・・・・・・なに、その娘？まさかまたなっちゃった・
・・？」

「（ビクッ！）」

「そのまさかさ。今回は落とし穴だったんだが、なぜかなってな。」

「穴作ったオイラもビクリだニヤ。」

まさかまたなるとはなあ・・・

「この子臆病なんだね。なんのモンスター？」

「この子って・・・・。お前とほぼ同年代なんだが？・・・・まあ、こ
いつはダイミヨウザミだ。」

「よ、よろしく・・・・（モジモジ）」

「（か、かわいい・・・・）よろしくね。私はアイリス。あなたは？」

「あの・・・・あたし・・・・まだ・・・・」

「悪い。まだ名前を決めてなかった。どんな名前を付けるかを話し
合おうと思ってな。」

「先にご飯にする？それか話し合う？」

お、なんだ？

「なにかあるのか？」

「内緒！」

・・・まったく。

「足は大丈夫なのか？」

「あ、それなら大丈夫。もうほとんど痛みがなくなっちゃった。」

・・・そんなもんなのか？

「先に夕食にするか。」

「わかった！ちょっとまってて！」

アイリスは炊事場にヒョコヒョコと歩いていった。

後編に続く。

第8話 料理と新たなモンスター 前編（後書き）

はい、今回でてきたザザミっ娘ですが、名前は次回明らかになります！

すでに名前は決めているのでお楽しみに！

ヒントは「花の名前をいじったもの」です！日本名ではないので！

感想や募集、随時お待ちしております！

（今回はザザミっ娘の名前を問題にします！当たってもなにもしませんが、本当に凄いと思いますよ、当てたら！制限時間は3月19日の午前8時までとさせていただきます！）

第9話 料理と新たなモンスター 後編（前書き）

第9話です、後編です！

ザザミっ娘の名前が今回です！それを正解としますので！

アクセス数がPVが10000件、ユニークが10000件突破しました！

これからもお願いします！

第9話 料理と新たなモンスター 後編

・・・アイリス、なにをする気だ？

そう思いながらスバルはザザミの女の子を連れ、炊事場へ向かった。

炊事場。

・・・アイリス？なぜエプロン姿に？

「えっとね？スバルには今日までお世話になったし、迷惑かけちゃったから、そのお礼とお詫びをかねて料理を作ったの。・・・食べて・・・くれる・・・？」

とたんに心配な顔になるな。

「食べてやるよ、そのかわり、感想は厳しめにつけるからな？」

「ふえーん、スバルのいじわるうー！」

運ばれる料理。

ほう。家庭的だな。
東洋の料理か？

「どう・・・かなあ・・・？」
「見た目はいいな。味は・・・？」

パク。

「・・・うまい・・・」
「ホント!？」
「嘘言ってどうする？」
「よかったあ・・・」

手に傷が・・・たったあんだだけでここまでできるもんなんだな・・・

「お疲れさん。ナコルも手伝ったのか？」
「いえ、すべてアイリスが一人で。」
「そうか・・・」

俺は迷惑でもなかったんだがなあ。

さて、この子のこと話すか。

「この子のことなんだが、実は出掛けてくれ、と言われてすぐにクエストに出掛けたんだ。」

「そうだったんだ。」

「ダイミヨウザザミ狩りを2回な。この子が出てきたのはその二回目のときだった。」

S i d e スバル クエスト中

ブシャアアアア・・・

ギ・・・ギキ・・・

ズドオン！

「終了！」

たった今、ダイミヨウザザミが全身から体液を吹き出して息絶えた瞬間だった。

「ご主人！これで5匹目だニャ！」

「よし！次は何処で後どれだけ時間がある？」

「次は・・・3ニヤ（今スバルたちは1にいる）！あと時間も35分とまだまだいっぱいあるニヤ！」

「前回はこの時何体だった!？」

「三体ニヤ！」

よし！

エリア3。

「ノブ、罨、まだ残ってるか？」

「行ってくるニヤ！」

スタタタタタタ・・・

ザザザザザザ！

パンパン！

タタタタタタタ・・・

「終わったニヤ！」

早い・・・

「って待て。ザザミに穴って効いたか？」

「あ、どうだったかニャ？」

まあいい！

「食らえペイントボール！」

ペシャ！

ギギキ・・・

「あんな距離で届くのニャ！？」

ザザザザ・・・

こっち来た！

ズドオン！

「か、かかっただと・・・？つか、普通落とし穴ってモンスターの体の一部が出るだろ？」

「言われてみれば確かにそうニャ！でも、頑張って掘ったのニャ！」

なんでだ・・・？

「・・・ま、まあいい。さっさと狩るぞ！」

「ラジャー！」

スバルとノブが穴に近づくと。

「（プルプル・・・）」

「・・・」

「・・・」

『はあああああああっ!?!?』

「（びくうっ!）」

体を縮こめて震えている女の子がいた。

「なあ、ノブ。」

「どうしたニヤ、ご主人?」

天を見据え、俺はこう呟いた。

「これは俺への戒めなのか・・・?」

「違うニヤ。」

即否定か!

「・・・こ・・・」

おや、あの子がなんか言った・・・?

「・・・殺さ・・・ないで・・・？（プルプル）」

「・・・」

命乞い・・・？

「大丈夫、殺さねえよ。」

「ホント・・・？」

「ああ。手、貸しな。」

女の子は震えながら手を差し出した。

S i d e e n d

「・・・ってわけだ。」

「ふーん。ところで、名前は？」

お、そうだった。

「一応候補は作った。まずはアプリコット。次に、アゼリア。そしてウィリア。」

紙を出しながら案を言うスバル。
二人が悩む。

「ねえ、君は、どれがいいの？」

「あたしは・・・これが・・・いいな・・・」

そういつて指差したのは「ウィリア」だった。

「そっか。あなたが選んだのだからそれがいいよね。スバルは？」

「この子がいい、と言ったのにしようと思ったただけだ。別に異論はない。」

「じゃ、よろしくね。ウィリア。」

「うん・・・。よろしく・・・」

こうして、ウィリアも家族となった。

「ところでさ、ウィリアの服、どうしたの？」

「実はな、なぜかノブがザザミシリーズを持ってたからそいつを改良させてきせた。」

事実だ。

「思ったんだけど、スバルってさ、ホントに優しいね。」

「んなわけあるか。お前の同族を殺したりもしたんだぞ？」

「でも、モンスターの中でさ、不殺のハンターって呼ばれてたよ？」

嘘。

「俺じゃねえぞ。」

「あれ、違った？ 私は斬破刀を使うハンターって聞いたよ？」

うぐ。

「も、もうその話は終わりだ！ 寝るぞ！」

おまけ。

スバルが寝室に向かってから、ノブはアイリスを呼んだ。

「（最後の作戦ニャ。）アイリス、頼みがあるんだけど、いいかニャ？」

「ん？ なに？」

ノブはアイリスの耳に近づきこう言った。

「今日寝るときにスバルのベッドに侵入してほしいニャ。」
と。

「う、うん。私はいんだけど、でも、スバル、気絶しないよね？」
「するかもニャ。」

「じゃ、じゃあ止めようよ。」

「こうでもしないとご主人の女性苦手が治らないのニャ！」

「そ、そうなの!？」

「さっさと行くのニャ！」

「は、はいい！」

アイリスはノブに急かされ、慌ててスバルの下へ行った。

報酬。

入手

盾蟹の殻系×15

盾蟹の爪系×6

砂龍の鱗×3

クエストクリア

盾蟹の殻系×8

盾蟹の爪系×5

その他

アイリス、全治二日の診断。

ウィリア。

アイリス・ナコルにスキル「料理」追加。

翌朝のスバルの絶叫確定。

スバル・アイリスとの絆+3。

スバル・ナコルとの絆+4。

アイリス・ナコルとの絆+5。

第9話 料理と新たなモンスター 後編（後書き）

今回はウイリアの説明です。

ウイリア

ダイミヨウザザミ雌

見かけ年齢13歳

身長145cm

恥ずかしがり屋だが甘えんぼ。

髪の毛は藍色、触覚のように髪の毛が2本はねている。
髪が長い。

名前の由来は藤の英語、「ウイスレリアWisteria」からです。

おまけ

他の名前の由来です。

アプリコットは杏の「apricot」から、アゼリアは躑躅の「アゼイリアazalea」からです。

第10話 新たなクエストへの準備（前書き）

第10話です！

今回は章が変わったようなものです！
そしてスケベが復活します！

どうぞ！

第10話 新たなクエストへの準備

「ん．．．、朝．．．か．．．」

スバルは珍しく一人で朝起きた。

自分でも珍しいな．．．．．なんだ、この膨らみは．．．？

「すぴー、すぴー．．．」

あ、アイリス！？

「むにゃ．．．スバルう．．．」

ギュッ！

あ．．．あ．．．

「うわあああああ！」

村に絶叫がこだました。

「ん．．．？スバルう．．．おふあよ．．．」
「あ、あ、アイリス！？なんでここに！？」

なぜだ！寝ぼけてもあり得ないはずだぞ！？

「んとね、ノブに、ベッドにはいれって言われたの……」

ノブ……許さん！

「スバルう、もうちょっと一緒に寝てよ？」

「無理だ。クエストに行かないといけないからな。」

「じゃあ無理矢理！」

うわっ！アイリス！

「無理だ！」

「いゝやゝだゝ！」

ギヤーギヤー騒いでいたら、

カチャ……

「なに……してるの……？」

ウィリアがドアを開けた。

ウィリア……？

ウィリアの目の前には、

倒されたスバル

スバルの体に抱きついたアイリス（寝ぼけ）

が、映った。

「あ・・・あ・・・／＼／＼」

「ちょっと待て！ なにもしてない！ アイリスが寝ぼけただけだ！」

「あ・・・あたしも～！」

「嘘だろ！？」

ウィリアまで！？

「ちょ、待て！ なんでお前まで！？」

「だって、だって～！ あたしも一緒に眠りたいんだもん！」

「んな話があるか！」

「ある～！」

ウィリアまで加わり騒いでいたら、

「御主人様、朝食の準備が・・・おやおや、これは失礼致しました。」

「待てルア！ お前もか！？」

この騒ぎは、ナコルが駆けつけてくれるまで続いた。

炊事場。

「今日は俺一人でクエストを受ける。たしか今日昇格クエストの通知が・・・」

「スバル」。

マジかよ!?

「か、隠れろ! スケベが地獄から舞い戻ってきた!」

「いやああああああっ!」

「ふええええええっ!」

まだあいつのダメージが・・・?

「すけべ・・・?」

「ウィリアはまだ知らなくていいから!」

「待ってろ、今行く!」

ダダダダダダッ!

「はあ、はあ……。それで？」

「クエストがでたから伝えにきたんだよ。」

「ほう……。クエストはなんだ？」

変なのだと心配だな……

「えっとな、ターゲットは……。クシャルダオラだ。」

クシャルダオラ！？

「待て！それってハンターランク6ないと受けられないんじゃない？」

「それがな、お前は上位☆8、つまりハンターランク6にしても問題ないだろう、って話になったらしくてな。」

なっ た っ て ……

「ないだろ、普通……」

「いろいろ聞いたが、場所が遠いからな。ここから歩いて二日かかる町が戦場らしいな。」

「二日ア！？」

なんだよそりゃ！？

「ま、頑張ってきたな。あの子たちは俺が「ふざけんな、スケベ。」……言うな。」

しゃーない、行くか。

スバル宅。

「そんなあ!?!」

「本当ですか!?!」

「行っちゃやだあ!?!」

わーお、言ったら三人それぞれの答えがきた。

「早くて4日、遅くても7日かかるくらいだ、待っててくれ。」

「やだやだあ!」

ウィリア・・・

「あたしも行くの!」

「わ、私も!」

マジか!?!

「だ、だめです! 私たちはスバルが帰ってくるのを信じて待ちましよう。」

ナコル・・・

「やゝだ!」

仕方ないな・・・

「皆で行くか?」

「え!？」

「うえっ!？」

「やった♪」

ウィリアが喜んでいるが……。わがまま？

「出発は明日、戦うのは俺だけだ。」

「そんな……」

当たり前だ。

「アイリスは怪我してるし、ナコルは実力不足だ。ウィリアなんて民間人だ。」

ギユ……

「ウィリア？」

「スバル……。あたしも……。戦いたい……」

なっ!？

「おまっ……。なんで!？」

「だって……。一緒にいたいから……」

「わ、私だって!」

「私ものです!」

そうかよ……

「なら、準備しな。ナコル、お前はウィリアをハンター登録してきてくれ。」

「はいっ！」

「・・・！（パアアア）」

さあ、準備だ。

「えっと・・・必要なのは・・・」

クシャルダオラは確か毒や閃光玉に弱かったはずだ・・・

「アイリス、調合頼めるか？」

「いいけど、なんで？」

「なんか今回、嫌な予感がするんだよな・・・」

「え、縁起の悪いこと言わないでよー！」

縁起悪いって・・・

「回復薬グレート、閃光玉、後は・・・秘薬か・・・」
「りょーかい！」

「ウィリアの登録、済みました。」

「ありがとう、ナコル。」

「いえ・・・／／／」

顔が赤い？

「ナコル？」

「ふえっ！？な、なんですか！？」

「いや、顔が赤いから心配で・・・」

「だ、大丈夫ですっ!」

そうには見えんが・・・

「ウィリア、武器は決めたか？」

「弓・・・いいかな・・・? 他のハンターさんの弓見てたら・・・
欲しくなっちゃって・・・」

「(じー・・・)」

弓か・・・

「いいぞ? ただ、しばらく使っていないから埃かぶってるけど・・・」
「ありがと!」

ギュッ!

「ウィリア!？」

「えへへ!」

「むう・・・」

またむくれた・・・

「あ、アイリス? どうしたんですか？」

「なんかイライラしたの! よくわかんないけどあの二人を見てたら
イライラしたの!」

「あのときもそうでしたね・・・」

（「あのとき」は第4話参照）

「後は自由に過ごせ。アイリス、なんでむくれたか知らんが、後で
肉焼いてやるから機嫌直せ。」

「ホント!？」

「ウィリアに武器が合うか見てからな。」

「手伝う!」

「(じとー・・・)」

う、ウィリア？

「アイリス・・・ずるい・・・。あたしも・・・。」

へ？

「あたしもー!!！」

「またかーっ!」

余談だが、ウィリアにハンターボウを持たせてみたら、扱えることがわかった。その後でアイリスの為に肉を焼いていたらナコルが手伝ってくれた。

それを見たウィリアが

「あたしもやる!」

なんて言い出したのはまた別の話。

報酬。

入手、クエストクリア
クエスト未受注のため、なし。

その他

ウィリア、ハンターボウを貰う。

ウィリア、実は甘えんぼの上わがまま。

アイリスの嫉妬、再び。妬きもちやきの疑いあり？

スバル・ナコルとの絆＋3

スバル・ウィリアとの絆＋2

第10話 新たなクエストへの準備（後書き）

今回は今までで集まった擬人化モンスターを紹介します。
（そのまま載せます）

まず、リアルルージュさんのからです。

名前 ロイド 性別 指定なし
種族 ディアブロス
性格 猪突猛進、短気、喧嘩っ早い

続いて、AUAさんのです。

名前 ヴィオラ 性別 女
種族 イャンガルガ
性格 姉御肌。ただ、ウブでツンデレ。

次に、陰淵 幽鬼さんのです。

名前 フルル 性別 女
種族 フルフル
性格 マイペース。しかし少し腹黒く大胆。

そして、勿忘草さんのです。

名前 青っぱい花の名前 性別 女
種族 ナナ・テストカリ
性格 尊大

（性格のモデルは「セキレイ」の月海というキャラだそうです）

まだまだ募集を受け付けています！感想に書いていただければOK
です！
お待ちしております！

第11話 クシャルダオラ討伐遠征 その1 出発、モンスターに出会った1日

今回からクシャルダオラ討伐遠征始まります！

戦闘が物足りないかもしれませんが許してください。

あと、後書きにお願いがあります。

第11話 クシャルダオラ討伐遠征 その1 出発、モンスターに出会った1日

翌朝。

さて、出発するか・・・と言いたいが・・・

「なぜ俺とノブしかいない!？」

「皆寝てるニヤ。」

起こすか・・・

ナコルの部屋前。

「まずは当たり障りのないナコルか？」

「残りの二人は要注意ニヤ。」

「そのストッパーがナコルなんだよ。ナコル、起きろ。」

「あ、もう起きてます！」

中からそんな声が聞こえた。

「さすがナルガクルガ・・・と言わなきゃ？」

「言うべきニヤ。」

「お待たせしました。あれ？アイリスとウィリアは？」

「まだ寝てるんだ・・・俺一人だとまたなにかされると思ってな・・・」

・
」

「あ、あはは・・・」

昨日の惨劇(?)を見ていたナコルは苦笑いするしかなかった。

アイリスの部屋前。

さて、起こす。

「アイリスー? 入るぞー?」

・・・。。

返事がないな。

「入る!」

「ええっ!?!」

「おお! 大胆な行動をするようになったニャ!」

うるさい、ノブ。

部屋に入ると・・・

「すぴー、すぴー・・・もう食べられにゃいよお・・・」

と言いながら寝ているアイリスがいた。

よし。

「耳を塞げ。アイリスとウィリアを同時に起こす。」

「ご主人、あれをやる気かニャ!?」

「あ、あれって!?」

「早く、耳を塞ぐニャ!」

すうう・・・

「時間だあああああっ!」

「わひゃああああああっ!」

(ひゃあああああああっ!)

よし、成功。

「よ、起きたか?」

「い、今のスバル!?」

「そうだ。」

「もっ!びっくりしたよ!普通に起こしてよお!」

「お前の寝起きの悪さは身を持って知ってるからな。声で起こした。」

「・・・いじわる。」

「肉は?」

「いる!」

よし、アイリス起床。後はウィリアだな。

「あの、さっき「ひゃああああっ!」って声がありましたよ?」

起きたな。

「ウィリアを呼びに行くぞ。」

ウィリアの部屋前。

「ウィリアー。」

かちゃ・・・

「スバルう・・・なにがあったの・・・？（うるうる）」

やべ、怖がらせたか？

「アイリスを起こすために声を出した。怖がらせちゃったな。」

「ふえ・・・ふええ・・・」

あれ・・・？

「ふええええええ・・・」

「泣いちゃった・・・」

「ご主人、ひどいニヤ。」

あ、やっぱ？

「ふええええええ・・・」

どうすっかな・・・

「ウィリア、ごめんな？」

「ぐすっ・・・ひっく・・・うん・・・」

数分後、ようやく泣き止んだ。

「よし、行くか！」

「うん！」

「はい！」

「はい！」

クエスト

風をまとう古龍

開始。

移動中。

「アイリス、足大丈夫か？」

「うん。なんとか・・・ね。」

「無理しないでくださいね。」

「うん、気をつける。」

「おなか・・・空いた・・・」

「ここで朝食にするか。」

「やったー！」

「もうかなり歩きましたね。」

「ちょうど川も近くにあるしね。」

朝食中。

「はむはむ・・・・・・・・っ！（ぴくっ！）」

「アイリス？」

なにか聞こえたのか？

「うそ・・・そんな・・・」

「なにがあった!？」

「こっちに・・・・・・・・1匹飛龍種が・・・・向かってきてる・・・・・・・・!」

なんだと!？

「この感じ・・・・リオレウスだ!」

そして・・・

グオオオオオッ！

来やがった・・・

「見たところ下級のヤツだ！ナコル、いくぞ！」

「はい！」

「私も戦う！」

「アイリス、怪我してんだからせめて身を守れ！」

ナコルと二人でレウスに突撃する。ウィリアは後ろでアイリスを守りながら矢を放った。

Side アイリス・ウィリア

矢をひたすら放っていたウィリアが矢を放つのをやめ、アイリスに話しかけた。

「アイリス・・・二人に時間稼いで・・・って言ってくれる・・・？」

「わかったけど、なにをするの？」

「試したいことが・・・あって・・・でも、時間がかかるから・・・」

「わかった！スバル！ナコル！ウィリアが少し時間を稼いでくれます！」

S i d e e n d

アイリスの声が聞こえるまで。

「はっ！」

ザシュ！

「えいっ！やっ！はっ！」

ザッ！ズバッ！シャツ！

グオオオオオ！

俺は重い一撃を、ナコルは連続で攻撃していく。

「もうちょっと深くいける？」

「無理です！」

そう言っているが、既にレウスは何カ所から血を流していた。

グオオッ！

ブオン！

「うわっ！」

「きゃっ！」

尻尾攻撃か！

「ナコル、当たってないよな！？」

「当たってません！」

「ならいい！そおらっ！」

ドスッ！

グウオッ！

「おらっ！」

ズボッ！

グアア！

スバルがレウスに剣を突き刺し、引き抜いた。
そこから血が吹き出した。

そして、アイリスが、

「時間稼いで！」

と叫んだ。

「わかった！ナコル、いけるか！？」

「剣の切れ味が落ちて弾かれてしまいました！」

「一度下がれ！」

「わかりました！」

そして俺一人で戦闘を続けた。

Side アイリス・ウィリア・ナコル

「アイリス、すみません！」

「戦ってるのスバルだけなの！？」

「切れ味が無くなって・・・ウィリアは？」

「川に行ったけど・・・あ、戻ってきた。」

いつ持ってきたのかわからない入れ物に水を入れ、口にも水を含んだウィリアがきた。

「ウィリア、口に水を含んでいるんだよね？」

「（コクン）」

「どうするの？」

カキカキ。

「スバルにあれから離れてって言って」

「すぐに？」

「（コクン）」

「わかった！スバルー！」

（なんだー！？）

「ウィリアがすぐ下がってくれて！」

「あ、スバルが下がりました！」

ウィリアはレウスの方を向き・・・

ぷーーーーー！

水を吹いた。

ズバァッ！

レウスの下半身を切断した。

グオ・・・オ・・・

ズウウウウウン・・・

そして、レウスは息絶えた。

S i d e e n d

うおお・・・

「ウィリア、すごい力持ってるな・・・」

「スバル〜!」

「アイリス!？」

ガバアッ!

ドサッ!

「大丈夫!？」

「肩に切り傷作っただけどそこまでひどくは・・・」

「スバル〜!」

「ウィリア?」

ギュッ!

「あたし、役に立った・・・かな?」

「あ、ああ・・・役に立った・・・だから、腕から離れてくれ・・・
。肩が痛い・・・」

「あっ!ご・・・ごめんなさい・・・」

ま、平気だな・・・

「ぐすつ・・・」

アイリス？

「よかった・・・無事で・・・」

「心配・・・かけたな。だけど、これくらいで心配したらどうする？」

「うっ！」

でも、嬉しいね。

「ありがとう。」

そう言った瞬間、アイリスの顔が赤くなった。

報酬。

入手

火竜の鱗×1

クエストクリア

クエスト中の為、ない。

その他

団結。

アイリス・ナコル・ウィリアの絆＋8

アイリス、スバルの感謝に顔を赤くする。スバルへの想いが深まっ

た。
ウィリアム、残存能力「高圧水流発射」開花。

第11話 クシャルダオラ討伐遠征 その1 出発、モンスターに出会った1日

今回、ウィリアの能力が開花しました。

そして、お願いです！

お願いは・・・

「・・・（ふるふる）」

・・・ウィリアの恥ずかしがり屋を治すお手伝いをしてほしい、ということですよ。

（後書きや活動報告などに今後出るのよ）

私が感想を書くときに必ず同伴しますし、「使ってもいい？」ということももちろんいいですよ。

ただ、使うときはなにかしら報告をください。

擬人化募集もまだまだやってます！

よろしくお願いします！

「お、お願いしましゅ！」

・・・噛んじやったね。

「うう・・・／／／」

第12話 クシャルダオラ討伐遠征 その2 出発、モンスターに出会った1日

第12話です！

今回、新たに擬人化モンスターが、そして募集擬人化モンスターになるモンスターが！

では！

第12話 クシャルダオラ討伐遠征 その2 出発、モンスターに出会った1日

移動中・・・

「まさかリオレウスが来るなんて・・・」

「誰かが討ち漏らしたんだろ、尻尾に切り傷が見えた。」

・・・あれ？

「ど、どうした？」

「み・・・見えてたの？」

「見えたが？」

「す・・・凄いです・・・」

そうかねえ・・・？

「ご主人は視力がものすごく良いニャ。多分、前の雪山草摘みの時、アイリスの左腹にある傷も見えてたはずニャ？」

「見たって・・・ほ、ホント？」

「さ、さあ。どうだったかな・・・」

スバルはアイリスから目を逸らして言った。

・・・多分・・・見たわ。

「あうう・・・／／／」

また顔を赤くした・・・

「で、でも！もうモンスターは来ないんですよね！？」

「ふえっ！？ちょ、ちょっと待ってて！」

アイリスは慌てながら耳を澄まして、周りの音を聞いてみた。

「えっと・・・今のところはいないよ・・・。いてもモスとかケルビくらい・・・」

「じゃあ、暗くなるまで進むか。」

『はい！』

夜。

暗いな・・・

「ごめんね？なにも見えないからおんぶしてもらって・・・」

「それはいい。だけど・・・」

きゅ。

「（ぷるぷる）」

ウィリアまで腕を組んでるからな・・・

「怖いのか？」

「(こくこくこく！)(ぷるぷる)(」

かなり怖がってるな・・・

カサッ。

「ひゃあああああああ！！(びくっ！)」

「いやあああああああ！！(びくっ！)」

うわっ！？

キ？

「あれって・・・」

「ヤオザミだな・・・」

珍しいな、こんな暗いのに・・・

「全く攻撃してこないな・・・」

「スバル・・・。あの子・・・あたしを見てる・・・」

なっ！？

「本当か、ウィリア！？」

「うん……。そしてスバルのことも見てる……」

試すか。

「進むぞ。」

「はい。」

すたすた……

ちょこちょこ……

ぴたっ！

ぴたっ！

……。なんなんだ、あいつは？

「話……。聞いてみたら……。？」

「そうしたいけどな。」

「じゃ……」

ぽいっ。

へ？

カッ！

「うおお！」

「きゃああ！」

「ま、眩しいです！」

「そう・・・？」

ウィリアはダイミョウザミだったので、全く効かなかった。

「あや？」

へ？また？

「あ、どうもっす。ヤオザミっす。」

おい、自己紹介したぞ？

「それで・・・いつから・・・？そして、なんでついてきたの・・・？」

ちなみに俺は後ろを見て、ヤオザミを見ないようにしている。

「ついてきたのは夕焼けが見えてからっす。楽しそうだったし、羨ましかったっす・・・」

「二人・・・だったの？」

アイリスがスバルから降りて、ヤオザミと話す。

「そうっす。アタシはずっと独りぼっちだったっす・・・」

「じゃあ、私たちと一緒に暮らします？」

「え・・・」

「スバル、いいですよね？」

「ノブ、服・・・」

「わかったニャ！さっきの戦いで役に立たなかった分頑張るニャ！」

「そうしてくれ・・・」

服がないと女性を見れないとかどんなヘタレだよ・・・

「できたニャー！」

さすがノブ、もはや職人？

「目測で測ったから小さいかもしれないニャ。そうだったら言っ
てニャ。」

ごそごそ・・・

「おお！ぴったりっす！」

「なんだろ・・・どんどんノブが神になってく気がする・・・」

「あたしも思ってきたよ・・・」

「というか、ノブが測るものを持って作ったのを見ました？」
『見てない。』

ノブの服制作が神がかったきた・・・

ヤオザミっ娘が服を着たので、ようやくスバルはその子を見られるようになった。

「それで？」

「この子にも名前を・・・つけてあげて・・・？」

一緒に住むのは確定かい・・・

「・・・ったく、また俺がかよ・・・」

「ごめーん！」

「すみません・・・」

アイリスだったらわかるな。ナコルの時にダウンしたからな。

さて、名前名前・・・。

おや、あれは菊の花・・・？

確かあの子はここから出てきたはず・・・

菊は確かクリサンシマム・・・

「よし！決まった！」

「なにになに？」

「どんなのっすか？」

それはな・・・？

「クリームだ。」

『へ・・・？』

あれ、ダメ？

「・・・いい・・・」

ん？

「かわいいっ！」

「うれしいっす！」

お、好反応。

「じゃあ、皆よろしくっす！」

ヤオザミのクリムがついてきた。

その夜、死したりオレウスに寄り添い、悲しみに暮れる一匹のリオレイアがいた。

貴方の仇、必ずとってあげる・・・

報酬。

入手

薬草×8

クエストクリア

途中なので無理。

その他

アイリス復帰まで後少し。
クリム。

娘達にネーミングセンスがないこと判明。（とくにアイリス）
スバル、視力が良いこと判明。同時に、アイリスに傷跡があること
も判明。

アイリス・ウィリアが恐がりなのが判明。
ノブ、服作りの神になった？

第12話 クシャルダオラ討伐遠征 その2 出発、モンスターに出会った1日

今回は、クリムの説明とウィリアの補足です。

クリム

ヤオザミ雌

見た目9歳。

身長138cm。

口癖は「っす。」

サイズはAー。成長中。

肩にかかる長さの栗色の髪の毛。癖っ毛。

そして、ウィリアですが、サイズがBだということです。

そして今回のリオレイア、少し後に再登場します。

ストーリーについて、リクエストがあればどうぞ。

(例…ウィリアのおつかい など)

可能な範囲で書きますので。

第13話 クシャルダオラ討伐遠征 その3 町に着いた2日目(前書き)

第13話です！

今回は特にバトルはありません。

日常的なものと思っていただければ。

では、どうぞ。

第13話 クシャルダオラ討伐遠征 その3 町に着いた2日目

翌朝。

「くあ・・・」

一番に目覚めたのは俺だ。

野宿だから早く動かないとまた襲われる・・・

ふにゅ。

「んっ・・・」

はい？

俺はおそろるおそろる右手を見た。

「んう・・・スバルう・・・」

「あ、アイリス!？」

「んっ?」

まずい!これを見られたら・・・

「おふぁよゝスバ・・・ねゝえゝスバルうゝ、なんで私の胸触ってるのかなぁ?」

寝ぼけてもそこはしっかりしてるのね・・・って違う！

「知るか！起きたら横にお前がいたんだよ！」

「んゝ・・・あ、そうだった。スバルと一緒に寝ようと思って横にきたんだった。」

「アイリスずるい！」

ウィリア？

「あたしもスバルと一緒に寝たかったゝ！」

ウィリアもかよ・・・

「もう起きろ。さっさと行かないとまたモンスターに襲われるぞ。」

「それなら大丈夫。大型モンスターの声聞こえないから。」

けどな。

「何日も野宿したいのか？」

「それはイヤ！」

「やだ！」

「私も・・・嫌ですね・・・」

「だろ？だったら行くぞ。今はクリムもいる。危ない目に遭わせられるか。」

「う、うん！」

そうしてまた歩き始めた。

「スバルく、お腹空いたく。」

昨日はウィリアで今日はアイリスか・・・

「川が見えるまで待ってくれ。そこまで行かないと食料が調達できない。」

「はい。」

「あの、スバル？」

「ナコル、なんだ？」

「街が見えました・・・」

「あくまでナコルの視力で、だろ？あと30kmはある。」

「はぁ・・・」

さすがにまだ先があるな・・・

「あや？水の音がするっす。」

「ホントに!？」

「ホントっす。アタシは嘘つかないっす。」

「やったぁ！朝ご飯だぁ！」

川が近くにあることがわかって、はしゃぐアイリス。

今何時だ？

（だいたい午前9時頃ですby作者）

「さって、火を点けるか。」

「待って、試したいことがあるの。」

試したいこと？

「なんだ？」

「イヤンクックって、火炎玉出せるでしょ？ 私にも出せないかな、
って。」

「ま、やってみ？」

「うん！」

アイリスは組み木の前に立った。

「ん．．．く．．．」

出るか？

「はあっ！」

ボツ！

出た！点いた！

「やったあ！出たあ！」

よかった、人になってから力がなくなったと思ってた・・・

「よかったな、アイリス。」

「うん！」

よし、火が点いた。あとは魚待ちだ。
釣れるかな・・・？

S i d e ウィリア・クリム

「おおつ、いっぱいいるっす！」

「クリム、静かにするニャ。うるさいと魚が逃げるニャ。」

「ごめんっす。」

ノブとクリムは釣りをしていた。
ウィリアはというと・・・

「キノコ・・・どこ・・・？」

河原でキノコを探していた。

S i d e e n d

「ご主人！大漁ニャ！」

「釣れたっす！」

「キノコ・・・なかった・・・」

お、帰ってきた。ウイリア、キノコ探してたのか・・・
ウイリア、キノコ好きだしなあ・・・

「ウイリア、キノコならありますよ。」

「・・・ホント？」

「はい。今も探してましたし、昨日も採れましたから。」

いつ探していた？

「~~~~♪」

よかった。

さあ、朝食だ。

「そういえば、あのレウス、レイアがいたのかな・・・？」

「・・・？」

「どうしたの？」

嫌な予感だけだな・・・

「使った研石、レウスの死体の所に放置した・・・」

「それで？」

「もしレイアがいたら、仇討ちにくる。」

「すごいこ！」

「ええ、いきましよう！」

ど、どうした・・・？

アイリスとナコルが急かしたので進み始めた。

「そういえば私の足、今日完治なんだよね？」

「そういやそうだな。」

「明日からまたスバルと一緒にだ♪」

だといいけどな・・・

「アイリス、俺が今クエスト中なの忘れたか？」

「。。。 (うるうる)」

ウィリアか、お前は。

「ま、無事に帰ったらな？」

「うん！」

3時間後。

「ま・・・まだ・・・？」

「あと2時間くらいだ。」

「も・・・もうダメっす・・・」

「あ・・・あたしも・・・」

ウィリアとクリム、ダメそうだな。

「仕方ないか。ナコル、クリムを頼む。」

「クリムを？」

「ウィリアは俺が抱えていくから。」

「わ、わかりました。」

スバルがウィリアを、ナコルがクリムを抱える。

「・・・／／／（カアアア）」

「どうした、ウィリア？顔が赤いぞ？」

「は・・・恥ずかしいよお・・・／／／」

スバルの抱え方に理由があった。

スバルは、ウィリアを『お姫様だっこ』していたからだ。

「あと2時間だから、そのうち歩けるようになる。それまでの辛抱だ。」

「はうう・・・／／／」

1時間半経過。

「スバル、あたしもう歩けるよ？」

「ん？そうか。・・・よつと。」

スバルはウィリアを降ろした。

「クリームは、眠っちゃってます・・・」

「すう・・・すう・・・」

「ナコル、もうちょっと我慢できるか？」

「ええ。」

「スバルう・・・私・・・もう・・・ダメ・・・」

アイリス？

「仕方ないな。ほら。」

「あ・・・ありがと・・・」

スバルはアイリスを背負っていった。

「えへへ♪」

むぎゅ。

胸が当たってる気がするが、気のせいだ、気のせい。

半刻後。

「着いたな。」

「や・・・やっとですね・・・」

「つ・・・疲れたぁ・・・」

そして俺たちは宿を探した。
そして見つけた。

「戦場の下見に行ってくる。」

「あ、私も！」

こうして、スバルとアイリスは舞台の下見に行った。

戦いの鐘がもうじき鳴ると知らずに・・・

報酬。

入手、クエストクリア
なし。

その他

アイリス、捻挫完治。

ウィリア、キノコが好きと判明。

ナコル、頼れるお姉さんに？

第13話 クシャルダオラ討伐遠征 その3 町に着いた2日目（後書き）

今回は募集擬人化紹介です。

ちなみに今回は、神威 銀時さんのアイデアだけになります。

十六夜 刻さんのは訳あって掲載できません。

では。

名前 ウル 性別 女

種族 ティガレックス

性格 食いしん坊、喧嘩っ早い

（モデルは「銀魂」神楽、名前はウルトラマンティガからです）

名前 ルビー 性別 女

種族 ミラバルカン

性格 天然ドジっ娘（実は才色兼備な女の子）、家族思い。戦闘中は冷静になる。

備考 太刀と大剣の二刀流。炎髪灼眼で怒ると炎を操る。

名前 サファイア 性別 女

種族 アカムトムル

性格 戦闘凶、ツンデレ。かなりのシスコン。

備考 怪力。自分が不利になると発砲。黒髪灼眼。

名前 エメラルド 性別 女

種族 キリン

性格 怠け者。ただしルビー限定で甘えん坊。（シスコン）

備考 銀髪灼眼。ルビーの言うことは素直に聞く。

ルビー、サファイア、エメラルドは義理の三姉妹設定です。

（ルビーが長女、サファイアが次女、エメラルドが三女）

胸の大きさも、アイリスを基準でいただきました。

ルビー＞エメラルド＞アイリス＞サファイア です。

（左側が大、右にいく程小さくなる）

次回から戦闘です！

第14話 クシャルダオラ討伐遠征 その4 クシャルダオラの奇襲、アイリ

第14話です！

戦闘が大半を占めますが、物足りないかも知れないので・・・

では、どうぞ！

第14話 クシャルダオラ討伐遠征 その4 クシャルダオラの奇襲、アイリス

「ここが戦場か・・・」

「ふわぁ、広い！」

俺はアイリスと二人で下見に来た。

「支給品にバリスタがあるし、撃龍槍もある。やれるな。」

「撃龍槍って？」

「撃龍槍はな・・・っ！」

空気弾！？

「アイリス、危ない！」

「えっ？」

アイリスが振り返ると空気弾が迫っていた。

「え・・・？」

間に合わない！

「くそっ！」

ドンッ！

「ぎゃっ！」

ドサツ！

「え．．．スバル．．．？」

ボンツ！

「くうううっ！」

「スバルう！」

空気弾がスバルに当たる。

当たったのを見たアイリスは悲痛の声を上げる。

「くそっ、アイツめ．．．」

「スバル！大丈夫！？」

「平気だ、下がってろ！」

「でも！」

「早くしろ！」

「いや！」

「だったら、ここに隠れてろ！絶対顔や声を出すな！」

「う、うん．．．」

アイリスにそう言うと、スバルはクシャルダオラに向かっていった。

「スバル．．．」

残されたアイリスはそう呟くしかなかった。

「いきなり不意打ちとは、随分と卑怯なことするじゃねえか！」

クエエエッ！

「許してくれと言っただろうが、許すわけにはいかねえなあ！」

スバルとクシャルダオラの戦いが始まった。

「うおおおっ！」

スバルはクシャルダオラに真正面から向かっていった。

フオッ！

「くっ！龍風圧か・・・！毒状態にしないと・・・」

クシャルダオラが纏う龍風圧に押し返された。

まずは龍風圧を止めなきゃな・・・

ブオンッ！

「くっ！させるかよ！」

ダッ！

ブン！

スバルは閃光玉を投げた。

カツ！

クエエッ！

閃光玉の光はクシャルダオラの風を弱らせた。

「今だ！」

クシャルダオラが怯んだ隙に、スバルはまた突撃した。

クオオ・・・

ブン！

「しまっ・・・」

ドン！

「がっ！」

スバルは振り回された尻尾を避けることができず、直撃を受けた。

「うっ！ぐっ！」

地面を転がるスバル。

「くっ・・・！まずは尻尾を・・・」

クエエエエエツ！

閃光玉の効果が切れた！？

クエエツ！

「ちいっ！突進を食らうわけにはいかねえ・・・なっ！」

突進を避ける。

フォン！

「うおっ！」

通過した風がっ！

グエツ！

フオオオッ！

スバルが怯んだところに迫る空気弾。

まずい、避けられねえ・・・

ボンッ！

「うぐ・・・あ・・・」

そのまま直撃し、倒れるスバル。

まだ・・・早かったのか・・・？

「そんな・・・訳が・・・、あって・・・たまるか・・・！」

まだやられる訳にはいかねえ・・・

「うああああっ！」

そして、また向かっていった。

S i d e アイリス

「スバル・・・お願い・・・。無事戻ってきて・・・！死なないで・・・！」

アイリスはただただそう祈っていた。

（ぐああっ！）

スバルが攻撃を受け、悲鳴をあげた。

「神様、お願い・・・！スバルを守ってあげて・・・！」

誰でもいいから、スバルを助けて・・・！

もうスバルが苦しむ声を聞きたくない・・・！死んでほしくない・・・！

だから・・・だから・・・！

S i d e e n d

戦闘を始めて5時間は経過した。
既に空は暗くなっていた。

「く・・・そ・・・！」

スバルはもうボロボロだった。

これ以上下がるとアイリスを巻き込んでしまう・・・

「ここから先は！絶対に行かせねえ！」

絶対に・・・！

S i d e ナコル・ウィリア

ズウウウウン・・・

「さつきから・・・揺れてる・・・」

「なんででしょうか？ 外も騒がしくなってきましたし・・・」

「外・・・行こ・・・」

「アタシは留守番してるっす。行っても多分、なにも出来ないっすから。」

「じゃ・・・よろしく。」

「気をつけるっす。」

「じゃあ、行ってきます。」

ナコルとウィリアは、クリムに留守番を任せ外にでた。

「揺れ・・・大きくなってる・・・」

「一体・・・？ あ、あの！ な、なにが起きて・・・！？」

ナコルは自分の横を通り過ぎようとした町人に話を聞いた。

「悪いことは言わねえ、あんたらも逃げな。クシャルダオラが来た

！今ハンターが戦ってるが・・・」
「あ、ありがとうございます！」

町人は去っていった。

「スバルのところでしょ!?」

「行こう・・・！」

「ええ！」

ナコル、ウィリアは走っていった。

S i d e e n d

「くっ・・・かはっ！」

スバルはふらふらになりつつも立ち上がる。だが、血を吐き出して
しまう。

「斬破もあと一撃しか切れない……。もう、無理か……」

そう呟き、スバルは倒れてしまう。

クシャルダオラは倒れたスバルに止めを刺すかのように空気弾を溜め始めた。

俺は・・・死ぬのか・・・

「だめええええっ！」

隠れていたアイリスが飛び出し、スバルの方へ駆けだしていた。

「アイリス・・・！来るな・・・！」

ザッ！

「スバルは・・・死なせない！」

アイリスはスバルを守るかのように立った。

「スバルを殺すなら・・・私を・・・殺してええええええ！」

くっ！動け・・・！動け！

そして、空気弾は、

無情にも放たれた・・・

To be continued・・・

第14話 クシャルダオラ討伐遠征 その4 クシャルダオラの奇襲、アイリス

放たれた空気弾、スバル、アイリスはどうなる！？

次回をお楽しみに！

感想や募集、お待ちしております！

第15話 クシャルダオラ討伐遠征 その5 真意と想い（前書き）

第15話です！

今回は一つのターニングポイント（？）です！
展開が急すぎるかと思いますが・・・

では、どうぞ。

第15話 クシャルダオラ討伐遠征 その5 真意と想い

空気弾は放たれた。

「・・・っ！」

アイリスは迫る空気弾が怖くなり、目を瞑った。

S i d e ナコル・ウィリア

「はあっ、はあっ・・・」

「ひい、ひい・・・」

二人は懸命に走っていた。

クシャルダオラが襲ってきた。

ならばスバルは戦うはず。

だがアイリスがいる。

満足に戦えるのか？

答えは、否。

「だめええええ！」

「っ！」

二人が現場に着いたとき、既にアイリスが走り始めていた。

「スバルを殺すなら・・・私を・・・殺してえええええ！」

「アイリス！」

「だめ・・・アイリスも死んじゃだめだよ！」

「止めなきや・・・」

そして、ナコルが走り始めたとき、無情にも空気弾が放たれた。

同時に、倒れていたスバルが瞬間、アイリスの前に出たのをナコルは見た。

N e x t S i d e アイリス

「う・・・ん・・・」

あれ・・・私・・・生きてるの・・・？

「スバルは！？」

私は起きあがってスバルの方を見た。

「いない・・・？」

「アイリス！」

「大丈夫！？」

ナコル、ウィリア・・・

「私は大丈夫だけど、スバルが・・・」

「スバルは・・・前にいるよ・・・」

「えっ！？」

私はすぐに前を見た。

「スバル・・・なんで・・・？」

前にはスバルがいた。

「スバル！スバル！？」

「大丈夫です！気絶しているだけですから！」

「でも・・・でもお・・・」

私、やっぱり迷惑かけちゃう・・・

クルルル・・・

そうだ、まだクシャルダオラがいたんだ！

「よくも・・・よくもスバルを！」

「絶対に・・・許しません！」

「あたしも・・・やる！」

三人が足並みをそろえた。

S i d e e n d

三人の気迫にクシャルダオラは退かなかった。
それどころか、前に進んできた。

そして、足元に転がった閃光玉をわざと踏み、炸裂させた。

『きゃあああああっ！』

「？」

光がはれると、そこには一人の女性がいた。

「皆さん、初めまして。私はクシャルダオラのシャル、と申します。」

そして、挨拶をした。

「え・・・？」

「あ、あなたはいたい・・・？」

「今回、ここに来たのは、私の昔の主と同じ力を持つ少年の噂を聞き、その少年が力を悪用していないか、力が発動していたら、少年と良い関係が築けているか、を試すためだったのです。」

「試す・・・？」

「はい。私が奇襲をかけたとき、そしてその後なのですが、この少年はピンク色の髪の女の子、つまりあなたを守りました。」

手をアイリスに向け、話すシャル。

「そして私が最後に一撃を放とうとしたとき、あなたは少年をかばってましたね？」

「う・・・うん。」

「そのことから、彼は大丈夫だ、と判断しました。彼をこんなにロボロにってしまったことは許してください。」

納得できるよう話している。

「それに・・・皆さんは彼のことが・・・好きみたいですからね。」

「ふえっ!?!」

「えっ!?!」

「・・・／／／」

シャルの発言に驚いたり顔を赤くしたりする。

「ひょっとしたら、今日までに変にイライラしたことがあるでしょう?」

「う、うん!」

「あ、あたしも!」

「わ、私も・・・」

「ふふっ。私も同じでしたから。それが何か、教えましょうか?」

「教えて!」

「お願いします!」

シャルに頼むアイリス、ナコル。

「それは・・・「恋」なんです。」

「「恋」?」

「はい。・・・ああ、もう時間がありません。あまり多くは語れないのですが・・・」

残念そうに話すシャル。

「皆さんに一つだけ。彼に想いを伝えたら少しは心も楽になりますよ。」

「想いを・・・伝える・・・」

「はい。・・・では、これで。あと、ここを去る前に「あるもの」をお渡しします。彼には代わりに謝罪をお願いします。」

「わかった。」

「では・・・」

シャルが光に包まれ、周りを光に包んだ。

アイリスたちが再び目を開けたときには既に姿はなく、残っていたのは一枚の鱗だった。

「これで・・・良かったのかな・・・」

「さあ・・・。ですが・・・」

「会えて良かったって思ってる。」

「それよりも・・・スバルは？」

忘れている。

「あー！」

「放置したままでしたあ！」

「大丈夫！？大丈夫かなあ！？」

「まず・・・宿に！」

「そ、そうですね！」

「わ、私スバルの剣持ってくるね！」

「気をつけてね・・・？ 確かなり危険な状況だったから・・・」
「う、うん！」

かなりドタバタしているが、スバルにはあまり負担はかからなかったという・・・

宿。

「お帰りっす・・・って、うわわわっ！ ど、どうしたっすか！？ スバル、かなりボロボロっすよ！」

「ギニャー！ 斬破もかなりやばいニャー！ すぐに研がないと！ 折れちゃうニャー！」

「どいてどいてー！」

「まず薬っす！ 救急箱っすー！」

「包帯も必要ですよ！ ええと、どこですか！？」

二階ではこの状況。ウィリアは一階で宿屋の主に医者を呼んでもらおうとしていた。

「お、おじさん・・・お医者さん、呼んでももらえないかな・・・？」

「あのお兄さんにかい？ わかった、呼んであげよう。薬はここ、薬草もあるからね。」

「あ、ありがとうございます！」

とにかくかなり慌てていた。

「スバルぅ！死なないでえぅ！」

「包帯はこれでいいのですか！？」

「巻きすぎっすよ！あわわ、呼吸がぅ！」

「スバルぅ！」

スバルは助かるだろう・・・きっと。

報酬。

入手

銅龍の鱗×1

クエストクリア

まだ報告してないため無し。

その他

アイリス・ナコル・ウィリア、「恋」を知る。

スバル、大怪我。

ウィリア、恥ずかしがり修正＋1。

スバル、「擬人の力」を認められる（本人無自覚）。

斬破、危篤。

第15話 クシャルダオラ討伐遠征 その5 真意と想い（後書き）

今回、ついにアイリスたちがスバルのことが好きだと、自分たちが「恋」をしていると理解しました。

さて、どうなることやら・・・

感想・募集・誤字報告などありましたらどうぞ！

第16話 クシャルダオラ討伐遠征 その6 告白と拷問（前書き）

第16話です！

今回は笑える・・・はずです。

では、どうぞ。

第16話 クシャルダオラ討伐遠征 その6 告白と拷問

クシャルダオラとの戦いから一夜開けて。

「う．．．俺は．．．？」

スバルは目を覚ました。

「ここは．．．宿．．．？昨日アイリスが俺の前に立って空気弾が放たれて．．．。そうか、気絶したのか。」

ならば納得がいく。体が痛い。もう少し寝るか．．．

コンコン。

誰だ？

「スバル？入るよ？」

アイリスか。狸寝入りしよ。

カチャ。

アイリスがスバルのいる部屋に入った。

「あ、まだ眠ってるんだ……。……。スバル、私の話、聞いてくれるかな……。？」

なんだ？寝てると思ってるから言うのか……

「あ、あのね？昨日、助けてくれて……。ありがと。それでね？あの……。その……。私……。スバルのことが……。す、す……。？」

「好きな……。家族としてじゃなくて、女の子として……。眠っちゃってるから聞こえてないかもしれないけど……。今度は起きてるときに言うね……。／＼／」

……。どうしよ。告白……。しかも異性として……

「じゃ……。じゃあね……。。」

パタン。

……。うおおお……。どうしたらいいんだ……。？

Side アイリス

「はうう／＼／／／」

アイリスはドアを閉めて、その前に立っていた。

ど、どうしょ・・・胸がドキドキしてるよぉ！

「うぁぁぁ！」

心が楽にならないよぉ！

誰か、私を助けてえええええ！？

S i d e e n d

朝食。

うぉぉ・・・。。どうしたら・・・

スバルは困っていた。理由は無論、朝の告白だ。

「ちら・・・ちら・・・」

アイリスも、スバルを何度もチラチラ見ていた。

「どうしたんですか？」

「い、いや、なんでもないぞ！なんでも！」

「そう・・・ですか？アイリスもさっきからおかしいのですが・・・？」

「うえっ！？そ、そんなこと・・・ないよ・・・？」

「アイリス・・・なにか隠してない・・・？」

「そんなことないよ！」

「あ、アタシ見たっす。アイリスが「だめえええええ！」むがむが・・・」

「言っちゃだめ！だめだからね！」

じー・・・。

「なんか隠してる・・・」

「隠してますね・・・」

「ご、御馳走様！」

スバルはすぐに食べ終わり、そそくさと席を立った。

「さあ・・・白状して・・・？」

「言わないと懺りますよ・・・？」

「イヤ！言わない！」

迫るナコルとウィリア。
頑なに拒むアイリス。

そして・・・

「ナコル、撥ろ？」

「そうですね。やりましょう！」

「場所は脇から胸にかけて……。クリム、捕獲。」

「りょーかいっす！」

「ちょ、やめてええええ！」

ガシッ！

「捕まえたっす！」

「動けないように縛って……。と。口は？」

「塞いだら話聞けませんよ？」

「そうだった……」

「やめて！？お願いだからやめて!？」

アイリスは必死に頼み込む。

「さあ……」

「覚悟！」

こちよこちよこちよこちよふにふにふにふに……

「ふあっ！あっ！きゃはははははっ！や、やめ……。くひっ！」

「足もやるっすか？」

「やるのは脇と胸だけです！あとは必要ありません！」

「了解……」

「やめっ……あひゃん！うくっ……ひうんっ！」

「さあ、白状するっす！」

「いやああああん！」

Side スバル

スバルは自室で斬破を見ていた。

すまない……俺が未熟だから……

「さて、斬破を……」「いやああああん！」……なにをした？」

スバルは自室を出て、声のした方へ歩いていった。

Side end

執拗な拷問（脇を擦り胸をいじる）は何分も続いた。

「な、なかなかしぶといっすね・・・」

「ひふう、ひふう・・・」

「お前らなにを・・・っ！」

スバルが拷問現場で見たのは、しぶとく口を割らないアイリスを攻め続けたくたになったナコル・ウィリア・クリムと、攻められ続け、服がはだけ、ぐったりとしたアイリスだった。

「お前ら・・・なにをすればそんなことになる・・・？」

「なにをって・・・擦ったりしただけです・・・」

「擦ったり？」

「胸を弄り回したりもしました。」

あのなあ・・・

「言いたくないこともあるだろう？無理に聞こうとするのは野暮だろう？」

「そ、そうですね・・・」

「さて、そろそろ帰るぞ。」

「でも・・・怪我・・・大丈夫なの・・・？」

「大丈夫だ。ほら、アイリス、起きろ。」

ぐったりとしているアイリスに近づき、肩を叩く。

「しゅぱりゅ・・・？」

目がとろんとしている・・・？しかも呂律が回ってない・・・？

「うふふ・・・」

ドサ。

「お、おい！アイリス！？」

「しゅばりゅー。」

「まてえええ！ナコル、酒飲ませてないよな！？」

「飲ませてないですよ・・・ただ、おじさんが素直にさせる方法があるからってもらった飲み物を飲ませただけですけど・・・」

「それだ！」

「しゅばりゅー、わたしはねえー、しゅばりゅのことがー、しゅきなのー！」

「！」

「だからあ・・・わたしをおそってー！」

「止めろおおおおお！」

「だめええええええええええ！」

こうして、朝は過ぎていった・・・。

報酬

入手、クエストクリア
なし。

その他

アイリス、酔うと大胆になる。

（今回の拷問でアイリスの胸に刺激が伝わった）
アイリス、スバルに告白した。

第16話 クシャルダオラ討伐遠征 その6 告白と拷問（後書き）

今回は、アイリス告白回でした。

ただ、酔った勢いで告白したのがありますが・・・

感想、募集、誤字報告、リクエストがありましたらどうぞ！

第17話 クシャルダオラ討伐遠征 その7 帰還、仇と恋心に揺れて（前書き）

第17話です！

今回はついに募集擬人化モンスター登場です！

泣けたら泣いて、笑えたら（あれば、ですが）笑ってください。

では。

第17話 クシャルダオラ討伐遠征 その7 帰還、仇と恋心に揺れて

「あ、アイリスがようやく止まった・・・」

アイリス酔っぱらい事件が終わり、出発した。

「また2日かけて・・・ですね。」

「最速日数で帰れたのはありがたいな。」

「スバルの家、楽しみつす〜！」

「アイリス、大丈夫・・・？」

「うん・・・。胸がちよつと痛いけど・・・」

そんな感じで進んでいった。

昼。

「もうお昼だね。」

「そろそろ昼食にするか？」

「さんせー！」

「やった！」

「川もありますし、十分ですね。」

でも嫌な胸騒ぎがするな・・・

「皆、昼食の間も気を抜くな。嫌な予感がする・・・」

「ちょっと、やめてよ・・・」

「はむはむ・・・行くときの朝はこの時に来たんだよね・・・」

「そうだったっすか？」

「ええ。そのときはウィリアが活躍してくれましたね。」

「ほ・・・誉めないで・・・。恥ずかしいから・・・／／／」

「そんな恥ずかしがることはないはずだけどな。」

「でもお・・・／／／」

スバルは、ウィリアが顔を赤くしたのを見た後、アイリスに状況を聞いた。

「アイリス、状況は？」

「えとね、遠くに雄叫びが聞こえるよ。私たちには気づけないと思うよ？」

「そうか。」

早くポツケ村に戻らないと・・・武器無しでは戦えない・・・！

昼食完了。

「なんにも来なくて良かった。」

「はうう・・・／＼／」

「ウィリア、どうしたっすか？」

「みんな・・・誉めすぎだよお・・・／＼／」

「ふふっ。」

話が進む。

「ご主人、斬破、どうするニヤ？」

「あれは師の形見だから、師の墓に供養するさ。」

「それで、武器は？」

「また斬破を作るさ。それまでは黒刀―壺ノ型―を使う。」

「帰るまでは素手で戦うニヤ！」

「敵が出たらな。」

帰ったら師の墓にでも行くか・・・

スバルはノブともう使えない程ぼろぼろになった斬破のことを話していた。

歩き続けて数時間。
辺りは暗くなってきた。

「あうう、なんにも見えないよお・・・」
「アイリスは鳥目ですからね。」

「夜でも見えるようになりたいよお・・・」

アイリスが呟いたその時。

きゅゅゅ。
くううう。

「あ・・・／＼／」
「はう・・・／＼／」

アイリスとウィリアのお腹が鳴った。

「しかたない、夕食にするか？」
「やったあ・・・って言えなくなったよお・・・」
「どうした？」
「飛龍種が来てる・・・リオレイアだ・・・」

嘘だろ！？

「一昨日のレウスの仇討ちか!？」

「嘘!？」

「まだ死にたくないっす!」

ついに。

グオオオオオオオ!

リオレイアが来た。

「閃光玉で怯ませます!・・・スバル、まだ残ってますか?」
「残ってる!そらあっ!」

スバルは閃光玉を投げた。
そして、お決まりの・・・

「きゃあああああ!」

「目が見えない!」

「?」

ウィリアだけはなんともなかった。

「光がはれた・・・あいつは怒り状態だったから効果あるか・・・
ってうおっと！」

「あの人の仇、絶対に討つ！」

「仇!？」

スバルは急に聞こえた声に聞き返す。

「私の彼は一昨日殺された・・・。私はあの人に仇を討つって誓ったの！」

「確かに一昨日会ったが・・・、あいつから襲ってきて、俺たちは迎撃しただけだ！」

「でも！」

スバルの話に耳を貸さないレイア。

レイア娘とスバルが戦い初めて数分後。

ブオオオオオツッ！

くっ・・・・・・っ！まずい、ディアブロスが来やがった！

「下がれ！別の敵が来た！」

「仇が討てるなら、死んだっていい！」

「ふざけるな！」

「っ！」

「お前はリオレウスの仇を討ちたいらしいが、そいつはそれで喜ぶのか！？お前に幸せになってほしいと願っているんじゃないのか！？」

「・・・！」

仇討ちのために死を覚悟していたレイア。それを否定された瞬間、彼女は動きを止めた。

スバルはその瞬間にディアブロスを探した。

奴は・・・奴はどこだ！

しばらく探していたらレイアの方に走っているのを見つけた。

まずい！

「さがれええええっ！」

スバルは渾身の力を込めて叫んだ。

そして、レイア娘を突き飛ばし、

「ぐあ・・・っ！」

突進を喰らってしまった。

S i d e レイア娘

私は仇を討ちに来了。

だけど、彼はそれを望んでいないかもしれない。

そして私の幸せを願ってくれているのかもしれない。

そう考えると私は悲しくなり、動きを止めてしまった。

それが隙となってしまう、ディアブロスに狙われてしまった。

ドンッ！

「え・・・」

不意に生じた衝撃。

「ぐあ．．．っ！」

呻き声をあげるスバル。

「だ．．．大丈夫．．．みたいだな．．．」

トクン．．．

あれ．．．彼の顔を見たら胸が．．．ドキドキする．．．

なんで．．．なの．．．？助けてもらっただけなのに．．．。どうして．．．？

レイア娘の胸の鼓動は、スバルの顔を見る度に高鳴っていった。

S i d e
e n d

あの娘は無事だ・・・
だが今ので多分骨一本はいったな・・・

「スバル！」

「大丈夫・・・！？」

「大丈夫だ・・・。」

スバルはゆっくり立ち上がり、ディアブ羅斯を睨みつけるように見据え、ただ一言言い放った。

「退け・・・。さもなくば貴様の命は無いと思え・・・。」

直後、ディアブ羅斯はきびすを返し、逃げるように立ち去った。

さて、ディアブ羅斯はいなくなった。次はこっちだな。

「とりあえず無事のようなな・・・それで、まだ仇を討とうとするか？」

「スバル！？」

「だめ・・・。だめだよ・・・！死んじやだよ・・・！」

スバルの発言に驚き、拒絶するアイリス、ウイリア。だがスバルはそれを解っていつつ、もう一度聞いた。

「仇・・・討つか？」

「わ、私は・・・私は・・・」

レイア娘は言葉を詰まらせ、そして、

「私は・・・どうすればいいの・・・？」

と、スバルに聞き返した。

「私は仇討ちに來たの。でも、さっきあなたに助けてもらったし・・・だから・・・私は・・・」

「自分のしたいようにすればいいさ。自分が思っていることに素直になれば。」

「！」

まさかスバルがそう返すとは誰も思っていないのだろう、全員が驚いていた。

「う・・・うあ・・・」

レイア娘は涙目でスバルを見、

「うああああああ！」

泣いた。

「泣きたければ泣けばいい。胸くらい貸すさ。」

「ぐすっ・・・ひっく・・・えぐっ・・・」

スバルはレイア娘を抱き寄せた。

そして、レイア娘はスバルの胸の中でただただ泣き続けた。

「落ち着いたか？」

「うん・・・」

「それで、どうするつもりだ？」

「私は・・・あなたと共にいきたい・・・」

『！』

アイリスたちは戦慄を覚えた。

「だって、私あなたと・・・あなたと一緒にいたいって思ってるから・・・。それに・・・」

「それに・・・？」

「助けてもらった後からあなたを見ると・・・胸がドキドキするの・・・。だめ・・・？」

「・・・いいか？」

「い・・・いいよ・・・」

「う、うん。」

どうした？

「それで、名前は・・・」

「私は昔からシロン、と呼ばれてました。」

「じゃあ、よろしくな。シロン。」

「はい♪」

そう返事をしたシロンは、スバルの左腕に抱きついた。

「あっ、ずるい！私も！」

負けじとアイリスもスバルの右腕に抱きついた。

「抱きつき遅れちゃった・・・」

ウィリアは少し落ち込んでいた。

「あのさ・・・俺、骨折れてるんだけど・・・」

「固定するっすか？」

「いや、折れたの肋骨だから固定できない・・・」

「なら、早く帰りましょう！」

スバルのこともあり、再び帰路についた。

ごめんね・・・。私、スバルと一緒に生きていくから・・・。

私たちのこと、見守っててね・・・。

報酬。

入手、クエストクリア

まだ報告してない、集めてもないのでない。

その他

シロン。

スバル、少し女性耐性がついた？

第17話 クシャルダオラ討伐遠征 その7 帰還、仇と恋心に揺れて（後書き

今回登場したシロン、十六夜 刻さんの案を殆ど採用しました！
時軸も近かったので、出しやすかったです！

以下、設定です。

名前 シロン 性別 女

種族 リオレイア

見た目年齢 18歳。

身長 162cm

性格 温厚。ただしスバル限定で甘えん坊になる。怒ると背後に般若を見せる。

備考 容姿 髪は銀髪のミドルヘア、サイズはF+。

十六夜 刻さん、ありがとうございます！

今後もまだまだ募集を行います！どしどしどうぞ！

却下？そんなことは致しません！

次回は少し話が飛ぶので理解しててください。
では、次回をお楽しみに！

（3／26、「展開が急すぎる」と多数の指摘を頂き、大改修を行いました）

第18話 クシャルダオラ討伐遠征 最終 第一次スバル争奪戦開戦、そして帰

遅くなりましたが第18話です！

今回でクシャル討伐編終了です！

おかしいところが多々あると思いますが、楽しんでいただけると嬉しいです。

では、どうぞ！

第18話 クシャルダオラ討伐遠征 最終 第一次スバル争奪戦開戦、そして帰

「・・・これは・・・なにが起きたんだ・・・？」

スバルは混乱していた。

「スバルの隣は私だよ！」

「ちっ、違うもん！あたしだよお！」

「いえ、私です！」

「私よ！」

スバルを支える役を、誰がやるかで揉めていた。

「・・・クリム・・・、頼めるか・・・？」

「えっと・・・」

ギロ！

「怖いと言わないで欲しいっす・・・」

スバルはクリムに支えを頼もうとした。が、クリム以外の娘たちの睨みにより、引き下がるしかなかった。

「もう・・・いや・・・」

「スバル！？倒れちゃだめっす！持ちこたえるっす！」

「ご主人！耐えるニャ！耐えないと大変な目に遭うニャ！」

なぜ・・・こうなった・・・？

事の始まりは、朝起きたときだった。

「う・・・、朝・・・か・・・」

スバルは朝早く起きた。

「っ痛！やっぱり昨日のが・・・。・・・手が動かない・・・？」

スバルが両側を交互に見ると、

「すぴー、すぴー・・・」

右側にはアイリスが、

「すう・・・、すう・・・」

左側にはシロンがいた。

「くっそ、動けない！？動け・・・あだだだっ！」

「スバル、どうし・・・」

「こ、これには訳が・・・」

スバルの悲鳴を聞き、ナコルがスバルに声をかけ・・・途中で止めた。

スバルは必死に弁明する。

「なんで・・・なんで私だけ・・・」

「へ？」

「なんで私だけスバルに抱きついたり一緒に眠ったりできないんですかぁー！？」

ガバァ！

「いっ・・・たああああっ！」

ナコルは今までの不満を爆発させ、スバルに飛びかかって抱きついた。

スバルにはその衝撃で激痛が走る。

「私も・・・私も一緒に眠りたいんですぅ！」

「痛い・・・から・・・、離・・・れて・・・くれ・・・」

「イヤです！」

「ん・・・」

「んみゅ・・・どーしたのおぅ？・・・って！あぅっ！」

アイリス、シロン起床。同時にアイリスが叫ぶ。

「ナコル！なにしてるの！？」

「抱きついてるだけです！」

「ずるい！私だってえっ！」

「アイリス、ナコル、スバルは渡さない！」

「私も同じです！」

ぎゅっ！

ガシッ！

「だあああああっ！痛い！痛いから！」

「あ・・・あ・・・」

いつの間にかウィリア、起床。

「みんなずるい〜！」

ピョン！

とさっ！

「がっ・・・」

ウィリアも取り合いに参戦、スバルの体の痛みはさらに悪化していく・・・

「ナコル、どきなさい！」

「イヤです！私はスバルのお気に入りなんですから！」

「そんなことを言った記憶はない！捏造するな！」

「どこがなの！？」

「胸です！」

「知らん！そんなことは知らん！」

「あなたの胸より私の方が大きいわ！誰にも負けない！」

「張り合うな！」

「大きくてもムダだよ！私くらいがちょうどいいって言ってたもん！」

「だからそんなことは絶対言わねえだろ！」

「違うもん！ぺったんこの方がいいって言ってたもん！」

「だめだ・・・止まらない・・・。誰か、医者を・・・、ガク。」

言い合いをしているその真下で、スバルは痛みに耐えきれず、気を失った。

Side 言い合い現場

「ぺったんこは下がってなさい！」

「でかいのも下がってよ！」

「ぺったんこでもいいもん！大きい人が負けてよ！」

「下がりたいありません！ほかの皆さんが下がってくださいよ！」

「イヤよ！」

「やだ！」

わーわーぎゃーぎゃー・・・

誰一人として、スバルが気を失ったことに気づいていなかった・・・

Side end

「うーん・・・みんなうるさいっすよ・・・って！スバル！？生きてるっすか！？死んじゃだめっす！」

唯一、クリムが気づいた。

「止められる自信がないっす・・・。。。。よし！」

意を決したように言い合い現場に向かうクリム。

すうう・・・

「みんなあ！スバルが気を失ったっすー！スバルが死んでもいいっすか！？嫌われてもいいっすかー！？」

『それはイヤ（です／よ／だ）！！』

クリムの叫びに全く同じ返事。

トテトテ。

「スバルー、生きてるっすかー？」

『え？』

全員が見ると、気絶したスバルがいた。

「きゃああ!？スバル!？」

「ごっ、ごめんなさい!」

「イヤだよ・・・死んじゃだよ・・・!」

「戻ってきて!お願いだから戻ってきて!」

「いや、気絶しただけっすよ?死ぬことはないから焦らないで欲しいっす・・・」

そしてスバルは意識を取り戻し、そろそろ行こうとした。

「でもご主人?あんな事があってよく歩けるニャ。痛くないのかニャ?」

「言われると辛い・・・。頼む、何も言うな・・・」

「心中、察するニャ。・・・今でも戦いが続いているのは驚きだニャ・・・」

「察することができない人を見たいっす・・・」

「今日の前にいるんだが・・・」

「そっすね。忘れてたっす。」

スバル、ノブ、クリムの視線の先には、

「私はスバルに全てを捧げてますから!」

「私の方が! 私なんかスバルに押し倒されたもん!」

「私はスバルには何をされたって構わないわ!」

「あたしだって・・・あたしだってえ・・・」

未だに言い争いを続ける四人がいた。

「・・・置いてくか。」

「そのほうがいいっす。」

「先、行ってるニャ。」

一歩歩いて。

「っ痛!」

「おっとご主人、大丈夫ニャ?」

「支えが・・・欲しい・・・」

ギラッ!

『^{あたし}私が支えにな(ります／る／るわ)!』

言い合いをしていた娘たちが一斉にスバルを見て言った。

そして再び。

「スバルの身長的に支えるのは私です！」

「身長だったら私が一番支えやすいよ！」

「同じくらいの身長の方が支えやすいはずよ！だから私が！」

「そんなことないもん！低い方が絶対いいもん！」

「二人ともどさくさに紛れてなんかしようと企んでるでしょ！胸触らせるとか！」

『そ、そんなことない（です）！』

わーわーぎゃーぎゃー・・・

「あいつら・・・まだやるか・・・」

「全く、呆れるニヤ。」

「ある意味すごいっす・・・」

そして、今に至る。

「おーい、もう行くぞー・・・」

「私なのー!」

「私です!」

「あたしなのぉ!」

「私よ!」

ったく・・・

「お前ら! いい加減にしろ! 喧嘩するなら帰ってからにしろ!」

『はい・・・』

スバルの怒声に四人が返事をする。ただ、それぞれの思いは一つだった。

(スバルは・・・渡さない!)

はあ・・・。これからこんな事が続くのかな・・・

そう思うと気が滅入るスバルであった。

そして夕方。

あんな言い合いがあったのにもかかわらず、何事もなく帰ってきた。

「つ、着いた〜・・・」

「皆は先に帰っててくれ。報告してから体見せに行ってくる・・・。
最悪絶対安静食らうな・・・」

「わかったニャ。責任持って連れてくニャ。」

そしてスバルは一人だけ別行動をとった。

S i d e スバル以外の全員

スバルの家に着いて。

「スバル・・・心配だなあ・・・」

「そうですね・・・」

「あたしも・・・」

「原因は私なんだし、私が看病す『ダメ!』なんで!？」

口論、再び。

「だって、変なことするかもしれないもん!」

「そっちの方が心配だよお!」

「変なことって・・・なによ・・・?」

「そっ、それは・・・ごによごによ・・・／／／」

口ごもるナコル。

「・・・だから、なんでなの?」

「その・・・む、胸で・・・」

「しっ、しないわよ!そ、それよりもあなたたちの方が!」

「し、しないもん!」

「し、しませんよ!」

「できないもん・・・」

激化する口論。

「スバルはアタシとノブが看るってことでいいっすか?」

『それに賛成!』

「クリームだけにしかできない提案ニャ。みんなそれだけご主人が好きみたいニャ。」

クリム・ノブが看る、ということで決着が着いた。

N e x t S i d e スバル

スバルは、集会所で報告を済ませ、知り合いの医者に診てもらっていた。

「おっさん、どうなんだ？」

「ふむ。全治六ヶ月、安静四ヶ月・・・と言いたいが、お前さんの回復力だ、全治三ヶ月、安静二ヶ月だな。」

「そんなんでいいのか!？」

期間が三ヶ月。普通はあり得ない話だが、スバルの回復力がすさまじいため、ありうるのだ。

「二ヶ月安静にすれば、な。クエストに行ったり、誰かに襲われたり女の子に・・・おっと、お前さんにはまだ早いかな。」

「うっせえ!・・・ま、ありがとよ。」

「無茶すんなよ。」

「分かってる。」

そう言い、スバルは帰っていった。

S i d e e n d

スバル宅。

「ただいま。」

「スバル! どうなの! ?」

「全治三ヶ月、だった。」

「そう・・・ですか。」

スバルの言った結果に、落ち込んだように言うナコル。

「ナコル、どうした?」

「へ! ? あ、あの、残念というか、なんというか・・・」

「その間、一緒にいられないの・・・?」

「クエストに行けないだけ、だ。・・・頼むから抱きついたりしないでくれよ・・・?」

「わかってる!」

「大丈夫です!」

だといいが。

そう思いつつ、すぐに寝ることにした。

報酬。

入手

なし。

クエストクリア

鋼龍の鱗×5

その他

第一次スバル争奪戦、開戦。

スバルの骨折、全治三ヶ月の診断。

第18話 クシャルダオラ討伐遠征 最終 第一次スバル争奪戦開戦、そして帰

今回はちよつと名前の補足です。

クリムとシロンの名前について、です。

クリム

菊の英語、 「chrysanthemum」クリサンシмумより

シロン

柚子の英語、 「citron」シトロンより

以上です。

次回はリクエストクエストです！

どんなかはお楽しみに！

感想や募集など、まだまだやっています！

どんどんどうぞ！

第19話 ランゴスタな季節 前編（前書き）

第19話です！

今回のこの話は、神威 銀時さんのリクエストから作りました！

前後編ですがお楽しみください！

では、どうぞ！

第19話 ランゴスタな季節 前編

S i d e スバル

「目が・・・覚めた・・・」

スバル、起床。

「今日はシロンのハンター登録とウィリア、シロンの初クエストの日だな。・・・大丈夫か？」

心配だな・・・

いつにもなく、心配していた。

S i d e e n d

「ええ、それで・・・」

スバルが目を覚ました頃、シロンがハンター登録をしていた。

「済んだわ。クエスト、決まった？」

「不思議なクエストがあつて・・・それを受けた・・・」

「どれどれ・・・って！イヤ！私それ受けたくない！」

「アイリス、どうしたの？」

「ハチ嫌いなもの！ランゴスタ嫌いなもの！やだよー！」

「ウィリア、それで決定ね。」

「・・・うん。」

「やーだーだーだーよー！！」

嫌がるアイリスを無視し、三人はクエストに行った・・・

クエスト ランゴスタな季節

開始。

「クエストを受けたのはいいけど・・・」

「ここでだなんて普通は思いませんよね・・・」

「・・・ないよ。えっと、クイーンランゴスタ討伐だって。」

「もうやだあー、私帰るうー！」

「アイリス、往生際が悪いですよ？」

「だってランゴスタ嫌いなんだもん！1秒も一緒にいたくないもん！」

「胸を刺されると大きくなるって聞いたわよ？」

「聞いたことないよ！？まだ死にたくないもん！」

「・・・はいはい、アイリス。諦めて行こ。大丈夫。・・・きつと・・・」

「いゝゝやゝゝだゝゝ！！」

「シロン、お願いできます？」

「いいわよ。まったく大変ね、わがままって。」

シロンはアイリスを引きずるように歩いていった。

場所は・・・ポツケ農場。

「きゃあああああああああ！？」

農場に入ってすぐの、アイリスの悲鳴。

「改めて見ると不気味ですね・・・」

「こっちに來ないのが不思議だわ・・・」

ブンブンブンブン・・・

ランゴスタのそんな羽音がとめどなく聞こえる状況を見て、ナコルとシロナが思わず感想を口にする。

「ここにランゴスタがいるならどこかに女王がいるはず・・・」

「ならば早速探しましょう！」

「ええ！アイリス、行くわよ！」

女王を狩ればランゴスタはいなくなる。
そう信じて行こうとする。

だがアイリスは・・・

「や、やだ！こっち来ないで！いやあああつ！か、囲まれた！ふえええん！誰かあゝ！助けてえゝ！」

いつの間にかランゴスタに囲まれていた。

「やめて！来ないでゝ！刺さないでゝ！やだゝ！」

フオン！ヒュッ！ザクッ！

ひたすら振り回した剣が、ランゴスタ一匹を斬り裂いた。

キラッ！

「ひっ！」

一斉にアイリスを見る。

「いけない！アイリスを助けなきゃ！二人とも先に行って！」

「なにをする気？」

「あれをやるんですか！？」

「あれをやるの！って！アイリスが！」

『あっ！』

ウィリアが気づいたときには、すでに一匹アイリスの目の前にいた。

ブン！

「お願い、間であって！」

ナコルは思いつきり石を投げた。

当たった。

石が直撃したランゴスタはなぜか死んだ。

狙いをナコルとシロンに変える。

「いきますよ・・・」

「いつでも。」

「刺されてもいいのは・・・」

「私たちの・・・」

『胸だけ（よ／です）！』

そう叫んで二人はランゴスタに向かっていった。
なぜ胸だけはいいのかは想像で。by 作者

Side ウィリア

ウィリアは栈橋にいた。

「んむっ、んむっ、んむっ・・・んぐっ！」

思いつきり水を口に含んでいた。

「む！（よし！）」

ぷうっ！

ズババババババ！

ビシャビシャビシャ！

たった一度の放水で大量のランゴスタが死に、切断時に出た体液が飛び散った。

「・・・よし。アイリス、待ってて・・・」

ウィリアはそう言って再び栈橋から水を吸い始めた。

S i d e e n d

「はああっ！」

ザシュッ！

ブブブブブブ・・・

「き、きりがないです・・・」

「どれだけいるのよ・・・こいつらっ！」

ザン！

「あー、もうっ！体液でベタベタじゃない！」

「アイリスの方が酷いと思いますけど・・・って！」

『あゝっ！』

ナコルが気付いたときには、一匹のランゴスタがアイリスに針を刺そうとしていた。

アイリスはとうに気絶している。

「間にあわないっ！」
「アイリス！」

ぷすっ。

二人が叫んだ瞬間、アイリスは刺された。刺した場所は、ご丁寧にアイリスの胸だった。

「狙ってた……の？」

「アイリスが？……無理ですよ、気を失ってますから。」

二人が呆然としてたとき、結局アイリスはもう一発刺されていた。

……逆を。

To be continued……

第19話 ランゴスタな季節 前編（後書き）

今回は神威 銀時さんのリクエストクエストです！

クエストのタイトルは変えてしまいましたが・・・

ちょっとギャグ的な話になりつつあると思います。

次回はウィリアが頑張ります！

アイリスは気絶したままです。復活はクエストが終わってからの予定ですが、刺された胸がどうなるか。

お楽しみに！

番外編 ちょっとしたロシアンルーレット・・・

どうも、作者の三月語です。

「アイリスだよ。」

「ウィリアです・・・」

今回は普通なら次の話に行きますが・・・

「ますが・・・？」

番外編でちよっとお祝いを。

「・・・なんの・・・お祝い？」

それは・・・

祝・PVアクセス50000件&ユニークアクセス50000件突破！

『おおー！』

いやいや、私一人では絶対いきませんよ。
皆さんのおかげです。

ありがとうございます。

『ありがとうございます！』

それで、ちょっと遊びを。

「なになに？」

ここに肉じゃががあります。

「おいしそう・・・」

一つだけ瑞希の作ったやつがあります！

『えっ！？』

それを食べた人が負け、というゲーム！

「死にたくないよ！」

「どれもおいしそうに見えるのに・・・」

では、私はこれを。

「あっ！」

「卑怯・・・」

卑怯？いいえ、そんなことはありません。既に勝負は始まっているのです！

「じゃあ私これ！」

「あたしはこれにする・・・」
では。

『い・・・いただきます・・・』

パク。

「おいしい……。あたしセーフ……」

「私も。ふう……」

ふむふむ、ジャガイモはネバネバ、肉はガチガチ、甘すぎず、辛すぎる味わいが……

……んゴパツ！

「えー！？」

「だっ、大丈夫！？」

大丈夫……強いから……

「い、胃薬く！」

「ええっと、作者が強がっているけどとても進行不可なので、私が進行するね！

まずは本当に、ありがとうございます！

そして募集の確認だけど、

1. 擬人化モンスター
2. リクエストストーリー
3. オリジナルクエスト
4. ウィリアの出張先

だよ！

それで、ウィリアの出張先についてはウィリアが出るときに一度報

告を欲しい、ということで！

えっと……、終わっていいのかな……」

「大丈夫？ ホントに大丈夫？」

大丈夫……。アイリス、終わっていいですよ……

「そ、それでは！」

食べた肉じゃが

三月語……瑞希作

アイリス……ナコル作

ウィリア……レオン作（最高レベル）

第20話 ランゴスタな季節 後編（前書き）

第20話、ランゴスタ編後編です！

笑っていただければ嬉しいです！

ただ、アイリスは影が薄くなっております・・・

では、どうぞ！

第20話 ランゴスタな季節 後編

Side スバル

「今更思うんだが・・・」

「どうしたっすか？」

唐突にスバルはクリームに聞いた。

「♂のモンスター欲しくないか？」

「それで騒ぎが収まると思うっすか？」

「うぐっ・・・」

い、痛いところを突くな・・・

「でも、欲しいと聞かれると欲しいっす。」

「だよな・・・。今度ディアブロ辺り狙ってみるか？」

「藪をつついて蛇を出さないようお願いするっす。」

「わかってるよ。つつても、体が治ってからな。」

「あ、そろそろお昼っすね。」

クリームは昼食の準備を始めた。

その直後、スバルは今はいない四人を心配していた。

あいつらのクエスト、無事済むといいが・・・

S i d e e n d

「こ、この辺はあらかじめ片付いたわ・・・」

「アイリス！大丈夫ですか！？」

ナコルはアイリスを揺すった。

「あは、あはははは・・・」

アイリスはただただ笑っていた。

「恐怖が強すぎたせいで、ものの見事に壊れてるわね・・・。胸も腫れちゃって・・・」

「ホントに大きく腫れましたね・・・。E・・・？」

「Eね・・・」

腫れたアイリスの胸をみて、ナコルとシロンが呆然となりつつ話していた。

「むー！むー！（ナコルー！シロンー！）」

「ウィリア。」

栈橋のある方からウィリアが走ってきた。

「そっちは終わりました?」

「む! (うん!)」

「・・・(なんて言ってるのかしら・・・)」

伝わってない・・・

「む? むーむむむ? (あれ? アイリスは?)」

「あの・・・、書いてくれないかしら・・・」

「!」

気づいたウィリアはどこからか木の棒を取り出して地面に字を書き始めた。

「(済んだよ でも すごく服がびしょびしょになっちゃった)」

「こっちもね。アイリスを置いてクイーン討伐する?」

「(そうした方がいいかも 気絶したら役に立たないし)」

「ウィリア、あなたたまに黒いわね・・・」

「(そう?)」

「そうですね・・・。で、では行きましょうか!」

三人はアイリスを置いてクイーンを討伐しに行った。

アイリスには腫れが引く薬は塗られていなかった。
おまけに全身ランゴスタの体液でずぶ濡れだった。

「いた!?!」

「いません!」

「(見つかってない あとはあそこだけだよ)」

そう書いてウィリアが指したのは、ちよつと外れた位置にある林だった。

「行きましょう!」

「さっさと終わらせましょ!」

「む!」

三人は林へと向かっていった。

いつの間にか気絶していたアイリスは未だ搜索前の姿だった。
ただ、腫れがより酷くなったように見えるが。

林の中。

「ランゴスタがまた出てきたわ・・・」

ぷうつ！

ウィリアはランゴスタに向かって水を吹き出した。

ズバババババババ！

ぼたぼたぼたぼた！

ドサドサドサドサ！

大量のランゴスタが死に、体液が飛び散り、死体の山が積み上げられた。

「うわぁ・・・」

「かなりエグいですね・・・」

「ぷふう・・・。そうかなぁ・・・。棧橋の所もこんなんだよ・・・？」

「み、見たくないわ・・・」

ウィリアの発言に引き気味なシロン。

「ところで、水は大丈夫ですか？」

「入れ物ないから終了・・・。あとはこれで（ジャキン！）・・・」

ウィリアは弓を構えた。

「ランゴスタは全滅したはずだからあとは・・・」

「姫だけ・・・」

「よし、行こう！」

三人は洞へ向かった。

S i d e 入り口

アイリスは未だ気を失っていた。

「みんな無事かニャ？」

ノブが一人で農場に来た。

「お、アイリス発見ニャ！・・・やけに胸が大きいのは気のせいかなニャ？」

現在のアイリスの胸のサイズ・・・G+

「一応運びたいんニャけど、ベタベタだし・・・。おっと、写真写真・・・。」

ノブはアイリスを撮影した。

「これをご主人に見せれば、絶対女性に目覚めるはずニャ！あ、かかっている体液は拭き取っとくニャ。」

アイリスの面倒はノブが見ていた。

S i d e e n d

ブ・・・ブブブ・・・

「いた！」

「挑発・・・してみる！」

ウィリアは10本ほど矢を放った。

ストトトト！

寸分の狂いなく当たった。

ブブブブブブブブ！

ランゴスタの大群、襲来。

「うっ、くっ……。矢が……。足りない……」

「すぐに姫を倒せばいいのよ！ナコル、いくわよ！」

「わかりました！ウィリア、援護を！」

「任せて！」

ナコルとシロンは、姫に向かっていく。

ウィリアはランゴスタを二人に近づけないように矢を放っていた。

でも。

「数が多すぎて近づけない！」

「だめー！矢が無くなったー！」

ついに矢が尽きる。

ナコルとシロンは孤立した。

「さすがにアイリスを見てたら……」

「刺されたくないですね……。一時的に胸が大きくなったとしても・

・」

アイリスの悲劇(?)を見ていた二人はそれがちよつと嫌だった。

「ナコル！攪乱お願い！一気に火炎で燃やしー」

「だめです！他の物も燃えてしまいます！」

二人が言い合っていた頃。

「これなら・・・無尽蔵だ！」

ウィリアは死んだランゴスタの針を矢の替わりにしていた。

「えい、やつ、とお！」

数時間後。

姫はまだ生きていたが、周りのランゴスタは全滅していた。

「まったく・・・手こずらせてくれて・・・」

「あとはあなただけです。だから・・・」

『さっさと死（になさい／んでください）！』

二人は息ピッタリに言って、姫を切り刻んだ。

ブ・・・ブ・・・

ズウウウン・・・

ついに討伐した。

「ふう。クエストクリアね。アイリス、大丈夫・・・」「ふええええええええええ！？」・・・のようね。」

シロンの声を遮るように響くアイリスの悲鳴。

「とりあえず・・・報告に行きましようか。」

初クエストが終わり、報告に行った。

アイリスはいつの間にか大きくなっていった胸に驚いていた。

スバル宅。

「クエスト、終わりました！」

「お疲れさん。あれ、アイリスは？」

スバルは労いの言葉をかけ、アイリスがいないことに気づく。

「アイリスは・・・今ちょっと立て込んで。」

「そりゃ仕方ないか。今日はゆっくり休んどけ。」

『はい（うん）！』

三人は元気よく返事をした。

おまけ

その日の夜。

「ふひいゝ。さっぱりしたあゝ。」

風呂からアイリスがあがった。

「なんかベタベタだったからお風呂入れてうれしいなあゝ。・・・
あ、あれ？んっ、くっ・・・。あれれ？のっ、ノブうゝ！」

アイリスはノブを呼んだ。

「どうしたニャ？」

「胸あたりが・・・苦しくて・・・、なんて言うか・・・服が小さく感じるの。」

「ちよっと待つニャ。メジャーを出して、胸周りを測って・・・。おお、おめでどうニャ、サイズがあがったニャ。腫れが引いたはずなのにあがるとは・・・あの拷問かニャ？」

「ほ、ホント！？」

「嘘じゃないニャ。サイズはE十二ニャ。かなり成長したニャ。」

「や、やったー！」

タタタタタタ・・・

「あっ、待つニャ！スバルの部屋に行くのに上半分が裸はまずいニャ！」

すでに時遅し。

スバルの部屋。

「スバルう！」

スパアン！

「どうした、アイリ・・・すうう！？ちよ、おま、なんで上が裸・・・

・
」

むにゅっ！

「私ね、胸が大きくなったんだよ、ほら！」

アイリスはスバルの手を自分の胸に押しつけた。

ふにゅっ、むにゅっ・・・

「ね？ほら！」

「わかったから・・・上を着ろ・・・」

「上って・・・きゃああっ！」

アイリスは自分の姿に気づき、慌てて胸を隠した。
スバルは目を逸らしたままだ。

「もっ・・・、スバルのえっちっ・・・／／／」

「お前がやったんだろ！俺は巻き込まれたんだ！」

「ううっ・・・。でもスバルだけだもん、こんなことできるの・・・。好きだからだもん・・・／／／」

「な、なんか言ったか・・・？」

「な、なんでもないよ・・・／／／」

アイリスは顔を真っ赤にして俯き眩くだけで、スバルにはその眩きがわからなかった。

後に話は広まり、ナコルとシロンは少し焦りが見られたのは別の話。

報酬。

入手

ランゴスタの甲殻×80

ランゴスタの羽×50

クエストクリア

ランゴスタの羽×20

ランゴスタの甲殻×18

その他

連携アップ。

ナコル・ウィリア・シロンの絆+10

アイリスの蜂嫌い判明。

アイリス、胸成長。D+からE+へ急に。

第20話 ランゴスタな季節 後編（後書き）

19話、20話と神威 銀時さんのリクエストから作りました！

クエストや話も募集しているので、ぜひ！
感想や擬人化案もお願いします。

では！

第21話

暴走、そして打ち明けられた事実（前書き）

最後の更新から時間がかかり、遅くなりました！

いつもより長くなっているはずなのでお楽しみください！

では、どうぞ！

第21話

暴走、そして打ち明けられた事実

「なぜだ・・・？」

スバルは考えていた。なにかというと、

「なぜ目が覚めた・・・？」

こんなことだった。

昨日寝る前にアイリスが裸で現れて、シロンが目の前で説教始めて・

・
「ダメだ、記憶がない・・・。つまりこのときに寝てしまったのか・
・」

外は暗い、まだまだ安静は確実。

なにをするかも知られる。

「・・・寝るか。」

スバルは再び目を閉じた。

だが・・・

「・・・寝れん・・・」

朝。

Side ウィリア

「スバル・・・、大丈夫・・・？」

ドアの前でウィリアが声をかける。

「大丈夫だ、特になにもない。寧ろ暇だ。」

「あはは・・・。そうだ、朝ご飯、できたよ。持ってくるね。」

「走るなよー。」

スバルはドアの中から声をかけた。

とててて・・・

がっ！

「あっ！」

ばたっ！

むきゅう・・・

「は、派手にいったな・・・」

「だ、大丈夫だもん・・・ぐすっ・・・」

痛くないもん・・・泣かないもん・・・

とたとたと・・・

「大丈夫か心配なのはこっちだ、まったく。」

そう言われていたウィリアだった。

S i d e
e n d

炊事場。

「スバルが元気になるまであと2ヶ月かぁ・・・」

「一概にそうと言えませんが。でも、その間色々とお世話をするわけ・・・／＼」

「ナコル、なに顔を赤くしてるのよ？」

「えっ！？そっ、そんなこと、なっ、ないですよ？」

「うわ、バレバレ・・・」

「どうせ変なことを考えていたんでしょ？」

「そそそそんなことないですよ！別に・・・なことしたりなどは考えてないです！」

「誰もそんなこと言ってないよ？」

「はっ！」

墓穴を掘るとはまさにこのこと・・・

「もっ、もおー！」

「ごちそうさまー！」

アイリスは逃げた。

「私も食べ終わったわ。お先。」

シロンも出ていった。

「ううゝ．．．私のバカあゝ．．．／／／」

ナコルは机に突っ伏した。

とてとて．．．

「ご飯、残ってる？って、ナコル．．．どうしたの？」

「自己嫌悪ですよゝ．．．」

「？よくわかんないけど．．．。あたし、スバルにご飯持ってくから。」

「お願いします．．．」

よくわからず「？」となっていたウィリア。

「今日は．．．、全員仕事無しか．．．」

自室でぼうつとしているスバル。

コンコン。

不意にノックされるドア。

「ご飯、持ってきたよ・・・」
「お、ありがとな。」

スバルはウィリアの頭に手を置いて、撫でた。

「ふみゅ・・・」
「あ、悪い。嫌だったか？」
「ううん、嫌じゃないよ・・・。むしろ・・・もっとなでてほしい・・・」
／／／

顔を赤くするウィリア。

「ま、仕方ないか。」
「えへへ・・・うにゅ・・・」

そう言って、スバルはウィリアの頭をまた撫で始めた。
ウィリアはウィリアで、気持ち良さそうにしていた。

その頃、ナコルはというと・・・

「うああ・・・／＼／」

自己嫌悪に加え、恥ずかしさまで出てきていた。

Side アイリス

「さっきのナコル・・・、凄く大胆なこと言ってたなあ・・・」

皿を洗いつつアイリスは呟いた。

「・・・なことや・・・なこと・・・はわわわわ・・・ああああ
う・・・／＼／」

さっきのことを思い出し、顔を赤くした。

「わ、私がスバルと・・・あ、ダメ！それはダメなの！・・・あ・・・

・／／／

「アイリス様、手が止まってますぞ。」

「ふえっ!? えっ、あっ、ごめん!」

妄想をしていたがために手が止まっていることを指摘され、慌てるアイリス。

「・・・(ポツ)／／／」

再び顔を赤くするアイリス。

しばらくはそれが続いていた。

Next Side シロン

「あの発言には・・・ホント驚いたわ・・・」

一人歩いていたシロンも未だナコルの発言を思い返していた。

「お、思い出ただけで恥ずかしくなってきた・・・／／／」

アイリスと違って・・・

「・・・でも、私があんなことやこんなことできたらな・・・や、やだ、なに言ってるのかしら、私ってば・・・／／／」

いるわけなく、妄想はしっかりしていた。

「わ、私も・・・あんなことを言えればなあ・・・。・・・はあ・・・、ウィリアミたいに甘えられたらなあ・・・」

落ち込んでいた。

S i d e e n d

「ウィリア、皆は何してるんだ？」

「ウィリアー、スバルはどうっすかー？」

スバルがウィリアに状況を聞こうとしたとき、クリームがスバルの部屋に来た。

「あ、クリーム？今のところは問題無いよ。でも、なんで？」

「スバルの周りが心配だったっすから。なにもなくてなによりっす。」

「それ、あたしも入ってるの・・・？」

ウィリアはジト目でクリームを見る。

「あ、あは、あはははは。」

クリームは笑ってごまかそうとした。

「もおっっ！！クリーム酷いよおっ！！」

ポカポカポカポカポカポカポカ。

「い、ごめんっす！い、痛いっすよ！」

・・・平和だな・・・

そう思えるスバルだった。

「むっ！」

「痛いっす！」

いつまで・・・続くんた・・・？

「あ、あのね、スバル。」

唐突にウィリアが話しはじめた。

「何だウィリア、突然呼んで？」

「・・・ショウグンギザミのクエスト受けるとき、あたしを外してくれないかな・・・」

先程のポカポカが終わり、ウィリアはスバルに困り顔で言った。

「どうしてだ？」

「・・・あたしね、小さい頃にギザミの友達がいたの。その子、後から変になっちゃって・・・会いたくないから・・・」

「変に・・・って？」

スバルはそこが気になった。

「・・・あ、あのね、なんか・・・あたしのことを好きだって言うようになっちゃったし、あたしになにかしようとしたらいきなり攻撃するし・・・」

（スバル&クリム・・・ど、独占欲の塊!?!）

「それに・・・へ、変な姿見られたくないから・・・。ダメ・・・?」

上目遣いで聞いてくるウィリア。

「い、一度話し合ってみたら・・・どうだ?」

「話し合う・・・って?」

スバルの提案に疑問符が出るウィリア。

「言えば良いんだよ。友達でいうって、好きになっても・・・って。・・・ていうか、その子、雄・・・だよな・・・?」

スバルはある一つの可能性を聞いてみた。

相手が雌という俺の予想、当たってくれるなよ・・・

「女の子だよ?」

「当たっちゃったあああああああつ！」
『（びくうっ！）』

スバルは叫んだ。

「ど、どうしたっすか!？」

「ウィリア、必ずお断りしなさい。雌同士はいけないから。」

「え、ええと・・・と、とりあえず分かった。・・・ていうか、敬語になってるよ？」

まさか同性愛者だなんて思うわけねえって・・・

スバルは平静を装うも内心焦っていた。

夜。

「なあノブ、黒刀は完成したか？」

「だいたい完成したニャ。・・・しかし、朝は驚いたニャ。あんな発言が聞けるなんて思わないニャ、普通。」

「あんな発言って何だよ？」

「彼女達の秘密ニャ。野暮な詮索はいーけなーいニャ。」
「ふーん……。秘密ねえ……」

とりあえず詮索は止めたスバル。

「夕食食べたし、あとは……。そういやノブ、今日の夕食に酒使ってたかったか？」

「使ってないニャ。あ、そういや飲み物が……。酒だった気が……」

あ、俺死んだな。

「すまないノブ、俺は今日死ぬだろう。」

「ご、ご主人！？それを言っちゃダメなのニャ！生き」（コンコン）スバル……。あの、は、入ってもいいですか……？」あわわわわ……。ご、ご冥福お祈りいたしますニャ。」

「待てや、さっきまでの何だったんだおい！」

ノブが部屋から（逃げるように）出て、入れ替わりにナコルが部屋に入ってきた。

「そ、それで、どうした？」

「あ、あの……。うっ、ううっ……」

い、いきなり嗚咽を漏らした！？

「うええええええ・・・」

「ちょ、待て！なぜ泣き出す！？」

入ってきてものの数秒、ナコルは泣き出した。

「頼むから泣き止んでくれ！なんの話をしに来たか分からんから！」
「うええええええ・・・ぐすっ、ひつく・・・」

泣き止むまでに数分かった。

「も、もう大丈夫だよな？」

「は、はい・・・ぐすっ・・・」

「で、なんの話を？」

「あの・・・ですね、・・・」

ナコルは、周りが自分の想いを伝えたのに、自分だけそれができないこと、いざ伝えようにも自信が無いから言い出せないことを話した。

「・・・自信がつくように練習とかしたらどうだろうか？」

「えっ・・・、れ、練習・・・？」

「まあ、堂々と言えるまでとは言わないけどな。俺が言えるのはこれだけ、あとはナコル次第だな。」

「あ、ありがとうございます！」

「・・・ナコルなら振り向かない男はいないだろうけどな・・・」

スバルはナコルに顔を見せないように言った。

「っ！わ、私なら・・・私なら・・・／／／」

ふらあっ・・・

パタン。

ナコルはスバルの言った一言で、気を失ってしまった。

「な、ナコル！？ちょ、おい！誰か！」

その後、シロンが駆け付け、ナコルを運んでいった。

「・・・ナコルはなぜ倒れたんだ・・・？」

元凶は自分のせいだと気付いていなかった。

報酬。

入手、クエストクリア
なし。

その他
アイリス、シロン、妄想癖あり？
スバル、ナコルに自信のつけ方を教える。

第21話

暴走、そして打ち明けられた事実（後書き）

本当に遅くなりました！

ネットが無く、携帯もあまり使えないのでこうなっていました。

久しぶりの更新は日常編、ナコルにちよつと触れた話です。

次回をお楽しみに！

第22話 スバル復活、狂いし鎌蟹との出会い（前書き）

22話です！

今回は募集案を使わせていただきました！
そして長いです！

では、どうぞ！

第22話 スバル復活、狂いし鎌蟹との出会い

ナコル騒動のあった翌朝。

「ふむ、相変わらずの自己治癒力だな。」
「オッサン、どうなんだ？」

スバルは医者診察を受けていた。

「ふつ、これではお前さんをベッドに縛れんよ。」
「・・・なにが言いたい、オッサン。」
「完治だ。治癒力が上がっていたのは驚きだったがな。」
「ホントか!？」
「事実だ。綺麗さっぱり治つとる。お前さんには驚かされるよ。」
「よし、今日からクエスト再開か？」

完治報告に喜ぶスバル。

「ああ、可能だ。気をつけるんだぞ？」
「ああ、ありがとなオッサン！」

スバルは足早に自宅へ帰った。

スバル宅。

「完治したぞ！」

「ホント!?」

ガバア!

ゴン!

「（ムギユツ!）よかったあゝ! やっと一緒にクエスト行けるんだあ!」

「あの、アイリス? スバル気絶したっす。」

「ほえ?・・・（下を見る）きゃあああああ!? スバル!?!」

今更レベルでスバルの気絶に気がつく。スバルは頭打って気絶しただけなのだが・・・

「す、スバル!?!」

「死んじゃダメ! 戻ってきてゝ!」

「いや、死なないっすよ・・・」

「ちよっとアイリス! スバルを殺す気なの!?!」

「そんなつもりはないよおゝ!」

「あ、今度は窒息しかけてるっす・・・」

「（無意識のうちに自分の胸にスバルの顔を沈めているのに気づく）ふええええええ！？スバルうゝ！目を覚ましてえゝ！」

復帰直後から死にかけてスバルであった・・・。

「さ、三途の川が見えた・・・」

「大丈夫・・・？」

「だ、大丈夫だと言いたい・・・」

なんとか蘇生したスバルはふらふらと立ち上がった。

後ろではアイリスがナコル・シロンに説教されていた。

「さて、今日は・・・って、なんでギザミクエストしかないんだ？」

「あたしの昇格試験、ギザミなのかなあ・・・」

「皆が一緒に参加できるのは・・・これだけみたいだな。」

「はうあ！」

ウィリアがスバルが見ていたクエストを見て、悲鳴のようなものをあげた。

「う、ウィリア？どうしました？」

「このクエスト・・・、ギザミちゃんがいる・・・」

ウィリアは半分絶望したかのようにだった。

「今日はウィリア無しか？」

「で、でも、行く！」

「じゃあ、皆で行こっか。」

「俺は後ろで見てるだけにするからな。このクエストに参加はするが、皆の実力を見ないとな。」

「・・・ていうか、スバルってまだ病み上がりでしょ？無理しなくてもいいのに・・・」

「ま、まあそんなことはないとして、クエストに行くぞ。」

「むう・・・心配してるのに・・・」

5人はクエストに行った。

これが新たな悲劇の幕開けだとは、誰も知る由もなかった・・・

クエスト

「狂う鎌蟹」

開始。

ベースにて。

「アイテム、あるよな？」

スバルはアイテム確認をさせた。

「けむり玉が欲しいな・・・」

「私は大丈夫。」

「私も大丈夫です。」

「私は・・・ねえスバル、私が襲われたら、あの時みたいに・・・私を・・・守ってくれる・・・？／＼／」
「は？」

スバルが煙玉を調合中、シロンが顔を赤らめながらスバルに言った（スバルをちらちらと見ながら）。

あまりにも突然のことだったので、スバルは気の抜けた声を出してしまった。

「シロンずるゝい！私もゝ！」

「わ、私も・・・お願いします・・・」

アイリス・ナコルも同じように言う。

「あたし、今日頑張る！あたしが頑張らないとスバルが危ないもん！」

ウィリアは意気込んでいた。

「ま、まあ皆守ってやるからさ・・・。ウィリア、けむり玉。」
「あ、ありがとう・・・」

そしてショウグンギザミを探し始めた。

探し始めて数分後。

「し、死んじゃうよお・・・」

「あ、暑いですう・・・」

「なんなの、この暑さは・・・」

『そう（か）？』

暑さにやられた三人が暑い暑いと言い始める。

そんな中、ウィリアとスバルは暑くない、と言う。

「なんで暑くないのお・・・」

「そりゃ、クーラード・・・」「ウィリアとスバル、なにかしたんでしょ・・・してたんでしょ!」・・・話を聞け。」

「アイリスは仕方ないと思うけどなあ・・・。だってマフモフ着てたら暑いよ?」

「うっ・・・」

的確な点を突かれ、ごもるアイリス。

「スバルく、私にもクーラードリンクちょうだい・・・」
「シロン、自分の分は無いのか？」
「ないの・・・」

ホントに大丈夫なのか？

そう思い始めたスバルであった。

さらに数分後。

反応はあるのにも関わらず、いつこうに出てこないギザミ。

「ホントにここなの・・・？」

「反応はあるんだがな・・・」

「そろそろ出てきてくれないと困るのに・・・」

皆が不満を漏らし始めたとき、アイリスが、何者かの接近を感知した。

「皆、なにかが近づいて来るよ！・・・きっと・・・」

アイリスが言い終わらないうちに。

ダアン！

ついにターゲットが姿を現した。

「皆、気をつけろ！・・・ってあれ？」

スバルが疑問に思ったこと、それは・・・

「・・・」

・
・
・

ウィリアとギザミがお互いを見合っていた。

「うっ・・・」

ザッ。

ギギッ！

ササササ！

ウィリアが一步下がるとギザミは数歩近づく。

それがしばらく繰り返されて。

「ふひゃん！」

ぽて。

ウィリアが転んだ。

その拍子に、ウィリアの懷にあつたけむり玉が押し潰され、尋常でない量の煙を吹き出した。

プシュウウウウウ・・・

「ごほっごほっ！な、なんだこの煙の量は！？」

「わっぷ、ま、前が見え・・・」

皆が煙に困っていた時。

「ザザミ・・・？あなた、もしかしてハニーじゃなくて！？」

女の子の声が。

煙がはれて、姿があらわになった。

茶髪で蒼眼、見た目は可愛い女の子だった。

・・・次の一言がなければ・・・

「やっぱり！私のハニーですよ！」

その一言にスバル・ウィリア以外のメンバーが若干引いた。

「ちっ、違うよお！あたしが好きなのはスバルだけだもん！」
「ちよっ！」

ウィリアがそう言った瞬間、ギザミ娘がスバルを睨みつけた。

「ねえハニー、こんな豚野郎が好きなんですの？私よりもこんな豚野郎が好きなんですの？」

「スバルは豚野郎じゃないよ！」

「私のハニーに手を出す豚野郎は殺しますの・・・！」

「は、話を聞いてー！」

なんか・・・俺、やばくね？

「死ねえええええ！この豚野郎おおおおお！」

「ふざけるなあああ！」

ギザミ娘がスバルに突撃してくる。

「ギサミちゃんの・・・バカああああああ！」

スパアン！

「へぶう！」

ウィリアはギザミ娘にどこから取り出したのか分からないハリセンを叩き付けた。

「は、ハニーの攻撃・・・き、気持ち良かったですの・・・」

ギザミ娘の危険な発言にスバル以外の四人は完全に引いた。

「な、なんなんですか・・・」

「わ、訳が分からないよ・・・」

「ウィリアと同じくらいなのに将来が不安だわ・・・」

「最後に会った時より酷くなってる・・・」

そしてスバルが、

「ボコつとく？」

と言った瞬間、四人の目が光った。

「スバルを豚野郎って言ったこと・・・」

「絶対に・・・許しません・・・」

「スバルは豚野郎なんかじゃ・・・」

「ないんだよ！」

そして攻撃を開始した。

数分後。

スバルが四人が戻った後に攻撃現場を見たら、恍惚の笑みを浮かべたギザミ娘が残されていた。

「なんかもう・・・変態だな・・・」

「筋金入りの、ね・・・」

「わ、私はあんなことないからね!？」

「討伐したんだから・・・帰ろ・・・？」

「ええ・・・帰りましょう・・・」

五人はクエスト終了として帰っていった。

「ハニーは・・・あの豚野郎から絶対取り返してやりますの・・・」

ギザミ娘はふらふらと立ち上がり、ついていくように歩き始めた。

夜。

「ま、まだいますね・・・」

外にはギザミ娘がいた。

「あの豚野郎、絶対殺してあげますわ・・・」

「ウィリア、中に入れてあげて・・・」
「う、うん・・・」

玄関に行つて。

「ギザミちゃん・・・」

「は、ハニー！ ついに・・・ついに・・・」

ギザミ娘は万感の思いだ、とさも言うかのように胸の前で手を組んだ。

「いや・・・そういうことじゃないんだけど・・・」 「まさか・・・
豚野郎と一緒に暮らせて言うんですの!？」

「簡単に言つと・・・そうかな・・・」

ウィリアは説得を続ける。

「なぜあんな豚野郎と！一緒にいたくありませんわ！」
「・・・ぐすつ・・・」

「は、ハニー？ど、どうしたんですの？」

「ふえええええええん！えぐつ、ぐすつ・・・、ふええええええ・・・」

「は、ハニー!？」

ウィリアはギザミ娘の言葉（罵り）に堪えられず、泣き出してしまった。

仕方のない話である。嫉妬はするが怒ることはなく、臆病な性格の彼女には、こうすることしかできなかったのだ。

スバルの悪口を言われたくない。でも怒る勇気なんてない。その結果、泣いてしまったのだ。

結局、ウィリアに弱いギザミ娘は一緒に暮らすことになった。

「さて、名前だけど・・・」

スバルはいない。また暴走してもらうわけにはいかないからだ。

「名前・・・名前・・・」皆が困っているとき、アイリスがふと思ったことを漏らした。

「見た目は可愛いのに性格があれってバラミたいだね・・・『それだ！』え！？な、なにになに！？」

皆が一斉にアイリスの意見に声をあげた。

「バラみたいに裏がある子だから、ローズ！」

「いいですね！それにしましょう！」

「あ、あの・・・私の意見は・・・」

『もうこれで決定だから。』

「おとなしく引き下がりますの・・・」

ギザミ娘・・・もといローズは皆の剣幕に引き下がるしかなかった。

「あ、じ、じゃああたし、お風呂入ってくるね・・・」

「！（キラーン）」

ウィリアはふらふらな足取りで風呂に行った。

「あれ？ローズは？」

ローズもいつの間にかいなくなっていた。

風呂場。

「ふう・・・」

ウィリアが一人で湯舟に浸かっていた。

「ギザミちゃんに会って・・・性格が豹変していて・・・ああもう、
恥ずかしいよぉー！／＼／＼」

今日のことを思い返していた。

脱衣所では・・・

「うふふふふ・・・。ハニーの身体をみるチャンスですよ・・・！
では、失礼します・・・」

ローズがウィリアに近づこうとしていた。

そして・・・

プニツ。

「ふあっ!?!?／／／」

ウィリアの胸を触った……というか、揉んだ……いや、触った？

「うへへ……相変わらずですわね。ハニーは小さくないとハニーじゃないですの。」

プニプニペタペタムニムニ……

「ふあっ、ちょ、やめっ、ふやん!ギザミちゃ……あんっ!／／／」

・ローズのウィリア弄り（と言う名の変態行為）がしばらく続いて……

ガン!

「あぐっ・・・」

クリームがローズの頭をフライパンで叩いた。

「変なことするなっす。声がだいぶ聞こえたっすよ・・・。ウイリア、大丈夫っすか？」

「うええーん、スバルにもこんなことされてないのにいー・・・」
／＼

タオルで胸を隠し、顔を赤くしたウイリアが半泣きで言った。

寝る前も。

「す、スバル・・・お願いがあるんだけど・・・」
「ん？なんだ？」

ウイリアがスバルに頼み事を。

「今日・・・一緒に・・・眠って・・・くれない・・・？」
「き、今日!？」
「だめ・・・？」

上目遣いで聞くウィリア。

「上目遣いは止めろ・・・わかったから・・・」
「ありがと・・・」

そしてウィリアがスバルの部屋に入ってから。

「ハニー!一緒に寝よう!」ローズがウィリアを探し回っていた。

報酬。

入手

ゲネポスの牙×2

鎌蟹の甲殻×1

クエストクリア

鎌蟹の甲殻×3

その他

ローズ。

ウィリアがローズの被害者に。

スバル、ローズに豚野郎判定！？

第22話 スバル復活、狂いし鎌蟹との出会い（後書き）

今回は神威 銀時さんの案に改悪を施しました（ただ弄ったわけではないです。より酷くしました）。

ローズはもともとは『とある科学の超電磁砲』の「白井黒子」がベースだったのですが、そこに『バカとテストと召喚獣』の「清水美春」を混ぜた感じにしました。
どうでしょうか？

ローズの詳細データはまた次に。

では、また次回お会いしましょう。

第23話

アイリス、ついに昇格!?

その1 (前書き)

23話です!

タイトルには「昇格!？」とありますが・・・

では、どうぞ!

第23話

アイリス、ついに昇格!?

その1

「うつ・・・くっ・・・」

スバルはくぐもった声を出して起き・・・ようとした。

「起きねえ・・・」

なぜこうなったか。

話は昨日の夜にまで遡る。

昨日・・・

ウィリアと一緒に寝てほしいとスバルに頼んだ時、その現場をシロ
ンが見たのである。

シタアン!

「皆!ウィリアが・・・ウィリアがスバルと一緒に寝たいって言っ
てたわよ!」

ガタッ！

「ウ、ウィリアに取られちゃう！」

「そ、それだけは阻止しませんと！」

そうしてスバルの部屋に五人が集まり、寝たというわけだ。

「・・・まだウィリアの位置は問題無い・・・。幼いから軽いし起こさずにどかせる・・・。だが・・・」

スバルの体には今、胴にはナコルとシロンが両側から抱き着いており、右腕はアイリスが自らに押し付けるかのように抱き着いていた。ウィリアはシロンの胸を枕にするかのように寝ていて、服を握っていた。

ちなみにその頃リビングでは・・・

「放しなさいな、この凶暴フライパン女！」

「あんたの方がよっぽど凶暴っすよ、この変態！こっちは一度だけ

は手を出したっすけどアンタは六度くらい手を出してたっす！そっちの方がひどいっす！」

「冗談は止めてほしいですよ！フライパンで叩かれた方が痛いんですのよ！」

「爪で引っ搔かれた方が痛いっす！傷が残ったらどうしてくれるっすか！？」

「知りませんわ、そんなこと！ああ、ハニー！私はあなたがとても心配ですの〜！」

クリムとローズが言い争いをしていた。

ローズは縄で縛られていたが。

スバルが四苦八苦していた頃。

「うーん・・・」

アイリス！目を覚ましたか！？

アイリスが声をあげた。

「スバルう〜・・・私をお〜・・・好きにしていいいよお〜・・・むにやむにや・・・」

「なんつー寝言だ・・・」

一歩間違えれば大変な発言をするアイリス。スバルはこの発言を普通にスルーした。

アイリスがさらに体を押し付けたのには気づいていない。

「んう・・・スバル・・・？」

「シロン・・・？」

シロンが目を覚ました・・・

「スバルく♪」

ギュムツ！

「うおお！？」

わけがなかった。

寝ぼけたシロンがスバルに抱き着きなおした。

かなり甘えた声で。

「し、シロン・・・」

「ねえ、スバルう、私といろんなことしよ？」

「ま、待て！いろんなことってなんだ！」

「いろんなことってえ、いろんなことだよお」

「わかんないから！」

「んにゅ」

「んぐっ！」

あ、アイリス並に酷い・・・

かなり寝ぼけているようで。

「ん・・・」

そしてナコルが目を覚ました。

「お、おはようござい・・・」

「・・・ナコル？」

ナコルは目の前の光景を見て固まった。

現状・・・シロンがスバルを押し倒し、スバルの上に覆いかぶさるように乗っかっている状態。

ナコルの手は払いのけられている。

「なにをそんな羨ましいことをしているのですか・・・？」

「これが羨ましいことに見えるか!？」

「見えます!」

「ナコル・・・お前が一番マシだと思っていたのに・・・」

「ナコルうゝ、ダメだよおゝ? スバルはあゝ、私のものなんだからあゝ♪」

「ちっ、違いますよ! 私のものです!」

「あのさ、俺は誰のものでもないから・・・」

「んっ・・・」

ウィリアが声を漏らした。

「みんな・・・おはよお・・・」

ウィリアは今起きて騒動を起こしている三人に挨拶した。

「あの・・・みんな、ごめんね・・・? 昨日もしあのまま眠っちゃったらギザミちゃんに大変なことされるかもしれない・・・。昨日お風呂入っていたとき出しちゃった変な声を出しちゃうかなって思っ
て・・・／／／」

昨日のことを思い出し、顔を赤くするウィリア。

「昨日って・・・なにかあったんですか?」

「あの・・・その・・・ねを・・・ちゃったの・・・／／／」

「えと・・・もう一度お願いします・・・」

理由を言うも、小さい声で話して閉まったため、ナコルに聞き返されたウィリア。

「だから・・・その・・・ギザミちゃんに・・・む、胸を揉まれちゃったの・・・／＼／＼」

「あゝ・・・。昨日のフライパンのような音はそれだったんですね・・・」

恥ずかしがるように言った。恥ずかしいのはよくわかる。

「初めて揉んだのがギザミちゃんなんて・・・。スバルに最初に揉んで欲しかったのに・・・」

「なにか言いました？」

「スバルう・・・あたし・・・もうお嫁に行けないよお・・・ぐす。」

「えっ、無視!？」

「そんな言葉、どこで覚えた・・・？」

ウィリアはさらっと爆弾発言をし、スバルに泣きついた。
ナコルの声は無視して。

「つか、なんて弁明すれば・・・」

「さ、さあ……。私に振らないでくださいよ……」
「スバル！今すぐあたしの胸を「言うなああああ！」……どうして……？」

ウィリアの言葉を遮るようにスバルは叫んだ。
叫ぶ理由が分からないウィリアには？がついていた。

「それをやったとする。それでウィリアが変な声出したら俺はどうなると思う？」

「ローズに……。間違いなく殺されますね……」

「いいもん、見つかったら「スバルが死んだらあたしも死ぬ」って言うから！……。だから……。お願い……。好きにしても……。いいよ……。／＼／＼」

「ウィリア！ダメだってば！くそっ、動けない！」

拒否をするスバル。だが、体は動かせない。そして、徐々に迫ってくるウィリア。

万事……。休す……。か？

そのとき。

「スバル、アイリスちゃんにHR昇格話が来たぞ。」

アルがスバルを尋ねてきた。目的はアイリスのH R昇格話だ。

「待ってろ、すぐ行く!」

スバルはどうかアイリスを外し、シロンも退け、玄関に走って行った。

「どうして今来るの・・・?」

「(ほっ・・・)」

ウィリアはアルの来訪に落ち込み、ナコルはほっとしていた。

「・・・で、アイリスの昇格?」

「ああ。アイリスちゃんの試験はディアブロスだよ。」

「ディアブロスか・・・俺も参加するかな・・・」

スバルはアイリスの試験クエストに参加するか迷った。

「ところでスバル・・・」

「なんだよ、急に？クエストの話か？」

「お前の家に今何人の女の子がいるんだよ！？羨ましいじゃねーか！」

「知るか！俺だってなんでこうなったかわかんねーんだよ！」

「お前だけ羨ましいんだよ！この裏切り者！」

「お前はその癖があるから彼女が出来ねーんだ！」

外で言い争いを始める二人。

「スバル・・・なにしてるの・・・？ご飯できたよ・・・？」

ウィリアが家から出てきた。

「スーバールー！？なんなんだこの少女は！？どこから誘拐してきたのか！？」

「アホか！そんなことするか！」

「き・・・気持ち悪いよお・・・」

ウィリアは嫌色を示した。

「俺と付き合ってー！」

「いっ、いやああああああっ！」

迫るアル（という名の変態）。
逃げるウィリア。

「いっぺん死んどけ！」

ゴン！

「ぐおおおいいいよおおおお！」

ドスン！ズダン！ズシャアアアア・・・

ばた。

スバルはアルの顔を思いつ切り殴った。

アルは謎の言葉とともに飛んでいった。

そして、倒れた。

「あ、あんなことして大丈夫なの・・・？人殺ししてほしくないよ・・・」

「大丈夫だ。生きてるから。家へ帰ろう、アイリスに昇格クエスト
発令報告しないとな。」

「えっ！？アイリスの昇格できるの！？」

「ああ。俺達で助けてやろうな！」

「うん！」

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第23話

アイリス、ついに昇格!?

その1 (後書き)

今回、アイリスがついに昇格できるという報告が出ました!

アイリスが昇格できるのか、どうなってしまうのか。

楽しみに!

「お、俺の出番はこれだけなのか!？」

はい。

「いやだああああ!！」

第24話 アイリス、ついに昇格!?

その2 (前書き)

24話、アイリス昇格編その2です!

ちょっと脱線している気がしますが・・・

では、どうぞ!

第24話

アイリス、ついに昇格!?

その2

リビング。

「私が昇格!？」

昇格クエスト発令の話を聞いたアイリスが驚いて叫んだ。

「ああ。さっき聞いたが、多分俺達も協力できる。」

「よかったじゃないですか!」

「あたしも協力するね!」

「アイリスのために頑張るわよ!」

「みんな・・・、ありがとう・・・。」

全員の協力に涙ぐむアイリス。

「泣くな泣くな。クリアしてからだろ?」

「うん・・・そうだね。よし! みんな、よろしくね!」

「任せてください!」

「足を引っ張るかもしれないけど・・・頑張る!」

「任せなさい! 昇格、絶対にしないと!」

みんなが思い思いの言葉を言う。

そんな中、スバルが一人思案にふけていた。

このクエスト、無事に済めばいいが・・・。

（あくまでも可能性を考えていた）

「スバル？ スバル？」

「・・・」

アイリスがスバルを呼ぶ。
スバルは気付いていない。

「・・・えいつ。」

むにつ。

「なっ！」

アイリスはスバルの手を自らの胸に押し付けた。

その光景を見た三人は固まってしまう。

「・・・」
「・・・」

反応無し。

むにむにむにむに・・・

「・・・」

ついには自分の手で自分の胸を揉ませ始めるアイリス。

「・・・（今回のディアブロ、前に俺が威圧したヤツなら絶対俺を狙ってくる。なら・・・）」

スバルは全然気づかない。

「ううゝ・・・」

そのことにむくれるアイリス。

「ちょ、ちょっとアイリス！なにしてるのよ！？」
「そ、そうですよ！なにしてるんですか！？」

「だって気付いてくれないんだよ？いつものスバルだったらすぐに反応してるから！」

「だからって胸を揉ませるのはずるいよお……。あたしには胸ないのにい……。ペツタンコなのにい……。」

我に返った三人はアイリスに抗議し、さらにウィリアはアイリスと自分との胸の差に嘆いていた。

クリムとローズはというと……

「いい加減黙れっす、この万年欲情ギザミ！」

「そっちが黙れば済むんですの、この暴力フライパン女！」

まだ言い争っていた。

「……。よし、準備だ。ディアブロならば黒刀でも倒せる。下級ならなおさらだ。……ってアイリス、なにをしている？」

ついにスバルがアイリスに気がついた。

「だって呼んでも胸を触らせても無理矢理揉ましても全然気付いてくれないだもん！だから前から抱き着いていたの！」

「なぜそんなことをした……。ナコルもウィリアもシロンも離れてくれないか……。？」

『いや（です／なの）！』

最近……。というか、昨日から彼女達が甘えるようになったな……。

なぜだ？

スバルに甘える理由が、単に甘えたいからだと思い込み、それぞれがスバルのことが好きだから、ということをおぼえていないスバルであった。

「あのな……。一体俺にどうしろと言いたいんだ？」

「えっ、そっ、それは……。／／／／」

「あの……。えっと……。／／／／」

「……。なぜ顔を赤くする？」

スバルが疑問に思ったことを聞いた途端、四人が一斉に顔を赤くした。

「とにかく、これはもう終いだ（バン！）！ほら、クエストに行く

ぞ！」

「はい・・・」

スバルは机を叩いてクエストに行くのを促した。

もうちょっと抱き着いていたかった。

もうちょっと甘えたかった。

独り占めしたかった。

そんなことが（なぜか）心残りとなった四人であった。

集会場。

「昇格クエストは・・・あった！これ、受注します！」

「昇格クエストですね。では皆さん、頑張ってきてください。」

『はいっ！』

「さて、準備でも・・・？なんだこりゃ？一週間クエスト？なあ、なんだこの一週間クエストって？」

「それは、一週間あればクリア可能であろうクエストです。」

「あろうって……。その中になぜにイヤンガルルガがある……？」

スバルは、イヤンガルルガが討伐相手となったクエストが妙に気になった。

「受注されます？」

「いや、今から別のクエストに行くから後で。」

「わかりました。では、お気をつけて……」

五人は集会場を後にした。

クエスト

「隻角故に持つ誇り」

開始。

「うゝ．．あづいよゝ．．．」

「また砂漠でクエストなの．．？」

開始早々、アイリスとシロンがぐだぐだになった。

「千里眼の葉を飲んで．．．今3にいるよ。」

ウィリアがディアブロの位置を確認する。

「（グヒグヒグビィッ！）．．．ぷはっ！」

アイリスはクーラードリンクを一气飲みした。

その時の姿はまるで親父そのものだった。

「アイリスー、親父くさいぞ、その行動・・・」

「ふえ？そう？」

「ウィリアを見てみる。」

アイリスはウィリアを見た。

「(こく・・・こく・・・こく・・・)」

少しずつ飲んでいた。

「とりあえず行きましょ。そうでもしないと話にならないわ。」

「そうだな、行くか。」

ディアブロがいるであろう3に向かった。

「3に着いた・・・いた！」

「まずは様子を見て・・・」

ギアノスの時よりは成長したアイリス。

いきなり突撃する、なんてことはしなかった。

「まずは俺が一人で攻撃してみる。」

「えっ……す、スバル……気をつけて……」

「皆で無事に帰れるように……」

スバルの単騎突撃の声に、心配する四人。

「無理しないで……。今度は私が守るから……。だから、だから……」

涙目になっても、言葉が出てこなくても、シロンはスバルに話していた。

シロンは過去、自分の行為でスバルに重傷を負わせてしまった。

それゆえに誰よりも心配していた。

「大丈夫だ、今回は武器がある。あの時みたいなことはないさ。」

スバルはディアブロスに向かって行った。

「さあ……戦いの始まりだ……！」

スバルはディアブロスの真正面に立った。

ディアブロスは当然気づくが、それに突撃しようとせずただ立っていた。

「自分から攻めてこないとは……。立派なヤツなのかこちらを格下に見てるのか……。」

ディアブロスはただスバルだけを見続けた。

「ならば……。こちらから仕掛けさせてもらうぞ！ はああっ！」

スバルが先に攻撃を仕掛けた。

。。。

ガキン！

「くっ、角に止められたか……。」

スバルが振り下ろした剣は、ディアブロスが上手く頭を振り下ろして角で弾いてしまった。

「こっちも色々と事情があるんで・・・ねっ！」

ガン！キン！

S i d e 娘たち

「あのディアブロス・・・変だよね・・・」
「どこが変なの？」

「さっきからあのディアブロス、防いでばかりで攻撃していないですわね・・・」「ほへ？そうなの？」
「分からなかったの？」

ウィリアが異変に気付く。
アイリスは全く気付いていないため、ナコルが説明し、シロンは呆れていた。

「なにかが変だよ・・・」

ウィリアは心配していた。

S i d e e n d

・・・そろそろ頃合いか・・・

「・・・お前の戦い方を見ると、お前が己の騎士道を貫く戦いをしたいと思っているように見えるな・・・。すまないが、その騎士道の為の戦いはこれ以上は無理だ！ふっ！」

スバルは退くために地面に目眩ましの閃光玉を叩きつけた。

その閃光玉は通常のものよりも激しい光を放った。

T o b e C o n t i n u e d ・・・

第24話 アイリス、ついに昇格!?

その2 (後書き)

今回、擬人の兆候があります!

前、「雄のモンスターがないのでは?」と疑問を持たれましたので、予め宣言します!

雄です!

次回をお楽しみに!

(名前は決まっています!)

第25話 アイリス、ついに昇格!?

その3 (前書き)

25話です!

傘盗難事件から復活しました!

アイリス昇格編、終結です!

たった3話ですが・・・

では、どうぞ!

第25話

アイリス、ついに昇格!?

その3

スバルが叩きつけた閃光玉から発した光。

それはあまりにも激しいものだった。

「くっ！俺が動けないと・・・意味がない・・・！」

動けないのはスバルだけでなかった。

「きゃっ！」

「ま、前が・・・！」

「なにも・・・見えません・・・」

いつものことだ。

「くっ、そんな小細工を用いるとは・・・」
「男の声!？」

いつもならば、悲鳴或いはなにがしらの声が聞こえるが、共通していたのは女の子の声がしたことだ。

だが今回は違う。男の声がしたのだ。

光がはれた。

「・・・さあ、どうすればいいんだこれは？」

「一体なにを言っている？」

光がはれて、スバルの目の前にいたのは、黒髪の男・・・だった。

（一応、服は着ていた）

「俺は貴方に一对一を申し込んだ筈。こんな小細工を用い逃げようとするとは・・・」

「あ、いや、逃げるといわけじゃなくて本来の受注者と代わる予定だったのだが・・・」

スバルはディアブロスの発言に少し引く。

「ならばその方と代わってもらおう。その方の強さが知りたい。」

「なら、代わろう。おい、アイリスー！」

スバルはアイリスを呼んだ。

Side 娘たち

<おい、アイリスー！>

「わ、私？」

「なんでアイリスが？」

「わ、わかんないよぉー！」

「とりあえず行ってきたら？」

「う、うん・・・」

アイリスは一人、スバルとディアブロスのいる所へ行った。

「でもなぜアイリスだけ？」

「ま、まさか・・・スバル、アイリスが好きになっちゃったとか！

？そ、それはダメだよぉー！スバルは、スバルはぁー！」

「う、ウィリア、今スバルは戦ってるんだからさすがにそれはない
んじゃ・・・」

ウィリアはなにかの妄想を始めてしまい、シロンがそれにツツコミ
を入れた。

S i d e e n d

「どうしたの、スバル？」

「彼と闘ってほしいんだけど。」

「えっ……」

アイリスはスバルの話に嫌そうな顔をした。

「わ、私が！？やだよ！勝てないもん！死にたくないよ！」

「殺さないよう考慮するが……」

「でもお……」

アイリスは激しく拒否をした。

ディアブロスが殺さないことを誓うが。

「ヤダ！ぜったいにヤダ！私じゃ負けちゃうもん！」

アイリスはわがままを言った。

「・・・スマン、こんなわがままで・・・」

「先程貴方の後ろから声が聞こえたのだが・・・貴方の仲間なのか・・・？」

「・・・家族みたいなものだ・・・」

「苦勞しているのだな・・・。その苦勞、同情する・・・」

「・・・分かってくれると嬉しい・・・」

ディアブ羅斯はスバルの苦勞を分かっただけで、スバルに同情した。

スバルはディアブ羅斯の優しさに涙を流した。

「卑怯な手を使うだけかと思ったが、色々と考えていたのだな・・・。俺が人の姿になったのも、彼女の為の犠牲・・・というわけか・・・」

「まあ、そんなところだ・・・」

「・・・貴方の名前を聞かせてもらいたいのだが・・・」

「え？」

スバルはディアブ羅斯の発言に驚いた。

「貴方の苦勞、少しでも救済できれば、と思ってな。」

「そうか・・・。俺はスバルだ。」

「俺はカクサスという名だ。」

「よろしくな。」

「こちらこそ、よろしく頼む。」

スバルの苦勞(?)に同情したディアブロスのカクサスが一緒に暮らすことになった。

「それはさておき、俺は彼女の実力を見てみたいのだが・・・」
「はうっ!・・・うやむやにできると思ったのに・・・」
「ないから。諦めて闘え。大丈夫、死にはしないだろうから。」
「だろうつてなに!?!? ヤダ! まだ死にたくないよ!」

駄々をこね続け、ついにはうずくまるアイリスに呆れはじめたカクサス。

「・・・闘う気が失せるな・・・」

「本当に申し訳ない・・・。ところで、なにか証拠として残せる物ってないか?」

「物?」

「ああ。クエストをクリアした、という証が欲しいからな。」

「それなら、折れた角がまだ残っている。それを持っていくといい。」

「

「何から何まですまないな・・・。」

「構わないさ。苦勞を分かち合う、と決めたからな。」

「なら、帰るか!」

スバルは怖くてうずくまったアイリス、隠れている三人に声をかけた。

「ホント！？闘わなくていいの！？」

「まあ、闘う必要はなくなったな。」

「スバルうゝ！！」

ガバツ！

「おわっ！？」

ドサツ！

アイリスがいきなりスバルに抱き着いた。

「ごふっ・・・ちょ、アイ・・・」

「うっ・・・ううっ・・・」

スバルはアイリスを退かそうとして、止めた。

スバルに抱き着いたアイリスは震えていたのだった。

「・・・すまなかった。ただのわがままだと思っていたんだ。本当に怖がっていたとは知らずに・・・」

アイリスはスバルの言葉を聞いても、震えていた。

「仕方ないな……。よっと……」

スバルは、恐怖で震えるアイリスを抱き抱えて三人の方へ行った。

アイリスは、スバルが抱き抱えたのを本能的に悟ったらしく、震えが止まった。

「スバル！」

「あの、この人は……？」

「俺が自己紹介しよう。俺はカクサス。以後、よろしく頼む。」

「あ、はい、よろしく願います……」

自然に言葉を返したナコル。

「アイリスは……あら、寝ちゃったのね。この状況は羨ましいけど、なにも言えないわね……」

「すう……。すう……」

アイリスは、服にしがみついて、まるで子供のように眠っていた。

「じゃ、帰るか。証も確保したし。」

六人は帰りはじめた。

集会所。

シロンはカクサスを家に連れていく為に別行動をとった。

「ごめんね、みんな・・・」

「いいんだ、怖いのは当たり前だから。女の子なら尚更だ。」

「謝ることはないですよ。私でもきつとこうなってますから・・・」

「あたしも・・・。怖いもん・・・」

「ごめん・・・ね・・・ぐすっ・・・」

皆の優しさに感極まったアイリスはまた泣いてしまった。

「ほら・・・泣かないで・・・。クエスト報告しよ？」

「うん・・・ひっく・・・」

ナコル・ウィリアに連れられて、アイリスは報告に向かった。

「無事に済んでよかったな・・・」

スバルはクエストになにもなくてほっとしていた。

報酬。

入手

ゲネポスの牙×5

クエストクリア

角龍の角×1

その他

カクサス。

アイリス、昇格、HR3に。
アイリス・スバルの絆UP。
スバル・カクサスとの間に強固な絆完成。

第25話

アイリス、ついに昇格!?

その3 (後書き)

今回はカクサスの紹介です。

名…カクサス

性別…男

見た目年齢…18

備考…短髪、黒髪。

言い方が少し古めかしい。

(台詞に漢字が多いのもそれゆえに)

スバルに会うまでは自分の強さを磨くため旅をしていた。

「正々堂々と戦い貫く」という騎士道精神を持つ。

以上です。

次回から新編開始です!

どんな話かはお楽しみに!

第26話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

新章、一週間クエスト編です！

今回からはスバルとウィリアの二人がメインですが、残った皆にも
スポットを当てます！

では、どうぞ！

第26話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

「・・・っ！」

ガバツ！

スバルは飛び起きた。

「・・・よし、誰も目を覚ましてないな・・・。行くか・・・」

スバルは着替えを済ませ、ただ一人自宅を出た。

それは空が白くなり始めた頃だった。

朝。

S i d e ウィリア

「ん・・・」

最初に目を覚ましたのはウィリアだった。

「・・・？」

なんだろう、違和感を感じる・・・

ウィリアは眠たさを堪え、目を擦りながら部屋から出て歩きはじめた。

「・・・？誰かがいない気がする・・・」

ウィリアはスバルの部屋の前に来た。

「スバル・・・入るよ？」

ウィリアはスバルの許可をとろうとした。

「・・・」

返事がない・・・？

だが、部屋から物音はなかった。

「じゃ、じゃあ・・・／＼／＼」

勝手に入るため、顔が赤くなるウィリア。

部屋には誰もいなかった。

「あれ・・・？いつもならいたのに・・・」

他のところにいるのかな・・・？

うん、探そう。ギザミちゃんに見つからないように・・・

ウィリアはスバルの部屋を出て、スバルを探した。

数分後。

「スバルう・・・ぐすつ・・・」

探しても見つからないスバル。ウィリアは泣きかけた。

「おや、どうしたのニャ？」

「ノブう・・・。スバルが・・・スバルがあ・・・」

いつの間にかノブがいた。

ウィリアはスバルがいないことを話した。

「ご主人が？オイラも今日は見てないニャ。いなくならないといけない理由があったんだニャ。」

「っ！」

突然ウィリアは走りはじめた。

「ウィリア！・・・ふう。「恋は盲目」というニャけど、ホントのことに見えてきたニャ・・・。スバルのことになると他のことが見えていないような気がするニャ・・・」

ウィリアは自分の部屋で着替えを済ませ、集会所へと向かっていた。

ダメ、行っちゃダメ・・・！

あたしも、あたしも行きたいよお・・・！

集会所に着いた瞬間、クエストに行こうとするスバルを見つけて、ウィリアは叫んだ。

「スバル！」

そして、走りはじめた。

S i d e e n d

<スバル！>

突如聞こえたウィリアの声に驚いて声がした方に振り向くスバル。

その先には、スバルの方へ走り出していたウィリアがいた。

「ウィリア!？」

ぽすっ。

「いきなり・・・いきなりいなくなるなんて嫌だよ・・・ぐすつ・・・」

「いきなりつつつてもなあ・・・書き置きしたはずなんだが・・・」
「ふええええええ・・・」

ウィリアはスバルが見つかったことに安心して泣き出してしまった。

「・・・すまん、今さっき受けた一週間クエスト、受注人数の変更できるか？」

「ええ、可能ですよ。可愛い妹さんですね、こんなに心配してくれて。」

「ええ、まあ。妹・・・のようなものだ。・・・ウィリア、行くか。」

「うん・・・!」

こうして二人は一週間クエストに向かった。

Side
スバル宅

「スバルがあああああ!!」

朝、アイリスが叫んだ。

「どうしたの、アイリス!？」

「スバルが・・・一人でクエストにい・・・」

「スバル・・・」

シロンはスバルを心配していた。

「ウィリアもいません!」

ナコルも合流した。

「まさか・・・」

「先を越された!？」

「ハニーが豚野郎と!？」

ギロツ!

「す、すみませんの・・・」

ローズがスバルを豚野郎（大失言）と言った瞬間、ローズは睨みつけられ、黙り込んだ。

「一体何があった？」

カクサスが起きてきた。

「カクサス……。スバルがいないの……」

「……。書き置き……。だな。「一週間は帰らない。その間はカクサスを中心にやっていってくれ」……。か。スバル、居ない間は俺が皆の面倒を見るぞ……」

「ふんっ！こんな豚野郎に私たちの面倒（ガン！）がふう！」

ローズがいつものように失言をした瞬間、金属物で殴られた。

「バカなこと言うんじゃないっす！」

殴ったのはクリムだった。

「こ、この暴力フライパン女！また殴ったんですの！」

「誰彼構わず男の人を豚野郎と呼ぶのはよくないっす！」

クリムとローズが口論を始めてしまった。

「・・・二人とも頭を冷やしたいか？」

『ご、ごめんなさいっ！』

カクサスが威圧を込めた勧告をしたので、謝罪をする二人。

息ピッタリで答えたので仲が良いように見えた。

「カクサス・・・すごい・・・」

「一回で口論を止めた・・・」

「私でもそんなことは出来ませんよ・・・？」

素直な感想が出た。

「スバル・・・ウィリア・・・。無事に帰ってこい・・・。」

カクサスは二人の無事を祈りつつ、空を見上げた。

「か、カクサス・・・」

「あ、ああ、すまない。さあ、俺達もクエストに行くか？特にアイ

リス、貴女はもっと精進すべきだと俺は思うのだが・・・」
「はうあ！」

真実を突かれ、アイリスは悲鳴をあげた。

「スバルが帰ってきた時に変わっていたら驚くと思うが・・・」
「行こう、カクサス！まずは私に訓練お願い！」

アイリスはカクサスがスバルのことを話した瞬間、突然やる気になった。

「ああ。二人はどうだ？」
『私もお願い（します）！』

二人同時に訓練を頼んだ。

「・・・時間は？」
『今から！』

「よし、三人同時にかかってこい！」
『（ええ／はい）！』

「（スバル・・・三人の成長に驚くと・・・いい。一週間、ゆっくり戦ってこい。）」

カクサスはスバルに心の中で面倒を見ること、三人を強くすることを誓った。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
・
・
・

第26話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

今回の二人のクエスト、次回ターゲットを明らかにします！

ただ、擬人化はありませんよ？

このことは断言します・・・

では、また次回お会いしましょう・・・

第27話

スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

27話です！

今回はちょっと微妙な感じになった気が・・・

では、どうぞ！

第27話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

「さて、今回のターゲットはバサルモスカ……」

「バサルモスって、確か岩の龍だったよね？……あたしには不利だよ……」

「正確には岩で身体を覆った、な。」

ウィリアは自分の武器が弓矢だから、バサルモス相手には不利ではないかと思う。

スバルはウィリアのちよつとした間違いを修正した。

「俺には一応心眼スキルがついてるが……ウィリアは……よし、不利じゃないぞ？」

「ホント……？（うるうる）」

「ホントだから涙目になるな！武器を確認したら貫通ビン使用可能、タメで貫通だ！」

きゅっ。

「う、ウィリア？」

ウィリアはスバルの服を握った。

「スバルと……二人で戦えるんだ……」

「ウィリア・・・？」

「だって、今までずっと一緒に戦えなかったんだもん……。スバルがケガしたり、意地張っちゃったりして……」

「い、痛いところ突くなぁ……」

スバルはウィリアが言ったことに苦笑いするしかなかった。

「でも、一緒に戦えるなら少しはスバルを手助けできると思っ
て……」

「……なるほどな。ありがとう、ウィリア。」

スバルはウィリアの頭を撫でた。

「ふにゅ……。えへ……。」

ウィリアはウィリアで気持ち良さそうだった。

「さてと。多分今日は野宿……。だな。」

「ふえええ！？」

「どうした、ウィリア？」

「え、きよ、今日野宿なんだよね……。／＼／＼」

「まあ、さっきも言ったが多分、だ……。なぜ顔を赤くする？」

スバルが指摘したとおり、ウィリアの顔は真っ赤になっていた。

「だって・・・ふ・・・二人っきりなんだよ・・・？い、一緒に眠るんだよ・・・？／＼／＼」

「まあ、そうなるな。（水を飲みはじめた）」

「だ、だったら・・・襲っても襲われても・・・違和感ないんだよ・・・？／＼／」
「ブフウッ！」

ウィリアが爆弾発言をした。

スバルは丁度水を飲んでいたので、水を吹き出してしまった。

「ごほっごほっ！おま・・・！なんてことを言うんだ・・・」

「でも事実だもん・・・。あたしなら襲われてもいいかな・・・」

「事実って・・・。あと、なんか言ったか？」

「う、ううん！？なんでもないよ！？」

「なんか隠したな・・・」

ウィリアの小声の主張はスバルに届かなかった。

「最近ウィリアが変わった気がする・・・。初めて会った時には恥ずかしがり屋だったのに今では普通に妄想娘になっている・・・。
・あれ？これ普通か？」

「スバル？」

「いや、なんでもないぞ、なんでも。俺の独り言だから気にするな。」

「・・・？」

スバルがウィリアのことで少し思ったことを呟いた。

ウィリアがいきなり聞いてきたので独り言だとはぐらかした。

そして、再び歩きはじめた。

バサルモス討伐行軍一日目・夜。

「何事もなく夜になったな……。まあ、それが一番だが。」
「はうあうあうあう……。／＼／＼／」

ウィリアがいきなり顔を赤くしてあうあう言いはじめた。

「う、ウィリア……。？」

「あうう……。／＼／」

ボンツ！

ぱた。

「ウィリアあ！？」

ウィリアはいきなり気を失ってしまった。

「ウィリア！ウィリア！……。ダメだ、気を失ってる。仕方ない、今日はここで野宿だな。」

スバルはすぐにウィリアのために寝袋を出した。

「いきなり気絶したのは驚きだ……。明日は町に着く予定だから

こんなことはないと思うが・・・」

スバルはウィリアのことを考えて、周りの見張りをした。

「ふひいゝ・・・」

「しかし、なぜ急に気絶したんだ・・・？」

ウィリアが気絶した理由が全く分からないスバルであった。

原因は自分なのに・・・

スバル宅。

「あふう・・・」

アイリスが倒れ込んだ。

「うあー・・・もう体が動かないよお・・・」

「私も動けませんよお・・・」

「か、体中が・・・痛い・・・」

ナコル・シロンも倒れ込んだ。

「スバルが置いていったメニューだ、俺もやっていたが、これはかなり辛い・・・」

カクサスも辛そうにしていた。

「みんな、お疲れ様です。お茶ですよ。」

「わーい、お茶だあ・・・」

クリームがお茶を持ってきた。

アイリスはそれを飛びつくかのように取った。

「ふう・・・。程よい冷たさですね・・・」

「ふいー・・・」

「ところでクリーム、ローズは？」

シロンがローズのことをクリームに聞いた。

「ああ。あれなら地下に亀甲縛りした上に柱に括りつけてきたっす。」

「で、その傷は？」

「縛るときに引っ搔かれたっす。」

「そ、そうなの・・・」

シロンは苦笑いするしかなかった。

その頃の地下。

「このー！解きやがれですのー！暴力フライパン女ー！へんたーい！」

クリームに柱に括り付けられたローズが叫んでいた。

「誰かー！解い・・・あふっ・・・ああ、なんでか知らないけどどんどん気持ち良くなっていきますの・・・」

また一段とおかしくなったローズであった。

所戻して。

「あゝ、今日お風呂が気持ちいいんだろぅなあゝ・・・」

「もう今日はお風呂入って寝ましょ？」

「そうしましょ・・・」

三人の意見が合う。

「俺はもう少しやってみる。」

「頑張れ・・・」

カクサスはもう少しやっていくことにした。

風呂へ向かう途中・・・

ピキッ。

「痛っ！痛い痛い！足が、足があゝ！」

「あ、アイリス！？」

「大丈夫ですか！？」

「ふくらはぎが痛い！痛たたた！だ、誰か助けてえゝ！」

「こむら返り・・・でしたか？それを起こしたみたいですね・・・」

「冷静にそんなこと言わずにまずは治しましょ・・・といっても、
どうしよう・・・」

「痛いよおゝ！」

夜空にアイリスの悲鳴が響いた・・・

T o b e c o n t i n u e d . . .

第27話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

今回はアイリスに悲劇（？）が。

スバルの訓練は通常の（くぁwせdrftgyふじこlp）ですからね。

（くぁwせ・・・はちよつと伏せたくて・・・。何が言いたいかは察してください！）

次回はまだまだアイリスに悲劇が、そしてローズが・・・
スバルとウィリアは町に無事着くのか！？

全ては次回をお楽しみに！

第28話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

お待たせしました、28話です！

今回、ウィリアが・・・ゲフンゲフン！

内容はお楽しみに！

では、どうぞ！

第28話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

朝。

スバル宅。

「おふぁようございましゅ・・・」

寝ぼけ声で挨拶したのはナコルだ。

「ふぁ・・・。あ、いけませんね、人前で欠伸なんて。」

「おはよし、ナコル。」

「あ、シロン。おはようございます。」

シロンも起床。

「んっ・・・。今日はよく眠れたわね・・・」

シロンが大きく身体を伸ばした。

「確かに、昨日はよく眠れましたね。今日も一日、頑張っていきたいと思います！」

「ええ！そしてスバルを驚かせてあげるわ！」

二人は気合いを入れた。

数分後。

「アイリス、来ないわね・・・」

「な、なにかあったんでしょうか・・・」

「とりあえず、行ってみましょ？」

二人はアイリスの部屋に向かった。

アイリス部屋前。

『ぐすっ・・・ぐすっ・・・』

「な、泣き声!？」

「アイリス、入るわよ!」

シロンがアイリスを見た瞬間、動きを止めた。

「シロン、ナコルう・・・」

アイリスは首だけを二人に向けた。

それだけでも動きがぎこちない。

「ど、どうしたのアイリス!？」

「か・・・身体が痛い・・・」

「身体・・・?まさか襲われたとか・・・」

「いえ、襲われたということはないですね。多分、筋肉痛かと。」

「ああ、なるほど・・・」

「何があった?」

そう話しているとカクサスがアイリスの部屋に来た。

「カクサス、アイリスが・・・」

ナコル、状況説明中。

「・・・というわけなんです。」

「間違いなく筋肉痛だな。今日はアイリスは休んだ方がいいな。」

「あうう・・・」

そんなこんなでアイリスは訓練を休むことになった。

その直後。

ダンッ！ダンッ！

「な、何の音!？」

「リビングからしますよ!？」

「まずは見てみた方がいいな。いくぞ!」

カクサスを先頭に、リビングへ向かった。

リビングにいたのは・・・

ダンッ！ダンッ！

「ああっ！ハニーツ！あんな豚野郎と一晩一緒に過ごしたなんてえゝ！だめっ！そんなことはダメですのおゝ！ダメなんですのおおおとおおおとおおおおお！」

ひたすら机に頭を打ち続け、凄い意味不明なことを叫んでるローズがいた。

「あ、あれって・・・」

「放置しといた方がいいっす。」

そしてローズを放置し続けていたクリームがいた。

スバル達はまだ歩きだしていなかった。

それもそのはず、ウィリアがまだ起きていなかったのだ。

「抱いて行ったとしても後々面倒だしな・・・」

スバルはひたすらウィリアが起きるのを待っていた。

数分後。

「う・・・」

「お、起きたか。」

「ふにゃああああああ!？」

起床直後、ウィリアが叫んだ。

「う、ウィリア・・・何がどうしたっていうんだ・・・」

「な、なんでもないよ・・・。そ、それより・・・」

「ん？」

ウィリアはスバルの顔をじっと見ている。

「なにか・・・しちゃった・・・？」
「・・・は？」

ウィリアが言ったことに理解ができないスバル。

「だから・・・、・・・や、・・・を・・・／／／」
「？なんだ？」

「だっ、だから、（おいおい）とか（それはまずいぜ）を」
「ストロップ！禁止！禁止！言っちゃダメだ！」

ウィリアの爆弾発言連呼に待ったをかけるスバル。

（止めてもらえたから嬉しい。とはいっても伏せますよ B V作者）

「なんで・・・？」
「ダメなものはダメなんだ！ウィリア、熱でも出たか！？」
「ふにゃっ!？」

スバルはウィリアが熱を出したと思ってウィリアの額に額を当てた。

スバルが額を当てたため、ウィリアは素っ頓狂な声を出した。

「あ・・・、あ・・・、あ・・・」

ウィリアは顔を真っ赤に染めてしまった。

「ちょっと熱い気がするが・・・大丈夫だろうな・・・」

「・・・はふう・・・」

「ウィリア！？・・・また、気を失った・・・仕方ない、俺が運ぶしかないみたいだな・・・」

スバルはウィリアをおぶって歩き始めた。

「しかし、昨日といい今日といいなぜウィリアは気絶するんだろうか？」

相変わらずの朴念仁っぷりを披露し続けるスバルだった。

数時間後、二人は町に着いた。

「さて、宿は・・・お、安い。ここにするか。」

値段が安いという理由で決定した。

「内装は普通、兄妹と思われる……。これで彼女とか言われたら泣くな、俺……」

兄妹と言われ、ほっとしたスバル。

「さて、ウィリアが熱を出した気がするから体温計を手に入れたが・
・男が女の子の脇に手をつ突っ込むとかどうなんだ・・？ あああ
ああああ・・・。もういい、従業員に頼もう・・・。」

スバルは従業員に代わりにウィリアの体温を測ってもらうことにした。

「では、お願いします。少し、出ますので……」

「はい。わかりました。では、少しお時間をいただきます。」

スバルは部屋から出た。

「……無理だ。俺が女の子の身体に触れるとか全く想像つかない・
・・。・・しかしウィリアのやつ、どうしたんだ？ いきなり性格
がおかしくなるわ、爆弾発言連発するわ。・・俺のことが好きだ
とか？ ・・ないない。」

ウィリアの体温測定中、様々なことを考えていたスバル。

朴念仁、今だ健在。

「終わりました。」

「どうでした？」

「熱は・・・平熱でした。ただ、何度も譫言のように『スバル・・・スバル・・・』と言ってました。」

「俺の・・・名を？」

「今は眠っておりますが、その直前に、『いつか・・・あたしの想い・・・伝えるから・・・』と言ってました。」

「っ！」

スバルに衝撃が走る。

ないと思っていたことーウィリアが自分のことが好きだということーが事実ではないのか、と思ったのだ。

「では、これで。」

「え、あ、はい。どうも。」

従業員が出て行き、スバルは一人思慮に耽る。

ウィリアが俺のことが好き……。だとしたら、アイリスやナコル、シロンもなのか・・・？

「考えても無駄、か。今日はさっさと寝るか。」

スバルは深く考えるのを止め、寝ることにした。

スバル宅。

「訓練したいよお・・・」

そう嘆くアイリスがいた。

「見返すのは私一人だけで良かったのに・・・」

「見返せたら皆を出し抜けるっすからね。スバルの嫁候補No. 1 になりたくて、すか？」

「そそそそんなことないよ！」

「バレバレっす。そこまで焦ったら誰でもわかるっすよ？」

「もーっ！」

クリームにからかわれるアイリス。

「・・・でも、お嫁さんかぁ・・・／＼／＼」

「顔、赤いっす。しかも、多分っすけど今の候補一位はナコルのはずっす。アイリスは・・・ひょっとしたらローズにすら負けてるかも知れないっす。」

「な、なんで!？」

「ナコルは料理もできて知識もあってかわいっす。『才色兼備』ってやつっすかね? シロンはやっぱ大人の魅力というか雰囲気というか・・・そんなものがあるっす。ウィリアはやっぱ『妹属性』ってやつっすか? そんなものがあるし、恥ずかしがりだから守ってあげたいと思っちゃうっす。アイリスには『天然娘』という意識しか持たれてないと思うっすよ?」

「そんなぁ・・・」

「ローズの場合は・・・スバルが・・・」

「スバルが?」

「・・・変態の場合、ありえる話っす。」

「うわぁぁぁぁん!」

クリームが言った事実泣き出してしまふアイリス。

「だったら、もっと好印象を持たれるようにするっす。」

「どんな風に・・・?」

「料理をもっと作れるようにするとか、家事万能になるとか・・・他にもあるっす。」

「だったら・・・」

「色仕掛けはアウトっすよ？」

「なんでー!?!」

「当然っす！」

アイリスとクリムの漫才（笑）が始まった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第28話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

今回は暴走が重なった回でした。

ローズの『顔ドラム』ですが、フォックさんのリクエストです！
ちゃんと書いてましたでしょうか・・・

次回はウィリアが・・・

では、また次回！

第29話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

29話です！

ウィリアが、ウィリアが・・・！な話です。

では、どうぞ！

第29話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

「くぁ・・・」

朝、いつもの時間帯にスバルは目覚めた。

「さて、ウィリアを起こし・・・に・・・」

「すう・・・。すう・・・」

「・・・なぜここで寝ている？」

スバルはウィリアを見つけ、すぐにそう言った。

「ん？」

ちょっとしたことに気づかなければなにもなかったのに・・・

「肩・・・？」

「んっ・・・んう・・・」

「んなっ!？」

ウィリアが寝返りをうった。

その時、布団がはだけたためにウィリアが何一つ身に纏っていない（だろう）ことを知ってしまったのだ。

「待て、落ち着け俺。俺は何もされて・・・ない。ふう・・・。ウィリアはどうしたんだ？」

スバルは自分が何かされていないかを確認した。

何もされていなかったことを確認したスバルはほっとし、ウィリアを心配した。

「ん・・・」

ウィリアが目を覚ました。

「・・・ウィリア、なぜお前は」

スス・・・

「なにも着てないんだ・・・って何してるんだおい！？」
「スバル・・・」

ウィリアは起きた瞬間そのままの姿でスバルに抱き着いていた。

「なんで裸のまままで「あのね・・・？」・・・な、なんだ・・・？」

スバルが慌てて話す間にウィリアがスバルに話しかける。

「あたし・・・スバルが好き・・・。スバルが好きなの・・・。こんな姿で言っちゃうけど・・・、皆には負けちゃうけど・・・、これがあたしの想いだから・・・／／／」

ウィリアの告白。

スバルは何も言えなかった。

「・・・スバル？」
「・・・服を着てくれ・・・。目をどこに向けたらいいのかわからん・・・」
「服・・・？・・・あっ！・・・ちょっとくらい見てもいいのに・・・／／／」

ウィリアの眩きはスバルには届かなかった。

スバル宅。

ピクッ！

「スバル！？」

ピキッ。

「ぴぎやああああああつ！」

アイリスは嫌な予感がしたため飛び起きた。

その時、身体中に痛みが走る。

その痛みに堪えられず、悲鳴をあげる。

「アイリス、どうしたの！？」

「あうあうあう・・・」

「身体が痛い・・・？」

「（こくこくこく！）」

シロンが駆け付けた。

アイリスに身体が痛いことを確認、アイリスは首だけを動かして肯定する。

「身体が痛くなるくらいに飛び起きることって、なにかあったの？」
「スバルがね、ウィリアと一緒に行ったでしょ？なんか嫌な予感がして・・・」

「アイリスも？」

「シロンも感じてたんだ・・・」

二人とも同じ心配をしていた。

「一番心配なのは・・・」

「ローズ・・・だね・・・」

アイリスはゆっくり起き上がって、二人でリビングに向かった。

「行かせてくださいませっ！ハニーが、ハニーがあああっ！豚野郎に襲われたかもしれないんですのっ！」

「うるさいっす。」

ガガガガガガガガガ！

「がpegがぶべごばへぶぎ！」

ローズの頭をひたすら打ち付けているクリームがいた。

「な、なにしてるの・・・？」

「顔ドリブルっす。」

「や、止めたら・・・」

「ローズが『迷ひ神』になって、スバルが危なくなるっすね。」
『押さえてて！』

「了解っす！」

『一応』ローズを心配するアイリスとシロン。

クリムが言ったことにすぐ継続を促した。

「ウィリア、スバルに何かしてないかなあ・・・してないよね・・・」
「

「スバルじゃなくてウィリアが？」

「うん。」

スバルが何かされてないか心配していた。

宿。

「な、なあウィリア・・・」

「な、なに・・・？」

「・・・なんで裸で寝ていた・・・？」

「・・・暑かったんだもん・・・。それに・・・」

「それに？」

「・・・あうう・・・／＼／＼」

「顔を赤くするような理由だったのか？」

「うん・・・／＼／＼」

「はあ・・・。今日はバサルモス討伐に行くから準備はしっかりしていけよ？」

「うん！」

さて、今日は荒れるな・・・

火山入口前。

「ここにいるの？」

「このどこかに、な。」

「暑い・・・」

「ベースはここにセットしておいた。二人で探すぞ？」

「うん！（神様、よかったらこのままバサルモスを出さないでください！二人きりでいたいです！）」

二人はバサルモス探しのため、火山に入って行った。

「うわー・・・熱そー・・・」

「触るなよ？溶けちゃうからな。」

「えっ！？と、溶けちゃうの！？」

「ああ。気をつけろよ？」

「きっ、気をつける！」

とても探しているように見えない風景。

「バサルモスは、岩になりすましているんだよね？」

「そのとおり。ヤツは・・・いないな。空は・・・暗くなったか・・・。ベースに戻ろう。」

「うん。（やった！明日も二人きりだ！神様、ありがとう！）」

バサルモスが見つからないまま、日が暮れたのでベースに戻ることにした二人。

ウィリアは不謹慎なことを考えていたが。

「明日こそは見つけてやる・・・！」

「・・・」

「ウィリア？」

きゅっ。

「〜♪」

「ウィリア・・・、寝させてくれ・・・」

「じゃあ、一緒に寝よ？」

「ベッド、二つあるが？」

「一緒に寝たいの！」

「・・・好きにしてくれ・・・」

「〜♪」

ウィリアの誘いを断れず、結局一緒に寝ることにしたスバルだった。

スバル宅。

「皆、お待たせ〜！」

アイリスが料理を運んできた。

「今日は、アイリスが料理をしたのですね。」

「うん。まだ激しい運動ができないから、他のことを頑張ろうって思ってたね。」

「なんか・・・花嫁修業しているように見えるけど・・・」

「ぎっくう！」

アイリスはシロンに凶星を突かれた。

「そっ、そんなことないよ!」

「アイリス、皆よりも目立つところがないから、焦ってるっす。」

「わー! わー! 言わないでー!」

そんなこんなで騒がしく、楽しそうな食卓風景だった。

地下では・・・

「出しやがれですのー! ご飯を食べさせろですのー!」

ローズが騒いでいた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第29話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

今回、ウィリアがついに告白しました。

なぜあの状態なのかという補足ですが、『ライバルのレベルと自分を見比べたとき、その差があまりにも大きい』のが理由です。

次回はある真実が明かされます。

お楽しみに！

第30話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

ついに30話です！

そしてものですぐ報告が遅れましたが・・・

PV10万件&ユニーク1万突破しました！

読んでくださった皆さんのおかげです！

ありがとうございます！

今回はスバルの過去が明らかに。

では、どうぞ！

第30話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

朝、スバルは火山を見ていた。

「バサルモス・・・か。」

バサルモスは、スバルにとって因縁の相手だった。

スバルがハンターになって間もない頃、バサルモス討伐に行ったことがある。

その時にいた人が行方不明になってしまったのだ。

「オリアスさん・・・、生きてるといいんだが・・・。いや、そんなことはない。・・・バサルモスを倒せばいいんだ。」

スバルはまた気持ちを新たにした。

「スバル・・・、どうしたの・・・？」

「なんでもない。ただ過去を思い出したただけだ。・・・過去を・・・な。」

「過去？」

「いや、流してくれ。俺の過去だから。」

「?・・・うん・・・」

ウィリアは素直に了承した。

「さあ、今日はまた探すぞ！」
「うん！」

二人はバサルモスを探し始めた。

スバル宅。

「あ、アイリス・・・！ な、なにをしたらこんなことになるっすか・・・？」

「うう・・・。お、お腹が・・・」

「あ、あれ？普通に料理しただけなのに・・・」

「わ、私が保証するわ・・・、普通に料理をしていたこと・・・。」

「ちよつと食べてみて・・・（パク）・・・ううあ・・・っ！に、煮込み過ぎたみたい・・・」

『・・・』

食卓が大災害になっていた。

「今日は火山流がないところを探そう。」

「まずはどこから？」

「3から、だな。」

3から探し始めた。

「スバル・・・」

バサルモスを探し歩いていたら、ウィリアがスバルを呼んだ。

「なんだ、ウィリア？」

「ごめんなさい・・・、やっぱりあのことが気になっちゃって・・・」

「・・・あのことか・・・」

「あたしのわがままだし・・・話したくなかったら」

「いや、話すよ。ここなら涼しいだろうし。・・・だが、最後は辛い話になるが、それでもいいか？」

「うん。」

「・・・まずこの話の大元になった人のことを話そうか。」

俺にはオリアスという先輩ハンターがいた。

俺はハンターになった頃からあの人から色々教わった。

俺からしたらあの方は偉大な人だったな。全てを知り、その知識で全てを守ろうと考えた人だからな。」

「そのオリアスという人、スバルにとって大切な人なんだね・・・」

「ああ・・・」

ウィリアがスバルにオリアスのことを聞いた。

スバルはそれに答えたとき、空を見上げた。

「・・・バサルモスを二人で討伐する話になってな？先輩と二人でこの火山に行った。」

「この・・・火山に？」

「ああ。それで、バサルモスを見つけ、討伐しようとした。」

そのときに俺はやられてしまって、先輩がバサルモスをどうしたかの記憶がないんだ。

そして俺が気がついたときには既に先輩はいなくなっていた・・・
「えっ・・・」

スバルが言った、『先輩がいなくなった』という事実には驚くウィリアム。

「簡単に言いすぎた。俺が先輩とバサルモスがいた場所に戻ると、そこにあったのが『黒刀・終の型』とバサルモスの腹の部位だった・・・」

「そ、そんな・・・」

「先輩は死んでしまったのか生きているのかは全くわからない。バサルモスもどうなったか解らないんだ。」

「・・・」

「ウィリアム？」

スバルの話を聞き終えたあと、ウィリアムは黙ってしまった。

「ウィリアム、どうした？」

「可哀相だよ・・・」

「え？」

「スバルが可哀相だよ・・・だって、だって・・・大切な人がいなくなってしまったんだよ！？独りぼっちになって寂しくなっちゃったんだよ！？なんで、なんでいなくなってしまったの！？」

「ウィリアム・・・」

ウィリアムが、スバルのことを思ったが故に言ってしまった言葉。

スバルは、その優しさに癒された気がした。

「なんで、なんで・・・」

「ウイリアっ！」

「っ！？」

突如大声を出すスバル。

「俺はもう大丈夫だ。まだバサルモスに復讐したいと思っているが、寂しくはないんだ。家族がいるから、な。」

「スバル・・・」

「さあ、探すぞ！」

「わかった！」

二人は再び歩き始めた。

その頃のスバル宅。

「なっ！？一体これはなんですか！？」

ローズが今起きている惨劇(?)に驚いていた。

「あ、ローズ……。おはよ……」

「おはよ、じゃないですよ!なにがあったか教えてくださいませ!」

「実は、料理失敗しちゃって……」

「料理の失敗……?私も食べてみましようか(パク)……。あっ・
・」

ローズも撃沈した。

「今日は千里眼を使ってみるね。えーと、5にいる!」
「5……」

ザッ!

「スバル!?!」

スバルは走り出していた。

「待ってえ〜！おいてかないでよお〜！」

ウィリアをおいていつてまで。

火山・第5エリア

「どこだ、バサルモス・・・！出てこい・・・！俺と戦え・・・！」

スバルがバサルモスを探していた。

オリアスさんの敵・・・絶対に討つ！

「岩影は・・・いた！」

スバルは岩の方へ走っていき、剣を叩きつけた。

バオオオオオ・・・！

バサルモスが目覚めた。

S i d e ウィリア

「あうう・・・おいてかれちゃったよお・・・」

ウィリアは一人、第5エリアに向かって歩いていた。

「先輩の敵討ち・・・。シロンもこんな気持ちだったのかなあ・・・」

あたしがシロンの彼氏を殺しちゃったからなあ・・・

「・・・スバルう・・・。・・・あ、5に着いた・・・スバル！
？」

ウィリアがスバルを見つけたとき、既にスバルは走りだしていた。

ウィリアの脳裏にスバルの話が過ぎる。

このままじゃ、先輩と同じ運命を辿っちゃうかもしれない・・・！

あたしがスバルを助けるからね！

ウィリアもまた、地面から姿を現したバサルモスに向かって走り出した。

S i d e e n d

スバル・ウィリアとバサルモスの戦いが始まった。

この戦いが（どちらかが死ぬということまではいらないが、）ある悲劇を生むとも知らずに。

To
be
con-
tin-
ued
.
.
.

第30話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

今回はスバルの先輩、オリアスについて。

彼の名前の由来は私の『MHP2G』のキャラクターなんです。

スバルの過去で、彼はいなくなってます。

生きているかいないかは後に・・・

次回は・・・お楽しみに！

第31話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

第31話です。

短くなってしまいました。

今回はスバルが・・・！？

では、どうぞ！

第31話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

「おおらあっ！」

スバルはバサルモスにただ一人向かっていく。

しかし、

ガキン！

グオオッ！

「き、効かないだと・・・？」

攻撃が弾かれていた。

「スバル、今助ける！」

「ウィリア！来るな！」

ウィリアがスバルの救援に向かう。

だがスバルはそれを拒む。

Side ウィリア

「えっ・・・」

ウィリアはスバルの拒否に思わず脚を止めた。

なんで・・・？なんで来るなって言うの・・・？

今度は、今度は助けたいのに・・・。

あたしだって・・・スバルの力になりたいよお・・・

ウィリアが再び前を見たとき、視界に映ったのはバサルモスの岩の身体に弾かれながらも剣を振るスバルだった。

「・・・！（ふるふる（ダメ・・・！ここで泣いちゃダメ・・・！行かなきゃ！スバルに嫌われてもいいから、助けなきゃ！））」

再びウィリアは走りだした。

そして、弓を引き・・・

「・・・えいっ！」

バサルモスに向けて矢を放った。

S i d e e n d

「・・・っ！矢・・・？」

スバルが一度退いた瞬間、バサルモスに矢が当たった。

バサルモスはその瞬間、少しよろけた。

スバルが後ろを見ると、弓を持ったまま立つウィリアがいた。

「ウィリア、来るなど言っただけだ！手を出すな！」

「やだ！」

「わがまま言うな！」

「わがまま言ってるのはスバルの方だよ！あたしたち、家族でしょ！？だったらもっと頼ってよ！力になれないかもしれないけど、それでも・・・っ！」

「っ！・・・すまない、ウィリア。」

「スバル・・・」

「倒すぞ、二人で・・・」

「うん！」

すれ違っていた二人が、目的を同じにした。

グルル・・・

バサルモスはようやく起き上がった。

グオオオオッ！

「ひゃうっ！」

「雄叫びか・・・！」

バサルモスの出した雄叫びによりウィリアは体を竦めた。

「ウィリア、後ろから援護を頼む！」

「う、うん！」

「うおおっ！」

スバルはバサルモスに向かって行った。

後ろからウィリアが矢を放つ。

剣撃を浴びせ、別の位置から矢を放つ。

そのコンビネーションは一条乱れぬものだった。

その頃のスバル宅。

「・・・お腹痛い・・・」

「頭が痛いです・・・」

「目が回ってますの・・・アイリス！なにをしたらこんな物が出来上がるんですの!？」

「わ、わかんないよお・・・。うえっ・・・」

惨劇、未だ残る。

「はあっ、はあっ、はあっ・・・」

「はっ、はっ、はっ・・・」

数時間が過ぎ、二人の息が上がりはじめる。

グ・・・オ・・・

バサルモスもふらついていた。

「これで・・・終いだあああっ！」

ズシャッ！

ズウウウウン・・・

ついにバサルモスが倒れた。

S i d e ウィリア

「やっと・・・倒した・・・！ついに・・・敵を討った・・・！」

バサルモスを倒し、喜ぶスバルを見ていたウィリア。

よかった・・・！スバルの敵、討てたんだ・・・！

そう思うウィリアにあるものが見えた。

スバルに向けて振り上げられたバサルモスの脚。

このままじゃ・・・スバルが・・・！

「スバル、危ない！脚が、脚が！」

ウィリアはスバルに危険を伝えた。

S i d e e n d

ウィリアが叫んだ直後、スバルはバサルモスを見た。

脚を振り上げている！？まずい、このままじゃウィリアにも当たる！

「くっそおっ！」

ドンッ！

「え・・・」

S i d e ウィリア

スバルに突き飛ばされたウィリア。

彼女は無情にもスバルに向けて脚が振り下ろされたのを見てしまった。

そんな・・・やだよ・・・！

「がっ・・・」

ドサッ！ゴロゴロ・・・

ウィリアは、スバルの出した呻き声を聞いた。

起き上がろうとしたが、すぐ起き上がれなかった。

S i d e e n d

「くそ・・・があっ！」

顔に脚を振り下ろされ、ふらふらになりつつもスバルはバサルモスに剣を突き刺した。

グ・・・ガ・・・

バサルモスはその一撃で絶命した。

スバルの顔からは、夥しい量の血が流れ出ていた。

S i d e ウィリア

「スバル！」

ようやく起き上がったウィリアはすぐにスバルの方を見た。

既に絶命したバサルモス。

その前に立つスバル。

「スバル、大丈・・・ぶ・・・」

スバルに駆け寄ったウィリアは言葉を失った。

スバルの足元に血溜まりができていたからだ。

あたしのせいだ・・・！あたしがついて行くなってわがまま言わなかったら・・・あたしがスバルの前に立ってれば・・・！

「ウィリア・・・すまないが包帯、あるか？」

「な、ないよ・・・？」

「じゃあ、貰って来るか医者連れて来てくれ。」

「う、うん。」

ウィリアは町へ走って行った。

スバルのために。

S i d e e n d

ウィリアが行ってしまったあと、スバルは顔の左側を押さえた。

「左側を・・・やられたか……。ちっ、左目が見えない……」

そのままスバルは倒れてしまった。

S i d e ウィリア

「スバル！」

ウィリアは医者を連れて来た。

「スバ・・・」

倒れているスバルに近づいた瞬間、言葉を失う。

「そ・・・んな・・・」

ウィリアが見たもの、それは・・・

顔の左側に大きな傷痕を作ったスバルだった。

「出血が酷い！すぐに運びます！」

「お、お願いします！」

スバルが運ばれている間、ウィリアはスバルの無事を祈った。

お願い神様・・・！スバルを助けて・・・！

To be continued・・・

第31話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

スバルの負傷。

その為に今回は辛い話になってしまいましたかどうでしょうか？

次回は久々にフルメンバーです！

お楽しみに！

第32話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

32話です！

今回は泣けるところと笑うところが混在しますので・・・

では、どうぞ！

第32話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

スバルが顔を血に染めた翌日。

<スバルの家の者！緊急である！>

「わひゃっ!？」

「な、ななななんですか!？」

「（ガチャッ!）な、なにかあったっすか!？」

いきなりの大声で娘たちが飛び起きる。

クリムが扉を開けた先には訓練所の教官がいた。

「スバルが今死にかけている!・・・という情報が入った。」

「そんな!？」

「スバルが・・・」

「嘘よ・・・!スバルが死にかけてるなんて!」

「絶対嘘っす!」

教官の話聞き、否定をする娘たち。

「スバルが・・・心配だな。」

カクサスも心配していた。

ただ・・・

「ハニーをたぶらかす豚野郎はさっさとくたばればいいんですの。そうすれば私はハニーと・・・」

ローズだけが酷いことを言っていた。

ガン！

「痛いのです・・・」

そして、殴られた。

「行こっ！スバルのところに！」

「ええ！」

「はい！」

「了解っす！」

「ハニーが心配だから私も行きますの！」

全員行くことになった。

Bannon!

タタタタタタタタ・・・

「場所も聞かずに行くとは・・・。教官殿、スバルが行ったクエストとは？」

「うむ、これだ。」

・・・タタタタタタタタ

「どこへ行ったか、わかる？」

「そうだろうと話していた。スバルは・・・。」

アイリスたちはスバルの居場所を聞いていた。

診療所（Side ウィリア）。

<止血！急いで！>

<輸血を！このままでは！>

ある一室では、スバルに懸命な処置が行われていた。

ウィリアは部屋の前でただひたすら祈っていた。

スバル・・・！お願い、生きてて・・・！

数分後、処置室から医者が出てきた。

「あっ、あの、先生！スバルは・・・」

「大丈夫です。無事です。」

「ほっ・・・」

「ですが・・・顔の方はかなりのダメージがあります。左目はもう・・・視力を失っているでしょう・・・」

「!?!」

スバルのことを医者に聞き、無事生きていることを伝えられ、ほっとしたウィリアム。

だが、その直後の医者発言に驚いてしまう。

医者の話をまとめるとこうなる。

スバルの命に別状はない。

ただ、顔の左側に一筋の傷痕残り、左目は失明してしまった、と。

「彼の顔・・・見ますか？ただし、他の部屋で、となりますが・・・」

「は、はい!」

ウィリアムはスバルが入る部屋に先に向かった。

スバルがケガ……。左目が見えない……。全部あたしのせいだ・
・！あたしが、あたがついて行きたいって言ったから・・！

ウィリアは自分を責めていた。

数分後、スバルが運び込まれた。

「ショックを受けるかもしれませんが。それでも……。いいですか？」
「は、はい……」

医者が包帯を解いた。

ウィリアの目に映ったのは左目を貫き、左側を真っ直ぐについた傷痕だった。

「ううつ……」

「本当に酷い傷ですよ。これで生きているのが不思議です。」

ウィリアは思わず声を漏らした。

夕方。

「スバル！」

「大丈夫ですか!？」

「死にかけてるって聞いたわ！」

「ウィリア、スバルがどうなっているか知りたい。君を含めて全員出るようにしてほしい。」

「う、うん……。み、みんな……。お願い、出てくれる?・・・ちよっと話したいこともあるの・・・」

「いいけど・・・」

スバルの居る部屋にはカクサスだけが残った。

S i d e c h a n g e f o r カクサス

「スバル・・・痛々しい傷痕を残したな・・・」

スバルの傷痕を見て正直な感想を言うカクサス。

「これを皆が見たらどう思うだろうか……。」

カクサスも不安なことだった。

この傷で皆がばらばらになってしまわないといいが……

S i d e r e t u r n f o r ウィリア

「それで、話って……。」

アイリスが話を切り出す。

「スバルがあんな風になっちゃったのはあたしのせいなの……。」
「え……。」

ウィリアの告白。

「あたしがスバルについて行きたいって言ったから……。あたしがスバルに迷惑かけちゃったから……！」

「ウィリア……」

「あたし……。こんなに迷惑かけちゃうから……。いなくなった方が」

パン！

「……。っ！」

診療所に響く乾いた音。

アイリスがウィリアの頬を叩いたのだ。

「なんで……。なんでそんなこと言うの！？」

「え……。？　なんで……」

アイリスが声を荒げて言う。

ウィリアはそのことに聞き返した。

「私も今まで迷惑かけちゃったの！　個人クエストについて行って大怪我させちゃったし！　ちよつとえっちなこともしたし！」

「いや、そこは言うことじゃないと思うわ……」

「ちよつとじゃ済まないと思いますが……」

発言内容に突っ込むナコルとシロン。

「でも！それでも一度も迷惑だなんて言わなかった！」
「あ・・・」

アイリスの言うことを理解したウィリア。

「いなくなっといういい訳無いんだよ！いなくなっちゃった方が迷惑か
けちゃうんだよ！？」
「う・・・うえ・・・」

本当のことを言うアイリス。

そしてウィリアは・・・

「うええええええん！」

泣いた。

「今は泣いて、すっきりしよ。ね？私の胸、貸してあげるから・・・」

「うえええええん！えぐっ、ひぐっ、うえええ．．．」

アイリスは自分の胸を貸すことを伝えた。

ウィリアは素直にアイリスの胸で泣いた。

「落ち着いた？」

「うん．．．ぐすっ。みんな．．．ごめんね．．．。」

「いいわよ、そんなこと。」

「だって、私たち．．．」

『家族（ですから／だから）。』

「うん．．．みんな、ありがとう！」

娘四人の絆がより深まった。

おまけ

スバルの居る診療所待合室にて・・・

「別に豚野郎が死んでもかまわな・・・」

ガスン！（↑クリームがフライパンでローズの顔を叩いた音）

「はうっ・・・ありがとうございま・・・せんの！痛いのですの！叩かないでほしいのですの！」

「馬鹿なことを言うからっす！」

「べつに馬鹿なことじゃ」

スパカン！（↑クリームがまたフライパンでローズの顔を叩いた音）

「へうっ・・・ありがとうございま・・・せんの！だ・か・ら！叩かないでほしいって言ってますの！・・・こうなったら・・・」

パシ！

（ローズがクリームからフライパンを奪った）

「あっ！」

「くらえですのおおっ！」

ガスン！（↑ローズがクリームの顔をフライパンで叩いた音）

「へうっ・・・」

「さあ、言いなさいな・・・言いなさ」

バチン！（クリームが回転してローズの顔をひっぱたいた音）

「
・
・
・
」

叩きあいが始まった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
・
・
・

第32話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

アイリスのキャラが違うように見えた方、今回はまじめです。

あと、おまけには元ネタがあります。

分かった人は凄いです！

（ヒント…「おみゃーのやったことは徹頭徹尾一点の曇りもなくオ
ールクリアお見通しだ！」）

次回は暴走・・・？

お楽しみに！

第33話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

33話です。

今回はRー15ですので・・・

タイトル通りスバルが目を覚めますが・・・

では、どうぞ！

第33話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

「じゃあみんな、今から入るけど・・・覚悟、してね。」

「うん・・・」

「わかったわ・・・」

再びスバルが居る部屋に入る。

「話が済んだみたいだな・・・。先にスバルの顔を見させてもらったが・・・、相当酷い傷だ。・・・覚悟ができている者だけが見た方がいい。」

カクサスが忠告をする。

『相当酷い』という言葉にウィリアを除く娘たちは戸惑うが、アイリスが先に動いた。

「・・・スバル・・・」

普通ならばスバルの顔を見ただけで気絶、あるいは拒絶をしてしまうはず。

だがアイリスは違った。

ギュッ・・・

「ごめんね・・・。スバルが行くのに気づけたら、気づけなくても追いかけていたら、ここまで酷くなることはなかったと思う・・・。本当に・・・ごめ・・・ん・・・ね・・・ひっく・・・。」

アイリスはスバルを抱きしめ、謝罪をした。

最後の方は嗚咽混じりになってしまっていた。

そしてシロンもスバルの顔を見た。

「・・・うわああああああっ！」

泣き崩れた。

そしてナコルがスバルを見ようとしたときだった。

「うっ・・・。」

「スバル!？」

スバルが意識を取り戻した。

「ここは・・・そうか、俺はバサルモスにやられて・・・アイリス？」

「・・・よかったぁ！」

「飛びつくな！ってうわっ！鼻水、鼻水！拭いてからにしろ！」

いつもの騒動。

「シロン！スバル、気がつきましたよ・・・！」

「・・・ホント・・・？」

泣き崩れていたシロンにスバルが意識を取り戻したのを伝えるナコル。

「よかった・・・。無事で。」

シロンは安堵の声を出した。

「スバル・・・あの・・・迷惑かけて・・・」

「迷惑なんてかけられてないぞ？」

「え？」

スバルが自分の言葉を遮り言ったことに驚くウィリア。

「それでね、あたし・・・」
「ん？」

ウィリアが言おうとしていることに聞き耳を立てる娘たち。

「・・・スバルのこと、好きなの。家族としてじゃなくて、女の子として。」

『・・・』

全員、硬直。

<だがふっ！>
<黙れっす。>

奥でローズとクリムの声がした。

「あ・・・あ・・・」

「う．．．そ．．．」

言葉も出ない娘たち。

「．．．」

カクサスもこのことに絶句していた。

更に追い撃ちをかけるかのようにウィリアが、

ガバツ！

「ウィリ．．．んむっ！？」

「んっ．．．」

『あああああああつ！！！』

スバルにキスをした。

娘たちは悲鳴をあげた。

「ぷはっ．．．」

「う、ウィリア、お、おま．．．／／／」

「．．．これで．．．嘘じゃないって思ってくれる？好きじゃなかったらこんなことしないもん．．．／／／」

「にゃああああああああ！だ、だ、だめえええええっ！」

ウィリアのキスに暴走したアイリス。

「あ、わ、な、な、だ・・・」

「あ、アイリス、お、おち、おちっ・・・」

「し、シロン、あ、あなたも、あなたも・・・」

「皆、落ち着いたらどうだ・・・」

娘全員混乱。

カクサスは唯一まともだった。

「なにかあったっすか？・・・あれ、スバル顔赤いつすよ？」

「えっ！？い、いや、それは・・・」

「ウィリアがキむぐっ・・・」

「いや、全部言わない方がいいっす。あとが怖いから・・・」

カクサスが言おうとして口をふさぐクリム。

「わ、私だっ！」

「ちよっ、おまつ、むぐうっ！」

「んっ！」

ウィリアに続き、アイリスにもキスされたスバル。

「あっ！」

「なっ!？」

「そんな!？」

アイリスの行動に愕然とする三人。

「・・・長いな。」

「・・・長いっすね。」

何気に時間が長いことに微妙にぼやく二人。

「・・・ぷはあっ！」

「・・・」

「スバル・・・」

「あっ! アイリスの目が妖しく光ってる!？」

口を離し、呆然とするスバルに更に近づくアイリス。

ウィリアがアイリスの異変に気付く。

「私、スバルのこと好きだよ……。スバルにだったら私……」
「クリーム、止めろ!」
「了解っす〜!」

ガン!

バタッ!

アイリスが何をするつもりだったか判断したカクサスがクリームに指示、すぐにフライパンで叩かせた。

叩かれたアイリスはスバルに倒れかかった。

「アイリス、錯乱したか……」

「ふ、雰囲気的にヤバかったっす……」

「よいっ……。しょ!まさかあんな行動するとは思いませんでした・
・。」

「……」

「シロン、どうかしました?」

「……スバル〜!」

「あなたもっ!?」

「私もっ、私もスバルが好きなの〜っ!」

シロンも暴走。

「クリム、フライパン借りますっ！」

「え、わっ！」

「ていっ！」

「あふっ・・・」

シロン、停止。

「・・・スバルが活動停止しているぞ・・・」

「スバル！？起きてください、スバル！」

「あ、あわ、あわわ・・・」

スバルを起こすナコル、慌てるウィリア。

大暴走が続いた。

数分後・・・

「ん・・・」

「あ、気がつきました？」

「あれ、私・・・」

「さっきまで気を失ってたんです。」

「私、スバルに告白したんだよね・・・？」

「・・・（ふいつ）」

「わ、私、スバルに、ち、チュウしちゃって、告白して・・・・・・・・..
えへへへ／／／」

「・・・」

「スバル、まだ白いままだぞ・・・」

トリップし始めたアイリス。

その傍らでは白いままのスバルを介抱するクリムと見守るカクサス、
気絶したままのシロンがいた。

「一応スバルは退院可能らしいが、帰るのは明日だな・・・」

日が暮れた空を見て、カクサスは呟いた。

To
be
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第33話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

今回はスバルの覚醒とウィリアのキスから始まったキス闘争でした。

ちなみに、1〜2話前の「ありがとうございます・・・せんの！（ローズ）」ですが、TRICK（Kは反転してます）の秋葉が矢部に顔を殴られた時に言う「ありがとうございます」が元ネタです。

わかった人いましたか？

次回は第二次〇〇争奪戦が勃発、アイリスが恥態を曝します・・・

お楽しみに！

第34話

スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

第34話です。

R-15ですので（後半、かなり過激です）苦手な人は回れ右を推奨します・・・

では、覚悟のある人だけどうぞ！

第34話

スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

翌朝。

「カクサス、頼みがあるんだが・・・、いいか？」

「構わないが・・・。まさか、隻眼でハンターを続けるつもりなのか！？」

「そのつもりだ。」

「止めておけ！昨日の夜まだ歩くのもままならなかったんだぞ！？死ぬ気か！？」

「死ぬのも構わないさ。俺はハンターだから、仕事に死はつきもの。元から死ぬ気だ。」

「・・・わかった。それで、何をする気だ？」

「単に動けるようになるためだ、回避練習でいい。」

「わかったが、明らかに回避できないと判断したら中止でいいか？」

「構わない。」

「了解した。」

こうして二人は練習を始めた。

スバルのいた病室。

「んむー！んむー！」

「むにゃ・・・スバルく・・・」

アイリスが寝ぼけてクリムの顔を自分の胸に沈めていた。

「さっきからうるさいわね・・・って！アイリス、起きなさい！クリムを殺しかけてるわよ！」

「うく・・・」

シロンが起きてクリムが死にかけていることに気付く。

慌ててアイリスを起こそうとしたが、アイリスは全く起きない。

「こうなったら・・・んんっ！」

アイリスの腕を無理矢理持ち上げ、クリムを救出した。

「クリム！クリム！大丈夫！？」

「し、シロン、た、助かったっす・・・」

「あれ、スバルは？」

「さ、さっきからアイリスに窒息されかけていたからわかんないっす・・・げほ。」

「な、ナコルまでいない!」

「ナコルも知らないっす・・・」

「ま、まさか、な、ナコルもスバルに・・・!? も、もしそうだとしたら私だけ何もしてないってことに・・・」

「な、なんか凄いこと考えてるっす・・・」

「私も行かなきゃ!」

「助けてくれてありがとうっす・・・」

シロンはスバルがいるであろうところへ駆けて行った。

その頃のスバルは・・・

練習しているところをナコルに見つかり三人で練習していた。

「ふっ!はっ!」

「えいっ!たあっ!」

回避練習ならば動きの速いナコルが適任、そう考えたカクサスが二人を見ていた。

「っ!しまっ・・・」

「ナコル、ストップだ!」「は、はいっ!」

対応が遅れ、あわや直撃といったときにカクサスが止めた。

「くっ！やはり左側の対応が遅れるか・・・」

「スバル、あまり無茶はしないでください・・・！」

地面に座り込み問題点を出すスバルを心配するナコル。

「無茶なんてそんなことは・・・」

ぎゅっ・・・

「！」

「私たち皆、スバルのことが心配なんですよ・・・？」

「・・・」

「それに・・・」

「それに？」

「スバルが無茶して死んでしまったら、スバルのことが好きな私はどうすればいいんですか・・・？」

「っ！？」

ナコルからの突然の告白に驚くスバル。

「だから・・・無茶しないでください・・・」

「・・・」

そこに。

「スバルうゝ！」

バツ！

ドン！

「きゃあっ！」

ドサツ！

シロンが突撃、スバルにぶつかりナコルを弾き飛ばし、そのまま押し倒した。

「いっつつ・・・、シロン、いきなり何を「んっ！」むぐっ!？」

シロンがキス。

「あ、あ、あ・・・」

いきなりのことに言葉を失ったナコル。

「・・・っ！（バンバン！）」

「んっ・・・ふう・・・」

長時間口を塞がれ息苦しくなったスバルは、地面を叩き出した。が、シロンはそんなことお構いなしに続けていた。

「・・・昨日の既視感^{テジャヴ}か？」

カクサスはそう言うと同時に、シロンが歳不相応の女性に見えたという・・・

「んっ・・・」

「ふはあっ！い、いき、いきなり何を・・・」

「私の気持ち、伝えたくて・・・。スバル、私はあなたのことが、すっ、す・・・」

「す？」

「すっ、好きなの！／／／」

「にゃっ！？」

シロンの告白に猫声を出してしまうナコル。

「スバル、私がスバルが好きなのは本当なのは本当よ・・・／＼／」
「わ、私だってえゝ！」

ドンッ！

「きゃっ！」

「んむっ！」

「んぐっ！？」

ナコルがシロンを突き飛ばしてスバルにキス。

「これが私がスバルが好きなことの証拠です・・・／＼／」

顔を赤くしてスバルに言ったナコル。

「そして・・・えいっ！」

「うわっ！」

ムギユツ！

ナコルがいきなりスバルに抱き着いた。

「な、ナコル！む、胸が！」

「ナコルだけにはさせない！」

「わっ！」

ムギユツ！

「し、シロン！？お、お前も！？」

「スバルは私があゝ！」

「私のですうゝ！」

「違うのおゝ！」

「違いますうゝ！」

「（わいのわいの・・・）」

「頼むから止めてくれ・・・」

スバルの取り合いが始まった。

そう騒いでいる内に・・・

「んゝ・・・？」

ウィリアが目を覚ました。

「外が騒が・・・」

<私のですうゝ!>

<スバルの彼女は私なのおゝ!>

「・・・スバルが取られちゃう!」

ウィリアも慌てて出た。

同時に・・・

「んみゅ・・・?」

アイリスが目を覚ました。

「むゝ・・・うるさい・・・」

<私のですうゝ!>

<スバルの彼女は私なのおゝ!>

「だっ、だめえええええっ!」

そしてアイリスも。

「いい加減諦めて!？」

「そっちが諦めたらどうですか!？」

「嫌よ!」

「私だって嫌ですよ!」

そう言い合っている内に・・・

「スバルの彼女は私だよぉ!」

ガシッ!

ウィリア、参戦。

「いだだだだっ! ちょ、止め!」

「ウィリアは来ないで! 今は女の戦いの!」

「あたしだって一人の女だもん!」

「あなたは一人の女『の子』じゃないんですか!？」

「スバルは私のだよぉ!」

アイリスも参戦した。

ドシン！

『きゃあっ！』

ギュウツ！

アイリスは全員突き飛ばしてスバルに抱き着いた。

そのはずみでスバルの顔がアイリスの胸に沈んでいた。

「・・・！（い、息が・・・！左側の傷が・・・！）」

「スバルは私のだから！スバル、だいじょ（ふにつ）ひあんっ！？」
『なっ！？』

スバルを抱きしめ、気遣うアイリス。だが、途中で喘ぎ声を発してしまう。

それに驚く三人。

理由は簡単、息をしようと、傷の痛みを引かそうとしてスバルが掴んだのが・・・アイリスの胸だった。

「ちょ、スバひゃうっ！スバル、止めて・・・あんっ！」

「んー！んー！（息を！呼吸をさせてくれ！顔を上げさせてくれ！傷が痛い！）」

「アイリス、それはズルイわ！」

「スバルを放して！」

「い、いや！ひんっ！だ、だって、んうっ、スバルは私のだし、やんっ、取られたくないんああっ！」

「・・・・・・・・・・！（やばい、酸素が・・・傷が・・・）」

息をしようと、顔を上げようと必死になるスバル。だがアイリスは気付かないまま。

スバルは酸欠になり始めていた・・・

数分後・・・

「アイリス・・・。そろそろスバルを解放してやってくれ・・・。」

「にゃ・・・にゃんれ・・・ひゃん！」

「・・・スバルの顔の傷が開くぞ・・・？」

「ふあっ・・・しょ、しょんにゃ・・・あっ・・・／／／」

カクサスが忠告したとき、アイリスはスバルに胸を揉まれ続け（ス

バルとしては肩と勘違いしているだけ。顔が痛く、焦ってもいるので勘違いに気付いていない）、呂律が回らず、涙目になっていた。ただ、それでもしっかりとスバルを抱きしめてはいたが。

ちなみにスバルは、呼吸できないままいたため、既に意識を失い、生存本能で行動していた。

「アイリス、スバルを放しなさい！」

「ら、らって……いやっ……みんなにしゅぱりゅをわらしらら（訳…皆にスバルを渡したら）……んあっ……わらひろうひようもにゃ（訳…私どうしようもな）ひんっ……も、もう……らめ……らめえ……んうっ……／＼／＼（顔の力が抜け、首が少し上を向いていて、目の焦点は全く合っておらず虚ろになっている）」

「もう呂律回ってないですね……。なんか胸を揉まれるのが快感になっちゃった変態みたいに……」

「いや、もう揉まれるのが気持ち良くなってるんじゃないの？」

「あっ！限界みたい！なんかヘナヘナしちやってる！……目が変な方向いてるし……」

「うわ、涎垂らし始めてるっす……。なんとなくビクビク震えてるようにも見えるっすよ？」

「子供は見たらいけないものだ。」

「はい。」

「限界みたいなのに放さないって……。それだけ気持ちいいのかしら……？でも……」

『これ以上スバルを好き勝手させない！』

カクサスに忠告され、スバルを独占されたくないために、三人はス

バルを助けようとスバルの体を掴んだ。

『せえ・・・のっ!』

「ら、らめえ・・・んあああっ!」

もともと力が入ってなかったため、すぐにスバルは抜けた。

スバルを引きずった衝撃からか、アイリスはついに限界を越えたらしく、そのまま前のめりに倒れ、全身ビクビク震えていた。

「スバル! スバル!」

「・・・はっ! ぐおお・・・顔が痛い・・・」

「はあっ・・・はあっ・・・、しゅ、しゅばりゅう・・・は、はげししゅぎらよお・・・／＼／＼」

「・・・顔を赤くして・・・。満更でもなかったんでしょ? 激しいなんて言っちゃって・・・」

「しょ、しょんにゃこと・・・にゃいよお・・・／＼／＼」

「さっきから呂律が回ってないから・・・」

スバルは顔の痛みへのたうちまわり、アイリスは先程の事態にぐったりとし、息絶え絶えに抗議した。だが、顔を紅潮させたうえ、呂律が回っておらず全身痙攣を起こしていたので意味はなかった。

「うおお・・・。傷が開いたらどうするんだよ・・・」さっき自分がやったことに気付かないスバル。

(ナコル…アイリスがダウンした今・・・)

(ウィリア…スバルをあたしのものにする・・・)

(シロン…チャンス！)

『(私／あたし)があーっ！』

・・・

「いい加減にしろ・・・」

『すいませんでした・・・』

争奪戦があまりにも酷くなったのでカクサスから鉄拳制裁を受けた三人。

クリムはというと、

「んしょ、んしょ、よっし、包帯巻き終えたっす。」 「すまないな・・・」

スバルの包帯を巻き変えていた。

そしてローズは・・・

「・・・」

「はあっ、はあっ、はあっ・・・／／／」

「・・・（つんつん）」

「はうん！」

「・・・（ふにふに）」

「やあん！」

「・・・なんか、おもしろいですの・・・」

「や、やめれ・・・も、もうらめなの・・・／／／」

「・・・ていつ。」

「あうん！」

さっきの事件でへばったアイリスの胸をついたり揉んだりして遊んでいた。

ローズの行動一つにつき必ずアイリスは喘ぎ声を出していた。

「よし、帰るか。誰か、アイリスをおぶっててくれ。」

「あ、私が。」

「ナコル、頼む。」

「ナコル、ちょっと。」

「シロン？」

シロンはナコルを呼んだ。

「どうしたんですか？」

「アイリスをおぶっていく、って言うけどね？・・・胸に触れないように・・・ね？」

「わ、わかりました・・・」

今現在、アイリスはというと・・・

「はひっ、はひっ、はひっ・・・」

未だ回復していなかった（呼吸は荒く、顔は紅潮、小刻みに痙攣を起こして目には虚ろ、ぐったりとしており口からは涎を・・・）。

理由は事件のダメージ残るときにローズに弄られたからだ。

そして、ナコルがアイリスをおぶって、帰り始めた。

（おぶるときにアイリスが「あん・・・」とまた喘ぎ声を出したのは別の話）。

「・・・カクサス。」

「・・・なんだ？」

「・・・今回何があったか知らないか？アイリスが恍惚の表情を浮かべていたが・・・」

「仕方ない、スバルが原因だしな・・・」

「俺？」カクサスは今までのいきさつを話した。

「・・・」

「スバルは生きるためにやったんだ、仕方ない。」

「アイリスがそっちに目覚めないか心配になってきた・・・」

「大丈夫だろう。・・・きつと。」

男二人の雑談でした。

To be continued・・・

第34話

スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

今回、アイリスが乱れまくりました・・・

一応補足ですが、これは事故です。
故意ではありません。

もし、アイリスファンの人がいましたら、スバルを許してあげてください。

話が変わりますが、この小説のメインテーマを考えてみました。

なんかイメージに近いな・・・と思ったのが、

「真紅の花」

です。

これの方が良いんじゃない？という人いましたら案をどうぞ。

18日まで案を受け付け、19日から25日までを投票にしようと思います。

次回、カクサスの意外な事実が・・・（アイリスはまだ引きずりま
す）

お楽しみに！

第35話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

まずはこの小説を読んでくださるウィリアファンの皆様、申し訳ありません・・・

理由は本文で・・・

そんな35話、どうぞ！
(今回もRー15です)

第35話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

帰路。

「ねえ、アイリス・・・」

「にゃ、にゃに・・・んうっ・・・」

「ま、まだ立てないんですか・・・？」

「ま、まらむりみらいらよお・・・れもお、らんれ・・・（訳：ま、まだ無理みたいだよお・・・でもお、なんで・・・）ふあっ・・・」
「ナコル、どうしたの？」

後ろをゆっくり歩くナコルは、アイリスに調子を聞いた。

未だ回復していないアイリスに溜息。

そんなナコルにシロンが声をかけた。

「シロン・・・」

「代わってあげようか？見た感じ疲れてるみたいだし・・・」

「すみません・・・」

ナコルからシロンへアイリスが渡る。

「あ、アイリス・・・」

「・・・しりょん？にやに？」

「あの・・・ね？スバルに胸を揉まれたときって・・・その・・・気持ち良かった？」

「きをひよかつらよお。らんかれ、むれがろきろきしれれ？をわれへるうひひをつろやつれをつひやつらんらよお」（訳：気持ち良かったよお。なんかね、胸がどきどきしてね、揉まれてるうちにもっとやってって思っちゃったんだよお）。」

「・・・ナコル、わかった？」

「・・・なんとか。気持ち良かったって言っていましたよ？・・・完全に変態ですね・・・」

「へ、へんらいひゃらいをん！ひをひよかつららひえらをん！（訳：変態じゃないもん！気持ち良かったただけだもん！）」

「・・・よくわからない・・・なあ・・・」

「シロン？なんかありました？」

「あ、いや、なんでもない！なんでもないの！」

アイリスの腑抜けた答えに俯いてぼやくシロン。

ナコルに気付かれかけて慌てて隠す。

「・・・ねえナコル。」

「はい？」

「今のアイリスをスバルに預けたらどうなると思う？」

「またスバルに胸を揉ませようと思いますね・・・絶対。」

「しょ、しょんにゃころひにゃいよお」（訳：そ、そんなことしないよお）・・・」

「否定してまずけど・・・」

「試してみる？」

「試しましょうか。スバルく！」

「なんだー！？>

「こっちに来てくれませんかー！？」

「わかった、すぐ行く！>

「それで、何の用だ？」

「少しの間、アイリスをおぶってくださいませんか？」

「構わないけど、なぜ？」

「ちょっとした衝撃ですぐに喘いちゃうので・・・」

「・・・仕方ない。」

シロンからスバルにアイリスが渡った。

「さあ、どうかしら？」

「ねえ、なにしてるの？」

ウィリアが前から戻ってきて、シロンに聞いた。

「実はね・・・？」

シロンが実験をウィリアに伝えた。

「・・・もうすでもじもじしてるように見えるよ？」

「え・・・」

「は、早いですね・・・」

ウィリアがアイリスを見た時、既にアイリスは体が小刻みに震えていた。

「はあっ、はあっ・・・」

「・・・アイリス？どうした？息も辛そうだし体が震えてるし顔も赤いが・・・」

「ら、らいひょうふらよお（訳：だ、大丈夫だよお）・・・（か、体がうずいちやうよお・・・。た、助けて・・・）」

「・・・ならいいが・・・」

そして歩こうとしたとき・・・

「豚野郎は鈍すぎですの。」

「・・・何？」

「アイリスはこうしてほしがっていたんでしてよ。」

ローズがスバルを止め、アイリスに飛び掛かる。

そして・・・

むにっ！

「んあっ・・・」

「この淫乱イェンクックにはこれがお似合いですの！（ふにふにむにゅむにゅ・・・）」

「あっ・・・んっ・・・んんっ・・・ふあっ・・・」

「ちょ、ローズ、やめろ！アイリスも暴れるな！」

（どうなってるかは想像で考えてください　B Y作者）

「（ガッ！）しまっ・・・」

ドサッ！

石に躓き、倒れるスバル。

「いつつ・・・アイリス、大丈・・・」
「・・・」

倒れ込んだ後、スバルはアイリスを見て言葉を止めてしまった。

アイリスはもじもじしていた。

「しゅぱりゅ……らしゅけれ……。かららひゃうじゅいひゃう
によ……。 (訳…スバル……。助けて……。体がうずいちやうの
……。)」

「た、助けろって言われてもなおい、どうしろと！」

「わらひによ……。むにえを……。 (訳…私の……。胸を……。)」
「ストープ！」

「これ以上はダメです！……。あれ、ウィリア？」

アイリスを止めたナコルとシロン。

ナコルがウィリアがいないことに気付いた。

ウィリアは……

「……」

ナコルやシロンの胸を見、

「…… (ぷにっ) はぁ……」

自分の胸を見て、突いて、溜息をついた。

「ハ〜ニ〜いっ！（ぷにっ）」

「ひゃうん！ぎ、ギザミちゃん！？」

ローズがウィリアの胸を後ろから掴んだ。

「な〜にしてるんですの〜？（ぷにぷにふにふに）」

「だ、だって、あたしの胸、みんなより小さいから・・・んっ・・・
これじゃスバルに振り向いてももらえないかもって思っちゃって・・・」

「（ピタッ）」

「ぎ、ギザミちゃん？」

ローズの手が止まる。

「ハニーは私を見てくれればいいんですの！というか私だけを見て
くださいまし！さもなくば、胸を揉みしだいて裸にしてあげますわ
！そしてそのまま・・・じゅるり。」

「あ・・・あ・・・あ・・・」

ローズ、暴走。

ちなみにウィリアはローズに胸を掴まれているので動けない。

「さあさあさあ、どうしますの？」

「ぎ、ギザミちゃんだけを見るなんてできないよお・・・」

「お仕置きですのおく！（ぷにぷにふにふに！）」

「やっ！あっ！やん！んあっ！」

数分後。

「ひ、ひはみひゃん・・・も、もうらめえ・・・（訳：ぎ、ギザミちゃん・・・も、もうだめえ・・・）んんっ・・・。これいひょうやりゅうこわれひゃう・・・（訳：これ以上やると壊れちゃう・・・）ひあっ、あんっ・・・」

ローズに胸を弄られ続け、呂律が回らなくなったウィリア。

「まずはここまでにして・・・」

「（ぐたあ・・・）はっ、はっ、はっ、はっ・・・」

ようやく胸弄りから解放され、ぐったりとしているウィリア。

「次はみんなの前で裸に「やめろ。（ドゴッ!）」げっふう!」

ウィリアを助けるためにローズの頭を横から殴ったカクサス。

殴られたローズは近くの岩に頭がめり込んだ。

「大丈夫か?」

「らめ・・・ありゆけにやいよお・・・。ひかりやがはいんにやい・
・（訳..だめ・・・歩けないよお・・・。力が入らない・・・）」

「ここで限界だと言って正解だったな。」

「ふにゃあ・・・にい・・・」

「ん?」

「しゅばりゆにまらもんれもりやつれにやいによにい」（訳..スバルにまだ揉んでもらってないのに）・・・」

「無事なのかわからん・・・」

ウィリア、脱落。

「う、ウィリアは私が運びますね・・・」

「頼む・・・」

ナコルがウィリアを背負った瞬間。

「んうっ！んああああっ！」

突如喘ぎ声を出すウィリア。

「う、ウィリア！？」

「にゃ、にゃこりゅ、や、やらひくひれ・・・（訳：ナ、ナコル、や、やさしくして・・・）」

「う、ごめんなさい！」

岩に刺さったままのローズを放置して歩きだした一行。

「ここは・・・」

「スバル、どうした？」

スバルが足を止めたのでカクサスが聞いた。

ちなみにアイリスはナコルが、ウィリアはシロンがおぶっていた。

「ウィリアがここで暴走してたな・・・」

「ら、らめえ！ いっひゃらめえ！（訳…だ、ダメえ！ 言っちゃダメえ！）」

「暴走の内容が手に取るようにわかるな・・・」

「・・・？」

「クリム、どうかしましたか？」

「さっきから足音がするっすよ？」

「え・・・」

ズ・・・ズ・・・ズシン・・・

グオオオオッ！

「デイ、ディアブロス！？」

「こんな戦えないときに来るなんて！」

「ぜ、全滅しちゃうっすか！？」

「俺が・・・」

「スバルはみんなを守ってくれ。俺がやろう。」

「・・・すまない。だが、ある程度戦ったら退くつもりでいてくれ。」

「わかっている。閃光か煙か？」

「ああ。準備をするからそれまでの時間稼ぎだ・・・。危険だが、頼む。」

「言われなくても。」

スバルは下がり、カクサスが対峙した。

「ナコル、シロン、アイリスとウィリアを安全な所に！手伝ってほしい！」

「わかりました！」

「わかってるわ！クリム、二人を頼むわね。」

「わ、わかってるっす・・・」

「うああん・・・」

「ふああっ・・・」

「大丈夫っすか・・・？」

二人はぐったりとしたアイリスとウィリアをクリムに任せた。

「さあ、かかって・・・ん？」

ディアブ羅斯はカクサスを見つめたまま動かない。

「・・・？」

カクサスも動かない。

「カクサス！準備が済んだ！下がれ！」

「あ、ああ！」

「食らえ、ケムリ玉あ！」

スバルは出来上がったケムリ玉を投げた。

ケムリ玉は尋常でない量の煙を吹き出した。

「げほっ！げほっ！」

「スバル・・・げほっ！逃げるつもりだったはずだろう！？」
「すまない、げほっ！」

スバルとカクサスが言い合っていたその時・・・

「お、お兄ちゃん・・・酷いよお・・・」
「うっ！」

女の子の声。

声を聞いてカクサスが嫌そうな声を出した。

煙がはれた。

「あ、お兄ちゃん！」

「・・・最悪だ・・・」

「おにーちゃん!」

ギユウツ!

「カクサス、お前に妹が・・・」

「えへへへ。」

カクサスに抱き着いた『妹』は嬉しそうだった。

「・・・(あんどり)」

カクサスに抱き着いた『妹』を見て口をあんどりと開けているナルとシロン。

「正直に言う・・・俺の妹のアスカだ・・・」
『嘘お!?』

アイリスとウィリアのため、急いで歩いたのでたった一日で帰ってきた。

「集会場に行って報告してくる・・・」

「頼んだ。ウィリアはこのとおり無理だし・・・」

カクサスがそう言ったとき、ウィリアは・・・

「・・・（ぐったり）」

シロンの背中でぐったりとしていた。

「それに・・・」

カクサスの視線の先には・・・

「おにーちゃん。えへへえへ。」

カクサスにべったりなアスカがいた。

「・・・だからな。」

「・・・お前も苦労してたんだな・・・」

夜。

「さて、アスカのことなんだが・・・」

スバルが議題に出したのは・・・

「？」

キョトンとしているアスカのことだった。

「一緒に住むのは良いが、俺の部屋に回さないでくれ・・・」

「やだぁ！お兄ちゃんと一緒にゃなきゃだぁ！」

「・・・多数決にするか。アスカとカクサスを同じ部屋にすべきだ
と思う人。」

「はいはいはい！」

『・・・』

アスカは一人だけ手を挙げた。

後は沈黙。

「アスカも一人部屋でな。」

「・・・ふう。」

決定にむくれるアスカ。

「・・・アイリスとウィリア、お風呂入れてあげるべきかしら？」

「・・・止めた方がいいですね・・・」

「・・・そうかも。」

アイリスとウィリアのことでちょっと話していたナコルとシロン。

報酬。

入手

スバル負傷時に全部紛失・・・

クエストクリア

岩龍の甲殻×2

その他

アスカ。

スバル、左側に傷。

アイリスとウィリア、ウィリアのみ胸を揉まれるのに弱いことが判明。
スバルの過去、判明。

第35話 スバルとウィリアの一週間クエスト開始、残りし者は訓練開始！

今回はカクサスの妹・アスカの説明です。

アスカ

ディアブロス雌、見た目13歳。

モデル…『暁のアマネカと蒼の巨神』の『アマネカ・マツハバスター
(知っている人いるのかな)』

備考…極度のブラコン＆『お兄ちゃん最強主義』者。
髪は黒色。
ウィリアよりぺったんこ。かろうじてA+。

以上です。

次回は日常編のつもりで、その次はリクエスト・コラボクエストです！

お楽しみに！

第36話 訪れぬ日常（前書き）

またまたウィリアファンの皆様、申し訳ありません！な36話です。
Rー15です。

日常編なのにまた擬人化娘が。

どんな娘なのかはお楽しみに。

追加募集もあります。

では、どうぞ！

第36話 訪れぬ日常

<うおおおおおっ!?!?>

カクサスの絶叫から朝が始まった。

「カクサス、どうし・・・」

駆け付けたスバルは状況を見て言葉を失った。

その状況とは・・・

「・・・（パクパク）」

「んんっ・・・」

口を開けて呆然とするカクサスと、裸で寝ているアスカだった。

「・・・何も・・・してないよな?」

「する訳無いだろう!?! 実の妹に!」

「うゝん・・・」

スバルとカクサスが言い合っていたとき、アスカが目を覚ました。

「お兄ちゃん、おはよ♪昨日は激しかったね・・・／＼／」

「・・・してないよな、本当に？」

「してない！俺は何も知らない！」

「な、なにが・・・」

「か、かくさ・・・」

「・・・（パクパク）」

ナコル・シロン・ウイリアが到着、同時に絶句した。

「ひどい・・・！私のことあんなに激しく襲って何も知らないなんて・・・」

「知らない！俺は何も知らないんだあああああっ！」

この問題は、後にスバルとシロンが真実を聞き、カクサスは事なきを得た。

ゴン！（↑カクサスの鉄拳がアスカに落ちた音）

「・・・いったあゝい・・・」

「あんな馬鹿なことをするからだ、これに懲りたらもうするな。」

「ううゝ・・・」

アスカはカクサスを睨んだ。

「さてと。今日は休みにするか・・・」

「休み!？」

「このところ出づっぱりだったからな・・・」

「そういえばそうよね・・・」

スバルが休む宣言をした。

その理由にシロンは何となく納得した。

「みんな、農場行こ!？」

「そうですね!行きましょう!」

「スバルはどうするの?」

「俺は・・・山に行く。」

「や、山・・・ですか。」

「ちよっとやりたいこともあるし・・・な。」

「やりたいこと・・・って、まさか、他の娘と（リコ、ピーン）するんじゃ・・・」

「シロン、大胆なこと言ってるよ。」

「あっ!？・・・はうう・・・／／／」

爆弾発言をしたシロン。

アイリスに指摘され、顔を赤くし俯いた。

「そんなことしないっての。瞑想だ、瞑想。」

「瞑想って確か、目を閉じて、心を落ち着かせる修業でしたよね？」

「だったら、ここでもやれるじゃん。」

「お前らがなんかするだろうが。」

「しっ、しないもん！」

「絶対しない！」

「昨日あんなにへなへなしていたのか？」

「そっ、それは・・・」

「はうう・・・」

スバルに痛いところを突かれ言い淀むアイリスとウイリア。

「あれは・・・慣れるしかないわね・・・」

「そんなことなら任せなさいな！」

「ローズ、あなたいつの間に・・・？」

いつの間にかいたローズに驚くナコル。

「任せるって・・・」

＜じゃ、行ってくる。＞

「い、行かないでー！」

「助けてー！」

身の危険を感じた二人は出ていこうとするスバルに助けを求めた。

だが、スバルは行ってしまった。

「ふふふ……。二人の胸を揉みしだかせていただきますわ……」

『あ……。あ……。あ……。あ……。』

「覚悟おー！」

『いやああああああああん！』

二人の絶叫がこだました。

「ナコル、トレーニングに付き合ってくれないか？」

「いいですよ？」

「恩に着る。」

「お兄ちゃん……。』

「あ、アスカ？」

「どうしました、アスカ？」

アスカの豹変に疑問を抱く二人。

「お兄ちゃんがナコルさんをトレーニング相手に選んだのって、胸

大きいからでしょ？」

「またえらく幼稚な……。そんなわけあるかっ！」

「嘘だよ！絶対そうだよ！お兄ちゃんが私と結婚しようとしてくれないのは胸が小さいから！？」

「お前が妹だという時点で無理だ。」

「胸が小さいからなんだぁ……」

「聞いてすらいないな……」

「えーい！」

「え！？」

アイリスはナコルに向かって突撃した。

ガシイッ！

むにゅっ！むにむにもみもみ……

「はぁん！んくっ、うあっ！あぁっ！」

アスカが突然ナコルの胸を揉み始めた。

当然ナコルは喘ぎ、シロンはただ呆然とするだけだった。

「スバルに相手してもらうか……」

カクサスはアスカ・ナコルを放置して行ってしまった。

その頃、アイリス・ウィリアは・・・

「ろ、ろーひゅ・・・も、もうらめえ（訳：ろ、ローズ・・・もうだめえ）・・・ふああああん！」

「あ、あらひをもうらめえ（訳：あ、あたしももうだめえ）・・・んああああっ！」

「まだまだですの・・・！あと1時間55分は続けますの！さあ、どんどん壊れなさいな！喘ぎなさいな！さあ、さあさあさあああああ！」

かなり限界に達していた。

（二人の呂律が回らなくなってしまいうまでかかった時間・・・5分）

「か、カクサス・・・ああん！た、助け・・・んあっ！」

「絶対許さないんだからあゝ！」

アスカとナコルの攻防も続いていた。

そのまま1時間がたった。

山。

スバルは滝に来ていた。

「・・・ここに来るのも久しぶりだな。・・・ここが一番落ち着く・・・」

滝を眺め、そう呟いた。

それから一人きりでしばらく滝を眺め続けていた。

「さーて、近くの岩の上で瞑想でも・・・」

ズン・・・ズシン・・・

「させてくれよ・・・」

そろそろ本来の目的を行おうとしたときに聞こえた足音に、泣き顔になるスバル。

数分後、近くの茂みから現れたのは、一匹のイヤンガルルガだった。

「くっ、手元にあるのがケムリ玉しかないなんてありえないだろ普通！？」

スバルは自分の運の無さを嘆いた。

（この時点で1時間半経過）

スバル宅。

「・・・嫌な予感がする・・・行かなきゃ！」

シロンはスバルを探しに行った。

「あうう・・・手が動かないよお・・・」

「はあっ・・・はあっ・・・か、勝ちました・・・」

アスカとナコルの攻防（簡単に言うとなコルが壊れるか否か）はナコルが勝った。

ナコルは胸を揉まれつづけた結果、少し力が抜け床に座り込んでいた。

一方・・・

「うぐっ・・・（2時間揉みつづけると言いましたが、無理かもしれませんの・・・）」

ローズはそう思っていたが・・・

「・・・あ・・・ん・・・んああああっ！」

「も・・・ら・・・はああああっ！」

二人は言葉が少なくなってきた。

最初の方は胸を隠そうとしていた両腕も、力無く垂れていた。

「あ、あっちの二人はもう気を失ったのかも・・・しれませんが・・・

。。気持ち良すぎて・・・」

複雑な心境のナコルだった。

場所は山に戻る。

イヤンガルルガと対峙したスバル。

だがそのイヤンガルルガはスバルを見つめ、全く動かない。

「動かないなら逃げるチャンスだ！スマン、煙を受けてくれ！」

スバルはケムリ玉を地面にぶつけた。

バフン！

そしてお決まりのこの状況。

「げっほ、げほ！相変わらずの煙だ・・・！だが逃げるなら今のうちか・・・！」

スバルが踵を返して立ち去ろうとしたとき。

「けほっ、あ、あの、ま、待ってください！」

「・・・嘘だ・・・。嘘だと言ってくれ・・・。」

後ろからした声にスバルが足を止め、頭を抱えて唸っていたうちに煙は消え去った。

「・・・もう嫌だ・・・。なんなんだよ俺・・・。俺、女には縁がないはずだぞ・・・。」

「あ、あの・・・。」

煙がはれたところには、スバルと紫色の長髪の女の子がいた。

・・・裸の。

「・・・で？」

「あ、あなたと偶然会ってから・・・その・・・あなたのことが・・・す、好きになりました・・・。だ、だから・・・。」

「だから・・・？」

「わ、私をあなたの生涯の伴侶にしてください！」

ずでっ！（↑スバルがずっこけた音）

「し、生涯の伴侶につて・・・」

「あっ！間違えました！あの、そのつまり、えと・・・」
「・・・付き合ってほしい、と？」

「は、はい！」

壮大な言い間違いを直したスバル。

「いや、それは・・・」

「お願いします！」

ギュッ！（ふにゅん！）

「いや、だから・・・」

「スバル・・・？」

スバルが必死に言い返そうとしたとき、シロンが来た。

「シロン！？」

「瞑想するだけって言ったのに、瞑想するだけって言ってたのにい・

・・・！」

「瞑想するつもりだったのは確かだ！これは・・・」

「スバルの嘘つきいゝ！」

パチイン！

「ごめんなさい！」

「いや、わかってくれればそれで良いさ・・・痛つつ・・・」

「スバル、私になんでもしていいよ・・・お詫びになるんなら（リコピン。）も・・・」

「シロン、俺はもう許しているんだ、そんなことはしなくていい。」
「・・・はい。」

「あ、あの、私は・・・」

シロンが暴走、それをスバルが宥める。

そんな中、元イヤンガルガの女の子はおずおずと質問をした。

「あ・・・っと、そうだった。うーん・・・」

「この子も一緒に住むのはどうかしら？（これ以上ライバル増えるの嫌なんだけどね・・・）」

「一緒に・・・？」

一緒に住む、という言葉に反応。

「はい！よろしく願います！」

「だったら名前を・・・名前、ある？　ないなら付けるけど・・・」

「あ、名前ないんです。それでお願いなんですけど、私の名前、『ファレノプシス』から付けてくれませんか・・・？」

「いいわよ。」

・・・名前考案中・・・

「考えた結果だけど、『レノシア』でいいか？」

「・・・はいっ！」

レノシアと一緒に住むことになった。

「・・・なんだかんだで夕方か。帰るか。」

「ええ。」

「はい！」

スバル・シロン・レノシアは帰りはじめた。

「ただいま・・・って、なんだこのシミは？」

「お帰りっす。あれ、その人は誰っすか？」

「ああ、新しく一緒に住むことになったレノシアだ。」

「よ、よろしくお願いします！」

「それで、このシミは？」

「ローズが自分の限界を超えてアイリスとウィリアの胸を揉み続けたら気を失って、そのままおもらし・・・」

「・・・カクサスに頼んで鉄拳制裁だな・・・」

「胸を・・・揉んだ・・・胸を・・・」

「レノシア？」

「ふにゃあん・・・」

「れ、レノシア！？大丈夫なの！？」

レノシアがいきなり倒れたので慌てたシロン。

彼女はそういうことに対して免疫がないウブな子だった・・・

報酬。

入手、クエストクリア
クエスト未受注のため無し。

その他

レノシア。

レノシア、ウブ判明。

第一次八つ当たり戦争、ナコルの勝利。

アイリスとウィリア、二日連続でダウン。

(ローズ、カクサスから鉄拳制裁を受ける)

スバル争奪戦激化の予感・・・？

第36話 訪れぬ日常（後書き）

まずはレノシアの説明です。

レノシア

イャンガルガ雌、見た目15歳。

モデル…『萌え萌え2次大戦（略）2』の『ゆきかぜ』

備考…髪の色は紫。かなり長い髪。

ウブ。

性格は一途で純情。

名前の由来…コチヨウランの学名、『ファレノプシス』より。花言葉は『貴方を愛します』

以上です。

募集するのは、『花の英語名に基づいた名前』です。
ネタがもう無くなって・・・

次回、リクエスト・コラボクエストです！

お楽しみに！

(今回の○はあるネタを使っています)

第37話

守りたい『もの』

その1「レノシアの覚悟、アイリスの暴走」

初コラボとなった37話です！

まずは一つお礼を。

神威 銀時さん、ありがとうございました！

どんな内容かは今回は全く触れていません。お楽しみにということ
で・・・

（『アイリスの暴走』がなにか、も）

では、どうぞ！

第37話

守りたい『もの』

その1「レノシアの覚悟、アイリスの暴走」

朝。

「あのー、スバルさん？朝ですよー？」

レノシアがスバルを起こしに来た。

「失礼しまー・・・すううつ！？」

レノシアが見たのは、普通に寝ているスバル（の人形）とその横に添い寝していたシロンだった。

「うええ！？え、あ、あの・・・はふう・・・」

レノシアは気を失った。

ちなみにスバルが人形を置いていた。

外。

「ふっ！はっ！せいっ！」

「ていっ！やあっ！それっ！」

スバルがナコルと訓練をしていた。

昨日に比べれば左側の対処も問題なくなっている。

「ぜえ、ぜえ、も、もう無理いっ！これ以上走れないよぉっ！」

「わがまま言うな。ほら、あと5周だ！」

「えええっ！？」

アイリスはカクサスの特別特訓を受けていた。

「それに、気のせいかもしれないが、・・・アイリス、太った気がするぞ・・・」

「いやああああああっ！？」

「お、走った。スバル直々の感想は効果あったな。」

カクサスはスバルが最近アイリスに対して思っていたことをそのまま言った。

アイリスは悲鳴をあげ、全速力で走りはじめた。

「・・・ふっ！」

ストーン！

クリムに見てもらいながら弓の扱いを練習していた。

「ウィリア、ちょっと腕を上げた方が狙いが良くなると聞いたっす。」

「

「ホント？あ、クリム、ギザミちゃんどうしたの？」

「何もしないうちに頭を殴ってきたっす。そして全身を縄で縛って柱に括りつけてあるっす。」

「それなら、完璧だね。」

「じゃ、もう一回やってみるっす！」

「うん！」

30分経過。

「・・・そろそろか。」

「ご飯の時間ですね。」

「皆、行くぞー！」

その一言でアイリスを除く全員が練習を止めた。

アイリスは・・・

「太ったなんて・・・太ったなんてえ・・・言われたくないよお！」

あと2週残して疾走していた。

リビング。

「さて、クエストだが・・・実は既にウィリアが受けてきた。」

「あのね？このクエストに行きたくて・・・」

「それでメンバーだが、俺とウィリアは確実、それとアイリス、ナ
コル、シロン。カクサスは登録しないといけないし・・・」

「そういえば登録してないな・・・」

「残るのはクリームとローズ、アスカとレノシア・・・」

「あっ、あの！わ、私も行きます！」

スバルがメンバーを言ったとき、レノシアが行きたいと言った。

「れ、レノシア！？危ないわよ！？」

「で、でも！行きたいんです！私も戦いたいんです！」

「で、でもレノシア、身体が弱いつて聞きましたけど・・・」

「だからなんです！もう誰かの足手まといになりたくないんです！皆さんの役に立ちたいんです！」

シロンやナコルが止めるように説得したが、レノシアの決意は固い。

「・・・レノシア。」

「は、はい！」

スバルがレノシアに静かに言った。

「5分・・・アイリスと戦ってほしい。」

「え、ええっ！？」

「な、なんで私！？」

スバルの発言に驚く二人。

「・・・この中で一番実力が無いのがアイリスだと思ったただけだ・・・」

「うえっ！？」

「え．．．と．．．」

告げられた真実。

「うわああああああん！私だって、私だってちゃんと練習していたもん！」

「でも、太っている気がしますね．．．。特にお腹が。」
「うぐう！」

「顔もふっくらしてきたし．．．」
「ふぐっ！」

「（ぷにぷに）太股もぷにぷにしてるよ？」
「ぐっさあ！」

「このままじゃスバルに嫌われるかもしれないっすね。」
「う．．．あ．．．」

T・K・O。

「あ、あの、アイリス．．．さん？」

「スバル！5分じゃだめ！1時間！いや、彼女の限界まで戦わせて
！」

アイリス、爆発。

「い、いや、5分でも持つかわからないんだぞ．．．？」

「5分持たなかったらスバルが戦って！」

「・・・お前ら・・・」

『てへっ♪』

アイリスを煽った四人は舌をチロツと出した。

「・・・というわけだ。」

「は、はあ・・・」

レノシアもよくわからない状況になった。

外。

「レノシア・・・。覚悟してね・・・」

「ひ、ひい・・・」

完全に戦闘モードになったアイリスに怯えるレノシア。

レノシアは一応片手剣を持っている。

「じゃあ、勝負開始！」

「だりゃあああああああ！」

「きゃあああああああっ！」

グアン！

剣と剣がぶつかったと思えない音がした。

「うあゝ・・・、つ、強いですゝ・・・」

「はああああああっ！」

「ひいいいいい！」

10分間アイリスの猛攻が続いた。

「はっ、はっ、はっ・・・決まりそうなのに決まらないよ・・・」
「こっ、今度はこちらの番ですうゝ！」

フオン！

「ひよわあ！？」

ボゴオオオオン！

「・・・嘘・・・ですよね？」
「・・・現実だ。」

レノシアが剣を振り下ろした跡には大きな溝ができていた。

「ん・・・しょっ！えーい！」
「わああああ！」

ドゴオオオオン！

ボカアアアアン！

何度も響く轟音。

この音を、たった一人の身体の弱い女の子が出しているとは思えない。

8分後・・・

「はあ、はあ、あ、危な・・・」
「はあ、はあ、げほっ！げほっごほっ！」

「レノシア！大丈夫！？」

「だ、大じょ・・・げほっ！」

「終りよ・・・あっちもダウンしてるし・・・」

「うぎゅ・・・」

対戦は終了した。

「レノシア、大丈夫なの？」

「は、はい。す、すいません・・・げほっ！」

「あああ、まだ咳込んでるっす。」

「だ、大丈夫です、けほっ。」

レノシアを介抱するシロン・クリム。

「アイリス、大丈夫でした？」

「あ、あの攻撃は危険だよ・・・」

「ホントに危険な音がしたね・・・」

「あふう・・・」

こちらもぐだぐだに。

「一応結果だが・・・どうしたものか・・・」

「確かに・・・。力は申し分ないんだが、体力不足で病弱・・・」

「病弱じゃなくて身体が弱いだけだ……。だがまあ、不安要素はあるしなあ……」

「いざという時はすぐ下がれるようにするという手しかないな。」

「基本的に後続に置き、最後の砦にするか……」

レノシアをどうするかに困るスバルとカクサスだった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
・
・
・

第37話

守りたい『もの』

その1「レノシアの覚悟、アイリスの暴走」

今回、初コラボのくせに何もしてないと思った方、いると思いますが、レノシアをクエストに参加させたかったので、こんな形になりました。

アイリスの暴走理由、普通ならセクハラ該当しますね・・・

また二つ程募集追加します！一つは人気投票です。

1. この話が終わった後に何話か1話完結式の話を組みたいため、どんな話がいいか
2. 投票…誰を嫁としたいか（対象…アイリス・ナコル・ウィリア・シロン・アスカ・レノシア）

537

期間は、1が5月25日、2が6月9日までです。

お気軽にどうぞ。

次回は出発、また擬人化娘増えます（とある事情で）！

お楽しみに！

第38話

守りたい『もの』

その2

「出陣とツンデレとカクサスに甚

38話です！

今回はローズ・アスカ対策のキャラが出ます！

ローズ対策の娘は感想を見てくれた方にはわかる、あのキャラです！

では、どうぞ！

第38話

守りたい『もの』

その2

「出陣とツンデレとカクサスに甚

集会場。

カクサスとレノシアがハンター登録していた。

「・・・レノシアが参加したから布陣を決めないとな・・・」

「ええ・・・。レノシアは身体が弱いから後ろにした方がいいですね・・・」

「俺とカクサスが前衛、ナコルが中堅、アイリスとシロンが後衛・・・」

「私も後衛？」

「二人で後ろから炎を吐き続ければなんとかなるだろうしな・・・」

「あたしは？」

「ウィリアは遊撃を頼みたいが・・・」

「いいよ！」

「レノシアはすぐ下げられるようにしないとな・・・（相手はファング・ドスファンゴ・・・）」

スバルが考えているときに・・・

「終わったぞ。」

「あ、カクサス。」

「・・・まずは現場に行くか。」

「そうですね。」

こうして7人は出撃した。

クエスト…オツコトヌシ来襲!!

開始。

(??? ..さませんの。)

「・・・今何か声がしなかったか？」
「気のせいですよ。」

「現場は学園……。確か、『SOS学園』……だったな……」

「あ、私行ったことあるよ？」

「ヴィヴィオ……。元気かな……。？」

「元気だろ。」

「そ……。うだね。」

「ご主人も大変だニャ。皆に迫られ告白され、そしてキスされ……」

「うっせ。レノシアはわからないが後は家族として好きなんじゃないのか？」

「はぁ……。 (ニブチンだニャ。)」

「す、スバルさんがみみ皆さんと、きききキス……。キスってあの口同士でチュッてやる……。はふう……」

「……。レノシアはもうちょっと恋愛ごとに免疫を持った方がいいわね……」

相変わらずの行軍。

昼。

「・・・やめてくださっ!？」

ゴチン。

「いったあゝい・・・」

「痛いですう・・・」

何の夢を見たかわからないが、突如跳ね起きたレノシアに頭をぶつけられたアイリス。

「・・・あれ、今・・・」

「もうお昼よ。」

「あ、ありがとうございます・・・」

「レノシア、あなたもうちょっと恋愛ごとに免疫を持った方がいいわ。そうでもない何と出来ないわよ?」

「はうう・・・」

シロンの指摘に縮こまるレノシア。

「魚も焼け、準備が出来て。いつもの通り・・・」

グオワアアアア!

「来るんだよなあ・・・（泣）」

「ふ、フルフル・・・」

「け、ケムリ玉ケムリ玉・・・」

「食らうニャ〜！」

ノブが投げたのは、スバルが作ったケムリ玉を改良した『ケムリ玉EX』だ。

ボン！

辺り一面にもものすごい量の煙が発生した。

この煙が後にある幸せを呼ぶことに・・・

「げほお！ごほお！うお！目に染みる！催涙効果まであるし！ノブ、お前、なにを・・・」

「ご主人の作ったケムリ玉を改良したヤツニャげふう！」

「お前は・・・！」

「げほっ、な、なんてことしてくれるのよ！」

催涙効果まである煙の中でノブとスバルが言い争っていたとき、言い方に棘のある女の子の声がした。

煙、はれる。

「あんた・・・一体何してくれるのよ！」

「こいつに言え！」

「元々はご主人のせいニャ！」

「二人とも痺れろー！」

『うわぁっ！』

フルフル娘が電流を放った。

それを二人が避けたとき。

「あの・・・あなた・・・」

ナコルがおずおずとフルフル娘に言う。

「・・・なによ？」

「・・・裸、ですよ？今。」

「・・・え？」

フルフル娘は自分の身体を見る。

ナコルが地雷を踏んだ瞬間だった。

「・・・いつ、いやああああああっ！」

ドスッ！

「がっ・・・」

「はっ、裸・・・スバルさんに・・・見られ・・・はふう・・・」

悲鳴がこだました。

同時に殴られたスバルとレノシアが気絶した。

「うう・・・、恥よ・・・」

「いきなり殴られたのには驚いた・・・。ところで名前は？」

「あ、あんたなんか教える名前なんてないわ！」

「それでも名前があることをばらすなんて・・・」

「う、うっさい！」

言い合い開始。

「・・・（悲鳴・・・？）」

そんな中カクサスが悲鳴を聞いた。

「スバル、少し抜けるが・・・いいか？」

「それは構わないが・・・何かあったか？」

「悲鳴が聞こえた・・・」

「了解、できるだけ早く戻ってこいよ。」

「承知、恩に着るっ！」

カクサスは悲鳴のした方へ走っていった。

「さて、名前名前・・・」

「待って、今取引中なの。」

「取引・・・？」

スバルが見た先には・・・

「今、ここにノブ特製の可愛い服があります。」

「ほ、欲しい・・・」

「欲しいなら私たちに名前を教えなさい。」

「ううゝ・・・」

見事に取り引だった。

Side カクサス

カクサスは悲鳴のした方へ走っていた。

「これから先はラージャンの住家・・・。ラージャンに襲われたか・・・！」

間に合って・・・くれ・・・！

カクサスは足を早めた。

Change point 悲鳴の上がった所 (Side 女の子)

ガァッ！

「やめて……。来ないで……。い、いや……。」

一人の女の子がラージャンに襲われていた。

女の子は必死に後退りしていた。

だが……

トン。

「っ！」

もう下がれなくなった。

（女の子…私、もう死ぬのかなあ……。）

ガァァッ！

ついにラージャンが女の子を襲おうと跳びかかった。

「いやあああああ！」

女の子は目を閉じた。

「うおらぁっ！」

ガフォッ！

（女の子…えっ？）

謎の声とラージャンのくぐもった声、いつまで経ってもこない衝撃。

それに疑問を感じた女の子は恐る恐る目を開けた。

視界の先には・・・

「大丈夫か！？」

男性ーカクサスーがいた。

S i d e b a c k カクサス

「大丈夫か!？」

「・・・はい・・・（ぽーっ・・・）。」

「・・・大丈夫・・・みたいだな。」

ガァァッ!

「（逆上した上に電撃!？このままではこの娘も食らう!）すまない、少し手荒な行動をする!」

「え、わ、ひゃあっ!？」

女の子を抱き抱え、その場を離脱したカクサス。

「（まだ追いかけてくるか・・・。あまりスバル達と離れたくないが、仕方がない・・・!）ここで相手をしてやろう・・・。少し離れていてくれ・・・」

「・・・」

「早く!」

「は、はいい!」

女の子は巨木の後ろに隠れた。

「さあ・・・いくぞ！」

カクサスとラージャンの戦いが始まった。

S i d e e n d

「・・・」

「スバル、どうしたの？」

ある一点を見つめたままぼうっとしているスバルに気づいたウィリアムがスバルに話しかけた。

「悲鳴が聞こえたといって一人いったカクサスが心配だな・・・」

「もしカクサスに何かあったら、アスカが大変だね・・・」

「カクサス、無事戻ってこいよ・・・」

カクサスが向かった方向を見つめ、スバルは呟いた。

そのとき。

「お姉様 あああっ！」

「えっ？」

いきなりフルフル娘に浴びせられる声。

その声の主は・・・

「一目見て貴女に胸がときめましたの！ 貴女を・・・貴女をお姉様と呼ばせてくださいまし！」

「な、何なのよこの子は！？」

本来はいないはずのローズだった。

「あ、ギザミちゃんの新しい対象に・・・」

「スバル、取引成功しました！」

「どうなのかを聞きたいが・・・で、名前は？」

「ライラ、というそうです。」

「なるほどね・・・」

そのライラは・・・

「お願いですの！ お姉様と呼ばせてくださいませ！」

「いい加減に・・・しろおおっ！」
「あぎやああああっ!？」

電流発生。

ローズはそのまま倒れた。

「はあ、はあ・・・。なんなの、この子・・・」

「ご、ごめんなさい!こんな変な子で、えっちな子で、自分のしたいことに素直になっちゃう子で・・・」

「・・・くすっ。」

「・・・ふえ?」

ライラがくすつと笑ったことにきよとしたウィリア。

「あなたが謝ることはないのよ。ただびっくりしただけ。・・・まあ、あんなのに『お姉様』なんて呼ばれるのはゴメンけどね。」
「ほっ・・・」

ライラの一言にほつとしたウィリア。

ライラとウィリア、気が合うなと思うスバルだった。

Side カクサス

「くっ・・・（流石に誰かを守りながら戦うのは辛いな・・・）」

ゼヒユ、ゼヒユ、バオオオオッ！

全身ボロボロになりながらなお戦うカクサス。

相手のラージャンは息絶え絶えながら、未だ戦闘の意志衰えないまま。

「これで・・・最後だあっ！」

ガアアアアッ！

ズドオン！

「・・・」

・
・
・

「・・・（ゴクツ）」

ズウウウウウウウン・・・

決着がついた。

最後に立っていたのは・・・

「ぐうつ・・・、後少し左にずれていたら俺が死んでいた・・・」

カクサスだった。

「無事・・・か？」

「え、あ、はい。あなたの方こそ・・・」

「いや、俺は平気だ。貴女が無事で良かった・・・」 「くくっ！／＼」

カクサスが見せた笑顔に、顔を赤くする女の子。

「時間がかかったな・・・俺はもう行く。じゃあ「わ、私も連れてって！」・・・（汗）」

突然の発言。

「何なんだいきなり・・・。何故連れて行って欲しいなどと・・・」
「そ、それは・・・あの、一人だと心細いし、あ、あなたと離れたくない・・・から・・・」

「・・・」

女の子の発言に呆然とするカクサス。

「・・・まあ、いいか。あ、名前・・・」

「私、ナデシコ。ディアブロスなの。きやつ、言っちゃった。／／

／

「ディ、ディアブロスだと・・・」

事実に驚くカクサス。

「これからよろしく・・・ね。」

ギュ。

「・・・／／／」

カクサスは顔を赤くしながらスバル達のところに戻った。

S i d e e n d

「轟音が止んだ・・・」

「カクサス・・・、無事だろうか・・・」

「心配ですね・・・」

「こ、怖いですう・・・」

カクサスの心配をする者、恐怖する者がいた。

ガサ。

『わひゃあああああっ！』

悲鳴をあげるアイリス・レノシア・ライラ。

「すまない、驚かしてしまったな・・・」

「カクサス！無事だった・・・か・・・」

スバルは、カクサスの無事を確認したと同時に絶句した。

なぜかというと・・・

「・・・／／／」

女の子^{ナデシコ}がいたからだ。

「・・・カクサス、その子、どうした・・・？」

「・・・」

「アスカがなんて言うか・・・」

「言わないでくれ・・・」

ニヤニヤしているアイリス。

ナデシコは抱きしめているカクサスの腕をさらに強く抱きしめた。

「カクサス、ちょっと・・・」

「ん、ナデシコ、ちょっと離れてくれないか？」
「うん。」

「それでスバル、どうした？」

「・・・お前に春が来たか・・・」

「スバル、ちよっ・・・」

「冗談。ライラといい、あの子といい、同居人の数が多くなったから家を改築した方がいいかな・・・」

「ああ・・・」

そんな話をしている頃・・・

「ナデシコはカクサスが好きなの？」

「うん・・・／＼／＼」

「へえ。で、で？どうして好きになったの？」

「えと、それは・・・」

ナデシコのことですり上がっていた。

「スバル、ここからなら今日中に学園に着くよ。」

「じゃあ、行くか！」

「うん！」

一行が歩きだしたとき・・・

カサ。

「ん？」

「シロン、どうした？」

「今なにか黒いものを見たんだけど・・・」

「気のせいだろ。」

「・・・そうね。」

これが相手だとは、誰も知らなかった・・・

「ヴィヴィオ、待っててね！今行くからね！」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第38話

守りたい『もの』

その2

「出陣とツンデレとカクサスに甚

今回はまず、学園名・ヴィヴィオの名前のみ出演の許可を下さった
神威 銀時さん、ローズ対策のライラの原案者、フォックさんにお
礼を。

ありがとうございました！

神威 銀時さんとヴィヴィオにはこのクエストの間出ていただきま
す！

そして、二人の説明。

ライラ（原案…フォックさん）

フルフル雌、見た目14歳

モデル…『とある化学の超電磁砲』の『御坂美琴』

備考…容姿はそのまんま美琴。

スバル限定でツンデレ。基本は優しい。

名前はライラック（Lilac）より。花言葉は『友情』

ナデシコ

ディアブロス亜種雌、見た目16歳。

備考…黒髪の翔子（バカテス。髪のみ）。

性格はおとなしく、臆病。

一人ぼっちになったりなど孤独になることや、幽霊が嫌い。

胸のサイズはC＋。

名前の由来は撫子より。花言葉は『純愛』

以上です。

（ちなみに、レノシアの胸のサイズはCです）

初めてツンデレキャラを書きましたが、如何でしょうか・・・？

次回、ついに学園に！敵の正体とは！？

お楽しみに！

第39話

守りたい『もの』

その3

「再開とフリーティング、『オバ

39話です！お待たせしました！クラブです！

最後の『』はナデシコだけが言ったわけではありません。
なにがどうしたのか？

それは見てのお楽しみ！

では、どうぞ！

第39話

守りたい『もの』

その3

「再開とブリーティング、『オバ

「と、遠かった・・・」

「はひっ、はひっ、はひっ・・・」

「レノシア、大丈夫ですか？顔色悪いですよ？」

「だ、大丈夫ですう・・・ゲッホ、ゲホ！ゴホッ！」

「どこが大丈夫なの！？苦しそうじゃない！」

長時間歩いた為、レノシアは顔が青く、ふらふらになっていた。

「早く！学園に入らないと！」

「でも、許可を得ないと駄目なんじゃないのか？」

「あたし、許可なくても入れるよ！」

「じゃあ、早く！」

「ヴィヴィオ、勝手に入るね！」

保健室。

「はひゅ、はひゅ、はひゅ・・・」

「・・・戦線離脱確定だな。」

「・・・仕方がない。」

「そ、そんなぁ・・・ゲホッ！ゲホッ！」

「とにかく、まずは話をしないとな……。理事長……。ね……」

「わ、私、残るね……」

「ナデシコ、頼む。」

「……(ぽーっ)／／／」

顔を赤くするナデシコ。

「さて、会いに行かな「ウィリアー！」……。ここ、学校だよな？」
「ヴィヴィオ！久しぶりー！」

スバルが保健室を出ようとしたとき、一人の少女がウィリアに向かって走り抜けていった。

ヴィヴィオと呼ばれた少女は、ウィリアに会えて喜んでいた。

「だめだよヴィヴィオ、理事長室で待ってなきゃ。」

「し、死神!？」

『ひいひいひいひいっ!』

いきなり現れた死神に驚くスバルと絶叫するシロンとナデシコ。

「あ、どうも。神威 銀時です。」

「……。どうも、スバルです。二人とも安心し……。ろ……」

スバルはお互いに抱き合って震えているシロンとナデシコを見た。

「・・・！にひっ♪」

アイリスがなにか思いついたらしく、二人に近寄った。

そして、耳元で囁いた。

「・・・脚のない幽霊。」

『いやあああああ！』

「・・・誰もいないお寺から聞こえるお経・・・」
『聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえないのに動くお皿。』あーっ！やあーっ！』

アイリスが二人を散々弄っていた。

「あ、あなたがローズですか？」

「うるさいですの。私はお姉様を探すのに必死なんですの！お姉様様！どこにいらっしゃるんですの！？」

「本当に黒子みたいですわね。」

「黒子が誰かはわかりませんが・・・と、とりあえずクエストについて話を。」

「おっと、そうですね。では、理事長室で。ヴィヴィオ、行くよ！」
「はい。」

「あ、あたしも行く！」

スバル・カクサス・ウィリアは神威 銀時さんについていった。

その頃・・・

「ファンゴと衝突死した人の幽霊・・・あれ？」

『ブクブクブクブク・・・』

「二人とも・・・気絶してます。」

「ありゃ、やりすぎちゃった。」

アイリスはシロンとナデシコを気絶させてしまっていた。

理事長室。

「では、クエストの説明を理事長から・・・」

「はい。」

『えっ、理事長！？』

神威 銀時さんが理事長と呼び、ヴィヴィオが返事をしたことに驚

くスバルとカクサス。

「ウィリア、言ってなかったの？」

「ごめん・・・」

「・・・そ、そんなことよりも、相手の情報が欲しいのですくお姉様！どこですの！？」が・・・。「すみません、ちょっとくやっ

と見つけましたわ、お姉様！さあ、私と愛のく嫌っつてんの！

くくお姉様のいけずう！さあさあさあ！くい、いい加減にしろ

おおっ！く（ドン！）あぎゃあああああ！く・・・はあ。」

「か、片付いたみたいだな。」

「あ、あれがいつものことなんですか・・・？」

「あ、いえ。昨日始まったことなんで・・・」

「では気を取り直して、このクエストの詳細を坂田ヴィヴィオが説明します！」

「そういえばヴィヴィオのパパとママ、結婚したって聞いたけど・・・」

「前にだけどね。」

「いいなあ・・・」

「ウィリア、話が脱線している。」

「あっ！ごめんスバル！」

クエストの内容。

オットヌシと呼ばれる黒いドスファンゴを中心とした群れがこの

学園に攻め寄せてきている。撃退してオツコトヌシから学園を守ってほしい。

勝利条件…オツコトヌシの討伐あるいは群れの撃退

敗北条件…防衛地点の耐久力0

「黒いドスファンゴ・・・」

「ヴィヴィオ・・・だったか？そのオツコトヌシとやらの写真があると嬉しいのだが・・・」

「写真は・・・えと・・・あ、これです。」

ヴィヴィオは写真を見せた。

「こ、これは・・・！」

「黒いんじゃない！なにかが生えて黒くなったんだ！」

「うぷっ・・・」

「ヴィヴィオ？ウィリアちゃん顔が真っ青なんだけど・・・」

「えっ！？」

ヴィヴィオが見たとき、口を押さえて顔を真っ青にしたウィリアがいた。

「ヴィヴィオ・・・。トイレ・・・どこ・・・？」

「ウィリア、大丈夫？」

「気持ち悪いよお・・・うぷっ・・・」

ウィリア、離脱。

「こいつは・・・」

「俺達二人でやるしかないか・・・。神威さん、このクエスト、受けましょう！」

「ありがとうございます！オットヌシが近づいたらお知らせしますので。」

「わかりました。では、また。」

「今戻った・・・シロンとレノシアとナデシコはどうしたんだ？」
「それは・・・」

「いやだいやだいやだ・・・」

「こわいですこわいですこわいですう・・・」

「・・・（ガタガタブルブル）」

スバルはシロンとレノシアとナデシコが隅で蹲っているのを見て、ナコルに聞いた。

ドゴン！（↑カクサスの鉄拳がアイリスに落ちた音）

「・・・痛いよぉ・・・」

「バカなことするからよ。」

「大丈夫だ、幽霊なんていない。」

『ホント・・・？』

「・・・（うるうる）」

三人とも涙目だ。

「ホントだから安心しな。」

『怖かった（よぉ／ですう）！』

「だっ！二人一遍に飛びつくな！」

「だってえ、ぐすっ、怖かったんだもおっくん！」

「ふええええん！」

「落ち着け、な？」

宥めるスバル。

「（ぎゅうっ）・・・」

「幽霊とかが怖いようだな・・・」

「くくく！くくく！（コクコクコクコク）」

「先ずは落ち着いて、な？」

カクサスは怖がり震えるナデシコを落ち着かせようとして、どうにか落ち着かせることに成功した。

「・・・あの・・・」

「ん？」

ナデシコが話を切り出す。

「今日・・・一緒に・・・」

「一緒に？」

「寝て・・・くれない？」

「・・・は？」

「だって・・・、怖いんだもん・・・。オバケ・・・」

「そんなの居ない。」

『スバル（さん）・・・』

「ん？」

「一緒に・・・寝て（くれませんか）・・・？」

「いきなり何を言い出すかと思えば・・・」

「だって怖いのだよ！？オバケよ！？」

「居ないって居ないって。」

「私・・・、小さい頃から怖いのが苦手で・・・」
「・・・わかったわかった。」

その夜、スバルとカクサスは全く眠れなかった。理由は、いつ襲撃があるか判らなかつたからだ。

シロン・レノシア・ナデシコは安心しきつたかのような寝顔だった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
・
・
・

第39話

守りたい『もの』

その3

「再開とフリーティング、『オバ

今回は神威 銀時さんとヴィヴィオに出演していただきました！

ありがとうございました！

このクエスト編でまだまだ出演していただきます！

そして、シロンとレノシアとナデシコの可愛いところがついにお目見えしました。

幽霊嫌い。

でも、よくある話だと思うのですが・・・

次回、オツコトヌシ襲来！

お楽しみに！

第40話

守りたい『もの』

その4

「現れた黒き墮大猪、孤立した」

40話です！

ついにオツコトヌシ襲撃！

どうなるのか！？

では、どうぞ！

第40話

守りたい『もの』

その4

「現れた黒き墮大猪、孤立した」

早朝。

屋上でスバルとカクサスが見張りをしていた。

「今のところ敵影無し・・・」

「今回の敵だが・・・嫌な予感が絶えないな・・・」

「誰かが死ぬとかか？」

「ぼっ、馬鹿を言うな！ただな、誰かが取り憑かれてしまうような気がしてな・・・」

「あいつが、俺達の誰かに呪いをかけて死んでいく、と・・・。見た感じ、ありえる話だな。」

「まあ、誰も居ない頃に来てほしいもんだ。」

「納得。」

二人が相手のことで話し合っていると・・・

<きゃあああああああ！？>

『ぶっ!?!?』

悲鳴。

お茶を飲んでいた二人はその悲鳴にお茶を吹き出してしまう。

「ゴホッ、ゴホッ！な、ナデシコの悲鳴だ！」

「ゲホッ！い、行ってくる！」

「ああ！見張りは任せておけ！早く彼女のところに行け！」

カクサスはナデシコの所へ走っていった。

「・・・幽霊でも見たのか？」

ある一室前の廊下。

「どうしたんだ！？」

「カクサスうゝ！」

ひしっ！

「あそこに・・・なんか白くて『ホニャホニャ』って言うオバケが居たの・・・」

「『ホニヤホニヤ』？」

カクサスはナデシコが指差した方へ歩いていった。

「ここにいるみたいだな・・・」

覗き込んだ所には・・・

「チヨメチヨメ！」

「・・・なんかいた・・・。この学園には駄目警部補でもいるのか・・・？」

カクサスはその『白くて小さい何か』を摘んでそう言った。

「別に何ともないぞ？」

「！！（ブルブル）」

「・・・」

ぽいつ。

「チヨメッ！」

ヒョイツ！

「チョメツ！」

カクサスは空中に『白くて小さい何か』を投げて遊んでいた。

「止めて止めて止めてえ〜！」

「いや、だから大丈夫だって・・・」

「い〜やあ〜！」

ナデシコの悲鳴が再びこだました。

再び屋上。

「・・・異常な・・・いや、待て、あれは・・・ついにお出ましか
！」

スバルは傍らに置いていた太刀を掴んで走り出した。

理事長室前。

「神威さん！奴を確認しました！」

「こちらの方でも確認しました！では、お願いします！」
「わかりました！」

スバルはこうして只一人出撃した。

「こんな時にヴィヴィオがいないなんて・・・」

理事長室に響く、嘆き。

ダァン！

「親玉・・・どこだ・・・いた！後続か！」

ブオオオオオオオツ！

「下っ端に任せて自分は高見の見物か！はっ！だあっ！」

スバルVS黒いブルファングの群れ。

見ただけでは全く勝機のない戦いだが、それでもスバルは立ち向かった。

廊下。

「チヨメチヨメ！」

「お、あの白いのが逃げた・・・っ！しまった！」

「カクサス！？」

「すまない、仕事なんだ！」

カクサスは走り去った。

「一人ぼっちにしないでえ・・・ぐす。」

ナデシコは一人ぼっちになって涙目になっていた。

「おらあっ！チッ！多勢に無勢、このままじゃ押される・・・」
「はあっ！」

ブアッ！？

「カクサス！」

「すまない、遅くなった！」

「いや、助かった！・・・さあ、形勢逆転だ！」

『うおおおおおっ！』

スバルとカクサス、二人はブルファンゴの群れの中に突撃した。

ある教室。

「騒がしいわね・・・。一体何が・・・うわっ！？」

「ライラ、どうしました・・・って、これはまず・・・きゆう。」

「ナコル！？ちよっと！気絶してどうするのよ！？」

外を見た瞬間気絶したナコル。

ライラはしっかりと外を見ていなかった。

外では・・・

沢山のブルファング。

中央で空に舞い上がるブルファング。

落下による死亡。それにより飛び散った鮮血。

瞬く間に築き上げられていく死体の山。

「うわぁ・・・」

ライラも絶句していた。

外。

「あいつらは一体何をしているんだ!？」
「数が多すぎる! 呼びに行く隙もない!」

苦戦しているように見える二人だが、既に三つ目の死体の山を築き上げ、四つ目に差し掛かっている。

・ ・ ・ オオオオオオオオオオオツ！

たった二人に攻めきれないことに痺れを切らしたオツコトヌシが吠えた。

「ついに親玉が・ ・ ・」

「動く・ ・ ・！」

オツコトヌシは二人目掛けて突進をした。

「チツ！」

「くっ！」

その巨体故、回避に苦労。

だが。

ガシッ！

「なっ・・・！？」

「スバル！」

オツコトヌシが通過した直後、生えている『何か』に脚を掴まれた。

「うおあっ！がっ！ぐっ！」

「ぬう・・・。あれでは攻撃できない・・・」

引きずられるスバル。

そんな状況、カクサスは攻撃できないでいた。

「ぐあっ！このお！いい加減にしろお！」

ズバッ！

スバルは自分の脚を掴んでいる『何か』を切断した。

ドサッ！

「がっ・・・」

オツコトヌシの走る速度で叩きつけられ、地面を転がる。

「スバル！貴様等あ！退けえ！」

カクサスはスバルの元へ向かいたいが、ブルファンゴに邪魔され向かえない。

「ちい・・・、囲まれたか・・・」

ブルファンゴの群れに囲まれたスバル。

それらは何時でも突撃できるような態勢だった。

「上等だ・・・。かかってこいやあああ！」

スバルはブルファンゴに向かって啖呵を切った。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第40話

守りたい『もの』

その4

「現れた黒き墮大猪、孤立した」

今回はあるネタを使っています。

わかる人はわかるネタですが、音声は自分で検証した結果です。

違っていたらご指摘ください。

次回、孤立したスバル、怖がりなシロン、オツコトヌシを見て気持ち悪くなったウィリアは大丈夫なのか！？

お楽しみに！

第41話

守りたい『もの』

その5

「放たれた想いの一撃と悲劇」

41話です！

戦闘シーンがあまりにも悲しく見えます・・・

『悲劇』とは何なのか？（誰かが死ぬことはないですが）

では、どうぞ！

第41話

守りたい『もの』

その5

「放たれた想いの一撃と悲劇」

囲まれたスバル。

彼は剣を空に突き立て、

「あああああああああ……っ！」

気を溜め始めた。

これを隙と見たブルファンゴ達はスバルに向けて走りはじめた。

学校。

「戦闘音……？」

「誰でしょうか、囲まれている人が……！？あ、アイリスさん！
ウィリアさん！あれ！」

「スバル！？」

「ううっ……。うねうねしてるよお……」

「ウィリア、大丈夫？」

「だ、大丈夫……」

「た、助けに行かないと！」

「スバルうううううう・・・」

「速っ！」

「もう見えないよ・・・。あ！あたし達も行かなきゃ！」

「そ、そうですね！」

「ウィリア、気をつけてね！」

「うん、分かった！」

ヴィヴィオに見送られ、三人は外へ向かった。

ブオオオオオオオツ！

ついに一斉に突撃を開始したブルファンゴ。

「・・・うううらあっ！」

瞬円閃斬！

この一瞬、一度に大量にブルファンゴの首が飛んだ。

「おらあっ！」

ブルファンゴの群れの真ん中で、たった一人奮戦するスバル。

屋上への階段。

「ハッ、ハッ、ハッ・・・」

ライラが屋上に駆け上がっていた。

「今の私にはなにも出来ない・・・。出来るのはここから援護するだけ・・・」

ライラは屋上から激戦区を見下ろせる位置に立った。

・・・

ボンッ！

ブンブン！

「な、なんであいつのことを考えなきゃならないのよ！べっ、別にあいつのことなんて考えてないんだから！」

顔を真っ赤にして自分の想いを否定しようとした。

「あーもう！このおー！」

バリィッ！

ライラはブルファンゴに向けて電撃を放った。

「電撃！？ライラか！」

電撃はカクサスの周りのブルファンゴを仕留めていった。

「ライラの援護があっても全く減らない……。一体幾らいるんだ！？」

全く減らないことに焦りを感じるカクサス。

ブルファンゴ群中央。

「はっ！ さっさと退けえええええっ！・・・ぜえ、ぜえ、ぜえ、ぜえ・・・」

一人奮戦し続けるスバル。

息はあがっているが戦意は全く衰えていない。

ドン！

「うぐっ・・・」

ついに対応できなくなつて、ブルファンゴの突撃をもろに受けてしまふスバル。

「ぐっ・・・、うぐっ・・・、がっ・・・がはっ！」

何度も撥ねられついに吐血してしまう。

「まだ・・・まだぁ・・・っ！」

それでも立ち上がる。

「うああああああああっ！」

「はぁ、はぁ、はぁ・・・」

「はぁ、はぁ、はぁ・・・」

「ひい、ひい、ひい・・・」

アイリス達が玄関に着いた。

「スバルは・・・？」

「あ、あそこにいる！」

「ひ、酷い・・・」

ボロボロのスバルを見てレノシアが青くなる。

「た、助けに行かなきゃ！」

アイリス達が慌てている内に。

「あ、あらかた片付いたぜ……。さあ、今度は貴様の……。ぐうつ!?」

いざオツコトヌシと戦おうとしたスバルだが、オツコトヌシから生えている『何か』に首を絞められた。

「うつ……。ぐ……。こ……。の……。(ギリギリギリ) うぐああ……。っ！」

ブルファンゴ戦で消耗していたため、ろくに抵抗が出来ないでいる。

「スバルが……。スバルがあ！」

「・・・ここから弓で狙ってみる・・・！二人とも、手伝って！」
「手伝うって、何を！？」

「あたしの力じゃ届かないから・・・、みんなで弓を引っ張って撃つ！」

「わ、私ですか！？」

「狙うのは、あれのおでこの真ん中・・・。外したら・・・」

「次の目標は・・・間違いなく私たちになるね・・・」

「ふええ・・・」

泣き言を言いかけるレノシア。

「私、協力する！このままじゃ、スバルが！」

「わ、私も協力します！」「お願い！」

三人の意志がまとまった。

ウィリアの持つ弓を三人で支え、引く。

「もっと強く、限界を越えて・・・」

「んんんっ・・・」

「んぎぎぎぎきい・・・」

そして、限界を少し越えて・・・

「私たちの大切な人を・・・」

「この学校を・・・友達を・・・」
「あたし達の前から・・・」

『奪おうと・・・しないでえええええええっ！』

矢を放った。

想いのこもったその矢は放たれた瞬間に炎を纏い、その様はまるで
猛々しく空を舞う龍の様だった。

そして、普通なら当たってしまいそうな位置にズレたスバルを避ける
ような軌道を描き・・・

矢は一寸の狂いもなく・・・

オツコトヌシの眉間を・・・

ズシャアッ！

正確に貫いた。

「うつ・・・」

ドサ。

「ゲッホ！ゲホッ、ゲホ！」

オツコトヌシからの解放と落下でダメージ。

オ・・・オオオ・・・

ズウウウウン！

オツコトヌシは倒れた。

<スバル!>

<大丈夫ですか!?!>

アイリス達が走ってきた。

「アイリス・・・、ウィリア・・・、レノシア・・・・・・・・っ!来るな!」

スバルは彼女達を見て安心したが、オツコトヌシをちらっと見たとき、まだ生きているのを見た。

「スバル・・・よかったあ・・・」

「生きてて・・・」

「泣くのは後だ、避ける!狙うなら俺を狙え!」

スバルが叫ぶ。

オツコトヌシは死に際に『何か』を伸ばした。

「っ！スバルだけに辛い思いをさせたくない！」

ドンッ！

『アイリス（さん！？）』

アイリスはスバル達を突き飛ばした。

ザシュッ！

「ううっ！・・・うあああっ！」

掠めた左腕に激痛が走る。

「アイリス！」

「大丈夫ですか！？」

「傷口が黒いよ！？」

「大丈夫・・・、好きな人を守れたんだもん・・・。これくらい・・・うああっ！」

「保健室に！急げ！」

「何が・・・アイリス！？」

統率者がいなくなり、ブルファングの群れは逃げていったため、カ

クサスが駆け付けてきた。

「嫌な予感が当たった・・・」

「早く運ぶぞ！」

「あ、ああ！」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第41話

守りたい『もの』

その5

「放たれた想いの一撃と悲劇」

『悲劇』はアイリスに起こりました・・・

彼女の腕に何が起こったのか。

彼女はどうなってしまうのか。

このことがある『きっかけ』になるんです。

何の『きっかけ』になるのかは、次回！

お楽しみに！

第42話

守りたい『もの』

その6

「呪いが生んだ、アイリスの恋の

42話です。

ついに、ついにスバルが・・・！！

後半ガチなラブストーリーだ、ということ以外はあまり多くは語れません！

何があったのかは本文で！

では、どうぞ！

第42話

守りたい『もの』

その6

「呪いが生んだ、アイリスの恋の

「アイリス！」

「左腕が・・・左腕があ・・・ああああっ！」

「アイリスさん！しっかりしてください！」

「左腕が負傷箇所から黒くなっていつてるぞ！」

「左腕が・・・焼けるように・・・痛いよお・・・！」

保健室に運ばれたアイリス。

「アイリスちゃんが負傷したって聞きました！」

神威 銀時さんも駆け付けた。

「これは・・・オツコトヌシの呪いですね・・・」

「呪い！？」

「そんな・・・」

「はうう・・・」

神威 銀時さんの説明に啞然とするスバル・ウィリア・レノシア。

「の、呪いとは一体・・・」

「前に見た症状とよく似ているところがあつたので確実に・・・『己の欲望を最大限に引き出す』呪いです。」

「お、『己の欲望を最大限に引き出す』呪い・・・？」

「なんか怖い呪いだよね・・・」

「そ、それで前に呪われた人ってどうなったんですか？」

レノシアが恐る恐る聞く。

「前にオツコトヌシがここを襲撃した時のことです。その時に一人だけ立ち向かって行って、呪われたんです・・・」

「同じ様に・・・ですか？」

「はい。その後、『お金が欲しいっ！お金があっ！』・・・と徘徊を始めて・・・。お金を手に入れたらどんどん身体が黒くなっていてしまいました。1月後には呪いは解けましたが・・・」

『・・・（ゴクッ）』

ウィリアとレノシアは息を飲んだ。

「呪われて完全に身体が黒くなった5日間の記憶が無かったそうです・・・」

『ひひひひひひひひっ！』

二人、絶叫。

「・・・アイリスは無事だろうか・・・」

スバルだけは別のことを考えていた。

保健室・・・

「黒くなった部分の侵食、肩まで来ましたね・・・」

「何なのかしら・・・、これ・・・」

「今スバル達が聞きに行ってるわ。」

そんなことを言っているとき・・・

「はあ・・・はあ・・・」

「アイリス・・・。痛みは引いたみたいなんだけど、頬がピンク色になって目はトロンとして・・・」

「ね、ねえ、気のせいだと言いたいんだけど・・・。アイリス、なんかもじもじしてない？」

「ううう・・・（モジモジ）」

「・・・してますね。」

ナコル・シロン・ライラがアイリスを看ていた。

「アイリスを・・・助けるにはどうすればいいんですか・・・？」

「私にそれを聞かれても・・・」

「あったよ！呪いの解き方！」

ヴィヴィオが本を持ってきた。

「見せてくれ！」

「は、はい！」

スバルはヴィヴィオから本を受け取りすぐに探した。

「・・・あった！方法は・・・『欲望と逆の状況に置き、一定期間放置する。掠った程度なら2日で解除可能。』・・・、すぐには・・・『対象の・・・欲望を満たす』・・・」

「欲望を・・・」

「満たす・・・？」

スバルの言う解決方法に疑問符を浮かべる二人。

「アイリスの欲望・・・？なんだ？何かが食べたいのか・・・？」
(ガクッ)

スバルの鈍感発言にコケる一同。

「と、とりあえずアイリスちゃんのところに行きましょう。彼女の欲望は彼女しか解らないんですし・・・」

「そ、そうしましょう！」

「スバル、行こっ！」

「あ、ああ・・・」

五人はアイリスのいる保健室に行った。

保健室・・・

「ナコル、どくスバルう！スバルう！う！う！う！><暴れないで！落ち着いて！><どんどん身体が黒くなっていったる！><うわ！う！>・・・スバルは入っちゃダメみたいだね・・・」

「・・・ですが、アイリスちゃんが求めているものが何なのかが分かりました。」

『ホント（ですか）！？』

『アイリスが求めているもの』が分かった神威 銀時さんに視線が集まる。

「それで、そのものって・・・」

「それは・・・スバル、あなたですよ。」

『!?!?』

「・・・っ!?!?」

驚く娘達。

「なぜ・・・俺を・・・」

「さっきの本をよく見ましたか？あの本に求めるものが『好きな人』の場合、その人の名前を叫び続ける、と書いてあるのをここに来るまでに見たんです。」

「家族として、ではないのですか・・・?」

「いえ、これは一人の女の子として、異性として、あなたが好きだということなんです。」

「・・・っ!」

スバルは保健室の方を見た。

ダンッ!

「・・・そういうことなのか・・・。アイリスだけでなく、ナコル

もウィリアもシロンもレノシアも・・・、俺のことが女の子として好きだったのか・・・！なのに俺は、俺は・・・」

「スバル・・・」

この時、スバルが自分に向けられた彼女達の恋愛感情を理解した瞬間だった。

「神威さん、皆をここから離して、俺とアイリスだけを残してください・・・」

「スバル？」

「・・・分かりました。皆さん、行きましょう・・・」

「で、でも・・・」

「ウィリア、行こ？」

「うん・・・」

皆去っていき、スバルだけ廊下に残った。

「スバル・・・」

スバルが保健室に入ると先程暴れたためなのか、上半身を起こしただけだった。

ギュッ！

「スバル・・・？」

スバルがアイリスに抱き着いた。

「今まで想いに気づいてやれなくて・・・ゴメンな・・・」

「ううん・・・。謝らなくても良いよ・・・」

「これをせめてもの償いにさせてくれ・・・」

「えっ・・・」

チュツ。

スバルが自分の『意志』でアイリスにキスをした。

「あ・・・」

アイリスは目がトロンとして、そのまま気を失った。

「・・・呪いが消えた・・・。・・・アイリス、本当にごめんな・・・。皆も、面向かって言えないけど・・・ごめんな・・・！」

保健室にスバルの謝罪が響いた。

「スバル・・・」

アイリスが意識を取り戻した。

「アイリス・・・！？大丈夫か？」

「うん・・・平気・・・。あのね、スバル・・・」

「なんだ・・・？」

「キス・・・ありがとう。」
「っ！」

アイリスがスバルがキスしたことを覚えていたことに驚いたスバル。

「それで・・・、答え、聞かせてくれないかなあ・・・？」
「・・・まだ・・・答えられない・・・。今まで皆にしてきたことへの謝罪をしなきゃいけないからな・・・」
「うん・・・。ふあ・・・眠たくなっちゃった・・・。・・・おやすみ・・・」
「ああ、おやすみ・・・」 「すう・・・、すう・・・」

スバルの答えを聞いた後そのまま眠ったアイリス。

その顔に呪いに苦しんだ跡は無く、幸せそうな寝顔だった。

「俺も・・・寝るか・・・」

スバルもそのまま眠りについた。

アイリスの恋が進展したのは、皮肉なことに呪いのおかげだった。

おまけ

『KY・ノブ』

「くあ・・・起きたら全てが終わって・・・ニヤニヤッ!？」

ノブが見たのは、ちょうどスバルとアイリスがキスをした瞬間だった。

「ご、ご、ご主人が異性にキスをく!?!? こうしちゃいられないニヤ、写真写真・・・」

二人に隠れて写真撮影をしていたノブであった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第42話

守りたい『もの』

その6

「呪いが生んだ、アイリスの恋の

今回、この話の全ての鍵となる話でした。

ついに『朴念仁』スバルがキスをするど・・・！

この話の為に、神威 銀時さんに協力をしていただきました。

本当に、ありがとうございました！

次回はこのことである戦線が展開・・・？

お楽しみに！

第43話

守りたい『もの』

その7（最終）

「STS（スバルを取

43話です！

今回でオツコトヌシ討伐編終了です！

タイトルにあることはお楽しみに！

では、どうぞ！

第43話

守りたい『もの』

その7（最終）

「STS（スバルを取

激戦（？）から一夜明けて。

「ん・・・」

アイリスが目を覚ました。

「・・・？」

起きてすぐ、自分の唇に自分のではない温かさを感じた。

「あ・・・私・・・スバルにキスされちゃったんだ・・・。えへへ・・・
／／／

顔を赤くして布団に隠れるアイリス。

「よいしょっと・・・。助けてくれて・・・ありがとう。」

床に座って寝ているスバルの横で、改めてお礼を言うアイリス。

「それに・・・助けるためだって分かっているんだけど、キス・・・
してくれて（ガタン！）え・・・？」

アイリスが後ろを見ると・・・

「す、スバルさんが、あ、アイリスさんとき、キスを！？」

レノシアが話を聞いてしまった。

「レノシア！？なんでここに！？」

「アイリスさんの様子を見に行こうと思って・・・。わ、私、フラれちゃったんですかぁー！？」

「フラれてないから！私を助けるためにしてくれただけで・・・」

アイリスがレノシアに必死に弁明していたとき。

「レノシア！スバルがアイリスにキスしたって本当ですか！？」

「レノシア、嘘って言って！？」

「アイリス、嘘だって言いなさい・・・！さもないと痛い目見るわよ・・・！」

一斉にアイリスを問い詰める。

「だから、私を助けるために・・・」

「嘘でしょ！どうせ誘惑して・・・」

「う・・・」

「あ、豚野郎が起きましたの。」

『ギロツ！』

「ひいっ・・・」

そんな中起きたスバルとそれに気づいたローズ。

睨まれ、怯えた。

「皆・・・なぜここに？」

「スバル・・・真実を教えて・・・？」

「真実？」

「アイリスにキスしたのって、本当に呪いを解くためだったの！？誘惑されたんじゃないの！？」

「誘惑ってお前・・・」

「じゃあ本当に・・・？」

「・・・まあ、気持ちに気づいてやれなかった償いの意味もあったな・・・」

「じゃあ・・・」

「俺自信が好きかどうかはなんとも言えない状況だな。」

『ほっ・・・』

スバルのキスがアイリスを救うためだと解り、安心する娘達。

だが、その安心もアイリスの一言で崩壊した。

「でも、今一番スバルに近いのって私だよね・・・／＼／」
『っ！！！』

ドタドタドタドタ・・・

「？」

慌ただしく出て行った娘達に疑問符を浮かべるスバル。

「さっきすごい騒ぎ声が聞こえましたけど・・・、なにかありましたか？」

「あ、いえ！気にしないでください！」

神威 銀時さんの疑問に慌てるアイリス。

「このままだとスバルをアイリスに取られてしまうわ・・・」

「ど、どうしましょう・・・」

「色仕掛けでいってみる？」

「あたしが不利だよお・・・」

彼女達が話しあっていることは、アイリスにスバルを取られないようにする方法だった。

「と、とにかく！アイリスに取られないようにしましょう！」

今ここに、『スバルを取られてたまるか戦線（略してSTS）』が結成された。

「・・・ちょっといいか？」

『ドキッ！』

いきなり話し掛けられたことに驚く娘達。

「・・・スバル。」

「・・・今まで気持ちに気づいてやれなくて、ごめんな。」

「い、いいわよ、そんなこと！」

「そ、そうですよ！」

「それで、俺が出来ることに限るんだが・・・なにかしてほしいこと、ないか？それで悲しませたり傷つけたことへの償いにしたいんだ・・・」

「償い・・・」

スバルの話に考え込む。

『（私／あたし）、どこかに連れてってほしい（です）！』

「私は、その、ち、ち・・・」

『ち？』

「チュウ・・・させてください・・・／／／」

『えっ！？』

ナコル・ウィリア・シロンは普通に女の子らしくデートを要求し、レノシアはキスさせてほしいと言った。

「別に構わないんだが・・・」

「じゃあ・・・今、ここで・・・」

「なにしてるの？」

「アイリス・・・？」

レノシアが近づいたとき、アイリスが来た。

「とりあえずアイリスは大人しくしててね。」

「？」

「・・・」

アイリスを座らせるシロン。

いつの間にかライラもいる。

「・・・！！（そわそわ）」

「レノシア？」

「一気にいきなさいな！」

「え？えっ？ど、どういうこと？」

要求したものの、そわそわとして動かないレノシアにローズから野次が飛ぶ。

アイリスは状況が全くわからず左右を忙しく見ている。

「うう・・・（もじもじ）」

「なにしおらしくなってますの！？一気に！一気にブチュツと（ドゴン！）おふう・・・」

煽ろうとしたローズを殴ったのはカクサスだった。

「あまり煽るな。で、なにがあっぺこうなつた？」

「それは・・・」

シロンが説明しようとした時・・・

「んっ！」

ムチュツ！

レノシアがついに動いた。

「んにゃっ!？」

『・・・／／／』

「お・・・」

三者三様の行動。

ナデシコだけは手で口を覆っていた。

「はふ・・・」

「・・・やっぱり慣れない・・・／／／」

「あ、ありがとう・・・ございました・・・／／／」

お互い顔が真っ赤になっている。

「す、スバル！ 帰ったら私とデートだからね！？」

「シロン！ 私ですよ！？」

「ナコルも違うよお！ あたしだよお！」

「だっ、ダメえ！ 私もおく！」

「わ、私も・・・」

「ダメ！ 特にアイリスはスバルからキスされたんだからダメ！」

「ええゝ！？」

「へうう・・・」

デート初日権を賭けた乙女の戦いが勃発した。

「・・・（ツンツン）」

「ん？ どうした、ナデシコ？」

「私、カクサスとお買物行きたいな・・・」

「・・・行ってやりたいのは山々なんだが・・・お金が・・・」

「ダメ・・・？（うるうる）」

「・・・スバルに頼んでお金を貰ってくる・・・」

「ありがと・・・！（ギューッ！）」

「では、私達は帰りますので・・・」

「この学園を救っていただき、ありがとうございました。」

「ありがとうございます!」

「いえ、特に何かしたわけではないので……。おっと、あまり日が暮れない内に帰らないとマズいので……。では!」

「ウィリアー! また来てねー!」

「うん! 絶対に行くから!」

こうしてスバル達は帰っていった。

「さて、明日は授業が普通にあることを伝えないと……」

「私が伝えるけど……」

「あ、じゃあお願いします。」

「丸投げ!?!」

「日が暮れる前に帰るぞ……!」

「ああ……」

「なんで?」

スバルとカクサスが一致させた意見に疑問符を浮かべるアイリス。

「これ以上誰かが増えてたまるかよ!」
「いゝじゃゝん。増えると楽しいよゝ?」
「うん……。楽しい方がいいな……。」

スバルが言った意見に反対理由を出すアイリスとナデシコ。

「恋敵が増えるかもしれないぞ?」
『ダメ(です)!』
「だろ? だったらさっさと帰るぞ。」
「それ、叶わないかもしれませんの。」

ローズが最悪なことを言う。

「何故それを言う?」
「一度火山の方へ向かわなければ家へ帰れないはずじゃないんですの?」
「内部には入らないがな。」

スバルがそう言った瞬間、火山エリアに入った。

「……。いますの。バサルモスが……。」
「またかよ……。!」
「でもスバルの敵は討てたんでしょ?」
「そうだが……。オツコトヌシに消耗しすぎた……。位置は分

かっているんだが。」

そう言ってスバルが指差したところにはもぞもぞ動く岩が。

「明らかに怪しいな・・・」

「『ここにいるぞ!』って言っちゃってる感じがするね・・・」

明らかにいることが判る動きに呆れる一同。

「・・・俺が近づいてみよう・・・」

「カクサス、危ないよ・・・」

「ナデシコ、安心しろ。ちゃんと戻ってくるさ。」

「・・・／＼／＼」

カクサスを心配するナデシコ。

カクサスに『戻ってくる』と言われたとき、顔が赤くなった。

「よし・・・」

バサルモスの方に近づくカクサス。

「・・・近づいたら普通飛び出してこないか？」

普通と違う行動に困ることしかできない。

・・・

「・・・」

・・・！（モゾモゾ）

「地面に潜った・・・」

バサルモスらしくない行動。

「うお、擬態する瞬間初めて見た！」

ちょっと感動したスバルであった。

「ここは一発、スバルの作ったケムリ玉ニャー！」

バサルモスのいる所にノブがケムリ玉を投げた。

ボフウツ！

「おお、すごい量の煙だな・・・」

バサルモスを煙が覆う。

その間、誰一人行動しなかった。

タタタタタ・・・

「あれ？」

煙の中でした足音に気がつくアイリス。

煙がはれた。

そこには誰もいなかった。

「いつもならいるんだけどな・・・。逃げたか？」
「いや、いる。見てこよう。」

ある岩に向かうカクサス。

よく見ると髪の毛が一部丸見えになっている。

「ここだな・・・」

そしてカクサスがその岩を見ると・・・

「・・・？っ！・・・／／／」

女の子が。

「・・・どうした？」

体を殆ど岩で隠し顔を赤くした女の子にカクサスは質問をした。

「・・・しいの・・・」

「・・・ん？」

「は、恥ずかしいの・・・／／／」

「恥ずかしがり屋らしいな・・・、この娘は。」

カクサスも困っていた。

「ま、まあなんだ。安心しろ。何かするわけじゃないから。」
「・・・ち、違うの・・・わ、わた、私・・・その・・・／＼／」

女の子は顔をより赤くして否定した。

実際恥ずかしがりなのだか。

「じゃあなにが恥ずかしいんだ？」
「それは・・・その・・・（ちらちら）／＼／」
「・・・？」

カクサスをちらちらと見る。

「あなたに見られると・・・その・・・はうう・・・／＼／」
「・・・まさか・・・」

カクサスはナデシコの方を見た。

「カクサス、どうしたの・・・って、その娘、まさか・・・」
「らしい・・・」

カクサスが何かを諦めたかのようにナデシコに言った。

ギュウッ！

「っ！」

「カクサスは・・・私の・・・なんだからね・・・？」

カクサスの腕にナデシコが抱き着いた。

ギュウッ！

「痛っ！」

「私も・・・この人・・・す、す、好きなの・・・／＼／＼」
「痛い！力を弱めてくれ！」

女の子もカクサスの腕に抱き着いた。

「とりあえず腕を放してやってくれ・・・」

スバルが助け船を出した。

「た、助かつ・・・痛っ！」

「・・・(ぷるぷる)」

カクサスの体の後ろに隠れる女の子。

「スバル・・・」

「どうした？」

「今ならお前の気持ちがよく分かる気がするぞ・・・」

「分かってくれるか・・・」

スバルの気持ちがよく分かる気がしたカクサスだった。

「名前、何て言うの？」

「あの・・・、えと・・・、・・・リナト・・・／／／」

「よろしくね、リナト！」

「・・・／／／(コクッ)」

名前を聞いていたアイリスやシロン、ナコルの傍らでは・・・

「リナト、胸大きいよお・・・ぐす。」

「皆さん胸大きすぎですよお・・・しくしく・・・」

「私、どうなっちゃうの・・・？ひつく・・・」

理不尽な現状に泣き崩れるものがいた。

夕方、自宅に着いた。

「なんやかんやあったけど、とりあえず着いたな。」

「お帰り〜っす！」

「ただいま・・・ってどうしたんだその枕は？」

「あー、これはアスカが・・・」

「くお兄ちゃ〜ん！」

クリムが説明しようとしたとき、奥からアスカが走ってきた。

しかし・・・

ピタッ。

「アスカ？」

「・・・その女の人達、誰？」 「あー、これは・・・」 カクサスが弁明しようとする。

「・・・彼女なの。／／／」

「わ、私も・・・／／／」

「・・・まあ、そんなとこだ。」

諦めてそう言ったカクサス。

「お兄ちゃん・・・。私がいるのに・・・、なんで、なんで・・・」
「アスカ？」

ぶつぶつ言い始めたアスカ。

「私と一緒にいいいいっ！」
『包丁！？』

アスカが包丁を持って（どこから出したか不明）カクサスに突撃した。

ガッ！

ギリリッ！

「痛い痛い！」

アスカに関節技を掛けたカクサス。

「馬鹿なことをするからだ。さっさと包丁を離せ。」
「うゝ・・・」

ギリリギリリッ・・・

さらに強く締め上げた。

「痛い痛い痛い痛い！ごめんなさい！離すから許して！」

カラン。

「痛い・・・ぐすつ。」

「カクサス・・・」

「大丈夫・・・？」

カクサスがアスカを締め上げから解放した後、駆け寄るナデシコとリナト。

「いや、傷一つ付いてない。無事だ。心配してくれてありがとう。」
「そ、そんな・・・／＼／＼／」
「はうう・・・／＼／」

「まさかアスカがカクサスにあんな暴挙をしようとするなんて思わなかったな・・・」

「うん・・・」

「・・・」

「ライラ？」

「な、なによ！？」

「ひょっとしてスバルのこと考えてるの？」

「そっ、そんな訳無いじゃない！わ、私がアイツを好きになるなんて有り得ないわよ！／＼／＼」

「お姉様、お顔が真っ赤ですわよ？」

「う、うるさい！」

カクサス達の光景を見た時の娘達やスバルの反応。

「さって、改築計画を立てないとな・・・」

スバルの呟きは誰も聞こえなかった。

報酬。

入手

アイリス負傷の折に放棄。

クエストクリア

ファンゴの毛皮×382

ファンゴ頭×280

大猪の牙×2

その他

スバルが恋を意識。

ライラ。

ナデシコ。

リナト。

カクサスに春。

ローズにお姉様ができた。

第43話

守りたい『もの』

その7（最終）

「STS（スバルを取

今回はまず、リクエストしていただき、出演してくださった、神威銀時さんとヴィヴィオにお礼を。

ありがとうございました！

次に、ナデシコの恋敵・リナトの説明です。

リナト

バサルモス雌、見た目16歳

性格…恥ずかしがり屋、自分の意志はしっかり伝えたいところあり。怖がり。

643

備考…髪は灰色で長い。フェイトみたいな感じで縛っている。胸はD+。

カクサス相手にはかなり恥ずかしがってしまう。（完全に一目惚れ）嫌いなものは幽霊、怪談などの怖いもの。聞いただけで卒倒。

名前の由来…『トリトマ』が由来。

花言葉は『切実な思い』。

以上です。

今回リナトが登場した理由が『恋は簡単に成就しない』ことを考えたからです。

・・・アスカに比べれば可愛いものだと思いますが・・・

次回からは日常短編に入ります。

次回はお買物。その次は・・・海！

お楽しみに！

神威 銀時さん、本当にありがとうございました！

第44話

お買物に行こう！＋強行デートとキス（前書き）

44話です！

お買い物だけじゃつまらないかなと思い、乙女の内の一人与スバルが（スバルが連れていかれる形で）デートします！

では、どうぞ！

第44話

お買物に行こう！＋強行デートとキス

朝。

「・・・」

「・・・」

スバルとカクサスは机に突っ伏していた。

「地図を見たが・・・」

「水着専門の店なんて無いぞ、どこにも・・・あ、あった。」

「どこだ！」

カクサスが水着専門店を見つけたのを聞いて、飛び掛かるように地図を見たスバル。

何故こんなことになったのか。

昨日のことである。

「ねえスバル。どこか行こうよ？」

「どこか、ね・・・」

「いいですね。例えば、海とか。（海で私の魅力をスバルに魅せる！）」

「いいわねそれ！（海に行ったらスバルを魅了する！）」

「・・・（しゅん）」

海の話で盛り上がる中、俯くウィリア。

「あの、ウィリアさん？どうしたんですか？」

「あたし、行きたくないなあ・・・」

「どうしてですか！？楽しいのに・・・」

「だって・・・あたしの胸、みんなよりちっちゃいから・・・。ペツタンコだから・・・。魅力ないんだもん・・・ぐす。」

「そ、そんなことないと思いますよ？可愛いですし、一途ですし・・・」

「ホント・・・？あたしに魅力ある・・・？」

「はい！」

ウィリアを説得していたレノシアだった。

「海・・・／／／」

「水着・・・／／／」

「ナデシコ？リナト？」

顔を赤くしている二人。

「海ね……。水着買いに行かないとな……」

スバルがそう考えた瞬間……

『可愛い水着買いに行きたい!』

一斉にスバルに向かってそう言った。

「……カクサス。」

「……了解。」

二人してヒツソリと別室に行った。

そして今に至る。

「ここに行くには後1時間以内にここ出ないと帰るのが遅くなるか・……?」

「そうかもしれないな……」

「よし!」

「行こう！」

こうして、皆で水着を買いに行った。

店舗内。

「予想外だった・・・」

「こんなに大変だったとは知らなかった・・・」

スバルとカクサスは入口付近の椅子に座っていた。

理由は簡単、娘達にあった。

ー1時間前ー

「あ、これ可愛い！」

「これも！」

「・・・サイズ合うかしら・・・？」

「は、早い・・・」

「俺達は俺達で水着を探しに・・・」

男二人、男性用の方へ向かおうとした時。

「スバル、来て！」

「（グイッ！）うおっ！」

スバルがアイリスに引っ張られて連れていかれた。

「スバルが連れていかれた・・・。俺は俺で（クイクイ）ん？ナデシコにリナト？」

服を引っ張られ、カクサスが振り向いた先には、ナデシコとリナトがいた。

「あ、あのね・・・カクサスに・・・／／／／」

「み、水着・・・選んでほしいの・・・／／／／」

「・・・は？」

水着を選んでほしいと頼む二人。

「・・・なぜ俺に選べと?？」

「そ、それは・・・／／／」

「だ、だって・・・／／／」

『カクサスに水着姿見てもらいたいから・・・、カクサスの好きな水着にしたくて・・・／／／（もじもじ）』

顔を真っ赤にして言う。

「わかった、選ぶよ。」

カクサスも女性用水着のエリアに行った。

S i d e スバル

試着室前。

「なぜ俺はここで奇異の目を向けられなければならないんだ・・・」

スバルが呟いた理由。

試着室に答えがあつた。

「さ、サイズが合わない！」

「む、胸がくるじい・・・」

サイズが合わず苦戦する者、

「スバル、これ、どうですか？（青いビキニ）」

「・・・ナコルはやっぱ黒じゃないか？」

「そう・・・ですか？じゃあ・・・」

「スバル・・・あたしは・・・？／＼／＼（青紫色のワンピース）」

「似合うんじゃないか？」

「ホント！？やった！」

スバルに意見を聞いてくる者。

それぞれだった。

戻る。

「あ、スバルさん。」

「レノシア。もう買い終わったのか？」

「はい。私、泳げないので羽織るものを・・・」

「とりあえず濡れてもいいようにしといた方がいいぞ？」

「そうですか？じゃあ、水着選んできます。」

「おう、行ってきた。」

レノシアは一人水着を選びに行った。

「俺も水着探してくる。」

『ええ？』

「ええじゃない！ったく・・・」

スバルは男性用水着エリアに向かった。

N e x t S i d e カクサス

「さて、どうしたものか・・・」

カクサスは困っていた。

自分の好みがよくわからないからだ。

「・・・二人の好みで選べばいいと思うのだが・・・」

「でも・・・」

「・・・（じー）」

カクサスの提案にちよつと否定気味なナデシコと、一つの水着を凝視しているリナト。

「どうした、リナト？」

「・・・あの水着・・・私に似合うのかな・・・？」

リナトが見ていたのは白色のスポーツタイプのセパレートだった。

「似合うだろうな。」

「ホント・・・？」

「本当だ、自信を持て。」

「はうう・・・／＼／」

「わ、私・・・これにしようかな・・・／＼／」

ナデシコが持っていたのは黄色のセンターストラップのセパレートタイプの水着だった。

「・・・中々可愛い水着だな・・・」
「か、可愛い・・・／＼／」

何気に天然なカクサスの発言で顔が真っ赤になったナデシコとリナト。

「私、これにする・・・。カクサスが似合うって言ってくれたから・・・／＼／」
「私はこれに・・・。可愛いってカクサスが言ってくれたから・・・／＼／」

「・・・（溜息）」

カクサスは二人が水着を買いに行つて、姿が見えなくなつてから、男性用のエリアに向かった。

S i d e e n d

男性用水着エリアの前の椅子で二人は合流、水着を探して出てきて、疲れ果てて座って今に至る。

「カクサス、お前も選んであげたのか・・・？」

「ああ・・・。スバルは・・・？」

「似合うか言っただけだ・・・。アイリスとシロンはサイズが合わないって騒いでいたがな・・・」

「・・・ナコルにはよくサイズが合った物があったな・・・」

「スバルさんとカクサスさん？どうしたんですか？」

「レノシアか・・・」

レノシアが来た。

「・・・というわけだ。」

「ふふっ。お疲れ様です。」

「お、戻ってきた。」

女性メンバーが戻ってきた。

「可愛い水着がなんで小さいのしかないのおく・・・？しくしく・・・」

「私なんてサイズが殆ど合わなかったわよ・・・しくしく・・・」

アイリスとシロンは泣き崩れていた。

「帰るか！」

スバルがそう言った瞬間。

ガシッ。

「うっ!？」

「スバル・・・、二人で・・・デートしよ・・・?／／／」
『っ!?!』

シロンが爆弾発言をしたため、一斉にシロンの方を向く。

「シロン、いきなり何を・・・」

「約束したじゃない・・・。さ、行きましょう！」

「待て、荷物が・・・」

「カクサスに荷物を預けて・・・ね？」

結局引きずられるような形で二人は行った。

「・・・行くか。」

「やゝだゝよう!」

「シロンが、シロンがあゝ!」

「・・・うう・・・」

ウィリアとナコルが喚き、レノシアが二人が行ってしまうのを指をくわえて見ている中、アイリスは・・・

「・・・帰らなきゃ・・・お料理の練習しなきゃ!」

一人走って帰って行った。

「あ、アイリスさん!一人だと危ないですよ!?!」
「アイ・・・ん?」

スバルに渡された袋に一つ玉が入っていたのに気がついた。

「いざという時の防衛策か・・・」

スバルの思いやりだった。

S i d e スバル・シロン

「~~~~~♪」

「・・・(汗)」

スバルの腕に抱き着いて歩くシロン。

スバルは複雑な顔をしていたが、端から見れば、普通のカップルみたいだった。

「あっ！次はあそこに行こっ！」

「所持金考えてくれよ・・・？」

「分かってるって♪」

「本当か・・・？」

大はしゃぎなシロン。

「ほら、アイスクリーム。」

「ありがと。」

二人で座ってアイスを食べる。

「~~~~♪」

こうしてみると普通の年頃の女の子だ・・・。

そう思いつつシロンを見ていたスバル。

「なに？私をじーっと見て……。恥ずかしいじゃない……。／＼」

「い、いや、特に深い意味はない！」

「……。ホント？」

「本当だ。」

「……。でも、嬉しいな……。／＼」

「……。／＼」

二人の周囲の雰囲気がピンク色になる。

「そ、そろそろ帰るか？」

「うん……。でもその前に……。／＼（キョロキョロ）」

「その前に？」

シロンは顔を赤くしたまま辺りを見渡す。

「……。誰もいないわね……。スバル、お願い。私に、その、き、キス……。して……。／＼」

「は……。？」

シロンのお願いに呆然とするスバル。

「ちょっと待て！デートするだけでいいって言っただろ！」

「でも・・・！我慢できなくなったの・・・。アイリスが羨ましくなっちゃって・・・。だから・・・／／／」

「と言われてもな・・・」

「お願いよ・・・」

徐々にスバルに近づくシロン。

「・・・／／！仕方ない！」

「んむうつ！！？」

勢いに任せたキス。

「／／・・・ん・・・」

まさかするとは思わなかったため心の準備が全くできてなく、慌てるシロン。

だが、数秒で目がトロンとし、顔も惚けてしまっている。

「ふう・・・／／／」

「スバル・・・、私、あなたが大好き・・・／／／」

「・・・とりあえず帰るぞ。」

改めでの告白に慌てて話を変えるスバル。

だが・・・

「・・・さっきのキスで頭がボーツとして動けないの・・・／＼」
「仕方ない、おぶっていつてやる。」

そしておぶっていくスバル。

「私、重いわよ・・・？」

「別に重くない。頼むから胸を押し付けなしてくれ・・・／＼」

「スバルだからいの。・・・それとも、大きい胸って嫌い・・・？」

「いや、そんなことはないんだが、恥ずかしいんだ・・・／＼」

多少ふらふらしながら帰路についた。

S
i
d
e

e
n
d

「ただいま……」

「お帰りなさ……シロン、何かありました……？ 顔が赤いんですけど……」

「な、何もないわよ！」

「怪しい……」

必死に否定して炊事場へ向かうシロン。

炊事場……

「スバル……」

「アイリス、なんだ、その子？」

「この人がお姉ちゃんの好きな人？」

「や、やめてえー！ 恥ずかしいよおー！」

「だから誰？」

「初めまして！ スバルお兄ちゃん！ アタシアイリスお姉ちゃんの妹のデイルカですう！」

「カクサス、なんでこの子が？」

「実はな……」

カクサスはスバルに説明を始めた。

帰路で偶然出会い、袋にあった非常用閃光玉を使ったらこの子がい
た、と。

「ところでスバル。シロンとなにかあっただろう？」
「ギクウッ！」

カクサスの発言にビックリするスバル。

「な、なんでもない！明日は早いんだ、もう寝るぞ！」
「スバルうゝ．．．。私が作ったご飯食べてえゝ．．．」
「おっと、すまない．．．ってアイリスが！？」
「うん！．．．って酷いよおゝ．．．」

そんな愚痴（？）を言いつつもちゃんと食べるスバル。

「ど、どう．．．かな．．．？」
「．．．おいしい．．．！」
「ホント！？」
「嘘言ってどうする、事実だ。」
「ありがと！」
「うわっ！」

いつもの光景。

だが乙女の恋はまた一つ、確実に一歩進んだ．．．

報酬。

入手・クエストクリア

クエストに行っていないので無し。

その他

ディルカ。

それぞれの水着。

シロン、スバルにキスされる。

アイリスの料理スキルのレベルが1上がった。

第44話 お買物に行こう！＋強行デートとキス（後書き）

ついにシロンがスバルからキスを！

今回はディルカの説明です。

ディルカ

イヤンクツク雌、見た目9歳

性格…天真爛漫。

備考…モデルは『バカとテストと召喚獣』の『島田葉月』。髪は葉月よりもちよつと長めのピンク色。
くせっ毛ではない。

アイリスを慕っており、なぜか心を読める。
恋を全く知らないが、『好き』ということは何かはなぜか知っている。

名前の由来…『ディモルフオセカ』より。
花言葉は『元気』。

以上です。

次回は海！

お約束にお楽しみに！

第45話 海に来た！ナンパ男をやっつけた！（前書き）

45話です！

色々アレな話ですが・・・

では、どうぞ！

<大丈夫。可愛いって言ってくれますよ。>
<でもお・・・／／／／>
<うう・・・／／／／>

ナデシコとリナト、レノシアとナコルが来た。

水着はそれぞれ、

ナコル…黒のVネックラインビキニ

レノシア…パーカーで隠しているため不明

ナデシコ…黄色のセンターストラップのセパレート

リナト…白色のスポーツタイプのセパレート

だった。

「みんな揃っ・・・てないな。ウィリアは？」

「ここ・・・／／／（モゾモゾ）」

「ザザミらしいな・・・」

地面から顔を出すウィリア。

「スバルは寝てるぞ？」

「じゃあ私、皆のところへ行きますね。」

「私、スバルさんの隣にいます・・・／＼／」

「レノシアずるい・・・」

すつとスバルの横に行くレノシア。

「えへへ・・・／＼／」

「ん・・・」

スバルが寝返りを打った。

「ふふっ・・・（ふにつ）っ!？」

二人を見て笑ってしまったカクサスだが、背中に突如として出てきた柔らかな感触に驚いた。

慌てて後ろを見たら、リナトが後ろから体を隠すように抱き着いていた。

その横ではナデシコが顔を赤くしてその光景を見ていた。

「リナト!?!なんで後ろに!?!」

「・・・／＼／」

「やっぱり・・・見られるの恥ずかしい・・・／＼／」

「後ろから抱き着いた方が恥ずかしくないのか!？」

「・・・なんで・・・？」

「胸! 胸が当たってるから!」

「・・・? (下を見る) ・・・あ・・・あ・・・ひゃああっ! /
(ムギユウウツ!)」

リナト、自分のやったことで悲鳴をあげた。

原因は他にもあり、抱き着いたときのこすれで水着が少し擦れたのだ。

「ちよっ! リナト! 力を弱めろ! 胸が! 胸が強く当たるから! とうか、苦しいから!」

「やだ! 離れると胸が見えちゃう!」

「だったら直せ!」

「手を放したら見えちゃうの!」

「じゃあどう・・・」

「カクサス以外に見られたくないの・・・胸・・・ / / /」

「・・・レノシア、ウィリア、ナデシコ、たの・・・」

カクサスが助けを求めようとして三人を見たら・・・

「すう・・・すう・・・」

「くう・・・くう・・・」

「うつ・・・ぐう・・・」

二人はスバルに抱き着いて眠っていた。

スバルは寝苦しそうだった。

「あ．．．あ．．．／／／」

顔を真っ赤に染めているナデシコ。

「駄目だ、救いがない．．．」

「カクサス．．．お願い．．．／／／」

リナトが顔を赤くして涙目で訴えてくる。

「な、何だ．．．？／／／」

「か、カクサスに直してほしいの．．．、水着．．．／／／」
「んなっ！？／／／」

リナトの頼みにカクサスまで顔を赤くする。

「自分で水着直せないし．．．か、カクサスになら．．．私．．．

／／／
「ああもう！変な声出すなよ！？」

ガシッ！（ふにゅん）

「ひゃん！」

「出すなって・・・言っただ・・・ろっ！？（グイッ！）」
「ふゃん！」

水着問題解決・・・？

「カクサス、ありがと・・・／／／」

「ゝゝゝ！（ギユウツ！）」

「おわっ！な、ナデシコ！？」

「リナトだけずるいよ・・・。わ、私だって・・・だ、抱き着きた
かったんだよお・・・／／／」
「ちよっ、まっ！」

右往左往するしかなかったカクサスだった。

遊んでる娘達は・・・

「それっ！」

「えいっ！」

「わわっ、たっ、ひゃん！」

「アイリス、大丈夫？」

「お尻痛い・・・」

ビーチボールで遊んでいた。

近くの男の目を引くオプション付きで。

午後。

昼食を終えて・・・

「私、何か飲み物買ってきます。」

「私も・・・、行く・・・」

「私も・・・行くね。」

「気をつけてな。」

「はーい！」

「うん・・・（はうう、カクサスに見られるの恥ずかしいよお・・・）
／／／」

三人は飲み物を買に行った。

「・・・心配ね。」

「俺達がついていくか？」

「その方がくや、やめてください！＞スバル！」

「聞こえた！俺も行く！」

「私も行くわ！ライラ、皆をお願いね！」

「わかった！」

ライラに皆を任せて声のした方に向かった三人。

―それまでの経緯―

「二人ともカクサスさんが好きなんです。羨ましいです。」

「そ、そんなにやことにゃいでしゅ！／＼／＼」

「・・・はうう・・・／＼／＼」

女の子三人で海の家へ。

その間のことだった。

「あははは・・・あれ？」

レノシアが前から近づいてくる十人の男達を見つけた。

避けようとしても道を塞ぐようにしてしまう。

「おう、俺達と遊ぼうぜえ〜?」

「あの、私達あっちに用が・・・」

「用なんてほっというてさあ〜。」

「いえ、その・・・」

「どいて・・・くれない?」

必死になって拒む。

リナトはもう隠れてしまっている。

「後ろの娘も可愛いね〜。」

「ひい・・・」

「ほら、行こうぜえ〜?」

「や、やめてください!」

ー今ー

「いた!」

「レノシア! ナデシコ! リナト! 大丈夫! ?」

発見。

「ちっ・・・連れが来やがった・・・」
「やっちまうぞ！」

男達が突っ込んでくる。

「やられるのは・・・」
「そっちだ！」
「バカなマネしてんじゃないわよ！」

三対八。

相手は刃物所持。

一見すれば不利なのだが、そんなふうに見えなかった。

「はあっ！」
「ぐぼおっ！」
「おらあっ！」
「ガッ！」
「それえっ！」
「ぐはあっ！」

あっという間に数が減る。

残り二人になった。

「ひいい・・・」

一人逃げ腰になる。

だが、もう一人は・・・

「ひっ・・・」

「動くな！こいつが大変なことになるぞ！」

「ちいっ・・・」

リナトが人質になる。

刃物は水着の胸の部分に向けられている。

「おめえがこいつの彼氏みたいだな・・・こいつのやらしい姿をおめえに見せてやる・・・。ヒヒッ！」「や、やめ・・・」

男の手がリナトの胸に伸びる。

そして・・・

ムニユツ！

「やあっ！」

「ヒヒヒ・・・」

「や、やっ！ふあっ！ああん！んあっ！（カクサス・・・助けて・・・）」

胸を揉まれるリナト。

そんなことに動けないスバル。

しかし・・・

「女の子の想いを踏みにじるなんて・・・許さない・・・！」
「貴様だけは・・・許さん！スバル・・・援護を頼む・・・」
「あ、ああ！」

カクサスとシロンの怒りが限界になった。

「や、やめろ・・・」

「はあっ！」

ガッ！

「ゴフッ！」

「はっ！」

キュボツ！

「ぎゃあああああ！」

「ふっ！」

ドスッ！

「あ．．．が．．．」

ドサッ。

スバルが男を突き飛ばした瞬間、カクサスがリナトを救出した。

その後、シロンが『火炎砲』を放ち、カクサスが鳩尾に掌底を決めた。

「リナト、大丈夫か！？」

「カクサス．．．ぐすっ．．．こ、こわ、怖かったよお．．．ひっく．．．わ、私．．．エッチな娘だって．．．えぐっ．．．思っちゃった．．．？．．．すん．．．」

「そんなこと思ってない。大体、すぐにそう考えるか？」

「．．．うええええん！」

「カクサス．．．私も怖かったよお．．．」

「．．．思い切り泣くか？」

「うっ・・・ううっ・・・ふえっ・・・ふえええええん！」
「泣けばいいさ。気が済むまでな。」

抱き着いて泣き崩れるナデシコとリナト。

その二人を優しく慰めるカクサス。

「レノシア、お前は大丈夫か？」

「スバルさあん・・・ぐすっ・・・」

「・・・大人しく甘えたら？」

「ううっ・・・うわああああん！」

スバルもレノシアを慰める。

三人が皆のところへ戻ってきた。

「スバル！カクサス！シロン！遅かったじゃない！」

「心配したんですよ！？」

「何かあったの！？」

「実は・・・」

シロンが説明中・・・

「・・・最低ね。」

「本当ね。・・・でも、安心しきっている顔ね・・・」

「リナトなんて幸せそうな顔だよ・・・？」

「レノシアもナデシコも。」

『すう・・・すう・・・』

スバル達は泣き疲れて眠っている三人をおぶっていた。

「・・・帰ろうか。」

「そうですね。」

「そうしたいわ。・・・なんか疲れちゃった。」

スバル達は帰りはじめた。

「カクサス・・・。私・・・あなたが大好きだよ・・・むにゃ・・・」

「ふふっ。ありがとう。」

リナトの寝言に答えたカクサスだった。

大変な海へのお出かけは、こうして終わりを告げた。

報酬。

入手・クエストクリア

クエストに行っていないので無し。

その他

ハプニング多数発生。

シロン、『火炎砲』使用可能に。

リナト、寝言で告白した。

第45話 海に来た！ナンパ男をやっつけた！（後書き）

今回は色々書くのが大変でした。

「ねーねー、私達が呼ばれたのってなんで？」

「あたしも気になるー。」

「わ、私も・・・」

では、発表します！

アクセス件数が・・・

PV200000件、ユニーク20000件突破しました！

「おめでとー！」

「すごい！」

「・・・ビックリ。」

皆さんのおかげです。

『ありがとうございました！』

前の人気投票・『嫁にしたいのはどの娘？』ですが、追加しますの
で、整理を。

アイリス

ナコル

ウィリア

シロン

レノシア

ライラ

ナデシコ

リナト

です。

6月いっぱいまで受け付けることにしましたのでよろしくお願いします！

次回はナコルがスバルとデート！

『だ、だめ（ですう）！そ、それはあ！』

お楽しみに！

『だめええええっ！』

第46話

初めてのデートは大人なデート！？本能に従う乙女に戸惑うスバル

46話です！

今回は前回お知らせしたとおり、ナコルとスバルのデートですが、後半は暴走しました（私が）！

では、どうぞ！

第46話

初めてのデートは大人なデート!?! 本能に従う乙女に戸惑うスバル

朝、スバルの家から・・・

「ぴぎゃああああああっ!」

悲鳴があがった。

「ウィリア!?!」

「どうした!?!」

「なにかあった!?!」

スバルとカクサスとライラがウィリアの部屋へ。

「か、身体中が痛いよぉ・・・しくしく・・・」

『・・・(ガクッ) 筋肉痛か・・・』

「た、助けて・・・」

とりあえずの処置を施してウィリアは落ち着いた。

「今日は・・・」

「私と・・・デートですね・・・／＼／＼」

「・・・そうだった。」

「だ、だめえ！あたしが・・・いたたたたた！」

「ウィリアさん！？ダメですよ、無理しちゃ！」

「あうう・・・」

「ウィリアお姉ちゃん、大丈夫？」

「デイルカ、ありがと・・・」

「ハニー・・・」

「さ、行きましょ♪」

「あ、ああ・・・」

スバルとナコルは二人きりで出かけていった。

「いいな～・・・」

「・・・くすん。」

アイリスが羨ましがり、レノシアが涙目になっていた。

一方シロンは・・・

「・・・だめ・・・まだ・・・早いわ・・・むにゃ・・・」

夢を見ていた。

「・・・で、どうするんだ？」

「・・・実は・・・」

「・・・何も考えてない、無計画だった、と？」

「はい・・・。でっ、でも！」

「俺も同じだ・・・」

「・・・えいつ。」

ギユウツ（ムニツ）！

「な、ナコル！？い、いきなり何を・・・！？」

いきなり腕に抱き着くナコルに驚くスバル。

「だって・・・私だってスバルが好きなのに何もできないんですもん・・・。だから・・・／／／」

「・・・／／／」

お互いに顔が赤くなる。

「す、スバルなら・・・、私・・・／／／」

「さ、さあ！どこか行くぞ！」

「ああ、ちょっと待ってください！」

スバルはナコルを引きずる勢いで歩きだした。

「・・・／／／」

「な、ナコル、ちょっと離れてくれないか？恥ずかしいし、歩きづらい・・・／／／」

「い、嫌です・・・。私だけ遅れをとるのは嫌なんです・・・／／／（ギョウウウッ！）」

より力強く腕に抱き着くナコル。

「ナコル・・・、む、胸が・・・」

「・・・スバルだからできることなんですよ・・・？／／／」
「と、とりあえず行くぞ！」

焦って歩きはじめたスバル。

昼。

スバル宅。

「おふぁよぉ．．．」

「珍しいね、シロンがお寝坊さんなんて。」

「ちよっとね．．．」

「シロンさんの部屋の前をたまたま通り掛かったら、部屋から『だめえ』とか『やつ、そこは．．．』聞こえましたし、こっそり見てみたらくねくねしてましたよ．．．?」

「なっ．．．み、見たの!?／／／」

「気になっちゃって．．．」

『．．．(じーっ)』

「な、なによ．．．」

「．．．アイツとなにかあった?」

「っ! な、なにもないわよ、なにも．．．／／／」

「顔が赤くなってるよ?」

「．．．っ．．．／／／」

「スバルとキスしたの?」

「／／／．．．／／／」

「顔が真っ赤ですね．．．」

「／／／っ!／／／(ダッ)」

「あっ! シロン!」

ボタン!

「．．．やり過ぎだ。」

「私もそう思うな・・・」
「・・・私も・・・」
『・・・』

気まづくなった。

シロンの部屋。

「あううう・・・（は、恥ずかしいよ！き、聞かれてたなんて
・・・！スバルの顔見られないよ・・・／／／／」

布団に潜り込んでしまっていた。

スバル達は昼食を済ませ、公園にいた。

「誰もいないんだな・・・（は、恥ずかしくなってきた・・・／／
／／」
「・・・あの・・・スバル・・・お、お願いが・・・／／／／」

二人で歩いていたらナコルがスバルにお願いがあったと言った。

「な、なんだ・・・？」

「わ、私に・・・き、キス・・・してくれませんか・・・？／／／／」

「なっ・・・おまっ・・・／／／／」

「お願いします！アイリスが羨ましくて・・・！」

「待て、少し考えろっ！」

「（ガッ！）きゃあっ！（ガシッ！）」

「うわっ！」

ズテッ！

ナコルがスバルにキスを懇願し、スバルが肩を少し押した結果、足をもつらせてしまい、倒れてしまった。

「痛つつ・・・ん？・・・なんか地面が柔らかい・・・？（ふにゅっ）」

「ふあっ・・・」

「ふにゅっ？・・・（下を見る）」

「んうっ・・・」

スバルが（事故だが）ナコルを押し倒している状態だった。

倒れた時にナコルの胸を触っていたらしい。

「す、すまんナコル！」

「・・・／＼／」

「すぐに退くか」「こ、このままキスしてください・・・」はあっ！
「？」

突然の話。

「ちょっ、えっ、はあっ!？」

「お願いします・・・／＼／」

「っっ!どうなっても知らないからな!？」

「ひゃっ!？ふむっ!？」

スバルは抱き抱える形でキスをした。

「・・・ん・・・」

スバルに全てを委ねるかの如く、目を閉じ何もしないナコル。

「・・・はあっ・・・」

「・・・」

「ナコル？」

口を離れた後、ナコルの様子がおかしいことに気がつく。

「・・・にゃ。」

「にゃ？」

「にゃゝゝ！」

「ぐえええっ！ナコル！？どうしたんだ！？」

ナコルが暴走した。

「ふーっ、ふーっ・・・」

「眼が赤くなってる・・・。まさか、怒り状態に！？」

「（ふるふる）にゃん♪」

「ナルガクルガは飛龍とはいえ猫に近い・・・。服が擦れてきいても恥ずかしがらない・・・。まさか・・・発情・・・？（汗）」

とんでもない事実気づいたスバル。

「・・・っ！（ドンッ！）」

「ひにゃん！」

「逃げなきゃならねえ！今のナコルは危険だ！」

スバルはナコルを突き飛ばし、家に向かって走りはじめた。

ただ、今のナコルに捕まったら大変なことになるのを理解したため、大通りを避けるルート、林道を選んだ。

「にゃんんん！」

ナコルもスバルを追いかけて林道に入った。

スバル宅・シロンの部屋。

「ちょっと近くを歩こつと・・・」

シロンは部屋を出て、近くの林道を歩くことにした。

「よし、近くに「にゃんん♪」ぐほあっ！」

ついにスバルはナコル（発情状態）に捕まった。

「ぐおお・・・」

「・・・（ペロペロ）」

「やめろ、くすぐりたい！」

「ふーっ、ふーっ・・・」

「服を脱がそうとするなああっ！」

スバルはナコルをもう一度突き飛ばそうとした。

ムニユウッ！

「にゃ！？」

「す、すまん！」

肩を押そうとしたら、間違えて胸をわしづかみしていたスバル。

「（ぐいぐい）ふにゃ・・・あ・・・にゃん・・・」

自らの胸にスバルの手を押し付けはじめたナコル。

「これはもうダメか・・・！？」

スバルがそう思った時・・・

ガサ。

「（誰か来た！）」

「・・・スバル？」

スバルにとっての救世主、シロンが来た。

「スバル、どうし・・・な、なにやってんのよ・・・!?」

「事情は後で話す！まずはナコルを剥がしてくれ！」

「にゃ・・・あん・・・。・・・にゃっ!?・・・ふしゃーっ！」

胸を掴まれ喘ぎ声（猫声で）を出していたナコルだったが、シロンがいることに気づくと威嚇し始めた。

「ちよっ、眼が赤くなってるじゃない!? 怒り状態なの!?」

「どうも発情したらしいんだ！」

「発っ・・・ナコル、離れなさい！（ガシッ!）」

「にゃっ!?」

シロンがナコルの肩を掴む。

「にゃゝにゃゝ!」

「は・な・れ・な・さ・い・よ!」

「にゃゝあゝ!」

「いだだだだっ！」

シロンが引きはがそうとしても、ナコルはいやいやと首を振りつつスバルにしがみつく。

「にゃっ！（ガブッ！）」

「痛っ！？」

「にゃゝにゃゝ！（いやいや）」

「くっ……。本能で動いてるのかよこれ！？」

「にゃん……。♪（ゴロゴロ）」

シロンの手に噛み付き、スバルに抱き着くナコル。

「すまん、ナコル！（ドスッ！）」

「ふぎゃっ！？。。。きゆう。」

ナコルの首に手刀を決めたスバル。

「お、終わった。。。」「

「そうね……。さあスバル、何があったか教えて。。。？」「

「わ、分かった。教える！教えるから！」

「ん・・・」

ナコルが目を覚ました。

「あれ・・・スバルにキスされた後の記憶が・・・」

「なかったならいい。」

「スバ・・・ル・・・」

ナコルはスバルを見て唾然とした。

シロンは顔を赤くし、スバルはなぜかボロボロだった。

「・・・まさか・・・」

「ナコルが暴走したただだよ、気にするな。」

「はい・・・」

こうしてナコルのデートは終わった。

報酬。

入手・クエストクリア

クエストに行っていないので無し。

その他

ナコル、スバルにキスされる。

ナコルの発情モード解除キーが『スバルからのキス』と判明。
ウィリア、筋肉痛に。

第46話

初めてのデートは大人なデート!? 本能に従う乙女に戸惑うスバル

今回、ナコルが暴走しました……。スバルからのキスで……。

そして猫化して発情……

今回、ナルガクルガの怒りモードはナコルの場合は発情モードとして扱いました。

次回は、アイリスが料理を頑張ります！

お楽しみに！

第47話

「アイリスの料理修業!師は・・・ディルカ!?!」+「『発情モ

47話です!

アイリスの料理修業だけだと凄く短くなってしまうかもしれないと思ひ、もう一つ混ぜました。

『発情モード』解除方法はなぜ判明したか・・・

本文で!

では、どうぞ!

第47話

「アイリスの料理修業!師は・・・ディルカ!?」+「『発情モ

朝。

「昨日は疲れたな・・・ふあゝあ（ムニツ）「ん・・・」・・・はい?」

欠伸して腕を下ろしたときにした柔らかな感触に疑問を持ったスバルが横を見ると・・・

「すう・・・すう・・・」

右にはシロンが下着姿で（胸の上にスバルの手が置かれている）、

「すにゃ、すにゃ・・・」

「猫耳!?!いや違った、クルガ耳!?!」

左にはナコルがなぜか発情モードで裸で寝ていた。

「・・・っ!?!（ガバツ!）・・・無事だ・・・」

スバルは何もされていないことを確認した。

「もう一度寝れば夢だと分かる。もう一度・・・」

スバルはもう一度寝た。

その数分後。

「にゃ・・・」

ナコル（発情モード）起床。

なぜナコルが発情モードになっていたのか。

それは、ただ単にスバルの部屋の前に来てドキドキしてしまい、なっただけなのだ。

簡単に言えば、気持ちの制御があのかから難しくなってしまったのだ。

「にゃん・・・（ぴとっ）♪」

スバルに猫が甘えるように引っ付くナコル。

同時に・・・

「ふあ・・・」

シロン起床。

「あれ、なんでナコ・・・ル・・・が・・・」

シロンはナコルを見て絶句した。

「ナコル！服を着なさいよ！」

「ふにゃ・・・にゃん♪（すりすり）」

「き、聞いてない・・・。・・・いい加減にしなさいっ！（グイッ）」

ナコルを引き放す。

「にゃ・・・ぐす。」

「これで戻るかしら・・・」

そして・・・

「あ、あれ、私・・・ひゃあああっ!？わ、私、な、なんで裸なんですか!？」

「・・・真実、知りたい？」

「お、教えてください！」

「おかしくならないでね・・・。ナコル、あなた『発情』しちゃったのよ。」

「発・・・情？」

「そう。昨日も今日もあなたはエッチな女の子になってたの。無意識にね。」

「え・・・ええっ!？じ、じゃあどうすれば!？」

「慣れるしかないわね・・・」

「あうう・・・」

炊事場。

「（グシャッ!）きゃっ!・・・また失敗したあゝ・・・」

アイリスが料理をしようと卵を割ろうとして、失敗していた。

「お姉ちゃん、何してるの？」

「ディルカ・・・。ちょっとお料理の練習してたの。」
「スバルお兄ちゃんのた「だ、ダメ！言っちゃダメ！」もごもご・・・」

慌ててディルカの口を塞ぐアイリス。

「もぉーっ！皆にばれちゃったらどうするのよぉー！」
「ごめんなさい・・・。あ、じゃあじゃあ、アタシがお料理教える！」

ディルカが料理を教えると言った。

「ディルカにできるわけないよ。」

「むうっ！お姉ちゃんよりは卵うまく割れるもん！」

コンコン。

パカッ！

「嘘・・・なんで・・・」

「でしょ！？アタシならお料理教えることできるもん！」

「くうう・・・。ディルカ、お願い・・・」

「分かったー！」

「妹にお料理習うの恥ずかしいよぉ・・・」

こうしてアイリスはディルカに料理を習うことになった。

ディルカの料理教室は困難を極めた。

「まずは卵割りだけど・・・お姉ちゃん、持ち方おかしいよ？」

「え？ こうじゃないの？ (コンコン、ココココ!) えいっ! (グシヤッ!) ひゃあああっ!？」

「お姉ちゃん、力入れすぎ!」

「ふええくん・・・。手がべとべとだよお・・・」

卵の殻を壮大に破壊し・・・

「じ、じゃあもう一回やってみよ!？」

「う、うん! (コンコン)・・・あれ・・・ (コンコン)・・・あれ? (コンコンポッ)・・・」

「不思議な欠け方だね・・・」

「(ふりふり) ひっくり返しても出てこない・・・。・・・もおーっ! 出てきてよおーっ! (ブンブン)」「お、お姉ちゃん!」

ドロオ・・・

「・・・しくしく・・・」

「卵の中で溶き卵ができた・・・」

卵を殻の中で混ぜる荒業を見せ・・・

「次は卵を焼くけど、弱火でやらないと焦げちゃうよ？」

「わ、分かってるよ！（カチッ！ボオオオオオッ！）わっ！わっ！あち！あち！」

「お姉ちゃん！火、火を消して！」

「ど、どう消すの！？」

「落ち着いて！ここ捻るの！」

火を使うときには火柱を立ててしまい、パニックに陥り・・・

「・・・（ぽおー・・・）／／／」

「お姉ちゃん？お姉ちゃん！」

「ん？にやに？」

「ぽけーっとしてないでよ！茹で上がってるよ！？」

「茹で上がっ・・・わわわ！」

カチッ！

「・・・くすん。」

「・・・（パクッ）・・・マズッ・・・。煮えたぎっていたからね・・・」

「あうう・・・」

呆けてしまい、茹でるだけのものを煮物としてしまい・・・

「(ちゃっ、ちゃっ、どざっ!) あっ! . . . デイルカあゝ . . .
「もゝ、ドジだなあお姉ちゃんは。」

水切り中にザルが手から滑り、中身をぶちまけてしまい . . .

「んしょ、んしょ (ザク!) いったああああい!」

「お姉ちゃん! ?」

「ううゝ . . . 指切っちゃったあゝ . . .」

「見せて? . . . 大丈夫、浅い傷だよ。」

極めつけに指を切ってしまった。

「 . . . (はむっ) いひゃひよお (訳..痛いよお) . . .」

「お姉ちゃん、お料理向いてないのかもしれないね . . .」

「ひうっ! . . . くすん。まえふあひゃんひよひえひえいひゃに
よににゃ (訳..前はちゃんとできていたのにな) . . .」

「頑張ろっ! いっぱい練習すればできるようになるよ!」

「 . . . うん!」

デイルカに促され、アイリスは再びやる気になった。
が . . .

「ひゃあああああああ！」

「お姉ちゃあああん!？」

うまくいくのか怪しまれる状況になっていた。

数時間後。

スバルとクリムが話しながら帰ってきた。

「・・・クリム、俺をナコルの発情モード封印の犠牲いけにえにしないでくれ・・・。失敗する度に襲われかけて、結局失敗しちまったんだからね・・・。」

「でも原因はスバルみたいっすよ？押さえ付けていたスバルが好きっていう想いが爆発してあんなふうになっちゃったんすから。」

「だがなあ、そのおかげで・・・。」

スバルは自分の腕を見る。

「にゃあ・・・♪」
「・・・♪」

左にはナコル（発情モード）、右には何やら様子のおかしいシロンが・・・

「失敗の余波でシロンまでもが発情するとはな・・・。シロン、レ
イアだろ？猫じゃなくて龍が発情って・・・」
「シロンも想いが爆発したみたいっすね。」

「他人事だと思って・・・」

スバルがそう言い終わる前に・・・

「にゃっ！（ムニイツ！）」
「・・・！（ムニユン！）」

二人が自分の胸を押し付けるといふ行動に出た。

急にこんな行動に出るわけだから・・・

「うおっ・・・ごふっ！」

倒れた。

「お前ら、いい加減にしがっ!？」

「にゃん・・・／＼／＼」

「・・・／＼／」

二人同時にのしかかった。

「う・・・ぐ・・・お・・・（か、肩!肩は!?!肩はどこだ!?!）」

スバルは肩を探していたが・・・

ムニイツ!

「ふにゃん!（ビクン!）」

「・・・っ!（ビクン!）」

二人の胸を掴んでいた。

「ああ・・・二人の目が妖しく光ってるっす・・・・・・あや?この匂いは・・・」

あわや大惨事になるかと思われたが・・・

「(ぴくっ!) あれ、私……」

「(ぴくっ!) ん……? ……って! な、なんで半分裸になっているの! ?」

「どちらも俺が倒れていることに気づいてないな……。しっかし、いい匂いだな……」

「ほ、本能っすね。本能で動いていたから匂いで戻ったっすか……?」

事態が収束し、四人は炊事場に向かった。

炊事場。

「おお……」

「すごいです……」

「えへへ……」

「これ、全部アイリスが! ?」

「そだよ。」

「私が教えたの！」

「妹に料理習うって・・・」

「い、言わないでえ〜！」

やっぱり起こるアイリス弄り。

「じゃ、食べてみるか。」

「そうですね。」

「なんか、毒味をさせられる気分ね・・・」

「ち、違うよお！」

「まあ、食べてみるか。」

パクっ。

『美味しい・・・』

「ホント！？ホント！？嘘じゃないよね！？」

「嘘じゃないわよ！美味しいわ！」

「そうですよ！」

「よかった・・・。よかったよお・・・ひつく・・・」
『・・・』

美味しいと言われ、思わず泣いてしまうアイリス。

「（ポン）アイリス、頑張ったんだな……。ありがとな。」
「うん……。（ギュッ！）うん！ぐすつ……。」

アイリスは嬉しそうにスバルに抱き着いた。

「スバルお兄ちゃん、お姉ちゃんはね、卵がうまく割れ「ダメええええっ！」ふがふが……。」

ディルカが何かを言いかけるが、アイリスがすぐに口を塞いだ。

『何となく分かった気が（するわ／します）……。』

ナコル・シロンは溜息を次ついた。

だがスバルは……

「練習すればできるようになるさ。」
「……うんっ！」

アイリスの顔に笑顔か浮かんだ。

報酬。

入手・クエストクリア

クエストに行っていないので無し。

その他

アイリス、卵がうまく割れないこと判明。

ディルカ、手先が器用で、姉よりも料理が上手。

シロン、発情モード覚醒。クリムのせい。

発情モードを抑える方法が本能を他に向けることだと判明。

第47話

「アイリスの料理修業！師は・・・ディルカ!?」＋「『発情モ

今回は『発情モード封印』で何をしていたか？なぜシロンが『発情モード』覚醒したのか？

それを解説します。

← クリムがナコルにモード発動するように囁く。（目的は発情の我慢）

← ナコルが我慢できず、モード発動。

← 無理矢理止める。

← ……繰り返し

← その光景を見ていたシロンが我慢できなくなる。

← シロン、『発情モード』覚醒、スバルに飛び掛かる。

です。

次回はデート・・・ではなく、スバルとカクサスが火山へ！
そして『原作にMH3の追加』の意味が・・・

お楽しみに！

キャラ紹介まとめ(前書き)

『キャラ一覧を作ってほしい』と要望があつたので作りました！

まだまだ増えるのでそのつど追加します！

(クシャルダオラのシャルは詳細をまだ明かせないのでありません)

キャラ紹介まとめ

スバル

18 male

身長185cm。

基本武装は太刀、というハンター。

女性とまったく接点が無いので女性に弱い。

お気に入りには鬼哭斬破刀。

お守りにフルフルの小さな皮を持っている。

ランゴスタを憎たらしく思っている。

アルとは友人。ただ、アルの性格に困っている。

視力は物凄く良い。が、バサルモスに左目をやられ、左目は失明。

負傷時の回復力が常人の比ではない。

先輩がいたが、行方不明。その仇であるバサルモスを敵視している。
(リナトは別)

ハンターランクは4。後、6に飛び級昇格。

ノブ

アイルー。

スバルがハンターになったときから一緒にいる。そのためスバルあつてのノブ、ノブあつてのスバルという関係ができた。

手先が器用で、スバルの武器、防具は彼が作った。

服作りの神になりつつある。

戦闘は切断型。

爆弾にはあまり近づかない。

スバルの女性苦手克服に尽力し、その度に叱られる。

アイリス

イャンクック雌

身長は156cm。

見た目14歳。

胸のサイズはD+。後、E+に成長した。髪はピンクで長め、癖っ毛で2本髪が立っている。

お肉大好き。特に好きなのは、スバルの焼いたお肉。（そのため太りやすく、大変な目に逢う）

一応料理が可能だが、よく失敗する。卵がうまく割れない。

カナヅチでドジっ子、ちよつと怖がり、蜂が嫌い。

妬きもちやき。

金銭感覚ゼロ。

酔うと暴走する。

ハンターランクは3。

武器は片手剣。

名前の由来は、菖蒲の英語、『アイリス』より（後で知りました）。

ナコル

ナルガクルガ雌

身長は160cm。

見た目14歳。

胸のサイズはFー。

基本的に敬語。名前は呼び捨て。

髪はかなり長く、膝くらいまである。

心配性。

家事万能、手先も器用で料理は殆ど作ることが可能。

気持ちが高ぶるか誰かに『エッチなこと』を囁かれると『猫化発情モード』になってしまう。

ハンターランクは2。

武器は太刀。

ウイリア

ダイミヨウザザミ雌

身長145cm。

見た目13歳。

胸のサイズはBー。

。 恥ずかしがり屋だが甘えんぼでわがまま（本人は断固否定している）

怖がり。

感情移入しやすく、顔によく表れる。

髪の毛は藍色、触覚のように髪の毛が2本はねている。髪が長い。

キノコ大好き。

暑いと裸で寝ちゃう。

唯一スバルの過去を知っている女の子。

ハンターランクは3。

武器は弓矢。

必殺技は『高圧水流砲発射』。名前の由来は藤の英語、『ウィスレリア』から

クリーム

ヤオザミ雌

身長138cm。

見た目9歳。

口癖は「っす。」

サイズはA-。

肩にかかる長さの栗色の髪の毛。癖っ毛。

明るい性格だが、根はまじめ。

特技はフライパン攻撃。最近では叩いた相手に『ありがとうございます』と言わせられるようになった（元ネタ…『警部補 矢部謙三』より）。

名前の由来は、菊の英語『クリサンシマム』より。

シロン

リオレイア

身長162cm。

見た目18歳。

胸のサイズはF+。

温厚。スバル限定で甘えん坊になる。

怒ると背後に般若を見せる。

妄想壁が少しみられる？

髪は銀髪のみドルヘア。

偶然『発情モード』覚醒。

必殺技は『火炎砲』。

武器は双剣。

ハンターランクは2。

名前の由来は、柚子の英語、『シトロン』より。

ローズ

ショウグンギザミ雌

身長145cm。

見た目13歳。モデル…容姿『とある科学の超電磁砲』・『白井黒子』と『バカとテストと召喚獣』・『清水美春』。この二人を足してそのままにしたようなもの。

同性愛者。ウィリアが好きで、彼女を『ハニー』と呼ぶ。ライラはお姉さま（自称）。

超がつくほどの変態。

アイリス曰く、見た目は可愛いらしい。

クリムのフライパンの基本的対象。

ウィリアに二日会えないだけで発狂、机に頭をぶつけだす。名前の由来は、薔薇の英語、『ローズ』より。（見た目は可愛いのに、性格があんなだから、というアイリスの主張により決定）

カクサス

ディアブロス雄

身長182cm。

見た目18歳。

短髪、黒髪。

言い方が少し古めかしい。（台詞に漢字が多いのもそれゆえに）

スバルに会うまでは自分の強さを磨くため旅をしていた。

「正々堂々と戦い貫く」という騎士道精神を持つ。

恋については意外と疎い。

クリーム以外でローズを止めることができる。

武器は無装備。拳で戦う。

ハンターランクは3。

アスカ

ディアブロス雌

身長142cm。

見た目13歳。

モデル…『暁のアマネカと蒼の巨神』の『アマネカ・マツハバスタ
ー（知っている人いるのかな）』

極度のブラコン&『お兄ちゃん最強主義』者。お兄ちゃん大好き。

髪は黒色で長い。

胸はウィリアよりぺったんこ。かろうじてA+。

夢は『カクサスと結婚』という、実現不可能なもの。

カクサスに彼女が出来たと知った途端、カクサスを刺そうとした。

レノシア

イヤンガルルガ雌

身長152cm。

見た目15歳。

モデル…『萌え萌え2次大戦(略)2』の『ゆきかぜ』

胸のサイズはC。

髪の色は紫。かなり長い髪。

性格は一途で純情、ウブ。

怖がり。

ほぼ敬語で話し、『くさん』と呼ぶ。

体が弱く、少しの運動で息が上がり、顔が青くなることも。

名前の由来は、コチヨウランの学名、『ファレノプシス』より。花言葉は『貴方を愛します』

ライラ

フルフル雌

身長161cm。

見た目14歳。

モデル…『とある化学の超電磁砲』の『御坂美琴』

容姿はそのまんま美琴。

スバル限定でツンデレ。基本は優しい。

名前はライラックより。花言葉は『友情』

ナデシコ

ディアブロス亜種（雌）

身長153cm。

見た目16歳。

長い黒髪で、膝までの長さ。

性格はおとなしく、臆病、怖がり。

一人ぼっちになったりなど孤独になることや、幽霊が嫌い。

胸のサイズはC+。

名前の由来は撫子より。花言葉は『純愛』

リナト

バサルモス雌

身長152cm。

見た目16歳。

胸のサイズはD+。

恥ずかしがり屋、自分の意志はしっかり伝えたいところあり。怖がり。

髪は灰色で長い。フェイトみたいな感じで縛っている。

カクサス相手にはかなり恥ずかしくてしまう。（完全に一目惚れ）

嫌いなものは幽霊、怪談などの怖いもの。聞いただけで卒倒。

特定条件下で『発情モード』に。（その時は彼女らしくなくなってしまう）

名前の由来は、トリトマより。花言葉は『切実な思い』

ディルカ

イヤンクツク雌

身長139cm。

見た目9歳。

天真爛漫。だがしっかりしたところも併せ持つ凄い子。

モデルは『バカとテストと召喚獣』の『島田葉月』、設定は『けいおん!』の『平沢 憂』。

髪は葉月よりもちょっと長めのピンク色。
くせっ毛ではない。

アイリスの妹。

アイリスを慕っており、なぜか心を読める。

手先が器用で、料理が上手。

ちょっと心配性。恋を全く知らないが、『好き』ということは何かはなぜか知っている。

名前の由来は、『デイモルフオセカ』より。花言葉は『元気』。

アレックス

テオ・テスカトル

身長188cm。

見た目18歳。

一人称が『我』と高い身分の偉ぶっただけの感じがするが、本質は誠実、真の王の姿である。

割と苦勞人。

髪は『まじしゃんず・あかでみい』の『佐久間 榮太郎』の髪を紅くしたような感じ。

タリスとアルテアに毎日迫られ、うんざりしている。

名前の由来は、『アレキサンドロス』の略名から。
王なので。

タリス

ナナ・テスカトリ
身長165cm。
見た目17歳。
胸のサイズはD。

アレックスのことが大好きな、お姫様の口調の女の子。

性格は一途で正直、アレックスのためなら身体を差し出す覚悟すらできている程（アレックス自体はうんざりしている）。

料理の才能は天才的だが、裁縫が苦手。

髪は蒼色の長髪、ポニーテール。

名前の由来は、『ジギタリス』より。花言葉は『熱愛』。

アルテア

ナナ・テスカトリ

身長164cm。

見た目17歳。

胸のサイズはD+。

モデルは『まじしゅんず・あかでみい』の『タナロット』。

性格は一途で、少しわがまま。タリス同様、アレックスのためなら身体を差し出す覚悟すらできている程彼のことが好き。

料理以外の家事が得意。

名前の由来は、『立葵』の学名、『アルテアローズ』より。花言葉は『熱烈な恋』。

サンナ

アグナコトル雌

身長152cm。

見た目16歳。

胸のサイズはG。

元々は他の地方で妹と二人きりで過ごしていたが、ハンターによって住家を失い、雄のモンスターに襲われかけるなど悲惨な過去を持つ。

スバルに『お姫様抱っこ』してもらった（偶然）時に一目惚れした。

髪は紅く踝まで届く長さ。

性格は一途、甘えんぼ少しエッチ。そのため、たまに大胆な行動・発言をする。

胸が少し敏感（本人自称）。

名前の由来は、『われもこ吾木香』の学名、『サングイソルバ』より。花（木？）言葉は『恋慕』。

イシア

ウロコトル雌

身長148cm。

見た目14歳。

胸のサイズはEー。

サンナの妹。

髪は黒色、腰までの長さ。

性格は見た目はクール、感情がないなどと思われがちな感じだが、実際は泣き虫で甘えんぼ。姉のサンナを守ろうとして本来の自分を封印していた。

スバルの胸で大泣きし、そのうえ慰めてくれたスバルの優しさがきっかけでスバルが好きになった。

名前の由来は、『イキシア』より。花（木？）言葉は『秘めた恋』。

アル（準レギュラー）

18 male

スバルの友人。典型的なスケベ。スバルが持つフルフルの皮は彼とスバルが初めて討伐した記念に、として扱っている。彼も小さな皮を持っていて、スバルのと繋ぎ合わせることができる。

最近は伝言役しかしていない。

ハンターランクは3。

第48話 火山で会った、2種の古龍と異業のモンスター（前書き）

自分で自分の首を絞めたかのような48話です。

R115宣告はしておきますので、15歳以上の人以外はできるだけ見ないようにお願いします・・・

では、どうぞ！

第48話 火山で会った、2種の古龍と異業のモンスター

「石の素材がない！カクサス、火山へ行こう！」

「分かった！行こう！」

二人が火山へ向かおうとした理由。

それは、武器の素材に使う石が少なくなってしまったからだ。

「カクサス・・・どこ行くの・・・？」

リナトがカクサスに近寄り、話す。

「リナトか。火山へ採石に行くつもりだったんだ。」

「あの・・・、私も一緒に行っている・・・？／／／」

リナト、カクサスにおねだり（顔紅潮＋上目遣い）。

「・・・っ。仕方ないか・・・」

「三人で行「あたしも行く！」ウィリアか・・・、まあいいか。」

四人で火山に向かった。

火山。

「クエストでツアー形式のものだ、大型モンスターはいないだろ。」
「でも、剣持ってきてるね。」

「あくまでイーオス相手にする程度に使うだけだ。」
「じゃあ、行くか・・・リナト？」

カクサスが先へ行こうとして、リナトが動かないことに気づいた。

「・・・(うずうず)／／／」
「り、リナト？」

「・・・(もじもじ)／／／」
「カクサス、どうかしたか？」
「いや、リナトがな・・・？」

スバルが戻ってきた。

「・・・ん？(ぶんぶん)」
「・・・(ぽー・・・)／／／」

ウィリアが手を前で振っても反応しないリナト。

視線はカクサスの方を見続けている。

「・・・ウィリア、カクサスの手を持て。」
「うん。」

ウィリアにカクサスの手を持たせるスバル。

「何をする気だ？」
「嫌な予感がするからな……。その手を……」
「……ごくり。」
「……」
「……リナトの胸に。」
「や、やめろ！おい！」
「えいっ！（むにっ！）」

ウィリア、躊躇なくカクサスの手をリナトの胸に押し付けた。

「はうん！……カクサス……／／／」
「すまん、これは事故なんだ！」
「……カクサスっ！／／／（ギユウッ！）」
「うおっ！？」

リナトがカクサスに抱き着いた。

そんな光景を見たスバルは・・・

「嫌な予感が当たった・・・」

「嫌な予感？」

「カクサス、リナトは多分『発情モード』に入ってる。」

「なっ！？何故そうだと!？」

「は、発情・・・／／／」

「目がうつとりしていた。ナコルとシロンにも見られた状態だ。止めたかったら本能を別のものに向けるか気絶させるしかないからな。じゃ、頑張れ！」

「スバル！スバル！待っ・・・カクサスう・・・（ドサッ!）／

／／「待て！おい！リナト！しっかりしろ！リナト！」

「カクサス・・・、私のこと・・・好きにしていよ・・・／／／」

立ち去るスバル、止めようとしたカクサス。

その間にもリナトは迫ってくる。

「今は発情期なのか？」

スバルのささやかな疑問だった。

「リナト！リナト！」

「キス・・・して・・・／＼／＼（しゅる・・・しゅる・・・）」
「リナトお！」

「はっ！・・・カクサス・・・？・・・？」

元に戻ったリナトは上半身が涼しいと思い、見た。

・・・上が脱げかけた状態の自分を・・・

「いっ、いやああああああっ！」

「目が覚めたみたいだな・・・」

「・・・私のこと・・・嫌いになっちゃった・・・？」

「それはない。」

「・・・ごめんなさい・・・。ここに来てから急にカクサスのことが頭から離れなくなってる・・・。取られたくないって思っちゃって・・・」

「いいんだ。とにかく、スバルを追おう。」

「うん・・・！」

その頃のスバル達は・・・

「スバルう・・・（ふるふる）」

「ただのツアーのはずだろ！？なぜ、なぜここに・・・」

テスカトルとテスカトリ2体と見慣れないモンスターがいるんだ！？

ーそれまでの経緯ー

「よし、いつも使ってる採石ポイントだ！ツルハシあるな！？」

「うん！あたしも掘るよぉっ！」

「せいっ！（キン！）」

「えいっ！（キン！）」

「そらっ！（キン！）」

「それっ！（バキヤッ！）ツルハシ折れたぁ・・・」

「ほれ、新しいツルハシだ。」

「ありがとう！」

二人で採石ポイントを掘り続けた。

「これだけ掘れば・・・っ！足音・・・！？ウィリア、隠れるぞ！」
「う、うん！」

二人が隠れて数分後、テスカトルが来た。

「古龍・『テオ・テスカトル』だと！？」
「ええっ！？『狩りに生きる』に特集で載ってた古龍の！？」

二人が脱出を考えているうちに・・・

バサッ、バサッ、バサッ・・・

ズシン、ズシン、ズシン・・・

「『ナナ・テスカトリ』が2体！？」
「あうあう・・・」

二人は岩影に隠れ、様子を伺った。

すると・・・

ガアッ！

グオオッ！

ガオオッ！

・
・
・

「テスカトリ同士言い合っている・・・？」

経過を傍観していた二人。

そんな二人にさらに不運が起こる。

ゴポゴポ・・・

ガアアアッ！

キュイイッ！

「また別にモンスターが！？なんなんだよ、あいつらは・・・」

スバル達の目の前でモンスターが6匹。

ー今ー

「・・・なんとか隠れたぞ・・・」

「スバル!」

「カクサス!?!リナト!?!来るな!」

「来るなって・・・何だあいつらは・・・」

「知らん、だがあの新種はデータがいるな。」

「一体どうする気だ?」

「改良した強力麻酔玉で眠らせ、るっ!(ブンッ!)」

コツツ。

??:?

プシュウウウッ!

っ!?

!?

・
・
・

「改良じゃ済まない威力だな……。改悪か？」

「改悪だな。」

「改悪だよね……。」「

「……。 (こくこく) 」

麻醉玉の煙が全て消え去って、残った先には……

『すう……。すう……。』

麻醉効果で眠っている4人の女の子と、

「我らになにが起きた……。」「

一人の男が立っていた。

『……。』

カクサス達は呆然としていた。

「そこにいるのだろう。出てきてくれ。」
「ばれた！」

完全に発覚した。

「スバルう・・・」

「カクサス・・・」

「二人を置いて、俺達で行くか。」

心配する二人を隠し、男の前に出るスバルとカクサス。

「二人か・・・」

「いろいろあったところにこの騒ぎを起こして申し訳ない。」

「確かに都合は悪かった。・・・我以外はな。」

『は？』

男の発言に疑問を持った。

「我は『炎帝』アレックス、我が災難を一時的に止めてもらったことを感謝する。」

「あ、ああ・・・」

すぐに頭を下げられ、寧ろ困惑するスバル。

「アレックスと言ったか・・・、貴方は王なのでは？」

カクサスが尤もな質問をしたが・・・

「確かに我は王だ。だが、威張るだけが王の証拠と言えるのか？」

「た、確かに・・・」

「言えないな・・・」

アレックスは王と言いにくいだが、威厳はあった。

「アレックス、あと二人いるんだが・・・」

「4人だったのか。」

「ああ、女の子だから危ないかもしれないな。ウィリア！リナト
！」

「（ヒョコッ）だ、大丈夫なの・・・？」

「（ヒョコッ）・・・」

トテテテ・・・

「その人は・・・？」

「我はアレックス、怯えさせてしまったようだな。」

「だ、大丈夫です。」

「・・・（こくこく）」

「畏まらなくてもいい。気さくに呼んでもらいたいからな。」

「う、うん・・・」

「・・・（じーっ）」

リナトは周りを見る。

「り、リナト？」

「・・・？・・・何か違和感を感じるの・・・」

「違和感・・・？」

リナトが感じていた違和感。

それは・・・

「二人足りない・・・？」

蒼髪の女の子が二人、いなくなっていた。

そして・・・

「アレックスは私の恋人ですわ！」

「いいえ！私の恋人よ！」

その二人が口論を起こしていた。

「アレックス、お前・・・」

「あの二人が災難なのだ・・・」

「心中察する・・・」

「すまない・・・」

そう話していたら・・・

『アレックス!』

「な、なんだ・・・」

『あなたの恋人はどっち（ですの／なの）!?!』

「タリス、アルテア・・・人前でそんなことを聞くな・・・」

『そんなことは別に構わない（ですわ／の）!』

「構え!」

アレックスを取り合うタリス、アルテアと呼ばれた二人の女の子。

「アレックス、とりあえず安全な場所へ移ろう。ここだとイーオスが来るかもしれない。」

「あ、ああ。二人とも、行くぞ。」

『はい!』

「（息ピッタリだ・・・）」

「さて、俺はあの子らを運ばないとな。よっ！」
「・・・私が、こっちの子をおんぶしてく・・・」

二人がそれぞれ女の子を運んでいった。

Side スバルに抱えられた女の子

「・・・んっ・・・」

「おっ、目を覚ましたか。」

女の子が目を覚ましたのでスバルが声をかけた。

「・・・（とくん・・・）ぽおー・・・」／／／
「・・・どうした、じっと見て？・・・あ、名前は？」
「・・・さ、サンナです・・・（とくん、とくん・・・）」

スバルが女の子・サンナに聞くと、サンナの胸の鼓動が高鳴っている。

なんでしょうか、この人を見ると胸がドキドキします・・・／／／
私、この人が好きになってしまったのですか・・・？

Side end

「ベースなら問題無いな・・・」
「だろうな・・・よっと。」

スバルとリナトは運んでいたまだ満足に歩けなさそうな二人を寝転ばせたるか座らせた。

「さあ、アレックス！」
「どっちが恋人か言って！」
「・・・どっちも恋人ではない。」
『ガーン！！』

タリスとアルテアは愕然とした。

「アレックス・・・酷いな。」
「・・・スバルよりマシだよ・・・」

「・・・？とりあえず君が誰かを（ガッ！）おわっ！？」「へ・・・きゃあっ！」

ドシン！

石に躓き転ぶスバル。

サンナの上に覆いかぶさるかのように・・・

「はうっ・・・」

「痛たたたた・・・す、すまな」（ムニィッ！）ひゃあん！」す、すまん！」

スバルがサンナの胸を揉んでしまう『事故』発生。

「はうん・・・／＼／＼」

「す、すぐにど」「スバルを誘惑しないでー！」「ごふっ！？」「退こうとしてウィリアの上に乘られ、サンナの胸に顔が沈んでしまうスバル。」

「やっ・・・／＼／＼」

「羨ましいよ、大きい胸が羨ましいよおっ！」

ムニムニムニムニムニムニ・・・

「あん！はああん！いやっ！あっ！ら、らめっ！」
「（ダンドン！）んー！んんー！（息ができない！顔を上げさせてくれー！）」「このおー！」

遠くからその光景を見ていた二人。

「壮絶な光景だな・・・」

「・・・（カクサスにだったらあんなことされても・・・いいかな・・・）／／／」

「リナト？どうした？」

「な、なんでもない・・・よ・・・／／／」
「？」

リナトが妄想していたので、カクサスが聞いたら恥ずかしそうに答えた。

その眼前では・・・

「らっ、らめえ、らめれすう・・・ふああああっ！」「うわああああああん！（ムニムニムニムニムニ・・・）」

「・・・（も、もうダメだ・・・。頭が真っ白になってきた・・・（ぴくぴく））」

「・・・スバル！？ウィリア、すぐに退け！スバルが死にかけている！」

「なにっ！？・・・あれでは死んでしまうではないか！」

「あわわ、あわわ・・・」

慌てて救助を開始。

「ウィリア、どけ！」

「（ドン！）きゃっ！？」

「・・・ふっ！」

「・・・」

「ふああっ！」

すぐにウィリアを退かせ、スバルを救出。

「・・・ゲッホ！ゲホ！し、死ぬかと思った・・・」

スバル、復活。

「・・・大変な目に遭っているのだな・・・」

「・・・ああ・・・」

「・・・唐突ですまないが、我らもスバル・・・と言ったか？あなたの家に住まわせていたきたいのだが・・・」

「ん？ああ、それは構わないが・・・、部屋数足りたか？」

「分らん。」

「とりあえずサンナともう一人の女の子が歩けるようになるまで待つか・・・」

「サンナとは・・・誰のことだ？」

「サンナは彼女だ。」

スバルが指差したところには、ぐったりしているサンナの姿が。

「はっ、はひっ、はひっ・・・」

「あなたが悪いんだからね!？」

「わ、わらひによにゃにひゃいひえにゃきゃっひゃんれひゅか（訳..
わ、私のながいけなかったんですか）・・・?／／」

「むう・・・」

「止めとけウィリア。」

「むーっ! 大きい胸が許せないんだもん!」

「だったら他の皆はどうなんだ?」

「うぐっ・・・」

スバルによって助かったサンナ。

「大丈夫か?」

「ら、らいひようふれすう（訳..だ、大丈夫ですう）・・・」

「大丈夫そうじゃないな。・・・あの子も起こした方がいいか・・・」
「」

スバルは未だ眠っている女の子を起こしに行った。

「おーい、起きろー。」

「・・・（ムクッ）・・・（じーっ）」

「な、なんだ？」

「・・・あなた・・・、誰・・・？」

「俺はスバル。君は・・・？」

「あたし・・・イシア。『ウロコトル』なの。・・・サンナ姉さんは・・・？」

「う、『ウロコトル』・・・？」

「・・・姉さん、大丈夫？」

『ウロコトル』。

ポッケ村には今まで確認されていない種類のモンスター。

「い、イシアあ・・・／＼／＼」

「・・・姉さんをこんなにしたの、誰？」

『ウィリアだ。／スバル。』

やったのはウィリアだが、起爆剤になったのはスバルだ。

「どっちなのか分からないけど、姉さん、今の顔見たら気持ち良さそうだよ・・・？」

「しょ、しょんにゃころにゃいれしゅよ（訳・・・そ、そんなことないですよ）・・・／＼／＼」

『わ、分かん・・・』

イシアとサンナの会話にはスバルとカクサスは食い違いがあるよう

に見えた。

「・・・お願いがあるの。・・・あたしたちを、守ってほしいの・・・」
『・・・？』

イシアの口から出た『守る』という言葉。

その意味がよく分からず、頭に？を浮かべる。

「あたしと姉さんはこの地域にいないモンスター、『アグナコトル』と『ウロコトル』なの。」

「に、2種とも聞いたことないな・・・」

「だから、ハンターに狙われるし雄のモンスターには襲われかけるし・・・」

「（ギユウ・・・）・・・サンナもイシアも、辛い思いをしたんだな・・・」

「・・・」

スバルがイシアを抱きしめた。

イシアはスバルの突然の行動に呆然とする。

なぜスバルがこの行動をとったのか。

それは、スバルも同じような境遇であったためであり、その辛さが

よく分かったからだ。

「大丈夫、俺達を守る。もう気を張る必要もない。甘えたい奴に甘えればいいんだ。」

「・・・ふえっ、えぐっ・・・」

「泣きたいなら泣け。泣いてすっきりした方がいいぞ。」

「うわああああああん！」

イシアは泣いた。

自分達が背負っていた重圧から解放されたことに安心したからだ。

少しの間だけだったが、気丈に振る舞っていた彼女が流した涙は彼女達に幸せが訪れたことを、二度とハンターに襲われないことへの安堵を物語っていた。

イシアは数分泣き続け、泣き終わった瞬間、そのまま眠ってしまった。

「すう・・・すう・・・」

「どうにか俺が二人運んでいく。」

「大丈夫か？」

「イシアならあたしもおんぶして行けるけど・・・」

「いや、俺が運ぶ。イシアは俺から離れたくないらしい。首に腕回したままなんだ。」

「じゃあサンナは？」

「ウィリア、あの姿を見る。明らかにスバルに抱き着きたいですって目で訴えてるぞ・・・」

カクサスがウィリアにそう言い、ウィリアはサンナを見た。

「・・・（うるうる）」

ぐったりとしているが、サンナは首だけスバルに向けて目で訴えていた。

「あたしだってスバルにおんぶしてほしいよお・・・」

「ウィリア・・・」

ウィリアはサンナに歩み寄るスバルと嬉しそうな顔をするサンナに羨望の眼差しを向けた。

「帰るか・・・」

「ああ・・・」

「・・・／／／」

「リナト？」

「私も・・・おんぶしてほしいな・・・／＼／」

「はあ・・・、わかった。」

「アレックス・・・」

「私も・・・」

「どちらかが抱き抱えになるぞ・・・」

『抱き抱えの方がいい（ですわ）！』

「・・・」

帰路は男達が苦勞する道だった。

スバル宅。

「なにか騒がしいぞ・・・？」

スバルがそう呟いた時・・・

バァン！

「スバル！逃げて！」

「アイリス？どうしくにゃん！><ら、らめで・・・はあああっ

！><し、しりょん、らめ・・・んああああっ！>・・・アイリス、見つからないように炊事場に行きな。」

「あ、危ないよお！」

「いいから！」

「二人に襲われたらスバルのせいだからね・・・？ぐすっ・・・」

涙目で炊事場に向かうアイリス。

その後、無事にナコルとシロンの『発情モード』は止まり、犠牲者はレノシアとナデシコの二人で済み、事なきを得た。

おまけ

「スバル・・・、その二人は？」

「そうですよ・・・（赤い髪の子、私よりも胸大きいです・・・）」

「そうよ、誰なの！？（小さい子もそこそこ胸あるわね・・・赤い髪の子、Gはあるわね・・・）」

皆が疑問を持つ子、それは・・・

「~~~~~♪」

「・・・／／／」

スバルの腕に抱き着いているサンナとイシアだった。

「サンナとイシアか？ 今日擬人化した。元は『アグナコトル』と『ウロコトル』だそうだ。」

『し、知らない（わ／です）・・・』

「それで、今日から一緒に住むことになったんだが・・・いいか？」

『いい（です）けどお・・・』

「けど？」

次の瞬間、乙女達是这样叫んだ。

『恋敵が増えたあ！（泣）』

報酬。

入手

マカライト鉱石×15

エルトライト鉱石×6

クエストクリア

鉄鋼石×3

マカライト鉱石×5

エルトライト鉱石×4

etc・・・

その他

アレックス。

タリス。

アルテア。

サンナ。

イシア。

リナト、条件付き『発情モード』覚醒？

ウィリア、サンナの胸に嫉妬。

サンナとイシア、スバルが好きに。

新種モンスター・『アグナコトル』『ウロコトル』の存在が判明、
知ったのはスバルとカクサスとウィリアとリナトだけ。

第48話 火山で会った、2種の古龍と異業のモンスター（後書き）

今回は大量に登場しましたが、彼等全員の紹介です。

アレックス

テオ・テスカトル

身長188cm。

見た目18歳。

一人称が『我』と高い身分の偉ぶっただけの感じがするが、本質は誠実、真の王の姿である。

割と苦勞人。

髪は『まじしゃんず・あかでみい』の『佐久間 榮太郎』の髪を紅くしたような感じ。

タリスとアルテアに毎日迫られ、うんざりしている。

名前の由来は、『アレキサンドロス』の略名から。
王なので。

タリス

ナナ・テスカトリ

身長165cm。

見た目17歳。

胸のサイズはD。

アレックスのことが大好きな、お姫様の口調の女の子。

性格は一途で正直、アレックスのためなら身体を差し出す覚悟すらできている程（アレックス自体はうんざりしている）。

料理の才能は天才的だが、裁縫が苦手。

髪は蒼色の長髪、ポニーテール。

名前の由来は、『ジギタリス』より。花言葉は『熱愛』

アルテア

ナナ・テスカトリ

身長164cm。

見た目17歳。

胸のサイズはD+。

モデルは『まじしゅんず・あかでみい』の『タナロット』。

性格は一途で、少しわがまま。タリス同様、アレックスのためなら身体を差し出す覚悟すらできている程彼のが好き。

料理以外の家事が得意。

名前の由来は、『立葵』の学名、『アルテアローズ』より。花言葉は『熱烈な恋』

サンナ

アグナコトル雌

身長152cm。

見た目16歳。

胸のサイズはG。

元々は他の地方で妹と二人きりで過ごしていたが、ハンターによって住家を失い、雄のモンスターに襲われかけるなど悲惨な過去を持つ。

スバルに『お姫様抱っこ』してもらった（偶然）時に一目惚れした。

髪は紅く踝まで届く長さ。

性格は一途で甘えんぼ、少しエッチ。そのため、たまに大胆な行動・発言をする。

胸が少し敏感（本人自称）。

名前の由来は、『吾木香^{われもこう}』の学名、『サングイソルバ』より。花（木？）言葉は『恋慕』

イシア

ウロコトル雌

身長148cm。

見た目14歳。

胸のサイズはEー。

サンナの妹。

髪は黒色、腰までの長さ。

性格は見た目はクール、感情がないなどと思われがちな感じだが、
実際は泣き虫で甘えんぼ。姉のサンナを守ろうとして本来の自分を
封印していた。

スバルの胸で大泣きし、そのうえ慰めてくれたスバルの優しさがき
っかけでスバルが好きになった。

名前の由来は、『イキシア』より。花（木？）言葉は『秘めた恋』

以上です。

次回はウィリアとスバルがデート！

舞台はなんと遊園地！？

お楽しみに！

第49話 初めてのデートは遊園地、強制的に入ったお化け屋敷＋女人禁制！？

49話、ウィリアとのデート話です。

ここ最近いろいろありましたが・・・

では、どうぞ！

第49話 初めてのデートは遊園地、強制的に入ったお化け屋敷＋女人禁制！？

翌朝。

「スバル、お願いがあるの・・・」
「お願い？」

唐突なウィリアのお願い。

ウィリアは一枚のチケットを見せた。

「実はスバルがナコルとお出かけた日にもらったんだけど・・・、
一人で行きたくなくて・・・」

書いてあったのは『アイルーパーク おばけやしき優先入場チケット』。

「それは別にいいんだがな・・・」
「どうしたの？」

「・・・背中が重い。」
「・・・？」

ウィリアはスバルの後ろを見た。

「~~~~♪」

スバルの背中には、甘えたように抱き着いているイシアの姿があった。

「い、イシア!？」

「ウィリアだけ羨ましいよ・・・私も行きたい・・・」

「だ、だめえ! あたしとスバルの約束なんだもん!」

「スバル・・・だめ・・・? (うるうる)」

「・・・はあ。」

スバルはチケットを見た。

チケットには、

『ペア限定、一回限り有効』

と書かれていた。

「イシア、今回は諦めてくれ。ペア限定だから、二人でしか行けないんだ。」

「・・・わかった。・・・姉さんに慰めてもらおう・・・」

イシアはしぶしぶ諦め、とぼとぼとサンナの部屋に向かった。

「じゃ、行こ。・・・お化け嫌いだけど・・・」

「怖いならアイリスとか幽霊が怖くないのにあげればよかったじゃないか？」

「スバルと一緒になら大丈夫だもん！・・・たぶん・・・」

「ま、行くか。」

「うん！」

二人はこうして出かけることになった。

アイルーパーク。

「お化け屋敷・・・だよな？」

「怖い・・・、怖いよお・・・」

「引き返すなら今のうちだぞ？今なら金もあるし、他のに乗って最

後に行くってのもありだが・・・」

「が、我慢する！」

「無茶しなくてもいいのに・・・」

「スバルが守ってくれるから大丈夫だもん！・・・きつと。」

「きつとって・・・。不安な言い方してるぞ、おい。」

小刻みに震えていたが、先導してお化け屋敷に入ろうとするウィリアム。

「『アイルーのおばけやしき』ね・・・。さて、噂ではとても怖いって評判だが、どれくらい怖いのか楽しみだな・・・」

内心わくわくしているスバルだった。

中。

「ギニャアーツ！」

「きゃああああっ!？」

「・・・本当に怖いのか、ここ？」

いきなり飛び出してきたお化け（中身はアイルー）に飛び退くウィ

リアと、全く動じないスバル。

「・・・スバルは怖くないの・・・？」

「全くな。」

「うらやましいよお・・・（ガサッ！）ひうつ！？」

近くからした物音にビクつくウィリア。

《私の体はどこ・・・？》

「あ・・・あ・・・あ・・・」

『私の体はどこおおおお！？』

「ふやああああああつ！（ガシッ！）」

「ウィリア！ま、前が見えない！顔から離れてくれ！」

「スバルう！助けてよおっ！」

「んなこと言ってもなあ！前が見えなきゃ話にならねえ！」

「やだよ、やだよおっ！ふえええええん！」

恐怖でスバルの顔にしがみつくウィリア。

スバルはふらふらしつつも立っている。

なんとか見える部分でお化け（中身はアイルー）がいなくなったことを確認した。

「ほら、もういなくなったから、そろそろ顔から離れてくれ。」

「ホント・・・？ぐすっ・・・」

「今はな。」

「ううう・・・（うるうる）」

涙目でしぶしぶ離れるウィリア。

「それに、もうすぐ出口だからさ。」

「うん・・・」

二人が出口に差し掛かった時・・・

ヌオッ・・・

「・・・（ふらっ・・・）」

「ウィリア！？おい、しっかりしろ、ウィリア！」

直前に出てきたお化け（中身はアイルー）に気を失ってしまったウィリア。

「アイリス以外皆怖がりなのか・・・？いや、アイリスも怖がっていたところがあった気がするな・・・」

ウィリアを抱えながら何気なく思ったスバル。

「んう・・・、お化けっ！？（ゴツッ！）」
「ごはっ・・・」

急に飛び起きたウィリアに頭をぶつけられたスバル。

「・・・いったゝい・・・」
「俺もだ・・・」

「・・・スバル、ごめんね・・・。気絶しちゃって・・・」
「そんなことで謝られてもな・・・。じゃ、他のところ見に行ったり遊んだりするか？さっきのお化け屋敷の腹いせと言うかなんと言うかなんだが。」

「うん！・・・これってデートだよね・・・／／／」
「ま、そうなるな。」
「やったあ！」

お化け屋敷から解放されて、しかもそのままデートができることに喜ぶウィリア。

「でもでも、あれとかは嫌だよ……。怖いもん……」

「ジェットコースター……。だったか？ あれは行かない。さすがに俺もああいうのはダメだからな。」

「でも、あれは乗りたいな……」

ウィリアが指差したのは、観覧車。

「……。あれって確かだいぶ日が暮れてから乗るものじゃないのか？」

「……。わかんない（きゅるる、くう）……。はうう……。／＼／＼」

ウィリアのお腹が可愛い音を立てて鳴る。

「……。まずは昼食だな。」

「恥ずかしいよお……。／＼／＼」

昼食を終えて、二人はアイルーパークを歩き回った。

「『アイルーパーク』と言うだけあって、本当に従業員はアイルーばかりだな。」

「スバル、あたしあれに乗りたくないな・・・」

ウィリアは再度観覧車を指差した。

「・・・乗るか。」

スバルはしぶしぶ了承した。

20分くらい待ち、ようやく観覧車に乗った二人。

「うわぁ・・・、きれい・・・」

「・・・海、か・・・」

二人は観覧車から見える海を見ていた。

「あのね、スバル・・・／＼／」
「ウィリア、どうした？」

顔を赤くしてスバルに話しかけるウィリア。

「あたしにも・・・キス・・・してほしいな・・・／＼／」
「・・・ウィリアもか・・・」

唐突なお願い。

「だって、アイリスがキスしてもらったのがうらやましくて・・・。
我慢してたんだけど・・・やっぱり・・・／＼／」
「・・・キスするしかないのか？本当に俺でいいのか？」

確認をするスバル。

自分のことが好きだとわかっている、『最後の確認』的な意味の
言い方だ。

「うん・・・。あたし、準備はできてるよ・・・。だから・・・い
つでもいいよ・・・／＼／」

いつでもいいよ。

そんな言葉にスバルは顔を赤くしてしまった。

「・・・文句は言うなよ？」

チュツ・・・

「ふ・・・う・・・／／／」

「・・・（すっ・・・、グイッ！）んぐっ!？」
「ん・・・ちゅっ・・・」

スバルは離れようとしたが、ウィリアが強引に引っ張ったために再度ウィリアの唇と己の唇を重ねることになった。

スバルの彼女はあたし。

そんな考え故の、ウィリアの行動だった。

「・・・／＼／」

「はふう・・・。えへへ、アイリスよりも長くキスしちゃった・・・
／＼／」

「まったく・・・。」

「スバル・・・。あたし、スバルのこと大好きだよ・・・。家族としてじゃなくて、女の子として・・・。」

「分かってるっての。」

そして観覧車は一周した。

「もう帰らないとな。日が暮れるし・・・。」
「そうだね・・・。」

観覧車から降りた二人はそのまま帰路についた。

その帰路の中、事件は起きた。

「・・・なんだろう？」

「どうした？」

「あそこになにかあるの・・・」

ウィリアは小さくて光る白い欠片を見つけた。

「・・・（ヒョイ）・・・ふああっ!？」

「ウィリア!？」

その欠片を拾った直後、突如として喘ぎ声を出すウィリアに驚くス

バル。

「あつ、ああつ、ふああつ、んあああつ！（ビクッ、ビクン！）
「ウィリア！一体どうしたんだおい！」

未だに喘ぎ声を出し続け、全身をビクビク震わせるウィリアに焦り始めるスバル。

「さっきの欠片が原因なのか・・・？なら・・・、おらっ！（ペシッ！カラン・・・）」
「ふあ、あ・・・」

スバルがウィリアが欠片を持っている手を叩いて欠片を叩き（はたき）落とした。

その瞬間、ウィリアの震えと喘ぎ声は治まった。

「大丈夫か、ウィリア！？」

「しゅばりゅ・・・、しゃっひによきやきえりやをひりよっひやりや、ひゆうにひえんしんひやあひゆきゆにやつれ・・・、ひひやみひゃんいみゆにえもみよみゃれひやひよひみひやいにひもひひよひゆにやつひやつひえ・・・／＼（訳…スバル・・・、さっきの欠片を拾ったら、急に全身が熱くなって・・・、ギザミちゃんに胸を揉まれた時みたいに気持ち良くなっちゃって・・・／＼）」

「大分前にウィリアがローズに胸を弄られた時と同じ状態になって

る・・・なんなんだよ、この欠片・・・？」

スバルはウィリアが拾った欠片を懐に入れ、家に帰った。

「ノブ！いるか！？」

「ご主人？一体何が・・・、ははん、ウィリアに何かしたみたいだ
ニャ？」

「違う！原因はこの欠片だ！」

「欠片・・・？」

ノブはスバルが見せた欠片を見た。

「この欠片は・・・今までに見たことのないタイプの欠片だニャ・・・」

「お前が知らないとは・・・、本当に訳の分からない欠片だぞこれ・・・」

「どうした？」

「なにかあったのか？」

カクサスとアレックスが困惑しているスバルたちを見かけて、声をかけた。

「いやな、この欠片が何なのか、という話で躰いていてな・・・」

「ウィリアがソファアにぐったりとしている理由が聞きたいのだが・・・」

「ウィリアがこの欠片を持った瞬間、いきなり喘ぎ声を出し始めてな・・・。叩き落としたらこうなっていた。」

「ふむ・・・。この欠片、一度見たことがある気がするぞ・・・」

『ホントか!?!』

アレックスが『見たことがある』と言ったのを聞いて、大慌てで聞きただそうとするスバルとカクサス。

「だが、あくまでも見たことがあるくらいだ、当てにはならんぞ？」

「そうか・・・」

落ち込むカクサス。

「ちょっと二人に試してもらいたいことがあるんだが……。これを触るか握ってほしいんだ。」

「何をする気だ？」

「もしこの欠片に何かあるとしたら、カクサスやアレックスに何かしらの影響が出るはずだ。」

『なるほど……』

「……そういや、御主人は何もなかったのニャ？」

「何もなかったな……」

二人はスバルの実験に納得、実際に握ってみた。

結果、二人には何も起こらなかった。

「女の子にのみ影響があるのか……？」

「……分らん……」

「我に聞かないで欲しいな……」

「ならば、一番ウィリアと同じ状況になりやすいかもしれないサンナに持たせてみたらどうかニャ？」

『サンナに?』

一斉に疑問を持つ。

その瞬間。

「スバル〜！会いたかったよぉ〜！（ドムツ！）」
「ごふっ！？・・・げほっ・・・、さ、サンナか！？」

後ろからスバルに抱き着いたサンナ。

抱き着いた時に押しつけられた胸が一時的にスバルを呼吸困難に追いやった。

「ふにゅ〜♪・・・なにこれ？」
「訳の分からない黒い欠片だ。」

興味があるかのようにまじまじと黒い欠片を見るサンナ。

「・・・触らせて？」
「あ、ちょ、ま・・・」

スバルの制止を聞かず、欠片を持ったサンナ。

その直後・・・

「・・・ふあああっ!? んあっ、あっ・・・」

「想定していることが起こったか・・・」

「だな・・・」

「・・・気のせいかもしれないが、ウィリアよりもすごい身体を反らせてないか？」

スバルの考えは強^{あなが}ち間違っておらず、サンナは背中を思い切り反らせていた。

「ふあっ! らっ、らめっ! き、きひゃうっ! ふあああうっ!」

「き、嬌声がすごいな・・・」

「限界ならその欠片を離せばいいのに・・・(ペシッ)」

サンナが握りしめていた欠片を叩き落したスバル。

「女人禁制の黒い欠片なのか・・・?」

ぐったりしているウィリアとサンナを見てそう思ったスバルだった。

報酬。

入手

謎の黒い欠片。

クエストクリア

クエスト未受注のため無し。

その他

ウィリア、スバルにキスされる。

謎の黒い欠片が女人禁制の疑い有り？

お化け屋敷チケット消費。

第49話 初めてのデートは遊園地、強制的に入ったお化け屋敷＋女人禁制！？

今回出てきた謎の黒い欠片ですが、その正体は次回判明します。

次回はその黒い欠片の正体が判明、さらに明かされた伝説、そしてサンナが・・・

お楽しみに！

第50話 謎の欠片の真実と告げられた伝説剣の言い伝え、欠片に認められた

50話です。

今回は布石を敷いた話です。

あと、Rー15をお忘れなく・・・

では、どうぞ！

第50話 謎の欠片の真実と告げられた伝説剣の言い伝え、欠片に認められた人

翌朝。

ウィリアが見つけ、スバルが持ち帰った欠片について、男三人が話し合っていた。

「昨日ウィリアとサンナが犠牲になったこの欠片だが・・・」

「他の女子に持たせてみたらどうなるんだ・・・？」

「いや、被害が増加するだけだろう・・・」

「なら、オババに聞いてみたほうが楽だろうな・・・」

『だろうな・・・』

三人一致でオババに欠片のことを聞きに行った。

「オババ、この欠片についてなんだが・・・」

「おや、この欠片なのかい？・・・！？この欠片をどこで見つけたのじゃ！？」

オババが声を急に荒げたので驚いた三人。

「お、オババ！？一体どうしたんだ！？」

「この欠片をどこで見つけたのか、と聞いとるのじゃ。」

「・・・昨日、出かけた先で見つけたただけだが・・・」

「この欠片は・・・『選別の欠片』と言われておる。」

『『選別の欠片』！？』

『選別の欠片』とは何なのか・・・

「お、オババ、『選別の欠片』って一体何を選別するんだ！？」

「これはあくまで噂だがお・・・」

オババはその欠片のことを話し始めた。

『選別の欠片』。

古よりある剣の所有者を選ぶために使われた欠片。

その対象は全て・・・女。

その欠片により選ばれた所有者はその剣を振るうことを許された。

が、過去、どの娘もその剣を所有することを認められた者はいなかったという・・・

その剣の名は・・・

『真剣・ヴァルキュリア』。

『真剣・ヴァルキュリア』・・・』

オババの話に出てきた剣の名に首を傾げるだけの三人。

「オババ、その剣の名など一度も聞いたことないが？」

「先程から言っておろう、古より所有者を選ぶ剣じゃと。・・・続きを話そう。」

『真剣・ヴァルキュリア』を所有するための条件ははっきりしていないが分かっていることはただ一つだけ。

その条件は・・・

『その身捧げし事の無き、異性に恋をせし乙女』、と。

「・・・なんか、すごい偏った条件だな・・・」

「だったらその欠片の条件に我は一つ疑問を持った。ウィリアやサ
ンナのことだが、彼女らもまた、『その身を捧げし事の無き、異性
に恋せし乙女』なのではないか？なのになぜ、あのような大惨事が
起こったのか？」

アレックスの持った疑問に、スバルとカクサスは『ああ！！』と納
得した。

「それもよく分からんのじゃ。分かることはただ一つ、彼女らはこ
の欠片に拒絶されたのじゃ。・・・それとこの欠片にかかわるもう
一つの話があるのじゃ・・・」

オババが話し始めたもう一つの話・・・

『真剣・ヴァルキュリア』と対をなす剣の話だ。

その剣は発見されて以降、所有候補者を誰一人として真の所有者として認めなかった。

それどころか、其の者を己の身体として扱い、最終的に其の者を死に至らしめたという。

その剣の名は・・・

『無属黒剣・ノワール』。

その剣に認められし者は、『其の力、全ての追隨を許さず、絶対の力を誇る』と言われた。

「『無属黒剣・ノワール』・・・」

「この剣も聞いたことのない名だな・・・」

「まだ噂はあるのじゃ。一番よく分からないのがこの部分じゃよ・・・」

オババはその噂を告げた。

『真剣・ヴァルキュリア』と『無属黒剣・ノワール』を基盤にして造られた剣は、全てにおいて凌駕したという・・・

「それで、その剣はどうなったのかは誰も知らない、と・・・」

「その通りじゃ。スバル、そなたの許にその欠片が来たということ
は、何かの運命なのかも知れぬのお・・・」

オババの意味深な言葉を最後に、スバルたちは一度帰宅した。

「この欠片の正体は分ったが・・・」

「しばらく女子に触らせないように保管した方がいいな・・・」

「触らせないようにって・・・何を？」

「気になります・・・」

「隠し事しちゃだ・・・」

『あ、アイリスにレノシアにイシア！？』

いつの間にか後ろにいたアイリス・レノシア・イシアに驚いた三人。

「・・・？この欠片・・・きれいだ・・・」

「アイリス、この欠片を持とうとする（ヒョイ）な・・・って！言った傍から！」

「ああ、アイリスまでが犠牲に・・・」

三人はそう思ったが・・・

「・・・犠牲って、なに？」

『アイリスが・・・認められた・・・？』

「次、私に見せてください!」

「レノシア、止め・・・」

そしてレノシアまでもが欠片を手にした。

「・・・?」

「れ、レノシアも認められた・・・!?」

「次あたしが・・・」

三人が息を呑む。

「三人ともどうしたの・・・?・・・じっと見つめられると恥ずかしいよ・・・／＼／＼」

「イシアも認められたあ!?!」

三人は驚愕した。

認められた乙女はいない。そう聞いていた直後にこの有様、驚かない方が凄いと言える状況になっていた。

「三人が『真剣・ヴァルキュリア』所有者として適正・・・」
「スバル、『無属黒剣・ノワール』の所有者になれ。」
「我もその二振りの剣を見てみたいぞ・・・」
「お前らなあ・・・、他人事だと思っているだろ？」

三人がこそこそ話していると・・・

「ねえ、さっきからなんの話をしてるの？」
「『真剣・ヴァルキュリア』とか『無属黒剣・ノワール』ってなんですか・・・？」
「その二つの剣がどうしたの・・・？」

三人娘が気になって聞いてきた。

「いや、別に何でもないぞ！？」
「そうそう、何でもないぞ！？」
「だから気にするな！」

三人は口々に否定をするが・・・

『真実を教えて（くださいよ）っ！』
「いや、気にしないでほしいのだが・・・」
「話さないとタリスとアルテアに浮気していると言うよ・・・」

「それは困る！」

娘たちに言いくるめられてしまった。

そして全てを話した。

そして・・・

『その剣を手に入れば（私／あたし）がスバルの彼女だと言える・
・／／／』

全員が妄想を始めてしまった。

「一体どうすればいいんだろうか・・・」

「知らん、放置して帰ってしまえばいいんじゃないのか？」

「その方が一番いいのかもしれない・・・」

三人はアイリスたちを置いて帰ってしまった。

アイリス・レノシア・イシアは・・・

「えへへえ〜・・・／／／」

未だに妄想の世界に入り浸っていた。

スバル宅。

「さてと、俺はウィリアとサンナを見てくる。」

「それはいいが、サンナの状況は朝見たら明らかに異常だった。・・・
・気をつけろよ。」

「あ、ああ・・・」

カクサスの発言に少し畏怖を感じたスバルは、慎重に二人が眠っている部屋に向かった。

「ウィリア〜、サンナ〜、調子はどうだ〜・・・？」

恐る恐る部屋に入るスバル。

「すう・・・すう・・・」

ウィリアは規則正しい寝息を立てていた。が、サンナの姿はなかった・・・

「サンナがいない・・・。いやな予感が「スバルうっっ！（ドンッ！）」うおわっ！？」

ドサッ。

後ろからサンナがスバルに抱き着き、押し倒した。

「にゅふふっ♪」

「さ、サンナ！？ い、いきなり何をするんだ！？」

「だってえ、朝起きたらスバルがいなかったんだもん・・・」

「いたら・・・何をする気だったんだ・・・？」

「それは・・・」

その直後にサンナの口から発せられた言葉にスバルは戦慄した。

「あんなことやこんなことを・・・朝まで・・・えへっ♪」

「・・・（うおお、怖ええ・・・）」

「スバル・・・。今から・・・」「できるわけねえっ！（グイッ！）」
「やんっ！」

スバルは必死の形相でサンナを押し退けて部屋から出た。

「むう・・・私は本気だったのに・・・」

スバルが出て行った後、サンナはそう呟いた。

報酬。

入手・クエストクリア

クエスト未受注の為無し。

その他

謎の欠片の正体が判明。

伝説の二振りの剣の情報入手。

アイリス・レノシア・イシア、『真剣・ヴァルキュリア』所有者として欠片に認められる。

サンナ、スバルを襲いかける（直前にスバルは脱走）。

第50話 謎の欠片の真実と告げられた伝説剣の言い伝え、欠片に認められた

今回は『選別の欠片』の話、伝説剣の話、暴走でした。

次回は色々と危険な回です。

スバルや娘達に重大事件が・・・！？

お楽しみに！

第51話 新たに現る異形のモンスター、そんな彼女らは『尾晶蠍』（前書き）

51話です。

今回はまた新たに女の子が登場しますが・・・、かなりやばいです・
・。

なぜかは本編で！

では、どうぞ！

第51話 新たに現る異形のモンスター、そんな彼女らは『尾晶蠍』

サンナによるスバル襲撃未遂事件直後。

「や、やばかった・・・」

「声が聞こえた。・・・無事でよかったな。」

「なんとまあ、無事に済んでよかったな・・・」

スバルを気遣うカクサスとアレックス。

「・・・こんなんだったらクエスト行った方がマシだ・・・」

「偶然だが、不思議なクエストがあった。『晶尾の蠍』というクエストだったな。」

「『晶尾の蠍』い？」

「詳細を見てきたが、狩猟対象は???となっていて、しかも3匹となっている。」

全く訳の分からないクエストに疑問符を浮かべるしかできないスバル。

「・・・とりあえず行くか、そのクエストに・・・」

「あ、じゃあ私がついて行くわ。」

「私もついて行きます。」

「ナコルとシロンが？」

「少々の不安があるが・・・大丈夫だろう。」

「不安があるのは俺自身の方だよ・・・」

「では、我が残ろう。誰か男がいないと大変だろうしな・・・」

ナコルとシロンがついて行くと言った。

砂漠（しかも夜）。

『さぶうつ!?!?』

ナコルとシロンが同時に言う。

「夜の砂漠だからな。ホットドリンク飲んだか？」

『飲み忘れて（たあ／ましたあ）っ!』

「早く飲んどけ。」

『んぐっ!んぐっ!』

慌ててホットドリンクを飲む二人。

「さって、相手は正体不明のサソリ・・・」

「『晶尾』って言うからには多分尻尾に結晶があるんだろうがな・・・」

「尻尾に結晶って聞いたことないですね・・・」

「サンナとイシアも全く知らないモンスターだったし・・・」

不安が残る。

「・・・とりあえず探すか。」

「そうね・・・」

『謎のモンスター』の搜索が始まった。

「・・・全然見つからないな・・・」

「・・・『千里眼の薬』を使った方がいいな・・・」
「・・・？」

「ナコル、どうしたの？」

「いえ、さっきからあっちの方で光の反射が・・・」

「そこか！？そこにいるのか！？」

「行ってみるしかないな！」

ナコルが見た光の反射を信じ、そこに向かった。

「・・・いた！」

「しかも二匹！」

ナコルが見た光の地点には、二匹の大型の蠍がいた。

尾は結晶。

「さて、どうす・・・っ！？見つかった！？」

「一匹こっち来てますよ！？」

「あ、一匹隠れたわ。」

「こっちに来ているヤツは俺が引きつける！」

「スバル！？危ないわよ！」

「カクサス、渡した閃光玉を投げて隠れたヤツを足止めしておいてくれ！」

「ああ！気をつけろよ！？」

「了解！さあ、こっちだ！」

スバルは一匹に対し挑発をした。

その一匹はスバルについて行った。

「スバル・・・」

「心配ですよ・・・」

「心配なら俺たちの仕事を済ませばいいんだ。・・・それっ。」

カクサスは閃光玉を投げた。

そして・・・

ピカッ！

「うおおっ！？」

『きゃあああああっ！？』

恒例の激しい光。

「くっ・・・あそこにいたんだよね・・・」
「み、見に行きましょう・・・」

三人は蠍のいたところを見に行った。

そこにいたのは・・・

「っ!?(びくうっ!)」

見た目15、6歳の女の子がいた。

「・・・いつものあの現象か・・・」

「あ、あの・・・」

「ん?なあに?」

女の子が質問をする。

「あの人・・・どこに行っちゃったんですか・・・?」
「あの人って、スバルのこと?」

「スバル・・・って言うんですか・・・？その人・・・」
「そうですよ？・・・ところで、スバルがどうしたんですか？」

今度はナコルが質問した。

「ふえっ！？そ、それは・・・その・・・あの・・・（カアアツ）

／／／

『嫌な予感が・・・』

女の子の反応に嫌な予感しかしないナコルとシロン。

「・・・スバルが好きになったとか？」

「はうう・・・／／／」

女の子は顔を隠してしまった。

「・・・スバルのバカぁ・・・」

「これ以上ライバルが増えてほしくないですよ・・・」

二人の喧きは、奇しくも叶うことはなかった。

一方、スバルは・・・

「やっぱり体格差で追いつかれるな・・・」

洞窟まで逃げ込んだが、結局追いつかれた。

ジリ・・・ジリ・・・

「まずいな・・・、閃光玉は材料すらないし煙玉はない。こうなったら爆弾で・・・っ！」

スバルは大タル爆弾Gを仕掛けた。

「自己犠牲の塊だああっ！」

スバルは爆弾に剣を振り下ろした。

ドスッ！

ドオオオオオオンッ！

「ふぁげふおぐあぁっ！」

スバルは己を犠牲にして爆弾を起爆させたのだ。

地面を転がるスバル。

彼が受けたダメージは甚大なものだった。

「いつつ・・・ぐほおっ!? んむっ!?」

起き上がろうとしたスバルがまたダメージを受け、くぐもった声を出した。

何故か。

「んゝゝゝっ!」

いきなり女の子に唇を奪われたからだ。

「ん！？ん！？ん！？」

「ん・・・ちゅぽっ・・・じゅるる・・・ぴちゃ・・・」

かなりディープにされているキス。

その間スバルは地面を叩いて降参的な行動をとっていた。

「・・・ぷはあ・・・」

「い、いきなりな・・・っ！？か、身体が痺れ・・・」

「うふふ・・・。これであなたはアタシのもの♪」

「の、乗るな！身体や胸を押し付けるな！・・・くっ・・・動け、俺の身体・・・！」

スバル大ピンチ・・・

・
・
・かと思いきや。

「スバル! どうし・
・」

ナコルとシロンとカクサスと女の子が来た。

―それまでの地上―

ドオオオオオオオオンッ！

「爆発！？」

「確かあつちはスバルが行った方向・・・」

「スバルに何かあったのかもしれない、行くぞ！」

「ええ！」

「・・・あなたも来る？」

「は、はい！」

四人が爆発音のした方向に向かった。

「確かここだった気がするんだけど・・・」

「そうでしたね・・・」

「スバル・・・、無事でいてくれよ・・・」

「さ、寒いですう・・・」

「ホットドリンク飲む？」

「あ、ありがとうございます！・・・こくっ、こくっ・・・」

そう言いながら奥に進んでいた時。

<・・・るな！・・・を・・・け・・・な！>

スバルの声がした。

「あっちからした！」

「行くぞ！」

「スバル、無事でいてください・・・」

声の方に向かう四人。

「スバル！どうし・・・」

シロンがスバルを見た時、その光景に絶句した。

スバルが見ず知らずの女の子に襲われかけていたからだ。

―― 今――

「ちょっと！何してるのよ！？」

「・・・むう、邪魔しないでよ・・・」

「じゃ、邪魔ってな・・・おい・・・」

シロンが女の子に思いっきり怒る。

怒られた女の子は残念そうな顔をした。

「もうちょっとでこの人をアタシのものにできたのに・・・」

「『アタシのもの』って何なんですか!？」

「そのまんまよ! アタシはこの人が気に入ったんだから!」

「・・・とりあえずスバルを回収しよう・・・」

「カクサス、すまねえ・・・」

娘たちが言い合っている中、カクサスはスバルを回収していた。

「大丈夫か？」

「あの子にキスされて・・・、どうもその時に麻痺毒を受けたりし
い、身体が痺れて動けん・・・」

『キスされたの（お／ですかあ）!？」』

スバルの告げた事実になコルとシロンが驚愕の声を揃えて出した。

「しちゃったの♪あたしの初めて、あげちゃった・・・／／／」

「そっ、そんなの私もあげちゃってるわよ!？」

「わ、私もですよ!？」

「でもアタシはあの人にふっかくキスしちゃったから♪」

『そっ、そんなあ!？」』

「そこ、羨ましがるところか？現状死にかけているってのに・・・」

娘達の恋愛戦争の最中、冗談抜きで死にかけているスバルだった。

「・・・そう言えばカクサス、その子は？」

「ああ、この子は・・・スバルの閃光玉の被害者、とでも言うべきだな。」

「またか・・・。またなのか・・・」

「・・・／／／」

「・・・カクサス、クエストはリタイアということにしてくれ。麻痺が強すぎて当分動けそうにない・・・」

「分かった、今リタイア証明の狼煙を上げに行く。」

こうしてカクサスは一人外へ向かった。

「・・・あ、そーいや君は・・・」

「あ、あによっ！」

「まず、落ち着こうな・・・？」

「はうう・・・。・・・私、か、カトレアといいます・・・／／／」

「カトレア・・・ね。」

「スバル、本人が言っていたんだが・・・」

「なんだ？」

カクサスが口を挿^{はさ}んだ。

「カトレア・・・だったか？彼女、スバルのことが好きらしいんだ・
・」

「・・・／／（もじもじ）」

「あ、ああ・・・」

「あ、あの、わ、私・・・（もじもじ）」

相変わらずもじもじしているが、何か言いたそうなカトレア。

「なんだ？」

「す、スバルさんと一緒に・・・一緒に・・・」

『・・・？』

疑問符が浮かび始める。

「一緒に・・・住みたいのですが・・・」

「・・・一向に構わないぞ？」

「確かに。別に何か問題があるわけじゃ『大問題（よ／です）！』・
・皆鬼だな・・・」

一斉に否定。

「いや、本当に問題ないからな？」
「は、はい！」

こうしてクエストはリタイアとなり、六人は帰路についた。

（帰る直前、スバルとキスをした女の子は『ダイアナ』と名乗り、自分が『アクラ・ヴァシム』だと言った。つられるようにカトレアも『自分も『アクラ・ヴァシム』だ』、と言っていた）

スバル宅。

『ただいま……』
「お帰り……って、その二人は……？それに……、アンタ
どうしたのよ？」

「今回のクエストで新しく住むことになった同居人・・・かな？ スバルは、このダイアナによって身体が麻痺している。」

「ふん・・・」

ライラが出迎え、すかさず疑問をぶつけた。

「二番目にスバルのことを聞くなんて・・・あなた、ひょっとしてスバルに気があるの？」

「そっ、そんなわけないじゃない！ べ、別に私は・・・その・・・き、気にしてないんだから！」

「変な子。もっと自分の想いに正直になればいいのに・・・」

「そっ、それは私の勝手でしょ!？」

早速ダイアナとライラの口論開始。

「すまんカクサス、もうこのまま部屋に運んでくれ・・・」

「心得た、もうそのまま寝る、ということか？」

「できるならそうしたい・・・」

このままスバルは自分の部屋に運び込まれ、そのまま眠りについた。

リビング。

「・・・スバルに痺れ毒を使っただって本当・・・？」

乙女によるダイアナへの尋問が始まっていた。

「本当。だって、アタシは『アクラ・ヴァシム』だし。それに・・・スバルをアタシのものにしたかったんだもん・・・」（ダイアナ）
「そんなことはさせない！だって、スバルは私のものだもん！」（アイリス）

「違います！私のです！」（ナコル）

「ち、違うわ！私のものよ！」（シロン）

「み、皆さん、落ち着いて・・・」（レノシア）

「そ、そうですよ・・・」（カトレア）

「ちよっとみんなあ、それは違うよぉー！スバルは私のだよー！」
（サンナ）

「姉さんこそ違う。スバルはあたしの・・・／／／」（イシア）

「みんな違ふよお！スバルはあたしのだよお！」（ウィリア）

「・・・ものすごい口論になっているな・・・」

「全く。関わり切れないわ。」

「・・・♪」

「・・・／＼／」

「・・・俺も人のことを言える立場ではないが・・・。・・・ライラ、君は本当はスバルのことが好きじゃないのか？」

「っ！・・・カクサス、このことは内緒にしてね・・・？ナデシコもリナトもだけど・・・／＼。私、確かにスバルのことが好きなの・・・／＼」

「やっぱりな。」

「だけど、つらく当たっちゃって・・・」

「それは・・・少しずつ直していくしかないな・・・」

一方では乙女による第三次スバル争奪戦が、もう一方では恋愛相談が開催されていた。

報酬。

入手・クエストクリア

クエストをリタイアしたために無し。

その他

カトレア。

ダイアナ。

スバル、ダイアナにディープキスをされる。その際、麻痺毒を受けるが・・・

ライラ、自分がスバルのことが好きだと自覚、カクサスに打ち明ける。

第51話 新たに現る異形のモンスター、そんな彼女らは『尾晶蠍』（後書き）

今回はカトレアとダイアナについての説明です。

カトレア

アクラ・ヴァシム雌

身長157cm。

見た目15歳。

胸のサイズはD。

引っ込み思案で恥ずかしがり屋、臆病。

スバルに想いを寄せている。

髪は紫で腰までの長さ、縛ると鋏状に別れる。

名前の由来は、『カトレア』より。花言葉は『純粹な愛』

ダイアナ

アクラ・ヴァシム雌

身長163cm。

見た目16歳。

胸のサイズはF。

性格は一途で独占したが、かなりエッチ。
サンナとは仲が良くなる。

毒を作るのが得意。

髪は紫で床にまで付く長さ。

名前の由来は、赤いカーネーションの学名より、『ダイアンサス』
から。花言葉は『熱愛』

以上です。

今回はダイアナが大変なことをしてくれます。

お楽しみに！

嫁投票、今月末まで受け付けています。

第52話 訪れぬ朝の平穏、麻痺毒問題発生！（前書き）

52話です。

今回もR-15だということをお忘れなきよう・・・

では、どうぞ！

第52話 訪れぬ朝の平穏、麻痺毒問題発生!

「な、なぜ朝っぱらから身体が痺れているんだ・・・っ!？」

スバルの朝は、全身麻痺というよく分からない始まり方をした。

「・・・動こうにも動け「やんっ、スバル、震えないでよ・・・」

「はうん・・・」・・・顔が動かせないから正確には分からないが、そこにいるのはダイアナとサンナなのか・・・？」

『せいかい!』

スバルの横にいたのは、サンナとダイアナだった。

「何か両手に柔らかい物が触れているような気がするんだが・・・」

『だって、（私／アタシ）の胸を触らせているんだもん♪』

「触らせんでいい! 早く痺れとれろ・・・（ピクッ）」

『やんっ!』

「頼むから変な声出すな・・・!」

「スバルのエッチ♪」

「エッチ♪」

「お前らが双子に見えてきた・・・」

何気なく息の合う二人にそう思い始めてきたスバル。

「じゃあ……このまま……」

「二人でえ……」

「お前ら、一体……、何を……、する気だ……？」

動けないのにも係わらず、抵抗しようとするスバル。

そんなことはお構いなしにじりじりと迫るサンナとダイアナ。

表情には妖艶さが漂う。

『スバルをいただいちゃえっ！』

「やめろおおおおおおおっ！」

家中にスバルの悲鳴が響いた。

『・・・ぷう。』

「まったく、恥ずかしくないの、あんなことして!？」

「あたしはこんな姉さんを持ったことが恥ずかしい・・・」

「イシアあー! ということなのよおー!？」

「本気で好きなんだったらそんな色仕掛けなんてしないでいいはずなのに・・・」

「私にはこれしかないんだもん!」

「もうちょっとでスバルとあんなことやこんなことできたのに・・・」

「何か・・・仕掛けるつもりだったっすか・・・？」

「スバルがえっちなになる毒を♪」

「バカなことしないでっ!!」

スバルのことでお叱りを受けているサンナとダイアナ。

イシアはサンナに呆れ果てていた。

スバルの部屋では・・・

「ね、ねえ、毒抜きってどうやるの!？」

「わ、私に聞かれてもわかりませんよ!？」

「す、吸い出すしかないのかなあ・・・」

「そ、それって、つ、つ、つ、つまり、き、キスう!？」

「・・・それしかないみたいね・・・」

「あ、あの、ひょっとしたらダイアナさんは自分の口か舌に毒を作
って、スバルさんの口の中にそれを塗りつけた可能性が・・・」

「そ、それって、まさか・・・」

「し、舌を絡めたりしたのかなあ・・・」

「ふにゃ・・・」

「ちょ、みんなストップ!レノシアが気を失ってるわ!？」

スバルがダイアナから受けた痺れ毒の解毒に躍起になっていた。

「スバル、ダイアナに舌舐められたりとかしなかった!？」

「舐められたどころか引っ張られた・・・」

『それだ!!!』

痺れ毒投与の方法判明。

「・・・誰がやるの?」

「わ、私は・・・恥ずかしいですよ・・・／／／」

「あ、あたしも・・・／／／」

「・・・私がやる!／／／」

「ちょ、アイリス!」

「スバル・・・ごめんね！」
「ふむうつ!？」

再びスバルの唇を奪うアイリス。

「ちゅぷっ・・・じゅるる・・・ふうん!? (へなへな・・・ポフッ)」

『あ、アイリス!？』

「ら、らめえ・・・かららひやひひれっひやつら・・・ (訳..だ、だめえ・・・身体が痺れちゃった・・・)」

アイリスも痺れ毒にやられた。

痺れてスバルの上に倒れこむ。

「・・・アイリス、あなた、顔が真っ赤よ・・・？」

「ひよ、ひよんにやころにやいよお・・・、ひによひえいらよお・・・。れ、れみよ、ひやららひやあひゆひゆにやつれひひや・・・ (訳..そ、そんなことないよお・・・、気のせいだよお・・・。で、でも、身体が熱くなってきた・・・)」

「・・・相当強い毒なのかしら・・・」

「・・・本人に聞いてみます? どんな毒なのか・・・」

「そのほうがいいかも・・・」

「わひゃひ、しょによあいひやにしゅびやりゆによいきゆ、ひゃんひゃっひえひよっひえみりゆにえ・・・ (訳..私、その間にスバルの毒、頑張って取ってみるね・・・)」

「お、おい、あまり無茶しなくたって・・・んむう！」

「あ、あたし残るね！もしアイリスがダメになったらあたしが頑張るから！」

「ウィリア、お願い！」

ナコルとシロンがりビングへ向かった。

「ちゅっ・・・ぴちゃっ・・・ふうっ！？（ビクッ！へなへな・・・）
・・・っ！・・・ぴちゅっ・・・じゅるる・・・ふはぁん！（ビクッ！へなへな・・・）」

痺れ毒のためにくぐもったような嬌声を挙げ、へなへなと崩れ落ちつつも、再び解毒行為（？）を続けるアイリス。

りビング。

「ダイアナ、あなた、スバルに痺れ毒以外に何か毒仕込まなかった

」？

「・・・サンナ以外の他の女の子と深いキスができないように・・・

」
「できないように？」

「・・・キスをした女の子がだんだんにえっちになっていく毒を仕込んだの・・・／＼／＼」

『なんてことをしてくれたの（よ／ですか）！？』

「だって・・・スバルをサンナと二人で独占したかったんだもん・・・」

「そうだよぉ・・・」

「とにかく！解毒法を教えて！」

「・・・ごめんね？アタシ、解毒用の毒、作ったことないの。」

「そんなバカな話言わないで！？」

「あ、あの・・・」

ナコルとシロンがダイアナに詰め寄っていた時、カトレアが発言をしようとした。

「カトレア？どうしたの？」

「あの、私ならきつと解毒用の毒、作れると思います・・・」

「ホント！？」

「あ、はい。・・・でも、一度その毒を自分の身体に取り込まないと・・・」

「・・・まさか、あなたもアイリスが辿る予定の状態にならないといけないってこと・・・？」

「・・・ほんの数秒ですよ？」

「じゃあ、早く来てください！」

「お、置いてかないでくださーい！」

カトレアを連れて二人はスバルの元へ戻った。

シロンたちが戻り始めた頃・・・

「ぴちゃっ・・・じゅるる・・・う（ガクッ）・・・（パタッ、ビクッ！ビクッ！）」

ついに力尽きスバルの上に倒れこんでしまうアイリス。

眼は半開きな上、完全に焦点が合っておらず虚ろな感じがし、口からは涎を垂らしてしまい、身体は麻痺のせいなのかそれ以外に理由があるのか、痙攣を起こしていた。

端から見れば、彼女の顔は恍惚に満ちている感じがしてしまう気がするような顔だった。

「アイリス！もうやめて！もう限界なんじゃないの！？」

ウィリアが悲痛の声を上げる。

決してアイリスが羨ましいわけではない。これ以上二人が苦しむのを見たくないからだ。

しかし・・・

「・・・（ぐぐっ・・・、ふるふる）」

「そんな、もう、無茶だよ・・・」

必死にスバルの口に顔を寄せようとし、ウィリアの制止に無言で首を振る。

そんなアイリスに耐えられなくなったウィリアは・・・

「アイリス、あたしに代わって！（グイッ！）」

「・・・うう・・・（ズルッ・・・）」

ウィリアがアイリスを引っ張り、近くのソファアに横たわらせた。

麻痺毒により力が抜けたアイリスは、なんの抵抗もなく引きずられた。

「今度は・・・あたしが・・・」

「もう毒は抜けた！自由に動けんむっ！」

「じゅるるる・・・ぬちゃ・・・んうっ！（ビクン！へたっ・・・）」

ウイリアも結局毒にやられていた。

「しゅびやりゅ・・・ひよみえん・・・。みよう、あひやひひやりやひやいんにやい・・・（訳…スバル・・・ごめん・・・。もう、あたし力入らない・・・）」

ウイリアはアイリスと比べると完全に麻痺毒にやられていた。

「アイリス、ウイリア、スバル、大じょ・・・アイリス、ウイリア！大丈夫！？」

「アイリス！気を確かに！」

「ウイリア、アイリスどうなったの！？」

「あいりひゅ、しゅびやりゅひよひひゅひひゅひゅひえひやりや、ひゃんひえんにひひようひにやつひやつひやによ・・・（訳…アイリス、スバルとキスし続けてたら、完全に気を失っちゃったの・・・）」

「眼が虚ろです！カトレア、早く解毒用の毒を！」
「わ、わかりました！スバルさん、失礼します！」

ちゅっ・・・

「ぺろっ・・・はうっ！」

アイリス・ウィリアと同様、膝から崩れ落ちるカトレア。

「・・・どうなの？」

「うっ・・・あっ・・・はんっ・・・、・・・はあっ、はあっ、で、
できました・・・。で、では、もう一度・・・（ちゅっ）」

解毒用の毒、スバルに投与。

「・・・ぷはっ・・・っ、次はアイリスさんですね・・・。・・・
失礼します！（むちゅっ！）」

「・・・お、おおっ！？動けるようになった！」

「はふっ・・・、最後はウィリアさんです・・・。・・・失礼しま
す！（むちゅっ！）」

「う・・・あ・・・、あ、あれ、私・・・っ！スバル！大丈夫！？」

「とりあえず動けるようになった・・・」

「はふう・・・。（すっ）・・・」

「カトレア、どうしたの？」

「いえ・・・、なんでもありませんよ・・・」

「そう？ならいいんだけど・・・」

そのうちウィリアも復活し、麻痺毒問題は解決した。

「・・・カトレア、本当に大丈夫なの？さっきから顔が赤いんだけど・・・」

「ほっ、本当に大丈夫です！」

「・・・そうは見えないんだけど・・・」

シロンがそう呟きながらスバル達の後を追った。

一人スバルの部屋に残ったカトレア。

「・・・／／／」

助けるためだとはいえ、自分のファーストキスを捧げたのだ、恥ずかしくなるのは仕方がない。

自分の胸に手を当ててみれば、そのことでドキドキと速まっていく胸の鼓動が感じられた。

「私・・・スバルさんに・・・キス・・・しちゃったんですね・・・／／／」

未だ冷めぬ身体の火照りが引くまでには1時間を要した。

「ダイアナとサンナには要注意ね・・・」

「そうですね・・・。それよりもアイリス、ちょっと聞きたいことがあるんですが・・・」

「なに？」

「実はあの毒に・・・少しずつえっちになっていく成分が入っていたらしくて・・・」

「え、そうなの？」

「何ともなかったんですか？」

「うーん・・・、身体が痺れて・・・、途中から何も覚えてないや・・・」

「あたしにはえっちになって行ってるように見えなかったよ？」

「アイリスにはあまり聞かなかったようね・・・」

「もーっ！よく分からないよ！」

「あ、でも・・・」

『でも！？』

「眼が半分だけ開いてて、うつとりしたような顔だったな・・・。よだれも垂らしてたし・・・」

『やっぱり影響あった！』

「そ、そんなことしてないよお！っていうか、何も覚えてないんだから言い切る自信は無いんだけど・・・」

「お姉ちゃん、ちょっと考えた事あるんだけど、いいかな？」

「ディルカ？考えた事って・・・」

ディルカがアイリスを呼び止め、自分に考えがあるという。

「これって、お姉ちゃんがえっちになったんじゃなくて、ダイアナがえっちなんじゃないのかな・・・って。」

『・・・確かに・・・』

「へっくち！」

「ダイアナ、風邪引いちゃった？」

「噂かもしれないわね・・・。というよりも・・・。」

ダイアナがイシアやクリムをキッと睨む。

「なんの見せしめかは分からないけどいつまでも薄着のままにしないでよ！寒いじゃない！」

「それがお仕置きです。」

「少し頭冷やしてね。」

「イシアあゝ・・・。」

冷たく言い放つイシアに泣き着くように言うサンナ。

「カトレア、大丈夫かしら・・・」

「大丈夫だと・・・思いますよ・・・？」

そのころ、カトレアは・・・

「・・・／／／」

まだ顔を赤くしていた。

報酬。

入手・クエストクリア

クエスト未受注のため無し。

その他

カトレアがダイアナの麻痺毒を治療する唯一の方法になる。
カトレア、よりスバルを意識する。

ダイアナへの「えっちな女の子疑惑」より強くなる。

第52話 訪れぬ朝の平穏、麻痺毒問題発生！（後書き）

今回はかなり暴走した（作者が）回でした。

次回からコラボ入ります！

お楽しみに！

第53話 戦いの中で芽生えた友情 その1 「名指しで指名のクエスト、いざ

53話です。

今回からコラボクエスト・「バトル部編」を開始します！

そして今回、擬人化に布石を打っております。（擬人化案を採用しております）

では、どうぞ！

第53話 戦いの中で芽生えた友情 その1 「名指しで指名のクエスト、いざ

麻痺毒騒動があつて。

リビング。

「あの二人に危機感を覚えたぞ・・・」

「危機感を覚えたのはスバルだけじゃないよ・・・」

「私たちも危機感を持たざるを得なくなりました・・・」

全員がサンナとダイアナに危機感を覚える状態になった。

「姉さん、スバルに嫌われたかもね・・・？」

「そんなあ・・・」

「いや、別に嫌うことはないが、もう少し行動を自制しろと言いたいだけだ・・・」

「スバルうっ！（ギユウっ！）」

「ぐおお・・・く、苦し・・・い・・・」

「ね、姉さん！スバルが死にかけてるよ！」

「サンナ！」

「ほえ？」

ダイアナやイシアに言われ、スバルを見ると・・・

「・・・」

スバルの息は止まっていた。

「いやあああっ！？スバル！？死んじゃダメ！起きて！ねえ！」

「す、スバルさあん！目を覚ましてくださあい！」

「起きて！死なないで！」

「どうすればいいの・・・！？」

死にかけているスバルに大慌てになる娘達。

「皆落ち着くのだ。まずは蘇生を試みたほうが良いのではないか？

心臓マッサージだとか、人工呼吸だとか・・・」

『人工呼吸・・・？』

アレックスの言葉にあった『人工呼吸』に首を傾げる。

「まあ、なんだ、口に空気を含ませてどうにか呼吸させる方法だな。」

」

「アレックス、その方法はスバル的にまずいんじゃないのか・・・？」

「なぜだ？・・・しまった、スバル的にまずい方法だった・・・」

『???』

アレックスはしまったとすぐに口を隠したが、娘達には未だによく分からなかった。

「あの、私、知っているんですけど・・・」

「カトレア、知っているのか、方法を!？」

「はい・・・。・・・で、でも、恥ずかしいですう・・・。／＼。・・・でも、スバルさんを助けるためですから・・・失礼します!（すうう・・・）」

カトレアは大きく息を吸って・・・

ムチュツ!

『じ、人工呼吸って・・・キス（ですかあ）!?!』

娘達、愕然。

なぜかというと・・・

『そんなことだったなら（私／あたし／アタシ）がすればよかった
！！』

・・・と。

そんなことになっているのもつゆ知らず、カトレアは懸命に人工呼吸を続けていた。

「（すうう・・・）むっ！（ふうっ！）・・・はひっ、はひっ、も、もう息がもちましょん・・・」

『次は（私／あたし／アタシ）が！』

「もう必要ないぞ、スバルは無事のようだ・・・」

「た、助かった・・・。カトレアがやってくれたのか？ だったらありがとな。」

「いえ・・・、当然のことですから・・・／／／」

『ええ・・・』

スバルの感謝に顔を赤く染めて答えるカトレアに、ぶーぶー言う娘達。

とりあえずスバルは復活した。

それから数分後・・・

「スバル！家にいるか！？お前を指名したクエストである！」

「俺を指名した・・・？」

「ああ！気張ってやってこい！では、さらばだ！」

「あ、おい、ちょっと・・・！」

教官がいきなり訪問、クエストを掲示して立ち去って行った。

「あ、あの人って相変わらず嵐のような人ですね・・・」

「本当にびっくりするくらいだね・・・」

「俺を指名って・・・って、指名したのカクサスだし！」

「俺・・・なのか？」

スバルの突っ込みに疑問を浮かべたカクサス。

「えっと、なにになに・・・？依頼主はラッシュ、バトル部の部長だそうだ。」

「ラッシュか・・・。今も元気にいるだろうか・・・？」

「あうう・・・」

「アイリス？」

依頼主の名が出た瞬間、懐かしむカクサスと突如震えだすアイリス。

「内容は・・・一対一のタイマン、何人が選抜してほしい・・・か・・・」

「一対一・・・スバル、ここの皆は中々の強者だらけだ、生半可な者を選抜するのは禁物だ。」

「その情報が分かれば選抜は可能だ。メンバーは・・・指名のあったカクサスと俺は確実だ、あとは戦う意欲のあるメンバーといえば・・・ナコル、シロン、ライラ。頼めるか？」

「相手によるけど。」

「いいですよ。」

「私も断る理由ないわよ？」

頷く三人。

「頼みがあるが、私も一緒に行ってはダメか？」

「アレックスが？・・・まあ、別にかまわないが・・・」

「すまぬ、恩に着る。」

アレックスもついてくることが決定した。

「今日中に移動しないとな。目的地の学園は遠いから時間がかかるだろう、待たせたくないし、早く戦闘したいから明後日には着きたい。」

「だったら、早速行きましょ？」

こう家から出ようとした時・・・

『カクサス、私もつれてって・・・？』

「スバル、あたし一緒に行きたいの・・・」

カクサスにナデシコとリナトが、スバルにイシアが寄り添って、一緒に行きたいとせがんだ。

「カクサス、どうする・・・？」

「いい・・・と思うが、危険だしな・・・」

『大丈夫、危険になったらカクサスが守ってくれるもん・・・』／

／

「おとなしくしてるから・・・。お願い・・・（うるうる）」

「はあ、分かった分かった。本当におとなしくしてるんだぞ？」

「うん・・・！」

「二人とも前に出てこないことを約束できるな？」

「やっ、約束する！」

「わ、私も・・・」

「スバルうゝ、私も行きたいよゝ・・・」

「姉さんはダメ！姉さん来たらスバル戦えなくなっちゃうよ！」

「おとなしくしてるのにいゝ・・・」

「・・・サンナ、今回は留守番していてくれ・・・」

「ふええ・・・」

泣き着くサンナをどうにか説得し、留守番組にした。

タリスもアルテアも泣く泣く留守番組になった。

クエスト…とある世界のバトル修行

開始。

「とは言ったものの・・・」

スバルはある一点を見つめてこう呟いた。

スバルの眼前に広がるのは・・・

火山だった。

「この火山って・・・確か・・・」

「リナトがカクサスに一目惚れして、俺が片目を失った火山だ・・・」

「皮肉なものだな、幸と不幸が合わさった場所だとは・・・」

ウィリアが火山で何か思い出しかけた時、スバルが説明をした。

そのことにアレックスは皮肉を漏らした。

「今回は大型モンスターは何もないだろう・・・、出てきてせいぜいイーオスとかウロコトル・・・だったか？それくらいだろ。」

「ドスイーオスの可能性は？」

「なくはないが、限りなく0に近い確率だな。」

「とても不運じゃなければ、会うことはないだろう。」

「だよな。はははっ！」

「ふふふっ・・・」

このときは皆普通にしていた。

この後のに起こることは誰も知らなかった。

ギヤオオッ！ギヤオオッ！

「・・・とても不運な奴だけだよな、ドスイーオスと会うのは・・・」

「俺とアイリスが前来た時は会うことはなかったぞ・・・」

「と、いうことは・・・」

「やっぱり・・・」

「俺か！？俺のせいなのか！？」

「ちよつと、スバルさん！落ち着いてください！取り乱さないでください！」

「スバル、落ち着いて！」

こんな超低確率に遭遇したのは自分のせいだと、自分はあまりにも不運だと思ふスバルは思い切り取り乱していた。

そんなスバルを必死に宥めるカトレアとレノシア。

「ここで閃光玉とか投げたらまた女か男になるんだろぅな・・・」

「カクサスう・・・」

「大丈夫だ、危なくない。」

「安全に逃げたいし・・・」

「ダメもとで投げてみたら？」

「女が出たら誰かの恋敵が増えることになるぞ？」

『うっ・・・』

アレックスの一言に黙り込む目晦ましアイテム投擲案提案者。

「だが、ここは無傷で済むことが大事だ、そんなことに構ってられるかぁーっ！」

「スバル、止めてえーっ！」

シロンの制止も振り切り、スバルは閃光玉を投げた。

カッ！

「今だ、先へ行けっ！」

「わ、わかりましたあ!」

「スバル、一緒に逃げよ!」?

「いや、確認したいことができた!」

「バカじゃないの!?! 危ないわよ!?!」

「大丈夫だ、安心しろ!...それともなんだ、俺のこと心配しているのか?」

「そっ、そんなこと...うう...そうよ! アンタの心配して悪いの!?!」

「おおっ!?! あ、いや、そんなことはないが...」

「じゃあいいじゃないのそんなこと!」

光がはれ、視界が元に戻った。

「いつもならここで誰かがいたんだが...」

スバルの視界の中にいたのは...

オ...オ...オ...

目を回していたドスイーオスのみだった。

「珍しいことがあった！　というか、閃光玉で何も起こらなかったのは初めてだ！」

スバルはこのことに喜んでいたが、すぐに先行組を追いかけ始めた。

しかし、本当は何も起きていないわけではなかった・・・

<・・・ああああ・・・>
「ん？」

スバルは遠くに聞こえた小さな悲鳴を聞き逃さなかった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第53話 戦いの中で芽生えた友情 その1 「名指しで指名のクエスト、いざ

まずはコラボクエストのきっかけとなったフォックさんにお礼を。

ありがとうございました！

次回は、活動報告で発表した通り「番外編・不幸なバサルの物語」をやります！

このバサル、実は・・・おっと、ここから先は言えませんか？

では、次回をお楽しみに！

番外編 不幸なバサルの物語（前書き）

今回は番外編です。

今回出てきた子は、鴉く夢の運び屋くさん原案の子です。（ちよつとイメージ違うかと思いますが・・・）

では、どうぞ！

番外編 不幸なバサル物語

これは、火山の中に住んでいる一匹の不幸なバサルモスが、人の姿を成し、スバルたちと出会う直前までの物語である・・・

私はバサルモス。

だけど普通のバサルモスじゃない。

なんで普通じゃないのかって？

それは・・・。

ある日のこと、バサルモスは普通に歩いていた。

今日は天気がいいな・・・♪

あれ・・・？曇ってきた・・・？

ザアアアアアアア・・・

いや～ん、雨が降ってきた～・・・

その日、空は晴天だったのに、彼女の周辺のみ雨が降った。

他にも、こんなことがあった。

お腹すいたな・・・

あ、食べ物だ！

彼女が食べ物を食べようと近づいて行ったが・・・

く、腐ってるよお・・・

腐っていて食べられなかった。

こんな感じで、私は他のモンスターよりも不幸なの・・・

彼女は、他のモンスターからも『不幸なバサルモス』『不幸体質』『残念バサルモス』などと呼ばれていた。

彼女の不幸は、ある日最も弱まったのか強まったのか分からない状態になった。

今日は火山から出ないようにしよ……。出たら雨降るもん……

そう思って散歩していたバサルモス。

帰ってきたら……

あゝ！？私の巣がドスイーオスに取られてるぅ……。・・・

また不幸に。

さらに・・・

「俺か！？俺のせいなのか！？」

「ちよつと、スバルさん！落ち着いてください！取り乱さないでください！」

「スバル、落ち着いて！」

ハンター（スバルやカトレアなど）がいた。

ひい、ハンターさんがいるよぉ・・・。隠れなきゃ・・・

彼女は必死になってこそそと岩陰に隠れた。

あ、でも、あの人、格好良いかも・・・

隠れながらにしてそう思うバサルモス。

「だが、ここは無傷で済むことが大事だ、そんなことに構ってられるかぁーっ！」

「スバル、止めてえーっ！」

ほえ？

ハンター（スバルのこと）が何かを投げた。

カッ！

きゃあああああっ!？

投げられた閃光玉の光を受けた。

あれ、だんだん見れる高さが低くなってく・・・

なんでだろ・・・。体が肌色になってくよ・・・？

なんで・・・？なんで・・・？

そうして光がはれ、自分の身体を見た。

「あれ、私・・・立ってる・・・？なんだろう、この膨らみ・・・（むにゅっ、ぴくっ！）ひゃん！・・・まさか私・・・」

人になっちゃったのー！？

そんな中、混乱から復活したドスイーオスが女の子（元バサルモス）を見た。

・・・変態が品定めするような眼で。

「いつ、いやあああああああああつ！」

女の子（くどいようだが、元バサルモス）のこの悲鳴が、幸運を呼ぶ出会いに繋がるとは、この頃誰も思いもしなかった。

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

番外編 不幸なバサルの物語（後書き）

今回出てきた女の子は次回明らかにプロフィールが明らかになります。

どういう子なのかは次回に。

次回はその子とスバルが出会います。

お楽しみに！

第54話 戦いの中で芽生えた友情 その2 「不幸少女とMr・不幸の出会い」

第54話です。

漸く到着という体たらく・・・

Rー15はお忘れなく・・・

では、どうぞ！

「ん？」

「どうしたの、スバル？」

「いや、さっき悲鳴か何かが聞こえた気がしてな……？……ちよっと戻ってみる。」

「さっきのドスイーオスの所へ！？無茶よ、止めといった方が……」

「悲鳴がしたならそこに誰かがいて、助けを求めたってことだろう？
だったら尚更助けに行かないとな。」

「それは、そうですけど……」

スバルの突如とした独立行動を必死になって止めさせようとする一同。

だが、スバルの人として当たり前前の行動に正当性を感じたカトレアは黙り込んでしまった。

「じゃ、じゃあ、あたしがついて行くね……？」

「……イシアだとスバルが危険ね……」

「そうですね……」

「……どういふこと？」

ナコルとシロンが同時にイシアが同伴するのは不安要素がある、と主張。

理由を聞いただすイシア。

『・・・あなた、戦え（るの／ますか）？』

「・・・戦え・・・ない・・・」

「皆、そんな風に言い合っているうちにスバルとアイリスとウィリアムがいなくなっているぞ？」

「嘘っ！？」

「は、早く追いかけないと！」

「何かあったらサンナが怖い！」

「こ、怖いのはむしろダイアナだと思うのですが・・・」

「ど、毒ですかぁ！？」

娘達が必死になってしまっている間、スバルは悲鳴の聞こえた地点に辿り着いていた。

「確かこの辺で悲鳴が聞こえたような気がしたんだが・・・」「こ・・・来ないでよぉ・・・」っ！待ってろ、すぐ助けるから！」

スバルは声のした方に走って向かった。

スバルが到着した時には・・・

じりじりとある一点を目指して歩き続けるドスィーオス。

そのドスィーオスに迫られている女の子。

「とりあえず・・・離れろおおっ！」

ズツバアッ！

ドチャッ！

キュオオ・・・

一刀の元切り伏せられたドスィーオス。

たった一撃で絶命した。

「ふう・・・。とりあえず無事のようにだな・・・。ケガはな・・・。」

スバルはようやく気がついた。

女の子が裸だということに。

「っ！（クルリ）」

スバルは突如として後ろを向いた。

「うっ・・・ううっ・・・うわああん！こわっ、怖かったよおっ
っ！（ムギユウっ！）」
「っ!？」

怖くてスバルに抱き着き泣いた女の子。

だがスバルはその子を慰めることができずにいた。

なぜなら・・・

「・・・（む、胸が当たってる・・・っ！いかん、理性が吹っ飛ん
じまうっ!）」

後ろを向いている為に背中当たる柔らかい感触（むろん、直接当たっている。わざとではないことは事実）に内心焦っていた。

「ひつく・・・すん・・・ふええええええええええ・・・」

まだ泣き続ける女の子。

くっそ、こうなるんだったらノブ連れてこりゃよかった・・・

そう思ったスバルだった。

「・・・とりあえず、泣き止んだか？」

「うん・・・。あ、あ、ありがと・・・。／／／」

「・・・(バサッ)」

「・・・？」

おもむろ
徐に上着を脱ぐスバル。

「・・・これ着てくれ・・・。そうでもしないと直視できん・・・」
「?・・・いやあっ!？」

自分の状況に気がついた女の子は慌ててスバルが出した上着を羽織った。

「・・・とりあえず、なんでここにいた？」

「・・・はう・・・」

「・・・（顔を俯かしたか・・・。何となくだが今すぐにでも逃げたしたそうな雰囲気だから、この子はきっと人見知りなんだろうな・・・）。変に気負う心配はない、気軽に接してくれ。とにかく、なんでここにいたのが気になってな？それを教えてほしいんだ・・・」

「あ、あによ、しよ、しよれは・・・／／／」

「・・・まずは落ち着くことからか・・・。とりあえず深呼吸しようか。」

「う、うん・・・。すうゝっ・・・はあゝっ・・・」

女の子にある程度落ち着けるよう深呼吸をさせた。

「落ち着いた？」

「う、うん。あ、あのね、こっ、ここが、私の、す、巢なの・・・」

「ここが・・・って、まさか、君、バサルモス？」

「そ、そうだよ・・・／＼（はうう、やっぱりこの人格好良いよ！近くで顔を見ると恥ずかしくなっちゃって胸がドキドキするよお・・・／＼）」

「・・・とりあえず、君も人になったのか・・・。・・・ん、じゃあ一緒に来るか？ここに一人でいると危ないだろうし・・・」

「あ、あの、そつ、それは嬉しいんだけどっ！わ、私、不幸体質だから・・・」

「不幸なのは俺も一緒さ、ここにいないと踏んでいたドスイーオスに鉢合わせしたんだしな・・・」

「へ・・・、そうなの？」

「まあ、ここで君を人にしてしまったのも俺の不幸の一種だろうしな・・・」

「そつ、そんなこと・・・ない・・・よ？」

女の子が反論してきた。

この時点で、女の子はスバルに対して大分打ち解けてきたようで、普通のお喋りをしていた。

「だって、人になれたから、あなたに会えたし・・・、その・・・、はうう・・・／＼」

「・・・？・・・って、まさか・・・」

女の子が顔を赤くした理由に疑問符を持つスバル。

時期にその疑問符が消え、逆に顔が青褪めあおざ始めた。

「あのね・・・、あなたただだと思うの・・・。私が心許せるの・・・。／＼／＼」

「心許せる、って・・・ちょっと大袈裟な気がするが・・・。やっぱりその不幸体質のせいで何か言われてきたみたいだな・・・」

「う、うん・・・。それと・・・ね？あなたを見ると・・・、胸が・・・、ドキドキするの・・・。よく知らないんだけど・・・、これが『好き』ってことなのかな・・・？」

「・・・（まずい、アイリスたちに最悪殺される可能性が出てきた・・・）」

「だから・・・、これからもよろしく・・・ね。（ぎゅうっ・・・）」

「あ、ああ。よ、よろしくな。」

スバルが挙動不審にしている理由。

女の子が抱き着いていることにあるのだが、彼女は上着を羽織っているとはいえ、中は裸。

つまり、ほとんど直肌に触れているようなものだからである。

「・・・あ。名前・・・」

「あ、うん。私、チェリムルっていうの。」

「そっか。俺はスバルだ。今度こそよろしくな、チェリムル。」

「うん！（むぎゅっ！）」

チェリムルは完全にスバルに心を開いた。

直後に彼女には不幸（？）が訪れる訳だが・・・

「あっ！いた！スバ・・・ル・・・」

「・・・誰・・・？あの女の子・・・」

ちょうど名前を教え合った直後で、チェリムルが抱き着いた瞬間にアイリスとウィリアが来た。

「スバルっっ！」

「無事っっ！？」

「ああ！とりあえず無事だ！あと、結局何かあった！」

「何かあったって、その子のこと！？」

「とりあえず近くに來て自己紹介してくれ！この子、人見知りらしいんだ！」

「人見知りって・・・」

「昔のあたしみたい・・・」

二人が近くまで来て、チェリムルと初対面。

お互いに名前を教え合った後・・・

「・・・しくしく。」

「うい、ウィリア!? どうしたの!?!」

「チェリムル、胸大きいよお・・・しくしく・・・」

「・・・(ふるふる)」

「あっ! チェリムル、抱きついちゃダメえっ! (ドンッ!)」

「うおっ!?!」

「きゃあっ!」

アイリスが涙目で抱き着いているチェリムルに嫉妬し、スバルにぶつかった。

スバルは言うまでもなく、チェリムルも一緒に倒れこんだ。

ドシン!

「ぐおお・・・アイリス・・・お前は(むにっ) 『ひあっ!』・・・」

は？」

「あ・・・あうあ・・・／／／」

スバルがアイリスに文句を言おうとした時に聞こえた、嬌声のダブルコーラス。

理由は偶然発生していた。

スバルが倒れた時、何故か知らないが纏^{もっ}れ合ったらしく、偶然アイリスとチェリムルに覆い被さるように倒れこんでいた。

更に偶然、スバルの手はしっかりと二人の胸を掴んでいた。

ウィリアはその光景に顔を赤くするしかできずにいる。

「~~~~~っ!？」

「スバル・・・、いきなり押し倒さないでよ・・・。私だって、その、心の準備がいるんだよお・・・／／／」

「こ、心の準備とかはどうでもいい!つか、お前が押し倒したんだろが!悪い、すぐに退く!・・・.と思ったが、このまま動く大変なことになる・・・。(クルリ)」

「あんっ!スバル、動いちゃダメだよお・・・／／／」

「ふあんっ!や、ダメ、動いちゃ・・・／／／」

「ウィリア、俺の首引っ張ってくれね・・・え・・・」

スバルはウィリアに助けを求めようとして言葉を止めた(助けを求めるために首を動かしたため、二人がまた嬌声を出した)。

「ウィリア？ウィリア？・・・ダメだ、完全に硬直してしまっている・・・。二人に聞くが、どちらかに転がるか両方に力をかけないといけないらしい。二人の真ん中に、しかもちょうど腕が届かないから・・・。どっちか、我慢できるか？」

『・・・／／』

「・・・二人して顔を逸らすな・・・」

「だって・・・、恥ずかしいんだもん・・・／／／」

「私も・・・。男の人に胸触られたの初めてだから・・・」

「・・・はぁ・・・（なんか、どんどんまづい方向に進んでいる気がするな・・・）」

溜息をついた後、決心した目で二人を見るスバル。

「・・・ちょっと痛いかもしれんが、我慢してくれよ・・・？」

『な、何をする気なの・・・？』

「・・・反動をつけて一気に起き上がる。足は既に曲げてあるから、あとは上半身だ・・・」

「い、痛くしないでね・・・／／／」

「・・・／／／」

「二人とも今から俺が大変なことをしようとしているような発言や行動はしないでくれ・・・。せえっ、のっ！（ムニユンツ、ムギユウウツ！）」

「ふあああんっ！や、らっ、らめっ、にゃ、にゃにかきちゃうっ！あっ、あっ、ふああああっ！..、」

「やっ、らめっ、あたまによにゃかがまっしろになっひゃうっ！んあああああっ！..」

「・・・ただ単に起き上がるために力を入れただけなのに・・・、
なんでこんな状態に・・・？」

「・・・スバルが腕や手に力を入れていたから、結局胸を揉みしだ
いていたような状況になっていたんだね・・・」

「起き上がるためだぞ・・・？・・・多少難しかったが・・・」

「・・・ねえスバル。」

「なんだ？」

「チェリムルはどうか知らないけど・・・、アイリス、前より敏感
になっちゃってるんじゃないかな？って・・・」

「・・・かなり不安なこと言わないでくれよな・・・？」

件の二人は・・・
くだん

「しゅぱりゆう・・・、いひやくしにゃいれっれいっひゃによに・
・（訳…スバル・・・、痛くしないでって言ったのに・・・）」

「にゃんりゃかよきゆわきやらにゃいけりよ、きもひよきゆれあら
まによにゃきやらまっひろらよお・・・（訳…なんだかよく分から
ないけど、気持ち良くて頭の中が真っ白だよお・・・）」

完全にダメになっていた。

「・・・ウィリア、俺を殺すか？」

「えっ！？ちょ、スバル、いきなり何を言い出すの！？」

「いや、もうなんかな？そろそろ誰かが病む可能性が出てきてな・・・」

「・・・アスカじゃあるまいし・・・」

「へっくちゅん！」

「あらら、アスカ、風邪引いちゃったの？」

「違うよお、お兄ちゃんが私のことを噂してるんだよお！お兄ちゃん・・・、いつかお兄ちゃんのお嫁さんになるからね・・・／／／」

「うおおっ！？（ゾクゾクウツ！！）」

「か、カクサス！？」

「だ、大丈夫・・・！？」

「今、物凄い悪寒がした・・・」

「カクサス、あなたの悪寒って大体想像ついたわ・・・。ナデシコ、リナト、あなたたちの最大のライバルが妹って、複雑な心境じゃないの？」

「ら、ライラ、へ、変なこと言わないでよ・・・」

「・・・（コクコクコクコク！）」

なんだこのリンクは・・・

スバルとウィリアが何気なくアイリスとチェリムルのことを話し合っていた時・・・

「スバルっ！」

「無事でしたか!？」

「無事でよかった！」

「心配したんですよぉっ！」

ナコル・シロン・アレックス・レノシアが駆けつけてきた。

「・・・スバル、その子とアイリス、どうしたの・・・？」

「いや、ただの事故だ、うん。」

「じゃあ、二人の眼が気持ちよさげに蕩けてるのはなんでですか・・・？」

「いや、これは・・・」

「胸を揉んじやったせいなんだけど・・・、元々はアイリスのせい・・・なのかな？」

「も、揉んだ・・・、・・・はうっ・・・」

レノシア、気絶。

『・・・・・しい・・・』

「え？」

『二人が羨ましい（ですう）！！！！（ドサアッ！）』

「ごふぁっ!？」

ようやく起き上がったのに、また押し倒されたスバル。

「どうして、どうしてアイリスだけ胸を揉むの!？」

「私だって、私たちだって揉んでもらいたいのに!!」

「待ておい!欲望駄々漏れだ!それに女としてのプライドは無いのかお前らに!？」

『スバルだったらプライド捨ててもいいんだもん!』

「そんなわけあってたまるか!？」

「・・・ナコルの敬語がないの、初めて聞いた・・・」

涙目になって懇願するナコルとシロン。・・・懇願する内容が完全

に狂っているが・・・

その時、ナコルから『です・ます』がないのに気がついたウィリア。

アレックスは・・・

「これは・・・カクサスと呼んだほうが制止することができそうだな・・・」

カクサスと呼びに戻ってきた道を進んだ。

「ちょ、まっ、お前ら、服が！服がずれて・・・っ！」

「いいの・・・。スバルにだったら直接見られたって・・・」

「だって・・・、スバルのことが好きだから・・・」

「理由として成立してない！というか、これで『発情モード』じゃないってのが凄い不思議だ！」

「お願い・・・、スバル・・・」

「私達を・・・、好きにして・・・」

「もう・・・、終わったか・・・」

スバルがそんなことを思い始めた瞬間。

ドスッ！！

『あぐっ・・・』

「全く、何をしているんだか。」

二人の首に手刀を一撃当てたカクサスがいた。

「た、助かった！」

「何があったかと思えば・・・。スバルの不幸は完全だな・・・」
「うっせ！」

「ねえアレックス、なんだろう、この光景見てたらいらいらしてくるんだけど・・・」

「・・・そのうち分かるさ。」

そして火山を抜け、森に出た。

「・・・ここ、一度も見たことの無い森だな・・・」

「そうだろうな・・・。俺もここに初めて来たのがラッシュと闘う為だったからな・・・、初めて見た時は驚いたよ。」

「我也見たことのない森だ・・・」

ちなみに、女の子はそれぞれが運んでいる。

アイリスはスバルが。

ナコルはカクサスが。

シロンはアレックスが。

チェリムルはナデシコが。

レノシアはイシアが。

（チェリムルのことは事前にスバルが説明した）

「今日はもう日も暮れた、学校は閉まっているだろう・・・」

「今日は四人の復活時間の確保も込めて野宿か？」

「いや、バトル部は結構遅くまでやっている時があるし、あそこの教師とは俺も面識がある。」

「ということは、前の黒ドスファンゴ討伐みたいに教室とかを借りて一晩過ごすことも可能みたいだな・・・」

「どうやら、そのようらしいな。」

「アレックス、どこかきれいな所じゃないと嫌なの？」

「いや、我はそこまで綺麗好きではない。高級な宿に入ったら寧ろ寒気がするくらいだ。」

「アレックスって本当に王族なのか・・・？」

「失敬な、王族だ！それも「王に最も相応しきもの」だと言われた、な！」

「まずは学園に行こう・・・」

何となく疲れ果てていたスバルは学園に向かうことを提案した。

彼自身、早く寝たいと思っているようで・・・

「ここが・・・『ポケハン学園』か・・・」

「中々立派な学園ではないか・・・」

学園の校門にスバル達一行はいた。

本来なら教師に一声かけないといけないのだが、カクサスがいるからそんなことはなかった。

「お、大きいね・・・」

「教室かと思ったら、バトル部の部室でか・・・かなり広い・・・」

「中央に対戦用のフィールドが完備してある・・・」

「私もこのような場所を見たのは初めてだ・・・」

各々、バトル部の部室を見ての感想を口々に漏らしていた。

「さあ、バトル部顧問から許可は得たし、寝るか！」

「そうだな、明日は決戦だ。しっかり寝ないと負けてしまうからな・・・」

こうして皆は眠りについた・・・。

明日、死闘を決する者、観戦する者、自らの想い人の為についてきた者。

目的こそ違えど、それでも皆静かに眠っていた。

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第54話 戦いの中で芽生えた友情 その2 「不幸少女とMr・不幸の出会い」

今回はチェリムルの紹介です。

チェリムル

バサルモス雌

身長142cm。

見た目13歳。

胸のサイズはC。

人見知りが激しく、とてつもないほどの不幸体質。

心を許した相手には優しく接するようにしている。が、彼女が好きになった相手にも彼女の不幸が移る。

915

名前の由来は、桜の英語・『チェリーブロッサム』より。花言葉（？）は『優れた美人』

以上です。

次回はナコルが進化した姿を見せます！

お楽しみに！

第55話 戦いの中で芽生えた友情 その3 「出会いと再会、放課後までの出

第55話です。

今回は後書きで色々・・・

では、どうぞ！

第55話 戦いの中で芽生えた友情 その3 「出会いと再会、放課後までの出

翌朝。

「さあ、朝練・・・だ・・・」

朝早くバトル部の部室に来たのは、バトル部部长・ラッシュだ。

彼は部室の光景を見て言葉を失った。

椅子に座って寝ているカクサスとアレックス。

床に寝そべって寝ているアイリス・ナコル・ウィリア・シロン・レノシア・イシア・チェリムル。

彼女ら全員に抱き着かれている為に寝苦しそうなるスバル。

床におとなしく寝転がって眠っているナデシコ・リナト・カトレア。

「・・・ああ、そう言えばカクサス宛てに依頼したんだったな。ということはあの息苦しそうなのがスバルなのか・・・？」

ラッシュは一度でスバルを見抜いた。

「カクサス、朝だ。起きろ。」

「ん・・・お・・・おお、ラッシュか。久しいな。」

「ああ、久しぶりだな。スバルは・・・あのたくさんの女子に抱き着かれて息苦しそうにしているのか？」

「あ、ああ、それだ。」

その後、全員を起こしまわって、ウィリア以外全員目を覚ました。

そして、アイリスとカクサス以外自己紹介をした。

「むにゃ・・・すばりゅ・・・しゅぴい・・・」

「ウィリアは本当に気持ちよさそうに寝ているな。」

「そうね。」

「サクラ、来ていたのか。」

「あたしが来たら悪いの？あ、あたしはサクラ。よろしくね。」

「そんなわけではないのだが・・・」

「・・・まずはクエストでバトルを依頼したいとあったんだが・・・」

「ああ。バトルをしたいとクエストで依頼した。・・・今回来た全員が戦う、なんてことはないよな？」

「戦うのは俺とカクサス、ナコルとシロンとライラの五人だ。」

「分かった。・・・が放課後まで待ってくれないだろうか？」

「・・・そう言えばここは学校だった。」

「授業頑張ってね。」

ラッシュとサクラは授業に出席するために部室を出て行った。

「・・・カクサス、放課後までどれだけかかるんだ？」

「大体・・・六時間だ。」

「・・・皆、もう一眠りするか？」

「むにゃ・・・、カクサス、私、まだ眠いよお・・・」

「私もお・・・」

「しゅぴいゝ・・・」

ナデシコとリナトはまだ眠たそうに眼をこすっている。

ウィリアは完全に夢の中だ。

「・・・寝るか。」

「そうだな・・・」

スバルとカクサスはまた一眠りすることを決めた。

放課後数分前。

「くあああ・・・」

唯一目を覚ましたのがスバルだった。

「おい、皆ーっ！起きろーっ！！」

スバルの一声で殆どが目を覚ます。

目を覚まさないのが・・・

「ナコル、シロン、二人とも闘うんだろ・・・？」

スバルが声をかけても起きようとしなない二人。

「・・・肩でも揺するか・・・」

そして近付いたら・・・

ガシッ！

「は？」

グイッ！

「うおわあっ！？」

むにゅん！

「ふごっ！？むーっ！むーっ！」

二人はなんと狸寝入りをしていた。

近付いた時に急に起き上がって、スバルを自らの胸に引き込んだ。

『~~~~♪』

「ふぐおっ！ふごっ、ふ・・・ご・・・」

「いかん！スバルが窒息死しかかっている！」

「二人とも！スバルを殺さないで〜！？」

『えっ！？』

ようやく気がついた二人。

「きゃああああ！？スバルっ！死なないでっ！？」

「し、死んじゃったらだめですよっ！」

「眼を覚ましてっ！（ガクガクガクガク）」

「・・・はっ!？」

スバル、復活。

「よかったよっ！」

「あ、危なかった・・・。三途の川を見てきた・・・」

「本当に危なかったな・・・」

「・・・戦いの準備をするぞ・・・」

「アイリス、ちよつと試したいことがあるんだけど・・・」

「いいよ？でも、なにをするの？」

「特訓の効果があるか、です。技を開発したのはいいんですが、成功率が今までゼロに等しかったので・・・」

「ほおう。技か。」

「いいなあ・・・」

「わきやあっ!？す、スバル！ウィリアも！お、脅かさないでくださいよっ！」

「悪い悪い。で、技って何だ？」

「このバトル場が使わせてもらえるなら見せられますけど・・・」

「とりあえず使えると思うぞ？俺がいるのだから・・・」

「あ、じゃあ、初お披露目になりますね。・・・でも一番程度の低い技ですが・・・」

「お、なら見せてもらおうでしょう。」

「そうだな。」

皆でバトル部の専用フィールドに向かった。

フィールド。

「さて、ナコルの新技ってなんだろうな……。楽しみだ。」

「俺も気になるな……」

「カクサス、お前が訓練をしていたんじゃないのか？」

「どうも俺の知らないところで猛特訓していたらしいな……」

フィールド上では……

「あ、あの、アイリス、ちゃんと防いでくださいね……。？」

「だ、大丈夫！ちゃんと防ぐから！」

「では……行きます！」

ナコルは太刀を構えた。

「『夜閃斬・一艶柳』^{やせんざん} つ！^{ひとつやなぎ}」

ナコルはアイリスに向けて、斬撃破を一閃放った。

「えっ！？わっ！きゃっ！」

その斬撃はアイリスに一匹の小さなナルガクルガが迫るかのような幻を見せた。

結局防ぎきることはできず・・・

「やっ！？ちょ、ナコル！胸にこれ噛ませないでよぉっ！痛っ！あふっ！」

「あっ！？す、すいません！今消しますから！」

ナコルが剣を鞘に納めたら、幻は消え失せた。

「もぉっ！胸腫れちゃったらどうするのよぉっ！？」
「わ、わざとじゃないんですよぉっ！？」

アイリスとナコルが追いかけてくをしていた。

「しかし幻影か……。戦いに是非があるかどうかと聞かれるとうかとなるが、戦法の一つと言いつ張ることは可能だな……。」

「だな……。ナコルは特訓でも分かったことだが、彼女はスピードによる攪乱タイプのような。そこに幻影が使えるようになったならより戦え易くなるだろうな。」

「そのことなんだけど……。」

スバルとカクサスがそのことで話していたら、シロンが話しかけてきた。

「シロン、どうしたんだ？何か問題でも？」

「実は、あの技、あまり多用できないの……。」

「は？」

シロンが告げた突然の話。

「多用が出来ない……。ってどういうことだ？」

「あの技、ナコルの気を削って使う技らしくて、あの技をたくさん使うと気を失っちゃるか猫みたいな状況になっちゃうの……。」

「猫みたいに・・・？まさか発情モードと同じ原理だと・・・？」
「そこまでじゃなかったんだけど、ちょっと錯乱状態になるというか・・・」

「多用は許されない・・・んだな。」

「そうね・・・」

そのころナコルはアイリスに襲撃を受けていた。

「ふうーっ！（ガブウっ！）」

「痛いですうー！というか、腕を噛まないでくださいよおーっ！」

「えいっ！！（ガブっ！）」

「痛っ！？ウィリアもやめてくださいよ！」

「ううーっ！」

ナコルは怒ったアイリスと色々と恨んでいるだけのウィリアに腕を噛まれていた。

「おーい、そろそろ戦うことになるから止めとけよー。」

『・・・ぐすつ・・・』

二人は涙目ながらしぶしぶナコルから離れていた。

アイリスは痛そうに胸を腕で覆っていた。

もうじき放課後、戦闘開始までの時間が刻々と迫っていた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第55話 戦いの中で芽生えた友情 その3 「出会いと再会、放課後までの出

今回はナコルの新技・『夜閃斬・一艶柳』についての説明です。

『夜閃斬・一艶柳』

ナコルの専用幻影斬。

ナルガクルガの幻を相手に見せ、現実の痛みとして相手にダメージを与える技。

問題点は、ナコル自信の気力を消費しないと打てず、一定量を放つと気を失って倒れて無防備になる。

モデル…『RAVE』の『獣剣』

以上です。

次回はついに対戦開始！

お楽しみに！

第56話

戦いの中で芽生えた友情

その4

「First match

56話、ついに対戦開始です！

第一戦目はナコルとルガー、どちらに軍配が上がるのか？

では、どうぞ！

第56話

戦いの中で芽生えた友情

その4

「First match

「皆、待たせた。」

放課後になり、ラッシュを筆頭にバトル部の面々が戻ってきた。

「それじゃあ、バトル開始だ。ルールは五戦、一対一の戦いで行うことになるが・・・」

「それで構わない。」

こうしてバトルは始まった。

「こっちの先鋒は・・・」

「私が行きます!」

「ナコル!? 大丈夫なのか!?!」

スバルは先程のこともあり、すでに気を消費したであろうナコルが出ることを心配していた。

「大丈夫です! 負けちゃったら申し訳ありませんが・・・」

「いや、いい。負けることが悪いわけじゃない。怪我さえしなければ

ばいいんだ。」

「はい！」

「それで、そちらの初戦の相手は・・・」

「・・・俺だ。」

「っ！」

対戦相手として名乗りを上げたのはナルガクルガのルガー。

相手を見てナコルは顔を少し複雑な顔をした。

「・・・ナコルと同族、ナルガクルガが相手か・・・。闘い辛いなら誰かに代わってもらうが・・・」

「い、いえ！大丈夫です！」

「・・・ナコル、少し身体力を抜け。気を張っていたら出せる技も出せなくなる、いつもの動きもできなくなるぞ。」

「・・・はい。」

ナコルの眼つきが変わった。

いつもの温厚な感じが漂う眼から、戦いに赴くときの目になった。

お互いフィールドの中央に向かい・・・

「では・・・勝負、開始！」

バトルが始まった。

「
・
・
・
」

お互いバトルが開始しても動かない。

（ナコル…相手の出方が分からない以上、うかつに動くのはまずいですよね……。奇襲を仕掛けたいとは思いますが、下手に仕掛けて失敗したらダメですし……）

（ルガー…相手のことはよく分からない……。相手も警戒している為動かない……。なら、奇襲をかけてみるか……。？……。いや、止めておいた方がいいかもしれん……。）

お互い睨みあったまま。

・
・
・
・
・
・

そして数分が経過したころ、ついに動きがあった。

「うおおっ！」

「っ！」

ルガーが先制を仕掛けた。

ガキン！

ナコルはとっさに太刀をかまえ、一撃を防いだ。

「・・・くう・・・っ・・・、一撃が重いですね・・・」

「まさか防がれるとは・・・。だが、こうすれば・・・っ！」

ピピピピッ！

ガキキキキッ！

ルガーは己の尻尾から棘を発射、ナコルはそれをすべて防ぎ切った。

その時、ナコルの横へ回り、尻尾を振りまわした。

「はああっ！」

「うくっ、くあっ、うつ・・・」

ルガーが立て続けに攻撃を繰り返す。

それをひたすら弾き、受け流し、ダメージを受けないようにしているナコル。

その攻防は暫く続いた。

15分後・・・

「おおおっ！」

「しまっ・・・！（ガっ！）きゃあぁっ！」

ルガーがナコルに向かって突進をした。

ナコルはそれが避けられず、直撃してしまう。

「ナコル！」

「やっぱりさっきの実験が堪えているのか・・・！？」

ナコルが地面を転がるのを見てすかさず心配するスバルとカクサス。

「だ、大丈夫、です・・・」

立ち上がるナコル。

（ナコル…この間合いなら第三段階を使えるかもしれませんね・・・）

「……っ（雰囲気が変わった……。何かするつもりだな……。）」

ルガーもナコルの雰囲気の変化に気が付き、身構える。

「……『夜閃斬・三舞桜』みつぶぎくらっ！」

ナコルは三角形状に剣を振る。

「剣からナルガクルガが出ただと……。!?」

ルガーはその光景に驚いた。

が……

「元々いなかったところに今いるそれらはすべて偽物、何がしらさ
れる前に消してしまえば問題ない！」

「くっ……。この技の弱点を見抜かれてしまいましたか……。）」

迫る幻影ナルガクルガの群れ。

それをルガーはすべて冷静に対処し全ての幻影を打ち消した。

「まさか幻影使いだとはな……。驚いたぞ……」
「はあっ、はあっ、ま、まだまだ……。っ！」

ルガーはあまり息が上がっていないが、ナコルは息が上がり始めていた。

「かなり、無茶をすることに、なりますが……」

「……そろそろ見たところ気力的にふらふらなようだが、無茶をするのはよくないな……」

ルガーはふらふらなナコルに降参を促す。

すでに気力幻影四匹を出しており、ふらふらじゃないのが今のナコルのことを考えれば普通ではない。

「や、『夜閃斬・四刃枝垂爪^{しじんしだれそうが}牙』……。っ！」

最後の気力を振り絞ってのナコルの攻撃。

ナコルの太刀から四匹のナルガクルガの姿が映し出された。

「先程の幻影と全くおな……。いや、全くの別物なのか!？」

放たれた幻影は、『夜閃斬・三舞桜』において放たれた幻影よりも遙かに速い速度でルガーに迫った。

「くっ、尾撃では間に合わない・・・っ！・・・『夜刀双剣』っ！」

尻尾を振りまわすだけでは間に合わないと踏んだルガーは、自分が持つ『剣』を使い全ての幻影を切り払った。

「くううつ・・・、た、倒れる訳にはいかないんですうつ・・・」

完全に限界を迎えているナコルの気力。

だがナコルは戦う意思を衰えさせることはなかった。

「ナコル！もうお前の気力は限界のはずだ！もう降参しろ！」

「い、いやです・・・っ！」

アレックスが降参を勧告する。

それでもナコルは降参を拒否する。

「・・・『夜閃斬・一艶柳』・・・っ・・・（ふらっ・・・ドサッ）

」

ナコルは『夜閃斬・一艶柳』を放ち、そのまま前のめりに倒れてしまった。

放たれた幻も、ルガーに届くことなく、ナコルの気絶と共に消滅した。

「・・・これ以上ナコルは戦えない、こちらの負けということではない。」

「・・・温厚な女の子だと思っていたら、なかなか芯の強い女の子だったな・・・」

「・・・俺もびっくりしているんだ。」

「仕方ないわよラッシュ、スバル。女の子は好きな人のために頑張れるんだから。」

「そういうものなのか、サクラ？」

「そういうものなのよ。」

「・・・よく分からないや。」

「・・・全くだ。」

「レウトもスバルももうちょっと女心を理解した方がいいわね・・・」

」

スバルはナコルを抱きかかえて・・・

「・・・なぜナコルが頑張ってくれたのかは分からないが、頑張ってくれてありがとな。」

そしてナコルの頭を撫でた。

その時一瞬、気を失っているはずのナコルの顔が微笑んだように見えた。

第一回戦

ナ
コ
ル
V
S
ル
ガ
ー

ナ
コ
ル
の
気
力
の
限
界
に
よ
り
ナ
コ
ル
気
絶
、
戦
闘
続
行
不
可
能
に
な
り
・
・
・

ル
ガ
ー
勝
利
。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第56話

戦いの中で芽生えた友情

その4

「First match

今回はナコルの気力技についてさらに詳細を。

『夜閃斬・三舞桜』

ナコルの気力斬撃第三の型。

剣を三角状に振り、そこからナルガクルガを三匹出したように見える。

気力消費量は『夜閃斬・一艶柳』の三倍。

『夜閃斬・四刃枝垂双牙』

ナコルの気力斬撃第四の型。

剣閃は幾何学的な紋様を描き、四匹のナルガクルガ（赤・黄・青・緑の色違い）を放つ。

気力消費量は尋常ならざるものであり、普通のものには放つことすら出来ない。

『夜閃斬・二妖椿』 ふたあやしつばき （本編未登場）

ナコルの気力斬撃第二の型。

剣閃を二閃し、そこからナルガクルガを二匹放つ。

気力消費量は『夜閃斬・一艶柳』の二倍。

以上です。

次回は誰と誰の戦いなのか・・・

お楽しみに！

第57話 戦いの中で芽生えた友情 その5 「Second match」

シロンとレイラが戦う57話です！

バトル部が連勝するのか、シロンがナコルの負けを取り返せるのか？

では、どうぞ！

第57話 戦いの中で芽生えた友情 その5 「Second match」

「ナコルは負けたか……。しかし、よく頑張った。」

「ああ。かなりの無茶をしたから後できつく叱る必要があるが、それでも勝つために頑張っていたからな。」

「次の戦い、私が闘う！」

シロンが闘うことを決意する。

「シロン、闘えるのか？」

「私を嘗めないで欲しいわ。相手には劣るかもしれないけど、それでも一矢報いるくらいは……」

「一矢報いるなんてことは言わないでほしい……。まるで『今から死ぬのを覚悟しています』と言っている気がするからな……」
「う……」

バトル部の方では……

「あっちからはシロンちゃんが出るようね。」

「シロンちゃんがね……。じゃ、私が行くわ。」

「レイラVSシロン、リオレイア同士の戦いか……。面白い戦いになりそうだな。」

対戦が決まった。

第二戦目はシロンとレイラ。

同じりオレイアの戦いだった。

「じゃ・・・第二回戦、開始！」

ラッシュがバトル開始の合図をした。

「私はナコル見たいに攻めあぐねすることはないわよ！でえええええ
いっ！（キュボォっ！）」

「きゃあっ!？」

ナコルはレイラに先制で『火炎砲』を放った。

レイラはそれを寸前で飛んで避けた。

「ちょっと！飛ぶなんてずるいじゃない！」

「そんなことないわよ？」

「そんなぁ・・・」

相手は空を飛べるが自分は空を飛べない。

それが羨ましく思えたシロン。

「今度は私の番ね。サマーソルトっ！」

「当たるわけにはいかないわ！」

レイラはサマーソルトをする。が、シロンそれを回避した。

「火炎放射、食らいなさい！」

「そんなの、当たらないわ！こっちこそ！」

「そんな技は当たらない！」

お互いに攻防を繰り返していた。

シロンは得意の火炎攻撃を繰り返すがレイラには当たらない。

レイラは様々な攻撃や魔法を繰り返すが、シロンは器用にそれを回避する。

数分後・・・

「はあっ、はあっ、はあっ・・・」
「はあっ、はあっ、はあっ・・・」

お互いに息が上がっていた。

「いい加減に・・・当たりな、さいっ！」
「そっち・・・こそっ！」

お互いに一撃――シロンは火炎砲、レイラはサマーソルト――を放った。

その攻撃は寸分狂わずお互いに向かい・・・

「（ジュッ！）きゃっ！？」
「（チッ！）しまっ！？」

掠り合った。

「あっつうい・・・」
「痛た・・・（ガクッ）えっ！？ちよ、身体が・・・、動か・・・」

シロンは突如として膝をついた。

「サマーソルトが毒のあるところで当たっちゃったのね……。・
もう魔力が少ないか……。ごめんね、これも戦いだから……。・
「……。・（どうしよう、身体が動かない、このままだとやられちゃ
う！）」

シロンは必死に動こうとする。

「これが最後の攻撃！『プチメテオ』！」
「ダメ、避けられ……。うあああああっ！」

シロンはプチメテオを回避することができず、全弾直撃を受けてしま
う。

「皆……。ごめん……。・（パタッ）」

毒で動けず、プチメテオを全部直撃させてしまったシロンは前のめ
りに倒れた。

「シロン！」

「いかん、すぐに毒抜きしないと！」

「く、薬なんてないよお！」

「傷口から毒抜きするしかないか・・・」

「わ、私が！」

「いや、カトレア、下手な者がやるよりはスバルのような経験者がやった方がいい。」

「カクスス、ここは任せた！俺はシロンの毒抜きをする！どこか清水の湧いているところはあるか！？」

「近くの滝なら水が綺麗だ！」

「そこに行く、ちよつとの間任せた！」

スバルはシロンを抱きかかえ、滝へ向かった。

「・・・スバル・・・、ごめんね・・・」

「今は喋るな、毒が回るぞ！」

「うん・・・（で、でも、今の格好、恥ずかしいよお・・・／／／／」

「

シロンは恥ずかしがっていた。

シロンは現在、スバルにお姫様抱っこされている。おまけに先程の

プチメテオ全弾直撃でところどころ服が破けていたりしていた。（その影響でちよつと胸が見えているのも理由だ。スバルは気づいていないが）

滝。

「シロン、ちよつとしみるかもしれんし、痛いかもしれん、我慢してくれ！」

「う、うん……。あ、あのね、できれば、あまり痛くしてほしくないなあ……。って……。／＼／＼」

「それくらい我慢しろ！ふっ！」

「ふやん！」

スバルはシロンの傷口に口をつけた。

目的は、毒を吸い出すためだ。

「ずるるるる……。」「

「あつ、やつ、だめつ、そつ、そんな、吸っちゃ……。」「

「……。プツ！……。一度でどうにかなるとは思えないが……。どうだ？。」

「ま、まだ頭がぼーっとする・・・（こ、これ、スバルのせいよ・・・）」
「まだ抜けていないかもしれないか・・・。もう一度だ！・・・じゅるるる・・・」
「や、きょうっ！も、もう大丈夫だからあ！・・・も、もうだめえ・・・」
「・・・プツ！」

しばらくスバルの吸毒行動は続いた。

「・・・よし、これで毒は無くなったと思うが、一応傷口を洗った方がいいか。・・・気を失っているから大丈夫かと思う・・・」

スバルはシロンの火傷箇所の水をつけ、冷やし始めた。

「リオレイアでも火傷するんだな・・・」 第二回戦

シロンVSレイラ

シロンの戦闘不能により・・・

レイラの勝利。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第57話 戦いの中で芽生えた友情 その5 「Second match」

今回はスバルたちの連敗が確定しました。

残る三人は二人の連敗を阻止できるのか？
バトル部が連勝を続けるのか？

第58話、乞うご期待！

第58話 戦いの中で芽生えた友情 その6 「Third match ライラとサクラが戦う58話です！」

ライラとサクラが戦う58話です！

今回はあるネタが使われていますが、どこにあるのかすぐわかん
と思います・・・

さてさて、軍配はどちらに上がるのか！？

では、どうぞ！

第58話 戦いの中で芽生えた友情 その6 「Third match ライラ」

「・・・次は私が。」

「ライラ、大丈夫なのか？」

「これ以上負けていられますかっての！さっきから負けているんだから、ここでバシッと勝たないと！」

「・・・大丈夫そうだな。」

ライラが急に戦いの意思を見せた。

スバルとカクサスがライラを心配するが、結局は無意味のようだった。

「さあ、私の相手は誰！？」

「・・・カクサス、いつになくライラの奴やる気なんだが・・・」

「（何となく理由は分かるのだが・・・）・・・そのようだな・・・」

「

「・・・理由分かるか？」

「・・・いや？」

スバルとカクサスがこそこそと話していた。

「あっちはライラか・・・」

「じゃ、あたしが行くわ。彼女の实力、見てみたいし。」

「へえ・・・」

「じゃ、いいわね？」

「ああ、」

二人がフィールドに向かって行った。

「それじゃ、第三回戦目、開始だ！」

「でええええええええええいっ！」

「てやあああああああつ！」

ライラは電撃を、サクラは火炎を放った。

結果、お互いを弾き合った。

「な、なかなか強い電撃ね・・・」

「そ、そっちも強い炎じゃないの・・・」

「だったら！『ドラゴンクロ』っ！」

「このおっ！『プラズマナックル』っ！」

バチィッ！

『痛ったあっ・・・』

お互いに弾いていた。

「いい加減に・・・当たれええええっ！『電撃砲』っ！」
「こんのおおおおおっ！『青の流星』っ！」

電撃放射と魔法・火炎の連発は暫く続いた。

数分後。

「はっ、はっ、あ、アンタ、もうふらふらじゃないの・・・っ!」

「そ、そっちこそふらふらじゃないの・・・っ!」

「ふんっ! そっちはもう魔法とか使えなそうだけど私はまだ電撃を放てるわよ!？」

「魔法は放てないけど炎は打てるわよ!？」

「っ、強がりを言ってるじゃ・・・ないわよおおおおっ! (バリバリバリバリッ!)」

「うわわわわっ!？ (バサッ!)」

ライラが電撃を放って、サクラは空を飛んだ。

「ちょっと！空を飛ばないでよ！」

「飛ばないと危ないじゃない！」

未だ激戦続いていた。

「サクラが苦戦している・・・」

「珍しいわね・・・、サクラがあんなに苦戦しているなんて・・・」

「つ、強いね、あの子・・・」

バトル部のメンバーも啞然としていた。

「いい加減・・・当たれゴラアアアアアッ！（バリバリバリバリバリバリっ！！！！）」

ついにライラが怒った（某ビリツン中学生風に）。

「うわわっ!?!」

ライラの放った電撃は空を飛ぶサクラに向けて放たれた。

それを回避したサクラ。

「まだまだあっ! 電撃は止まらないわよ!?!」

「くっ、本当にそうみたいね! だったら、最後の一撃よ!?!」

「こっちはまだまだ攻撃し続けるわよ!?!」

お互いを牽制し合う二人。

威嚇し合っている。

「これで・・・」

「終わりよおおおおっ!」

お互いに最後の一撃を決めようとした。

「エレクトロニクス・ブラスターアアアアアッ!」

「ブレイブフレイアアアアアアアッ!」

大爆発が起こった。

『うおおおおお！？』
『きゃあああああ！？』

その爆風は、二人の戦いを見ていた面々を吹き飛ばさんとするかのような風圧だった。

数分後、爆発煙が消え失せた。

その場に立っていたのは・・・

「私の・・・勝ちよ!」

「ま、負けちゃった・・・」

ライラだった。

「さ、サクラが負けたのか・・・」
「お、驚きっ！」

バトル部の面々が驚いたのは無理はない。

「か、勝ったのか・・・？」
「勝ったみたいだ・・・」

「あの二人のことがあったのだ、我は負けるかと思ったのだが・・・」

「お、驚きですよ・・・」

「びっくりだよお・・・」

スバル達も驚いていた。

「これが・・・、私の実力だあああああつ!!」

ライラは空に向かって叫んだ。

ライラVSサクラ

最後の技の打ち合いでサクラが戦闘不能になり・・・

ライラ勝利。

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第58話 戦いの中で芽生えた友情 その6 「Third match ラッ

今回は美琴ネタ使いました。(ゴラァァァ・・・のところです)

残るはカクサスとスバル、次はどちらが戦うのか？

二人は勝利を掴めるのか？

乞うご期待！

第59話 戦いの中で芽生えた友情 その7 「Fourth match」

カクサスとゼルスの戦いが始まる59話です！

ライラの勝利で勢いづくスバル達と、勝てばスバル達を引き離せる
バトル部、どう動くか分からない第四戦目です！

では、どうぞ！

第59話 戦いの中で芽生えた友情 その7 「Fourth match」

『おおお・・・』

今ここで話すことの可能な者は全員啞然としていた。

「へへっ、ど、どう・・・？」

ライラはふらふらとしながらもスバル達の所に戻ってきた。

「い、いや、大健闘どころかびっくりだ！」

「そ、そう・・・かな・・・／＼／＼？」

「いやいや、凄かった！」

「あ、アンタに褒められてもっ！」

結局スバルにはきつく当たっていた。

「第四戦目は・・・」

「私が行こう・・・」

「ゼルスさん・・・」

「おおお・・・」

「ラッシュ、レウト、明らかに負けるだろうというような眼をしているな？」

「い、いえ！そんなことは！」

「そ、そうそう！」

「そうならばいい。さあ、そちらは誰が？」

バトル部からはゼルスが出ることを宣言した。

「俺が・・・」

「スバル、ここは俺が行こう・・・」

「カクサス、なんで・・・」

「俺たちからすればスバル、お前が大将みたいなものだ。」

「俺が・・・大将・・・」

「そう・・・ですよ・・・？」

「カトレアもそう思うのか・・・？」

「はい・・・／＼／＼」

「私も・・・そう・・・思うよ・・・」

「チェリムルもか・・・」

一斉にスバルが大将妥当と言い張る。

「・・・じゃ、大将として言う。カクサス、行ってこい！」
「了解した！」

そしてカクサスがバトルフィールドに向かった。

「それじゃ、第四回戦、開始！」

開始の合図があつたにも関わらず、お互い動き出す様子が見られない。

お互い猛者、全員が固唾を飲んでその行方を見守り続けていた。

（カクサス…相手はゼルス、実際に戦うのは初めてだが、雰囲気然り、動き然り・・・迂闊に動いたら・・・確実に負ける！）

（ゼルス…相手はラッシュと引き分けた実力者・・・、迂闊に攻め込むのは愚かなことだな・・・）

お互いがお互いの出方を窺い、攻め込むことは全くない。

「お互いに警戒しているんだな・・・」

「そうみたいだね・・・」

『カクサス・・・』

スバルとアイリスは二人の戦いをじっと見ている。

ナデシコとリナトはとてつもなくカクサスを心配していた。

「いざ・・・」

「尋常に・・・」

『勝負っ!!』

ついに二人が動き出した。

『おおおおおっ！！！！』

同時に突撃、お互いに拳を振るう。

ゴッ！！！！！

鈍い音が響く。

「うおおおっ！」

「はあああっ！」

ガッ！ドゴッ！ゴスッ！ドカツ！

立て続きに鈍い音が鳴り響き続ける。

「まだまだあっ！」

「まだだ！まだ倒れない！」

「はうう・・・、心配だよ・・・」

「あわわ・・・あわわ・・・」

凄い拳による戦いを見てのナデシコとリナト。

「はああ・・・だ、だめっ！」

「ひゃああああっ！」

カクサスが一撃もらう度に蒼白な顔をするナデシコと、即座に顔を隠してしまうリナト。

「大丈夫、カクサスは負けないよ。きっと・・・」

二人を励ますように言うアイリス。

それでも二人は時には顔を青くし、時にはほっとしながらハラハラしながら戦いを見ていた。

「『瞬影打』！」

「当たらん！『リーフブレード』！」

「それこそ当たらん！」

激戦はなかなか終わらない。

そのうち・・・

ドゴォッ！

「がっ・・・」

カクサスが重い一撃をもらう。

『はふう・・・（きゅ）・・・（）』

ナデシコ・リナトが同時に気絶。

「ちょ、ちょっと二人とも！目を覚まして！カクサスも頑張っているんだから！」

アイリスが必死になって起こそうとするが・・・

『ふにゃあ・・・』

完全に気を失ってしまった。

「『双剛打破』！」

「そんな技、当たらん！ブレイクク・・・」

「それはフェイクだ！『潜影突手』っ！」

「（ガっ！）うぐおっ！ま、まだだ・・・っ！『ブレイククロー』」

っ！」

「（ザシュッ！）ぐあっ！」

二人の激戦はまだまだ続いている・・・

「カクサス・・・二人の為に、勝ってくれよ・・・？」

スバルはカクサスの勝利を願っていた。

激戦始めて2時間後・・・

「ぜえ、ぜえ、ぜえ・・・」

「はあ、はあ、はあ・・・」

二人は息があがっていた。

無理もない、二時間も続けて戦い続けていたのだから。

「そ、そろそろ決着といこうじゃないか・・・っ！」

「こ、こちらも限界だ・・・、切り札で決着をつけようじゃないか・・・っ！」

「あ、ああ・・・っ！」

お互いに決着の意思を持った。

見た目カクサスの方がダメージが多いようで、言葉にも覇気が見られない。

「『超究草覇斬』ちようきゅうそうはざん つ！」
「『黒気討滅刃』こっきとうめつじん つ！」

ゼルスは草の剣を、カクサスは黒色の気の剣を造り上げた。

『これで・・・終わりだあああああつ！！！！』

お互いに突進をしていく。

その動きは誰の目にも追うことはできなかった。

フオン！ブン！フォッ！ヒュン！

二人の剣が空を切る音がただひたすら聞こえる。

「ど、どうなっているんだ・・・？」

スバルは現状況がどうなっているのか分からなかった。

それはスバルだけに限らず・・・

「ぜ、ゼルスさん、今、どこにいるんだ・・・？」

「ちよっと、全然分かんないわよ・・・？」

「俺に聞かないでくれよ・・・？」

『もともと聞いてない（から）。』

「酷っ！」

バトル部メンバーも驚愕していた。

そして・・・

お互いの姿がついに見えた。

『
・
・
・
・
・
・
』

全員がこの戦いの結果を固唾を飲んで見守る。

そして・・・

ふらっ・・・

「カクサス、お前の勝ちだ・・・前来た時よりも強くなったな・・・

」
「・・・褒められるほど強くなってないさ・・・」

ゼルスが自ら敗北を宣言、そのままお互いに倒れ伏した。

「ゼルスさんが・・・負けた・・・？」

ラッシュには驚愕の事実だった。

「カクサス！大丈夫か！？」

「し、しばらく動けないようだ……。ナデシコとリナトはどうした……。？」

「カクサスの戦いでゼルスに殴られた時に気を失ったよ。」

「そうか……。まあ、あまり心配させすぎなくてす『カクサスっ！（ぎゅっ！）』二人とも！？」

気を取り戻した二人がカクサスに抱き着いた。

「ひっく……。心配したんだよお……」

「よかった……。無事で……。ぐすっ……」

「二人とも、心配かけてすまなかった……」

『うわああああん！』

二人はカクサスの胸で大泣きし、カクサスは二人を慰めていた。

第四回戦

カクサスVSゼルス

ゼルス自身が戦闘不能を宣言、降参し・・・

カクス勝利。

To
be
con-
tin-
ued
.
.
.

第59話 戦いの中で芽生えた友情 その7 「Fourth match」

今回はカクサスが勝ち、二対二になりました！

次回は・・・言えません！
でも分かると思います！

お楽しみに！

第60話 戦いの中で芽生えた友情 その8 「Fifth match スズ

大将戦が繰り広げられる60話です！

この戦い、どちらに軍配が上がるのか！？

では、どうぞ！

第60話 戦いの中で芽生えた友情 その8 「Fifth match スズ

「ついに二対二、最後は俺か・・・」

「スバル、頑張って！」

「負けないで！」

アイリスとウィリアがそれぞれ応援する。

「カクサスから相当の実力者だと聞いているからな・・・」

「で、でも、負ける自信はないんでしょ・・・？」

「いや、もしかしたら負けてしまうかもしれない。だが絶対に負けるわけにはいかない！」

「が、頑張って！」

「・・・ふ、ふんっ！べ、別に応援なんてしてないから！」

「ライラ、少しは応援してよ・・・」

「ううっ・・・」

「それじゃ、行ってくる！」

バトル部側・・・

「最後は俺だ。行ってくる！」

「頑張ってね！」

「相手は未知数の実力だ、気を抜くなよ！」

「ああ！」

レイラ、ゼルスに激励を受け、ラッシュがフィールドに向かった。

最終戦、スバルVSラッシュ・・・

「開始！」

ラッシュの代わりにレウトが開戦の合図を出した。

『おおおおっ!!』

いきなり突撃をする二人。

「『空閃斬』！」
「『ドラゴンクロー』っ！」

ガキンッ！

お互いの技が弾かれ合った。

「くうっ・・・」

「中々の威力が・・・」

お互いの技の力を褒め合う。

「それでも！負けるわけにはいかないんだ！」

「それは俺も同じだ！」

「『烈風』っ！」

「『フレアドライブ』！」

ドゴオオオオオオンッ！

二つの技がぶつかりあって、轟音が響き渡った。

「うひゃあああっ！？か、風が強すぎるよおおっ！」

「と、飛ばされちゃう！」

物凄く強い風が衝撃で吹き、見ていたアイリスやウィリアたちにもその余波は来た。

「『瞬速斬！』」

「その動き見切った！『カウンターフレイム』！」

「しまった！うぐああああっ！」

避け切ることができず、炎をもろに食らう。

「これ以上食らい続けるわけには・・・！『絶空波』！」

「・・・あの炎を消す！？だったらそのまま追撃、『ドラゴンラッシュ』！」

「ちいっ！『烈破連撃』！」

ガガガガガッ！

お互いの連撃技が音を響かせる。

「・・・スバル・・・。」

アイリスがスバルの方を見て身体を震わせていた。

「あ、アイリス、どうしたの？」

チェリムルがアイリスに聞いたです。

「スバルを助けに行きたいよお・・・」

「だ、ダメですよ！これは一对一の戦いなんですから！」

「で、でもお、今の状態じゃ一方的にスバルがやられているように

見えるんだもん！」

やられているのではなく、防戦傾向にあるだけである。

「それを我慢しなきゃ！」

「ふえええ・・・」

ウィリアに諭され、涙目のアイリス。

「くうっ・・・『瞬風斬』！」

「あたら・・・がつ!？」

ダメージを受け、よろめくラッシュ。

「な、なぜダメージを受け・・・、まさか、風か!？」
「もうバレたか・・・!」

激戦、ついに雌雄を決する域に到達する。

「が．．．ぐ．．．」

「くっ．．．が．．．あ．．．」

お互いに膝をつき、睨みあう。

「今どうなったんですか!？」

「ナコル! 大丈夫なの!？」

「なんとか! それで!？」

「今スバルとラッシュが闘ってるの!」

「スバル．．．」

「お願い、無事に、何もなくて帰ってきて．．．」

アイリスとナコル、二人は同じような祈りをした。

「これで・・・終わりだあっ！『龍炎』！」
「そっち・・・こそおっ！『屠龍滅舞陣』！」

お互いに自分の最後の大技を放つ。

『おおおおおおおっ！』

二人はこの最後の一撃に全てをかけた。

ボフウウウウウウウツ！

『きゃああああっ！』

二つの技がぶつかりあった為に発生した風は、周りのギャラリーを吹き飛ばさんとするかのような暴風となった。

そして、その二つの切り札のぶつかり合いによって生まれた風が止

み・
・
・

その中央にいた二人は・
・
・

どちらも倒れていた。

「・・・引き分けのようだな・・・」

「そう・・・みたいだな・・・」

「クツ・・・ククク・・・」

「ふっ、ふふふっ・・・」

『はははははっ！！』

倒れたまま、二人は笑い合った。

最終戦

スバルVSラッシュ

両者ノックダウン、戦闘不能により・・・

引き分け。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第60話 戦いの中で芽生えた友情 その8 「Fifth match スズ

最終戦、引き分けて済んでしまいました。

今回はスバルの技を複数説明します。

『空閃斬』

スバルの持ち技の基本。

いわゆる居合斬撃。

切り痕で追撃として風の刃が襲う。

『烈風』

物凄い風圧を発生させ、動けない中を切り捨てる。

発動時、自らもダメージを負う。

『瞬速斬』

高速移動による一閃を放つ。

元ネタは『RAVE』のシルファリオン。

『絶空波』

簡単にいえば、真空破斬。

風属性を持つ変わった剣撃。

『烈破連撃』

剛撃と等しい威力の突きを何度も打ち出す荒業。

使用者にも激痛が走るという、威力相当の対価が必要な技。

『瞬風斬』

風を衝撃波にして飛ばす技。

スバルの技史上最もリーチの長い技。

『屠龍滅舞陣』

スバルの切り札技。

その名の通り、龍を屠るための技。

使用には精神、体力が一定以上ある者のみで、無いものは即死。あ

っても連続して放つことは不可能。

以上です。

次回は、訪れる別れ、されど『絆』は永遠に・・・

乞うご期待！

第61話 戦いの中で芽生えた友情 最終 「訪れる別れ、それでも切れぬ友情」

ついに別れてしまう61話です！

ですが、繋がった絆は絶対に切れないものなんですよ・・・

そして、新しい話の切り出しが！？

では、どうぞ！

第61話 戦いの中で芽生えた友情 最終 「訪れる別れ、それでも切れぬ友情」

二人が笑い合った状態で倒れ合い、そのまま保健室に運ばれて行った。

そして、そのまま夜になった。

「スバル、戦ってくれて、依頼を受けてくれて・・・ありがとな。良い戦いできたよ。」

「そりゃよかった。こちらも自分自身の实力を知ることができたよ。」

「それで、やはり行ってしまうのか・・・？」

「すぐ、というわけではないんだ。俺たちケガもあるし、俺自身、

今すぐ動こうなんて思わないからな。」

「・・・ふっ。ゆっくり休んでいってくれ。」

「そうさせてもらうよ。アイリスたちもゆっくり話したいこともあるだろうし・・・な。」

保健室で、スバルとラッシュの話がそんな風に進んでいた。

教室では・・・

「あ、あの、わ、私に料理を教えて・・・？」

「え、えっと、い、今から・・・？」

リナトがレイラを困らせ、

「カクサス、よく頑張ったと思うぞ。」

「そ、そうなのか・・・？」

「ああ、もっと誇ってもいいことだと思っぞ。勝敗が五分五分の相手に勝ったのだから。」

「・・・いや、驕りはよくないな・・・」

カクスとアレックスが話し合っていた。

同日・・・

「しかし、スバルが担がれていく、というのはかなりシユールなシーンだな・・・」

「そう思わないでくれ・・・」

スバル達は帰ることにしていた。

「ラッシュ、俺たちは別れることになるが・・・」

「ああ・・・。俺たちはいつまでも友達として、だな・・・」

「そう、いつまでも・・・、死んでも・・・な。」

「・・・ああ！」

「それじゃあ、な。」

「またいつか、もう一度戦おう！」

「分かった！今度はクエストではなく、俺たちの意思で！」

そしてスバル達はラッシュたちと別れ、帰路についた。

「この火山を通って帰るのか・・・」

「そうだ、スバルのことお父さんに言わ・・・なくていいか。言っても聞いてくれないだろうし、ひよっとしたらスバルといられなくなるかもしれないし・・・」

「いいのか・・・」

チェリムルが火山の中でそう言い、何故かまた出てきたドスイーオスをも撃退（スバル・チェリムル曰く一度見たことがあるのかもしいれない、と）し、火山を抜けた。

「家に帰ったら、家の改装計画を立てないとな・・・。早くしないと家が限界かもしれないし・・・」

「それよりも心配なことが一つあるんだが・・・」

「カクサス、なんだよ・・・？」

「・・・アスカが、相変わらず何かしでかしていないかが心配でな・・・」

「・・・それは同情するよ・・・」

そして、自宅に着いた。

「ただいま・・・」

「スバルうゝ！！よかった、無事でゝっ！」

「ごふっ！？」

スバルがドアを開けた瞬間、眼尻に涙を溜めた状態のサンナが、いきなり抱き着いた。

「ちょっとサンナ！それは無しよ！」

「そうよ！それは・・・」

シロンが強く言おうとしたところ・・・

「ホントに・・・心配したんだよ・・・？・・・ぐすっ・・・」

サンナが本気でスバルを心配していたことが判明、何も言えなかった。

「とりあえず家の改装計画なんだが・・・何か欲しい設備はないか？」

『大きな風呂！』

聞いた瞬間、女子陣全員が今の風呂よりも大きな風呂を要求。

「・・・カクサス、アレックス、暫く日を拝むことはできないだろうな・・・」

「・・・地下を掘るといのか・・・」

「・・・我にも大体その推測は立った・・・」

その後、女子陣からたくさんの注文が出た。

キッチン。（提案者…アイリス・ディルカ・ナコル）

一人一人の個室。（提案者…女子全員）

トレーニングルーム。（提案者…シロン・ディルカ）

精神を鍛えるための部屋。^{オイ}（提案者…ナコル・シロン）

スバルの為の部屋……（提案者…スバルが好きな女子全員）

「ちょっと待て、俺の為の部屋ってなんだ？」

『それは……／＼／＼』

「……待て、顔を赤らめるようなことをさせるための部屋なのか？」

そんな言い合いが行われていた。

報酬。

入手

それぞれの固有技。
再戦の話。

クエストクリア

バトル部メンバーとの友情（遠征メンバーのみ）。

その他

チェリムル。

スバルの不幸、ここに極まる・・・？

ライラ、より『某ビリツン中学生』に近付く。
改装計画、進行。

第61話 戦いの中で芽生えた友情 最終 「訪れる別れ、それでも切れぬ友情」

・・・ということで、VSバトル部編終了しました！

今回、コラボをさせていただきましたフォックさんに改めて謝罪を・
・

ありがとうございました！

次回は改装・・・ではなく、アイリスが・・・

お楽しみに！

第62話 アイリスの嫉妬（前書き）

タイトルから判るとおり、アイリスが嫉妬してしまう話の62話です。

今回のアイリスは今まで見ていない状態です。・・・が、理由はかなりかわいい訳で・・・かなり危険な状態になります。

では、どうぞ！

第62話 アイリスの嫉妬

「・・・ふう。」

遠征から帰ってきた翌日の昼、アイリスは自分の部屋にて頬を膨らませていた。

「皆、スバルにべたべたしすぎだよ・・・。皆、好きだからってのは分かるけど・・・むう。」

アイリスが布団に包まってむくれているのは朝からの状態に原因があった。

朝。

「もうご飯の時間だから、スバルを起こさなきゃ・・・」

アイリスはスバルの部屋の前に来ていた。

「スバル、朝だ（ドンッ！）スバルうっ！おっはよう！」き
やっ！？」

部屋に入ろうとしていたアイリスを押し飛ばし、サンナがスバルの
許に向かう。

「ちょ・・・サンナ！」
「起きて〜！」

アイリスの言葉を見殺し、スバルを起こそうとするサンナ。

「起きないとお・・・（スパンっ!）きゃふっ!？」
「姉さん、そんな行動は慎もうね・・・。スバル、起きて・・・。」

イシアも参戦した。

「ふう・・・。」

本来は自分が起こしに来たのに・・・と。

アイリス、第一のむくれ。

朝食後・・・

「あ、あのねスバル・・・」
「ん、どうしたアイリス？」

「えっとね？私のと「スバル、一緒に来て！」え、シロン！？」

「ちょ、シロン、今アイリスと・・・」

「急ぎの用なの！というか、スバルといなきや意味ないの！」

完全に抱き着いた形でスバルに頼み込むシロン。

「ちょっとシロン！」

「ごめんねアイリス！」

そしてシロンは、スバルを連れて行ってしまった。

「・・・ううっ・・・」

自分が先に話しかけたのに横取りされた・・・

ちょっと涙目になりつつの第二のむくれ。

昼前・・・

「今日スバルと話せないよお・・・」

半分落ち込んだ様子でとぼとぼと歩くアイリス。

そんな中・・・

「あ、スバル！」

アイリス、スバル発見。

だが・・・

「にゃん！」

「がふっ！」

（アイリス..発情ナコルが！？え、ちょっと待ってよ・・・）

「にゃん♪」

「ナコル、退いてくれ！」

「にゃんあー！」

ナコルに退けというスバルだが、ナコルは『やだやだ』と言うように首を振る。

「・・・っ！（ダッ！）」

アイリスは自分の部屋に向かって走り出した。

走る瞬間、涙が零れ落ちて言った・・・

そして、今に至る。

昼。

炊事場にて・・・

「・・・もうすぐお昼ご飯なのに、アイリス来ませんね・・・」

「ちょっとアイリス見てくる。」

「スバル、お願いね。」

シロンに頼まれ、スバルは一人アイリスの部屋に向かう。

「どうしたのかしら・・・」

「あたしも分かんないよお・・・」

数分後、炊事場にスバルの悲鳴が聞こえた。

アイリスの部屋前。

「（トントン）アイリス？いるのかアイリス？」

アイリスの部屋のドアを叩くスバル。

「・・・返事がないか・・・。勝手に入るぞ。」

ドアを開け、アイリスの部屋に入るスバル。

布団が少し膨らんでいた。

「アイリス、一体どうしたんだ？」

スバルはもう一度声をかけてみた。

が、返事はい向にない。

やむなくスバルはその膨らみに近付いて行き、話を聞いてみる。

「アイリス？」

スバルがアイリスに近付いて話しかけた瞬間・・・

ガシッ！

しがみつくかのような体勢でアイリスがスバルに抱き着いた。

「あ、アイリス？いきなり抱きついて・・・どうしたんだ？」

スバルはその行動の真意が掴めず、すぐに聞いた。

が・・・

ギリギリギリギリシシシシシシシ・・・・！

「痛だだだだだだだだだっ！」

思い切り抱きしめるアイリス。

・・・まるで力加減をする気がないかのように・・・

そして力が弱まって・・・

「あ、アイリス？お、怒っているのか？」

「べ、別に怒ってないよ！ぷいっ！」

スバルが怒っているのかと聞くと、アイリスは『怒ってない』と言いつつそっぽを向いた。

（スバル…いや、めっちゃめっちゃ怒っているだろ・・・）

スバルの率直な意見。

「ど、どうしたんだよ、アイリス・・・」

「だってスバル、みんなと・・・、べたべたしてた・・・（目を逸らして指をつんつんしている）。私が話しているのに行っちゃうし・・・。」

「べ、べたべたって・・・」

「みんなスバルのことが好きなの分かるんだけどお・・・、でもお・・・やっぱり・・・やだったの・・・（俯いてまた指をつんつんする）。・・・くすん・・・」

「は、ははは・・・」

アイリスが力加減をせずに抱き着いた理由が嫉妬だとわかり、苦笑いするしかないスバル。

「だから、今までべたべたできなかった分の・・・」

「な、なにするんだ・・・？」

「ぎゅうっっ！」

「あいだだだだだだだだ！！！」

再び思い切り抱き着くアイリス。

力加減は先程と同じものだった。

「スバル！何があ・・・」

駆け付けた娘達は、『アイリスがスバルに抱きついており、スバルが痛がっている』という光景を見て言葉を失っていた。

「・・・この光景ができた理由っすけど、アイリスの嫉妬っす。」

「し、嫉妬？」

「そうっす。さっき、この部屋を通りがかった時にアイリスの声が聞こえて、『べたべたしてた・・・』とか『でもお・・・、やっぱり・・・、やだったの・・・』って聞こえたっす。」

『完全な嫉妬だ・・・』

「・・・でも、最近のアイリス抱きついたりとか話したりとかでき

なかったっすから・・・今回は見逃してあげてほしいっす。」

「・・・き、今日だけ特別なんだからね・・・ふえええええ・・・」

「ね、姉さん、落ち着いて・・・ね？」

「・・・くすん。」

『今日は特別だ』と言いつついきなり泣き出すサンナと、それを慰めるイシア、くすんと涙目になるダイアナの姿が・・・

「そ、それでね？私のこと・・・、す、好きだ、って・・・、言っ
てほしいの・・・。家族としてじゃなくて、女の子として・・・／

「ちょ、ちょっと！それはやり過ぎよアイリス！」

「そうよ！」

「あー、スバルの顔がどんどん青くなっていつてるっす・・・」

「え？あ！スバル！ごめーん！」

すぐにスバルを放すアイリス。

さらに言い合いを始める娘達・・・

『・・・ドキドキ・・・／／／』

「ちよっとカトレア！チェリムル！レノシアも！こそこそと『私の』

スバルにキスしようとしないでよ！」

「私のってどういふことよっ！」

スバル争奪戦、アイリスの嫉妬により開戦した。

「・・・誰か、俺のことも考えてくれ・・・」

スバルの嘆きは、誰の耳に届くことはなかった。

報酬。

入手・クエストクリア

クエスト未受注のため無し。

その他

アイリス、嫉妬。

アイリスが嫉妬した場合、力加減をしなくなることが判明。

嫉妬理由…アイリス以外の女の子とべたべたするのがやだった・・・

第62話 アイリスの嫉妬（後書き）

今回の話にはあるアニメを基盤として作りました。

・・・分かる人はいるのでしょうか？

理由が『ベタベタしてたのがなんか嫌だった』・・・、よくありそうな嫉妬理由かもしれませんが、今時そんな理由があるのかと・・・

そのための犠牲がスバルでした。

次回はついに改装計画が始動します！

そして、最近感想で見かける『ストーカーの子』が出ます！

お楽しみに！

第63話 改装計画実行! first 「改装計画、ついに開始!雪山編」

さあ、今回から改装計画編開始します!

出発した組で最初に視点を当てるのはスバル達雪山組、どうなるのか?

では、どうぞ!

第63話 改装計画実行! first 「改装計画、ついに開始! 雪山編」

「今日から家の改装をするつもりなんだが・・・痛っ・・・」
『・・・ごめんなさい・・・』

アイリスの嫉妬による抱き着き、争奪戦勃発により、死の淵に立たされたスバルはどうか復活していた。

そのことで一斉に謝る。

「材料を持ってきたきてほしい、と言われたんだ。木材はあるが、それ以外の材料がないとか・・・」

「・・・例えば？」

「鉄鉱石とか、氷晶石とか・・・」

「いろいろあるんだね・・・」

「それで、今日は雪山に行つて氷晶石などを取ってくるつもりだ。」

「私がついて行く!」

「私も!」

「あたしも行く!」

「アタシも行くわ!」

スバルが雪山に行くといったところ、アイリス・サンナ・ウィリアが行くと言い出した。

「アイリスとウィリアはいいんだが、サンナは大丈夫なのだろうか・

・・」

アレックスの心配御尤も、サンナは普通ならば非戦闘員なのだ。

「大丈夫！私は『炎戈龍』だよ？雪山ならむしろ強くなるから！」

「だといいけどね・・・」

「それじゃ、後は他の所で鉄鉱石を集めないとな・・・」

「それは俺が火山に行こう。そこならば鉱石が集まりやすいだろうしな。」

『一緒に行く！』

カクサスが火山に採石に行くと言い、ナデシコとリナトがついて行くと言い出した。

「・・・モスの皮が何枚か必要なのか・・・。確か沼ならばモスが大量にいる所があったはずだ、そこに我が向かおう。」

「私も行きます！」

「わ、私だって！」

アレックスが沼に行くことを提案、タリスとアルテアがついて行くと言う。

「あ、それじゃ私たち森丘に行くね。森丘じゃないと手に入らないものあるだろうし・・・」

「そうさせてもらいますね。・・・スバルと一緒にいけないのは悔しいですけど・・・」

シロン・ナコルを筆頭とした森丘チーム結成。

グループ分けは次のようになった。雪山…スバル・アイリス・ウィリア・サンナ・ダイアナ

火山…カクサス・ナデシコ・リナト

沼地…アレックス・タリス・アルテア

森丘…シロン・ナコル・イシア・ディルカ・ライラ

留守番…レノシア・アスカ（めちゃくちや不本意）・ローズ（果てしなく不本意）・カトレア・クリム・チェリムル（自己申告）

「み、皆さん、頑張ってくださいね。」

「き、気を付けてくださいね。」

「あ、アタシもハニーと・・・っ！」

「お、お兄ちゃんと一緒に・・・っ！」

「あんたらは黙っているっす。」

そして、それぞれの場所へ向かって行った。

「・・・その前に、これを渡しておく。全員一人は非戦闘員を連れて
いるんだから、万が一の時に備えて、だ。」

「分かった！」

「こちらは任せておけ。」

「我も心配せずともいいぞ。」

今度こそ向かって行った。

第一分隊・雪山編・・・

クエスト・・・雪山・素材ツアー

開始。

「さ・・・寒・・・」

「ダイアナ、ちゃんと防寒策とってないからだよ・・・」

「そうだよ。アイリスもあたしもちゃんと防寒してるんだよ・・・」
「？」

「さ、サンナはどんなのよ・・・うああ・・・寒いよお・・・」

「え、私？全然？薄着でも平気平気！」

ダイアナとサンナの違いが、今ここに出た。

「・・・ねえ、ちょっと思ったこと言っている・・・？」

「どうしたんだ、ウィリア？」

「・・・さっきからギアノスが一匹こっちを見ているんだけど・・・」

「
『え？』」

ウィリアが指差したところには、一匹のギアノスが・・・

スバルをじっと見つめていた。

・・・遠くから・・・。

（アイリス・・・ね、ねえスバル、あ、あれが『ストーカー』ってやつなの？）

（スバル・・・い、いや、まだ断定が出来ない。どうなのかがよく分からないから・・・。）

（ウィリア・・・じゃ、じゃあ少しは様子見るってことなの？）

（サンナ・・・よ、様子見！？で、でも、それって危なくないの？）

（ダイアナ・・・い、いざという時はアタシが皆を守る！・・・毒で！）

（スバル・・・毒は使うな！俺がどうにかする！）

こそこそ話していた。

彼らは雪山の採石ポイントについた。

(ウイリア…ね、ねえ、まだついてきているよ…)

(スバル…も、もうそろそろ困るんだがな…)

(ダイアナ…何もしてこないのが不思議なんだけど…)

未だ遠くからスバルだけをじっと見つめているギアノス。

「…ギアノスが出てきたか…!?」

「どうしたの？ スバル…って！ あのギアノス、仲間に襲われて
いるよ!?」

「とりあえず閃光玉でっ！」

スバルは襲っているギアノスに向けて閃光玉を投げた。

ピカッ！

「あっ！ いつもより眩しくない！」

「今度こそ何もないのか・・・!?」

光の量は抑え目なのだが・・・

「・・・ギアノスの群れはいるんだが・・・」

「襲われていたギアノスはいないね・・・」

ギアノスの群れの方も何がどうなっているのかが分からず、混乱していた。

「まずは・・・あのギアノスを掃滅する!」

スバルの声と共に、全員で突撃をした。

・・・が。

「かたかたかたかた・・・」

アイリスは動けない。

「ねえ、アイリスどうしたの!？」

「あの時の後遺症がまだ残っていたのか・・・っ!」

「アイリスはアタシを守る! 近寄ってきた奴はみんな死ぬわよ!」

ダイアナがギアノスに威嚇する。

「時間をかける必要はない! すぐに全滅させるぞ!」

そして、ギアノスを全滅させた。

「とりあえずあのギアノスを探さないと・・・」

「『吹雪』！」

『きゃああああっ!?!?』

突如として洞窟内に吹き荒れる吹雪。

これは外から流れ込んだ自然のものではなかった。

「・・・今の内に・・・」

その吹雪の中、聞こえる声。

「み、皆! 大丈夫か!?! うおわあっ!?!」

「スバル! スバルは大丈夫なの!?! ねえ!」

突如聞こえたスバルの声に突然不安になるアイリス。

数分後、吹雪が止んだ。

「やっと視界が・・・ああっ!？」

「ちょ、誰なのよあの娘!？」

アイリスたちの視界に映ったのは・・・

見ず知らずの女の子に抱き着かれ、押し倒されたスバル。

「やっと・・・やっと会うことができた・・・。こうやって話すこともできた・・・」

「ちょ、放してくれないか・・・」

「やだ・・・。会えなかった分と本当にしたかったことの分・・・」

スバルは完全に顔を赤くし、女の子は願いが叶ったと言うように幸せそうだった。

「ちょっとあなた!スバルから離れなさいよ!」

「やだ・・・」

「は・な・れ・な・さ・い・よ!」

「いや!・・・諦めないと凍ってもらう!」

「諦めるのはそっちでしょ!？」

「頼むから俺を解放してくれ・・・」

ここでまたスバル争奪戦勃発。

「あなたさつきからスバルを見ていたギアノスでしょ!？」

「・・・そう。」

「だったら離れなさいよこのストーカー女!」

「そっちこそ離れて・・・」

「・・・むうっ・・・」

激化するスバル争奪戦、それに参加できなかったアイリス・・・

「く、首が・・・」

「もおっっ!みんな離れてよおっっ!スバルが死にかけてるんだ
よおっっ!？」

ついにアイリスが声を荒げた。

「みんな勝手すぎるよ！スバルは私のなんだから！（ギュウウウウツ！！！！）」

「あ、アイリス、お前も・・・か、勝手・・・だ・・・」

ついにスバルも苦しみ始めた。

「お前ら！俺たちの目的は採石だろうが！」

『だって！スバルが取られそうだったんだもん！』

「君もあまり皆を刺激しない！その度俺が死にかけるから！」
「・・・やだ・・・」

『やだじゃない!』

「はぁ・・・とりあえず話し合いをしておいてくれ・・・。俺は採石するから・・・」

娘達を置いて、スバルは一人採石ポイントへ向かった。

「・・・くすん。」

「あ、アイリス?」

「私だけ貧乏くじ引かされた気がするよ・・・」

「・・・って!あの娘いなくなってる!」

『えっ!?!』

全員今の今まで女の子がいなくなっていることに気が付いていなかった。

「氷晶石・・・出てこい・・・氷晶石・・・出てこいっ！」

スバルは一人、ひたすら採石を繰り返してきた。

出てくるのはなぜか鉄鉱石ばかりだが・・・

そんな中。

「・・・人の気配・・・？」

スバルはふとした人の気配を感じ、それがあつた方向を向いた。
が、誰もいない。

「気のせい・・・か・・・」

そして作業を再開した。

その直後・・・

ムギユウッ！

「うわっ!？」

「えへへ・・・」

いつの間にかスバルの腕に抱きついていた女の子。

「き、君は・・・」

「私のこと・・・、プリムラって呼んで・・・」

「そ、それが君の名前なのか!？」

「うん・・・／＼」

「と、とりあえず離れてくれないか・・・？」

「・・・やだ・・・」

「離れてくれ、プリムラ・・・」

「・・・やっと名前を呼んでくれた・・・／＼」

「・・・まいったな・・・」

プリムラはスバルの腕を解放する気は全く無いようで、スバルは少しどうしようか迷っていた、

「だめええええええっ！（ガシムギュッ！）」
「ぐはっ！？」

突如スバルを襲う衝撃。

その衝撃の主はアイリスだった。

「スバルは、スバルは私のなんだからああああっ！（メシメシメシメシ・・・）」

「あ、アイリス、ほ、骨が・・・」

「この人は・・・私の・・・！（ミシミシミシミ・・・）」
「ぶ、プリムラも・・・や、やめ・・・」

現状、スバルは死にかけていた。

「ダメなのおおっ！（ドスッ！）」
「がっ・・・（メシッ・・・）」

思い切り叫びながら突撃し、スバルに抱き着いた。

同時に、スバルの骨が、悲鳴をあげた。

そんなこともお構いなしに・・・

「二人のものじゃないのっ！」

「・・・離れてよ・・・」

「やっ！」

更に追い打ちをかけるかのように・・・

「スバル、大丈夫なのっ!? (ガシッ!)」

「スバル! (ムギユウっ!)」

サンナ、ダイアナまで抱き着く始末。

スバルのことは、誰も考えていなかった・・・

『・・・スバル？』

全員が気がついた時、スバルの意識はとうに失われていた。

『い、いやあああああああああつ！！！！！！！』

全員の悲鳴がこだましていた。

ちなみに、その悲鳴で雪崩が起きることは・・・

なかった。

報酬。

入手

氷晶石×15

鉄鉱石×18

ギアノスの鱗×6

ギアノスの爪×5

ギアノスの皮×8

クエストクリア

氷晶石×5

鉄鉱石×3

その他

プリムラ。

アイリス、再び嫉妬。

スバル争奪戦、より激化する。

プリムラ、ストーリーだと判明・・・

第63話 改裝計画実行!

f i r s t

「改裝計画、ついに開始! 雪山編」

今回はプリムラの説明です。

プリムラ

ギアノス雌

身長156cm。

見た目14歳。

胸のサイズはC+。

ギアノスの中でもかなり特殊な力、『雪を操る力』を持つ女の子。
その稀有な能力のせいでギアノスから避けられていた。

スバルのことが好きだが、内気なところがあって、ストーカー紛いの行動をするようになる。

暑いのが苦手で、料理はまともにできない。

キャラクターモデルは『ロザリオとバンパイア』の『白雪みぞれ（長髪時）』

以上です。

次回は火山編、カクサス達が見た意外なものとは・・・？

お楽しみに！

第64話 改装計画実行! second 「火山編 迷いケルビの救出劇」

今回は火山組の話の64話です。

さてさて、どうケルビを助けるのか？

では、どうぞ！

第64話 改装計画実行! second 「火山編 迷いケルビの救出劇」

スバルたち雪山ツアー組が帰ってくるまでのカクサスたち火山ツアー組は・・・

火山..素材ツアー

開始。

「・・・よし！掘るぞ！」

「うん！頑張る！」

「ま、任せて！」

ナデシコはやる気を見せ、リナトは緊張しているかのような言い方をしていた。

そして三人で意気揚々と火山の中に入って行こうとした時・・・

「カクサス、何かあそこが騒がしいんだけど・・・」

「あそこが・・・？・・・っ！あれは！」

ナデシコが何かに気がついた。

ナデシコが差した方を見たカクサスはあることに気がついた。

「・・・なぜ火山地帯にケルビがいるんだ・・・？」

カクサスが見た先には、イーオスの群れに囲まれた、本来いるはずの無いケルビがいた。

「そ、そんなことよりも・・・た、助けなきゃ・・・」

「そ、そうだった！二人とも、迂闊に動くなよ！」

「わ、わかった！」

カクサスはナデシコとリナトに動かないように指示をし、ケルビを助けに行った。

カクサスがケルビを見つけた直後・・・

・・・プルプル・・・

ギャオオッ！ギャオオッ！

ビクッ！

イーオスが一声吠える度にびくつくケルビ。

『『地碎烈破』！』

突如として響く声。

そして揺れる地面。

結果、イーオスはその揺れに全員倒れ、起き上がった時に地面を殴った張本人を睨みつけた。

カクサスは睨みつけたイーオスを睨み返した。

「さあ、今すぐそのケルビから離れろ！さもなければ……すべて殺す！」

イーオスに向けて声を荒げる。

ギャオオオオッ！！！！

イーオスは突然カクサスに突撃を始めた。

・・・が。

それらはカクサスの動きを捉えられるわけがなく、カクサスはケルビを救出、いつの間にかナデシコとリナトの許にいた。

「二人とも、このケルビを頼む。足を怪我しているようだ。」
「わ、わかったよ。」

「う、うん。ナデシコ、早く治療をしないと・・・」

「・・・治療用の道具、ないよ？」

「包帯なら一応あるけど・・・」

ナデシコとりナトはケルビの治療を始めた。

「あの子を守る為だ・・・。覚悟しろよっ！」

カクサスは目晦ましの為の（スバル作）閃光玉を投げた。

カッ！

辺り一帯、閃光玉の光に包まれた。

その光は前の光よりは眩し過ぎないものだったが・・・

「えー!? こ、この子、なんで!? あ、あれ!?」

「ま、まさかこの子・・・ケルビ!?」

ナデシコ・リナトの許で何か異変が起こっていた。

「『滅龍撃』！」

ドゴオツ！

キュオオ・・・

一撃のもとにイーオスを沈めていくカクサス。

異変が起こっているとも知らずに、である。

「貴様が・・・最後の一匹だあっ！」

ゴシヤツ！

イーオスの頭を直接潰したカクサス。

その一撃で最後のイーオスは頭から血を噴き出し、絶命した。

「・・・怒りに任せてしまったか・・・。ナデシコ、リナト、どうだ・・・」

戻ろうとしてナデシコ達の方を見、カクサスは絶句した。

「あ、カクサス！この子いつの間にかいたの！」

「・・・（じーっ・・・）」

「・・・あ、あまり、み、見ないで、ください・・・／＼／＼」

リナトが『いつの間にかいた』女の子をじっと見ていたが、女の子が恥ずかしがってしまった。

「・・・まさかその子、あのケルビなのか・・・？」

「・・・そうみたい・・・」

カクサスは歩いてナデシコ達に近付いた。

「・・・どこかに川は・・・なかったな・・・。こんな手で誰かに

触るのはいけないだろうしな・・・」

「とりあえず、どうするの？」

「・・・一度帰った方がいいのかもしれない・・・。この子を連れてこのまま歩き続けるのはよくないしな・・・」

カクサスが顎に手を当てて考えていたら・・・

きゅっ・・・

「あ、あの・・・」

「ん？どうした？・・・というか、あまりこの手を掴んでほしくないのだが・・・」

女の子がイーオスの血で染まったカクサスの手を掴んだ。

「た、助けていただき、あ、ありがとう、ご、ございました・・・」
「・・・（じーっ・・・）・・・」

「り、リナト、どうしたの？」

「あの子、私よりスタイルがいいよお・・・」
「・・・そうだね・・・」

『くすん・・・』

ケルビの女の子のスタイルの良さに涙目になる二人。

「・・・それで、いつまで俺の手を掴んでいるんだ？」
「ふえっ！？そ、それは・・・あの・・・こ、こうしていると・・・心が落ち着くというか・・・安心できるというか・・・」
『！！』

女の子の話を聞いた瞬間、表情が驚愕に満ちた二人。

「・・・／／／」

女の子は手を握ったまま離そうとしない。

「・・・とりあえず名前を聞こうか・・・」
「え、あ！わ、私はニンフです・・・」
「ニンフ・・・か・・・脚を怪我しているようだし、一旦帰るか？」
「・・・そうしよう・・・」
「うん・・・」
「二人ともどうしたんだ・・・？」
『女の子の複雑な悩み・・・』
「・・・？」

二人の話がよく分からないカクサスだった。

報酬。

入手

イーオスの爪×4

イーオスの頭×2

イーオスの鱗×5

クエストクリア

クエストリタイアした為に無し。

その他。

ニンフ。

ナデシコとりナトに乙女の問題が発生。

ニンフ、カクサスのことが好き・・・のようだ。

カクサス、怒りに任せると暴走する傾向あり。

カクサスの方も恋愛戦争勃発の予感・・・？

第64話 改裝計画実行！

second

「火山編 迷いケルビの救出劇」

今回はニンフの紹介です。

ニンフ

ケルビ雌

身長150cm。

見た目16歳。

胸のサイズはC+。

臆病な性格、だが一途でつくすタイプ。

火山には道に迷ってきた。

名前の由来は睡蓮の学名、『Nymphaea Colorata』より。花言葉は『純情』

以上です。

そして前回忘れてましたプリムラの名前の由来ですが、同名の花、『プリムラ・ポリアンカ』より。花言葉は『無言の愛』です。

次回は沼地編、アレックス達に忍び寄る影・・・

お楽しみに！

第65話 改装計画実行! t h i r d 「沼地編 霞龍が悪戯をする理由」

今回は沼地編の65話です!

今回は霞龍がですが、その時にRー15入っちゃったので、覚悟
しててください。

では、どうぞ!

第65話 改装計画実行!

t h i r d

「沼地編

霞龍が悪戯をする理由」

沼地..素材ツアー

開始。

「我らはモスの苔皮を入手しなければならぬが・・・」

「・・・なんでモスの苔皮なの？」

「大量にいる、という問題はあるが、重ねれば防水性に優れるのだとか。」

「そうなのですか・・・。私はそんなもの必要ないですわ。」

「・・・なぜそう言うのだ？」

「アレックスと一緒にいられるのならは何だっていいんですわ・・・。
／／／

「ちょっと！独占はダメよ！」

「馬鹿らしい、放っておこう・・・。」

アレックスは言い合いを始めたタリスとアルテアを放置して先へ歩きだした。

沼地・・第二エリア。

「・・・アレックス、いましたわ！」

「よし！モスたちには悪いが大量に討伐するぞ！」

「分かった！」

三人がそんじょそこらを歩き回っているモスを倒し始めた。

このとき、何故かモスが大量発生していたのが救いだった。

「噴煙！」

「火炎放射！」

「えい！えい！えい！」

モスが大量に死んでいく。

数時間後・・・

「これだけとることができれば、改装時に屋根瓦の代わりとなろう。」
「そうですわ。私たちが頑張った愛の結晶ですもの、雨に負けることはないですわ!」

「・・・愛の結晶ってのは、子供のことだろうが・・・」

「そうだよ・・・。タリス、話が飛躍しすぎだよ・・・」

「あ、う・・・／＼／＼」

このとき、誰一人として三人に接近するものに気がつく者はいなかった。

「さあ、帰るか・・・」

「そうですわね・・・ひゃん!」

「ちよつとアレックス!なんでタリスの胸を触るの!?!」

「待て!俺の腕が届くというのか!?!距離的に不可能だろうが!」

「ちよつ、誰だか・・・やんっ!わかりませんが・・・ひうつ!や、止めくさいまし・・・ああん!」

「・・・本当にアレックスじゃないみたい・・・」

「じゃないみたいじゃなくて、じゃないんだ、と何度言われれば気が済むのだお前は!」

「ご、ごめ・・・ふあっ!?!」

「今度はアルテアなのか!?!・・・我は少しあちらを向いているから、どうにかしてくれ・・・」

「ちよっ！ふああっ！た、助けて！やんっ！何これ！あっ！そ、そこはダメえ！」

完全に何が起こっているのか分からない。

アレックスは二人を視界に入れないようにして思慮に耽っていた。

「姿が見えない・・・相手は分からないだろうが、大体推測はつく・・・。」

相手の正体を見破ろうとしていた。

「・・・閃光玉っ！」

アレックスはスバルから受け取った閃光玉を地面に叩きつけた。

「あ、あの時の光と違う！？これでは分からないのではないのか！？」

アレックスの心配御尤も、自分の時よりも光が弱かったからだ。

光がはれて・・・

「・・・いたっ！やっぱりお前か、オオナズチ！」
「びくっ！」

怪奇現象問題解決。

「・・・まずは話を聞こうか。一体何でこんなことをしたんだ？」

アレックスがナズチの女の子に話を聞く。

後ろではタリスとアルテアがダウンしていた。

「だって・・・寂しかったんだもん・・・」

「寂しかったからって悪戯したらいけないだろう!」

「だって・・・だってえ・・・」

オオナズチの女の子は涙目になっている。

「だって・・・なんだ?」

「私、他のオオナズチより小さくて弱かったから・・・、いじめられて・・・すん・・・」

「いじめられて・・・悪戯をするようになったのか・・・」

「ひっく・・・えぐ・・・」

涙をぼろぼろ零し始めるナズチの女の子。

「だったら、そのいじめた者を見返してやれるような力を得ることか、耐えることが必要だな。」

「でも、でもお・・・」

「見返してやりたいのだろう!? 力が欲しいのだろう!? だったらそれ相応の努力をしなければならぬ! 甘えるだけの者には力を得る資格など無いのだ!」

「えぐっ・・・」

「・・・だが、力になることはできる。我は、君が力を得る他の努

力に協力をしよう。」

「う、うう、うわああああああああん！」

ナズチの女の子はアレックスの優しさに号泣した。

「・・・落ち着くまでは暫くこうしていよう、
気の済むまで泣くが
いい・・・」

「ああああああ・・・」

数分後・・・

「・・・落ち着いたか？」

「うん・・・」

「まずは名前を聞きたい、名前が分からないと力になることすらままならない。」

「・・・アンリ・・・」

「・・・ふっ。いい名だ。」

「・・・ありがと・・・／／／」

「・・・とりあえずこの二人をどうにか連れ帰らないと・・・」

「私が手伝うよ。迷惑かけちゃったし・・・」

「そうしてくれると助かるな・・・」

アンリがアレックスについて行くことを決め、帰ることにした。

報酬。

入手

モスの苔皮×不特定多数
アオキノコ×不特定多数

クエストクリア

モスの苔皮×数量カウント不能
アオキノコ×数量カウント不能

その他

アンリ。

アレックス、真の王の発言をする。

タリス、アルテア、アンリの悪戯のせいで行動不能に・・・

第65話 改装計画実行!

t h i r d

「沼地編 霞龍が悪戯をする理由」

今回はアンリの紹介です。

アンリ

オオナズチ雌

身長143cm。

見た目13歳。

胸のサイズはB。

全長がナズチの中でもかなり小さく、仲間から虐めの対象として扱われていた。

悪戯をするようになったのはそれが原因で、『仲間を見返すため』やっていた。

アレックスに説教されたが、その内容に感化してアレックスに懐いた。

恋愛感情は皆無で、アレックスのことは『怖いけど優しいお兄ちゃん』と見ている。

名前の由来は『アンスリウム』より。花言葉は『無垢な心』

以上です。

- ・ 次回は森丘編、シロン達もまた、虐げられたモンスターを見つける・
- ・

お楽しみに！

第66話 改装計画実行!

f o r t h

「草原編

孤独のランポス」

(前書き

草原編の第66話です!

今回もまた新たに女の子が・・・な回です。

では、どうぞ!

第66話 改装計画実行! f o r t h 「草原編 孤独のランポス」

森丘..素材ツアー

開始。

「私たちはここでセツチャクロアリを大量に捕まえて、更に木を集めないと・・・」

「ベースとかは任せて!」

「私はデイルカと一緒にいるから・・・ね。」

「イシア、デイルカのこと、お願いね。」

「わかった、皆も頑張ってね!」

イシアとディルかを残し、ナコル・シロン・ライラは収集に向かった。

「あ、あの、セツチャクロアリはお願いします・・・」

「ナコル、なんで任せるって言うの？」

「あの、私・・・む、虫が苦手なんです・・・」

「・・・ライラは大丈夫？」

「・・・私も苦手・・・」

「・・・私が捕まえてくるわ。二人は木をお願いするわね・・・」

「・・・すいません・・・」

「お願いね・・・」

シロン側・・・

「虫取り網はちゃんとあるし、たっくさん採るわよっ！」

シロンはただ一人、のりのりで虫取りポイントに向かっていた。

木材収集組・・・

「虫って・・・何よお・・・」

「・・・とりあえず虫関係なくて良かったですよ・・・」

二人は何気に嘆いていた。

「今頃スバルはどうしているんでしょうか・・・」

「私に聞かないでよ・・・」

「誰かまた増えていたらどうしよう・・・」

心配が強まっている。

ベース組は・・・

「・・・イシアお姉ちゃん、平和だね・・・」
「・・・そうだね・・・」

平和を満喫していた。

「・・・？何の音だろ・・・？」

「どうしたの？」

「音が聞こえるの・・・。誰かが誰かを叩いたり何かを切り裂くような音が・・・」

「デイルカ！危ないよ！？」

「だけど！泣いてるような気がするの！」

デイルカは走り出してしまった。

「ちょっとデイルカ！危ないから！」

イシアもディルカを追いかけて走り出した。

「はあ、はあ、はあ・・・や、やっぱり・・・」

ディルカが見たものは、大量のランポスに攻撃を受けているランポスだった。

「ディルカ、一体どうし・・・」

イシアもどうにか追いついて、その光景を見た。

「・・・ひ、酷い・・・。同じ種族なのに・・・」

思わず口を押さえてしまうイシア。

「イシアお姉ちゃん、どうにかして助けられないかな・・・？」

「・・・スバルから閃光玉をもらったけど、そんな簡単に使えないからね・・・」

「人になっちゃったら大変だもんね・・・」

すかさず行動するわけにはいかないため、迂闊にはうご・・・

「ダメえええええええつ！」

・・・けないわけだが、動いていた。

「ディルカ、行っちゃダメ！危ないから！あたしたち戦えないんだから！」

「くけど！助けないと！このままだったらあのランポス死んじゃうよ！>

「だけど・・・！」

<わあああああああああ！！>

「ダメ、私じゃ止められない！やられているランポス、ゴメン！」

イシアはディルカを助ける為、渡された閃光玉を投げた。

「ディルカ、待ってて！今行くから！」

イシアもランポスを助けに向かった。

結果・・・

「ディルカ・・・」

「イシアお姉ちゃん・・・」

「助けたのって女の子じゃなかったよね・・・」

「うん、ランポスだった・・・」

「けど、ランポスがいたところにいたのは・・・」

「女の子だったね・・・」

ランポスを助けたはずだったが女の子だった。

「とりあえずベースに連れてきたんだけど・・・、どうしようか・・・」

「皆が戻ってくるまで待と・・・？」

イシアとディルカは二人でベース待機を始めた。

数分後・・・

「んう・・・アレ・・・？私・・・」

「あ、眼が覚めた？」

「あ、えつと・・・ここは・・・？」

「ベースキャンプだよ・・・」

「・・・と、言うことは・・・、私・・・助けてもらったんですか・・・？」

「・・・そういうことになるね。」

「あ、ありがとうございます！」

女の子に突如として頭を下げられる。

「あ、あの、頭を下げられても・・・」

「そ、そうだよ・・・、そんなお礼を言われるようなことは・・・」

「で、でも、助けてもらったし・・・」

何気に言い争いのことが勃発。

「・・・皆、どうしたの？・・・ていうか、その娘誰？」

ライラがベースに戻ってきた。

「えっと、実は・・・」

イシア説明中・・・

「・・・というわけなの。気がついたのはデイルカで、こうなっちゃったのはあたしのせいで・・・」

「・・・とりあえず理由は分かったけど・・・」

「あれ？ナコルお姉ちゃんはどうしたんですか・・・？」

「木材を交代で運んでいたら今力尽きて倒れてるの・・・」

「ベースの近くだよね？」

「一応・・・。そう言えば、その娘、名前は・・・？」

「あ、聞いてないや・・・」

「えと、私、クロスです。」

「クロス、なんで同じランポスにあんなにいじめられていたの・・・？」

ディルカがついそういうことを聞いた。

「・・・実は私、ランポスの中でもちよつと特殊なランポスなんです・・・」

「特・・・殊？」

クロスの口から発せられた『特殊』という台詞に疑問を持つしかなかったイシア。

「はい。他のランポスよりも察知能力が強くて、少し・・・超能力、
と言うのでしょうか・・・？それが使えるんです・・・」

『超能力！？』

「はい・・・。他者の心を読むことができたり、何か軽い物を浮か
ばせることができるくらいのものですが・・・」

「・・・そのことを妬んでの・・・ね・・・」

「それで、ずっと一人だったの・・・？」

「はい・・・。誰も私を庇ってくれるランポスはいませんでした・・・」

・
」

「そんな・・・」

「うう・・・」

涙を流すクロス。

「・・・クロス、ごめんね・・・？」

「い、いいんです・・・ぐすっ・・・」

嗚咽交じりに返答する。

「クロス・・・だっけ？これからどうするの？」

「ど、どうしましょう・・・」

『な、何も考えてなかったんだ・・・』

「・・・それじゃ、一緒に来るのはどうかしら・・・？」

「・・・え？」

「いろいろ言えることなんだけど、このまま戻っても人と思われるだろうし、聞いていた通りだといじめられていたみたいだし・・・」

「その方がいいかもしれないね・・・」

「え、でも・・・」

「私、実はそんなことにムカついていたの！」

「まずはシロンを待っていて帰ろ？そしてスバルに意見を聞かないと・・・」

ナコルはダウンしており、シロンはまだ戻ってきていなかった。

「それよりも誰か帰ってきたら助けを求めたらどうなのかしら・・・？」

「って！シロン！いつの間に戻ってきたの！？」

「『スバルに意見を聞かないと』ってイシアが言っていた時よ。」

「な、なんとか復活しましたあゝ・・・」

シロンの後ろにはナコルもいた。

「とりあえず、一度は帰らなきゃ・・・」

「わ、私も手伝います！」

クロスが一緒に来ることが決まった。

クロスを虐めていたランポス達は後に、電撃によって壊滅させられたと言われている・・・

報酬。

入手

セツチャクロアリ×50（シロン大量乱獲）
木材×25

クエストクリア

アオキノコ×3

その他

クロス。

ディルカ、正義感が強い子だということ判明。
イシア、少し心配性なところあり。

第66話 改装計画実行!

f o r t h

「草原編 孤独のランポス」

(後書き

今回はクロスの紹介です。

クロス

ランポス雌

身長151cm。

見た目14歳。

胸のサイズはC。

水色の髪の毛で、ツインテールにしている(決して彼女はツンデレではない)。

超能力を持っていて、『人の心を読む』・『(ある程度の重さまでは)物を持ち上げる』ことができる。

普段は敬語。

奥手なところもあるが、意外と行動派。

以上です。

次回は全員が戻ってきます！

そして・・・スバルがついに決心を・・・！？

お楽しみに！

第67話 改装計画実行! final 「帰宅編 乙女の恋愛戦争激化、スバル

スバルがついに決断を下した67話です!

皆が再び集まって、さらに激化するスバル争奪・恋愛戦争の決着か・

・・?

では、どうぞ!

第67話 改装計画実行!

final

「帰宅編 乙女の恋愛戦争激化、スバ

スバルの家では・・・

「大丈夫でしょうか・・・」

「それは・・・私にもわかりません・・・。無事だといいいのですが・・・」

ナデシコとカトレアはスバル達を物凄く心配していた。

「(はらはら・・・)」

「(どきどき・・・)」

「・・・うあああああっ!心配ですのおおおおっ!!」

「クリムう!行かせて!お兄ちゃんの所に行かせてよおっ!」

「ダメだって分かってほしいっす!死に行く気っすか!??」

『いーかーせーてー!』

二人がドキドキハラハラしながら待っている間、クリムはローズとアスカの歯止めに躍起になっていた。

「お願いだから早く帰ってきてほしいっす」(ガチャッ)・・・誰か帰ってきたっす!」

クリムがドアの開閉音に気付き、すぐにドアに向かった。

「あ、カクサス！おかえ・・・その子、どうしたっすか？」

「クリム、お前は堂々と年上に『その子』と言えるな・・・」

カクサスたちが帰ってきた。

「お兄ちゃん・・・その人、もしかして・・・」

「いや、そういうわけでは・・・」

カクサスはしどろもどろになって答えるが・・・

バチバチバチバチバチッ！

ナデシコ、リナト、アスカ、ニンフの間に火花が散っていた。

「カクサス、凄い混戦状態なのは気のせいじゃないみたいっすね・・・」

「何故だ・・・何故こんなことになるんだ・・・」

カクサスは現状に嘆いていた。

四人が火花を散らしていた時・・・

「たっだいま〜！・・・って、なんでこんな修羅場ができあがっているの？」

シロンたち森丘組も帰ってきた。

「シロンたちもまた増えて帰ってきたみたいっすね・・・」

「『また増えて』って・・・まさかカクサスたちも増えたの？」

「そうみたいっす。それでこんな修羅場が発生しているという・・・」

「

「はぁ・・・。ところでスバルはまだなの？」

「まだっすけど・・・、何かあったんすか？」

「そうなの。相談したかったんだけど・・・」

「もうそろそろ帰ってくると思うっすけど・・・」

クリムとシロンがそう話していて、イシアとデイルカが修羅場に呆

れて見ていたら・・・

バン！！

「うおおおおおおお！！！！」

スバルがドアを蹴破って入ってきた。

「あ、スバル！ちょっと話が・・・」
「後で聞く！今は隠れさせてくれ！」

慌てて階段を駆け上って行くスバル。

「・・・一体何があったのかしら・・・」

「アタシにもわからないっす・・・」

スバルを呆れてみていた二人だが、この後の事態に呆然としてしま
う。

「スバルうううううっ！！！！」

「待ってえええええっ！！！！」

アイリスとウィリアがそのままの勢いで家に突撃、スバルの部屋に
駆け上がって行き・・・

「アイリス！ウィリア！抜け駆けは許さないわよ！」

ダイアナがその後を追いかける・・・

「スバルは私のものだ・・・」

氷の道を作って高速で女の子が突っ込んできて・・・
プリムラ

「み、皆あゝ、ま、待って、待ってゝ！」

サンナが息絶え絶えに入ってきて、その直後、倒れた。

「ね、姉さん！い、一体何があったの！？」

今の光景を見て、焦りを感じ始めるイシア。

「だ、ダメ、このままじゃ、スバルが、スバルがあ・・・」

「スバルがどうしたの！？」

「プリムラに取られちゃう・・・」

「プリムラって誰！？」

「うわああああああ！！（ズデン！ボタンゴロン！ドシャアツ
！）」

イシア、シロンがサンナに問い詰めていたら、スバルが階段を転げ落ちていた。

『スバル！プリムラって誰なの！？』

「あ、ぐ、まだどこかやったか・・・、つかそれを話している時間は・・・『きゃあああああ！！』しまっ・・・」

スバルがどこかを打ったため呻いていたのが時間をかけてしまい、上からアイリスとウィリアの悲鳴を聞く羽目になった。

そして・・・

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ！

二人も階段を転がり落ちて・・・

ドシイイイイイイイイイイン！！！！

衝突した。

「痛た・・・、あっ！スバル、良かった！誰にも捕まっていなくて！
(ギユウウウウウウ！)」

「よかったぁっ！」

「だ、だから・・・思い切り抱き着くな・・・」

アイリスが抱き着き、苦しむスバル。

「アイリス、ウィリア、すぐにスバルから離れろ・・・」
『やだ!』

「離れないと凍らせる・・・!」

「今凍らせたらスバルも凍るよ!」

「一緒になれるならスバルも凍らしてもいい・・・」

「過激発言ダメ!」

デイルカがどうにか仲裁をしようとする。

「ちょっと!スバルは私のものなのよ!?」

「違う・・・!私のだ!」

「わ、私のです!」

「だ、ダメですよ!」

「み、皆さん落ち着いてください!」

戦争が激化していく・・・

そんな中、クロスはスバルをじっと見ていた・・・

「・・・クロス、どうしたっすか?」

「っ!?な、何でもないですよ!?」

「・・・かなり挙動不審な行動をしているっすけど・・・」

「そそそそ、そんなにやこちよにやいでしゅよ!？」

「噛み噛みっすよ？」

「だだだだ、だから、そんなにやこちよにやいでしゅかりや! (訳..そんなことないですから!)」

「だから、噛みまくってるっす・・・」

かなりテンパっている状態のクロス。

そして・・・

「ど、どうにか脱出した・・・ん？」

「・・・／／／」

「どうしたんだ・・・、というか君は？」

「わ、私、クロス、と言います・・・／／／」

「・・・どうしたんだ？ 顔が赤いんだが・・・。熱でも出たか・・・？」

「くくくっ!! (ギュッ!)」

「っ!？」

いきなり腕を抱きしめるクロスに驚くしかないスバル。

「あっ！あの子に抜け駆けされる・・・！」

アイリスがクロスのことに気付き、戦線を抜けた。

「ダメなの！スバルは、スバルはあゝっ！」

「ゝゝゝっ！（ブンブンブン！）」

「痛い痛い痛い痛い痛い！！！」

アイリスとクロスが両側に腕を引っ張っている状態、スバルとしてはかなり痛い。

「・・・一体何の騒ぎなのだ・・・？」

大戦争の合間にアレックスが帰ってきた。

「・・・アレックスもまた・・・」

「我も驚きなのだが、えらく懐かれてな。」

「・・・ねえ、何が起こっているの、『お兄ちゃん』？」

「・・・アレックス、そんな趣味があったっすか？」

「否！断じて否！そう言わせてもらう！」

アンリがアレックスを『お兄ちゃん』お兄ちゃんと呼んだことに若

スバルの悲鳴が家の中にこだました。

その夜。

「・・・」

スバルは空を眺めていた。

業者に頼んできて、作業は翌日の昼から行うと言われた。

「スバル、どうしたのだ？」

「珍しいな、スバルが空を眺めてぼうっとしているというのは・・・」

「・・・俺、決心したよ・・・」

突如告げるスバル。

「・・・一体何の決心なのだ？」

「・・・明日、告白する。遅くなってしまうたけど、俺の、正直な
思いを伝えるよ・・・」

「本当なのか!？」

「・・・それは誰なんだ!？」

「明日二人きりになりたいから、協力を頼めるかな・・・？」

「わかった、それで、誰となのだ？」

「それは・・・」

スバルはカクサス・アレックスに誰と二人きりになりたいのか、を伝えた・・・

入手・クエストクリア

クエスト帰還状態のため無し。

その他

恋愛戦争激化。

クロス、スバルに一目惚れする。

アレックス、アンリに『お兄ちゃん』と呼ばれる。

第67話 改装計画実行! final 「帰宅編 乙女の恋愛戦争激化、スバ

まずはクロスの名前の由来ですが、クロッカスで、花言葉は『切望』です。

今回、ついにスバルが告白の意思を!

相手は・・・誰か!?

刮目して次回を待て!

第68話 スバルの告白、告げられた事実と悲しき別れ、終わらないスバル争奪

今回は一部ハンカチの用意が要るかもしれませんが！それだけ泣ける
ところがあります（私自身、執筆していて泣きかけました）！

驚愕の事実、スバルの告白・・・

色々あります68話、どうぞ！

第68話 スバルの告白、告げられた事実と悲しき別れ、終わらないスバル争奪

家の改装を業者に任せることがどうにか出来て、暫く家を離れることになった。

そのため、適当なクエストを受けて一週間出かけることにしたスバル達。

開始。

「適当にクエストを受けたわけだが・・・」

「初めてのことじゃないのか？クエストの制限時間が全くなく、無制限にやれるのは・・・」

「それよりも・・・」

「どうしたんだ、シロン？他多数も・・・」

シロンを筆頭にいらしている娘達。

『どうしてアイリスがスバルと一緒にクエストに出かけているのよ！？』

その叫びは・・・嫉妬？

「抜け駆けは・・・許さない・・・！」

「カクサス！スバルから何も聞いてないの！？」

「あ、『アイリスと話があるから』と聞いたただけだ・・・」

「で、どのクエストに行ったのかわかりますか！？」

「全く知らん・・・」

カクサスが被害に遭っていた。

「ふ、二人とも！あまりカクサスを揺すらないで！」

「そ、そうですよ!」

ナデシコとニンフが制止をかけようとしたが・・・

止まらなかった。

「あわわ・・・あわわ・・・」

リナトはただただ慌てるしかなかった。

スバル・アイリス側は・・・

氷点下の支配者

受領中。

「ね、ねえスバル、なんで私と二人きりで……？」
「……ちよつと言いたいことがあってな……／＼／＼」

つつい顔が赤くなるスバル。

（アイリス…ど、どうしたんだろ、スバルの顔が赤いし、二人きりなんて……。も、もしかして、こ、これって、ででで、デート！？）

そんな光景を見てアイリスもつつい顔を赤くしてしまう。

「そ、それでスバル、言いたい事って・・・」

「あ、あまり連続して言いたくないことだから一回しか言えないけどな、今まで一緒に暮らしてきて言いたいことができた・・・」

スバルは一拍置いて・・・

「・・・俺は、アイリスが好きだ・・・／／／」
「っ!」

スバル、アイリスに告白。

「・・・今まで言えなくて、すまなかった・・・」

「・・・ううん、いいよ・・・。・・・ぐすっ・・・」

「本当に・・・すまなかった・・・」

「いいの・・・。私の、私の恋が・・・ひっく、叶ったから・・・」

スバルはアイリスを抱きしめ、アイリスは泣いていた。

数分後・・・

アイリスは泣き止み、スバルに思ったことを言った。

「スバル・・・、本当に私でいいの・・・？」

「アイリスだから・・・な。そうじゃなかったら告白してないって・
・／／／」

「はうう・・・／／／」

お互いに顔を赤くしている。

「それで、なんでこのクエストを選んだの・・・？」

「実はな、シャルナに師から独立する時に『彼女ができたら紹介する』と言っていたしな・・・」

「私が彼女、私が彼女・・・」

アイリスは今回の二人きりクエストの目的に緊張していた。

「シャルナって・・・誰？」

「・・・まあ、俺の師の・・・嫁と言うべきか・・・、言えるのはクシャルダオラだったな。」

「私と同じように人になって、スバルのお師匠さんが好きになった・・・と言うことなの？」

「そういうことになるな。小さい頃に親を亡くした俺にとっては師が父親でシャルナが母親みたいなものだったよ・・・」

「・・・大丈夫かな・・・」

「シャルナは優しいからな・・・。俺の好きな人に酷いことはしないだろ・・・」

「えへへ・・・デートみたいだね・・・／／／」
「・・・だな。」

二人は手をつないで目的地に向かっていった。

ツアー組の方では・・・

「そう言えば、プリムラとクロスがいなくなってるっすけど・・・」
「なっ!？」

「い、いつの間になくなってるんですか!？」

「と、とりあえず二人を追わなきゃ!」

『いや、それは困るのだが・・・』

『どうしてなのよ!』

「いや、それは、その・・・」

カクサス・アレックスは娘達に言い迫られていた。

その頃・・・

「ぷ、プリムラさぁーん！は、速、速すぎますぅーっ！
「・・・そんなことは言っていない・・・！」
「そ、それでも・・・！」

「スバルを・・・渡すわけには・・・！」

必死になってスバル達を氷の道を作ってそれを滑って追いかけるプリムラとそれに掴まっているクロス。

スバル達は・・・

「・・・シャルナ！」

「その声は・・・スバル・・・」

「・・・3年ぶりだな・・・」

「そうね・・・。ここに來たってことは・・・」

「・・・約束、果たしに來たよ。」

「では、あの子が・・・、あのピンク色の髪の毛の女の子が・・・」

「・・・俺の、彼女だ。」

「ああ・・・本当に・・・本当に・・・」

シャルナは感極まって涙を流していた。

「あ、あの、えと・・・」

「あなたがスバルの彼女さんなのね・・・」

「あ、えと、その・・・はい・・・／／／」

「・・・スバルを、よろしくね・・・？」

「・・・はい！」

なぜか力ない言い方のシャルナ。

「シャルナ、どうかしたのか？」

「・・・実は私、もう先が長くなって・・・」

「・・・まさか・・・」

「そのまさかなの・・・。私の命も持って後1時間・・・、最期にあなたの恋人を見ることができてよかったわ・・・」

「嘘だろ！？嘘だと言ってくれ！」

「嘘じゃないの・・・、一週間前にそう言われてきたから・・・」

「そんな・・・」

シャルナの寿命がそんなに長くないことが判明、その事実を認めたくないスバルだが、認めざるを得ない状態にアイリスは涙を流す。

「それに・・・あなたは罪な男なのですね・・・」

「ど、どういう意味だよ・・・」

「今この場に二人・・・、あなたを追ってここに来ましたから・・・」

『はあっ!?!』

シャルナが告げたことに驚きを隠せない二人。

「二人は雪の力を持った女の子、一人は超能力を持った女の子・・・、二人ともあなたのことが・・・げふっ!」

「シャルナ! 喋るな!」

「・・・最後に・・・、あなたに本当のことを話さないといけないの・・・」

「本当の・・・こと・・・」

シャルナは最後の力を振り絞って起き上がり、スバルを見据えた。

「・・・あなたの両親は・・・、あなたが『師』と仰いでいた人と私なの・・・。あなたは・・・モンスターと人間のハーフ、と言う

ことになって、その力はあなたの父親から受け継がれた力・・・」
『っ!?!』

衝撃の事実、スバルの両親がスバルの師とシャルナだということに驚きが隠せないスバルとアイリス。

「本当・・・なのか・・・!?!」

「今、まで・・・黙ってて・・・ごめ・・・ん、な・・・さ・・・」

鳴咽交じりに謝罪をするシャルナ。

「喋らないで!シャルナ!」

「・・・最期に・・・私の望みを・・・叶えさせて・・・」

「できることなら・・・できることなら!だが・・・!」

「良いの・・・。もう長くないようだから・・・」

「それを言わないでくれ!『母さん』!」

「・・・ありがとう・・・、最期に『母さん』と呼んでくれて・・・」

「黙っていても・・・、どんなことがあっても・・・、母さんは母さんだろ・・・?」

「・・・(ぽろぽろ・・・)」

スバルとシャルナが再び親子の関係に戻った瞬間、アイリスは泣いていた。

そのままスバルを抱きしめたシャルナ。

だが・・・

抱きしめている時に感じられた力がふっと抜け、腕がだらんと垂れさがった。

「・・・母さん！？母さん！目を覚ましてくれよ！おい！」
「・・・え？」

「母さん！かあさああああああん！」

スバルの声が辺り一帯に響き渡った。

「スバル……」

「……わかってるさ、母さんは死んでしまったんだ……」

「どこかに……埋めてあげよ……？」

「ああ……、師の、父さんの墓のある場所に……」

「でも、幸せそうな顔だったね……」

「……最期に息子と会えて、母さんと呼んでもらえたんだ、どれほど幸せだっただろうか……」

二人が引き返そうとした時……

「スバル！大丈夫か！？」

「す、スバルさん！どうかしたんですか！？」

「プリムラ……、クロス……」

プリムラとクロスがスバル達の目の前に現れた。

「・・・その人・・・誰？」

「俺の・・・母さんだ・・・。もう死んでしまったけどな・・・」

「・・・そんな・・・」

「・・・でも、幸せそう・・・」

「・・・二人とも、手伝ってくれないか・・・？」

「いいよ・・・」

「はい・・・」

「・・・アイリス、手伝ってくれ・・・」

「うん・・・。私も手伝わなきゃいけないよ・・・」

そして、四人でスバルの師一父一の墓に向けて歩き出した。

スバルの父の墓・・・

「母さん、父さんの墓まで来たぜ・・・。二人でゆっくり眠ってくれ・・・」

「お義母さん・・・、おやすみなさい・・・」

四人で墓を造り、スバルの父の墓の隣にシャルナを埋葬した。

「・・・スバル・・・、最期の最期で孝行できた・・・？」

「したよ・・・。親として今までできなかったことをしてあげたよ・・・」

「そうですか・・・。幸せそうな顔をしていた理由がわかりました・・・」

「母さん、さよなら・・・」

スバルは二度と覚めることのない眠りについたシャルナに別れを告げ、その場を去って行った。

その帰路・・・

「スバル・・・、アイリスと何かあったの・・・？」

「・・・正直に教えてくださいよ・・・」

「そ、それは・・・」

「私から言うね・・・。私、スバルの彼女になったの！」

『そ、そんな！？』

アイリスの発言に半分涙目になる二人。

「撤回して！スバルの彼女は私なの！」

「違いますよ！私のです！」

「ちがうよ！スバルは私に直接好きだって言ってくれたもん！」

「本当なの・・・？」

「あ、ああ・・・」

「・・・無理やり私のものにする・・・！」

「だ、ダメえっ！そんなの許さないからね！」

「~~~~！（ギユウっ！）」

「クロス、抱きついちゃダメ！」

「・・・俺、アイリスに告白した訳なんだが・・・大問題に発展した気がする・・・」

スバルの眩きは、誰にも届かなかった・・・

そしてその夜、改装が済んだ家で・・・

『アゝイゝリゝスゝ（さゝんゝ）！？』

「え、えっと・・・な、なに？」

「抜け駆けなんてするんじゃないの！」

「そうですよ！抜け駆けなんて！」

「ぬ、抜け駆けじゃないよ・・・スバルが・・・自分から告白してきたんだもん・・・／＼／＼」

『・・・スバル（さん）！』

「な、なんだ！？」

『（私／あたし／アタシ）に好きって言って（ください）！』

「無理な話だ！俺はアイリスに・・・ぐおっ！？」

『アイリスじゃなくて（私／あたし／アタシ）にいゝっ！』

「み、皆あ！諦めてよお！私はスバルから告白されたんだよ！？そんな無理やりじゃなくて！」

『それでも！スバルは（私／あたし／アタシ）のものにしたい！』

「頼むからみんな退いてくれ・・・く、苦し・・・」

「スバルは私のなんだからあゝっ！」

『ちがゝうっ！』

スバルが告白したが故に終息したと思われたスバル争奪戦は、一向に終わりを見せなかった。

報酬。

入手

改装済みの家。

スバルの両親の存在。

素材ツアー組はいろいろ入手。

クエストクリア

素材ツアー組はいろいろと。

その他

アイリス、はれてスバルの恋人に・・・？

スバル、自分の師とその妻が両親だと判明。同時に母親を失う。
恋愛戦争、終戦を迎えず。

スバルとアイリス、シャルナ公認のカップルに。

第68話 スバルの告白、告げられた事実と悲しき別れ、終わらないスバル争奪

今回はスバルの母・シャルナの紹介です。

シャルナ

クシャルダオラ雌

身長152cm。

見た目は24歳。

スバルの実の母。

スバルの師とは17の時に会う（人になる）。

最初はソリが合わず、対立もしていたが徐々に打ち解けて、最後には結婚、スバルを産んだ。

スバルが2歳の時に一時期姿を眩ましていたが、理由在りで、大型モンスター討伐で色々あった為。

スバルが8歳の時に再会。

15で再び別れ、翌年『銅壊病』（クシャルのみに発病する。不治の病）に罹り、動けなくなっていた。

最期に心残りであった『真実を伝えること』が達成でき、そのまま息を引き取った。

享年38歳。

以上です。

次回は・・・

「あたしも迷惑かけちゃった・・・」

う、ウィリア！？

「傍にいただけでいいって言ったのに・・・」
・・・そんな回です。

お楽しみに！

第69話 スバル告白後の初日、激化した争奪戦 戦いの方法は・・・料理!?

スバルを諦め切れなくなった娘達が行動してしまう69話です!

プリムラに大きな変化が・・・!?

では、どうぞ!

第69話 スバル告白後の初日、激化した争奪戦 戦いの方法は・・・料理!?

「スバルっ!」

「お、おおアイリスか、どうしたんだ?」

「ちょっと失敗しちゃったんだけど・・・、卵焼き、作ってみたんだ・・・。た、食べてみてほしいんだけど・・・／＼」

アイリスがスバルに食べてもらいたがっていたのは、ちょっと形の崩れた卵焼きだ。ちょっと失敗した、と本人は言っているものの、形が少し崩れたくらいで他にはミスは見られない。

「卵焼きか・・・さて、どこまで上達したか・・・」

「ときどき・・・ときどき・・・」

スバルが卵焼きを口に運び・・・

「・・・おお、中々美味しいじゃないか!」

「ホント!? 嘘じゃないよね!？」

「嘘じゃないって。まあ、ほんの少し醤油の味が濃いような気がするけどな。」

「よかった・・・」

端から見ればどうと言うこともない風景だが・・・

「アイリス・・・羨ましいよお・・・」

「うう・・・」

「アイリス・・・私を差し置いてスバルと甘々な生活なんて・・・」

感覚的に『スバルにフラれた』乙女達はアイリスを妬んでいたり泣き崩れていたりした。。

「私のスバルを・・・私のスバルを・・・」

「アイリス・・・、アタシはまだスバルをあきらめたわけじゃないからね・・・」

「こ、これも・・・私の・・・不幸なの・・・？・・・ぐすつ・・・」

「チェリムルさん、あなただけの不幸じゃないですよ・・・」

「スバルが好きな人全員の不幸ですよ・・・」

『しくしくしく・・・』

「・・・アイリスからどうにかスバルを取り返さないと・・・」

「だったら！アイリスよりも美味しい料理を作ることができれば取り返す子もできますよ！」

「・・・そうですね！そうすれば・・・」

「・・・皆、私に酷いことを言う・・・。ぐす・・・」

「ぶ、プリムラ・・・？いきなりどうしたの・・・？」

突如として泣きだしたプリムラに、焦り始める面々。

「私・・・、熱いのが苦手なんだ・・・」

「熱いのが・・・苦手・・・」

「・・・（ニヤリ）」

プリムラが苦手なことを言った瞬間、顔をにやけさせたシロン。

「・・・一体何？顔がにやけてるけど・・・」

「別にいゝっ？プリムラにそんな弱点があったなんてねえ・・・」

「シロン・・・悪い？」

「・・・シロンが黒いです・・・」

「・・・怖いよ・・・怖いよお・・・」

顔がにやけているシロンに引き気味になったレノシアとチェリムルだった。

「アイリス・・・覚悟しなさいよお・・・！」

「っ!?(ぞくうっ!)」

「アイリス、どうしたんだ?」

「今、寒気が・・・」

シロンの脅しともとれる声に寒気がしたアイリス、スバルはそのことが少し気になった。

「・・・どうしよう・・・、私には料理なんて・・・」

プリムラは落ち込んでいた。

シロンやナコルは余裕そうな顔をしていたが、自分には料理が出来ない。

・・・否、熱に非常に弱い体質上、火の近くに立っていることができないのだ。

「・・・私に出来る料理・・・そんなの無いよね・・・」

プリムラは一人落ち込んでいた。

そんな時。

「プリムラ、どうしたの？」

「タリス・・・」

プリムラは急に名前を呼んだタリスに目を向けた。

「どうしたのよ、スバルのことで何も行動をしないなんて、貴女らしくないですわよ？」

「・・・今度、スバルを賭けた料理対決をすることになったんだけど・・・」

一拍置いてプリムラが言う。

「私、熱に弱くて、火の近くに10秒もいられないの・・・」

「そう・・・。それでもスバルをあきらめたくない気持ちはある・・・でよろしいのですの？」

「うん・・・」

「なら、火を使わない料理をすれば、全く問題はありませんわ!」

「火を・・・使わない料理・・・?」

「そうですわ。それならば貴女も苦しむことはないはず!」

「・・・うん! やってみる!」

タリスに言われ、やってみることを決意したプリムラ。

・・・向かったのはキッチンではなく、自分の部屋だったが・・・

シロン達は、何を作るか迷っていた。

プリムラは自分が唯一作れる『火を使わない料理』を考えていた。

アイリスは・・・

「♪」

「あ、アイリス、あまり抱き着いたりしないでくれ・・・」

「いやなの・・・？（うるうる）」

「嫌じゃないんだが・・・その・・・恥ずかしいんだ・・・／＼／＼」

「でもでも、私たち・・・その・・・ね？／＼／＼」

「・・・二人とも、アタシがいること忘れないでほしいっす・・・。
と言うか、空気が甘すぎるっす・・・。」

クリームがいるのにも関わらず、糖分を撒き散らしていた。

翌日・・・

「アイリス！私たちと料理で勝負して！」

「ふえっ！？り、料理で！？・・・と言うか、なんで！？」

「私たちだって・・・スバルが好きだから・・・、諦められなかつ

たから・・・」

「だから、アイリスからスバルを奪おうって決めたの！」

「だ、ダメ！そんなことしてもダメだからね！？」

「でも力づくじゃなくて、魅力で奪おうって話で・・・」

「魅力・・・？」

「だから、料理で！」

「ふええええ・・・」

アイリス、折角スバルと恋人になれたのにも関わらず、ライバル未だ健在。

「・・・ところで、プリムラがいない気がするんだけど・・・」

「・・・なんででしょうか？」

「私、知ってましてよ？」

「タリス？」

タリスの発言に一斉にタリスを見る娘達。

「プリムラ、どうしているの？」

「プリムラは・・・、『自分にしか作れない料理』を考えていますの。それも、とびっきりの・・・ですわ。」

「『自分にしか作れない料理』・・・」

愕然としている娘達。

「と、とりあえず勝負よ！」

そして娘達は別れた。

「あわわわ、ま、負けていられなくなっちゃったよおゝ・・・」

アイリスは慌ててキッチンへ走って行った。

そのころのプリムラは・・・

「炎を使わない料理と言っても、私自身が何か変わらないと・・・。
せめて、せめてカレーでも・・・。」

プリムラに固い意志が宿った。

シロン・・・

「さって、私はスバルがよく食べている料理を作ろっ！」

シロンはスバルが好んで食べる料理―焼き魚―を作ることにした。

ナコル・・・

「私は・・・そうだ、卵焼きを作りましょう！」

ナコルは卵焼きを作ることにした。

サンナ・ダイアナ・・・

「・・・なんだろう、私たち、かぶっちゃったね・・・」

「そう・・・みたいね・・・。それじゃ、二人で頑張りましょ！」

「じゃあじゃあ、私たちはお味噌汁にしょ！」

「賛成！そうしましょ！」

サンナとダイアナは二人で協力して味噌汁を作ることにした。

ウィリア・・・

「・・・どうしよう・・・皆とかぶらない物を作らないと・・・。
・・・そうだ！生姜焼き作ろう！」

ウィリアは生姜焼きを作ろうと決意。ただ、これがレベルが高いことを知らない・・・

ライラ・・・

「・・・私の力、見せる時のようね・・・。よし！焼そばを作ろう！」

ライラは焼そばを作ることにした。

イシア・レノシア・カトレア・チェリムル・クロス・・・

「・・・あれ、プリムラ、何してるの？」

「・・・カレーを作ってみようと思って・・・」

「大丈夫ですか！？確か、熱いのが苦手だって聞いてますよ！？」

「変わらなきゃって、自分が変わらないとスバルに振り向いてもらえないかもって思ったから・・・！」

「ぷ、プリムラさん！鍋吹いてます！鍋が沸騰してます！」

「・・・あっ！いけない！」

慌てて鍋を退かそうとして・・・

ジュツ！

「あっとうとうとうとうとうとうとうとうとう！……！！……？……？……？」

プリムラの悲鳴が響き渡った。

「はあっ、はあっ、はあっ・・・」

「あ、あちやう・・・、鍋、凍ってますよ・・・？」

プリムラの絶叫の直後、使っていた鍋が凍りついていた。

「・・・やっぱり私には無理なのかな・・・」

「い、いえ！無理じゃないですよ！」

「・・・そうだね、もう一回やってみる！」

「私も協力する！」

「・・・皆は皆のを作ってもいいよ・・・。私は自分で頑張ってみるから。」

「そ、そうですか・・・？」

「でも、無理だと思ったらいつでも頼っていいですからね？」

「その時はよろしく・・・」

プリムラは改めてカレーを作り始めた。

「・・・私たちもカレー、作ってみます？」

「そう・・・だね。」

プリムラの奮闘を隣にし、五人はは共同でカレーを作ることにした。

アイリス・・・

「・・・絶対に負けられないよ・・・。だったら・・・！」

アイリスはすかさず保存庫を開け、野菜を取り出した。

「私は・・・野菜炒めを！とにかくおいしくできれば・・・！」

アイリス、勝敗よりも味にこだわった。

プリムラ・・・

「次はカレーのルールを・・・」

鍋にルーをそのまま入れて・・・

ボグオオオオオオオ！

「きゃあああああああ！？」

鍋が爆発した。

「ちょ、プリムラ！？大丈夫！？」

「あつっ！熱い熱い！手が熱いよお！！」

「すぐに冷やさないと！手を火傷しかけてます！」

プリムラの腕をすぐに冷やすために、水に入れた。レノシア達。

「・・・くすん・・・」

「だ、大丈夫ですよ！」

「・・・レノシア、カレーの作り方教えて・・・？」

「え？あ、はい！そのことなら任せてください！」

「・・・でも、その腕大丈夫なの？大分酷い火傷みただけど・・・」

「私は・・・頑張りたいんだ・・・。スバルのために・・・、そして、自分のために・・・」

「そこまで強い覚悟を・・・」

プリムラは熱いであろうはずの腕を冷水から出し、また鍋に向かって行った。

「・・・そう言えばプリムラ、ご飯はどうするの？」

「・・・カレーも最終的には私にしか作れないものにとしようと考えているんだ・・・。だから、それにあったご飯を・・・いや、氷にしようって考えているんだ・・・」

「プリムラさんにしか・・・」

「作れないカレー・・・」

プリムラの思いに何も言えない・・・

「だから・・・」

「わかりました！手伝いましょう！」

「皆・・・」

五人がプリムラの協力を決意。

「・・・でも、かなり難しいよ・・・？」

「それでも協力しますから！」

「・・・皆・・・ありがと・・・！うっ・・・うう・・・」

「あ、あああ、な、泣かないで！ど、どうしたの！？」

「・・・今まで、協力することとか・・・助けてもらえるとかなかったから・・・ぐすっ・・・」

「・・・もうそんなことないんですよ？私たちが協力しますから・・・」

「あたし達がいるから・・・もう一人ぼっちなんてことはないんだよ・・・」

温かい雰囲気・・・

数分後・・・

『わきやあああああ
・・・』

再び悲鳴が・・・

その晩・・・

「今日は朝にアイリスを見てからクリームと話してばっかりだな・・・」

「スバル・・・、ちよつとはべたべたするのを控えてほしいっす・・・。特に人前で・・・」

「・・・そうか？」

「・・・無自覚っすか・・・。たちが悪いっすよ・・・あ、そういうえぼ今日スバルを賭けた料理対決がどうのこうのって言ってたっすね・・・」

「俺を・・・賭けた？」

「おお、スバル、ここにいたか。シロン達がお前を呼んでるぞ？」

「・・・やっぱり料理対決のことなのか・・・」

カクサスがスバルを呼びに来た。

「・・・ある意味究極の対決っすね・・・」

「・・・確かにそうだな・・・」

「カクサス、クリーム、一体何があるというのだ？」

「アレックスか。いやな、スバルを賭けた料理対決をやるとかどうとかな・・・」

「スバルを賭けた・・・？待て待て、スバルはアイリスを選んだはずだろう！？」

「それが・・・スバルを諦めることができないから・・・だそうだ・・・」

「執念深いというか・・・女の嫉妬というか・・・っすね・・・」

呆れ返るしかなかった3人だった。

キッチン・・・

「・・・で？」

「だから！私達の料理を食べてほしいの！」

「いや、だからさ・・・なんで？」

「そ、それは・・・その・・・ね？」

「あうあうあう・・・／＼／＼」

「アイリスじゃなくて私達の誰かに振り向いてもらいたいから・・・

／＼／

「いや、それは・・・もう・・・」

「だって！諦めきれないんだもん！」

「・・・分かった、料理は食べてみるが・・・、結果については期待しないでくれよ？」

『いいの！判定は厳しくお願い（します）！』

声を荒げる娘達。

「・・・最初は何？」

「私から！」

『あっ！！』

シロンが先陣を切ったため、他の全員が声をあげた。

「シロンは焼き魚……。俺の好物じゃないか！」

「それがわかってるから……。なの。／＼／＼」

「それじゃ……。」

魚を一つまみし、口に放り込む。

そして、動きを止めてしまう。

「……。スバル？」

「……。シロン、どれだけ塩を使ったんだ……。？」

「え、え？」

「……。塩辛い……。」

「ご、ごめーん！」

（娘達…シロン落ちた！）

シロンの僅かな失敗に喜んでいる（ウィリア以外）・・・

「じゃ、じゃあ次は私です！」

ナコルが次に出る。

「ナコルは卵焼きだな・・・。いつもの腕を見ていたら失敗していなさそうなんだが・・・」

（娘達…しまった！ナコルって一番料理が上手（だ／でした）！）

一口食べて・・・

「なこる・・・」

「は、はい！（も、もしかして・・・私が・・・！？）」

「・・・ちよつと醤油が強かったな・・・」

「え・・・」

（娘達…やったあゝっ！）

再び歓喜（ウィリア以外）。

「次は・・・」

「私が！」

『ら、ライラが！？』

娘達からすれば、かなり意外な伏兵となったライラ。

「ら、ライラ・・・」

「が、頑張って作ったんだから・・・／／／」

「あ、ああ・・・」

ライラがじつとスバルを見つめている中、スバルは目の前の焼きそばを食べ始めた。

「・・・美味しい・・・」

「嘘じゃないよね！？」

「俺が嘘を言うかよ・・・」

（娘達・・・やばい、好評だ！）

焦り始める。

『じゃ、じゃあ、次は私達のを!』

「うっそ、サンナとダイアナ、協力して作ったの!？」

「悪い!? アタシ一人じゃ何もできないのよ!」

「私だって、一人じゃ料理できないもん・・・」

二人の必死の反論・・・

「・・・まあいいか。とりあえず・・・」

二人の作った味噌汁を飲んでみた。

が・・・

「・・・誰か、水をくれ・・・」

スバルが水を要求した。

「ど、どうしたの！？何かダメだった!？」

「・・・どれだけ味噌入れたんだお前らは・・・」

「え？スプーン二すくいだけど・・・」

「ちよつとそれは多すぎますよ・・・」

「・・・からい・・・」

失敗していた。

「次は私の番・・・かな？プリムラ、先、いいかな・・・？」

「うん・・・。もうちよつと時間が欲しいから・・・」

「あれ？ウィリアは・・・？」

「・・・あたし、失敗しちゃって・・・やっぱ無理だった・・・くすん・・・」

「ま、まあ、頑張って練習していけばできるようになるって!」
「くすん・・・しくしくしく・・・」

ウィリアにはまだ難しいものだったらしく、失敗していた・・・

「じゃ、じゃあ、私の・・・食べて・・・／＼／」
「お、おお・・・／＼／」
『こらあゝっ！甘々な空気を作るなあゝっ！』

二人の雰囲気怒る面々。

「も、もおゝっ！いいじゃないのゝっ！」
『よくなゝいつ！』

そんな風に言い合いをしている間、スバルはアイリスの作った野菜炒めを食べていた。

「・・・ん、腕をあげたな・・・」
「ホント！？」
「・・・ちよつと胡椒が効きすぎている気がするけどな・・・」
「・・・そこは見逃して・・・」

（娘達・・・や、やっぱりアイリスは強いよおゝ・・・）

アイリス、娘達にすれば最早鉄板・・・？

「最後は・・・私達だね・・・」

「プリムラ・・・たちか。」

「私たちは・・・プリムラさんに協力しただけで、何も作ってないんです・・・」

レノシア達は頭を掻いたり俯いたりしていたが・・・

「いや、プリムラだけの料理じゃなかったんだろ・・・？匂いで分かるよ。カレーを作ったんだろ？」

「え、わかったんですか!？」

「・・・あ、ホントだ・・・」

「・・・でも、今回はスバルに振り向いてほしいから、じゃなくて、自分のために・・・だから。」

『プリムラが戦闘を放棄した!？』

「・・・けど、諦めたわけじゃないよ。」

そして、プリムラが盛りつけを始めた。

「・・・これは・・・氷か!」

「そうなの・・・。頑張って作ったんだよ・・・?」

スバルの前に出された、プリムラにしか作れないカレー。

一口食べた瞬間・・・

「えっ！ちょ、スバル！？どうしたの！」
「な、涙が・・・」

スバルの眼から涙が流れだした。

「・・・懐かしい味だったから・・・思わず・・・な・・・」
『懐かしい・・・味・・・？』

一斉に首をかしげる。

「・・・シャルナに・・・俺の母親なんだが・・・小さいころに作ってもらったカレーとそっくりだったんだ・・・」

「・・・辛いこと思い出させちゃったみたいだね・・・」

「・・・ごめん・・・」

「いや、いいんだ・・・。とにかく、美味しかった。」

スバルが素で感謝していることに・・・

『・・・彼女交代!?!』

焦るかなのようなそうでもないような・・・

「・・・さっきも言ったと思うけど、これはスバルを横取りしよう
って考えて作ったわけじゃないの・・・。今の私はまだスバルに振
り向いてもらえる女の子じゃないから・・・」

「そうなんだ・・・」

「・・・(ほっ・・・)」

プリムラの話にほっと胸をなでおろすアイリス。

「でも・・・諦めたわけじゃないよ・・・。今はまだ告白できる状
態じゃないけど・・・、私だって、スバルが好きなんだから・・・
！」

改めてプリムラが自分の想いをスバルに告げた瞬間だった。

報酬。

入手・クエストクリア

クエスト未受注のため無し。

その他

プリムラ、『火を使わないプリムラだけの料理』習得。
争奪戦の結果、スバルの恋人、アイリスのままに。
ウィリア、己の未熟さに気付く。

第69話 スバル告白後の初日、激化した争奪戦 戦いの方法は・・・料理！？

今回はプリムラが頑張った回です！

彼女は火に近づけなくてできない料理をやろうとした上、失敗・・・

それではいけないと挑戦する・・・

頑張ることはいいことですねえ・・・

次回はウィリアに変化が・・・？（わがままですが、意思に変化が・・・！？）

お楽しみに！

第70話 朝騒動とクエスト恋愛戦争・・・？（前書き）

ついに70話です！

今回はウィリアの心境の変化、スバルの考えていた『もし』、アイリスの緊急事態があります。

緊急事態のヒントは、

『ドッペルゲンガー』

です。

では、どうぞ！

第70話 朝騒動とクエスト恋愛戦争……？

争奪料理戦争があつたその翌日の朝……

「・・・ぐおっ!？（ドスン!）」

朝一の落下音
・
・
・

「……疼え……。……
 ……というかなんて落ちたんだ……。？」

スバルが自分が（さっきまで）いたベッドを見てみたら、見慣れぬ・
・　　とか、今までそこに存在していなかった膨らみが三つほど・

「何の膨らみだ……？」

そう思つて見ようとしたところ、その膨らみの内の一つがスバルの方に転がってきて・・・

ド
フ
ッ
！

「むぐおっ!？」

その膨らみは・・・

「すぴいゝ・・・」

アイリスだった。

「ちょ、アイリ・・・むぐうつ!？」

「にゅふふゝ・・・」

寝ぼけてスバルを抱きしめるアイリス。

感覚的には今のスバル⇨抱き枕らしい・・・

「・・・ぷはっ!! アイリス、放し・・・」

「すぴいゝ・・・」

「・・・(やばい・・・寝顔にドキドキした・・・)／／／」

スバルが挙動不審(動けないが)に陥っていたら・・・

「・・・スバル・・・／＼／」

アイリスがいつの間にか起きていて、顔を赤くしていた。

「えっと、何が起きたのかよくわかんないけど・・・見つめられると・・・恥ずかしいよ・・・／＼／」

「あ、いや、悪い！・・・それよりも・・・そろそろ解放してくれないか・・・？」

「・・・やだ・・・／＼／」

「解放してもらえないと何もできないんだが・・・」

「もうちょつと・・・こうさせて・・・／＼／」

「・・・（前よりも・・・なんというか・・・大胆になったとか・・・おしとやかになったというか・・・？）」

「・・・／＼／」

抱きしめているアイリスの力は少し力を入れたらすぐに抜けられるようなもので、アイリス自身恥ずかしさから顔をそむけていた。

そんなアイリスを退かそうとしないスバル。

それが数分続いていた。

数分後・・・

ぽふっ。

「・・・？」

「うっ・・・ううっ・・・」

スバルは小さな衝撃に頭を上げてみたら、ウィリアが転がってきてスバルの上に乗りかかり、涙目になっていた。

「ウィリア？」

「ふえええええええええ・・・」

突如として泣き始めるウィリア。

「お、おい!？」

「ずるいよ・・・アイリスだけずるいよ・・・ひぐっ・・・」

「ウィリア・・・」

「あたしだって・・・あたしだってスバルのことが好きなんだもん！スバルに好きだって言ってもらいたかったんだもん！だけど・・・」

だけど・・・ぐすつ・・・」

・・・ダダダダダダダダダッ！

「だあれですの！？ハニーを泣かす輩はあっ！？」

「ろ、ローズ！？・・・なんだろう、すごい久しぶりに声を聞いた気がする・・・」

「え、えっとね・・・？その、ウィリアが泣いたのは・・・」

「・・・あたしのわがままなの・・・。だから、誰も悪くないよ・・・ギザミちゃん・・・すん・・・」

「そ、それならいいんですの・・・。」

ローズは何も問題なかった、というかのように去って行った。

「あ、嵐のようだった・・・。。・・・ウィリア？」

「・・・／／／」

ローズがいなくなったのを確認して安心していたスバルだが、ウィリアの状態がおかしい（顔を赤くして見つめている）ことに気付き、疑問を持つ。

「お、おい、ウィリア？ど、どうしんむっ！？」

「あああああっ！！」

「んちゅ・・・はふ・・・じゅるる・・・」

スバルに突然キスをしたウィリア・・・

「・・・っぷあっ！！い、いきなり何だ！？」

「・・・好きじゃなかったら・・・こんなことしないもん・・・／

／

「わ、わ、わ、ちょ、それは・・・」

「・・・スバルの中で一番じゃなくていい・・・好きだって言ってくれれば・・・」

「・・・あ、あのさ・・・俺はこの時どうすればいいんだ・・・？」

「だ、ダメだからね！スバルは私だけのものなんだから！」

「アイリスだけのものじゃないんだからあく！！」

「・・・ウィリアの言い分が何となくわかった気がする・・・」

『ホント！？』

スバルの発言に一気にスバルを見る二人。

「ウィリア・・・、お前が言いたいの・・・『自分も彼女にしてほしい』・・・ということなのか・・・？」

「~~~~っ！！（コクコクコクコク！！）」

「・・・いいのか、それ？」

「・・・さあ？」

「ダメ・・・かな・・・／／／？」

「そればかりはどうしようも・・・」

「・・・私が一番で、ウィリアが二番ならいいけど・・・」

「あたしは二番でいいよ・・・／＼／＼」
「・・・一つ聞いてもいいか？」
『何？』

スバルにきれいにハモって答える二人。

「アイリスが転がってくる前に見たんだが・・・俺のベッドの上に三つほど膨らみがあった気がするんだが・・・」

「え？（私／あたし）は知らないよ？」

「よっと・・・じゃあ、誰が・・・ってあれ？いな「ス／バルっ！
！」いいいいいいっ！？」

いきなり発生した衝撃に変な声を出してしまうスバル。

「ちょ、待て！おい・・・（ふらあ・・・）」

「え、ちょ、きゃあああああ！」

「こっちに倒れないでー！」

バランスを崩したスバルは二人の方に仰向けに倒れこんでしまった。

「だ、誰だ・・・ってチェリムルか・・・」

「私も好きだよおっ！」

「た、頼むから退いてくれ・・・」

ちなみに下敷きになったアイリスたちは・・・

「ちょ、スバル、動かないで・・・ひゃうん！」

「す、スバル、そこは・・・ふあっ！」

スバルの下で何か起きていた。

「チェリムル、退いてくれ！俺の下で何か起きている！」

「やだあゝ！私のこと好きって言うてくれるまでやだあゝっ！」

「だ、だから、動かないでえ・・・ひん！」

「スバルの身体がずれた・・・。助かったというべきなのかな・・・」

アイリスのみ未だ下敷きに・・・

「アイリスが下敷きのままだからまず離れろ！」

「やだやだあゝっ！好きって言うてゝっ！」

「いい加減に・・・しろっ！」

チェリムルを抱える形で無理やり起き上がったスバル。

「はあっ、はあっ・・・二人とも・・・大丈夫か・・・？」

「あたしは大丈夫だけど・・・アイリスが・・・」

「・・・アイリス？」

「・・・痛かったよお・・・ぐす・・・」

「・・・どうやら起き上がる時にどこか押さえていたみたいだが・・・」

「・・・胸押さえてた・・・」

「最初に言ってよお・・・」

「わ、悪かった・・・」

一つの部屋になぜか四人、という不思議な光景。

「・・・最近光景がころころ変わるなあ・・・」

『・・・さあ！どっちが第二婦人なの！？』

『話が飛躍したあ！？』

「・・・アイリス、どっちが・・・」

「・・・私に聞かれても・・・」

『どっち！？どっちなの！？』

（アイリス・・・す、スバル、どうするの！？二人ともこのままじゃ絶対に引かないよ・・・？）

（スバル・・・もしアイリスにフラれた場合、俺はウィリアに告白しようとしていたんだ・・・。そんなことはないとわかっていたが、変なことをしすぎて嫌われることもあり得るからな・・・）

（アイリス・・・そうだったんだ・・・でも、私は絶対スバルのこと

嫌いにならないもん、絶対ないことだったんだよね・・・」

（スバル…それに・・・、ウィリアには過去も話したこともあるし・・・、結構近い存在になっていたからなあ・・・）」

（アイリス…じゃあ、ウィリアを？）」

（スバル・・・俺の口からは言えない・・・）」

（アイリス・・・私から言っておこうか？）」

（スバル…いや、俺の口から言いたい。）」

スバルとアイリスがこそこそ話しあっていた。

「ねえ・・・スバル・・・」

「どっちが・・・好きなの・・・？」

「・・・チェリムル・・・ごめんな・・・」

「・・・／／／」

「・・・ううん。勝手に好きになったの私だし、そんなことは覚悟してたし・・・ぐす・・・」

ウィリアは言葉の意味を理解してか顔を赤くし、チェリムルは『わかっていた』と言っても泣いてしまった。

「けどな？アイリスが一番だということに変わりはないけど・・・二番目には・・・皆が好きだから・・・」

「・・・うん・・・、うん！」

「やっぱり・・・アイリスは強いね・・・。・・・ねえスバル、なんでアイリスを選んだの？」

「あ、私も知りたい。あの時も『アイリスだから』って教えてくれ

なかったし・・・」

「・・・やっぱり、一番最初に合っていて、お互いよく知っていたし・・・、それに・・・」

『それに?』

「俺のために頑張っている、ってことをよく聞いていたしな。それで・・・かな。」

「へえ・・・」

「確かに・・・アイリス、スバルのためについてよくお料理とか練習してたからね・・・」

「スバル・・・ちゃんと見てくれてたんだ・・・／＼／＼」

「・・・早く行かないと後が怖いんだが・・・」

『へ?』

三人が時計を見た瞬間・・・

「アイリス! スバルと二人っきりになんてさせないわよ!」

「ウィリアもチェリムルもいないわ!?」

「先を越されちゃったんですか!?」

「アタシを差し置いて二人きりなんて絶対に許さないわよおっつ!」

四人を探し回る声が・・・

炊事場・・・

アイリス・ウィリア・チェリムルは殆ど嫉妬の説教をされていた。

「いいなあ・・・アイリス・・・」

「羨ましいよお・・・」

「羨ましいです・・・」

ナデシコ・リナト・ニンフはアイリスの状況を改めて聞いて、羨ましがっていた。

彼女らにしてはライバルは二人。

羨ましがると同時に、火花が散っていた。

「俺はクエストに行ってくる。そろそろG級昇格の話もあるだろうし・・・」

「私も行く!」

「あたしも！」

「・・・あまり多く行っても護り切ることができないぞ？」

『平気！だって、スバルの恋人なんだもん！』

『そ、そんなあ！！』

アイリス・ウィリアの発言に愕然とする。

「・・・誰が来るとか関係なしに行ってくる・・・」

『行ってきたーす！！』

スバルはアイリス・ウィリアを連れてクエストに向かった・・・

はずだった。

「・・・あれ、プリムラとクロスがない・・・」

「サンナもいませんよ！？」

「姉さん・・・出し抜くなんて・・・」

いつの間にかいなかった三人に怒りしか湧かない娘達だった。

「さって、今回は・・・どんなクエストがあったかな・・・っと・・・
・お、これは・・・」

スバルが手に取ったクエストは・・・

『桜色の雌火龍』だった。

「スバル、なんでこのクエストを？」

「ざっと考えての意見なんだが、俺と同じ位になるには技術がまだ

足りないからな、二人は。だから特訓を兼ねて。」

「ちゃんと考えてくれてるんだ・・・／＼／」

「嫌な予感は絶えないけどな・・・」

「じゃあこれにしよう！ 私たち二人ともこのクエスト受けられるから
！」

「・・・じゃあ、決定だな！」

クエスト・・『桜色の雌火龍』・・・

開始。

ベースにて・・・

問題が発生した。

「今回はレイアの亜種・・・、俺は援護に回るから二人で基本戦うんだ。・・・いいか？」

「わかった！」

「時間が意外と無制限だから戦えるよ！」

「でも・・・」

「あたし達が・・・」

「どうしたんだ？」

『ピンチになったら助けてくれる・・・？』

「そりゃ・・・助けるさ。」

『ありがと！』

そんなブリーディングが行われていた時・・・

<スバルっっ！>

「はあっ！？」

「え！？何でサンナの声が！？」

三人が焦っていたら・・・

「スバルっ！ やっと会えたよっ！！（ドムッ！）」

「ぐほあっ！？」

「す、スバル！？ サンナ、スバルに抱き着かないでよ！」

「やだあゝ！ ずるいんだもん！ 二人とも！」

「私たちも忘れてもらっちゃ困るよ・・・」

「そうですよ・・・？ 私たちだってスバルさんのこと、大好きなんですから・・・／／／」

「プリムラ！？ クロスも！？」

「私たちはスバルが心配でついてきたの・・・」

「そうですよ。サンナさんはそうじゃないですが・・・」

「えへへゝ・・・」

そう言われてサンナを見たら、サンナは幸せそうな顔をしていた。

・・・よく見たらスバルが押し倒されていた・・・

「さ、サンナ・・・ど、退いて・・・くれ・・・」

「やだやだあゝっ！」

「ち、ちが、息が・・・できな・・・」

「ダメっ！」

「あうっ・・・」

ウィリアがサンナの首筋に一撃当て、サンナは気を失った。

「まったくもおゝ・・・スバルが死にかけてるのに止めないんだからあ・・・」

「プリムラ、クロス、ベースとサンナを頼む。」

「・・・わかった。」

「そんなことなら、お任せください。・・・でもプリムラさんが・・・」

「・・・胸ばかりしか能がない女と一緒にいたくない・・・」

「そんなこと言わずに・・・さあ？」

「・・・スバルの言うことなら・・・聞く。」

サンナと一緒にいるのを嫌がっていたプリムラだが、スバルに頼まれた瞬間、すぐに了承した。

密林を探していて・・・

「なかなかいいね・・・桜色のリオレイア・・・」

「そんな簡単に見つかるわけないだろ？何となくこれも訓練だな。」

「・・・千里眼使っているから大体位置は把握したよ。」

「ウィリアは行動が速いな・・・」

「えへへ・・・褒められた・・・／／／」

ウィリアが示した場所に向かう三人。

「・・・いたね・・・。安全を考えて罨仕掛ける・・・？」

「そうした方がいいな・・・。ちよつと卑怯臭いかもしれないがな・

・・・」

「じゃ、仕掛けてくるから終わったら挑発して？」

「一応落とし穴があるからこれ使え。」

「ありがとう！」

ウィリアは一人落とし穴を仕掛けに行き・・・

数分後、設置が完了したという合図が出た。

「よし、ペイントボールだ！」

「えい！」

アイリスがペイントボールをリオレイアにぶつけ・・・

・・・？

二人の方を見たりオレイア。

「さあ、追ってこい！」

スバルとアイリスが落とし穴の方へ走って行く。

そして・・・

ドゴオオオオオン!!!!

レイアが落とし穴に嵌った。

「よし！後は・・・って・・・まさか・・・」

「どうしたの、スバル？」

「何かあったの？」

「・・・ものすごい既視感デジャヴ・・・」

スバルは落とし穴の状況を見て、ウィリアのことを思い出していた。

「ちょっと穴を見に行くか・・・」

「そうだね・・・」

「・・・なんか不安だけど・・・」

三人は底知れぬ不安を持ったまま穴を見に行った・・・

「・・・」

『・・・アイリス?』

「ちょっと待ってよ! 私ここにいるよ!？」

「だよな・・・」

「アイリスにそっくりな女の子だね・・・」

「なんだろう、姿もそっくりだもん・・・」

アイリスそっくりな女の子が穴の中で気を失っていた。

ベース・・・

「・・・さあ、大変なことになったぞ・・・？」

「そうだね・・・。この子見たらなんて言うかな・・・。」

「最初に絶対『アイリス！？』っていうかもね・・・。」

キャンプに戻ってきて・・・

「スバル、おかえ・・・。」

「あ、皆さん！無事で・・・。」

スバルが抱えていた女の子を見て硬直したプリムラとクロス。。

『・・・アイリス？』

「ちょっと待って！私ここにいるよね！？」

「違うんだったら・・・その子、どうしたの・・・？」

「落とし穴に嵌めたらなった・・・。」

「まずは寝かせなきゃ・・・」

スバルはアイリスたちが女の子を寝かせているうちにキャンプを出ていた。

「この子・・・どうしよう・・・」

「・・・もしこの子がスバルのこと好きになったら・・・、スバル、私とこの子、どっちを選ぶだろう・・・」

「んう・・・」

女の子が目を覚ました。

「あ、眼が覚めたみたいだね。大丈夫・・・？」
「・・・きゃあああっ！」

慌てて身体を隠した女の子。

「えっと・・・あなた、名前なんて言うの・・・？」

「・・・私に・・・、名前なんてないよ・・・」

「え、あ、そうなんだ・・・」

「・・・あなた、私とそっくりだ・・・」

「私も、そう思うよ・・・」

女の子とアイリスが何となく共感している。

「あ、あたしスバル呼んでくる！」
「お、お願い！」

ウィリアがスバルを呼んでくるといい、アイリスはそれを頼んだ。

「呼んできたよ。」
「お、気がついたみたいだな・・・」
「~~~~っ！／／／」

女の子がいきなり身体を隠していたシートで顔まで隠した。

「ど、どうしたの・・・？」
「あ、あの人の顔見てたら・・・胸がドキドキして・・・／／／」
（娘全員・・・お、恐れていたことが現実に！？）

「・・・顔も見られないよお・・・／／／」
「・・・まさかこの子も・・・」

スバルも戦慄を隠せないでいた。

「あ、あのねスバル！この子に名前を付けてあげてほしいんだけど！」

「な、名前！？」

物凄い見幕でスバルに名付けを依頼するアイリス。

「この子、名前がないらしいから！」

「あ、ああ・・・」

スバルはどこからか本をたくさん取り出して、必死に見始めた。

「この子に合う名前は・・・」

スバルが必死に読んでいたら・・・

「・・・？」

女の子が花の本を取り、読み始めた。

「・・・あ・・・、あ、あの・・・ね？私・・・この花の名前がい
いな・・・」

女の子がスバルに見せた花は・・・

杜鵑^{ほととぎす}だった。

「どれどれ・・・？・・・花言葉が『永遠にあなたのもの』・・・」
「・・・／＼／＼」

スバルが杜鵑の花言葉を言った時、女の子が顔を赤くした。

「・・・キルティス・・・かな？」

「キルティス・・・？」

「この花の学名が《トリキルティス》だから・・・ど、どうだ・・・？」

「・・・ありがとう！」

女の子ーキルティスーはスバルにいきなり抱き着いた。

ただ、スバルはかなり焦っていた。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！む、胸が・・・／＼／」
「ほえ？・・・きゃあああああっ！！／＼／」

無意識でやってしまっていたらしく、キルティスはすぐにスバルから離れた。

しかしスバルは内心ドキドキしていた。

「・・・（やっぱりアイリスにそっくりだからか・・・？すごいドキドキしているんだが・・・）／＼／」
「・・・スバル・・・なんで顔を赤くしてるの？」
「え、いや、その、な？」
「・・・／＼／」

スバルは自分の焦りを見抜かれたかのように焦っていた。

キルティスは自分の姿に顔を赤くしたスバルを見て顔を赤くしながらも喜んでいた。

スバル宅・・・

「むうゝ・・・」
「ふう・・・」

各々むくれたりしていた。

「・・・なんか、物凄い居づらい空気っすよ・・・」

クリムがそうぼやいていた頃に・・・

「た、ただいま・・・」

居づらい空気の根源が来た。

「スバル！今度は私と一緒にクエスト行こ！」

「いえ、次は私です！」

「ちよ、ちよっと！アタシもクエスト行きたいのよ！？」

すぐにスバルに詰め寄る娘達。

「・・・ところで、アイリスさんは・・・どっちなんですか？」

『え？』

レノシアがアイリスとキルティスに気付き、すかさず聞いたことで存在に気付いた。

『・・・アイリスが・・・二人・・・？』

「ちよ、ちよっとお！アイリスは私！」

「私は・・・キルフィス。」

「・・・見分けをつけるにはどうすればいいかな・・・」

「髪の毛を縛れば見分けつくんじゃないの？」
『あ……』

・ そのことに気付いた二人は慌ててアイリスの部屋に走って行った・

「ねえ……スバル……」

「一体何があったのか……」

「教えてくださいよお……」

「ちよ、待て！怖いから！怖いから！」

言い詰められて焦るスバル、周りに味方はいなかった……

入手

採取してないため無し。

クエストクリア

クエストをリタイアしたため無し。

その他

キルテイス。

キルテイスがアイリスそっくりなことが判明。

キルテイスがスバルを好きになったらしく、スバルもドキドキしていた。

アイリス、ピンチ？

ウィリア、スバルの中では二番目に好きだったらしい。

第70話 朝騒動とクエスト恋愛戦争・・・？（後書き）

今回はアイリスのそっくりさん、キルティスの紹介です。

キルティス

リオレイア雌

その他データ、アイリスと一致。

見た目から何からアイリスと似ているという子。

普通にはアイリスと判別不可能で、見分けるのには観察眼が必要。

名前の由来はホトトギス（漢字で書くと杜鵑）の学名。花言葉は『永遠にあなたのもの』

以上です。

次回は未だ続く争奪戦に、ついに妹同士での争い勃発！？

お楽しみに！

第71話 激化するスバル争奪、勃発した賢い妹戦争（前書き）

71話です！

今回はちよつとスバル争奪シーンがあり、妹キャラ戦争勃発！？

R115必須です。

では、どうぞ！

第71話 激化するスバル争奪、勃発した賢い妹戦争

キルティスがスバル宅に来てから、争奪戦争が激化していた。

例えば、スバル入浴中・・・

「ご主人、どうかニヤ？」

「・・・ぐおおおおっ！？ 傷に染みるぞこれ！ 痛い痛い痛い！！！！」

「うええっ！？ ど、どこか傷開いたのかニヤ！？」

「ふ、古傷に染みるあああああああ・・・」

「ご、ご主人！？」

ノブとスバルが色々と騒いでいたら・・・

カラカラカラ・・・

「~~~~♪」

誰かが入ってきた。

『っ！？』

慌てて隠れるスバルとノブ。

（ノブ…ご、ご主人！あ、アイリスなら普通に一緒に入っても問題ないはずじゃにゃいのかニャ！？）

（スバル…いや、それこそ困る！目のやり場が無いだろ！・・・というか、女の子の裸を普通に見れるか！？）

（ノブ・・・ヘタレ・・・）

（スバル…ヘタレじゃない！後、今入ってきたのがアイリスとは限らないだろ！）

ノブとスバルが言い合いをしていたら・・・

ちゅぷん・・・

「熱っ・・・でも、気持ちいい～・・・♪」

声が聞こえてきた。

（ノブ…こ、この声は、アイリスじゃにやいのかニヤ！？）
（スバル…キルティスの可能性だってあるだろ！？）

焦っていたら・・・

「・・・スバル？」

（スバル・ノブ…き、気付かれた！）

アイリス（？）がスバルに気付いた。

「やっぱりスバルだ！」

「ちよ、来ないでくれ！直視できないから！」

「恋人なんだから・・・見られたっていいのに・・・」
くちがうっ！ 恋人は私だよっ！（シパァン！）>

突如風呂場のドアが開いた。

「キルティス！私のフリしてスバルにくっつかないで！」

「良いじゃーん！私だってスバルが好きなんだからあうっ！（ムニ
ユウツ！）」

「だから抱き着くな！」

キルティスがスバルの背中に抱き着いた。

「だ、ダメえっ！」

「ぶふうっ！！！」

アイリスがスバルに向けて走り始めた瞬間、何故かノブが鼻血を吹いた。

「ダメだよ！私がスバルの彼女なんだから！（ムニユウツ！）」

「アイリス、お前も抱き着くな！なんかもう色々マズいから！」

アイリスとキルティスが言い争っていたら・・・

「アイリス！キルティス！そんなことさせないわよ！」
「色仕掛けはダメだって言ってませんでした！？」

シロン・ナコルも風呂場に来た。

例外なく二人も走り出して・・・

ムニイツ！

「・・・流石の俺も・・・意識が・・・」

スバルは湯あたりをしたのか、半分意識が朦朧としていた。

「た・・・頼むから・・・俺を・・・風呂から・・・」

スバルは必死になって風呂枠に手をかけようとして・・・

力尽きた。

その時・
・
・

ふらっ
・
・
・

ポフッ。

アイリスの方に倒れこんだ。

「す、スバル？」

「大丈夫!？」

アイリスの顔の前で気を失っているスバル。

「・・・／／／」

気絶しているスバルの顔がちらりと見え、アイリスはその瞬間顔を赤らめた。

就寝時・・・

「・・・おいおい、なんで俺のベッドに二つも膨らみがあるんだよ・
・」

・ スバルがその膨らみの正体を知ろうとしてシートに手をかけたら・

「あんっ！」
「・・・は？」

シートを掴んだつもりなのにいきなり聞こえた嬌声に疑問を浮かべる
他ないスバル。

「・・・スバルのえっち・・・／／／」
「サンナ・・・いたのか・・・。・・・というか、なんで俺がエツ
チなんだ・・・？」
「だって・・・私の胸・・・驚掴みにしたもん・・・／／／」
「そこにいたのが悪い！」
「・・・責任・・・とって・・・／／／」

「責任って・・・お前・・・」

「姉さん・・・色仕掛けはなしだって言ってなかったっけ・・・？」

「あう・・・」

「・・・そんな私も色仕掛けしようとしてたんだけど・・・／／／」

「色仕掛け・・・って・・・」

「ていつ！（ふにっ！）」

「わっぷ!？」

突然サンナがスバルを抱きしめた。

「姉さん・・・そんなことしかできないの・・・？」

「イシアあゝ、私のアイデンティティ、これしかないんだよね！」

「？」

「二人とも・・・アイデンティティがどうのこうのと言う前に俺のことも考えてくれよ・・・」

スバルはサンナの胸の中で息苦しくなっていた。

そして翌朝・・・

「・・・くう・・・ううううううっ!？」

朝、目を覚ましてベッドの上で体を伸ばしたスバルが起き上がる為に横を向いた瞬間に驚愕を隠せない状態になっていた。

『すぴいゝ・・・』

両端にアイリスとキルティスが眠っていたのだ。

しかも片手は、アイリスの胸に（アイリスが腕を掴んでいることから、アイリスが故意にやったことだろうと推測される）・・・

「・・・やばい・・・横を見れない・・・／／／」

スバルは果てしなく困っていた。

そのころ、キッチンでは・・・

「・・・ちよつと聞きたいことがあるんですの。」

「ローズ？」

「一体どうしたっすか？」

ローズの呼びかけに首を向けて答えるディルカとクリム。

「クリムとディルカ、どっちが賢いのか気になりまして・・・」

「どっちが賢い・・・っすか・・・？」

「そんなこと言われても・・・分かんないや。」

「・・・簡単に言えば、妹キャラでもっとも賢いのは？と思っただけですよ。」

<妹キャラで賢いのはあたしだよぉっ！>

遠くから聞こえた声。

「・・・ローズ、今直感で思ったことを言ってもいいっすか・・・？」

「・・・どうぞご自由に。」

「この中でもっとも賢くない『妹』が来た気がするっす・・・」

「・・・奇遇ですの、あたしもそれを思ったところでしたの・・・」

直後、アスカが現れた。

「もっとも賢い妹なのは・・・私だよ！」

「いやいや、もっとも賢い妹なのは（ディルカ／クリム）（っす／ですの／だよ）。」

「・・・じゃあ勝負しようよ！私が一番賢い妹だって証明するんだから！」

「・・・当然アタシが審判ですの・・・」

昼。

「ローズ、一体何をするつもりなの？」

「無駄な賢い妹争いですの・・・」

「ギザミちゃん・・・」

「ハニー、心配してくれるんですの!？」

「それはないよ・・・」

賢い妹戦争に呼ばれたウィリア、シロン。

「・・・それで、何を基準に？」

「まずは字を書けるかどうか・・・、次に料理を作れるか・・・、最後に空気を読めるか、ですの。」

「・・・なんか簡単な判別だね・・・」

第一部、字を書けるか・・・

「簡単に字が書けるかの勝負ですの。でも、漢字ですの!」

ローズが示したのは・・・

《おおきい》。

結果・・・

ディルカ・クリムは・・・

『大きい』

アスカは・・・

『多きい』

「アスカ・・・最もおバカな答えよそれ・・・」

「え？違うの？」

第二部・料理が作れるか（難しい料理を作れ）・・・

ディルカ・・・

「私は・・・魚のカルパッチョ！」　「す、凄い！ただのカルパッチョと違う！」

「しかも・・・魚が厚く見える！」

「これは・・・賢いというレベルじゃ済まないと思うよ・・・」

クリーム・・・

「アタシは・・・アイス天ぷらっす！」

「こ、これは・・・普通の技術だと絶対作れないよ・・・」
「この技術は天才だよ・・・」

アスカ・・・

「私は・・・魚肉ハンバーグだよぉっ！」

「・・・これは・・・普通だね・・・」

「・・・そうだね・・・。多分、私でも普通に作れる・・・」

最後、空気を読めるか・・・

「・・・ローズ、どう勝負するの、これ？」

「実は・・・（ニヤリ）」

ローズ達が来たのは、スバルの部屋の前だった。

「たぶん今豚野郎は作業中だと思いますの。そんな奴にこそつと飲み物を提供してやるんですの！」

「・・・また『豚野郎』って言った・・・」

ディルカ・・・

キィ・・・

「えっと・・・確かに作業中だ・・・スバルお兄ちゃん、飲み物ですよ・・・」

ホントにこそつと飲み物を置いたデイルカ。

カチャ・・・

そしてこっそりと部屋を出て行った。

<・・・お？いつの間に飲み物が・・・？>

誰が置いたかの二は気づいていないが、感謝しているようだった。

クリム・・・

カチャ・・・

「失礼しまーすっす・・・」

クリームもこそこそっと入って行き、すつと食べ物を置いて、出て行った。

その行動はデイルカよりもこそこそしていた。

アスカ・・・

バアンツ!!

(そこにいた者..うわー・・・空気読めてないよあの子・・・)

「うおっ!?! な、なんだアスカか・・・一体どうしたんだ?」

「スバルにちょっとしたご苦労様って意思の飲み物♪」

「お、ありがとう。」

「はい、どー・・・きьяあっ!?!」

バシヤアツ!!

「あっつ！熱い熱い！み、水を、風呂でもいいから！」
「ご、ごめんなさあ〜い！」

結果・・・

「ローズ、もうアスカは賢い以前の問題だと思うんだけど・・・」
「アタシも同じ意見に辿り着きましたの・・・」
「もっとも賢いのは・・・」
「デイルカもクリームも同じレベルだと思うの。」
「・・・そう・・・ですの。言われてみれば確かに。」

結果、デイルカとクリムが同等の賢さだと判明した。

報酬。

入手・クエストクリア

クエスト未受注のため無し。

その他

賢い妹戦争勃発。

賢い妹はクリムとデイルカだった。

スバル戦争戦、より激化。

娘達の中では色仕掛け禁止のはずだが、結構違反していることが判明。

第71話 激化するスバル争奪、勃発した賢い妹戦争（後書き）

今回は、少しネタ的な要素を含んでみました。

アスカは色んな意味でおバかな子・・・

。 次回は・・・ポツケ村に訪れる危機、立ち向かうは『若きハンター』ハンターは村を守れるか！？

お楽しみに！

第72話 襲撃、シェンガオレン（前書き）

タイトルから判ると思いますが、シェンガオレンが出てきます、7
2話です！

今回、特殊なオリジナル剣が出ます。

第72話 襲撃、シェンガオレン

妹戦争があつたその後の三日間・・・

スバルはクエストを着々とこなしていた。

レウス・レイアを一人で討伐したり・・・

ラージャン相手に大奮戦したり・・・

ゲリヨス相手に死にかけて心配かけたり・・・

とにかくいろんなことが起こっていた。

三日後・・・

「いつものようにクエストに・・・」

スバルが意気込んで集会所に向かったら・・・

「非常事態宣言発令中です！すぐに避難してください！」

集会所が大混乱に陥っていた。

「『非常事態宣言発令中』！？お、おい！一体何があったんだ！？」
「え、えと、い、今、この村の近くに『シェンガオレン』が現れたんです！」

「『シェンガオレン』・・・だと・・・！？討伐クエストは出ているのか！？」

「い、一応出ていますが・・・まさか、受注されるのですか！？」
「前に下級だが討伐した経験がある！上級なら資格も持っている！」
「で、でしたら受注可能です！」

「少し待っていてくれ！準備ができ次第受注する！」

「わ、わかりました！」

受付に受注すると言い残し、自宅に走って戻ったスバル。

「すぐに・・・皆を・・・避難させないと・・・」

走りながらそう考えていたスバルだった。

バン！

「す、スバル・・・？す、凄い剣幕だけど・・・」

勢い良くドアを開けたスバルに驚くアイリス。

「カクサス！アレックス！すぐに避難を促してくれ！」

「一体何があったのだ！？」

「・・・分かっているのは避難命令が出ていることだが・・・、何故だ？」

「シェンガオレンが・・・近くに出没したそうだ・・・」

「シェンガオレン！？」

「シェンガオレンって・・・あの・・・大きいカニ？」

「今から俺とノブで奴を討伐する！皆はすぐに避難してくれ！」

「ご主人！装備は大丈夫かニャ！？」

「いや、ブランゴシリーズと『火龍刀《朱》』に装備を変える必要がある！」

「そういえば奴は火に弱かったはずでしたニャ？」

スバルとノブが大慌てで準備をする。

「・・・スバル・・・」

「ん？アイリス、どうしたんだ？」

「・・・無事・・・帰ってきてね・・・」

「・・・ああ。絶対に帰ってくる。皆を残して死ぬわけにはいかないさ。」

「・・・ねえ、その剣を渡してくれないかな？」

「一体・・・どうする気だ？」

「私の力を・・・込めるの・・・！」

「力・・・？」

「そうなの・・・！んっ・・・！私の炎の力と・・・思いを・・・！」

アイリスが力を込めていく。

数分後・・・

「・・・終わった・・・よ・・・」

「大丈夫か！？ 凄いフラフラだぞ！？」

「えへへ・・・ちよつと無茶しちゃった・・・」

「こんなんで死んでしまったら元も子もないんだぞ・・・？」

「良いの・・・。スバルの力になれるなら・・・」

「まったく・・・。カクサス、アイリスを頼んだ。」

「ああ・・・。死ぬなよ・・・」

「そんな簡単にくたばってたまるか。絶対に生きて戻ってくる。この村も護り切ってみせるさ。」

「気をつけろよ・・・」

スバルは、アイリスの炎の力がこもった『炎龍刀《恋紬》』いこしづなを手に走り始めた。

「ご主人！準備はいいですかニャ！？」

「問題ない！剣に力を込めてもらったから！」

「力・・・？」

「炎の・・・な。」

「だからですかニャ。剣の色もほんのりと銅色あかに染まってるから、何があったかよく分からなかったのニャ。」

そして、集会所に着いた。

「お、お待ちしてました！オトモアイルーとの単独クエストですね！？」

「ああ！すぐに出撃する、支給品も多めに頼む！」

「しょ、承知しました！」

スバルとノブは二人でシェンガオレンを討伐しに向かった。

緊急クエスト

迫りくる仙高人

開始。

「すでに砦を突破されたか・・・！ノブ、あまり時間がない、すぐに切り崩しにかかるぞ！」

「了解ですニャ！脚をひたすら攻撃ニャーっ！」

シエンガオレンに突撃を始めた二人。

眼前にはシエンガオレンが迫っていた。

「うおらあっ！」

シエンガオレンの足に斬撃を加えるスバル。

「ニヤニヤニヤニヤッ！！！！」

立て続けに斬撃を加えていくノブ。

ドシン！！

「うおっ！」

「そんなの当たるわけにはいかないニャ！」

辛うじてシェンガオレンの踏みつけを回避するスバルと軽々と避けるノブ。

「町を守るため・・・負けるわけにはいかねえんだよ！」

攻撃を回避するのがやっと、という問題がありながら、不屈の闘志を持って戦い続けるスバル。

戦いは熾烈を極めていた。

15分後・・・

防衛対象残り耐久力・・・

80%。

スバルの状態・・・

ボロボロ。

そんな状況で、必死になって戦っていた。

「ご主人、大丈夫かニャ!?」

「そろそろジリ貧な気がする・・・」

「か、回復するニャ、少し待って欲しいニャ!」

ノブはすぐに笛を取り出し、演奏した。

「・・・ありがたい・・・! 即死攻撃さえされなければ大丈夫だ!」

「防衛目標の耐久力もまだまだあるニャ! さあご主人、ご命令を!」

「ノブ・・・、俺の最後の命令になるかもしれない、ちゃんと聞い

てくれ・・・」

死なない、と言っていた人間からの突然の宣告。

「・・・最後の命令・・・ですかニャ？・・・了解、どんな命令なのかニャ？」

ノブも少し引いたものの、すぐにその命令を聞くことにした。

「・・・逃げろ。」

「は？」

「奴の体力はもうほとんど無いに等しいはずだ、お前は逃げて、皆と合流して、俺の現状を伝えてくれ・・・」

「・・・分かったニャ・・・。ご主人、ご無事で・・・！」

ノブはスバルを置いて、一匹で戦場を走り去った。

「・・・剣にこめられたアイリスの力・・・、そしてアイリス・・・俺に力を・・・貸してくれえええええっ！」

スバルが思い切り剣を振りかぶってシェンガオレンに突撃した時、

『炎龍刀《恋紬》』がピンク色の気を纏った。

そして、スバルは剣を振り下ろした・・・

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第72話 襲撃、シェンガオレン（後書き）

今回はアイリスの力のこもった剣・『炎龍刀《恋紬》』のデータです。

炎龍刀《恋紬》

攻撃力…1230

属性…火450

切れ味…ゲージ紫まで

会心率…10%

スロット…3

作成条件…飛龍刀系統の剣＋アイリスの力と思い

この剣が次回、真価を発揮します！

お楽しみに！

第73話 想いの一撃・『瞬火葬撃』（前書き）

スバルとシエンガオレンの戦いが未だ続く73話です！

スバルは町を護れるか！？乙女との約束をも守れるか！？

そして、『瞬火葬撃』とは！？

では、どうぞ！

第73話 想いの一撃・『瞬火葬撃』

スバルがシェンガオレンに突撃をした時・・・

「はあっ・・・はあっ・・・わ、私・・・もう・・・だめ・・・」

「アイリス！・・・無茶し過ぎだ！自分の力を殆ど使い果たすなんて自殺行為にも等しいんだぞ！？」

「そ、それでも・・・スバルの・・・力になれるなら・・・いいもん・・・」

「そうじゃなくて！お前はスバルと恋仲なのだろう！？そんなお前が！死んでしまったら意味がないだろう！？」

「そうだよ！アイリスが死んじゃったらスバルもつらくなっちゃうんだよ！？」

「・・・みんな・・・ごめんね・・・」

アイリスはカクサスに担がれながらも歩き続けた。

「あ、あの、回復薬・・・作ったので、その、アイリスさんに・・・

」

「すまないカトレア、助かった。」

「いえ、私にはこんなことしかできないので・・・」

カトレアがアイリスにつきつきりでいる。

「でもアイリスさん、今回のことは下手したら死にますし、高確率で力を失うかもしれないんですけど？」

「・・・力を失ったら・・・どうなっちゃったのかな・・・」

「・・・完全な人間になるな。」

「・・・だったら・・・お似合いだった・・・かな・・・？」

「今のままでもお似合いですよ・・・？」

「えへへ・・・ありがと・・・」

カトレアに褒められて素直にお礼を言うアイリス。

（アイリス・・・スバル・・・無事でいてね・・・）

心情的にはスバルを心配していた。

そんなスバルは・・・

「さっさと・・・退けやああああああっ！」

スバルが立て続けにシェンガオレンの足を斬る。

何度か切った後、シエンガオレンがバランスを崩す。

「おらおらおらおらあっ！」

スバルが剣を続けて振る。

「アイリスの力・・・受けてみるおおおっ！」

スバルが叫んだ瞬間、『炎龍剣《恋紬》』が淡い光を発した。

「喰らえ！炎の一撃！『朧火演舞』！」

『炎龍剣《恋紬》』から炎が噴き出て、その炎を用いてスバルはシエンガオレンを切り刻んでいく。

攻撃は止むことなく続いていく・・・。

「うおおおおおおっ！」

スバルは無我夢中に剣を振り続けるが・・・

グオオッ！

「がっ・・・っ！」

シエンガオレンが起き上がり、スバルを蹴り飛ばした。

「う・・・ぐ・・・」

スバルがどうにか起き上がった時、シエンガオレンは防衛対象に一撃加えていた。

残存耐久力…70%

「させるかあああっ！」

スバルは再び、シェンガオレンに向かって行った。

「いた！カクサス！皆は無事かニャ！？」

「ノブ！？お前、スバルと一緒にいたのではないのか！？」

「ご主人が・・・ご主人が・・・オイラに『先に行け、俺の無事を伝えてくれ』と・・・」

「スバルが・・・！？」

ノブが来たことで、アイリスが力が抜けていた体を起こそうとする。

「アイリス！無茶をするな！」

「えっと・・・皆！わ、私がスバルのこと占ってみる！」

「チェリムル？占うって・・・」

「私、タロットを使った占いが得意なの。だから、スバルが戻ってきてくれるか占ってみる！」

チェリムルがカードを展開し、それを不安そうに見つめるアイリス。

「・・・結果が出た！」

「どうなの！？」

「・・・アイリス、安心して。スバルは・・・私達の所に生きて戻ってきてくれる。ただ・・・」

「ただ？」

「決して無事には言えないかも・・・。重傷を負ってしまうかもしれないし・・・」

「そんな・・・」

いつの間にかウィリアも混ざっていた。

「あ、あと少しだ・・・」

ボロボロになりながらも戦うスバル・・・

「いい加減・・・くたばれよ・・・」

スバルは再び剣を振りかぶった。

「『瞬速・・・斬』！」

スバルが『瞬速斬』を放とうとした瞬間、スバルの周りを火が包み・

・

火の鳥を模した姿となり、シェンガオレンに突撃を始めた。

そして・・・

バキヤツ！

グシヤツ！

シェンガオレンの殻を突き破り、体を貫き・・・

それを繰り返した。

30秒後・
・

残っていたのは、全身が崩壊したシェンガオレンとスバルだけだった。

「・・・ありがとな、アイリス・・・」

そのままスバルは力尽きて倒れた。

このスバル決死の大技は、のちに『瞬火葬撃』と呼ばれるようになる。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第73話 想いの一撃・『瞬火葬撃』（後書き）

今回は『朧火演舞』・『瞬火葬撃』のデータです。

『朧火演舞』

剣に纏った炎のオーラを使い、敵を切り刻む攻撃。

『瞬火葬撃』

瞬速斬に炎を纏わせた攻撃。

その姿は不死鳥の如き、総てを穿つ剣となる・・・
欠点…諸刃の剣であること。

次回は・・・泣けるかもしれないところがあります・・・

お楽しみに。

第74話 護られた町、守られた想い（前書き）

シエンガオレンが死に、倒れたスバル。

果たして彼は皆の前に姿を現せられるのか？

様々な想いが交錯する（？）74話です。

では、どうぞ。

第74話 護られた町、守られた想い

シエンガオレンの討伐が上空から確認された翌日、避難命令が解除された。

シエンガオレンが出没した街の近くに位置するポケ村も、避難命令が解除されたその日から元のような賑わいを取り戻した。

だが、一部では賑わうこともできないでいた・・・

「・・・シエンガオレンが討伐されたことは聞いたが・・・、何故スバルは帰ってこない・・・！」

「皆が・・・皆が心配しているんだぞ!？」

カクサスとアレックスがリビングでスバルの帰還を待っていた。

「お前の恋人が・・・アイリスが心配しているんだぞ・・・」
「アイリスだけでなく、今だお前を好いている者もだ・・・」

二人の呟きは、誰もいないリビングに寂しく響き渡った・・・

一週間後・・・

「・・・アイリスがそろそろ心配になってきた・・・」

「少し見に行ってみた方がいいっすね・・・」

「いえ、アイリスだけじゃなく、キルティスも同じくらい心配ですの。」

カクサス、クリム、ローズがそう言って部屋に向かって言った瞬間・
・

＜行かせてよ！私を・・・私をスバルが戦ったところに行かせて！＞

＜ダメなの！もう・・・もう耐えられない！早く、早く行かせてよ！＞

＜我慢して！私たちだって・・・行きたいのを我慢しているんだから！＞

玄関の方からアイリス・キルティスの声と、それを押さえているであろうシロンの声がした。

「シロン！一体二人がどうしたって言うんだ！」
「二人がスバルが戦ったところに行ってスバルを助けに行きたいって聞かないの！二人だけじゃなくて、ウィリアやプリムラもなの！」
「アイリス！キルティス！落ち着くんだ！お前らがそう行く気になるのはよく分かるが今は我慢するんだ！」

カクサスも加わって二人の制止を始める。

その頃のスバルは・・・

《くっ・・・、一体此処は何処なんだ・・・？》

スバルはよく分からないところにいた。

《俺、今までこんな所には来たことない・・・ぞ・・・!?!?》

スバルは見慣れぬ場所に來たため、焦りを隠せないでいた。

《・・・あれは・・・、嘘だろ・・・!?!?》

スバルはあるものに驚きを隠せないでいた。

《なんで・・・母さんがここにいるんだよ・・・!?!?》

スバルが見たものとは・・・

すでに死んでしまった母親のシャルナだった・・・

《・・・！・・・！》

《・・・母さん？・・・一体何を言いたんだよ・・・！？》

シャルナはただひたすらにスバルの接近を拒んでいた。

《母さんがいるってことは・・・まさか、ここはあの世かよ！？》

スバルは今の現状に気がついた。

無論、シャルナが言わんとしていることも・・・

《母さん・・・『こっちに来るな』って言いたいんだろ・・・？や

っぱり、俺にはまだ早いな・・・。ここに来るのは・・・》

スバルは自分の置かれている現状を理解し、シャルナにそう言う。

シャルナも安堵の表情をする。

《だけど・・・少しくらい休んでいても・・・良いかな・・・？》
《・・・(にこっ)》

スバルの話に笑顔を見せたシャルナ。

そのままスバルはその場で少しの休息を取った・・・

スバル宅・・・

その夜、問題が起きた。

「うゝん・・・お姉ちゃん・・・」
「・・・ディルカ・・・ごめんね・・・」

そっと部屋を出るアイリス。

そして・・・

カチャ・・・

「スバル・・・待って・・・！すぐに、すぐに行くから！」

暗闇の中、アイリスがスバルの元へ、シェンガオレンと戦った場所に向かっていた。

無論それはアイリスだけではなく・・・

「アイリス、スバルが心配なのはあたしもなんだよ・・・！」

「私も一緒に行く。私の力を使えばすぐに行けるよ。」

「私も行く！スバルが心配なんだもん！」

「みんな・・・」

いつの間にかウィリア、プリムラ、キルティスがいた。

「早く・・・第一夫人をお届けしないと、ね。」

「だ、第一夫人・・・って・・・。まだそこまで言ってないよ・・・」

／＼／

「雑談はなし、すぐにいくよ！」

プリムラの作った氷の道で、四人はすぐにスバルの所に向かった。

数分後・・・

「スバル！どこなの！？」

「返事してよお！どこお！？」

四人がシェンガオレンの周りを暗闇の中探し回る。

「スバルうっつ！！」

「どこおっつ！？」

スバルはここにいた。

その事実是谁も覆すことはできない。

スバルの無事を信じ、一心不乱に探し続けた。

《皆が来たんだ……。母さん、俺、そろそろ行くよ……。》
《……（コクッ）》

スバルがシャルナに改めてそう言い、シャルナは頷いて手を振った。

別れる直前、スバルに向けてシャルナは何かを言っていた。

音としてその言葉はスバルに届くことはなかったが・・・

スバルの心に届いていた。

その言葉は・・・

アイリスちゃんや・・・皆と・・・仲よくね。

こんなに貴方を想っているんだから・・・、

皆を悲しませちゃ・・・だめよ？

「・・・うつ・・・」
『スバル！？』

スバルの呻き声でスバルの生存に気付く。

「皆！いたよ！シエンガオレンの殻の隙間にいた！引きずれば助けられるよ！」

「ウィリア！ありがとう！」

四人がすぐにスバルの救出に入る。

数分後、スバルを救出することに成功した。

「・・・よお・・・無事だったみたいだな・・・」

「スバル・・・よかった・・・！もう、もう会えないかもって・・・思ってたんだよ・・・！？」

「ははっ・・・悪い・・・な。・・・アイリス・・・」

「・・・なに・・・？」

「あの剣・・・お前の火力が強すぎだ・・・。俺まで黒焦げになるだろうが・・・」

「・・・今まで・・・、私に返事をくれなかった・・・罰だよ・・・。それだけ・・・私の想い・・・強かったんだから・・・」

ところどころ火傷を負っていたスバルを優しく抱きしめたアイリス。

同時にウィリアも、スバルに抱き着いた。

二人の目には、感謝と安堵を現す涙が、流れていた。

その涙は、抱きついていないプリムラとキルティスにも例外なく流れていた。

同日、スバル宅・・・

「アイリスもウィリアもプリムラもキルティスも！どれだけ心配し

「たんだと思っているんだ!？」

『ご、ごめんなさうい!』

「全く、無事だったしスバルを助けることができたからまあいいとするが・・・」

「スバルもスバルだ。丸一週間程音沙汰無しだとはな……。皆心配していたんだぞ・・・?」

「・・・面目ねえ・・・」

「とりあえずスバルは暫くクエストを受けるな。怪我の完治を考慮。アイリスとウィリアはスバルの看病、プリムラはスバルの火傷を冷やすための氷を作っておくんだ。」

「わ、わかったよ!」

「が、頑張る!」

「氷作りなら、任せて・・・」

「あ、あれ? 私は・・・?」

「キルティスは・・・料理を作っておけ。」

「・・・私だけスバルから離れたあ・・・」

カクサス・アレックスに説教をされた四人だった・・・

報酬。

入手

能力剣・『炎龍剣《恋紬》』

クエストクリア

スバル自信がある程度姿をくらししていたため、死亡扱いにされて無し。

その他。

アイリス・ウィリア・プリムラ・キルティスのスバルへの想いがより深いものに。

スバル、ポツケ村を守った英雄になる。

スバルとアイリスの夫婦技、炎劇『朧火演舞』と必殺技『瞬火葬撃』習得。

スバル、暫くクエスト受注不可能に・・・

第74話 護られた町、守られた想い（後書き）

スバルは無事・・・とは言いい難い状況ですが、皆の前に帰ってきました！

次回は・・・『炎の戦乙女』『可憐な射手』『氷の皇后』が指すモノとは・・・

お楽しみに！

第75話 炎の戦乙女（フレイム・ヴァルキリー）・可憐な射手（プリティ・マ

75話です！

さてさて、タイトルにあった異名的なものが指すものとは・・・？

では、どうぞ！

※今回、ギアノス惨殺シーンがありますのでご注意くださいいますよう、お願いいたします。

第75話 炎の戦乙女（フレイム・ヴァルキリー）・可憐な射手（プリティ・マ

「・・・スバル、変な異名がついたんだけど・・・」

「あたしも・・・プリムラも・・・」

開口一番、スバルに不満を漏らした三人。

「三人とも・・・一体何をやったんだよ・・・」

「ちよつと・・・ね・・・／＼／」

「暴れちゃったの・・・／＼／」

「あいつら・・・スバルのことバカにしたから・・・／＼／」

「それで？一体どんな異名がついたんだ？」

「私は・・・《炎の戦乙女》フレイム・ヴァルキリーって・・・」

「あたしは・・・《可憐な射手》プリティ・アーチャーって・・・」

「二人なんてまだましだよ・・・。私なんて、フロスト・エンプレス《氷の皇后》なんだよ・・・？」

「そんな変な異名には思えないんだが・・・？」

三人がこんな異名をつけられた原因は次のようなことだった。

「三人とも、暫くスバルにつきつきりだったから、偶には体を動かしに行ったらどうだ？」

「そんな、いいよ。今は自分のことよりスバルのことを優先しなきゃ・・・」

「そうだよ。あたし達のことは後でいいから、スバルのことを・・・」

「私も・・・。それよりも体を動かし過ぎて熱くなったら私は大変なことに・・・」

「そんな激しく動くわけでもないさ。プリムラも簡単なクエストに行ってきたらどうだ？雪山辺りに。」

「雪山なら・・・行ける。」

「確か雪山に・・・雪山草があったよね？」

「うん。雪山草は火傷を治す力があるから。」

「じゃ、行こっか。」

「その間、俺とアレックスとカトレアでスバルの火傷治療に当たるから、安心して行ってこい。」

『じゃ、行ってきます!』

アイリス・ウィリア・プリムラは三人でクエストに向かった。

「・・・あ、私、まだクエスト行けないや・・・」

「じゃ、まずは登録かな?」

「そう・・・だね。よろしく、師匠・・・／／／」

「ちょ! 師匠なんて言わないでよ! 恥ずかしいから!／／／」

「でも事実だし・・・。アイリスとウィリアの方がハンターとしては先輩なんだし、私としては師匠になるし・・・」

「師匠とか弟子とかはないよ。だって私達、家族だし、友達だし、仲間でしょ?」

「・・・ごめん。」

そしてプリムラが新人ハンターとなり、簡単なクエストに向かった。

開始。

クエスト..
『雪山草摘み』

「・・・懐かしいなあ、私がみんなと初めて会ったのはちよつと前だったんだね・・・」

「今回は同業者の人もいるみたいだから、困ったら助けてもらおう？」
「そうする・・・」

そして、第5エリアに向かった時、事件が起きた・・・

「・・・あ・・・」

アイリスが見たのは・・・

ギアノスの群れだった。

ギアノス達はプリムラを見ると、ギアギア騒ぐことをせず、逆にひそひそ何かを話しているようだった。

そして、次々に言いだした。

（ここからは彼女らとギアノス達の話になります。人とギアノスの話？と思うかもしれませんが、言葉が通じていると考えてください）

《お、ニンゲンに惹かれてついて行った裏切り者のプリムラだ！》
《俺たちモンスターを殺すことしか能がないニンゲンについて行った愚か者だ！》

「違う！スバルはそんなことしない！」

ギアノスの話に必死に否定するプリムラ。

《どこが違うんだよ！ハッ！大方お前もあの男に誑かされたんだろ！？そんな奴の話なんぞ聞けるかよ！》

「ちがう！スバルは・・・モンスターを殺すことだけをする人間じゃない！」

《そう言えるのかよ？結局は俺たちを殺しているじゃねえか！》
「違う・・・ちが・・・う・・・」

アイリスも加わって否定しようとするが、それでも言い返され、辛い言葉について泣きかけてしまうプリムラ。

だが、この罵倒も次の一言で終わりを迎えた・・・

《所詮ニンゲンなんてバカな生き物なんだよ！そんな人間に誑かされたお前もそうだが、あの男も所詮ダメなやつだよ！普通のニンゲンと変わらない、クズなんだよ！》

「・・・絶対に許さない・・・！」

「よくも・・・よくもスバルを・・・！」

「馬鹿にしたな・・・！」

三人がギアノス達の言葉に怒り心頭になる。

《バカにして何が悪い！馬鹿にされて当然なんだよ！》

《『雪の姫巫女』も堕ちたな！やっぱりニンゲンについていたらダメになるんだよ！》

「やめろおとおつ！」

ついにプリムラが叫んだ。

「もう・・・皆が何しても・・・許さない！同種殺しだとか・・・裏切り者だとか言われても構わない・・・！」

「自分が想う人をそこまでバカにされて・・・ニコニコ笑っているわけが・・・ないんだよ！」

「もー許さない！絶対に許さない！絶対に許さないんだからあゝっ！」

アイリスが片手剣をかまえ、ウィリアが弓を構えて矢を装填し、プリムラは氷の爪を生成した。

《お前らみたいな甘ちゃんに！俺たちが殺せるのかよ！？》

ギアノス達も臨戦態勢に入った。

「甘ちゃんって・・・バカにしないで！」

「本気になれば・・・」

「全員殺すことだって簡単なんだから！」

そして、お互い突撃した・・・

「わあああああつ!!」

《（ズシャアッ!）ぎゃああああ!?!》

「バカあああああつ!」

《（ズドドドッ!）げふうっ!?!》

「あなたたちなんて・・・あなたたちなんてえっ!」

《（ザシュッ、グシャッ!）があああつ!?!》

たった三人の女の子が・・・

沢山のギアノスを・・・

斬り殺し・・・

射殺し・・・

二人はギアノスの血飛沫を浴びながら・・・

それを躊躇なく殺し続けていた。

殺されたギアノスからは、鮮血が噴き出していた。

《や、やべえよ、あいつら、いかれてやがる!》
《ぼ、ボスを! ジャックを呼べ! こいつらをどうにか出来るのは多
分あいつしかいねえ!》

二匹のギアノスが虐殺エリアを離れて行った・・・

この時、別のクエストで来ていたハンターがこの状況を目撃してお
り、三人の姿に畏怖しながらも心を奪われる、ということがあった。

《ジャック、あいつらだ！二人の雌にプリムラが！》

《ほう・・・『スノー・ホワイト』がいるのか・・・》

《『雪の姫巫女』ではなくて『スノー・ホワイト』という異名があったのですか！？》

《知っているのはドスギアノスの俺と一部のギアノスだけだ・・・》

《はい！？》

謎の会話と共に、一匹のドスギアノスが姿を現した。

《よお・・・。久しぶりじゃねえか、『雪の姫巫女』よお・・・》
「ジャック・・・！」

現れたジャックと呼ばれたドスギアノスに一步退くプリムラ。

「プリムラ、どうしたの！？」

「あいつは・・・、ジャックは・・・、危険だ・・・！」

警告を発するプリムラ。

「一体どうしたの？あいつが危険なんて・・・」

「あいつは・・・私よりは能力は弱いけど、力は桁違いだから・・・」

「でも、スバルをバカにした奴の親玉なんでしょ！？だったら倒さなきゃ！」

「・・・そうだね！」

一度は退きかけたプリムラだが、アイリスに諭され再び戦う気になる。

《威勢のいい奴らだ・・・。さて！俺を殺せるかなあっ！？》

そして、ジャックと三人娘の戦いが始まった・・・

・・・が。

「ジャック、すぐに仕留めてあげる・・・！二度と、二度とこいつらの上に立てないように・・・！」

「プリムラ・・・」

「そして・・・私の過去を清算するために！」

「私も手伝う！」

「あたしも協力する！一緒に過去を清算しよう！」

「みんな、ありがとう・・・。だけど、あいつは私にやらせてくれないか・・・？」

突然、プリムラの雰囲気がいつもの温和で内気な女の子の雰囲気が一変し、冷酷な『雪女』の雰囲気を纏っていた。

その変貌は、彼女の言い方の変化にも表れていた。

「うん。私たちは周りのギアノス達を片っ端から倒していくから！」

「・・・ありがとう・・・。・・・ジャック！私と一騎討ちをしろ！」

《おお、『雪の姫巫女』直々の挑戦かい・・・？OK、やってやるぜ。》

プリムラとジャック、二人の一騎討ちが始まった。

「『氷柱千本』!」

《遅い、お前の攻撃なんざ当たるかよ!》

先制で放った『氷柱千本』は、いとも容易くジャックにかわされる。

《へっ! お前の力はそんなものかよ! そのままあいつの元に戻りたくないような状態にしてやろうかあ!?》

「くうっ・・・」

その後暫く、プリムラはジャックの動きに翻弄されてしまっている。

「プリムラ! 落ち着いて! あなたならきっと、きっとあいつを倒せるから!」

アイリスの檄が飛ぶ。

「くうっ・・・。私は・・・私は『雪の姫巫女』と恐れられた能力者だあああっ!」

アイリスの檄により再び奮起したプリムラは、その勢いでか、氷の爪の長さがより伸び・・・

「お前の場所を・・・私が失わせてやる！この『絶対零度の氷爪』で！」

《へっ！場所を失うのはお前の方だよ！》

そして二人が接近して・・・

ガキン！ガッ！ピキイツ！ガッ！

氷対氷の激戦が続く。

「アイリス、離れて！」

「え、あ、うん！」

アイリスが離れた瞬間・・・

「いっけえっ！『天衣無縫弓』！」

放たれた矢は、全て寸分の狂いなくギアノス達の頭部に直撃していた。

《ちっ・・・貴様ぁ・・・いつの間にここまで力をつけやがった・・・》

「お前も知っているはずだ、私が『雪の姫巫女』と、『スノーホワイト』と呼ばれていたことを！その名を持つものは氷雪能力を最大限に引き出す力を！それ相応の力を持つことを知っているだろう！」

《だから・・・一度に何体も氷像を作る攪乱技を持つとはな・・・》

「今・・・私の過去を・・・清算する！」

《できるものならやってみろやぁ！》

最後の一撃にかけようとするジャック。

それに対を為すかのように大技を放とうとするプリムラ。

《『凍撃絶命牙』！》

ジャックが冷気を纏った牙を向け、プリムラに突撃する。

「・・・そんなもの！」

プリムラはそれをあっさりと回避する。

そして、ジャックに大きな隙が生まれた時に・・・

「『吹雪』！そして・・・『氷結葬送』！」

プリムラは大技を放った。

《しま・・・ぐあああああ！！》

氷りつくジャック。

「ジャック・・・『氷の鬼子』と『雪の姫巫女』の宿命・・・、これで終わりにしよう・・・。『氷砕円舞』！」

ジャックの氷を舞うように砕いていくプリムラ。

数分後、ジャックは悲鳴をあげることなく絶命した。

「私達の想い人を・・・侮辱した・・・罰だ！」

ジャックだったものに叫ぶプリムラ。

《じゃ、ジャックがやられた!?!》

《やべえ、俺たちじゃこいつらには敵わないぞ!?!》

《に、逃げろ!》

逃げようとするギアノス達だが・・・

「逃がさないよ・・・！」

「私達の好きな人をバカにしたこと・・・後悔して死んで！」

ギアノス達の行く手を遮るようにアイリスとウィリアが立ち塞がった。

《や、やめてくれえ！》

《こ、殺さないでくれ！》

ギアノス達は命乞いをするが・・・

「自分たちは何をしてでも自由で、いざ自分がこうなると命乞い？最低！」

ウィリアにきっぱりと断られる。

《くっそお！殺せ！どうにかしてでも殺せえ！》

ギアノス達が突っ込んでくるが・・・

「最後は私が行くね・・・！」

「アイリス？大丈夫なの？」

「大丈夫！少し暑くなるけど・・・我慢して！」

そしてアイリスの剣に炎が灯る。

「『炎龍斬破・滅撃刃』！」

アイリスが振り下ろした剣から炎の龍が出現、ギアノス達を喰らっていく。

《ぎゃあああああ・・・》

最後のギアノスがいなくなった時、同時に炎の龍も消えた。

この時、見とれていたハンターはその炎の龍に驚愕し、恐れるしかなかった。

クエストから彼女達が帰ってきたら・・・

「おお！帰ってきたぞ！フレイム・ヴァルキリー《炎の戦乙女》だ！」
「ブリティ・アーチャー《可憐な射手》もいるぞ！」
「フロスト・エンプレス《氷の皇后》だ！」

集会所にいたハンターたちに聞き慣れない異名を言われ・・・

「・・・《炎の戦乙女》？」

「か、《可憐な射手》ってあたしのこと・・・？」

「こ、《氷の皇后》・・・！？私は皇后なんて呼ばれても困るぞ！
」？」

三人とも焦っているが、そんなことなどお構いなしのようにハンターたちは言い続ける。

『や、やめてえっ！』

三人の悲痛な叫びがこだました・・・

「ぷっ……くくく……そ、そうか……お前らも異名がついたか……」

「わ、笑わないでよお！」

「は、恥ずかしいんだよ!？」

「わ、悪い悪い。でも、お似合いだと思うぞ？」

『に、似合うの?』

「ああ。アイリスは炎使いだし戦い方は粗削りなヴァルキリーみたいだしな。ウィリアは可憐と言われて当然な可愛さだし、プリムラは……皇后というよりも姫と呼んだほうがいいんじゃないのか？」
『……っ!!』

三人とも顔を赤くしてしまう。

「あ、アイリス、ヴァルキリーって可愛いというか美しいというか……まあ、結構な美人だって聞くぞ？」

「す、スバル……あまり褒めないでよ……。恥ずかしいから……」
／／／

「か、可愛い……可愛いなんて言われたの初めてだよお……」
／／

「姫……姫……／／／」
「お、おい、大丈夫か？」

無意識に三人の顔を赤くしてしまっていたスバルだった。

報酬。

入手

ギアノスの鱗・川・爪など、有象無象。

クエストクリア

有象無象。

その他

アイリス・ウィリア・プリムラにそれぞれ異名がつく。

プリムラ、過去の清算に成功。

プリムラの過去の異名が判明。

スバルの無意識発言、発動。

第75話 炎の戦乙女（フレイム・ヴァルキリー）・可憐な射手（プリティ・マ

今回、アイリス・ウィリア・プリムラに異名が付けました。

そして、散々出てきた『雪の姫巫女』という異名こそ、プリムラがケリをつけたがった過去そのものなんです。

次回は・・・リナトが・・・！？

お楽しみに！

第76話 リナト、幻術使いになる・・・だと!?(前書き)

タイトルでも判るとおり、リナトが幻術使い(?)になる76話です。

如何様にリナトが幻術を覚えたのか・・・

では、どうぞ!

第76話 リナト、幻術使いになる・・・だと!?

「・・・私にできることって・・・ないのかなあ・・・」

自分の部屋で、リナトは机に突っ伏していた。

「・・・私だって、カクサスに何かしたいよ・・・。ナデシコは料理をどんどん覚えていくし、ニンフはカクサスの癒しになってるみたいだし・・・。私は・・・何ができるんだろ・・・」

自問自答をし、どんどん落ち込んでいくリナト。

「・・・出かけてこよ・・・」

リナトはとぼとぼと町に向かった。

「はぁ・・・」

町に着いたものの、何かするわけでもなくふらふらと歩き続けているだけのリナト。

その足取りは、何をするわけでもなく、何の目的もないことを物語っている。

「・・・あれ？私・・・いつの間にここに来たんだろ・・・」

急に放浪から眼が覚めたりナトは、いつの間にか廃棄場に来ていた。

「い、急いで戻らなきゃ！・・・あれ？この本・・・」

戻ろうとした矢先、一冊の本が落ちていることに気付く。

「・・・『読むだけでサキュバス並みの幻術が使える幻術師になれ

る本』・・・？・・・幻術って・・・使っても何の意味もないよね・
・」

そう思っではいるのだが、何故か手が離れない。

「・・・これでカクサスを誘惑しても、カクサス自身には想いがないんだから、スバルとアイリスみたいなラブラブな恋人同士にはなれないよね・・・」

そう言っではいるが、手が離れない。

「・・・ちょっとだけ・・・」

結局本の誘惑に負け、リナトは本を読んできました。

数時間後。

「・・・はっ！も、もうこんな時間！？ちよっただけだって思ってたのにじっくり読んじやった！」

すっかり夢中になって本を呼んでいたリナト、辺りが紅く染まっているのにも気づけないでいた。

「早く帰らないと・・・、カクサスに心配かけちゃう・・・」

足早に帰路に着いたリナト。

その手には拾った本が握られていた。

「・・・あ、持ってきてしまった・・・」

自分の部屋に着いて、本を持ってきていたことに気付いたりナト。

「・・・でも、いいよね？ひょっとしたら何かに使えるかもしれないから・・・」

自分にそう言い聞かせ、再び本を読み始めた。

翌朝。

「あ、頭が・・・痛い・・・！」

リナトは激しい頭痛で目を覚ました。

「あ、頭が・・・痛いよ・・・痛いよお・・・！だ、誰か・・・」

自分のベッドから動けないまま誰かに助けを求めた。

「い、痛い・・・痛いよ・・・うああ、うああああああ！！！」

ついに痛みに耐えられなくなって悲鳴をあげた。

「リナト！」

意識を失いかけたリナトに聞こえたのは、誰かの声。

「大丈夫か！おい！」

「カ・・・ク・・・サス・・・、た・・・、助け・・・て・・・」

途切れ途切れな声を出し、リナトは気を失った。

「一体リナトに何が・・・！？何が原因なんだ・・・！？」

リナトのことを心配し、原因を究明しようとするカクサス。

「・・・？前リナトの部屋に来た時にはこんな本は見なかったが・・・」

カクサスが見つけたのは、昨日リナトが拾った本。

「・・・幻術・・・もしや！」

カクサスはある一つの事実に逢着した。

「う．．．いたっ．．．、まだ．．．頭が．．．」

気を取り戻したリナト。

「リナト、大丈夫？」

「気を失っていたのに頭を痛そうに抱えていたから心配したよ．．．」

「だ、大丈夫．．．。まだ頭が痛いけど．．．」

リナトは心配しているナデシコとニンフに心配をかけまいと振る舞う。

「リナト・・・、あの本なんだが・・・」
「っ！」

カクサスに本のことを気付かれ、焦るリナト。

「そ、それは・・・その・・・」

「リナト、俺を助けたくて・・・、何かをしたくてあの本を読み始めたんだろ？」

「・・・／＼／＼」

「・・・試しに、俺に幻術をかけてみてくれ。あの本を本当に読むだけで幻術が使えるようになるのかが気になるからな・・・」

「・・・分かった。でも変な幻術はかけたくないから、私が幼く見える幻術にするね。」

リナトはカクサスの目をじっと見つめ・・・

「・・・何も起こらないけど・・・」

「・・・幻術にかかったみたいだ・・・」

「カクサス!？」

「今の俺には・・・リナトが幼く見える・・・」

「わ、私・・・ホントに幻術が使えるように・・・!？」

カクサスも驚いてはいたが、もっと驚いていたのはリナトの方だった。

「えと、解除解除・・・」

リナトが慌てて幻術を解いた。

「・・・元に戻った・・・。しかし凄いな、本当に幻術が使えるようになっていたとは・・・」

「私もびっくりしているの・・・。ホントに読むだけで使えるようになるなんて思ってたから・・・」

「しかし、幻術も強いものなら他者を軽々と殺すほどの殺傷能力もあると聞く。むやみやたらに使うな？」

「わかってる。カクサスのために使うけど、そんなに使うことないもんね・・・」

「だが、俺のために覚えてくれたんだろ？ ありがとうな。」
「っ!？」

カクサスが礼と共にリナトを抱きしめた。

「~~~~っ!／／／」

リナトは顔を真っ赤に染めてしまう。

「ちょ、カクサス、は、恥ずかしいよ・・・／＼／」
「あ、ああ、すまない・・・」

慌ててリナトを解放するカクサス。

「リナト・・・」

「な、なに？／＼／」

「今幻術使ったでしょ・・・」

「つ、使ってない使ってない！こんなことに使いたくないよおっ
！」

「なんで？今のリナトなら使えると思うんだけど・・・」

「だって・・・恥ずかしいもん・・・／＼／」

リナトはカクサスに誘惑は流石に使わない気にいる、ということが
わかった。

「でも・・・魅了の幻術はどう使うんだろ・・・？」

リナトは幻術は使えることがわかったが、誘惑をどう使うのかが分
からなかった。

報酬。

入手

幻術を使えるようになる本。

クエストクリア

クエスト未受注のため無し。

その他

リナト、幻術を使えるように。
恋愛戦争、幻術で激化？

第76話 リナト、幻術使いになる・・・だと!?(後書き)

今回、リナトが拾った本が原因で、リナトが幻術使いになりました。

彼女は、今後戦いに身を投じることになるのか・・・

次回はアイリスとプリムラがお互いの弱点を克服しようと行動、そして○○が野暮なことを・・・

お楽しみ!

第77話 火を制する氷、氷を制する鳥、オババの下した爆弾発言（前書き）

はい、叩かれること必須の77話です。

ええ、もう何言われてもかまいませんよ・・・

では、どうぞ！

第77話 火を制する氷、氷を制する鳥、オババの下した爆弾発言

「・・・（ずーん・・・）」

リナトが幻術を使えるようになる本を拾ったその同日、アイリスとプリムラはリビングで同じ体勢で落ち込んでいた。

「・・・アイリス、プリムラ、一体何があったの・・・？」

二人の重苦しい空気に耐えられなくなったシロンが二人に聞いた。

『だって・・・』

全く同じタイミングで口を開く二人。

「・・・だって？」

シロンも聞き返す。

『もっと仲良くなりたいのに（お話／話）ができない（んだもん）・・・』

言葉は違えど、二人の主張は全く同じだった。

「・・・なんで？話せると思うんだけど・・・」

「だって！プリムラは熱に弱いでしょ！？そして私は寒いのが苦手なんだよ！？」

「お互いがお互いの弱点になってるの！」

アイリスとプリムラが声を荒げる。

「・・・ごめん。私が悪かったわ・・・」

すかさず謝罪をするシロン。

「・・・いいの・・・」

「体質的に私達が悪いんだから・・・」

再び暗くなる二人。

「・・・スバルに相談してみる？きつとスバルなら解決してくれるから。」

『そうする！』

スバルの名前が挙がった途端、目の色を変えたように復活する二人にちよつと引いたシロン。

「・・・でも、あんまり長い時間は話せないわよ？二人ともスバルの看病しなきゃいけないし、スバルもまだあの時の戦いでまだ体が回復したわけじゃないし・・・」
『あ・・・』

結局元通りという状況。

この頃病室では・・・

「スバル、お願いがあるんだけど・・・」
「チェリムル？一体何のお願いだ？」

チェリムルがスバルに相談していた。

「体が治ってからで・・・いいんだけど、お父さんと会ってほしいの。」

「・・・チェリムルの父さん？なんでだ？」

「・・・いい加減娘離れしてほしいから・・・」

「・・・ということは・・・チェリムルの父さんって・・・」

「・・・世界中で多分前例をみないほどの親馬鹿なの・・・」

「お、親馬鹿・・・」

「お願い！一緒に行ってくれないかな！？」

「・・・まあ、それくらいならいいが、俺を『私の彼氏！』とかって紹介しないでくれよ・・・？」

「ソ、ソンナ、コト、ナ、ナイヨ・・・？」

「おーい、片言になってるぞー？」

「はうう・・・バレちゃった・・・」

スバルにやりたいことがばれてしまい、しょぼんとするチェリムル。

「それに・・・今そんなこと言ってみろ、大変な目に遭うぞ？」

「大変な目？」

「・・・《炎の戦乙女》が暴走するぞ・・・」

「それって・・・まさか・・・」

「・・・アイリスだ。」

「わ、私、まさか・・・、逆鱗に触れちゃった・・・？」

「最悪、《氷の姫》フロスト・プリンセスもお怒りになるかも・・・な。」

「あわわわわわわわわ・・・」

焦りがピークに達し、あわわ以外何も言えなくなったチェリムル。

そんな中・・・

「スバル！ちょっと相談したいことがあるんだけど！」

「いい・・・かな・・・？」

アイリス・プリムラがスバルの部屋に入ってきた。

アイリスはいつもの感覚で、プリムラは蛇真っ青な感覚でこっそりと入ってきた。

「・・・？何の相談だ？」

「実は・・・」

二人はそれぞれの想いを伝えた。

お互いもっと仲良くなりたいこと。

なのに体質的な問題で仲良く話し辛い状態が発生していること。

「お願い！私達を助けて！」

「助けろってもなあ・・・」

スバルは頭を掻きながら、二人の問題の解決策を考えていく。

「・・・やっぱり特訓じゃないのか？アイリスは寒さに耐えること、プリムラはちよつと苦しい特訓になるかもしれないが、熱に耐えられる時間を延ばしていく。こうすればお互いの体質にも耐性がつくだろうから・・・な。」

『特訓・・・？』

スバルの話に疑問符が出る二人。

「そうだな・・・アイリスは雪山に行つてブランゴを狩ってくる。プリムラは・・・料理の練習も兼ねてコンロの前に立ってみるとか？」

「スバルう・・・私には無理だよ・・・」

「スバル・・・私を殺す気なの・・・？」

「そんな簡単に死ぬかよ？それに、無理だ、限界だと思つたらすぐに退かせるように言っておくから。」

「だ、誰に？」

「・・・そうだなあ・・・、アイリスはウィリアに、プリムラはデイルカに頼んでみるかな・・・？」

「・・・だったら頑張ってみる！」

「私も！」

二人はすぐに部屋から出て行った・・・

「・・・大丈夫かなあ・・・」

「・・・大丈夫、俺は二人がちゃんと壁を乗り越えてくれると信じているしな。」

「スバルがそう言うなら大丈夫だと思うけど・・・やっぱり心配だな・・・」

心配しているチェリムルと同じ部屋に残って寝転がっていたスバル。

調子に乗っていたアイリスは・・・

「ドドブランゴおーっ！どこにいるのよおーっ！」

まだ雪山と言えない状態の所でそう叫んでいた。

「アイリス、私たちが倒すのはブランゴだよ・・・？」

「気にしない！そっちを倒せばたぶん寒さに耐えられるから！」

「アイリス、ここじゃまだドドブランゴなんていないよ・・・」

「え・・・、てことは・・・まさか・・・雪山登るの・・・？」

「ドドブランゴは雪山にしかないんだよ？登るのは当然だよ。」

「やゝだよお・・・」

「ほら、さっさと登る！ちなみにホットドリンクとマフモフは禁止だからね！」

「ふええゝん・・・。マフモフなんて最初から着てないよお・・・」

「

「ほら、諦めて！」

「あーーーーー・・・」

悲鳴（？）をあげながらアイリスはウィリアに引き摺られていった・・・

スバルの家・キッチン・・・

「・・・唐揚げ・・・作ってみる！」

プリムラの前に置かれていたのは鶏肉、衣用の粉、並々に油を注いだフライパン。

「・・・えっと、プリムラお姉ちゃん、そんなに油使ったら・・・危ないよ？」

「大丈夫！・・・きつと・・・」

早速点火した瞬間・・・

ボ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
ン
・
・
・

「うわっ!?! な、なんだ!?! 一体何があったんだ!?!」

爆発に飛び起きるスバル。

だが、飛び起きたために・・・

「いだだだだだだ!!!!ぐおお・・・痛い・・・これは・・・痛い・・・」

全身に火傷ダメージ。

「す、スバル!大丈夫!?!い、今氷持ってくるから!」

キルティスが慌てて氷を持ちにキッチンに向かった。

「・・・しまった・・・キルティスに何があったのか見てくるように言うの忘れてた・・・」

そう呟いていたら・・・

<ぶ、プリムラ!? 一体何がどうなってるの!?!>

<・・・唐揚げ作ろうとしたらフライパンが爆発した・・・>

<い、今の爆発はなんだったんですか!?!>

<・・・見ないで・・・料理がまともにできない私を見ないで・・・>

キルティスがプリムラに問い詰め、デイルカが答える、慌ててナコルが飛び出てきて、プリムラが嘆く、というシーンが展開されていた。

「・・・プリムラが失敗したんだろうな・・・」

大体の現状を理解したスバルだった。

雪山はと言うと・・・

「さっぶうううううううううっ!」

「ささささ、寒いのはがが我慢ししないと・・・へっくち!」

雪山に登り始めたアイリスとウィリア、二人ともホットドリンクを持ってきたくないうえ、マフモフシリーズを着ているわけがない為、寒がっていた・・・

「む、無理！無理無理！寒い寒い！」

「ど、どどドブランゴをたたた倒さないといいいけないから！」

「も、もうダメ、眠くなってきた・・・」

「寝ちゃダメえええっ！」

眠りかけるアイリスを必死になって起こそうとするウィリアの姿が見られた。

「フライパンがダメなら、鍋で・・・」

「鍋で作った唐揚げなんて見たことないよ!? プリムラお姉ちゃん、フライパンに入れる油の量が多すぎただけだから!」

「油の量が・・・多いの?」

「そうだよ。さっきの量の3分の1の量でいいんだよ?」

「じゃ、じゃあ・・・」

改めてフライパンに油を入れ、衣をつけて、鶏肉を油の中に入れていく。

「あ・・・」

「あ! 今度はうまくいった! 後は・・・」

「熱に・・・耐える・・・だけ・・・」

「え!? もうふらふら!? ちよっと!? 大丈夫!? プリムラお姉ちゃん!」

「もう・・・ダメ・・・」

「こ、氷風呂ー!!! 早くー!」

ディルカが慌てて叫ぶ。

ディルカの足下に倒れこんでいるプリムラはぐったりしていた。

「・・・二人の弱点克服は相当難しいものだろうな・・・」

スバルは自室でそう呟いた・・・

雪山組・・・

「ちょっとウィリア！このブランゴたち、なんか服ばかり狙ってない！？」

「そ、そんな気がしてきた！ひゃっ！こ、このえっちゅっ！」

「い、いい加減にしなさ〜いっ！」

アイリスとウィリアが変な所ばかり狙ってくるブランゴたちを圧倒していた。

料理組・・・

「だ、大丈夫？」

「こ、こんなことでへこたれるわけにはいかない・・・！」

所々天敵であるはずの火傷を負いながらも料理をしようとしていくプリムラ。

「プリムラお姉ちゃん、あまり無茶しちゃダメだよ・・・？」

「無茶じゃない・・・、無茶じゃないの・・・！」

プリムラが無茶じゃないと言い張ってキッチンに立ち続ける。

「だけど・・・耐久時間がどんどん増えて行ってる・・・。プリムラお姉ちゃんが・・・熱に耐えてる・・・」

ディルカも正直驚いていた。

雪山組・・・

グルル・・・

「いた！この欲情猿の親玉！」

「コテンパンにしちゃうんだから！」

二人がボロボロの服装でドドブランゴを睨みつけていた。

スバル宅・・・

「で、できた・・・」

「ちゃ、ちゃんできてるよ・・・！プリムラお姉ちゃん！できて

るよ!ちゃんと!」

「よ、よかった・・・(フラッ・・・)」

ホッとした瞬間、プリムラはバランスを崩して倒れこんでしまった。

「プリムラお姉ちゃん!? どうしたの!？」

ディルカが慌てて駆け寄るが・・・

「すう・・・すう・・・」

プリムラは疲れ切っていたのか、眠っていた。

「・・・プリムラお姉ちゃん、頑張っていたのはちゃんと見ていたからね・・・」

ディルカはプリムラをソファーに寝かせ、プリムラ用の薄い掛け布団を掛けてあげた。

雪山組・・・

「きゃあああああ！服がちぎれちゃう！ちぎれちゃうからやめてえっ！」

「わわわ！このおっ！アイリスを放してよお！」

ドドブランゴに振り回されていた。

ガアアッ！

「（ドスンッ！）あぐっ・・・」
「アイリス！？」

雪に叩きつけられて、一瞬呼吸ができなくなったアイリス。

「ウィリア・・・、炎技・・・使わせて・・・」

「・・・ダメだよ・・・、あたしだってホントは炎技使いたいんだけど、アイリスのために使うなって言われて・・・」

「じゃあ・・・私達・・・死んじゃうのかな・・・」

「私達、下級のドドブランゴのクエストを受けたつもりなのに、上級のドドブランゴじゃないのかな・・・？」

「・・・もう・・・ダメなのかな・・・」

アイリスが諦める意思を見せた時・・・

<まだ諦めるんじゃないっ！>

どこから声が聞こえた。

スバル宅。

「す、スバル！？あれ！？さっきまでいたのに！・・・私がトイレ
行っている間にいなくなっちゃったの・・・？」

もぬけの殻となっていたベッドに涙目で床に座り込んでいたキルテ
イスがただ一人いた。

雪山には・・・

「え・・・」

「そんな・・・！スバル・・・！？」

自分たちの後方から来る人影に驚きを隠せない二人。

「・・・すまなかったな・・・。二人にかなりの無茶を強いてしまったようで・・・」

そこにいたのは、二人が想う相手・・・

先週、町を護るために火傷を負って動けないはずである・・・

スバルがいた。

「スバルっ！」

「大丈夫なの！？」

「もう大丈夫だ。火傷も治ったし、もう普通にクエストを受けられるからな。二人が心配になったから、こうやってここに来たんだ。」

さあ、そのドドブランゴ、俺の大切な人をこんなにしてくれたそのツケ、清算させてやるよ!」

スバルが持っていた剣を向けた。

「それは・・・もしかして私が力を込めた・・・」

「ああ。『炎龍剣《恋紬》』だ。『瞬速斬』は絶対使わないがな。」

スバルが剣を振り上げ・・・

「『炎狼疾駆』!」

斜めに振り下ろした。

振り下ろされた剣から炎の狼が現れ、ドドブランゴに噛みつく。

ギヤアアアア・・・

堪らず悲鳴をあげるドドブランゴ。

「まだ終わるわけにはいかねえ！　まだだ、まだまだあ！」

そして連撃は止まらない。

数分後、ドドブランゴは黒焦げとなり絶命した。

辺りには一切の血が飛び散っていなかった。

「ふう……。大丈夫だったか、二人とも？」

「……。うわあああああああ……。」

「ふええええええええええ……。」

二人がスバルに抱き着いて泣き始めた。

「すまねえな、無茶をさせてしまって……。」

「怖かった……。怖かったよぉ……。」

「もう……。死んじゃうのかって……。思ったんだよぉ……。」

泣き続ける二人を宥め、泣き止むまでそのままではいさせたスバル。

数分後・・・

「・・・落ち着いたか？」

「うん・・・」

「あたしも・・・落ち着いた・・・」

二人とも落ち着いたようである。

「でも・・・嬉しいな。こうやって助けに来てくれたんだもん・・・」

「うん・・・／／／」

そう言って二人がスバルの腕に抱き着くが・・・

「二人とも・・・胸が当たってるぞ・・・、直に・・・」
『ほえ?』

二人はスバルの言うことが全く理解できないでいる。

「・・・服がボロボロだ。特にアイリス、お前の場合それが酷いぞ」
「?」
『・・・』

二人は自分の服を見て・・・

『○▼☆■@▼☆▽@▼☆■@◆!?!?』

「ちゃんとした言葉で喋れよ・・・」

「す、スバル! 背中にくつつかせて! このままじゃ、集会所に行けないよおうっ! //」

「あ、あたしはおんぶして! こんなぼろぼろじゃ皆の前に行きたくない・・・ //」

「ちょっと待て! 俺にはそんなことは刺激が強すぎるから! とりあえず俺の上着渡すからそれで我慢しろ! //」

スバルが慌てて上着を脱ぎ、後ろを向いて二人に着せる。

『あ、ありがとう・・・／＼／＼』

二人同時にお礼を言う。

「・・・とりあえず帰ろうか・・・。うお、さみい・・・」

「うん！」

「帰ろ！」

上半身がインナーだけのスバルと、スバルの上着を着ていたアイリス・ウィリア。

帰宅後・・・

「お姉ちゃん！ウィリアお姉ちゃん！無事でよかった！」

「デイルカ、プリムラはどうしたんだ？」

「疲れて眠っちゃったの。しばらくそっとしておいてあげよ？」

「俺たちも疲れたしな・・・」

そう言ってリビングに上がった瞬間・・・

「スバルー！（ドンッ！）」

「ぐほあっ！？」

シロンがスバルに突進した。

「し、シロン！？いきなり突進するなよ！」

「いきなり・・・いなくならないでよ・・・。びっくりしちゃうし・

・心配するんだから・・・ぐすっ・・・」

シロンがスバルを突進した勢いで押し倒したのは、ただ押し倒したかったのではなく、心から心配していたからだ。

「ホントに・・・心配したんだから・・・」

「ごめんな。心配かけたみたいで・・・」

「バカ・・・バカ・・・」

シロンはスバルの上に乗った状態で涙をぽろぽろ流していた。

「・・・シロン、そろそろ退いてくれないかな？」

「・・・嫌。私、まだスバルのこと諦めてないもん。私の初めてのキスあげちゃったし・・・／／／」

「わ、私だって初めてのキスあげたもん！・・・スバルに・・・／

／

「あ、あたしだって！だけどあたしは一線引いたんだよ！？シロンもそうしたら楽になれると思うよ！？」

「私は一線引きたくないの！本気の恋なんだから！」

シロンがスバルを抱きしめ、アイリスも対抗するようにスバルを抱きしめる。

いつもと違うところは、スバルを気遣ったのか、優しく、少し力を込めればすぐにすり抜けるかのような抱きしめ方だった。

「・・・いつもスバルお兄ちゃん痛そうにしているのに、今日は痛そうじゃない・・・」

「ああ・・・、いつもより弱めにしてきているみたいだな・・・」

ディルカとスバルが二人で話していたが・・・

「スバルは私の恋人なんだよ!？ シロンが諦めてよ!」
「嫌よ! 諦めたくないの!」

スバルの上で言い争いが続く。

「ねえスバル、この際だけど・・・アイリスとシロンを同じ扱いにしたら・・・どうかな?」

「ウィリア!？ そんなわけにいくかよ!？ そんなこと許されるわけが・・・」

「じゃあ、オババに聞いてこようか?」

ディルカが突如そんなことを言い出す。

「そんなこと・・・できるわけ『聞いてきて!』 って! お前らなあ
!」

アイリスとしてはスバルを取られる可能性が出てきてしまう、シロンとしてはアイリスだけのものにさせないため・・・である。

「じゃ、行ってきました！>

ディルカはオババの元へ行ってしまった・・・

スバルの上では・・・

「ううっ・・・！」

「ふっ・・・！」

「・・・お前ら猫か・・・？」

アイリス・シロンの眼の間に火花が散っていた。

数分後・・・

「聞いてきたよー！」

『ディルカ、どうなの！？』

アイリスとシロンが物凄い剣幕で聞いてくる。

「えっと、オババはね？ 『ポツケの英雄なら重婚も認めていいのう・
・・・』 って！」

「やった！」

「そんなあゝ・・・」

シロンは喜びアイリスは落ち込む。

「・・・重婚なんて普通認められるかよ・・・。つか、俺は絶対重婚しないつもりだが・・・」

「え〜？ いいじゃん！」

「よくない！」

「・・・じゃあ、初めてのキスを捧げた私達の責任とってよ・・・

／／／

「責任とれつつてもなあ！ 一体何をしろって言うんだよ！」

「・・・重婚を認めてほしいの・・・／／／」

「だから・・・それは無理だっの。」

「責任・・・／／／」

「迫るな迫るな！」

「ダメだよ！ そんなことは許されないんだよ！？」

「・・・じゃあ、私の初めてのキスはどうすればいいの・・・？

・ぐす・・・」

「う・・・」

「・・・アイリス、重婚はやっぱり駄目だよな・・・」

「・・・私を一番に見てくれるなら・・・認めても・・・いいよ・・・

・？／／／

アイリス、重婚を条件付きで認めた・・・

「・・・デイルカ、この状況が所謂『四面楚歌』^{いわゆる}という状況なのか・・・？」

「四面じゃないけど・・・そうみたいだね・・・」

いつの間にかナコルもあり、三方を囲まれていた。

「私が第一夫人だからね！」

「違います！私が第一夫人です！」

「私よ！」

「・・・あのさ、スバルからちゃんと告白されたアイリスが第一夫人・・・じゃないの？」

再び争奪戦が始まった・・・

「オババの野郎・・・！野暮なことしやがってえ・・・！！」

アイリス・ナコル・シロンに三方から抱きつかれた状態でスバルが怨嗟の声を漏らした・・・

翌日・

「・」
「・」
「・」
「・」

アイリスとプリムラが向き合っていた。

『あ・・』

お互いの手を触りあった時、いつもと違う感覚に思わず声を漏らした。

「さ、触れるよ！まだやっぱり完全に寒くないなんてことはないんだけど、プリムラと向き合っていていられる！」

「アイリスに・・・触れた・・・！アイリスの手・・・優しい暖かさなんだね・・・」

「ちょ、プリムラ・・・、恥ずかしいよ、そんなこと言われると・・・
／／／

お互いの弱点が少々克服された瞬間だった。

報酬。

入手

ドドブランゴ襲撃の際、完全に紛失。

報酬。

スバル介入のため、報酬は無扱いに。

その他

オババ公認の重婚、アイリスが条件付きで認めた・・・

アイリスとプリムラ、お互いの弱点を少々克服。

シロン、改めてスバルに告白、キスを盾に迫る。

ナコルもシロンと同じ行動で迫る。

プリムラ、唐揚げを作れるように。

スバル、復活↑（○△○○；）！？

第77話 火を制する氷、氷を制する鳥、オババの下した爆弾発言（後書き）

今回はスバルが復活しました（○△○○；）。

ええ、異常な速度で・・・

次回は・・・内緒の方向で！

どんな内容かはお楽しみに！

第78話 過保護なチェリムル父（前書き）

お久しぶりの更新となりました、78話です！

タイトルからわかるとおり、チェリムルのお父さんが出ます。

かなりぶっ飛んだお父さんなのでお楽しみに！

では、どうぞ！

第78話 過保護なチェリムル父

スバルが凄い回復能力を見せ、火傷が完治したその翌日・・・

「くああっ・・・」

スバルが目を覚ます。

「・・・っ！」

すぐさま周りを確認したスバル。

「・・・誰もいないみたいだな・・・」

このところ最近、自分のベッドに誰かが侵入していることが絶対あったため、誰も侵入していないことは初めてだった。

そんな光景に、スバルは一時の幸せを感じていた。

「さてと・・・今日は・・・おっと、チェリムルと約束があったな。」

スバルは今日の予定を考えていたところ、チェリムルとの約束を思い出した。

「チェリムルの父親・・・、どうなるかが全く分からないな・・・」

普通に不安になってくるスバルであった。

「・・・眠気が・・・」

ウトウトとし、ふらふらしているスバル。

「・・・ただただ眠り足りないだけか・・・」

折角起きたものの、結局ベッドに戻ってしまふ。

「・・・もう一眠りするか・・・」

結局二度寝することにした・・・

数分後・・・

「スバルく・・・朝だよ・・・？」

アイリス・チェリムルが起こしに来た。

「・・・珍しいな、スバルがまだ起きてこないなんて・・・」

「そうだね・・・。はぁ、今日約束したのに・・・」

「（ピクツ）約束？」

「うん・・・。一緒にお父さんに会ってほしいって・・・」

「あ、あのね！？それはダメだよ！お父さんに会って・・・完全に結婚確定じゃん！」

「ち、違うの！結婚するしないの話じゃなくて、お父さんに娘離れしてほしかったからなの！」

アイリスの疑いに必死に否定をするチェリムル。

「・・・（じとー・・・）」

「信じてくれないの・・・？」

「・・・だったら私もついていくからね・・・」

「別についてきても大丈夫だよ。お父さんに娘離れするように言い聞かせるだけだから。」

そしてスバルの部屋に着く。

「スバル、朝だよ。起きて。」

アイリスがスバルの体を揺すって起こそうとする。

「・・・ダメ、全然起きないよ・・・」

「もっと激しく揺すってみたら？ひょっとしたらそれで起きるかもしれないよ？」

「・・・そうする！」

そしてアイリスがスバルに近づいていったら・・・

ゴロン。

ガシッ。

「ほえ？」

眠り続けているスバルに腰を掴まれるアイリス。

そのまま・・・

グイッ！

「ひゃわっ！？」

スバルに抱き寄せられた。

「・・・寝ぼけて・・・るんじゃないよね・・・。完全に寝て、それで引き寄せたんだよね・・・？」

「スバル・・・いきなり抱き寄せられても・・・、は、恥ずかしいよお・・・／＼／＼」

アイリスは顔を赤くしてスバルに文句を言うが、スバルは・・・

（スバル・・・なんだ？俺の部屋に抱き枕なんてあったか・・・？だが・・・、なんだろう、心が落ち着く・・・）

アイリスが赤面して恥ずかしがっていることは全く分からなかった。

「す、スバル、わ、脇腹触らないでよお！く、くすぐった・・・くひっ！うひひひひ・・・」

未だ眠り続けているスバルは、状況的にアイリスを撥っていた。

「あ、アイリス・・・脇腹が弱かったんだ・・・」

「だ、ダメっ！きやはははは！そ、それ以上は・・・あはははははは！！」

「すう・・・（ゴロン！）」

「わきゃっ!？」

またスバルが寝返りを打ったため、ついにアイリスがベッドの上
まで転がる始末。

「あ、アイリス！？だ、大丈夫！？」

「はにゃあ~~~~~！！！」

「アイリス、ちゃんとした言葉で喋って〜！」

好きな人の顔が目の前にある状況に困惑し、恥ずかしくなっ
てしまったアイリスは、完全に言葉にならない悲鳴をあげた。

数分後・・・

「くぁ・・・お？アイリス？なんでここにいるんだ？それにチェリムルも。」

「起こしに来ただけど・・・アイリスはスバルが抱き寄せたんだよ？」

「・・・マジでか？」

「ホントホント。」

「顔が赤くなって『はにゃはにゃ』言ってるのも・・・」

「スバルのせい。」

「はにゃ・・・」

「・・・アイリス、すまん。」

自分の横で『はにゃ』と言いながら呆然としているアイリスに謝罪したスバル。

リビング。

「・・・なんでアイリスが赤面しているの？まさか・・・またスバルとキスしたとか・・・!?」

「そ、そうじゃないよ！そうじゃなくて！スバルに・・・えっと・・・その・・・／／／」

「そうじゃなくて・・・なんですか？」

「スバルに・・・抱きしめられちゃったから・・・／／／」

『スバル！』

「な、なんだよ!?」

「アイリスじゃなくて私を抱きしめて！」

「違いますよ！私を！」

「・・・あのな、俺は・・・全くそのことの記憶がないんだぞ？」

「良いの！そうしてもらえるならそれで！」

「そうです！抱きしめてもらえるだけでもとても嬉しいんですよ！？」

「だから言い寄るな！抱きつく準備をするな！頼むから！」

「ちよっと！アタシだって抱きしめてもらってないんだからね!?」

「ダイアナ、お前もか!?」

「わ、私も・・・ですよ・・・？」

「俺の中で一番の良心だと思っていたクロスもかよ・・・」

かなりの混戦が結局発生した。

「お前ら、いい加減にしろ……。クエストに行かなければならないだろうが……」

『あうう……。』

「今回は……。火山に行くのか？」

「一応……。な。チェリムルと約束していたし、ついでに火山でのクエストをこなしておかないとな……」

「火山でのクエスト……。か？」

「まあな。そろそろG級の話もあるだろうから、鍛錬をしておかないと死にかねんからな……」

「それで……。どのクエストに向かうつもりなんだ？」

「とりあえず……。火山でツアーでもやっておくか？ 上級なら確かに色々とモンスター出てくるし、なにがしら大物も出てくるだろう？」

「そうか。なら俺もついていこう。それと、今回のクエスト何だが、リナトの同伴は許可できないだろうか？」

「リナトの？ それは構わないが……。一体なんでだ？」

「ちよっと試しておきたいことがあってな……」

「クエスト参加、我も構わないか？ 体を動かしておきたいものでな。」

「アレックスもか。別に構わないぞ？」

「わ、私も……。いいかな？」

「……。チェリムル……。自分でした約束を忘れたのか？」

「……。あっ！！」

約束を思い出して、大声を出すチェリムル。

『わ、私も行く!』

「私も行きます!」

「私も!」

「・・・歯止め役としてあたしもついていった方がいいのかな・・・?
」

アイリス・ナコル・シロン・キルティスが行きたいと言い出し、ウイリアがその四人の歯止め役としてついていくことにした。

「ウイリアよ・・・、一線を引いた、という自分の判断はそれで良かったのか・・・?」

「それで良かった良くなかった、と思うのはあたし自身がどう思うか、でしょ? あたしはそれでいいの。あたしは・・・ね。」

ウイリアの想いはアレックスにはよく伝わった。

本当はスバルの恋人になりたい、けどスバルにはアイリスがいる。

だったら自分は身を引こう・・・

そして、できる限り一緒にいて・・・

自分は恋を・・・捨てよう・・・と。

「ウィリア、本当のことをスバルに伝えたのか？」

「本当の・・・こと？」

「自分の恋を、女子として当然のことを捨てようとしていることを・・・だ。」

「・・・」

アレックスに自分が現在考えていることを言い当てられ、黙り込むしかできなくなっていたウィリア。

「スバルのことを忘れられないのだろうか・・・自分の恋は捨てるものじゃないのだぞ？恋をする自由はあれど、捨てる自由はないと思うぞ？」

「いいの・・・、もう・・・。あたしはスバルと一緒にいたいから・・・」

「そうか．．．。それがウィリアの想いなのか．．．。ならば我は何も言わぬ。」

「ありがと．．．。」

アレックスとウィリアの話が終わった後、大人数で集会所に向かった。

クエスト…荒れ狂いし鎧龍

開始。

「久しぶりの・・・場所だ・・・」

「今回はチェリムルの父親に会いに行くだけのクエストだから、あまり戦うことはないだろうが・・・」

「こう言う時に限って誰かがいるんだよな・・・」

暫くふらふらとグラビモスを探し回っていたら・・・

ゴオオオオオオオン・・・

「振動!？」

「す、スバル、こ、怖いよお・・・（ひしっ）」

「うう・・・（ひしっ）」

突然の轟音に怯えてスバルの腕にしがみつくウィリアと座り込んでしまうシロン。

「シロンとウィリア・・・怖いのがダメなの？」

「だ、ダメなのよ・・・」

「だ、だ、ダメなのお・・・」

ウィリアはまだ足が震えているだけで立ってはいるものの、シロンはすっかり腰がくだけてしまっていて、床にへたり込んでいた、

「シロン、おぶって行ってやろうか？どうも腰がくだけてしまっているようだしな・・・」

「お、お、おね、おね、お願い・・・」

恐怖が強過ぎるためか、噛み噛みになってしまっている。

結局、シロンがスバルにおんぶしてもらっている、という現状が生まれていた。

第5エリア・・・

「いた！グラビモス！」

「・・・お父さん・・・」

パツと見、何かを失って荒れ狂って暴れているような状況のグラビモスを見つけたスバル達。

チェリムルははつきりと『お父さん』と言っていたことから、そのグラビモスがチェリムルの父だろう・・・

「このままいても埒があかねえ、さっさと会いに行くか。」

そして全員でグラビモスの所に向かって行った。

グオオオオオオオ！！

「・・・相当荒れているな・・・」

「だって、お父さんに娘離れしてほしいって言ったじゃん・・・」
「・・・そうだったな・・・」

そう話し合っていたら・・・

くるっ。

グラビモスがスバル達の方を向いた。

ガアアアアア！

向いてスバル達を見つけるや否や、突如として吠えるグラビモス。

「突進が来るぞ、気をつけろ！」

グラビモスが走り始めたので警戒をするが・・・

キキキキキイイイイ・・・

「と、止まった・・・？」

チェリムルの前で停止した。

「スバル、閃光玉を貸して？」
「あ、ああ、いいけど・・・」

スバルが閃光玉をチェリムルに渡す。

「えい。」

閃光玉を炸裂させた・・・

光がはれて・・・

「チェリムル・・・なのか・・・？」

「実の娘を忘れるなんて・・・最低だよ、お父さん・・・」

「おおっ！チェリムル！お父さんがどれだけ心配したと思っているんだ！？」

チェリムルの父親が、チェリムルを抱きしめる。

「ぐえ・・・お、お父さん・・・くる、くるじい・・・」

「おお、すまんすまん。」

「もう、どこに行ったって私の勝手でしょ!？」

「いや、それはそうだがな?心配するのは当たり前だろう?」

「いいの!私にも好きな人ができたんだから!」

「好きな・・・人だと・・・!？」

チェリムルの発言に驚愕するチェリムル父。

「・・・一体どこの馬の骨を・・・!？」

「馬の骨じゃない!お父さん以上に優しくて、あったかい人なんだから!」

「ほう・・・一体誰だい・・・?」

「この人・・・／／／」

チェリムルはスバルの腕に抱きついて、好きな人を示した。

チェリムル父はチェリムルが指差した方を見た（睨みつけるように）。

「・・・い・・・」

「・・・い?」

「一体どうやって私の娘を誘惑したんだ!？」

「誘惑してない!そんな力なんて持ってない!」

「娘は、娘はやらんぞ！」

「第一貫うだなんて言っていないし！」

「・・・お父さん・・・」

「っ！？ちえ、チェリムル・・・？」

急に声のトーンが低くなったチェリムルに恐る恐る振り向くチェリムル父。

「私の恋を許してくれないと・・・『イチヨウさん』って言うよ・・・」

「そ、それだけはやめてくれ！そんなことを言われたらとてもじゃないが堪らん！」

あっさりと娘に頭を下げる父の姿に、スバル達は呆れるしかなかった。

「だったら、スバルと仲良くしてよ！」

「むう・・・本当はそんなことしたくないのだがなあ・・・」

「・・・『イチヨウさん』・・・」

「わ、わかった！わかったから！」

結局あっさりと陥落した。

「・・・私がチェリムルの父、イチヨウだ・・・」

「・・・えっと、スバルです・・・」

「・・・敬語でなくていい。・・・だが、娘はやらんぞ・・・」

「・・・お父さん・・・？」

「い、いや、やっぱりな？チェリムルはお父さんの中では一番可愛いからな？」

「そんな可愛い娘を好きに恋させてくれないんだ・・・」

「・・・むう・・・」

「い、いや、俺には既に恋人がいるし・・・」

「・・・スバルがどこまでの男なのか、見極めよう・・・」

「は？」

「・・・一緒に暮らしていく、ということだよ。」

「・・・お、お父さん・・・が！？」

「お父さんが一緒にいたらダメなのか？」

「そ、そんなことはないんだけど・・・でも、そうするとスバルにいろいろできないし・・・／／／」

焦っているチェリムル。

「あくまでスバルのことを見るだけだからな。」

「・・・もう・・・」

イチヨウがついてくることになった。

「・・・お父さん、その葉っぱはなんなの・・・？」

「・・・格好良いだろう？」

「・・・カッコ良くない・・・」

「そんな!？」

他愛のない親子談義が繰り広げられていた。

報酬。

入手

特になし。

クエストクリア

クエストリタイアのため無し。

その他

イチョウ。

チェリムル、問題を抱えることに・・・
スバル、寝ぼけると恐ろしいことを起こすことが判明。

第78話 過保護なチェリムル父（後書き）

今回は鴉く夢の運び屋くさんのリクエストでイチヨウさん出ました。

彼のプロフィールです。

名前…イチヨウ

性別…男

見た目年齢…26才

髪型…レウスショートからアホ毛が2本

身長…186cm

元のモンスター…グラビモス通常種

性格…とても手がつけられないくらいの親バカ。

妻がチェリムルを産んで間もないうちにハンターに妻を狩られたのでハンターを嫌悪している。

クールな顔立ちだが、実はとても熱血漢。

グラビモスだったときは、いつも炭を銜えて歩いていた。それが人間になると、口の周りが寂しいという理由からタバコを銜えるようになった。

グラビモスの中ではかなり大きな方だが、娘一筋で世界一の親バカなので娘のチェリムルにはどうしても威厳を持った態度で接することが出来ない。それどころかチェリムルの不幸体質を直そうと、自分の身を溶岩に投げ込んだほど（しかし、グラビモスなので当然何

の支障も無く、なにも変化は起こらずに不幸は続く。」

スバルに敵対心を持つてはいるがそれなりに協力的な態度「所謂ツンデレ」をとってチェリムルを守ろうとしている。

タバコを吸ってもいないのに吸殻を銜えていることを娘に聞かれた時の反応。「かっこいいだろ？」

こう見えてパンを作ることが得意で、皆にパンを振る舞うこともある。その味は絶品で、美味しいの一言以外は評価の付けようがない。

以上です。

今回はスバルが遂にG級クエストに挑戦！

そしてアイリスが抱える不安とは・・・！？

お楽しみに！

第79話 G級昇格、そのクエストは『ダイヤモンドダスト』 (前書き)

ついにスバルがG級クエスト初挑戦になる79話です！

前回の最後に触れた『アイリスの不安』とは・・・

では、どうぞ！

第79話 G級昇格、そのクエストは『ダイヤモンドダスト』

「・・・ふんっ!!」

早朝、スバルは庭で剣を振っていた。

なぜ、彼が庭で素振りを行っていたのかは・・・

事の発端は昨日のことである・・・

集会所。

「・・・俺がG級昇格？」

スバルは受付でその話を聞いていた。

「はい、あくまでその為のクエストをクリアしてから、ですが。」
「・・・もうそこまで来たのか・・・」

感慨深くなっているスバル。

（スバル…下級でクックを倒そうとしてアイリスと会って、皆と会って・・・、何度も死にかけてその都度立ち直って、そしてアイリスが俺の恋人となって・・・。色々あったんだな・・・）

スバルが物思いにふけっていたら・・・

「そのクエストですが、明後日でないと受注できないんです。まだ正式にクエストが発令されたわけではないうえ、仮受注、という状況なので・・・」

「・・・ああ。そのことならまだ大丈夫だ。急な話だったからまだ準備が済んでいないし。それに・・・」

「・・・彼女さんのことで何かあるんですか？」

「うえっ！？／＼／」

「あ、本当のことだったんですね・・・」

「じゅ、準備するから明後日また来る！」

スバルは慌てて集会所を立ち去った・・・

そして現時刻・・・

「101!102!103!」

「朝から素振りか・・・」

「104!・・・カクサスカ・・・」

「何か良い事があったのか?」

「ああ。明後日、G級昇格クエストが受注できそうだから、そのためのトレーニングだ。」

「G級・・・せめてお前が死なないことを祈っているよ・・・」

「そんな簡単に死んでたまるかってんだ。アイリスを心配させるわけにはいかねえし。」

「・・・だろうな。それで、もうそろそろ朝食の準備が終わるころだと思うが、いつごろまで鍛錬を続ける気だ?」

「・・・俺の気が済むまで。といっても、素振り300回やり終わるまで、かな?」

「俺が来た時は・・・104回目を振り下ろした瞬間だったな・・・」

「だから・・・あと196回っ!」

そしてスバルは再び素振りを始めた。

そんなスバルを見つめる影が・・・

「スバル・・・無茶したら悲しいのはアイリスだけじゃなくて私もだぞ・・・」

・・・見つめていたのはプリムラだった・・・

炊事場にて・・・

「・・・スバルがいない・・・」

「何でなの・・・？」

「庭で鍛錬していたぞ。何でも、あと200回以上素振りをしないと戻ってこないつもりでいるようだ・・・」

「200回って・・・」

「ご飯冷めちゃいますよね・・・」

「・・・／／」

「・・・プリムラ？」

「スバルが素振りしているところ見ちゃった・・・／／」

「ずるい！私だって見たかった！」

「私もだよ！抜け駆けは許さないんだから！」

「抜け駆け・・・」

「そうだ・・・」

プリムラがスバルの素振り光景を見たことが抜け駆けだと言い出す娘達、それにタリスとアルテアが何かを閃いたかのような笑みを浮かべた。

『アレックスは譲らな「アレックスなら最近見かけないっすよ？」・
・い・・・』

あわやアレックス争奪が始まるかと思いきや、クリムの放った一言で一気に鎮火した・・・

「だけどスバルがそんなに頑張ることってあるのかなぁ・・・」
「今度G級クエストを受けることになったらいい・・・」
『G級!?!』

一度に声を荒げる娘達。

「じ、G級って一番難しいレベルのクエストだよね!?!」

「お、お父さん、分かる!?!この難しさが!」

「あ、ああ、わ、わかるぞ・・・」

「・・・(じとー・・・)」

「ちえ、チェリムル、お父さんを疑っているのかい?」

「・・・うん。」

「酷い!」

「・・・親子漫才はなしにして・・・」

『漫才じゃない!(スキンシップだ!)』

「ってお父さん!スキンシップじゃない!」

そう言い争い的なことが起こっていたら・・・

「・・・ふう、300回のつもりが350回やっていた・・・」
『スバル!』

スバルが素振りを終えて帰ってきた。

「スバル、明日G級を受けるのって本当!？」
「ん? あ、ああ、本当だ。明日、しかもターゲットは二匹ときた。
これほど楽しみなことは今までになかったぞ!？」
「スバル・・・」
「アイリス?」

アイリスがスバルに抱き着いた。

「死んじゃ・・・やだからね・・・」
「そんなに死ぬ死ぬ言われてもな・・・」
「だって心配なんだもん・・・」
「だからって『死ぬ』を連呼することはないだろうが・・・」
「でもお・・・」

アイリスはG級のことを、その難易度を、そして、受注したハンターが死ぬ確率の高さを、知らず知らずのうちに理解していたのだ。

「大丈夫だ、死にかけることはあっても実際に死んだことはあったか？」

「・・・死んだらもう会えないのに・・・」

「そうだよ！スバルが死んだら・・・私・・・私・・・っ！」

「・・・ああ。せいぜい死にかけることだけに止めておくよ・・・」

「死にかけるじゃダメなの！というよりも死にかけちゃダメ！」

「そうよ！・・・アイリス、いい加減離れてくれないかしら・・・！？」

「離れるのはそっちでしょ！私はスバルの恋人なんだよ！？」

「・・・さっきまでの雰囲気返してくれ・・・」

先程までの心配ムードは一転、結局スバルの取り合いが始まった。

翌日、空が白み始めてきた頃・・・

「・・・皆、行ってくる・・・」

スバルが全ての準備を済まし、戸を開けて外に出たその瞬間・・・

バンッ！

ガシッ！

「・・・っ！？」

いきなり何者かに背中に抱き着かれた。

「だ、誰だ!？」

「やっぱり・・・行ってほしくないよ・・・」

「あ、アイリスか!？キルティスか!？」

「ホントに・・・行かないで・・・」

「・・・アイリスか・・・」

「うん・・・」

「それで、行ってほしくないって・・・」

アイリスがスバルの服を掴む。

「・・・嫌な夢見たの・・・。スバルが、スバルが死んじゃう夢見ちゃって・・・」

「・・・俺が、死ぬ夢？」

「うん・・・。ちょっと前からだったんだけど、前はそこまで酷い夢じゃなかったんだけど・・・」

「だけど？」

アイリスがスバルの服をより強く掴む。

「一昨日から酷い夢になって・・・、今日なんて・・・夢に・・・私が・・・出てきて・・・、私の・・・目の前で・・・、スバルが・・・、スバル・・・が・・・っ!」

「無理に言わなくてもいい、思い出さなくてもいい!」

どどん涙声になって行くアイリスを宥めようとするスバル。

「だから・・・えぐっ・・・だから・・・うつ・・・、ううう・・・」

「落ち着け、落ち着いてくれ。絶対に生きて帰ってくる！」

嗚咽交じりに声を放つアイリスを落ち着かせるスバル。

「ほっ・・・ホント・・・、うつ・・・、ホントに・・・？」

「本当だ。ちゃんと帰ってくるから。」

「約束・・・だから・・・ね・・・？」

「ああ、わかった。行ってくる。」

「うん・・・、行ってらっしゃい・・・」

涙目とはなっているものの、どうにか落ち着いて、スバルを見送るアイリス。

その顔には恐れが残るが、どこか安堵の表情も浮かんでいた。

クエスト..
『ダイヤモンドダスト』

開始。

「ふう……。まさかアイリスがそんな夢を見ていたなんてな……」

スバルは正直なことを考えていた。

「……俺が死ぬ夢、か……。アイリスに迷惑かけているんだな、

俺・・・」

そんなことを考えていた。

「だが、心配かけないように、生きて帰らないとな・・・！」

スバルはただ淡々と雪山を歩き続けた。

一方、スバル宅では・・・

「・・・よかった、ちょっと・・・ホッとしたよ・・・」

外にただ一人残っていたアイリスは、胸を撫で下ろしてホッとしていた。

「・・・アイリス、どうしたの・・・？」

「あ、チェリムル、おはよ。」

「おはよぉ・・・。それでどうしたの・・・？」

「えっと・・・ね？スバルを見送っていたの・・・」

「・・・目が赤くなってるよ？」

「ふえっ！？え、そ、それは・・・その・・・／／／」

「・・・その目のくまが原因なの？」

「そ、それはちょっと・・・言いたくないな・・・／／／」

「言ってよ！気になるから！」

「やっだっ！」

「言ってよっ！」

「やっ！」

アイリスとチェリムルの言い合いが行われていた。

雪山・・・

「・・・いた、ドドブランゴ！同時にティガレックスもいるけど！」

エリア7でドドブランゴとティガレックスを同時に発見したスバル。

「悪いが・・・一旦眠ってもらおう！」

スバルは『ノブ特製強力眠り玉』を二頭に向けて投げた。

ポフンッ！

二頭の間で破裂した眠り玉は、二頭を完全に包む量の煙を噴出した。

「よし・・・眠ってくれよ・・・？これ以上アイリスたちを心配させたくないな・・・。頼むぞ・・・」

スバルはただただ、二頭が眠りこけていることを祈っていた。

煙が消え失せ、二体の姿が・・・

なかった。

『すう・・・すう・・・』

「なんで・・・なんでなんだよ・・・」

スバルは目の前の現実を認めたくなかった。

「とりあえず女の子では・・・なさそうだな・・・」

スバルはその二人が女の子ではないだろうと確信した。

・・・理由は様々、言うてはいけないところでもあったが・・・

「久しぶりに男を見たが・・・、黄色い髪の方は背が小さいな・・・見た目13く4？白髪の方は・・・レノシアと同じくらいか・・・」

二人をパツと見で判断している。

「う・・・ん・・・」

黄色い方が目を覚ました。

「お、黄色い方が目を覚ました・・・」

「・・・あ！さっき何か投げたハンター！」

ビシッ！というような効果音が出るかのように指を指す黄色い髪の男子。

「お、俺が何だって言うんだ・・・？」

「『不殺のハンター』だ！すっげ！初めて見た！強そう！」

「な、懐かしい二つ名だな・・・。しかし、俺はもう『不殺』ではないし・・・」

「そうじゃなくても！ね、ねえ、『兄さん』って、呼んでいい！？」

「・・・突拍子もない・・・いきなりな話だな・・・」

「ダメ？ダメ？」

「・・・それは別に構わないが・・・名前は？」

「なま・・・え？」

「ないのか・・・。帰ったら考えないとな・・・」

「？」

黄色い髪の男の子は頭に疑問符を浮かべていた。

「・・・確認するが・・・男だよな？」

「男だよ？」

「よしっ！俺は救われた！」

「??？」

スバルが急に腕を上げて喜んだため、更に疑問符が浮く男の子。

「・・・そう言えば兄さん、あの白い髪の子、起きないね・・・」

「・・・叩き起こすのは流石に忍びないし・・・」

「だよね・・・」

「・・・く・・・」

もう一人が目を覚ました。

「あ！意識を取り戻したよ！」

「お、これで両方ともだ。そしてあの子は気を失っていたんじゃないかと眠っていたんだ・・・」

「あれ、そうなの？」

「・・・僕は・・・？」

「目を、覚ましたみたいだな。すまない、無理に眠らせるようなことをして・・・」

「いえ、別に謝られても・・・、僕は気にしてないから・・・」

「・・・そうか・・・」

「あ、あなた、腕に傷が・・・」

「ん？あ、ああ、これは・・・どうも蔦を登っていた時に擦りむいたか・・・？」

「ちょっと待ってて・・・薬草が確かこの辺にあったから・・・」

「・・・兄さん、ここに来るまでに擦りむいたの・・・？」

「多分な。」

白髪の子がその辺にあった薬草を摘み戻り、調合を始めていた。

「・・・カトレアに少し劣るか同等かの技術だな・・・」

スバルが正直なことを言っていた。

数分後・・・

「・・・終わったよ。腕、見せて？」
「あ、ああ。」

スバルは疑うことなく腕を出す。

「ちょっと沁みるかもしれないけど・・・、我慢して？」

「平気さ、死にかけたり目を切り裂かれたりしさえしなければな。」

「兄さん、その目って・・・」

「ん？この目か？ああ、バサルモスを討伐しようとして失った・・・」

「そうなんだ・・・」

「・・・うん、これで終わり。大丈夫？痛くない？」

「全然。・・・少し聞きたいことがあるが・・・」

「何？」

「男・・・だよな・・・？」

「よく女の子って言われるけど・・・僕は男。」

「・・・ホントに女の子みたいな姿だね・・・」

「・・・言わないでよ・・・。悲しくなるから・・・」

「あ、ゴメン・・・」

「それと・・・名前は・・・」

「僕はラネッサ。・・・名前からも女の子って言われる・・・」

「俺はお前を女とみない。男だって知ったからな。」

「うん、ありがとう。」

「・・・しかし、どうするべきなのだ・・・？これじゃクエスト失敗となるし・・・、気をつけないと俺が犯罪者だといわれる可能性だって出てくるだろうしな・・・」

「さっき抜けた僕の鱗があるし、それを証拠とすれば？」

「お、おお。ありがとうな。」

そうして三人は帰路についた。

（この間、黄色い髪の子はスバルの意見により『ロズウェル』と名づけられた）

集会所前・・・

「さて、集会所には着いたものの、一体どうすれば・・・あ！」

スバルは今連れている二人を見て、どうするか考えていたら、あることを考えていた。

「そうだ、遭難者とすれば・・・、しかも、旅人と一緒にいて逸れた、ってことにすれば！」

そう考えついて集会所に入り（黄色髪の男子には『兄さん』と呼ばないように釘を刺し）、集会所でクエスト達成の報告をし、ついにスバルは・・・

G級へと昇格した。

スバル宅。

「皆……ただいま……って、誰もいるわけないよな……。
今真夜中だしな……」

スバルがリビングに音を立てないように入って行くと……

「むにゃ……ふにゅ……」

「ふにゅう……」

「っ！？（ガタッ！）」

いきなり聞こえた声に驚き、物音をたててしまおうスバル。

「（小声で）しまった！物音をたててしまった！」

「ふにゃ……しゅぱりゅ……」

「にゅ……う……」

「（小声で）……アイリスとキルティスカ……」

「（小声で）一緒に住んでいる人……？」

「（小声で）……ずっとスバルを待っていたんだね……」

「（小声で）……二人以外にもいるよ……？」

スバルがリビングの机を見ると……

「（小声で）ウィリア、プリムラ、シロン、ナコル、サンナ、イシア、ダイアナ、チェリムル、カトレア、レノシア、ライラ……」

「……無事、帰ってこれたみたいだな……」

「アレック……むぐうっ!？」

「大声を出すな。私の声で一応聞こえないくらいだ。無事に帰ってこれてなによりだ。」

「……皆は、何故ここに寝ているんだ？」

「皆……お前の帰りを待っていたんだ。昨日も……今日も……きっと、明日も……」

「そうか……」

「その二人のことは追々聞きましょう。まずはゆっくり休むとよい。」

「ああ、そうさせてもらうよ……」

「二人は……別々の部屋でも構わないか？」

「僕は構わないけど。」

「僕もいいよ？」

「なら、部屋に案内しよう。まだまだ空き部屋はある、好きなところを紹介しよう……」

「ありがとう!」

「ありがとう……」

アレックスに引きつられ、ロズウェルとラネッサは部屋に向かった。

スバルは自分の部屋に向かって行った・・・

報酬。

入手

特になし。

クエストクリア

G級クエスト受注可能の証明書
植物・鉱物色々。

その他

ラネツサ。

ロズウェル。

スバル、G級に昇格。

第79話 G級昇格、そのクエストは『ダイヤモンドダスト』（後書き）

今回はラネッサ、ロズウエルの紹介です。

ラネッサ

ドドブランゴ雄。

身長160cm。

見た目15歳。

白毛で辛うじて首にかかるくらいの長さの髪。

カトレアほどではないが、医学に精通している。

意外と行動派ではある。

異性にかなり弱く、裸を見るだけで鼻血を吹き出してしまう。要するにウブ。

名前の由来は『八重桜』の学名の一部、『*lannesiana*』より。花(?)言葉は『理知に富んだ教育』

ロズウエル

ティガレックス雄。

身長155cm。

見た目13歳。

黄色の髪で、短髪。

スバルの異名であった『不殺のハンター』というのに心惹かれ、スバルを兄として慕っている。

ラネッサ以上に異性に弱く、異性が風呂に入ってきたことが分かった瞬間、淵っこにまで逃げるほどである。

陽気な性格。

名前の由来はバラより。ロズウェルの場合の花言葉は『無邪気』

以上です。

次回は、無事帰ってきたスバルを見て、大泣きしてしまう話です。

お楽しみに。

第80話 拭われた悪夢、叶いし願い（前書き）

今回は短い80話です。

アイリスが大泣きしてしまいますが、生きていることへの安堵の涙なので・・・

では、どうぞ！

第80話 拭われた悪夢、叶いし願い

スバルがラネツサ・ロズウェルを連れ帰ってきたその翌朝・・・

「・・・スバルっ!？」

アイリスが突然飛び起きた。

「・・・やっぱり・・・夢なんだ・・・。生きて帰ってくるって言ってくれたのにあんな夢見ちゃうなんて・・・。・・・私・・・スバルのこと・・・信じていないのかな・・・。」

再び机に突っ伏す。

「・・・なんで・・・こんな夢を見ちゃうの・・・? 見たくないのに・・・本当になってしまいうのが嫌なのに・・・!」

アイリスが机の上で涙声で言う。

「・・・スバルの部屋に・・・行こ・・・。」

重い足取りでスバルの部屋に向かうアイリス。

仕方ない、『目の前で愛する人を失う』夢を見てしまったのだ。

「あ、あれ・・・？ ドアが開いてる・・・？」

スバルの部屋の前に着いた時、閉まっていたはずのドアが開いていたことに疑問を抱くアイリス。

「スバル・・・帰ってきているのかな・・・、生きているのかな・・・？」

アイリスは悪夢が現実になっていないことを祈り部屋に入って行っ

た。

「・・・あ・・・っ・・・」

部屋に入った直後、アイリスは声を漏らした。

スバルがいたからだ。

「い、きて・・・いる・・・んだよね・・・」

スバルの顔を覗き込む。

パツと見、死んでいるように見えるが・・・

「・・・息・・・してる・・・」

ちゃんと呼吸をしていることから、生きていることははっきりする。

「よかった・・・ホントに・・・よかった・・・」

思わず床に座り込んでしまうアイリス。

「ん・・・う・・・」

そんな時、スバルが目を覚ました。

「ん・・・おお、アイリス、おはよう。」

「お、お、お・・・」

「お?」

「『おはよう』じゃ・・・ないよお・・・ぐすつ・・・」

スバルが起きて、アイリスに声をかけた時、アイリスが泣き始めてしまう。

「お、おい、どうしたんだよ!？」

「だって・・・だって!また、またあの夢見ちゃって・・・!それが・・・それが・・・ホントのことに・・・なるんじゃないかって・・・思っちゃったの・・・!」

「だが、俺はちゃんと帰ってきたし、擦りむきはしたが、生きて、無事だった。」

座り込んでいるアイリスの高さを合わせるようにしゃがむスバル。

「でもお・・・ひつく・・・ふええええええええ・・・」

「・・・すまなかったな・・・。すっかり怖がらせてしまって、うなされるような状態にしまって、心配させてしまって・・・」

「ふええええええええええ・・・」

しばらくの間、アイリスは泣き続けた。

その間、スバルはアイリスを優しく抱きかかえていた。

数分後、アイリスは泣き止んだ。

「・・・よかったよお・・・。生きてて・・・よかったよお・・・」

「本当にすまなかったな・・・」

「いいよ・・・。生きててくれたんだもん・・・それでいいよ・・・」

「

「・・・そうか・・・」

「それでね・・・？」

「ん？」

アイリスがスバルの方を見る。

「今日から・・・悪夢を見なくなるかも・・・見なくていいかも・・・」

「そうか・・・そりゃよかった・・・」

「でも・・・」

「でも？」

「・・・スバルと一緒にいてくれれば・・・絶対見ないかも・・・」

／＼

「・・・今日一緒に寝ろと？」

「・・・うん・・・／＼」

「・・・一緒にいることは構わないが・・・俺は床で寝るぞ？」

「やだ！」

「たまには俺の意見も聞けえ！」

「やだあ！また悪夢見そうなんだもん！」

「悪夢どころか理性が吹き飛びそうだよ、俺の！」

二人の言い合い。

パツと見、よくありそうな言い合いだが・・・

お互いが生きているからこそできる言い合いであり・・・

雰囲気は幸せそのものだった・・・

報酬。

入手・クエストクリア

クエスト帰還後のため無し。

その他

アイリスの悪夢、消滅・・・？
スバル、無事帰還。

第80話 拭われた悪夢、叶いし願い（後書き）

今回はアイリスが安堵の涙を流した話でした。

次回は・・・オリジナル・・・かなあ？な武器が出ます。

お楽しみに！

第81話 レノシアと剛槍『蜻蛉切』、アイリスと豪炎剣『風林火山』・

(前巻

81話、レノシアとアイリスが専用武器を手にします！

名前は聞いたことがありますよ、多分。

では、どうぞ！

第81話 レノシアと剛槍『蜻蛉切』、アイリスと豪炎剣『風林火山』

アイリスがスバルと言い合いをした（端から見れば「畜生おおお おっ！」などと聞こえそうな雰囲気だが）その日・・・

「・・・こんなクエスト・・・俺がクリアできるわけないだろうが・・・」

スバルは集会所で一つのクエストを見て呟いていた。

彼が持っていたクエスト用紙は・・・

『伝説の剛槍・炎剣』だった。

ただ、その内容が信じられないものだった。

内容は・・・

《我が家の家宝の槍と剣を差し上げます。ただし、この二つを持つことが認められた人にだけです。》

と。

「どんな槍と剣だよ・・・」

スバルはそう呟くしかなかった。

スバル宅・・・

「アイリス、ちょっと来て欲しいんだが・・・」

「え、なに？」

「ちよつとついてきて欲しくてな？まあ、クエストなんだが・・・」

「いいけど・・・なんで？」

「それはクエストを見たらわかる。それと・・・この中で力が強そうなのといえば・・・？」

「・・・レノシア・・・かも・・・」

「じゃあ、呼んで、行ってみる？」

「そう・・・だね。あまり無理させられないけど・・・」

そしてレノシアを呼び、話をしたらついていくと言い張った。

その時の彼女の言い方は、いつものように恥ずかしがっているかのような感覚はなく、『絶対行く！私はあなたについていく！』と主張をしているようなものだった。

クエスト..
『伝説の剛槍・炎剣』

開始。

「それで・・・このクエストなんですが、なんで私を？」
「いや・・・それは・・・」
「えっと・・・」

レノシアの疑問に目を逸らす二人。

「ふう・・・」

「そ、そんなにむくれないで？」

「むくれますよお！・・・私だって、スバルさんの腕に抱きつきた
いのに・・・」

「え？なに？」

「え！あ、あ、あの、そ、その、な、な、ななな何でもないです！

／＼／

「顔赤いぞ？」

「何でもないんですぅっ！」

道中、レノシアの叫び声が響き渡った。

ちなみに、レノシアが言った眩きは二人に聞こえることはなかった・

「・・・着いたな。」

依頼主がいる所に着いた。

「すみません、クエストを受けた者ですが！」

スバルが大声で叫ぶと・・・

「あっ！お待ちしておりました！すぐ行きますので、少々お待ち下さい！」

屋敷の方からも声が。

数分後・・・

「すみません、お待たせしました！私が依頼主です。」

「いえ、別に構わないのですが・・・」

「では、こちらへ・・・」

依頼主の案内で、屋敷に入って行った三人。

「ここです。この槍と剣を差し上げます。ただし、持つと認められる人にですが。」

「ほえゝ・・・」

アイリスは剣と槍に見とれていた。

「えっと、あの、この剣と槍の名前は・・・」

「ああ、忘れていました。槍の名は『蜻蛉切』^{とんぼぎり}、剣の名は『風林火山』です。」

「・・・聞いたことない槍と剣だな・・・。槍の方はとても大きいし、剣の方は形が歪な・・・」

「はい。遙か東の方から伝わったとても珍しい武器です。手に入れたのはいいのですが、私には使えなくて・・・」

「じゃあ、私は槍の方を・・・」

「レノシア、大丈夫か？」

「よいしょっと・・・」

レノシアは『蜻蛉切』に近付いて行ってそれを手に取った。

「ん・・・っ、んううっ!!」

力を入れて持ち上げ・・・

「この槍はとても重い槍なので・・・その子にはとても・・・」

依頼主も無理だろうと思っていた。

「ええっ!」

持ち上げた。

「す、凄いな・・・」

「ま、まさかあの槍をあの子が持ち上げるなんて・・・」

依頼主だけでなく、スバルも驚いていた。

「レノシア・・・凄い!とても重そうな槍なのに持ち上げるって!」
「・・・あれ?軽いですよ・・・?」

『ええっ!?!』

レノシアの発言に驚く。

「え、ちよつともたむぎゅうっ!?!」

アイリスが受け取ったその瞬間、槍に潰される。

「お、おもしろいよお・・・なにこれえ・・・ぜんぜんおもぐないなん
でうぞだよお・・・」

ちょうど腹部を押さえられている為苦しそうだ。

「あっ、すいません!すぐまた持ちますから!」

またレノシアは軽々と『蜻蛉切』を持ち上げる。

「げっほ!げほ!うあー・・・じぬがどおもった・・・」

咳き込んでいるアイリス。

「まさか『蜻蛉切』をあそこまで軽々と持つ女の子がいるとは思いませんでしたよ……」

「俺自身驚きだ……」

そして、残ったのは『風林火山』だけだ。

「スバルは……無理だよな……。あの剣で火傷していたし……」

「だからアイリスを呼んだんだよ。アイリス、炎に強いし。」

「え、見ただけでこの剣の特徴が判ったんですか!？」

「ええ。『風林火山』は聞いたことがあります。多分、属性的には炎か風。でも属性的には炎が強いのではないのか……と。」

「はい……。炎属性なのですが、ほとんどの持ち主がこの剣を持った瞬間火に包まれ、命を落としていて……。鞘に納めてある間は全く影響ないのですが、鞘から抜いた瞬間発火して……」

「……アイリス、持ってみな。」

「え? あ、うん。」

スバルに促され、アイリスは『風林火山』をヒョイツと持ち上げる。

「・・・鞘から抜いて・・・みろ。」

「うん。」

あっさりと承諾し、鞘から剣を抜いた。

「・・・発火しない!？」

「やっぱりな。アイリスなら絶対大丈夫だっと思っていたんだ。」

「そうですか・・・。約束通り、『蜻蛉切』と『風林火山』は差し上げましょう。大切に使うてあげてください。」

『はいっ!』

レノシアは『蜻蛉切』を、アイリスは『風林火山』を己の武器とした。

帰路。

「れ、レノシア、ホントにそれ、重くないの？」

「え？ あ、はい。体の弱い私でも軽く感じますよ？」

「・・・持ち主として妥当な人選だったらしいな・・・」

スバルは二人を見てそう思っていた。

報酬。

入手

特になし。

クエストクリア

ランス…剛槍『蜻蛉切』。

片手剣…豪炎剣「風林火山」。

その他

レノシア、未だスバルが好きなことが判明。
レノシア、怪力判明。

第81話 レノシアと剛槍『蜻蛉切』、アイリスと豪炎剣『風林火山』・

(後妻

今回出てきた二つの武器の名前の説明です。

風林火山・・・武田軍の信念というか・・・そんなものです。『疾き事風の如く 静かなる事林の如く 侵略する事火の如く 動かざる事山の如く』と。

蜻蛉切・・・徳川家康に仕えていた武将、本田忠勝が用いていたとされる武器。一部では、『妖刀・村正』の一振りとも言われている。

はい、私が今知りうる情報です。

次回はまたまた騒動が発生します！

お楽しみに！

第82話 一朝一夜の大事件（前書き）

今回は鼻血が流れる82話です。

誰が流すかはわか．．．と思いますよ？

R115はお忘れなく．．．

では、どうぞ！

第82話 一朝一夜の大事件

クエストから帰ってきて・・・

問題が発生した。

「あ、あの・・・スバルさん？」

「何だ？」

「『蜻蛉切』・・・どうしたらいいんですか？」

「どこかに置くことは・・・」

「大きさに無理かもしれませんが・・・」

「っていうよりも、床がめり込むって・・・」

「・・・いや、檜用の立て掛け棒があったから・・・そこに設置すれば大丈夫だ。」

「あ、よかった・・・」

レノシアは、自分の檜の置き場があったことにほっとしていた。

（この間、スバルはロズウェルとラネッサのことを説明していた）

風呂にて・・・

「ふひいゝ・・・」

「にいさゝん・・・気持ちいいねゝ・・・」

「ああ・・・」

スバル・ロズウェル・ラネッサが三人で風呂に入っていた。

カクス・アレックスは既に入浴済みだ。

「今の時間だったら誰も入ってこないからな・・・ゆっくりできるぞ・・・」

「ふひいゝ・・・」

「ラネッサ・・・さっきから『ふひいゝ』しか言っていないよ・・・？」

「だって・・・気持ちいいからあゝ・・・」

「すっかり気に入っているようだな・・・」

3人で談笑していたら・・・

カラカラカラカラ・・・

「っ!?(ドアが開く音!?)」

「にっ、兄さん!?!」

「しっ、静かに・・・」

慌てるロズウェルを黙らせ、聞き耳を立てるスバル。

「あゝ、今日もつかれたあゝ・・・」

「ホントですねえ・・・」

「私ですよ・・・」

三人の女の子の声が。

「・・・アイリスとレノシアとカトレアか・・・」
「・・・っ!」

「・・・ロズウェル？」

先程まで声が出ていたロズウェルが一切声を出さないことに気になったスバル。

見ると・・・

離れたところで湯船から顔を出してぐったりしていた。

「ラネッサ、お前は・・・」

「あ、いえ、僕は・・・大丈夫だよ・・・」

「・・・鼻血、出てるぞ。」

「・・・あ・・・」

ロズウェルとラネッサ。

二人は異性に対する抵抗が全くなかった・・・

「・・・静かにしておかないと・・・」

「う、うん・・・」

奥でダウンしているロズウェルの救出を後回しにし、まずは隠れることを考えていたスバルとラネッサ。

しかし・・・

「・・・誰かいるの？」

（スバル・ラネッサ..気付かれた!?!）

アイリスが二人に気付いた。

「あ、アイリスさん、下手に近付かない方が・・・」

「そ、そうですよ。もし、もし覗きさんだったら・・・」

「いざという時は戦うからいーの！」

「でも・・・」

「もしいるのがスバルだったら？」

『行きます！』

（スバル…行かなくていい！来ると死人が出るだろうが！）

スバルの思いとは逆に、ザバザバと近づいてくる水音。

（スバル…まずい、このままではラネッサが血の海に沈みかねない
！）

とっさの判断でラネッサを見るからの後ろに移動させたスバル。

そのままこっそりロズウェルに近付いて救出しろ、と言ったものの・
・

「あっ！スバルだ！」

ラネッサが動く前にアイリスがスバルを見つけた。

（スバル…ラネッサ・・・すまない、もっと俺が素早く判断を下せ

れば・・・)

内心スバルは謝罪をしながら焦っていた。

「ていつ！」

スバルが焦っていたら、アイリスがそのまま抱き着いた。

遅れてレノシア、カトレアも。

「も、もう・・・ダメ・・・」

その後ろで、ラネッサは鼻血の海に沈んでいた・・・

「ら、ラネッサ！生きてるか、おい！？」

三方から抱きつかれたままラネッサを心配するスバル。

そんなスバルと未だに血の海に沈んでいるラネッサを無視し・・・

「二人とも！そんなぐいぐい押してこないでよ！」

「アイリスさんが一番広く抱きついているじゃないですか！」

「私は恋人なんだからいーんだもん！」

「でも！ずるいんです！」

「お前らが押してくるな！色々と問題があるから！」

『や（です）！』

完全にスバルの意思は無視。

そんな中、スバルはサンナがここにいないくて良かった・・・と思っていた。

「ふ・・・ろから・・・上がらせて・・・くれ・・・！」

アイリスには真正面から、レノシアとカトレアには左右から抱きつかれている為、動こうにも動けないのが現実である。

「うにゅうっっ！」

「ふにゅうっっ！」

「んにゅうっっ！」

「変な呻き声を出すな！なんか怖いから！」

動こうとするスバルに必死になって抱きついていようとする為、普

通に聞くと可愛らしい声を出している三人。

スバルが三人と格闘していると・・・

カラカラ・・・

(スバル..また誰か来たのか!? も、もうやめてくれ!)

一体誰が・・・

「えへへえ〜♪」

「姉さん・・・、そのままだと危ないよ・・・」

『そりゃ〜!! (ザプン!)』

「サンナ! シロン! はしたないですよ!」

(スバル..最悪なパターンになった!?)

・ その状況で、スバルが最も危惧していた状況が発生してしまった・・・

「に・・・にいさ・・・ん・・・」

（スバル…すまないロズウェル！声を出すわけにはいかないんだ！）

『スバルがいるの！？』

ロズウェルがスバルを呼ぶ声が聞こえたその瞬間、シロンとサンナが同時に反応した。

「ふにっ！」

「うにっ！」

「んにっ！」

スバルが気づかれないようにしていても、抱きついている三人が声を出している為、気付かれてしまうのは当たり前である・・・

「いたっ！」

「てりゃっ！」

「がぼっ！？」

「がっ！？」

サンナがアイリスを沈める形でスバルに抱き着いた。

その時の反動で、後ろで血の海に沈んでいたラネッサを弾き飛ばしてスバルは壁に衝突した。

「ぷはっ！ちょっと！酷いよサンナ！」

「・・・アイリス、姉さん聞いてないみたい・・・」

「えっ！？」

サンナの方を見ると・・・

「うえへへ・・・しゅばりゅ・・・」

「酒くさっ！サンナ！お前、酒のんだろ！？しかも、大量に！」

「のんれないよ♪オレンジジュースを飲んだらけだよ♪（訳.. 飲んでないよ♪オレンジジュース飲んだだけだよ♪）」

「呂律が回っていない時点で飲んでいえるわ！それに顔が赤いし！」

「ていっ！」

完全に酔っぱらっているサンナ。

「にゅふふ・・・♪」

「く、首に腕回すのダメっ！」

アイリスがサンナを無理やりに引きはがそうとする。

「やゝらあゝっ！はゝにやゝれらくにやいいゝっ！（訳..やゝだあ

「っっ！はっなくなれたくないっっ！」

「ダメえっっ！離れてえっっ！」

「い……息……が……」

アイリスの引きはがしをスバルにしがみついて必死に抵抗し続けるサナナ。

結果、自らの胸をスバルの顔に押し付けるといふ状況になり、スバルは呼吸ができないでいた……

ロズウェルとラネッサは、鼻血の海に沈んでいた……

夜・
・
・

「すっかりするつもりが・・・予想以上に疲れた・・・」

自分の部屋のベッドに寝転がっていたスバル。

その時・・・

・・・トントン・・・

「ん？誰だ・・・？」

戸を叩く音に気付くスバル。

<・・・私・・・。約束通り来たよ・・・>

ドアの前にいたのは、アイリスだった。

『悪夢を見るのが怖いから、一緒に寝て欲しい』という約束のために来たのだ。

「・・・すっかり忘れていた・・・。入っていいぞ。」

<じゃあ・・・入るね・・・>

アイリスが入ってきた。

手には自分用の枕を持ってきている。

「スバル・・・ごめんね・・・？わがままで・・・」

スバルの近くに来てわがままな自分を謝るアイリスのその顔は、いつものように明るいものではなく、完全に悪夢に怯えきって今にも泣きそうな顔だった。

「わがままだなんて思ってないさ。」

「うん・・・（ギユウ・・・）」

本当に怯えたように抱き着くアイリス。

「よっぽど・・・怖かったんだな。」

「うん・・・。だから、一緒に・・・」

「・・・俺が近くにいるっていう話だったろ？」

アイリスをちょっと離して言う。

「でもお・・・」

目を潤ませて言う。

「・・・分かった。一緒に寝てやる。それで落ち着けるのならな・・・」

「・・・ありがと・・・」

再び抱き着くアイリス。

「・・・まず、先に寝てろ。悪夢を見始めたらどうにかする。」

「うん・・・」

「やっぱり・・・怖いのか？」

「怖いよ！だって・・・、目の前でスバルが死んじゃう夢なんだよ！？怖いのは・・・当たり前だよ・・・。もう・・・、見たくないんだよお・・・」

「大丈夫だ、俺がいるから。」

「うん・・・」

そして、アイリスはスバルのベッドの上でゆっくりと目を閉じた・
・

「・・・悪夢か・・・。内容から、原因は全部俺だな・・・」

スバルはアイリスが見る悪夢の原因を推測していた。

1時間後・・・

「・・・うつ・・・うつ・・・」

突然呻き声をあげ、体を振らせるアイリス。

「悪夢が来たか！」

「止めてえ・・・もう・・・止めてえ・・・」

「落ち着け！俺はここににいるから！その悪夢は幻なんだ！」

「うああ・・・」

必死になってアイリスを落ち着かせようと、悪夢から解放させようとするスバル。

その行為は30分もの間続いた。

「すう・・・すう・・・」

「・・・結局、自分を抱きまくら代わりにさせるしかないなんて・・・俺は無力だな・・・」

落ち着かせる為にスバルが取った行動。

それは、無理矢理アイリスを自分に抱きつかせ、自らを抱き枕とさせることだった。

「最早無理矢理な方法になっちゃったが・・・。それで落ち着いてくれたから結果としてはこれでよし、か・・・」

そんな風にアイリスを落ち着かせる為の夜は過ぎて・・・

「ふにゅ．．ん．．」

「うぐうつ!？」

「むにゃあ．．」

「ぐ．．ぐるじ．．」

状況…アイリスが覆いかぶさるようにスバルに抱きついている。同時にスバルの首が絞まっている。

「じよ、状況改善できてから．．死にかけるって．．」

どうにか首絞めから解放されたスバルはそう呟き、そのまま眠りについた．．

翌朝・・・

「うつ・・・くぁ・・・」

スバルが目を覚ました。

「さて・・・アイリスをおこ・・・」

アイリスを起こそうとして、言葉を失った・・・

スバルに抱きついているだけだったはずのアイリスは・・・

上着を全て脱ぎ捨てていた・・・

「おっ、おい！アイリス！一体何があったんだ！？」
「うにゅう・・・」

ひたすらにアイリスを起こそうと揺するスバル。

「アイリス！おい！起きろって！」

「ふにいゝ・・・あちゅいよゝ・・・」

「・・・アイリスが下着姿になっていた理由が分かった・・・」

熱がって上着を脱いでいたことが判明。

「・・・いい加減・・・起きろおおおっ！！」

「きゃあああああああ！？」

アイリスに向かって『起きろ』と叫ぶスバル。

「ふえ、あ、お、おはよ・・・スバル・・・」

「おはようじゃねえ、服を着ろ。下着だけになってるぞ・・・」

「ほえ？」

スバルに言われて自分の現状を見るアイリス。

「・・・あ・・・あ・・・あ・・・／／／／」

「早く・・・／／／」

「スバルのえっちいいいいいい！／／／／」

朝一番、アイリスの絶叫がこだました。

「ね、寝ている間に脱がせたのお！？／／／」

布団で自分の体を隠すアイリス。

「知るか！朝起きたらそうになっていたんだ！／／／」

「わ、私脱ぎ癖ないもん！／／／」

「だが俺は今回一切関わってない！／／／」

「・・・私の裸・・・見たいなら言ってくればいいのに・・・
／／／」

「そっ、そんなことは絶対言わねえ！誤解を招くような発言をするな！俺にそんな趣味があるように思われるじゃねえか！？」

「・・・私に・・・興味がないの・・・？／／／」

「・・・きよ、興味がないわけでは・・・ない・・・が・・・な・・・
・／／／」

「・・・えい。（ムギュッ！）」

「そのまま抱き着くな！／／／」

「やあゝっ！」

「や、じゃない！」

スバルにそのままの姿で抱き着いている。

アイリスは完全に悪夢から解放された、という実証はないが、それでも幸せそうな瞬間ではあったのだった・・・

報酬。

入手・クエストクリア

クエスト未受注のため無し。

その他

アイリス、スバルのおかげで多少の安らぎを得た？
ロズウェル・ラネッサ、異性への抵抗ゼロ？

第82話 一朝一夜の大事件（後書き）

アイリスが一時の安息を得ました。同時に、スバルは己の無力感を感じてますが・・・

次回から覇龍編スタートします！

擬人化娘が増えますが、珍しいパターンがきます。

お楽しみに！

第83話 覇龍編 その1 覇龍出現、古龍との出会い（前書き）

覇龍編開始の83話です！

新たな子が出ますがその娘はスバルに恋をしません！予め言っておきます！

では、どうぞ！

第83話 覇龍編 その1 覇龍出現、古龍との出会い

「・・・近くの火山に覇龍が出没したあ!？」

集会所でのスバルの叫び。

何に叫んだかは察するのは簡単だ。

「ああ。近くの火山に出没した、という話らしいぜ・・・?それで、その覇龍討伐軍に参加して、生きて帰ってくるだけでも大金が貰えるらしいぜ!？」

「金・・・ね・・・」

アルが興奮したかのように言い、スバルは淡白に返す。

「大金だぜ!?!生きて帰ってくるだけで3年は遊んで暮らせるくらいなの!」

「ハンターがそんなことで浮かれるなんて・・・」

「よしっ!俺は討伐軍に参加するぜ!」

「ああ、頑張ってこい。そしてさっさとくたばれ。」

「物凄い淡白に言うなお前は!」

「お前だから言える。全人類の恥的存在のお前にはお似合いの対応だ。」

「そんな扱いだと分かっていたさ畜生！」

アルは泣きながら集会所のクエストボードの方へ行った。

「・・・ああいう変態は死んだ方が世の為だったの・・・。さって、俺も別に覇龍クエスト受けてみるかな・・・？」

スバルは一度、自宅に戻って準備をすることにした。

「・・・アイリス、もうお前も上級行けるだろ？」

「・・・う・・・／／／」

「？」

「まだ・・・初級・・・／／／」

「今回俺が受けようとしているクエストなんだが・・・」

「・・・うん・・・」

「初級でも一応可能らしいぞ？死ぬことを覚悟しておかないといけ

ないらしいがな。」

「・・・スバルと一緒にならいいもん！受ける！」

「・・・『覇龍』だぞ？」

「うそっ!？」

スバルの言った龍の名前に飛び退くアイリス。

「うゝ・・・一緒に行きたいけど・・・死ぬのは怖いし・・・でもスバルと一緒にじゃないと・・・またあの夢見ちゃう・・・」

「で、どうするんだ？」

『行（く／きます）!』

「れ、レノシア!？お前も行くのか!？」

アイリスに聞いていたただけだったはずが、いつの間にかレノシアも行くと言い出していた。

「あ、あの、私も一緒に行っても・・・ダメですか？」

「カトレアもか!？三人とも一緒に護り切ることとは無理だぞ!？」

『いい（の／んです）!』

「あたしも行く!」

「ウィリアも!？本当にこれ以上は誰かが死んでもどうしようもないぞ!？」

「・・・覚悟はあるよ・・・。あたしは・・・戦う!」

「死ぬ覚悟だけは・・・止めてくれよ？」

「大丈夫。絶対生きているって思うから。」

「皆・・・どうしたの？」

「おお、チェリムルか。今から覇龍討伐に向かおうと思ってな？」

「あ、じゃあ私が占ってあげる。」

「お願い。」

チェリムルは、前スバルが生きているかを占った時のようにカードを並べ……

「……結果が出たよ。」

「なに!？」

「……皆無事に帰ってこれる。ただ、『恋に新たな障害在り』って出てるのが凄い気になるんだけど……」

「……?」

占いに変な話がついたため、疑問を浮かべるアイリス。

「でも、皆無事に帰ってこれるんだし、大丈夫だよ。気を付けてね。」

「ああ!行ってくる!」

スバル達はそう言ってクエストに向かった。

家の中から『ハニィっ！行かないでくださいましっ！』『うっさいわねこの変態ギザミ！』『ぎゃあああああああ！』などと聞こえたのはご愛嬌、ということ。

クエスト..
『覇龍襲撃』

開始。

「・・・ねえスバル、アカムトムルって、氷に弱いんじゃないの？」
「そうだろうが・・・火山だぞ？プリムラを連れていくわけにはい
かないだろうが。」

「・・・だね。」

「あまり苦手な所に長時間いさせても・・・、体に毒ですし。」

5人で雑談していると・・・

ガサッ！

「誰がいる!？」

突然発生した物音に全員が戦慄する。

「・・・このクエストは・・・『覇龍だけ』のはずだぞ・・・!？」

「で、でも、あそこの草むらが揺れたってことは・・・」

「何かが・・・いるってことですよね・・・?」

「よし・・・俺が近づいて行ってみるぞ・・・?」

「き、気を付けてね・・・?」

スバルが物音がしたところに向かう。

「・・・一体何が・・・っ!？」

スバルが驚いた理由。

そこにいたのは麒麟だった。

「・・・手を出しさえしなければ何もしてこないはずだ。驚かせてすまなかったな。」

スバルは麒麟に背を向けて歩き出したが・・・

「・・・何故ついてくる？」

麒麟がついてきていた。

「・・・ついてきても何もしてやれないぞ？」

そう言ってまた歩き出したが・・・

「・・・お前なあ・・・」

やっぱりついてきていた。

「うわっ！？す、スバル！？な、なんで麒麟がそこにいるの！？」
「・・・懐かれたみたいだ・・・」
「・・・みたいって・・・今閃光玉あるの？」
「ないからな・・・、ベースに行くまでの苦勞・・・ってところか？」

スバルが相談している間、麒麟はスバルに寄り添うようにしていた。

「・・・まずは火山入り口まで向かうか・・・。そこまでいかないと何も・・・」

「あの・・・、閃光玉の材料ならここにありますが・・・？」

「カトレア！ナイス！」

「じゃ、じゃあ、今すぐ閃光玉を作りますね？」

そう言ってカトレアは、慣れた手つきで閃光玉の調合を始めた。

「凄いねカトレア・・・。お医者さんを目指しているっていうけど、なれるって思えるよ・・・」

「そ、そんなに言わないでくださいよ・・・恥ずかしいですう・・・
／／／

3分後、閃光玉が完成した。

「さて、麒麟の意思を聞くぞ・・・！」
『・・・ゴクリ。』
「それっ！」

スバルが麒麟に向けて閃光玉を投げた。

カッ！！！！

「凄い眩しいよお！」

「眼が、眼が痛いですう！」

「・・・何も見えないよ・・・」

アイリス・レノシアに大ダメージ。

視界に色が戻った時・・・

「うわああああああん!!!」

「ウィリア!?」

「ちっちゃいのに胸が大きいなんて反則だよっ!」

「・・・それでかよ・・・」

「スバルにとっては『そんなこと』で済むかもしれないけどお!あたしにとっては深刻な問題なんだよ!」?

「・・・わかったわかった・・・」てりゃっ!」ってうおっ!」?

ウィリアを宥めていたスバルに衝撃が襲う。

「ああっ!!」

「ず、ずるいです!」

「ひ、卑怯ですよ!?! 私達の眼がはつきりと見えない時に抱きつくなんて!」

三人が叫んでいた相手とは・・・

「♪」

女の子がスバルに抱きついていていた。

「ちょっと！離れてよ！」

「やっつ！」

「やっつ！じゃないの！」

「やだやだあっつ！」

「二人とも落ち着け・・・」

スバルが二人を落ち着けようとそれぞれの頭に手を置いた。

『・・・ふにゃあ・・・』

ただ手を置いただけなのに、顔がふにゃけてしまっている。

「スバル・・・今から戦いなのにそんな状況にして良かったんですか・・・？」

「・・・仕方ないだろう？こうするしかできなかったんだからさ・・・」

「ですけど・・・」

カトレアが見ていたものは・・・

『・・・♪』

腕に抱きついて幸せそうにしているアイリスといつの間にか背中に

おぶさっていた女の子の姿だった。

「とりあえず・・・火山に向かうか・・・」

スバルの意見に頷く四人。

「でも・・・チェリムルさんの言っていた『恋の障害』って・・・
あの子のことでしょうか・・・？」

「・・・とてもそうは見えませんか？ただ甘えているだけ、懷いて
いるだけにしか見えないんですけど・・・」

レノシアとカトレアは、結局疑問を残したまま火山に向かうことになった。

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第83話 覇龍編 その1 覇龍出現、古龍との出会い（後書き）

今回出た女の子の詳細はまた名前が決まったら（小説の中で）載せます！

次回はまたまた女の子が！しかしその娘はどこかがおかしくて・・・

お楽しみに！

第84話 覇龍編 その2 火山突入、脚動かぬ謎の龍（前書き）

今回も女の子が出ます84話です。

この子、『おかしな所』があります。

どこがおかしいのか・・・

では、どうぞ！

第84話 覇龍編 その2 火山突入、脚動かぬ謎の龍

「・・・この子、一体どうすればいいんだろう・・・」

火山付近にあるベース。

ここに来るまでに一緒に来た（懐かれた）女の子をどうするか考えていた。

「名前もないし、懐かれているし・・・」

そう言って左腕を見ると・・・

「スバル♪」

女の子が抱き着いている。

「こうして見ていると・・・、なんか、兄妹みたいですわね。」

「兄妹!？」

レノシアがそこに追い打ちをかけるように言った。

「・・・この子はこれ以上連れまわしていくわけにはいかないしな・・・。倫理的にも問題があるだろう？」

「そう・・・ですよね・・・。色々と問題がありますし・・・、もし同業者さんがこの子連れれているところを見つけたら、スバルさんにそういう趣味がある、と思われてしまいかねませんね・・・。」

スバルとカトレアが真剣に話し合っているところで・・・

「・・・(ぷにっ)」

「へうっ！」

「・・・てりゃ。(ぷにぷに)」

「へうう・・・」

「うりうり・・・(ぷにぷにぷに・・・)」

「や・・・やめてよお・・・ぷにぷにしないでえ・・・」

ウィリアが女の子の頬をつついていた。

「カトレア、ここで待機していてくれ。君は非戦闘員だから、連れていくわけにはいかない。」

「はい、それは分かっています。私が一緒に行っても、足手まといに

なってしまいますから・・・」

「あ、でも、もし誰かが怪我したときにすぐに手当てができる人がいないと大変だよ？前のスバルみたいにさ。」

「・・・それもそうか・・・」

「でも、この子はどうするんですか？」

「・・・ここにいてくれるか？」

「や。」

「『や』って・・・おいおい・・・」

「一緒に行く！」

「・・・もういい。好きにしろ・・・。死んでも知らんから・・・」
「？」

「うん！」

未だ名もなき女の子、危険な討伐行軍についていく。

「・・・つとその前に、服服。ノ「呼んだかニヤ？」うおわあっ！」
「？」

いきなりノブが現れたため驚くスバル。

「何のごよ・・・ご主人、あなたも隅に置けないニヤ・・・」

「な、なんだよノブ・・・？」

「まさかそんなロリっ子を懐かせるなんて・・・ニヤ。」

「今はそれどころじゃねえ！頼むからその子の為の服を作ってくれ！」

「了解了解にゃ。ご主人のお古のティガレ装備で。」

「・・・ずるいい・・・」

アイリスは『スバルのお古』がその女の子の元に行くことに不満を漏らしていた。

火山の中。

「・・・あちゅい・・・」

「・・・あちゅしゅぎりゅ・・・」

「二人ともグロッキーだな・・・」

アイリスと女の子は暑さにやられ、グロッキーになっていた。

「アカムトムル討伐に来たんだぞ？その子はともかく、アイリス、お前はクーラードリンク飲んでおけよ・・・」

「あうう・・・」

「ふひい・・・」

そして火山の奥深くまで進む。

「・・・？」

「どうした、アイリス？」

ふと足を止めたアイリスに問いかけるスバル。

「何だろ・・・、なんか、ゴポゴポって・・・溶岩が泡立つような・・・うん、そんな音じゃなくて、なんか・・・何かがいるような・・・」

・・」

「や、止めてくれよ・・・？絶対何かがいるって・・・」

スバルがアイリスの発言に畏怖していた時・・・

ザッパアアアアアアン！！

「やっぱり何か出た！初めて見たぞ、あんな種族！？」

「な、なにあれえ！？」

「あ、あれは・・・、『煌黒龍 アルバトリオン』・・・！？」

「カトレア、あいつのことを知っているのか！？」

「は、はい！私、医学を志してますから、どのモンスターの攻撃がどういう症状になるかを理解しているんです！だから、大概のモンスターのはわかってるんですが、このアルバトリオンについてはほとんど情報がないんです！知っているのは名前くらいのもので・・・」

「カトレアも知らないってことは・・・こいつは・・・古龍！」
「・・・？」
「ウィリア？」

アイリスがウィリアの目線が違うことに気付く。

「ウィリア、どうしたの？」
「あの龍・・・アルバトリオンだっけ？なんか、足を引きずってないかな・・・？」
「あ・・・ホントだ！」

アイリスもその事実気付く。

よく見ると・・・

ズッ・・・ズズッ・・・

「ホントだ……。足を引きずっている……」

「ケガでも……。しているんでしょうか……」

「それなら、また閃光玉でも……」

「スバル！閃光玉を握って！」

「え、あ、ああ……」

アイリスにせがまれ、慌てて閃光玉を握る。

「……握ったが……。どうするんだ……？」

「えいっ！」

スバルから閃光玉をひったくるように取り、アルバトリオンに投げつけるウィリア。

いつものように閃光が出る。

「くっ・・・」

「眼が・・・」

「眩し過ぎる・・・」

目が眩む面々。

眩んだ眼に色が戻り・・・

「っ!？」

「きゃあああああああ!！」

スバルは慌てて眼を背けた。

それぞれの目線の先にいたのは脚を曲げて、自らの胸を腕で隠している女の子が。

「えっ? ええっ!？」

「みっ・・・見ないでください・・・／＼／＼」

顔を真っ赤に染めてうずくまる。

が、体を前に傾けているだけ、というわけだが。

「み、皆・・・俺はちょっと目を背けているから・・・、後は任せ
た・・・」

「あ、じゃあ私が・・・」
「？」

スバルは目を背けたままにしていることを言い、カトレアが代わりに行くことを言う。

キリンの女の子は頭に疑問符を浮かべているだけである。

「えっと、色々とお聞きしたいことがあるんですが・・・」

「え・・・あ・・・はい・・・／／／」

「まずは・・・あなたはアルバトリオン、ですね？」

「はい・・・私はアルバトリオンです。」

「次に・・・その脚を見せてください。」

「え・・・っと・・・は、恥ずかしいです・・・／／／」

「特に変なことをするわけじゃないです、ちょっと気になることが
あって・・・」

「な・・・なら・・・／／／」

アルバトリオンの女の子はカトレアに脚を見せる。

「・・・パツと見、傷は無いし・・・どこかが化膿しているわけで

もないですし、火傷も見られない・・・」

「あ、あの・・・？」

「脚・・・いつごろから動かないんですか？」

「・・・私が・・・小さい時から・・・」

「・・・ということは・・・障害、ですね。何か病気になったから、
というわけではないんですが、考えられるのはそれくらいなので・・・」

「わ、私・・・どうなってしまおうんですか・・・？」

「いえ、特に何かするわけじゃないです。ただ、私達と一緒に来ないかって言いたいだけです・・・」

「い、一緒・・・に？」

「はい。もしこのままだったら、誰かに襲われることも考えられる
ので・・・」

「え、でも・・・／／／」

アルバトリオンの女の子は、スバルの方をチラチラと見ながら答えている。

「どうかしたんですか？」

「あ、あの・・・その・・・／／／」

その子は胸の前で指をつんつんしたりもじもじしたりしていた。

「・・・スバルさんがどうかしたんですか？」

「ふひえ！？あ、そ、その、それは・・・あの・・・／／／」

「・・・スバルさん、彼女さん持ちですよ？」

「えっ!?!?／／／」

かなり挙動不審な行動をしている。

「あの、スバルさん! いったんベースに戻りたいので、彼女をおぶって行ってくれませんか!?!」

「ええっ!?!?／／／」

「俺がか!?!」

スバルとアルバトリオンの女の子、二人はかなり焦っていた。

「なんで俺なんだよ!?!」

「だって、私とウィリアさんは力不足ですし、レノシアさんは『蜻蛉切』を持つのが精一杯、アイリスさんじゃ多分支えることができませんので・・・」

「・・・私には、無理だもんね・・・」

「・・・色々恥ずかしいんだが・・・／／／」

スバルが恥ずかしがる理由。

それは、彼女の身体は出ているところが出ているからである。

「・・・仕方ない。連れていくよ。」

そう行ってスバルは女の子に近付いていき・・・

「ひゃわ!？」

おんぶではなく抱きかかえて行った。

「ふう・・・」

所謂『お姫様抱っこ』状態になっている女の子に嫉妬しているアイリスであった・・・

「はうう・・・／／／」

女の子は女の子で、体を縮め込ませていたりするなど、本当に恥ずかしそうであった。

ベース。

「よっ……と。」

「……こうするしかない、というのは……酷な話ですよ……」

「……／＼／＼」

アルバトリオンの女の子は恥ずかしさに顔を俯かせてしまっていた。

「脚が……不自由なんだったんだよね？ だったら、そういう為の設備を準備してやらないとな。」

「……あ、私、残ります。ついていくって言いましたが、多分足手まといになりそうなので……」

レノシアが戦線離脱を言う。

「名前は……ないんですね。」

「は、はい……／＼／＼」

レノシアが離脱し、アルバトリオンの女の子を守ることにした。

「・・・君もここにいてくれると本当に助かるのだが・・・」
「やだ！」

麒麟の女の子に待機を頼むものの、結局拒否されてしまう。

「・・・行くか。」

「気を付けて・・・」

レノシアとアルバトリオンの女の子を残して再び火山に向かう五人。

ここでもた、戦争の火種があるということを知らずに・・・

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第84話 覇龍編 その2 火山突入、脚動かぬ謎の龍（後書き）

今回出てきたアルバトリオンの女の子、脚が不自由な子です。
この子もまた、名前が決められ次第プロフィール発表します。

次回はついに覇龍との会合、しかし・・・？

お楽しみに！

第85話 覇龍編 その3 ドジっ子覇龍との会合（前書き）

ついに覇龍と会合します、85話です！

その覇龍、かなり『萌え』の塊かと？

では、どうぞ！

第85話 覇龍編 その3 ドジっ子覇龍との会合

「・・・今度こそ戦うぞ・・・！」

スバルは火山の中でそう意気込んでいた。

「あちゅい・・・」

「残れて言ったのに・・・」

「やだもん！一緒にいきたいんだもん！・・・でも・・・あちゅい・・・」

「まったく・・・」

女の子の意思は固く、もはやわがままというレベルだった・・・

火山最深部・・・

「ここに出た・・・って聞いたんだが・・・いないじゃないか。どこに
いるって言うんだ？」

「・・・ううん、いるよ・・・」

「あ、アイリス・・・？」

ウィリアが少し怯えたようにアイリスを見る。

相手は覇龍、姿は見なくとも恐ろしいのだ。

「大丈夫ですよ。皆さんならきつとやっつけることができますから。」

カトレアが励ます。

「・・・音がどんどん近くなってくけど・・・なんだろう、ゆっくり近づいてくる感じが・・・」

アイリスがそう呟いていると・・・

のそっ・・・

『出たああああああ!!』

ウィリアと女の子が悲鳴をあげる。

「出たか、アカムトムル!」

スバルは、アカムトムルが出現した瞬間、抜刀し、構えた。

だが・・・

「ね、ねえ、あのアカムトムル、私たちに気付いていないんじゃないの？」

「挑発に閃光玉を・・・って・・・おい・・・」

スバルが閃光玉を投げようとした時、アカムトムルが足をもつらせて転んでしまう。

「うおっ!?! わっ!」

スバルは迫りくるアカムトムルに向かって閃光玉を投げる。

間一髪炸裂した閃光玉。

『きゃあああ!?!』

「へぶっ!」

娘の悲鳴とスバルに何か起こったことが分かる声。

数分後、光がはれた。

「あ……え……な、何が……!?」

光がはれた直後の光景にアイリスは目を疑っていた。

状況…スバルがアカムトムルと思われる女の子に乗っかられている。
スバルの身体は下半身が見えるくらいで、顔は見えない……

「……っ……」

「……」

女の子は痛そうにしており、スバルに至っては無反応になっている。

「……スバルの反応がないんだけど……」

「す、スバル!?」

アイリスがスバルを呼び掛けたとき。

「……あっ!?／／／」

女の子が顔を赤くして聞き取るのが困難なくらいの小さな悲鳴をあげた。

「・・・う・・・俺、生きているのか・・・」

「・・・あう・・・あう・・・／＼／＼」

「う・・・あ・・・／＼／＼」

「~~~~~！！（ポカポカポカポカ！）」

「いっ！痛いから！止めてくれ！」

女の子がスバルをポカポカと叩きだす。

「もう止めろ！」

スバルが腕を掴むが、女の子はじたばたと暴れだす。

「まずは落ち着いてくれ！何かをするわけじゃない！」

「・・・うう・・・ホント・・・？」

「当たり前だ。酷いことするかっての。」

スバルが言い聞かせたために女の子は落ち着いた（スバルに聞いた時に涙目＋上目遣いだったということは余談である）。

「こうなったのは君が転んだからなんだし、俺が殴られるのは不思議

議なんだが・・・」

「そうだよ！なんでスバルが殴られなきゃいけないの！？」

「だって・・・」

「だって？」

「裸・・・見られたんだもん・・・／／／」

かなり恥ずかしがっている模様。

「ベース・・・戻るか・・・」

スバルの提案でベースに戻ることにした。

が。

「わきゃっ！？」

「ぐおっ！？」

ビタン！

女の子がまた転び、スバルがまた下敷きに・・・

「あうあうあう・・・／＼／＼」

「い・・・った・・・」

「胸触ったあゝっ！！（ポカポカポカポカ！）」

「だからまた殴るな叩くな！」

その子は、かなりのドジっ子だった・・・

ベース。

「・・・お。服がどうにかなったんだな。」

「オイラが1から作ったのニャ！」

「着物・・・ですけど・・・／／／」

「・・・似合ってるね・・・」

「羨ましいです・・・」

「あ、それと名前も決めさせて頂きました。この方、かなり知識が豊富だったので、『セレナ』と。」

「ただいま名前を紹介されました、セレナと申します。不束者ですが、よろしく願います・・・／／／」

「何故顔を赤くするんだ？」

「・・・ぷう・・・」

初々しく名を告げるセレナに頬をふくらますアイリス。

脚を動かすことはできないため、元々レノシアに正座の体勢にしてもらい、そのまま頭を深々と下げた。

「・・・若奥様!？」

「どうしてそうなる！」

ウィリアがいきなり言いだしたことに即座に突っ込むスバル。

「私にも名前付けて〜？」

一緒にいたキリンの女の子がスバルに名付けをせがんだ。

「わ、わたしも・・・／／／」

アカムトムルの女の子も、顔を赤くしてスバルに頼む。

「・・・どうして君は顔を赤くする？」

「だって・・・裸見られたし・・・胸触られたし・・・／／／」

「どれも不可抗力だ！」

「もう・・・お嫁にいけない・・・くすん・・・」

「不可抗力にどうしろと!?!? ..

スバルがアカムトムルの女の子と言いつき合っているうちに、キリンの女の子の名前が決まっていた。

「スバルさん、この子の名前決まりました！ちょっと悩みましたが、『カナ』としました！」

「・・・あ、ああ。だが、一体なぜ？」

「えっとね？この子のイメージに合うのが『可愛らしさ』だから、それに合う花は・・・と考えたらこの花にあたってね？」

そう言ってアイリスが見せたのは『ワックスフラワー』という花だ。

「普通に花の名前だと可愛くないし、学名？でも難しいし・・・」

「ということで、『カナ』にしたんです。」

「そ、そうか。じゃ、じゃあこの子も頼む。」

そう行つてスバルはそそくさとベースを出て行つた。

「彼女は・・・なんて言えбайいのでしょウか？なんか・・・萌え？」

「たぶん・・・。ドジっ子だし、髪の手両側で縛つてるし・・・」

「どつ、ドジっ子じゃないもん！」

「でも、そこに魅力はありますよね・・・」

「魅力・・・魅力・・・あつ！」

「ああ！これがいいいですね！」

「え、え、なにに・・・わぷっ！」

女の子、転ぶ。

「・・・ラナンキュラス・・・らきゆなす・・・『ラキユナス』！」

「ラキユ・・・ナス・・・？」

「はい。「花金鳳花」の本当の名前で、「魅力に満ちている」という花言葉を持つてゐる花なんです。」

「・・・ありがとう！」

「それよりも・・・ノブ？早く・・・服を・・・」

「わっ、分かったニャ！アイリス、だから顔を怖くしないでほしいニャ！まるで般若のようニャ！」

ノブが慌てて服を作る。

その手つきはまるで神技の如く。

3分後、普通の服が出来上がった。

「・・・ねえノブさん。」

「何ニャ？」

「ノブさんって・・・何者なんですか？」

「ただのアイルーニャ。それ以上でも、それ以下でもないのニャ。」

ノブが意外な活躍を見せた直後・・・

「名前、決まったか？」

「あ、はい！」

スバルが帰ってきた。

「それで・・・って、あの数分の間に服が出来上がっていたのか！？」

「そうニャ！オイラは凄いのニャ！」

「・・・まあ、それは置いて、名前は？」

「ラキュナス。よろしくね。・・・旦那様・・・／＼／＼」

「えっ！？」

「ち、違うよ！スバルは私のだよ！？」

「・・・だって・・・／＼／＼」

「ラキュナスも・・・シロンやナコルと同じタイプだったか・・・」

「あつ、あつ、わ、私も、私も・・・むぎゅっ！（ドタッ！）」

「セレナさんも！？」

「ご主人の浮気者♪浮気もぎゅっ！」

「うっさい！俺にその気はない！」

「か、顔を赤くして・・・否定しても・・・意味ない・・・ニャ・・・」

ラキュナスの爆弾発言にすかさずスバルに抱き着くアイリス、対抗しようと開いている方の腕に抱き着くラキュナス。

セレナは動けないことを忘れて前に体を乗り出した為、床にダイブする結果となった。

「・・・俺に・・・安住は無いのか・・・？アイリスに決めたという意思是・・・無視されたのか・・・？」

「それがご主人の運命、みたいだニャ。というかご主人は、女の子から見たらカッコいい方の部類の人間ニャよ？ モテるのは当然ニャ！」

「モテたくないのに・・・」

そんなスバルの眩きは・・・

「ふしゃーっ！」

「ふーっ！」

2匹のわがままな猫の威嚇声と、

「ううゝ・・・」

動けぬ姫の呻き声によって掻き消されていた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第85話 覇龍編 その3 ドジっ子覇龍との会合（後書き）

今回は、カナ・セレナ・ラキュナスの紹介です。

カナ

麒麟雌。

身長140cm。

見た目13歳。

胸のサイズはD+。

スバルを一目見ただけで『優しい人』だと感じ、懐いてしまった。

ウィリアム曰く『新世代』。簡単に言えばロリ巨乳。

スバルの言うことだけは従順に聞き、すぐさま動く。

名前の由来はワックスフラワーの学名より（苦心の末）。花言葉は『可愛らしさ』

セレナ

アルバトリオン雌。

身長152cm。

見た目15歳。

胸のサイズはF。

生まれつき足が不自由な子。故に普段の移動は車椅子か誰かにおぶってもらう。

優しくしてくれたスバルに惚れ、スバルにだけは『様』付けしている。

結構おっちょこちょい（その理由は、スバルが誰かに抱きついているのを目撃した時、動けないことを忘れて抱きつこうとして、車椅子から落ちたりしていることから）。

知識が豊富で、軍師的なことも可能であり、料理もかなり知っている。が、料理はできない。

名前の由来は梅擬^{ウメモドキ}の学名、『i l e x s e r r a t a』より。花言葉は『深い知恵』

ラキュナス

アカムトムル雌。

身長157cm。

見た目16歳。

胸のサイズは4A。

ドジっ子属性持ち（何もないところで転んだり、料理中に爆発が起きたり・・・）。

胸が小さい（言い換えれば洗濯板（ローズ曰く））ことがコンプレックス。

胸のことを何か言われると『ぺったんこって言うな〜！ぺったんこで何が悪い〜！』と叫ぶ。

名前の由来は花金鳳花^{はなきんぼうげ}の別名、『ラナンキュラス』より。花言葉は『魅力に満ちている』

以上です。

次回は帰路に着きますが、対立は激化していき・・・

お楽しみに！

第86話 覇龍編 最終 「これは女の子の意地を掛けた戦いなの!」(Bye)

86話です。

またまた激化した争奪戦、更に家では暴走が・・・

では、どうぞ!

第86話 覇龍編 最終

「これは女の子の意地を掛けた戦いなの! (Bye)

「・・・はぁ・・・」

帰路、スバルは溜息を洩らすことだけしかできなかった。

理由は・・・

「ふーっ!」

「ふしゃーっ!」

スバルの両腕でアイリスとラキュナスが威嚇し合っていること、セレナを背負っていることに理由があった。

「申し訳ありません・・・。私の脚が不自由なばかりに・・・」

「別にそのことは気にしなくてもいいさ。(・・・理性が保つかどうかは分かんが・・・)」

「でも・・・」

「だから気にするなって。気にするべきなのは・・・」

セレナに自分の横を見ろ、と首を向ける。

『ふしゃーっ!』

「・・・お前らしい加減にしろ!」

「スバルは黙ってて!」

「・・・黙ってろってなあ・・・おい・・・」

「これは!女の子の意地をかけた戦いの!」

「女の子の意地・・・って・・・」

「そう!だから!」

一拍置いて・・・

『スバルはおとなしくしてて!!』

「~~~~っ!!」

両サイドから聞こえた大声に後ずさりするしかできず、耳を押さえたスバル。

「うっっ! (ポカポカポカポカ!)」

「うにゅっ! (ポカポカポカポカ!)」

そして、叩き合いを始めた・・・

「あ、あの、スバルさん?」

「レノシア、どうした?」

「カナちゃんとアイリスさんにやったように二人の頭に手を置いて

みたらどうでしょうか？」

「・・・激化すると思うが？」

「いえ、大丈夫ですよ、スバル様。」

「・・・セレナか？今、『様』って言ったの・・・」

「嫌・・・ですか？」

「果てしなく嫌。俺は『様』と呼ばれるような人間じゃないからな。」

「ですが・・・」

「でも何もない。嫌なものは嫌、というわけだ。」

「はい・・・申し訳ありません・・・」

「・・・だが、大丈夫だと言うなら・・・」

意を決したように二人の頭に手を置いた（セレナに文句的なことを言っている間足を止めていたため、いつの間にか腰に抱きついていたので手は解放されていた）。

「ふにゃあ・・・／＼／＼」

「はふう・・・／＼／＼」

「・・・見事に落ち着いたな・・・」

セレナが言った通り本当に大丈夫だったことに驚いていたスバル。

「・・・だが、動けないのは変わらないが・・・」

「抱えていくことは・・・できませんね。」

「セレナがいるからな。・・・カナ、誰かをおぶっていけるか？」

「・・・ラキュナスなら。」

「・・・レノシアは・・・『蜻蛉切』があるから無理か・・・」

「すいません、こんなんです・・・」

「・・・仕方ない、アイリスが俺（シュカツ！）があああっ！？」

スバルがアイリスの方を向いた瞬間、目の前を何かが通過し、そのまま木に刺さった。

「・・・氷の・・・短剣？」

「酷いぞ・・・私もいるのに・・・また他の女の子を連れているなんて・・・」

「・・・プリムラ・・・」

近くの木の後ろに隠れるようにプリムラがいた。

「・・・プリムラ、本当にストーカーだよ、その行動・・・」

「・・・スバル・・・」

「な、なんだ・・・プリムラ・・・？」

なぜか（スバル的に）物凄い形相でスバルを睨んでいるプリムラに若干引き気味になるスバル。

「アイリスや私がいながら・・・浮気を・・・」

「ぶ、プリムラ！？」

「~~~~っ！（ふるふるふるふる）」

さらに強くなる冷氣に怯えるセレナ。

ひしっ。

「え？」

何かされるのかと覚悟していたが、抱きつかれるような感覚にスバルは疑問を持った。

「嫌だよ……。これ以上……。他の子にスバルが好かれるの……。もう……。耐えられないの……」

「……。いつものプリムラと違う……。？」

いつものプリムラよりも積極的な印象。

「……。レノシア、嫌な予感がするのだが……」

「セレナさん、ちょっとこちらへ・・・」
「あ、あの・・・？」

レノシアがセレナを背負い、離れた。

グッ！

「お？」

その瞬間、プリムラがスバルを押した。

そのまま倒れる二人。

「ぶ、プリムラ！？一体何を・・・！？」
「・・・アイリス。」
「ほえっ！？」

スバルが訳が分からない顔をしている時にプリムラがアイリスを呼び、その声にアイリスが意識を取り戻す。

「あ、あれ！？何でプリムラがいるの！？」

「・・・そんなことはどうでもいいの。早くスバルと一緒にならな
いと・・・」

「・・・ならないと？」

「・・・私がスバルを貰うからね。」

「そ、それはダメ！」

「でも、今のままじゃ絶対に私が貰うことになるよ・・・？」

「な、なんで！？」

「お、おい、一体何の「スバルは黙ってて・・・」・・・」

アイリスとプリムラの話についていけなくなったスバル。

話を聞こうとした時、プリムラに黙らされた。

「・・・アイリス、心のどこかで恥ずかしがってると思うよ・・・
？」

「そ、そうなの・・・かな・・・」

「そう・・・。恥ずかしがることはないんだよ・・・？」

「ぷ、プリムラさん！そんなこと言わないでくださいよ！」

「私はアイリスの恋を手伝う方に回ったんだよ？」

「う・・・」

カトレアがすかさず文句を言うが、プリムラに『アイリスの恋を手
伝う』と言われ、引き下がった。

「・・・やっぱり気になるぅっ！」

「・・・何が？」

「プリムラがなんでここにいるのかがだよ！なんでここにいるの！
？今回火山だから連れてこれないって言ってたのに！」

「・・・愛があれば、熱さも涼しくなる・・・／／／」

「・・・プリムラ、『心頭滅却すれば火もまた涼し』的なこと言っても意味ないぞ・・・？」

「・・・ホントは・・・スバルが心配だったから・・・／／／」

「・・・とりあえず無事だったんだし、大丈夫だ。帰るところだったし。」

プリムラも加わって、帰路についた。

「・・・プリムラ、一つだけ聞きたいことがあったんだが・・・」

「・・・何？」

「家で何かあったか？」

「そうだけど・・・なんで分かったの！？」

「・・・お前の服が少しボロボロだしな、それに髪が何本か立っているしな。」

「実は・・・ローズが発狂して『ハニーを、ハニーをおおおおお
！！！！』って言い始めて・・・それをライラが制圧しようとして戦
争になっちゃって・・・」

「それだけでも何かがあったというレベルで済まないのはなぜだろうか・・・？」

「それに・・・」

「それに？」

「ナコルとシロンがおかしくなって・・・襲われそうになった・・・」

／＼

「・・・発情しやがったか・・・」

「発・・・情？」

「まあ、欲望に負けて暴走した、とでも言えば簡単か？」

「・・・欲って・・・」

「俺だ。」

「・・・スバルが・・・？」

「・・・えっちなことなんだよお・・・／＼」

「あ、アイリスがなんで知ってるの!？」

「・・・被害に遭った・・・／＼」

自宅に帰ることにある種の恐怖を覚えたスバル達であった・・・

自宅。

「ただい「ふにゃん！」ぐふぁっ！」

スバルはドアを開けた瞬間、何者かに突進を受けた。

「な、ナコル!？」

「え、猫耳!?! いえ、これは、ナルガの耳!?!」

「にゃん♪」

「な、ナコル・・・お、重、重い・・・」

「ふしゃっ! (ガブッ!)」

「いだっ!?!」

噛みついたり甘えたり・・・

「・・・完全に本能なの？」

「そうなの・・・」

「アイリスさん、鳥肌立ってますからね・・・、相当怖いんでしょうね・・・」

「ぷ、プリムラ！こうなってるのってシロンもだよな！？わぷっ！？」

「そ、そう！」

「にゃん・・・／／／」

猫ナコルはスバルの上に伏せ、その状態で（上目使い、何かに蕩けたような顔で）スバルを見た。

「な、なんだよ？そんな目で見ても何もしないぞ？」

「ふにゃん・・・／／／（ピトツ）」

再び顔を下ろし、スバルにひつつく。

「ちょ、ナコル！ダメだって！」

「は？アイリス、一体何を・・・」

アイリスが言っている『ダメ』が何なのか全く理解できないスバル。

が。

する・・・する・・・

「・・・なんだ、この布の擦れる音は・・・わぷっ!？」

何かがスバルの顔に当たり、視界を塞ぐ。

「兄さんどうし・・・ぶふう・・・」

「その声はロズウェルか!？おい!大丈夫か!？」

『兄さん』という声でロズウェルが来たことが分かったものの、何かが起こったらしく、助けを求められないようだ・・・

ロズウェルはこの時、鼻血の海に沈んでいた。

「ロズウェル君、女の子にそこまで弱かったんですね・・・」

「・・・まあ、上半身ほとんど裸になっているナコルも悪いんだけど・・・」

「裸!？ちょ、待て! 一体俺はどうなるんだ!？」

ロズウェルがどうしてこうなったかを言うプリムラにスバルは慌て始める。

「あ、アイリス！止めてくれ！今の俺にはどうにもできん！」
「わ、わ、わかった！」

半ば焦っているアイリス。

「いい加減・・・離れてっ！」
「ひにゃん！」

（ナコルの下着が水着に近いタイプの物だった為）まるで猫の首輪を掴んでいるように持ち上げるアイリス。

「にゃっ！にゃあっ！」
「嫌がってもダメ！おとなしくして！」
「にゃっ！！」
「アイリス、気絶させてナコルの部屋に・・・」
「わかった！さ、ナコル！行くよ！」
「ふにゃ・・・」

アイリスにずるずると引きずられていくナコル。

「・・・しまった、服着せてから行かせるべきだった・・・」

顔を真っ赤にしてスバルは呟くしかなかった・・・

「・・・皆、シロンを見つけ次第迎撃、速攻で気絶させるんだ！」
『わか（った／りました！）だけど、囧はスバル（さん）で！』
「俺かよ!？」

数分後、スバルをおとりとしたシロン迎撃組がシロンを発見、案の定スバルに抱き着いたため、気絶させることに成功した。

報酬。

入手

特に無し。戦闘してない為。

クエストクリア

一応参加したということが認められた為3000万。

その他

カナ。

セレナ。

ラキュナス。

チェリムルの占い、的中率が増加。

発情モード迎撃部隊設立、囃はスバル。

第86話 覇龍編 最終 「これは女の子の意地を掛けた戦いなの!」(Byア)

今回、『発情モード』が復活しました・・・

次回はウィリアの弱点判明!?

お楽しみに!

第87話 女の子として当然？なお菓子作り、それは事故の前触れで・・・ (前)

87話です！

今回はウィリアの意外なことが判明します！

では、どうぞ！

第87話 女の子として当然？なお菓子作り、それは事故の前触れで・・・

ボフンッ！

「うきゅうっ!？」

キッチンから聞こえた可愛らしい悲鳴。

キッチンにはウィリアがいた。

「けほっ・・・あうう、また失敗しちゃった・・・」

何かを作っているらしいが、失敗したらしい。

「な、何の音ですの!？」

「な、なにがあったの!？」

慌ててキッチンに入ってくるローズとカナ。

「こほっ・・・大丈夫・・・なんでもないから・・・」

「は、ハニーが今の爆発の原因でしたの!？」

「・・・これは・・・」

「あつ、あつ、み、見ちゃダメっ！／＼／＼」

カナが黒い煙を出しているところを見ると、ウィリアが慌てて隠そうとする。

「カナ、一体ハニーは何を作っていたんですの？」

「材料の切りくずと粉・・・これ、小麦粉だから・・・かぼちやパイかな？」

「あ、あう、あうう・・・／＼／＼」

作っているモノがばれ、手をパタパタと上下させるウィリア。

「・・・なんでこれを作ってるんですの？」

「・・・言えない！」

「ねえ、なんで？」

「言えないの！内緒！」

ウィリアは頑なに理由を言おうとしない。

「・・・こうなったら・・・」

「尋問だね・・・」

「え、え！？」

「正直に言うまで！」

「青汁を飲ませますの！カトレア特製の！」

「っ!!!(ダッ!)」

ウィリア、逃走。

「待つですよ!」

「なんでかを答えてよ!」

「いゝやゝだゝっ!」

三人の追いかけてが始まった。

「ハニーっ!正直になんであれを作っていたのかを言わないと3時間胸揉み続けますのよ!」

「絶対嫌!それだったら捕まらない方がいいもん!」

「私は助けることができるけど!?!」

「自分一人で作りたいの!」

「だったら!おとなしく白状してほしいですよ!そうすれば悪いようにはしませんの!」

「やゝだゝっ!」

追いかけては続くが・・・

ドンッ！

「わぷっ!？」

「痛た・・・ウィリア?どうしたのそんなに慌てて・・・」

「あ、アイリス、助けて!」

「ちょ、よくわかんないんだけど・・・」

アイリスと衝突し、助けを求めるウィリア。

<ハニィ〜っ!どこですの〜っ!?>
<教えて〜っ!>

「来たあっ! (タタッ! ガチャッ!)」

「あっ!そこ私の部屋!」

「ちよつと隠れさせて!あたしのいろんなところが危険なの!」

「・・・ちよつとだけだよ・・・?／／／」

なぜアイリスが顔を赤くしたのか・・・

(ベッドの下)

「・・・ボロボロのアイルー人形に脱ぎ散らかされた下着・・・。
アイリスって意外とズボラなところあるんだ・・・」

そう言いつつベッドの下からアイリスの部屋を見回す。

「・・・机の上にスバルの写真だったり何かが書いてあるノートだったり・・・。気になる・・・。」

<ハニーがここを通ったはずですよ！知りませんの！？>

<し、知らないよ・・・>

<ホントのこと言って！>

<ほっ、ホントだって！>

「・・・アイリス、ありがと・・・。」

<だったら・・・あっちですよっ！！>

<おっけっ！>

二人が走り去ったのを確認し、ウィリアは部屋から出る。

「アイリス、ありがと・・・。」

「いいよ。・・・あの・・・ね？ウィリア・・・／／／／」

「どしたの？」

「の、ノートの中・・・見てないよね・・・？／／／／」

「気にはなったんだけど・・・見てないよ？」

「ホント・・・だよね？」

「ホント。・・・何が書いてあったの？」

「いつ、言えない！」

「・・・私が何をしようとしていたか教えるから・・・。・・・は、
恥ずかしいけど・・・。／／／」

「じゃ、じゃあ・・・私も・・・。／／／」

二人はアイリスの部屋に入って行った。

「のはいいんだけど・・・。アイリス、ちょっとは片付けたりしたらどう・・・？」

「あ、あはは・・・ちょ、ちょっとめんどくさくて・・・。／／／」

「・・・お、大きい・・・」

「あっ！だ、ダメ！／／／」

ウィリアが自分の下着を持ってまじまじと見つめているのを止めようとするアイリス。

「・・・それで、ウィリアはなんでカナとローズに追いかけられていたの？」

「・・・スバルに・・・何か甘いものでも作ろうと思って・・・。／

／＼
「甘いもの？」

「うん……。最近スバル、何かの開発で頑張ってるでしょ？何かを考えるときには糖分があると良い、って聞いたから……／＼」

「わ、私のノートも……。同じなの……。／＼」

『……。／＼』

二人とも顔を赤くして黙り込んでしまった。

「うい、ウィリアは何を作ろうとしてたの？／＼」

「わ、私は……。最初はチョコレートをもって思ってたんだけど……。失敗して……。それでかぼちゃパイを作ろうとして……。／＼」

「失敗した……。の？」

「うう……。あ、アイリスは……。？／＼」

「うえっ！？わ、私は……。その……。プリンを……。作ろうと思ってたんだけど……。ごによごによ……。／＼」

『はあ……。』

二人して溜息をつく。

「……。でも！やってみないと分かんないよ！？」

「そっ、そうだね！できないまままで無理って決めつけるのはよくないよね！」

「も、もう一回やってみよう！」

二人でキッチンに向かった。

二人がアイリスの部屋で話していた頃・・・

「・・・頭を使いすぎた・・・。何か甘い物を・・・お？」

スバルがキッチンに入ってきて、何かを見つけた。

「・・・チョコレート・・・だよ・・・？」

明らかにチョコレートの原形を留めていない『異物』だった。

「・・・見た目はあれだが・・・一応チョコなんだよな・・・？見た目が悪くても、味さえ良ければ・・・」

一欠片を折って、口の中に放り込む。

「・・・んぐうつ!？」

バタツ!!

チョコ(らしい何か)を飲み込んだ瞬間、体の中で何事にも言い換えようの無い衝撃が襲い、スバルは倒れこんだ。

「・・・なんだろう、今、『バタッ』って音が聞こえたような・・・」

アイリスがそう言った瞬間・・・

<す、スバルさん！？だ、大丈夫ですか！？>
<す、スバル！目を覚まして！死なないで！>

キッチンから聞こえるカトレアとシロンの悲鳴ともとれる声。

「あわわわわ・・・」

「ウィ、ウィリア？どうしたの、そんなに青ざめて・・・」

「あ、あ、あたしが失敗したチョコ・・・食べちゃったんだ・・・」

「失敗したらなんで倒れるの！？」

「・・・鍋にひつついちゃったの・・・」

「とっ、とにかく行かなきゃ！」

二人がキッチンに向かうと・・・

「ぐ・・・ぐ・・・」

「い、医者！早く！医者を！」

「やだよお！スバル！死んじゃやだよお！」

「うわああああん！」

顔を真っ青にしているスバル、めっちゃくちゃ慌てているシロン、スバルを涙目になって揺するサンナ、ただただ泣いているだけのカナ・

大惨事となっていた。

「あわ、あわわわ・・・」

「ウイ、ウイリア？」

「っ！！（ダダッ！）」

ウイリアはおもむろに鍋の方に走っていき・・・

ガシッ！

「ウィリア・・・？」

鍋を引っ掴み・・・

ガリッ！バリ！ボキ！バキ！ゴリッ！

鍋にくっついていないチョコレートの部分だけをひたすら食べ・・・

・・・パタッ。

倒れた。

「ウィ、ウィリア！？あ、あなた、一体何をしてるのよ！？」

「だ、だって・・・これ・・・わ、私・・・が・・・作った・・・もの・・・だから・・・」

「みや、脈拍が弱まってます！」

「急いで心臓マッサージを！」

「じ、人工呼吸は必要ですよ！？」

「今回は必要ないです！」

ウィリアも倒れるという緊急事態が発生、大変なことになっていた・
・

(後日譚)

「ハニィゝ・・・あれを作っていたのって・・・」

「あう・・・／＼／」

「ハニィゝ・・・(ふにつ)」

「ひゃうっ!？」

「正直に言うまで胸を揉み続けますのゝっ!」

「や、やめ、ふやん! やめええええええ!!」

ウィリアの悲鳴が家中に響いていた・・・

報酬。

入手・クエストクリア

クエスト未受注のため無し。

その他

ウィリアの料理スキルがないことが判明。レベルはどうやら化学兵^{ケミカルウエ}器^{ボン}・・・！？

アイリス、相変わらず卵割ができない模様・・・？

第87話 女の子として当然？なお菓子作り、それは事故の前触れで・・・（後

ウィリアの弱点。料理が下手なことでした。

『鉄鍋のチョコレート包み』・・・

次回は、イシアが明かす、本当の自分・・・

お楽しみに。

第88話 二人きりに明かされた、クールな乙女の裏の顔（前書き）

88話です！

イシアが明かす本当の自分とは・・・？

では、どうぞ！

第88話 二人きりに明かされた、クールな乙女の裏の顔

「・・・温泉旅行28名様団体ご案内？」

レノシアが持ってきた福引きの商品を見てスバルは思わず声を漏らした。

「はい。スバルさんにも来てもらいたいのですが、「男性は5名様、異性に殆ど興味を持たない人を選んでください。恋人を持つ人男性はダメです」と書かれていて・・・」

「必然的に俺は除外・・・ね。」

「それとあと一人来れないんです・・・」

「あたしが残るね・・・」

「イシア・・・」

「・・・恥ずかしいことなんだけど、昨日ちょっと転んじやって、足擦りむいちやったから・・・」

「・・・私も行けないと思いますが・・・」

「セレナも行けないんだよな・・・」

「あ、セレナさんは私がおんぶしたりすれば温泉に入れますよ？」

「それも・・・そうですね。」

「それなら大丈夫そうだな。・・・じゃあ、俺とイシアで留守番してるから、みんなで楽しんできな。」

「あ、はい。・・・ごめんなさい、皆で行けなくて・・・」

「謝る必要はないぞ。楽しんできてくれればそれでいいんだしな。」

「お土産お願いね。」

「こらこらイシア。それをせがむとか・・・」「別に構いませんよ?」
「・・・いいのか?」

「はい。では、行ってきますね。」
「おう、行ってらっしゃい！」

スバルに見送られ、家の殆どの人間が温泉旅行に向かった。

ウィリアは一番目を輝かせていた。

その理由は、温泉に『豊胸効果』があると聞いたからだ。

「・・・さて、俺は少し寝るか「あ・・・スバル・・・／＼／」
ん？なんだ、イシア？」

スバルが自室に向かおうとした時、イシアが声をかけたので立ち止まった。

「・・・その、あの、きよ、今日・・・、い、一緒に・・・いて・・・
ほしい・・・の・・・／＼／」
「・・・はい？」

もじもじしながら要件を言うイシアに疑問符しか浮かばないスバル。

「・・・とりあえず聞くが・・・、何故だ？」
「そ、それは・・・その・・・／＼／＼」

スバルの方をチラチラ見つつ、それでもなおもじもじしているイシア。
ア。

「その？」

「さ・・・寂しい・・・から・・・／＼／＼」

「は、はは・・・」

「・・・ダメ・・・？／＼／＼」

スバルにひつつき、上目でスバルを見て聞くイシア。

「・・・まあ、いいが。ただし。皆が帰ってくるまでだぞ？」

「う、うん・・・／＼／＼」

「・・・（イシアの奴、どうしたんだ？いつもと違ってしおらしいんだが・・・？）」

自室に向かうスバルと、それに顔を赤くしてついてくるイシア。

「・・・あ。」

「ど、どうしたの？」

「・・・俺、計算間違ってた・・・。今俺の家の住人は俺含めて3

1、人数は28・・・この家には結局3人いることになる・・・」
「・・・（そ、それまでにスバルに私の真実を伝えないと・・・）」
「なんか言ったか？」
「な、何でもない！何でもないよ！」

スバルの部屋。

「
・
・
・
／
／
／
」

ベッドの上に寝転がるスバルとその隣にちょこんと座っているだけのイシア。

「・・・なあイシア、なんで一緒にいたいって言いだしたんだ？」

「あ、う、そ、それは、そのお・・・／＼／」

「ん？」

「あ、あたしの全てを・・・見て欲しいから・・・／＼／」

「・・・俺の中ではその『全て』の定義が分からないんだが・・・俺の前でいきなり脱ぐなんてことはしないよな？」

「そつ、そうじゃなくて！ほっ、本当の私を知ってほしいの！／＼／」

思いつきスバルに顔を近づけるイシア。

「わ、わかった、わかったから顔を引っ込めてくれないか？（・・・いま、イシアの一人称が『あたし』から『私』になってた気が・・・）」

「あ、わ、わ・・・／＼／」

また沈黙が。

「・・・で、イシア、本当のイシアって何だ？」

「あ、あのね？笑わないで・・・くれる？／＼／」

「笑うものか。本当のことなんだから。」

「え、えつとね・・・？私、本当は・・・、泣き虫で、寂しがりで、甘えんぼなの・・・／＼／」

「・・・」

「ど、どうしたの・・・？」

「笑えない話だ・・・。今までと違うから寧ろ驚いてる・・・」

本気で驚いているスバル。

「泣き虫で、寂しがりで、甘えんぼ、か・・・。サンナと結構似てるな・・・。まあ、姉妹だからというところは・・・少しはあるがな。」

「うん・・・／＼／」

「・・・そのうえ、恥ずかしがりでもあるがな。」

「もっ、もおっ！言わないでよ！／＼／」

「ははっ、悪い悪い。」

「ふう・・・」

むくれるイシア。

「・・・少し寝るか・・・」

「じゃ、じゃあ、わ、私も・・・／＼／」

「・・・何故俺のベッドに入り込んでくる？」

「・・・一緒に寝たいの・・・／＼／」

「それも甘えの内の一つ、と取っていいのか？」

「しょ、しよれひゃ・・・／＼／」

「噛み噛み。」

「・・・いじわるう・・・」

そんな声が聞こえつつも、イシアはもそもそとスバルのベッドの布団に入り込んでくる。

「・・・お返し。／＼／＼（むにゅっ）」
「っ!？」

イシアがスバルに抱きついてきた為、彼女の胸が直に背中に当たる・・・わけはなく、衣服越しにはあるが当たっていた。

スバルはそのことに少なからず動揺していた。

「ちょ!は、離れろ!」
「やっ!ちょ、暴れないでよ!そっ、そんなに暴れたら落ちちゃう!」
「」

スバルとイシアがベッドの上で一悶着起こす。

（別に18禁的なことをしているわけではない。スバルはただ、抱きついているイシアを振り解こうとしているだけである）

ふにゅ・・・

「ふあっ!？」

「・・・まさか？」

「・・・その・・・まさか・・・／＼／」

「・・・事故だからな!？元と言えばイシアが抱き着いてこなければこんなことにならな・・・イシア？」

スバルが慌ててイシアに反論しようとするが・・・

「・・・／＼／」

イシアはまたもじもじしてしまっていた。

「・・・イシア？」

「・・・いよお・・・／＼／」

顔を火が出るような位真っ赤にして呟いているイシア。

「は？」

「い、いきなり・・・胸触られたのが・・・は、恥ずかしいよ・・・

・
／
／
／

「・・・悪かった。」

イシアがもじもじし続け、結局問題は解決・・・

「・・・俺、下行って・・・」

「あつ、いつ、行かないで！」

イシアが下に向かおうとしているスバルを引き止める。

「ど、どうしたんだよ・・・」

「そ、その・・・さ、寂しいから・・・／＼／＼」

「・・・とりあえず約束してほしいんだが・・・」

「な、なに・・・？／＼／＼」

「・・・寝させてくれ。」

「・・・え？」

「昨日から・・・ふああ・・・殆ど寝てなくな・・・、・・・寝不足なんだ・・・」

大欠伸をしてイシアに言うスバル。

「え、あ、う、うん・・・／＼／＼」

「・・・下にあるソファーには入り込まないでほしいからな・・・」

「・・・（しょぼーん・・・）」

「落ち込んでもダメだからな・・・？・・・くああ・・・」

「う、うん・・・」

欠伸をしながら下のソファに向かうスバルと、それを追う形でついてくるイシア。

そして、スバルはソファで、イシアはスバルに寄り添うように眠った。

夕方。

「・・・ふああ・・・、あ、もうこんな時間何だ・・・」

大きく伸び、イシアが起きる。

「・・・ご飯の準備をしないと・・・」

一人でキッチンに向かい、料理を始めるイシア。

スバルは未だ熟睡している。

「・・・スバルの為に・・・おいしく作らなきゃ・・・／／／」

てきぱきと動き、料理が出来上がっていく。

数分後、料理が出来上がる。

料理の内容は、豪華なものではなく質素なものとなっていたが、それでも立派なものだった。

「・・・そうだ、スバルを起こさなきゃ・・・」

スバルを起こそうとする。

「・・・スバル、起きて。ご飯できたよ？」

「ん・・・ぐう・・・」

「スバル、起きて？」

「・・・後30分・・・寝させてくれ・・・」

寝返りをうって仰向けになるスバル。

「・・・（ドキッ！）／／／」

スバルの顔を見てしまい、思わずドキドキしてしまうイシア。

「・・・ちょ、ちょっとくらいは・・・わがまましても・・・良い
よね・・・？き、キスとか・・・／／／」

眼をキョロキョロさせて、誰もいないことを確認するイシア。

「い、いいよね・・・キス・・・しても・・・／／／」

膝立ちをし、顔を近づけて・・・

< たっだいまゝ！ >

< くだいま帰りました。 >

「ひゃわあっ！？」

誰かが帰ってきた時の声で思わず飛び上がるイシア。

「あれ、イシア？ いるの？」

「ね、姉さん・・・／／／」

帰ってきたのはサンナとセレナだった。

「あれ、スバル・・・眠ってるんだ・・・」

「うん、あまり眠ってなかったらしいから・・・／／／」

「お疲れだということが・・・よくわかりますね・・・」

「・・・イシア？ 顔が赤いけど・・・何かあったのかなあ？」

「な、何もなかったよ！？ なにも！」

「うっそだ！ 絶対何かあったんだ！」

「なかったってば！ホントに！」

「あ、あの、さ、サンナ？あまり彼女を問い詰めては・・・」

サンナの疑いをイシアは必死に否定し続けていた。

ただ、イシアは心の中では・・・

（イシア・・・私が、本当の自分を言ったのは・・・

スバルが好きだからなんだよ・・・？

好きじゃなかったら、こんなことなんて言わないし・・・

胸触ってもあんなに恥ずかしがるだけじゃなかったもん・・・

いつまでも・・・甘えさせてね・・・？／／／

そう思っていた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第88話 二人きりに明かされた、クールな乙女の裏の顔（後書き）

イシアの『本当の自分』とは、寂しがりで、泣き虫の甘えたがりな子でした（一人称も『私』になってます）。

次回はサンナとイシアが（異常な方法で）クエストに行きます！

お楽しみに！

第89話 家の中大戦争、姉妹の初陣は虫狩り！（前書き）

89話です！

姉妹がクエストに参加、その前にスバルに危機（？）が・・・？
では、どうぞ！

追伸

いつもの15禁（R-15）です。

第89話 家の中大戦争、姉妹の初陣は虫狩り!

サンナ達が帰ってきたその夜。

「・・・サンナ、セレナ、なんでお前らが帰ってきた？」

「それは・・・」

「スバルに会いたかったから♪」

「・・・姉さん、違うでしょ・・・？」

「本当は、私は、その、足が不自由だとひょっとしたら襲われるかもしれないと言われて、それで、サンナさんは私の付き添いで・・・」

「・・・男性5名まで、というところにちょっと引っかけたてしな・・・。大方、元々は女性専用の温泉だったんだろうな。だから、そういう目的の野郎が来るかもしれない、と、いざという時に逃げられないセレナは危ないと判断されたんだろうな・・・」

「・・・もうちょっと二人きりでいたかったのに・・・／／／」

「・・・イシア？」

「ふえ!？」

眩いていたイシアにサンナがじと目で見る。

「なに眩いていたの・・・？」

「ね、姉さん、眼が怖い・・・」

「な・に・つ・ぶ・や・い・て・た・の!？」

「ね、姉さん・・・」

「さあ、正直に言いなさい!正直に言ったら許してあげるから・・・」

！」

「そんな風に見えないっ！」

イシアはそう言いながらスバルの背中に隠れた。

「スバル・・・助けて・・・」

「・・・俺に助けを求めるか？はつきり言って・・・無駄だ「ていつ！」げふっ！？」

サンナがいきなりスバルに抱き着いた。

イシアが後ろにいるのにもかかわらず、それを押しつぶすかのような形で、である。

「ぐおっ！」

「ふひゃん！」

「・・・？」

スバルのくぐもった声にイシアの声、疑問符を浮かべるセレナ。

「ぐう・・・（・・・な、なんだ？左手に何か柔らかい感覚がする
何かが・・・？）」

「・・・／／／」

「・・・（あんどり）」

スバルに眼には、開いた口が塞がらないと言った状態になっている
サンナが見えていた。

そしてスバルの下には、完全に恥ずかしがっているイシアがいる（
スバルには見えない）。

「・・・スバルの・・・えっち・・・／／／」

「え、ちょ、はああっ!？」

「い、イシアじゃなくて私にしてほしかったあゝっ！（ムギユツ!）」

「ふみゅっ!」

「・・・えっと、どう言い表わせばいいのでしょうか・・・これ・・・」

イシアの声にスバルは困惑し、サンナが焦ってスバルに抱き着いた。
セレナは全くついていけないようである。

「ひあっ!ね、姉さん、う、うご、動かさないで・・・／／／」

「イシアじゃなくて私にしてよ、それ!」

「動けない状態でそれを言うか!？それ以上にそれを言わすな!で
きるわけがないだろうが!」

「私はスバルにだったら何されてもいいもん!」

「倫理的にマズいことをサラッと言うな!」

「あつ、やつ、だ、だ、ダメ、そ、それ以上・・・触られたら・・・」
「っ！」

ついにセレナが現状把握する。

「わ、私も・・・ふぎゅっ！私も！」

車椅子から落ちながらも、スバルに寄り添う為に頑張って近付くセレナ。

「ダメ！スバルは私の！」

「私にも・・・抱き着かせて下さい！！」

「ら、らめ・・・も、こ、これいひようひゃ（訳：だ、ダメ・・・、も、こ、これ以上は）・・・ひゃうっ！／／／」

「い・・・息が・・・は、腹をおさ、押さえるな・・・」

「っっっ！！」

「私だって、私だってえっっっ！」

「も、もう・・・らめええええええええ！！」

スバルとイシアが同時にぐったりとした（スバルの方では生死に関わっているが）。

「ぜい、ぜい、ぜい・・・ふ、二人とも・・・殺す気か・・・!?」
『ご、ごめんなさい!』

二人がスバルの上から退き、イシアがスバルの下から解放された。

「まったく・・・。この中で俺以外に料理が作れるイシアがこうな
ってしまったのも、元はと言えばお前らが原因なんだぞ!？」

『それはスバル(様)が悪いと思う(のですが)・・・』

「な、なんでだよ?俺は何かイシアにしたわけじゃ・・・」

「イシアの胸、ずっと揉んでたよ?」

「は・・・い?」

「あの、サンナさんがスバル様に突撃して倒れた時からですが、そ
の時からずっと・・・イシアさんの・・・む、胸を・・・驚掴みに
してましたよ・・・?／／／」

「・・・イシア・・・すまん。」

息遣いが荒いイシアにスバルはすぐに謝罪する。

・・・が。

「・・・目が・・・トロンとしてますよ・・・?」
「は?」

スバルがイシアを見ると、彼女は何かに蕩けている・・・というよりも呆けているかのような目をしていた。

「い、イシア? 大丈夫か、おい?」

スバルがイシアに問いかけるが・・・

ガシッ!

「お?」

イシアがスバルの右手を掴み・・・

グイツ！

「うわっ!？」

引っ張り・・・

ムニッツ！

「っ!？／／／」

「んっ・・・／／／」

『えっ!？』

自らの胸に押し当てると言う行動に出た。

それに驚きを隠せないのがサンナとセレナ。

「・・・／／／」

無言で全く動こうとしないイシア。

だがその目には、

「あたしは・・・スバルにだったら何をされてもいいよ・・・好きにしても・・・良いから・・・ね・・・／＼／＼」

という意思が見え隠れしていた。

「ふ、二人とも！どうにかしてイシアを気絶させてくれ！このままだと・・・俺が・・・俺が危ない！」

「い、イシア！ダメだってば！」

「やっ！」

「嫌がってもダメです！さあ、すぐにスバルさんを放しなさい！」

「やっだっ！」

「・・・気のせいだろうか・・・、イシアが幼児退行した気がする・・・」

イシアが暴走し、止めるのに30分かかった・・・

翌朝。

「・・・動けないのは何故だ・・・？」

右腕にセレナが、左腕にサンナが、体の上にイシアが乗りかかっていたために全く身動きが取れなくなっていたスバル。

「むにゃ・・・すばりゅ・・・」

「うーん・・・（書けるわけないだろうがこの小説で！B Yスバル）」

「ふみい・・・スバルさんのえっちい・・・」

「寝言も三者三様とは言うが・・・俺がどんどん危険な方向に進んでいるのはなぜだろうか・・・？」

三者三様の寝言の内容が、明らかに自分が不利になるような内容だったことに困惑したスバル。

「・・・とは言え、どうにかして出ないと日課の鍛練が・・・」

現実、動けないことに変わりはない。

だが、動かないことには何もできないことも現実。

「皆・・・すまん！」

小さく呟き、思い切り起き上がる。

「ふあっ!?!」

「やっ!?!」

「ん・・・／／／」

その瞬間に三人が何か声を漏らしたが、そんなことは一切気にしていない。

「・・・脱出完了・・・。朝からきついつてのこれは・・・。」

スバルはそのまま日課の鍛練に向かった。

「ふみゆ・・・ふああ・・・」

スバルがベッドから脱出した後、一番に眼を覚ましたのはセレナだった。

「・・・なんでしょうか・・・、何故か・・・衣服が乱れているよ
うな・・・。。・・・まさか!?!」

慌てて車椅子に乗りこみ、庭に向かう。

「す、すすすスバルさん!?!」
「お、おお、なんだ?」

凄い慌てっぷりにびっくりするスバル。

「わ、わ、私が眠っている間に何かしませんでした!?!?／／／」

「何かって・・・俺は別に・・・」

「だ、だって・・・だって・・・／／／」

「一体何があったってんだよ? 大問題になりそうなことは一切してないぞ?」

「だって・・・起きた時に衣服が乱れていたんですよ!?!?」

「あー・・・、それな? 起きる為に無理やり引き剥がしたからな・・・」

「・・・何もしてないんですね? ただ起きる為に・・・その・・・あの・・・／／／」

「・・・まだ何かあるのか?」

「む、む、胸を・・・、触ったんですよね・・・?／／／」

「・・・思い出したくないことを・・・さりと・・・」

落ち込む形になったスバル。

「だ、だって、い、今もなんですけど、む、胸を触られたような感じがして・・・／／／」

「・・・事故だ。過失でも故意でもない。」

「・・・／／／」

「・・・なんだ、もじもじしだして・・・」

「・・・い、言ってくだされば、そ、その、好きにしても構いませんのに・・・／／／」

「俺にそんな行動をしようという気はないのを知っているだろう? その上でそれを言うか?」

「そ、それは・・・そうですね・・・／＼／」

「・・・鍛錬させてくれ。一応やっておかないと体が鈍ってしまうからな・・・」

「は、はい・・・／＼／」

そしてスバルは日課の鍛錬、素振りを再開した。

セレナはそれを入り口からぽーっとしながら見ていた。

「う、うゝん・・・むにゃ・・・朝あ・・・？」

その後、サンナが起床。

「・・・スバルの寝顔が見れた♪・・・きゃっ、恥ずかし・・・／＼／」

一人で勝手にもじもじしたりしていた（第三者からしてみれば、気

持ち悪いの一点張りのような動きで）。

「ん・・・、姉さん・・・うるさい・・・」

「あ、イシア？起こしちゃったみたい・・・。ごめんね・・・？」

「起こしちゃったじゃないよ・・・。ふあ・・・まだ眠いのにな・・・」

「・・・でもねイシア、朝早く起きれないと、スバルの寝顔見れないんだよ？」

「寝顔が見たいとかそういうことはどうでもいいの・・・。とにかく・・・おやすみ・・・」

「あ、イシア？イシア？」

「すう・・・すう・・・」

「・・・私も人のこと言えないんだけど・・・下着なのは黙っておこ・・・／＼／＼」

姉妹の朝のちょっとした一時だった（イシアがうるさいサンナに注意し、二度寝するだけの話だったが）。

朝食。

「・・・いつもは騒がしいのにな。殆どが出払っているとここまで寂しいものなんだな・・・」

ちよっとしんみりしているスバル。

「・・・もうっ！私達がいるじゃん！落ち込まないでよ！」

「まあ、そうだと言えばそうなんだが・・・な。」

「えっと、今日は私とイシアさんで料理を作ってみましたけど・・・」

「ど、どう・・・かな・・・／／／」

二人が作った料理は、朝食にしては豪華すぎるものだったが・・・

「・・・美味しい・・・」

「ほ、ホント!？」

「嘘ではないですよね!？」

「そんなわけがあるか。本当に美味しいんだ。」

『良かった(ですう)・・・』

二人ともほっと胸を撫で下ろす。

「・・・今日は・・・クエストに行くつもりだしな。簡単なのを受けてくるよ。今日、アイリスたち帰ってくるだろうしな・・・」

「あ、それもそう・・・ですね。」

どこか残念そうに答えるセレナ。

「・・・とりあえず簡単なものに行ってくる。・・・今日は・・・カントロスとランゴスタ狩りにでも行くかな・・・？」

「気を付けて行って来て下さいね・・・？」

「・・・スバル、下級ならあたしも一緒に行ってもいい・・・？」

「・・・俺としては断りたいのだが・・・、断ったら俺は一体どうなる？」

「・・・抱き着く。嫌というほど身体をうりうりする。」

「・・・同行を許可する。ただ・・・弓でもいいか？」

「うん。あたし、そこまで運動神経いいわけじゃないから、遠くから援護する方がいいの。」

「私も行くっ！」

「サンナ・・・お前、またあの時のノリでついてくる気か・・・？」

「違うもん！今度はスバルのお手伝いがしたいの！」

「嫌だ。ただでさえ護れるか分からないという状況なのにこれ以上は護り切れる自信がない・・・」

「断ったら・・・その・・・（もじもじ）／／／」

（スバル…（ゾクッ！）な、なんだ！？今、背中に物凄い寒気が・・・）

顔を赤らめてもじもじしだすサンナに背中に寒気を覚えたスバル。

ピクッ！

「あ、アイリス、どうしたの？」

「・・・スバルに・・・危険が迫った気がする・・・」

「アイリス、大丈夫だって、きっと・・・」

「・・・サンナが襲ってないか心配だよぉっ！」

アイリスが『スバルに何かの危機が迫ったセンサー』を作動させていた。

「・・・さ、サンナには・・・ヘビィボウガンかな・・・？」
「ひ、酷い・・・」

「ね、姉さんはそんなに力がないからさ、せめてライトボウガンに・
・」

「・・・悪い。俺、ライトボウガン一つも持ってないから・・・」

「じゃ、じゃあ、弓で・・・」

「ま、まあ、それなら大丈夫だが・・・」

「本当に・・・気を付けてくださいね・・・？」

セレナに見送られ、三人はクエストに向かった。

クエスト・・・甲虫類の収穫祭！

開始。

「こんなに虫がいるなんて聞いてないようっ!」

「ついてくるって言ったのはどこのどいつだ、まったく・・・」

「・・・姉さん、気をつけないと刺されるよ・・・?」

「いいもん! 胸だったら!」

「そういう問題じゃないっての・・・。前もこんな話があった気がするが・・・」

「へっくし!」

「アイリス、風邪引いたの?」

「うゝん・・・、昨日、『温泉だゝっ!』ってのはしゃぎすぎて湯あたりしたのかなあ・・・。くしゅん!」

「あ、アイリスさん、風邪ひいたのならおとなしくしてない!」

「・・・相手はカンタロスとランゴスタ・・・。小さいから弓の私
たちには不利だね・・・」

「だから俺がいるってわけだ。」

「えいっ！」

スバルとイシアが話している時、その二人の話を遮るかのように先
制で弓を射るサンナ。

ウィリアと同等、あるいはそれ以上の精密さを見せた矢は、空を舞
うランゴスタの頭に直撃し、一匹を射落した。

「今ので一斉に狙いを向けるぞ・・・！死なないようにしろよ・・・
！」

「わかった！」

「了解！」

サンナとイシアが息を揃えて矢を放ち、その合間を縫うようにスバ
ルが斬る。

サンナの矢はあの時以降、一切精密さが欠如し、運よく地上のカンタロスに当たるのがせいぜいと言ったところになったが、イシアの矢はウィリアを圧倒的に超える精密さを見せた。

そして、スバルがランゴスタを切った時、その体液がサンナにかかった。

「ふやん！」

「姉さん!？」

「やあーん!べたべたっつ！」

「我慢して!終わったら体洗えるから!近くに湖あるし!」

二人が言い合いをしている間、ランゴスタもカンタロスも迫ってくる。

「口を動かす前に手を動かせ!刺されたり集られたりするぞ!」

「そ、そうだった!」

再び矢を射始める二人。

スバルは二人とは離れた位置でランゴスタとカンタロスを大量討伐している為に二人の援護には簡単には向かえない。

「くっ・・・多すぎる・・・！きゃっ！？」
「イシア！？」

大量討伐の結果、地面に飛び散った体液に脚を取られ、転んでしま
うイシア。

「いったぁ・・・」
「早く起き上がって！やられちゃうよ！？」
「そうは言っても・・・きゃっ！す、滑って起き上がれないの！」
「そ、そんな・・・きゃっ！」

サンナも転んでしまう。

「え、ちょっと、待ってよ・・・このまま・・・刺され放題になっ
ちゃうの！？」
「やだ・・・やだよ・・・」

集り始めるランゴスタに怯え、体が動かなくなってしまふ二人。

「・・・サンナ！イシア！・・・くそっ！お前ら邪魔だぁ！」

スバルが二人を救おうと動くが、その行く手を阻むかのようにランゴスタが現れ、それを斬る為に時間を取られる。

「くそっ・・・間に合え！間に合えええええ！！」

二人が刺される前に到達したいスバル。

だが、無情にもそれは叶わず・・・

プスッ！

「ひびくっ！」

「ね、ねえさ（ぷすっ）あぐっ・・・」

二人が刺されてしまう（なぜか胸を）。

「くっ、これ以上二人がやられないようにしないと・・・」

スバルは相変わらず行きあぐねている。

「やつ、やだ、来ないで、来ないで・・・」
「やだ・・・いや、いやあっ！」

ランゴスタの痺れ毒で動けなくなっている二人にランゴスタとカンタロスが迫る。

「くうっ……。すまん！数が多すぎて動き辛い！ちょっとの間耐えてくれ！後で思いっきり泣いても構わないから！」

スバルは二人に向かって思い切り叫んだ。

数分後……

「かふっ・・・」

「あっ・・・ん・・・」

二人は（色々と）限界に来ていた。

「・・・また、護れないのか・・・！？俺は・・・誰も護れないのか！？」

スバルは群がる虫たちを斬りながら自問自答をする。

「それだけは・・・絶対に嫌だ！」

そう行ってスバルは剣を一振り、横に薙いだ。

その瞬間・・・

その延長線上にいたランゴスタが一斉に飛沫を上げて墜落していた。

「・・・道が開けた！二人とも！今行くぞ！」

スバルは二人の許に駆け出していく。

「・・・大丈夫か！？」

「す・・・スバ・・・ル・・・」

「・・・らめ、もう・・・らめえ・・・／／／」

二人が戦闘不能になっており、どうしようもない状況。

「くっ・・・こういう時に誰かがいてくれれば・・・！」

スバルが『もうダメか』と思った時・・・

ボツ！

「火!？」

何者かが放ったであろう矢と、その矢を火元とするであろう火が舞っていた。

くスバル様！今のうちに二人を！>

「その声は・・・セレナ！？」

火矢を放ったもの、この声の正体はセレナだった。

「たった今、火計を発動しました！すぐに退避を！」

「わ、わかった！少し辛いかもしれないが、二人とも我慢してくれよ！」

「あ・・・う・・・」

「んああ・・・／／／」

スバルはどうにか痺れてぐったりしているイシアと顔を紅潮させているサンナを担いで立ち去る。

ランゴスタとカンタロスは死体も含め全部焼却しきっていた。

「・・・セレナ、助かった。あのままだったら俺も死んでいた・・・」

「はい、好きな人を助けるのは、・・・妻として・・・、当然ですから・・・／＼」

「・・・俺、アイリスが恋人だって前言ったよな？」

「はい・・・。でも、私は貴方以外を夫とする気はありませんから・

・／／／」

「・・・とりあえず痺れが取れたら二人に体を洗うように言ってくれ・・・。俺は状況を確認して200匹つつ倒せたかを確認してる。」

スバルは一人、先程の激戦区まで歩いて行った。

「・・・サンナさん、イシアさん、大丈夫ですか？」

「だ、だい、じょう、ぶ、じゃ、な、い・・・」

「ら、らめ、らいりようふりゃらい・・・（訳：だ、ダメ、大丈夫じゃない・・・）」

「・・・近くに麻痺とりの薬草は・・・ありませんか・・・」

「うっ・・・くう・・・だ、大丈夫・・・だから・・・」

「イシアさん！あまり無茶をなさっては！」

「無茶じゃなくて・・・ホントに麻痺が消えたの。」

「はぁ・・・よかったです・・・」

「・・・姉さんは・・・たぶん今日一日はこんなになってると思うな・・・」

「・・・えっと、こんなって言うのは・・・」

「・・・これを言うのもなんだけど・・・そんじょそこらが敏感になっているんだよね・・・」

「ざっと見・・・合計しても800は倒しているか・・・？」

スバルはクエスト討伐状況を見ていた。

「・・・ん？」

スバルはあることに気付いた。

「・・・一匹・・・まだ生きている・・・？」

スバルが見たのは、まだ動いているランゴスタだった。

「・・・羽がもげて・・・偶然炎にまかれなかったのか・・・。ごめんな、仲間を、同種を大量に殺して・・・」

ピク・・・ピク・・・

「羽がないと、飛べないよなあ・・・。仕方ない、閃光玉を！」

スバルは閃光玉を地面にぶつけた。

カッ！！

いつものように閃光が迸り、辺りを光が包む。

そして、光が消え失せ、元に戻って・・・

「・・・やっぱり、人になったか・・・。しかも女の子に・・・」
「・・・うう・・・（ぷる・・・ぷる・・・）」

ランゴスタの女の子はスバルに怯えていた。

「大丈夫だ、怖がることはない。殺すなんてことはしない。」
「・・・ホント・・・？」

小さい声で怯えながらスバルに聞き返す女の子。

「あ、あの、か、カンちゃんは・・・！？」
「カン・・・ちゃん・・・？ カンタロスか！？」
「そうなの・・・。大丈夫かなって・・・」
「・・・分らないが・・・あっ！あれか！？」

スバルが気づいて指差した方向には辛うじて生きているカンタロスが一匹いた。

「カンちゃん！」
「・・・『カンちゃん』って・・・男の名前のニックネームか？」
「女の子だよ！」

ランゴスタの女の子はスバルにぷうつと頬を膨らまして抗議。

「怒るよりも先にまずはあのカンタロスを助けるぞ！」
「あ、う、うん！」

カンタロスの許へ向かう二人。

「カンちゃん！」

ピク・・・ピク・・・

「いかん、火傷している・・・！」

「助けられないの！？」

「一応不可能ではないが、まずは・・・」

懷から閃光玉を出し、叩きつける。

いつものように閃光が迸り、そして消える。

「よし、これで多少は可能に・・・」

「カンちゃん！カンちゃん！」

「う、うう・・・痛いよお・・・ランちゃん、助けてえ・・・」

「カンちゃん」と呼ばれた女の子をベースに運ぶスバル。

「セレナ！雪山草はあるか！？」

「す、スバル様！？そ、その子たちは！？」

「さっきの火炎でのランゴスタとカンタロスの生き残りだ！カンタロスの子の方は火傷している！」

「え、えっと、な、ないです！」「・・・仕方ない、俺一人で行く！セレナ、こっちの子に適切な処置を教えてこの子を少しでも助け

てやってくれ！」

スバルが出す的確かつ迅速な指示にバタバタとしだす二人。

スバルはそのまま雪山に走り出した。

「うあ・・・あう・・・痛いよ・・・」

「カンちゃん！大丈夫！きっと助かるよ！」

「えっと、とにかく！まず布を水で濡らして来て下さい！まずは冷やさないと！」

「はっ、はい！」

ランゴスタの女の子はセレナの指示に従い布を濡らしに行った。

To be continued...

第89話 家の中大戦争、姉妹の初陣は虫狩り！（後書き）

今回現れた二人、彼女らは次回に名前が出ますが、言えるのは一つ、『妹属性』です。

次回、スバルが無双を・・・！？

お楽しみに！

第90話 『カンちゃん』救出劇・雪山での大闘争（前書き）

90話です！

スバルが一人雪山に登り、カンタロスの女の子を看病するセレナとランゴスタの女の子・・・

カンタロスの女の子はどうなるのか？

では、どうぞ！

第90話 『カンちゃん』救出劇・雪山での大闘争

「そこを・・・どけえっ！」

雪山の洞窟内部。

スバルは群れてかかってくるギアノスを全て峰打ちで卒倒していた。

「あの子を助けるため・・・そして、もう一人の子の涙を見ない為に！ここで止まるわけにはいかねえんだよ！」

スバルは単騎、全てのギアノスを峰打ちで倒し、洞窟を抜けた。

「ひうっ！」

「沁みるかもしれませんが・・・我慢してください！」

「カンちゃん、もうちょっと、もうちょっと我慢すれば、助けてもらえるよ！」

「・・・ランちゃん・・・ホントなの・・・？」

「ホントだよ！今・・・優しいお兄ちゃんが火傷治しの薬を持ってきてくれるから！」

「うん・・・。ランちゃん・・・お姉ちゃん・・・ありがとう・・・」

カンタロスの女の子は、力なくもお礼を述べた。

「・・・あつた、雪山草！」

スバルは雪山草を見つけ、摘み始める。

「・・・ここはもうない・・・。次っ！」

そしてスバルが次に向かおうとした時・・・

ウオッ！ウオッ！

「くっ、こんな時にブランゴが・・・！？」

スバルの周りをブランゴが取り囲んでいた。

「こんな時に・・・！お前ら退けえ！遊んでる暇は無いんだよ！」

一対多の戦闘が始まった。

「・・・スバルは？」

「あ、イシアさん、もう大丈夫ですか？」

「うん。ランゴスタとかの体液はもう綺麗に取れたから大丈夫。それよりもスバルは・・・？」

「今・・・この子の治療のために雪山に登ってます。」

「・・・行かないや!」

「ま、待ってください!」むぎゅうっ!」・・・やっぱり・・・」

行こうとしたが、段差があることに気付かず、イシアは踏み外して転んでしまう。

数分後・・・

「・・・くそっ・・・ブランゴの全滅に時間がかかった・・・!あの子は大丈夫か・・・!?」

ブランゴの殲滅（とはいっても全部に峰打ちを決めていただけたが）に疲れ果て、ふらふらとしながら雪山草を持ち帰るスバル。「遠回りかもしれないが・・・安全な方をとるか・・・」

崖の方を回避し、少しでも安全な方をとって戻り始めた。

「・・・スバル様、遅いですね・・・」

「カンちゃん・・・大丈夫・・・？」

「うん・・・。まだ痛いけど・・・大丈夫・・・」

「・・・くすん・・・」

「イシアさん・・・、大丈夫ですか？」

「大丈夫だったら泣いてないよお・・・」

カンタロスの女の子を看病しながらもイシアを慰めるセレナと、つきっきりのランゴスタの女の子。

彼女達が待っているのは・・・

未だに帰ってこないスバルだった。

「・・・ようやく・・・ここまで戻ってきたか・・・！」

スバルは第1エリアまでどうにか戻ってきた。

「・・・早く・・・雪山草を・・・届けないと・・・」

ふらふらで、しかもボロボロでありながらもただただ歩き続ける。

その理由はただ一つ。

救える命は救いたいからだ。

「スバル様……」

「スバル……。私はもう……。心配だよ……。」

二人が呟いていたとき。

「……。皆……。戻ってきたぞ……。！」

「スバル！」

「そんな……。ボロボロになってまで……」

「優しいお兄ちゃん……。ありがとう……。」

「セレナ……。後は……。任せた……。」

そう言ってスバルはイシアに倒れこんだ。

「わ、わっ！？スバル！？大丈夫！？」

急に倒れかけたためにちょっとふらつとしたイシア。

倒れかかったスバルはと言うと・・・

「すう・・・すう・・・」

寝息を立てていた。

「ちょっと沁みるかもしれませんが、痛いかもしれませんが・・・これで火傷が治りますから・・・！」

「う、うん・・・」

「では・・・！」

「・・・うっ！うわあああああああ！い、痛い！痛いよお！」
「カンちゃん！頑張って！」

セレナが調合した薬を塗り、痛みに悶え苦しむカンタロスの女の子をランゴスタの女の子が励ます。

数分後・・・

「カンちゃん・・・」

「もう、大丈夫ですよ。これで火傷は和らぐでしょうし、すぐに治るでしょう。私にはそういう知識がないのはつきりとは言えませんが、そんなに酷い火傷ではないと思うので・・・」

「ありがとう・・・お姉ちゃん・・・」

「それは・・・私じゃなくてスバル様に仰っていただければ・・・」

「じゃ、じゃあ、お兄ちゃんに言って・・・」

そう言ってベースに入ったランゴスタの女の子とセレナ。

彼女らが見たのは・・・

「すう・・・すう・・・」
「・・・／／／」

イシアがスバルに膝枕をしてあげていたところだった。

「イシアさん！ずるいです！私だってスバル様に膝枕してあげたいのに！」

「だってスバルは・・・私に倒れかかったんだよ・・・？私がこういうことをしてあげるべきじゃないのかなって・・・／／／」

「だ、だからって！」

「・・・幸せ・・・／／／」

「もうっ！（グイッ！）」

「あっ！？」

セレナがスバルを抱き寄せ、イシアが声を上げる。

（スバル・・・さっきからなんだ？後頭部だったり顔面だったり・・・何か柔らかい物が当たっているような気が・・・）

そう思いつつスバルが目を覚ましたら・・・

「ふがっ!？」

セレナの胸に顔が埋もれていることに気付き、変な声を上げてしま
うスバル。

「あ、お兄ちゃんが目を覚ました。」
『スバル（様）っ！』

ランゴスタの女の子が気づき、セレナとイシアが同時にスバルに声
をかける。

「・・・ぷはっ！・・・目ざめのいきなりで死にかけるとかどうな
っている！」

「・・・ご、ごめんなさい・・・」
「確認するが・・・あのカンタロスの女の子は大丈夫なんだろう
な・・・？」

「あ、はい。火傷の方はもう。」

「そうか・・・それは・・・よかった。悪かったな、あんなことにな
ってしまって・・・」

「大丈夫。だって、優しいお兄ちゃんに会えたんだもん。私、それ
が嬉しいの。」

「・・・目の前で大量に同族殺戮を起こした俺が優しいって言われ
るのもな・・・。あ、名前・・・は・・・確か、『ラン』だったか
？」

「うん。私、ラン。それで、あのカンタロスの子はカンちゃん。」

「カンちゃんって・・・ニックネームだろ、それ？本当の名前が聞
きたいんだが？」

「あっ！えっと、あの子は・・・」

「私が言うね・・・。自分のことなんだもん。」

「カンちゃん！ダメだよ、まだ起きあがっちゃ！」

「大丈夫……。もうほとんど治ったみたいだし……。私
はカナナ。」

「『ラン』に『カナナ』……。か。よろしくな、二人とも。」

「うん！よろしく、『お兄ちゃん』！」

「よろしく、『お兄ちゃん』！」

ランもカナナも、スバルのことを『お兄ちゃん』と呼ぶ。

「お、『お兄ちゃん』！？」

「だって私達、お母さんもお父さんも前に死んじゃったから……。
……。孤児だったのですね……。」

二人の話を聞き、セレナが同情を言う。

「だから……。お兄ちゃん以外の人をお兄ちゃんって呼びたくな
いし……」

「……。そんな簡単なものなのか？」

「簡単なものじゃないもん！」

ランがまた頬をぷくつと膨らませて抗議。

「ま、まあ、落ち着け。分かったから分かったから……。
「もおーっ！怒るよお兄ちゃん！」

「ふう・・・」

ランもカンナも頬を膨らませている。

「・・・分かった。とりあえず帰るぞ。サンナもどうかしないと
いけないからな・・・（・・・早くカトレアが帰ってきてくれれば
どうにかなるんだろうがな・・・）」

そして、スバルがサンナを抱きかかえてクエスト終了の報告をした。
その際、

「やん、スバルう・・・そんなとこ触っちゃダメえ・・・」

などとサンナがぼやいたのは余談である。

『ただいまっ！』

アイリスたちが帰ってきた。

「スバルっ！！！！」

「げふうっ！？」

開口一番、スバルの名を叫び、飛び込んでくるアイリス。

「後れを取った！？」

「アイリスだけに先を取らせない！」

「がっ！ごっ！？」

遅れてキルティス・ラキユナスまでもが飛び込んでくる。

「サンナやセレナに何かされなかった！？イシアに変な気起こさなかった！？」

「え、え、えっちなことしようとか考えなかった！？／／／」

「変な気起こすか！そんなことを考える男だと思っているのかバカ

！」

「ばっ、バカじゃないもん！」

四人が言い合っているが・・・

(スバル…い、いかん、石鹼とかの匂いに頭が…意識がぼやけて…)

アイリスたちから漂ってくるシャンプーとかの匂いにくらくらしているスバル。

「…スバル、どうしたの？顔が真っ赤だけど…」

「い、いや、何でもない！何でもないんだ、うん！／＼／＼」

キルティスに指摘され、焦るスバル。

「…まさか、私の使った石鹼の匂いにくらくらしちゃったとかあゝ？」

「そ、それはない…それは…／＼／＼」

「じゃあ…なんで？」

「…なぜだろうな…」

「まさかスバル、えっちなこと考えてるんでしょ？」

「やだあゝ、…でもスバルだったらえっちなことされても…」

／＼／＼

「俺がそんなことするわけがないだろ！？つか早く退いてくれ！これでもボロボロになってるんだから！」

「なんで…って何その子たち？」

「…ああ、ランとカンナのことか？…義理の妹達ってところか？」

「妹…ねえ…？」

いきなり黒いオーラを放ち始める娘達。

アイリス・キルティス・ラキュナス以外にも、後ろにいた娘達にもそれは例外なくである。

「変な気なんて起こしてないからな。・・・まあ、サンナがちょっと大変な状況になっているがな・・・」

「大変な状況？」

「ああ、実はクエストに行こうとしたらサンナとイシアが行きたいと言い出して・・・拒否したら・・・（ブルブル）」

「脅されたんだ・・・」

「それで連れて行ったんだが・・・、ランゴスタとカンタロス的大量討伐のクエストでな。・・・二人とも刺されて・・・その後には虫に集られて・・・」

「・・・（カタカタカタ・・・）」

スバルの話を聞いて、体が震えだすアイリス・ナコル・ライラ。

彼女らは虫が嫌いである。

特にアイリスは、ランゴスタが一番嫌いな虫なのである（第19・20話参照）。

「その後、紆余曲折あって、この子たちが俺の妹になったわけだ。」
「・・・スバルの・・・浮気者・・・」
「プリムラ？俺がいつから浮気者に？」
「・・・セレナには『夫』って呼ばれて、ラキユナスには『旦那様』
って・・・アイリスという正妻がいると言うのに・・・」
「ぷ、プリムラ！私はまだ・・・その・・・そういうのじゃなくて・
・恋人という関係で・・・まだ・・・結婚は・・・その・・・ご
によごによ・・・／／／」
「・・・もう寝させてほしい・・・」

スバルの呟きは、誰にも届くことは無かった・・・

報酬。

入手

ランゴスタ・カンタロス全滅（死体残らず）の為、無し。

クエストクリア

ランゴスタの羽×2

その他

ラン。

カンナ。

上記の二人、スバルの妹に。

サンナとイシア、クエストデビュー！。

イシアに弓の適性大。

皆が温泉で疲れを癒してきた。

第90話 『カンちゃん』救出劇・雪山での大闘争（後書き）

今回はラン・カンナの紹介です。

ラン

ランゴスタ雌

身長143cm。

見た目10歳。

胸のサイズはA。

サンナ・イシアが初参加したランゴスタ・カンタロス狩りの生き残り。

小さい頃に親を失い、孤児となってその場にいた時、羽をもがれて地で呻いていたところをスバルに助けられて彼を慕っている。

まだまだ甘えたい盛りの女の子の為、よくスバルに抱きついていて（決して恋愛の意味での『好き』という感情は無い）。

ロリプニ属性で萌え対象（アルから見れば）。

名前の由来はモンスターの名前から。

カンナ

カンタロス雌。

身長143cm。

見た目10歳。

胸のサイズはA。

ランと同じく、ランゴスタ・カンタロス狩りの生き残り。

彼女もまた小さい頃に親を失っている。

人になった時に軽い火傷を右腕にしており、その治療の為の雪山草をボロボロになって採ってきてくれたスバルに懐いた。

彼女もまた甘えたい盛りの女の子。抱きつきはしないが、たまにスバルに『一緒に寝たい』と言うことがある（スバルを兄としか見ていない）。

ロリプニ属性で萌え対象（アルから見れば）。

名前の由来はモンスターの名前から。

次回は『アレ』に緊急事態が！？最も有り得てはいけない事態が！？（アレって何だよ！？有り得てはいけないってどういうことだよ！？BV変態）

お楽しみに！

第91話 スケベ大魔王に訪れた春（前書き）

91話です。

今回・・・最も有り得てはいけないことが・・・!?

R115 確実です。ある禁（自分設定）を解禁したので・・・

では、どうぞ！

第91話 スケベ大魔王に訪れた春

アルの家。

「スバル。」

「何だ万年欲情スケベ大明神が。」

「扱い酷いな畜生！俺が言いたいことが分かるか！？」

「わかるわけがないだろう、死んだ方が世の為だと言えるほどのスケベが。」

「なんでっ！お前の周りにっ！女の子が沢山いるんだよっ！」

「・・・俺に聞くな。」

「誰だった蔑むって！だってさ！ぼ（ドゴッ！）ごおっ！？」

何かを言おうとしていたアルを殴るスバル。

「この先何を言おうとしていたかが分かったから殴った。これ以上俺を巻き込もうとするな変態が。」

「巻き込むっ！」

「ふざけるな！」

「本当にうらやましいんだっての！巨乳の子だろ！？ロリっ子だろ！？ツンデレな子だろ！？従順な子だろ！？」

「お前は一体何をどうすればそんなになる・・・？」

「これは！俺の蔑みじゃない！世の中の全ての男性の蔑みだ！」

「知るか。」

「ということで、随分前に見たお前の力を貸してほしい。」

「・・・嫌だと言ったら？」

「お前を殴って気絶させ、道具を奪って勝手に使う。」

「できるもんならやってみ（ドゴッ!）や・・・」

アルがスバルの鳩尾を一撃殴り・・・

「くう・・・おま・・・（ドサッ）」

スバル、気絶。

「さーて、閃光玉は・・・っと、お、あったあった。では、4個頂いて行くぜ？」

そう言ってアルはスバルのアイテムポーチから閃光玉を4個盗み、クエストに向かった。

クエスト…二色の双にゃふ・小闘技場

開始。

「ホントは、猫毛玉が欲しかったただけなんだけどな。女の子は、そのついでそのついで・・・うひひ・・・」

（作者としては、『こんな変態、修正してやる！』と言いたい気がするが・・・放置したい。ネタとして。）

そしてそのまま、アルは単身闘技場に入って行った・・・

「うーわ、アイルーもメラルーもめっちゃくちやいるなあ・・・。
・こん中に美少女いるのかなあ？」

闘技場にいたのは、数え切れないほどじゃうじやいるアイルーとメラルー。

「だがまずは・・・討伐優先っ！本業を忘れるわけにはいかないぜ！」

アルはアイルー・メラルーが群れる場所へ向かっていった。

ギニャーっ！
フギャーっ！
ニャーっ！

アイルー・メラルーがどんどん地面に潜っていく。

「おらおらおらおらあっ！アル様のお通りだあっ！

どこかで聞いたことあるようなセリフを吐き、アル（という名の変態）は豪快に突き進んでいく。

数分後、残り目標、アイルー一匹となっていた。

「ふう……。一応猫毛玉も出たし……。そろそろ……。うひひっ
！」

そうにやけていたら……

ニャーニャーっ！

ニャッ！

「うわっ！」

二匹のアイルーから奇襲が。

二匹のメラルーも攻撃態勢に入っていた。

バランスを崩し、倒れるアル。

偶然、自分の背中で閃光玉を破裂させた。

ギニャーッ!!

「眼が、眼がああああっ！」

（・・・アル、お前は何処かの大佐か？）

視力が戻り、アルは・・・

「眼福じゃあ・・・（バタツ）」

そんなことを眩き、倒れた。

目の前にあったのは・・・

「いやああああん！／／／」

「なんでえ！？何で裸なお！？／／／」

「いつ、いやっ！／／／」

「・・・／／／」

この台詞で察してほしい。

「・・・ふふふ・・・、スバル・・・ありがとう・・・。俺は今・・・ものすごい幸せだ・・・」

アルはその場で伏した。

「やつ、やだっ！おっぱい見えちゃう！／／／」

「・・・見られちゃったよお・・・ぐすっ・・・」

「こ、こんな変態に見られるなんて・・・！／／／」

「・・・は、恥ずかしいよお・・・／／／」

四人とも全く別々の言葉を発していた。

フアサツ・・・

『っ！？』

いきなり感じたふかふかな暖かさ。

それに四人は驚く。

「・・・すまん、いきなり人にさせちまって。だが分かってほしいんだ。これは・・・事故だって！」

いつの間にか復活したアルが、それぞれに服（なぜ持ってた？）を掛けたのだ。

「事故じゃないわよ! どうしてくれんのよ! (ポカポカポカポカ!)」

「あだっ!? いたっ、痛いっ!」

「あ、や、止めて!」

一人の女の子が制止を掛けた。

「なんでよ! こんな変態、死んだ方が・・・」

「・・・止めて・・・! 私・・・この人を・・・／／／」

「んあ?」

しどろもどろになって言う女の子に付抜けた声を出してしまうアル。

「・・・この人を見ると・・・胸が・・・ドキドキして・・・／／

／

「・・・(おいおい、まさかまさか・・・!?)」

女の子D (仮称) がもじもじし、赤面して言う内容に期待しだすアル。

「・・・だが・・・」

「だが・・・何?」

(アル…あの子の胸が大きすぎて直視できん! どんだけ巨乳なんだよあの子は!)

「……(あの人も意識してる……。私達……。相思相愛なのかな……。?)」

「……。わ、私も……。あの人見てたら……。ドキドキしてきた……。／／／」

「あう……。／／／」

「わ、私は……。べっ、別にそんなことないんだからね!／／／」

(アル…うーわ、スバルのこと全く同じような子が出てきたよ……。だが、それはそれで……。アリっ! しかもみんなネコ耳付きっ!……。だけど……。アイルーとかメラルーに発情期ってあったっけ……。?)

アルはアルで悶絶していたり思慮に耽っていたりしていた。

アルが考え事をしていたら……

ムニッツ!!

「うほうっ!？」

信じられない(アルとして)程柔らかい凄い質量の物が当たった為、変な声を上げてしまったアル。

「・・・／／／」
「えへへ・・・／／／」

見ると、女の子A（仮称）が右腕に、女の子D（仮称）が左腕に抱きついていた。

「うわーうわーうわー、何これ、現状が全くわかんねー・・・」

珍しく現状を把握できていないアル。

「ま、まずクエストを終わらせてくれ・・・。は、話はその後・・・」
「・・・うん・・・／／／」
「い、いいよ・・・／／／」

女の子達をどうにかベースに連れ、アルはクエストを終わらせた。

「・・・まさか・・・？まさかなのか・・・！？俺に・・・俺に彼女ができたのか！？しかも・・・四人同時に！？うほっ、それはそれで・・・」

（欲望駄々漏れである。よくそれで彼女が欲しいと戯言を抜かしたものだ・・・）

「うるさいよそこ！」

「お待たせ。」

「待ってたよ！（ムニッツ！）」

「うおっ！」

女の子A（仮称）がいきなり抱きついてきた為にまたしても声を上げるアル。

「ちょ・・・はな・・・」

「やつ！」

「ずっ、ずるい！私だって！（ムニユッ！）」

「うわっ！」

女の子D（仮称）も抱きついてきた。

「・・・も、もうダメ・・・。これ以上は・・・理性が・・・は、鼻血が・・・」

「ほえ？」

「ふえ？」

「・・・（ブフウッ！）」

さっきから当たっていた胸について理性が耐えられなくなって鼻血を噴き出し倒れたアル。

「・・・我が生涯・・・一片の・・・悔い・・・無し・・・ガクッ。」

「やあゝん！ダメえゝ！死んじゃダメえゝっ！」

「ダメえゝっ！起きてえゝっ！」

パッと見、にゃーにゃー言っていそうな女の子たちから抱きつかれたりしたりして・・・

アルは死にかけていた（出血多量で）。

翌日。

「さてと・・・どのクエストに向かうか・・・？」

集会所で、スバルはクエストボードを見て悩んでいた。

「おっす、スバル！」

「何だ変態スケベ大魔王……が……」

いつもの如くあしらおうと振り向いた瞬間、スバルは二の句が出なくなった。

「お前……その子らは……」

「この子らか？」

アルと一緒にいた四人の子を見てスバルは震えていた。

「……どこから攫ってきたのか？それとも大変なことをして二度と離れられないようにしたのか……！？」

「バカ、そんなわけあるかい！純粋に好かれているんだよ！」

「マジかよ……。絶対に彼氏にしたくない男NO.1のお前がだよ……！」

「るっせ！」

「そう言えって言われているわけじゃないよな！？」

「い、言われてないもん！わ、私はこの人に……その……／＼／

スバルは一番近くにいた黒髪の女の子に話を聞いた。

が、どうも本当のようで・・・

「その？」

「スバル、後は俺の家で話をしようじゃないか。」

「あ、ああ・・・」

スバルはそのノリについていくしかなかった・・・

アル宅。

「よし、正直な話を聞こうか。すべて洗い浚い話せ。」

「正直なことを言う。この子ら全員・・・」

「全員・・・？」

スバルは息を呑む。

「・・・俺の嫁だ。」

「よし、いい精神科を紹介する、早いうちにそこに行ってこい。」

「精神が病んでるわけじゃねえ！」

「・・・それじゃ、さっきの子が言いかけたことをもう一度聞こうか？」

「・・・／／／」

「別に構わないが？」

スバルはアルを問い詰め、アルにあっさり返される。

「あ、あの・・・わ、私は・・・アルに・・・その・・・／／／」

「その先はどうしたのかと、という話なんだ。」

「・・・みつ、身も心も捧げたの！」 「よし、然るべきところに行こうか。東方の『法律』とやらでいえば、お前の罪はどれ位のものになるかな・・・？」

「はぁ？何を言って・・・」

「お前の罪と言えば・・・あれだ。詐称、誘拐、強姦、窃盗・・・その他色々と「ダメえっつ！」ごふう・・・」

スバルが白髪の子に突き飛ばされた。

「・・・ありがとな、ユキ・・・」

「いいの！私の旦那様を護れるなら！」

「ユキ！アルは私の旦那なの！」

「サツキ、違うよお！私の！」

「違うの！私の旦那様なの！サツキとモミジのじゃないの！」

「皆バカじゃないの？」

「あつれ〜？サツキはアルのことが好きじゃないの〜？」

「ばっ、バカ言ってるじゃないわよサツキ！／＼／＼」

スバルの目の前で繰り広げられている争奪戦。

「ばっ・・・バカな・・・。あいつに彼女ができるとか・・・こ、これは・・・天変地異の前触れなのか・・・！？」

正直な話、スバルはアルがこんなことになるとは思えなかったため正直なことを言うしかなかった。

報酬。

入手。

アルの話なので無し。

クエストクリア。

アルの話なので無し。

その他

アルの許に可哀想な子達サクラ・ナツキ・モミジ・ユキが。

第91話 スケベ大魔王に訪れた春（後書き）

今回は・・・彼女らの紹介は修正版の紹介で。まあ、『被害者』と見てくれれば・・・

次回、スバルが挑むは帰還率0クエスト、そして戦争は激化して・・・？

お楽しみに！

番外編 短編集（前書き）

訳ありで番外編です。

では、どうぞ！

番外編 短編集

短編その1

サンナの意外なスキル

「むう・・・これは・・・どうすれば・・・？」

リビングでスバルは頭を捻っていた。

「スバルっ！どうしたの？」

「さ、サンナか・・・。いや、このクエストに困っていて・・・」
「ほえ？あ、これは・・・」

サンナが見たクエストとは・・・

依頼人…村長

内容…最近、この村にも異国の者が多く来るようになった。そこで頼みなのじゃが、誰にでも分かりやすいように英語に訳したこの村の紹介文を作ってくれまいか？

報酬…88000Z

「す、すごっ!？」

サンナは報酬金額の多さに驚いていた。

「その金額につられてついついやってしまったんだが……、俺はよく考えたら英語はさっぱり……」

「ちよつと見せて？」

サンナが紙を見た。

村長が考えたであろう分はこう書かれていた。

『よくおいでなすった、ゆっくりしていっとくれ』

と。

「・・・私、できるかも・・・ちょっと貸して！」
「さ、サンナ!？」

サンナがスバルから紙をひったくり、その隣で筆記具を取り出し、別の紙に書き始めた。

「えっと、この分を普通に直してみれば・・・『ようこそ、ポツケ村に』・・・。その後は『ゆっくりしてってください』・・・」
「・・・」

サンナが見せた凄い集中力に驚くしかないスバル。

「ここはこうだから、こうして・・・、それで、あ、この単語は違うか・・・だったらこうやって・・・できた！」

「ホントか!？」

「うん!これ！」

スバルがサンナが書ききった紙を受け取り、さっそく読んでみる。

「・・・全く読めない・・・」

「えっ!?」

サンナがスバルから紙を受け取り、読む。

「私はね?『Welcome to Pokke village.
Please relaxed this village.』
って書いたの!」

「・・・すまん、英語を読まれても意味が分からない・・・」

「だからあゝ、『ようこそポケケ村へ。この村でゆっくりして行って下さい』って!」

「そ、そうか・・・」

サンナがここまで英語ができる子だとは誰一人知らなかった。

後々、スバルの家に英語に関わる仕事が回るようになり、その都度サンナがこなしていくという光景が見られた。

短編その2

料理は失敗してナンボ

ボオオオン！

「けほっ、けほっ・・・はぁ・・・また失敗しちゃったよぉ・・・」

ウィリアが相変わらず鍋を爆発させていた。

「なんでだろう・・・。イモの煮物を作っていただけなのに・・・」

ウィリアが作っていたのは煮物だった。しかもイモの。

「あうう・・・やっぱりあたしは料理ができないのかなぁ・・・」

ウィリアが一人、キッチンで落ち込んでいると・・・

「ハニー？　どうかなさいましたの？」

ローズがキッチンに来た。

「ギザミちゃぁん・・・あ、あたし、料理が、で、でき、できないのお・・・」

「ハニー・・・、とてもお困りのようです・・・。何かお手伝いできたら・・・」

「今は無いよぉ・・・だって・・・失敗してばかりだし・・・」

「あっ！..

ローズが何かを閃いたのか、手をポンと叩いた。

「ハニーが料理が上手になるまで私が味見をやりますの！」

「えっ！？だ、ダメだよお！ギザミちゃんが死んじゃうから！いろんな意味で！」

「ハニーの料理で死ねるなら本望ですの！！」

変なところでやる気を見せるローズ。

「もうっ・・・どうなっても知らないからね？」

ウィリアがそうぼやいてまた料理を始めた。

一品目・卵焼き。

「卵を割るところはよかったですの……。ただ……」
「……正直に言って！」

「何をどうしたらこんな黒色になるんですの？」

「……分かんない……」

「とりあえず食べてみますの……（パクツ）……」

ウィリアの作った卵焼きを一口口にする。

「ギザミちゃん……どう……？」

「……（バタツ）」

「ぎ、ギザミちゃん！？ギザミちゃああん！？」

ウィリアの悲鳴がこだました。

「……ハニーの卵焼きが……天国のおじい様に会わせてくれましたの……」

「ご、ごめんね！？こんなことになっちゃって！」

「い、いいんですの……っ、次っ！」

二品目・竹輪天

「・・・これはこれで・・・形が竹輪じゃないですよ・・・」

「あうう・・・」

「で、では一口・・・（パクツ）・・・ぎゃあああああああ！？」

「ぎ、ギザミちゃん！？ど、どうしたの！？」

「止めてですよ！そこは！あっ！ダメですよ！止めてですよのおおお
おおおっ！！！！！

ローズの謎の悲鳴がこだました・・・

「もう・・・今日はやめにする・・・」

「だ、ダメですよ！料理は！失敗してナンボなんですの！」

「『失敗してナンボ』・・・？」

「そうですの！最初から成功している人なんていませんの！皆、失敗から学んでやって行くんですの！失敗を恐れては、何もできませんの！」

「そ、そうだよね！うん！もう一回やってみる！」

「その生きですの！私が何度でも付き合いますの！」

「ありがとうございます！」

ウィリアは再び料理を始めた。

スバルの家から『ぎゃあああああああ！？』とか『ギザミちゃあああああああん！？』などと聞こえたのは余談である。

短編その3

お勉強

「な、ナコル・・・？何かな、この本の山・・・？」

「お勉強用の本の山です。見たところ、アイリス、キルティス、ラキユナスはお勉強が嫌いみたいですから。」

「ちよっ！？」

「私が文字見ると頭が痛くなるのを知ってこんなことするの！？」

「それ防止の為だとかもっとハンターとしての知識を増やす為だ、とか。色々あるんですね。最も・・・」

『最も・・・？』

三人がナコルに聞き返す。

「スバルが言っていたことなんですけどね。」
『やる！』

現金な奴らである。

「あ、あれ？回復薬ってこういう調合じゃなかったっけ！？」
「ち、違いますよ！なんでそこにニトロダケが入るんですか！？」

「やった！回復薬を作っていたらなんでか生命の粉塵ができあがった！」

「アイリス凄っ！？」

「回復薬を作るのに何で生命の粉塵が出来上がるんですか！？」

調査でも大変なことになる、

「えっとおっっ……が、ガノトスの……じゃ、弱点はあ……」

「雷！」

「アイリス！先に言わないでよ！」

「言ったもん勝ちだもーん。」

「じゃあ、ドドブランゴ亜種の弱点は？」

『あ、亜種！？』

勉強面でも問題が起きていた。

「はひい……。ナコルう……。鬼教官すぎるよおっつ……」
「そうだよおっつ……」

ナコルに対してぶーぶー言い続ける三人。

「仕方ないんです！だって、これを終わらせれば……。えへへ……」
／／／

「何をする気なの！？」

「え、えっちなことはダメだからね！？」

「そ、そんなことはしませんよ！あ、アイリスだって、え、えっちなことしてたじゃないですか！？」

「ち、違うもん！あ、あれは……。／／／」

「……。ナコル、アイリスは一体何してたの？」

「い、言っちゃダメえっつ！」

ナコルに問い詰めようとするキルティスを必死になって止めようとするアイリス。

「……。スバルを自分の胸に押し付け、自分の呂律が回らなくなるまでスバルに胸を揉ませた……。」
「にゃーっ、にゃあーっ！！」

停止することができなかった。

短編その4

怖いものは怖い

「・・・はぁ・・・」

夜、シロンはただ一人暗い廊下を歩いていた。

「うう・・・怖いよ・・・でも歩いていかないとめれちゃう・・・」

理由はトイレだった。

だが、足取りはとても急いでいるものとは思えないほどゆっくりだ。

なぜなら・・・

カチャ・・・

「ひいっ!? (ビクッ!) ・・・なんだ、ドアか・・・脅かさないでよ、もお・・・」

彼女はとても怖がりだからである。

無論、幽霊などの類も完全にシャットアウトである。

「・・・こんなだったら誰か起こして一緒に来てもらえば良かった・・・でもそうすると恥ずかしいし・・・、でも怖いし・・・」

とぼとぼと、怯えた足つきで歩いていった。

そして何事もなくトイレに辿り着き、
用を済まして出た後の話であ
った・・・

・
・
・
イ
・
・
・

「えっ!？」

・
・
・
キ
イ
イ
・
・
・

「な、なに!？誰かのイタズラ!？」

突如聞こえた不気味なひっ搔き音に怯えるシロン。

恐る恐るその音がした部屋に向かうと・・・？

椅子が一人でに動いていた。

「あ・・・あ・・・い、いや・・・怖い・・・怖いよ・・・」

身体を蹲らせて怯えてしまうシロン。

キィ・・・ガタン!!

「きゃあああああああああ!!」

シロンは大きな悲鳴を上げて気を失ってしまった・・・

朝、スバルがふらふらと顔を洗いに向かった時、その通路で気を失っていたシロンを発見し、起こしたら抱き着かれ、泣かれた。

彼女の顔には、恐怖に対する恐れがはっきりと浮かんでいた・・・

今回、報酬一切無し。番外編だから。

番外編 短編集（後書き）

今回は私の誕生日だから、という脈絡もない理由で番外編をしました。

次回は本編です。

お楽しみに！

第92話 英雄、神となる（前書き）

92話です！

R115です！

スバルが凄いことになります！

擬人化が増えます！

では、どうぞ！

第92話 英雄、神となる

「いくらG級が可能とはいえど……まだ挑むのは無謀、と言ったところだな……」

スバルはクエストボードを見て呟いていた。

「未だ誰も成功したことがなく、挑んだ者は全て死者となって帰ってこなかったクエスト……。今回はアイリスとカクサスとキルティスとラキュナスと俺……。護るのは俺とカクサスの仕事だが……」

スバルはこのクエストにそこはかとな不安を覚えていた。

「今回のクエスト……。絶対に何かが起こる……。！」

スバルはそう踏んでいた。

（なぜキルティスとラキュナスがクエスト参加組にいるのか。それ

は彼女らがわがままを言い出し、聞いてくれないと大変なことをするとスバルが脅されたからだ)

クエスト..最後の晩餐

開始。

「ね、ねえスバル・・・、今回のクエストって・・・ターゲットって何？」

「・・・今回のターゲットは・・・本当に異色のターゲットばかりだ、としか言いようがないな・・・」

「ど、どういふことなの!？」

「今回のターゲットは・・・『ウラガンキン』というモンスターと、ラージャン、グラビモス亜種、シヨウグンギザミ、リオレイア稀少種、リオレウス稀少種、アグナコトル・・・かなりの数の大型モンスターの大連続討伐クエスト、とは聞いているが・・・」

「な、なんでそんな大量討伐クエストがあるのよぉっ!しかも・・・最後の晚餐って・・・」

「・・・聞いていれば縁起の悪いタイトルだからな・・・」

一行は火山の中に向かっていった。

火山の中。

「なあカクサス。」

「皆まで言うな。俺も同意見だから・・・」

スバル達の目の前にいたのは・・・

指定モンスターが全部二匹ずついるという、ハンターとしては最も最悪な状況だった。

「ふ・・・ふふふ・・・ふふふふふ・・・」

「ら、ラキュナス？ど、どうしたの？」

「皆・・・『踊りましょ』・・・？」

「は？」

ラキュナスの豹変には気付いたものの、『踊る』という言葉の意味を理解できない面々。

「さあ！行くわよおおっ！」

・
・
ラキュナスは両手に抱えたガトリングをモンスターに向け、そして・

ガガガガガガガガガガガガガガ！！

「ちょ、おま、ま・・・」

スバルの制止も振り切って発砲した。

当たったのは一番奥にいたアグナコトル。

ガッ、ガッ・・・キシヤアアアア！！」

「バカ！今ので絶対気付かれた！くっそ！こうなったら・・・」

「スバル危ない！あの顎が大きいモンスターが！」

「っ！？」

キルティスが顎が大きいモンスター・・・ウラガンキンに気付く。

スバルが振り向くと、ウラガンキンがスバルの方に走り始めていた。

「くっ、こちらにはラージャンが！？」

カクサスの方には一匹ラージャンが突撃をしている。

「スバルは・・・やらせない！こんのおおおおっ！」

アイリスが持っていた閃光玉を投げた。

ウラガンキンが一匹、あわやスバルにぶつかると思われた時に破裂し、辺りに閃光をぶちまけた。

「へぶっ!?!」

「あん・・・」

「あっはははははははははは!?!」

視界が真っ白の状態で聞こえたスバルのつぶれ声と女の子の艶声、ラキユナスがトリガーハッピー状態になった笑い声だった。

「がっ・・・」
「ふあっ!？」

もう一方ではカクサスが何かにぶつかったらしい声と、こちらでも女の子の艶声が・・・

ようやく光がはれて、アイリスたちが見たものは・・・

女の子の下敷きになっているスバル。

仰向けになって倒れているカクサスと、逆にうつ伏せになって倒れている女の子。

モンスターたちの間で気を失っている者までいる。

ラキュナスは相変わらず一匹のアグナコトルに向けてガトリングを乱発している。

「あ、あわ、あわわ・・・」

「ちょっ!?! 気絶してる人たちを助けないと!?!」

「で、でも、ラキユナスがガトリング連発してる中をだよ!?! 私達が誤射されそうで怖いんだけど!?!」

「だっ、だけど、動かないと話にならないし!?!」

「か、カクサスは!?!」

アイリスとキルティスがカクサスの方を向くと・・・

『・・・きゆう・・・』

おそらくぶつかったであろう女の子と共に気を失っていた。

「・・・私達が行かなきゃ・・・!」

「スバルを下敷きにいる女の子は後で問い詰めるとして・・・

！
」

『まずは皆を護らなきゃ！』

アイリスとキルティスは、ラキュナスのガトリングの嵐をかいくぐって救出劇を始めた。

「まずは、あの金髪の人と銀髪の人を！」

「アイリスは金髪の人をお願い！私は銀髪の人を！」

「わ、わかった！（・・・胸、大きいなあ・・・）」

アイリスは目の前で気を失っている女の子を見てそう思っていた。

「くうっ・・・男の人って・・・こんなに重いのおっ！？」

ラキュナスはもう一人の方を必死になって運んでいた。

その頃、ラキュナスはアグナコトル一匹を討伐し・・・

「さあ、次はお前だあああああ！！」

ターゲットをウラガンキンに切り替えていた。

「はぁ・・・はぁ・・・つ、次っ！」

アイリスはキルテイスを助けて息絶え絶えになりながら次の救出を始めた。

一方スバルは・・・

「・・・う、動けん・・・!？」

スバルは身動きが取れない状況になっていた。

少しでも動こうとすると・・・

「ふうん・・・あん・・・いやっ・・・／／／」

このように、女の子がぴくっと反応してしまうからだ。

「た、頼む、ど、退いてくれ・・・」

とスバルが頼むが、全く聞いてくれない。

（実際のところ、彼女は気を失っている為、返事をするしないという問題ではないのだが。）

「くおお・・・」

スバルは動けないままの状態が悪戦苦闘していた。

カクサスは・・・まだ気を失っていた。

「ふにゅううっ！」

アイリスは今度はギザミと思われる女の子（？）を、キルティスは

グラビモスの女の子を必死になって救出していた。

「もおりっ！大きすぎるのよ胸が！スバルに乗っかってることいい子の子といい！」

キルティスがちょっと怒り気味になっていた。

「ど、どうにかこの子を退かせた・・・」

スバルは疲れた、といったような顔で女の子の傍にいた。

「まだ疲れてはいるが・・・アイリス！キルティス！今から助けに行く！」

ついにスバルが救出組に回った。

「スバル！よかったあーっ！」

「やった、これでもっと早く助けられる！・・・って、わきゅっ！？」

アイリスもキルティスも喜んでいた（キルティスはその時にグラビモスの女の子に潰されていた）。

ただ単に好きな人が復活したからではない。

恋愛感情抜きで、今倒れている人（言い換えれば擬人化したモンスター）たちが気を失っているだけだが）をもっと早く助けられるからだ。

「くっ、しかしラキュナスを早く止めないといけないんだが、その

前に救助を急がないと・・・」

「だけど、後はあそこに倒れている女の子だよ！でも・・・」

「一歩間違えばラキュナスのガトリングにハチの巣にされて即死・
・・・というわけか・・・」

「や、やっぱり怖い・・・」

「だが、あのウラガンキンが死ぬまでは絶対にこちらに眼が行くわけがないはず！俺が助けに行く！」

「あ、ダメだよスバル！危ないよ！？」

アイリスの制止も聞かず、その子を助けに向かうスバル。

「よし、ラキュナスはまだウラガンキンを攻撃している・・・ウラガンキンもまだまだ無事・・・」

スバルがラキユナスの方を見たら・・・

ラキユナスがウラガンキンを討伐してしまっていた。

「くっ!?! 今度はこっちにロックオンが!?!」

スバルは焦った。

皆を残して死んでしまうかもしれないと。

だが・・・

「す、スバル!?! あ、危な・・・ってわきゃっ!?!」

ラキュナスが元に戻った。

「よし、元に戻った！この子を助け次第、攻勢に回る！行くぞ！」
『了解！』

アイリス・キルティスは肯定の意を表し、スバルの帰還を待った。

「よし、最後の子を救出した！攻撃に回る！全部倒すぞ！」

スバルの声を皮切りに、アイリス・キルティスが突撃を始めた。

「炎は聞かないかもしれないけど・・・いっけええええっ！」

アイリスは『風林火山』を振り回し、敵を攻撃する。

「喰らって！『桜舞連刃』^{おうぶれんじん}！」

キルティスは自分の周りに桜のような淡いピンク色の炎を舞わせ、それで攻撃をしていた。

「『絶氷・死斬豪刃』！」

スバルは大技を使って敵を凍り付かせていた。

数分後、出てきた敵は全て討伐されていた。

「よし、後は皆を起こして帰るだけだ。が・・・」

スバルはすかさず目を背ける。

「むうっ！スバル！今あの子の胸見てたでしょ！？」
「そ、そりゃ・・・というか絶対見てしまうだろうが！見るなという方が絶対無理だっつの！」

キルティスがスバルに嫉妬し出す。

「・・・おっきい方が好きなの？」

「・・・だから聞くなっているだろうが・・・」

「・・・／＼／＼」

「あ、アイリス？いきなり服に手を掛けてどうす・・・」

アイリスが自分の服に手を掛けたのを見てスバルはアイリスに聞いた瞬間・・・

バツ！

「っ！（ブッ！）」

・・・あろうことかアイリスはスバルの目の前で服を脱いだ・・・
（同時に『ばいん！』というような効果音が鳴りそうな揺れ方をしていた・・・）

同時にスバルは鼻血を吹いた・・・

「わ、私だって・・・、そりゃ・・・あの子達よりは・・・おっきくないけど・・・おっきい方だと・・・思うもん・・・／＼／＼」
「た、頼むから・・・服を・・・着てくれ・・・」

スバルはそのまま倒れこんでしまった・・・

「ちよつ、アイリス！色仕掛けはダメだって言ってるでしょ！？」

「わ、私は・・・スバルの恋人だからいいんだもん・・・／＼／＼」

「どうかそれ以上にモラルだとか道徳とかそういうもんがあるんじゃないの！？」

「だってえ！あの子たちに取りられるんじゃないかって思ったんだもん！」

そう言ってアイリスが指差したのは、グラビモスだった女の子とウラガンキンだった女の子。

共通点はというと、両方とも胸が大きいことではあるが・・・

「そ、そんなことはどうでもいいの！」

「・・・す、すぐにしまってください・・・。俺には・・・刺激が強過ぎる・・・」

スバルは鼻血を出しながらもアイリスに頼んだ。

「し、しまえって・・・くすん・・・」

アイリス、涙目に。

後に、カクサスとラージャンだった女の子が目覚まし、徒手空拳による格闘戦に突入、女の子が力量差で負け『止めをさしてほしい』と言ったものの、『女子にそういうことはできん。それに、俺は殺しを好まぬ性分ゆえ、そういうことはやらないと決めている。』とカクサスは言った。

そのことやそれを言った時に微笑みに思わずどきっとしてしまったその子はカクサスに惚れてしまった、というのは余談だ。

スバル宅。

「・・・いつもより疲れて帰ってきた気がする・・・」

「あ、お帰りお兄ちゃん！」

「お帰り〜！」

帰ってきた全員を迎えたのはランとカンナだった。

ランはそのままスバルにぽふっと抱き着き、カンナはにこにこしていた。

「あれ？後ろにおんぶしたり抱っこしたりしているのは・・・」

「・・・犠牲者、とでも言っておこうか・・・」

スバルが半分嘆きのような声で言った。

その夜。

「・・・まずは名前を聞こうか・・・。右側の銀髪の少年から・・・」
「ああ、俺はダフネ。わかっていると思うが、リオレウス希少種・・・だったものだ。」

「わ、私はミズカ。私はリオレイア希少種なの。」

レウス・レイアのコンビの二人が自分の名を告げる。

「わ、私は・・・その・・・／／／」

とても長い黒髪（床に先端が着いているのではなく、あまりにも長い為髪の十一分の一が床に着いているのだ）の女の子はスバルの方をチラチラ見て、顔を赤らめている。

声はか細い。

「むっ・・・」

その女の子の行動を見てちょっとお怒りモードになるつつあるアイリスたち。

「私は・・・り、リリスですう・・・。ぐ、グラビモスの・・・亜種の・・・／／／」

かなり内気な子の子である。

しかも、自らの名前を言うだけなのにもじもじしている（その行動で彼女の大きな胸が誇張されている）。

「あうう・・・」

スバルの横で落ち込んでいるランとカンナ、そしてウィリア。

「次に・・・」

スバルがその横にいた女の子に眼をむけた瞬間・・・

「きゃっ！／＼／＼」

灰色の長髪の女の子は突然顔を背けて恥ずかしがってしまった。

「・・・名前を聞きたいんだが・・・？」

「あつ、わ、私・・・は・・・ぷ・・・ぷ・・・／＼／＼」

女の子は恥ずかしさでしどろもどろになっている。

「ぷっ..」

ちょっとアイリスがいらしながら聞く。

それはアイリスに限ったことではなく、ナコルやシロンはともかく、優しい性格のレノシアやカトレアもちょっとお怒りモードになっている。

「ぷ・・・プラナ・・・う、ウラガンキンの・・・／／／」
「プラナ、ね。じゃ、次は・・・」

そして赤く短い髪の子に振る。

が、内心スバルはちょっとドキドキしていたり。理由は・・・

（スバル・・・元々の姿はあんなに不細工だったのに・・・いざ人になつたらあそこまで美人になるのか！？）

と。

「私はアグナコトルのリシア！よろしくね！」

リシアは活発に答えた。

それで最後は・・・

「あ、アタイはマルス。ラージャン・・・だったのよ。よろしく。」
「マルス・・・」

カクサスがちよっと思慮に耽っていた。

「・・・カクサス、まさか・・・」

「いや、恋愛感情がどうということは無い。ただ・・・名前に引っかけを覚えてな・・・」

「名前に？」

ナデシコ・リナト・ニンフがカクサスをじと目で見るがカクサスは恋愛感情的意味は無いと否定。

その理由を聞いてほっとする三人。

「マルス・・・マルス・・・火星・・・？いや、軍神か！」

「あ、アタイにはそんな大層な名前の意味は無いのよ！？」

「いや、そういう意味があったな・・・と思っただけだ。」

カクサスが自己完結した。

「後はまだ目を覚まさない男の子一人・・・。今日だけでもかなり

人が増えたな・・・」

スバルの感想。

深夜。

「・・・今日は・・・おとなしく寝るか・・・」

スバルは自室に向かって歩いていった。

「・・・プラナ？」

バルコニーに佇んでいるプラナを発見したスバル。

「・・・ん？プラナ、どうしたんだ、バルコニーに立って・・・」

「わっひゃああああああ！？」

バルコニーにただひとり、ぽつんと立っていたプラナがスバルに声を掛けられて悲鳴をあげた。

「す、すまない、驚かせて！」

スバルはすかさず謝った。

その対局では・・・

（リリス..あ、あっちに・・・あっちにスバルが・・・あう・・・
あう・・・あう・・・／／／）

リリースが物凄い恥ずかしがっていた。

「あ、あの・・・な、なにか・・・あるの・・・？／／／」

「いや、部屋に行こうとしたらプラナが見えてな・・・？？どうしたのかと思って・・・」

「そ、それは・・・その・・・、あ、あのっ！」

プラナが意を決したようにスバルに何か言おうとする。

「？」

スバルは疑問符を浮かべる。

「わ、私・・・あの時・・・あの、突撃しちゃって光に包まれて、その、む、胸を触られた時なんですけど・・・／／／」

「そ、それはすまない！」

「い、いいんです・・・。好きな人に・・・そんなことをしてもらえるなら・・・／／／」

「は？」

「だ、だから・・・私は・・・あなたのことが・・・その・・・す・・・好きに・・・なったの・・・。・・・わ、私は・・・あなたの虜になったの！／／／」

「・・・（ど、どう答えばいいんだ？）」

プラナのいきなりの告白に何とも言えなくなったスバル。

（スバル…と、虜・・・と言われても・・・）

スバルが言われたことに焦っていた時・・・

カタッ！

「っ!？」

突然起こった物音に過剰反応をするプラナ。

（リリース..あっ、あっ、ば、ば、ばれちゃう！）

「・・・誰かいるのか？」

スバルがそう言ってドアに手を掛け・・・

ムニユウッ！

「うああん！」

たつもりなのに何か柔らかい物に触ったらしく、女の子の喘ぎ声。

「・・・？」

「あ、あのお、そ、そんな激しく掴まないでくださいよお・・・／

／

「リリース？何でこんな所に？」

いたのはリリース。

「あ、あのお、さ、最初からいたんですけど、い、いつ顔を出せばいいのかが分からなくてえ・・・／／／」

「そ、そうか・・・」

「あ、後、そ、そろそろ胸から手を・・・あ、いえ、むしろこのまま・・・／／／」

「あっ！す、すまん！」

リリスの胸から慌てて手を放すスバル。

「う、羨ましいなあ・・・／＼／」

自らの豊満な胸に手を置いて、二人の方を見ていたプラナ。

「あ、あのっ！わ、私の告白の返事は・・・？／＼／」

「・・・すまない、俺にはもう・・・彼女が・・・」

「・・・ふ、フラれたあ・・・」

「・・・くすん・・・」

告白したプラナとスバルの近くにいたリリスが同時に落ち込んだ。

「・・・？」

結局落ち込んだ理由がよくわかっていないスバルだった。

翌朝、集会所。

「おお、英雄が来たぞ！」

「いや、あの方は英雄じゃない！神だ！」

「・・・神？」

スバルは自分に言われたことに疑問を持たざるを得なかった。

「・・・なあ、なんで俺が神だと呼ばれているんだ？」

スバルは理由を受付嬢に聞いてみる。

「そのことですか？死亡率100%と言われたクエストを生還し、あまつさえクリアしてしまったんですもの、神と呼ばれざるを得ませんよ。」

「一体俺はどこまで凄い男になってしまっただ・・・？」

スバルは自分に対する謎しか浮かばなかった。

報酬。

入手

何かを入手する暇がなかったため無し。

クエストクリア

色々。数が多いため省略。

その他

ダフネ。

ミズカ。

リリス。

プラナ。

リシア。

マルス。

目を覚まさないギザミの男の子（男の娘）。

スバルの恋愛争奪、激化。

ラキュナスがトリガーハッピーであることが判明。
スバル、ついに神という称号を得る。

第92話 英雄、神となる（後書き）

今回は未だ気を失っている男の娘以外の紹介です。

ダフネ

リオレウス希少種。

身長170cm。

見た目17歳。

とても優しい美少年。

誰が好き、誰が嫌い、ということではなく、優しさは分け隔てない。

ミズカの恋人で、ミズカは『優しくて、一緒にいると落ち着く』と言っている。

名前の由来は沈^{じん}丁^{ちやう}花^げの学名『Daphne odora』より。花言葉は『優しさ』

ミズカ

リオレイア希少種。

身長164cm。

見た目17歳。

胸のサイズはD+。

ダフネの恋人。

おとなしくて可愛い、魅力的な女性である。

ダフネは彼女のことを『可愛い彼女』と言っている。

家事万能、才色兼備の典型的なパターン。

名前の由来は沈丁花の漢名、『瑞香』より。彼女の場合の花言葉は『おとなしさ』

プラナ

ウラガンキン雌。

身長164cm。

見た目14歳。

胸のサイズはI+。

おっとりしているため、争いは基本的に嫌い（だが、スバル争奪になると話は別）。

サンナとは違い、自分の胸を個性アイデンティティにしているわけではなく、料理や洗濯などの花嫁修業を頑張っている。要は、家事の実力を魅力としていこうと頑張っている。

モンスターだった時は不細工だったため、嫌われ者だったが、人となった瞬間、童顔の美人となった。

名前の由来は枝垂桃の英名、『プラナス』より。花言葉は『私はあなたの虜です』

リシア

アグナコトル雌。

身長140cm。

見た目13歳。

胸のサイズは3A。

天真爛漫で優しい。

誰かが好きになるわけでもなく、皆の相談をよく聞いたりする。

胸のことを言われても気にはしないが、ラキュナスにだけは結構喧嘩となる。

名前の由来はトルコキキョウの学名『リシアンサス』より。花言葉は『深い思いやり』

リリス

グラビモス亜種雌。

身長156cm。

見た目14歳。

胸のサイズはK。

ラキュナスと同等、あるいはそれ以上のドジっ子。

性格はおっとりで内気。しかし、スバルのことになると豹変、かなり大胆な行動をとることも。

語尾がよく『〜よお』とか『〜だからあ』とか伸びる。

ラキュナスからしてみれば妬みの対象。ラネツサ・ロズウェルからすれば『生物兵器』。

結構可愛い。

名前の由来は『アマリリス』より。花言葉は『内気』

マルス

ラージャン雌。

身長167cm。

見た目17歳。

胸のサイズはE。

カクサスに勝負を挑むも敗北、負けた時に『殺せ』と言ったものの、カクサスが『殺すわけにはいかない。自分は殺さぬ主義だから』という言葉にドキッとしてしまい惚れた。

胸にサラシを捲いている。理由は『戦うのに胸が大きかったら邪魔

だから』、と。

闘う方法はカクサスと同じく、徒手空拳。

意外と恥ずかしがりやで、裸を見られるのが嫌。

名前の由来は花海棠^{はなかいどう}の学名「Malus halliana」より。
花言葉は『艶麗』

以上です。

次回は娘達がノブによって色々と・・・（目的はちゃんとしたもの）
、更に緊急事態が！？

お楽しみに！

第93話 娘達の身体測定&男の地味な活動（前書き）

93話です！

完全にですがRー15です。

ノブが身体測定を行った理由は・・・！？そして最後に緊急事態が
！？

では、どうぞ！

第93話 娘達の身体測定&男の地味な活動

「さって・・・ここまで人が多いと・・・厚生係のオイラの血が騒ぐのニャーっ！」

開口一番、ノブがいきなり『ぐふふ』と言いながら色々取り出した。

メジャー、体重計、身長測定器、体脂肪計etc・・・

「ノブ、一体どうしたんだ？」

「ご主人・・・、そろそろ女の子たちの身体測定を行いたいと思っていたのニャー！」

「一体お前は何を測るつもりなんだ？身長と体重は分かるが・・・」

「身長体重はもちろん、体脂肪率とBMIにバストサイズを！コンマミリの誤差も出さないニャよ？」

「お前はどこのエロ親父だ・・・？」

「とにかく！男勢は出ていった出ていったニャー！」

「うわ、わ、わ・・・」

スバルやカクサス、アレックスらは家を追い出された（ノブに）。

リビング。

「の、ノブ、一体女の子だけ集めて何をしようっていうの・・・？」

「簡単に言うにゃ。身体測定を行うニャ！やらしいことは・・・」

「考えているんだ・・・」

「バストサイズを皆の好きな人に伝えるニャ！」

『やっ、止めてえっ！』

「嫌ならさっさと服を脱げニャーっ！」

『いやあああああ！！』

娘達が悲鳴をあげた。

その頃・・・

「・・・さて、俺たちは・・・農場に向かうか。」

「・・・むう・・・」

「い、イチヨウさん？ど、どうしたの？」

イチヨウがむすつとしていることにちよつとおっかなびっくりしているロズウェル。

「あの猫に娘の身体を隅々まで調べ上げられているとは・・・」

「いや、そんなに詳しくは調べないかと・・・」

「いやいや、胸に身長、体重に体脂肪、もしかしたら・・・」

「ちよつとイチヨウ、過保護過ぎるのもどうかと思うぞ？」

「もうダメだ！心配でならん！家に、家にいっつ！」

「ちよつとお父さん、娘の心配は分かるが今帰ったら変態扱いされるぞ、娘に・・・」

「うぐっ・・・」

カクサスの言った正論に反論ができないイチヨウ。

「皆は釣りとかいろいろしてくれよう。今日は自由ということ・・・」
「スバルの一言でそれぞれが分かれていった。」

スバル宅。

（ここからは、ノブによる身体測定の様子をご覧ください。）

「くすん・・・」

アイリスが涙目になっていた。

アイリスに限らず、他の娘にも同様である。

「ほらさっさと乗る！後がつつかえてんだから！」

「やっ、やだっ、乗りたくない！（どしん！）きゃん！」

「んーと・・・アイリス。身長は156・4。体重は・・・オウ、ちよっと太ったんじゃない？」

「いゃん！また太ったの！？」

「BMIはそれに比例してギリギリ適正值。バストは・・・」

「やっ、の、ノブう・・・そんなにきつくしないで・・・あんっ！

／＼／

「精密に言うニャ。Tが88・62でUが67・36・・・、差が21・26・・・アイリス、またまたサイズアップおめでとうニャ！」

「ほえ？また？」

「そうニャ。現在Fーとなっておりますニャ。」

「やたっ！」

（ノブ..アイリスって結構胸揉まれることが多いからニャー・・・そりゃ、成長するニャね・・・。成長期ってこともあると思うニャよ？）

アイリスが喜んでいる傍ら、ノブは正直な事実を思っていた。

「次ー、ナコルー。」

「あ、はい・・・」

「えっとねー、身長は161・0・・・体重は・・・ごによごによ・・・。もうちよっと食べた方がいいと思うニャよ？」

「そ、そうですか？私としては結構食べている方だと思うんですけど・・・」

「BMIもやせ形の方になってるニャ。バストは・・・」
「の、ノブっ！し、しめす・・・ふあっ！／／／」
「・・・Tが89・41でUが66・91・・・ナコルもFにちょうどサイズアップしてるニャ。」
「ほ、ホントですか!？」
「この家の唯一の仕立て屋をなめるなだニャ！次、ウィリアー。」
「あうう・・・／／／」

自分の体を隠しながらノブの前に進むウィリアー。

「あー、終わった人からどんどん自由だニャ。・・・身長は・・・144・9で、体重は・・・適正值みたいだニャ。」

「身長縮んだあゝ・・・」

「BMIも適正值ニャ。さって、バストバスト・・・」
「・・・」

「ウィリアー、残念なお知らせだニャ・・・Tが74・36でUが62・97・・・バストサイズはBーのままニャ・・・」

「そんなに変わってないなんてえ・・・くすん・・・」

落ち込むウィリアー。

数値で、しかも測ったのはそういう数値に物凄く忠実なノブである。

現実として受け止めるしかないのだ・・・

「次ー、クリームー。」

「あ、アタシも測るっすか？」

「ま、まだクリームはそんな胸のことは気にしない年齢・・・だよニヤ？」

「気にしないっすよ？だからバストサイズ放置でいいっす。」

「OK。身長は・・・139。1で、体重は・・・ちよつと食べた方がいいニヤよ？」

「そうっすか？あたしとしては適正量だと思っていたっすけど・・・」

「BMIが痩せ気味、って出てるにや。そう考えるともうちよつと食べるべきだって言うことニヤ。」

「気をつけるっす。次ー、シロンー。」

「あ、私？」

シロンが向かう。

「はい身長計に乗ってー。はいー。次体重計ー。・・・はいいいよー。」

「・・・ドキドキするわね・・・／／／」

「結果ー。身長は162。9、体重は・・・胸が大きいからかな？ちよつと太ってますって出たよ？」

「うそっ!？」

「BMIもぎりぎり太り気味ラインに入ってるニヤ。さてバストは・・・」

「ふあっ!？やつ、きつい・・・あっ・・・／／／」

「Tが90。45、Uが67。35。差は23。1だから・・・F十ニヤ。変わってない変わってないニヤ。」

「ちえーっ・・・」

結果にぶー垂れるシロン。

「文句は言わなーい。次ー、レノシアー。」
「あ、はい・・・」

レノシアがとぼとぼと向かう。

「はい測るよー。・・・はいいいよー。」
「ど、どうですか・・・？」
「・・・身長は152.3。体重はちよつと・・・じゃないニヤ。
標準体重の半分くらいしかないニヤ!？」

「え、ええっ!？」

「BMIも痩せすぎになってるにゃ!ば、バストは・・・」

「はうん!や、やめ・・・あつ・・・／／／」

「T79.34、U64.22。まだまだCだニヤ。ご飯ももつと
食べるニヤー。」

「そうですか・・・はあ・・・（バストアップ体操とかしてるんで
すけど・・・）」

「はいはい次々ー。次ローズー。」
「わ、私ですの!？」

ノブに呼ばれ、驚くローズ。

「おんやあゝ？ローズは己の体形に自信がないのかなあゝ？」
「そ、そんなことは無いですよ！私だって、そこそこの身体ですよ！？」

「わかった分かったニャ。さっさと乗るニャ、測るのニャ。」

渋々、といった感じで測定をするローズ。

「はいはいはい身長145.3。体重は・・・標準ときたニャ。」

「ほら見ろですの。私は体には自信があるんですよ！」

「BMIは標準。はいバスト。」

「くひっ！？の、ノブ、や、止めて欲しいですよ・・・く、くすぐっ・・・あひっ！」

「・・・T74.66のU63.46・・・A+ニャ。」

「くう・・・胸は・・・胸はどうにもならなかったんですよ・・・

！」

「はいはい、敗者の嘆きは後回しで・・・次いゝ、ライラー。」

「は、敗者ってなんですよ！？」

「読んで字のごとくー。」

「・・・はあ・・・」

ライラは測定が嫌そうな顔をしていた。

「ライラは嫌なのかニャ？」

「嫌に決まってんでしょ・・・」

「あ・き・ら・め・ろ。」

「むっ・・・むっかつくぅ・・・」
「はいさっさと乗る。」
「くっ・・・」

ライラはおとなしく測定を受けた。

「・・・身長162.1で、体重は・・・普通！」
「普通ってどういうことよ！」

「そうとしか言いようがないニャ。BMIも適正值ニャよ？はいバストバスト。」

「ひゃっ・・・くひっ!?や、やめ、あんっ!／／／」

「・・・T79.66、U65.00・・・差が・・・14.66だから・・・Cニャ。」

「うっぐ・・・」

終わった組は・・・

「あ、相変わらずノブはずばずば言うね・・・」
「それがノブですもん・・・」
「・・・でもさ、あの二人・・・」

そう言ってアイリスが指差したのは・・・

恥ずかしそうに胸を隠すプラナと隅の方でまるで『測定なんてしたくない、脱ぎたくないもん』と言うかのように蹲っているリリースの二人だった。

「お、おっきいよお・・・」

「大きすぎるわ・・・」

「私達と比べ物にならないくらいですよお・・・」

嘆き組が生まれていた。

ちよっとブレイク、男たちは・・・？

「わ、わ、わ、兄さん！ひ、引っ張られるっ！」

「待ってろ、すぐ行く！」

「おおっ！大物だ！」

「今晚のおかずになるね。」

ロズウェルが大当たりを引き、ラネッサが品定めを、ダフネがぼやいたりした。

「カクサス、そちらの採掘状況はどうだ？」

「上々の成果だ。アレックスの方は？」

「少々不作のような気がするくらいの状態だ。」

二人は採石を行っていた。

・・・ちなみにイチヨウ、行方不明・・・

場所を戻して・・・

「次、ナデシコ！」

「あうう・・・そんなに大きくなった気がしないよ・・・」

「それは測らないと分からないニャ。まずは身長体重を。」

「う、うん・・・」

「・・・結果」。身長は153.9で、体重は・・・最近お菓子ばかり食べてニャい？」

「はうっ！」

「ちょっと太っているような気がしたよ？BMIは普通ニャンだけどね。」

「あう・・・あう・・・／／／」

「さあ、バストを。」

「ま、待って、まだ、こ、心の準備が・・・ふあん！／／／」

「・・・T80.53のU64.03・・・差が16.5だからC十ニャ。」

「え、え！？」

「おめでとうニャ。無事バストアップしてるニャ。」
「よ、よかったあ・・・」

思わぬ成長にほっとするナデシコ。

「次は・・・リナトかニャ？」
「わ、私が・・・？は、恥ずかしいよ・・・／／／」
「恒例・・・じゃないけどチェックニャ！」
「あうう・・・／／／」

観念したかのように身長体重を測るリナト。

「・・・身長は・・・153ポツキリ！体重は・・・うん、身長を
加味すれば全く問題ないニャ。」
「そ、そう・・・？」
「そしてバストは・・・」
「やつ、あん、だ、だめ、そこは・・・ふああっ！／／／」
「ちよっと！動いちゃダメニャ！余計に時間がかかるし恥ずかしい
思いをする可能性だってあるニャよ！？」
「だ、だって、こすれちゃうと・・・その・・・／／／」
「えーい、おとなしくするニャ！」
「やつ、あつ、あん！／／／」
「・・・ふう、やつと測れたニャ。えっと、T84・63でUが6
6・03・・・差は18・6だから・・・おや、Eニャ・・・
ギリギリ。」
「ほ、ホント！？おっきくなってるの！？」

「だーかーらー、嘘は言わないって言ってるニャ・・・」

「え、えへへ・・・／＼／」

「・・・リナトずるい・・・」

リナト（の胸）を羨ましそうに見るナデシコ。

（ノブ・・・大きくなってるのも・・・成長期だって誰一人として気づいていないみたいだニャ・・・。育ちざかりっていうのかニャ？・・・気づけない原因というのは・・・やっぱり『揉まれたら大きくなる』という迷信から？）

ノブはそんなことを考えていた。

「はいはい次々・・・あれ？アスカはどうしたニャ？」

「・・・まだ眠ってると思うけど・・・」

「・・・後日拷問形式で測定してやろうかニャ・・・？」

「あうあうあう・・・」

ノブの黒オーラを間近で受けたリナトが震えていた。

「ま、そんなことはほつといて。えつと次。ディルカだニャ。あ、服は着たままでいいニャ。まだ早いし。」

「じゃ、じゃあ・・・／＼／」

「身長と体重だけ測るのに何で顔を赤くするニャ?・・・えっと、身長は130・3ニャ。体重は・・・ちよつと瘠せ気味みたいだニャ。」

「そ、そうなんだ・・・」

「・・・でも、食べることについては女の子の重大な悩みだということは知ってるニャ・・・」

「うん・・・」

「辛気臭いのは後々!次!タリス!」

「わ、私ですの!?!」

「もー、恥ずかしがっちゃダメニャ。ほらほらさつさと・・・脱げ!」
「や、やん!」

無理矢理タリスに服を脱がせる(と言うか瞬間的に服を剥いでいた・・・)ノブ。

「さあ諦めて乗るニャ!」

「う、うう・・・／／／」

おとなしく身長体重を測るタリス。

「ふむふむ・・・身長は165・5で、体重は・・・うん、最近運動してないニャ?」

「あうっ!」

「たまには運動しなきゃダメニャよ?BMIは幸い基準値ニャ。んで、バスト・・・」

「そ、それくらい自分できやひっ!?!」

「自分でやったら偽装しちゃうニャ!えっと・・・Tが83・44でUが65・94・・・。差が17・5ポッキリだから・・・Dニ

ヤ。」

「か、変わってない・・・」

「ぷっ・・・」落ち込むタリスと含み笑いをするアルテア。

「アルテアー、笑ってるけど次あんただよー。」
「あうっ!？」

笑っていたがノブに呼ばれびっくりするアルテア。

「タリスを笑って自分も笑われるか・・・ニヤ？」

「あ・・・う・・・」

「・・・身長が164.2で体重が・・・お、ちゃんと運動しているようニヤ。適正値!」

「ほっ・・・」

「それで・・・バストは・・・」

「あっ、やんっ!」

「・・・Tが85.43で、Uが67.43ニヤ。差が18だから結局D+ニヤ。」

「ちょ、ちょっと増えただけえ・・・?」

「くすくす・・・」

落ち込むアルテアに『ざまあみろ』、と言うようにくすくす笑うタリス。

「そんな笑うことでもないニヤ。次のサンナに絶望するかもしれないな

「いニャ・・・？」

「あ、私？」

「ちよ、姉さん・・・堂々とし過ぎ・・・」

サンナが堂々と測定器の元へ歩いた（普通は胸を隠すか何かはするはずだが、全然隠してない）ため、イシアが焦っていた。

「くっ・・・サンナめえ・・・」

「どうしてそんなに大きいのよお・・・！」

そのサンナを憎しみのこもった眼で睨みつけているラキュナスとシロン。

（ノブ・・・いやいや、シロン、あんたも十分睨みつけられる対象だと思うのにゃ・・・）

こっそりそう思っていたノブ。

「はいはい、身長は・・・っと。・・・サンナ、残酷な結果を通知するニャ。」

「な、何かあるの・・・？」

「身長が・・・151.9・・・。ちよっと縮んでるにゃ・・・。体重は・・・やっぱり・・・質量があるからかニャ？ちよっと太ってるって出てるにゃ。」

「いゃん！太ったのお！？」

（アイリス・キルティス・・・太ったのって胸のせいじゃないのかなぁ・・・）

「背も縮んでることには気にしないの？」

「わ、私は体重の方が気になるの！」

「でも無理に痩せると胸から痩せるって聞いたニャ？」

「ガーン！」

「・・・呆然としているこの瞬間に測定・・・」

「・・・（ショックで呆然としている）」 「・・・サンナ？サンナ。バスト測り終わったよ。」

「えっ！？あ、い、いつの間に測ったの！？」

「・・・呆然としている時に。」

「あう・・・」

「それで・・・Tが94・32でUが68・10・・・差が26・22・・・で・・・G+・・・」

「の、ノブ！？」

「お、オイラも信じられない物を見た気がするニャ・・・」

ノブはサンナの測定結果を見て驚いていた。

「そ、それは放置して！つつ、次！イシア！」

「あ、そ、そうだよね、次だよね・・・」

イシアは分かっていたかのように測定を進めていく。

「・・・身長は148.9で、体重は・・・イシアの方がちゃんと動いているようだニャ。そんなに基準値と大差ないし・・・」

「・・・自分ではそんな気がしないんだけど・・・」

「それでバストは・・・」

「や、やっぱりそれは無理いっ！ふひゃん！」

「・・・T86.55でUが66.55・・・差が20ぴったりだから・・・E。」

「あ、ちよつとおっきくなつた・・・」

イシアが自分の胸を見てそう呟いた。

「・・・あれ、アイリスは？」

「・・・なんでだろう、さっきまでそこに蹲ってたリリースやクロスまでいないよ・・・」

『あっ!?!?』

サンナ達が測定状況を見ている間、いつの間にかアイリスとリリースとクロスがいなくなっていた。

再びブレイク。

「・・・あの洞窟・・・さっきから何か禍々しい気を感じる・・・」

ロズウェルとラネッサが釣りに夢中になり、カクサスとアレックスが鉱石最終に精を出している頃、スバルは農場の一番奥にある洞窟が気になっていた。

「・・・行ってみるか・・・」

そう行ってスバルが一步踏み出した瞬間・・・

<スバルっ！>

<スバルさぁっ！>

二人の声が聞こえた・・・

さらにその後ろから・・・

くみ、皆ぁ・・・早すぎるよぉ・・・>

また声が聞こえた。

「・・・アイリス、クロス、リリス・・・。お前ら身体測定の方はどうな「聞いて聞いて〜！私、また胸がおつきくなつた〜っ！（ぎゅうっ！）」げふっ・・・」

「だ、ダメですよ！私だって抱き着きたいんですからね！？」

「やなの！スバルは私の恋人なんだよ！？」

「抱きつく権利は誰にだってあるはずです！」

アイリスとクロスがきゃいきゃい言い合っている頃・・・

「・・・」

「ろ、ロズウェル！？だ、大丈夫かい！？ラネッサも！？」

「ああ・・・僕は今・・・幸せな気分だよ・・・（ダバダバダバ・・・）」

「兄さん・・・僕・・・凄いモノを見たよ・・・（ダバダバダバ・・・）」

ロズウェル・ラネッサはまたまた鼻血の海に沈んでいた。

理由は・・・

「ま、待ってよぉっ！」

先程からスバルの許に走っているリリスだった。

走っている際に大きく揺れている彼女の豊満な胸がロズウェルやラネッサには刺激が強過ぎたらしく、結局また・・・と言うのが現状である。

「え、えっ！（ドフンッ！）」

「うごっ!？」

「きゃっ!？」

「いやっ!？」

リリスがスバルに飛びかかり、抱き着いた。

スバルはその時に彼女の胸で口をふさがれ、アイリスとクロスは弾かれた。

「ちょ、ちょっとリリス！いきなり突き飛ばすなんて酷いよ！」
「そうですよ！痛かったんですからね！？」
「ご、ごめんなさいい……。で、でもお、でもお……」

リリスはアイリスとクロスをぶるぶる震えながら見て、反論する。

「と言うよりも！いい加減スバルから離れてよお！おっきい胸で誘惑しないで！」

「ゆ、誘惑じゃないのっ！」

「っっ！！っっ！！！！（バンバンバン！！）」

リリスの下でスバルは苦しそうにしていた。

「離れてよおっ！」

「嫌あっ！」

「んぐうっ！」

息苦しさに耐えきれなくなったスバルはリリスの肩を掴もうとして・

ムニユウツ！

「ふあっ！（ガクッ！）／＼／＼」

リリスの胸を両方とも鷺掴みにしていた・・・

同時にリリスは胸を揉まれた時に力が抜け、スバルの上にもたれかかる形になってしまった。

「ちよっ、スバル！？何でリリスの胸を！？」

「え、えっと、あ！す、スバルさん息苦しくて肩を掴もうとしたそうです！」

「肩を掴もうとして胸を揉んだ・・・／＼／＼」

「や、やだ、す、スバル、そ、そんなに強く・・・あん、掴まないでえ・・・ふあっ！／＼／＼」

「うぐ・・・ぐ・・・」

アイリスは昔の自分の状況を思い出して赤面し、リリスは現状スバルに胸を揉まれていた・・・

ちなみにアレックスやカクサスは助けに来ないのか・・・という問いは殆ど不可能と言えるのだ。

アレックス達がいるところはかなり上にいるのと、農場そのものが広く、スバル達がいる洞窟と採掘場はかなり離れているのである。

「あっ……んっ……も、も……う……らめえ……んくっ……ひああ……／＼／＼」
「……っ!!……っ!!!!」

リリスがついに呂律が回らなくなり全身震え始めた。

スバルはスバルで、今までにこういう状況が多かったのか肺活量が増えてしまった為、苦しさは人一倍強くなっていた……

「く、クロス、い、今スバルはなんて思ってるの!??」

「え、えっとですね、『な、なんか顔に柔らかいモノが当たってるが……それが邪魔で息ができません!だ、誰か、た、助けてくれ!』……と……」

「ほっ……」

「あ、アイリス……さん?どうしたんですかホツとして……」

「え、あ、そ、それはね?スバルの意思でリリスの胸を揉んだんじゃないんだ……ってわかった途端に……なんかホツとしちゃった……」

「……でも今、スバルさん苦しんでいますよ……?」

「そっ、そうだった!」

そしてアイリスとクロスによるスバル救出作戦が始まった・・・

ブレイク終了。

「さてダイアナ、次は君だニャ・・・」

「嫌よ！アタシはスバルにしか裸を見せないから！」

「・・・じゃあスバルを呼んで頼まれたら裸を見せるわけニャ？」

「う、そ、それは・・・その・・・そ、それも・・・や、やっぱり・・・は、恥ずかしい・・・／／／」

「じゃ、さっさと脱ぐニャ。そうすればそんなに恥ずかしくなくなるニャ。」

「う・・・うう・・・／／／」

ダイアナは本当に恥ずかしそうに服を脱いで測定器に乗った。

「ほいほーい。身長は163.5で、体重は・・・」

「きゃあああっ！いい、言っちゃダメ！言わないで！は、恥ずかしいから！言わないでえーっ！」

ダイアナ、ノブが体重について見解を言おうとしたところ発狂したかのように耳を塞ぎ出した。

「言わないから・・・ほら、さっさとバスト測らせい！」

「やっ！やだ！す、スバルに測ってほしいの！／／／」

「スバルだと・・・皆がなにするかわかんニヤいからオイラが公平性を保つため、正確性を保つために測るニヤ。おとなしく、諦めて測らせろニヤ！」

「いやーん！」

数分後・・・

「うつ・・・うつ・・・け、穢されたあ・・・」

「そんなことしたつもりは無いニャ。そう思ったのはそっちの勝手な思い込みニャ。」

「スバルに穢してほしかったのに・・・」

「叶わぬ願い、ニャ。バストは・・・T89・66、U63・06・
・差が24・6だから・・・G一ニャ。」

「うう・・・」

「次は・・・カトレアニャ。」

「あ、は、ひゃい！」

思わず嚙んでしまったカトレア。

「お、落ち着くニャ。別に悪いことするわけじゃニャいだから・・・」

「そ、そうなんですけど、は、恥ずかしいというか、初めてのことで・・・／＼／＼」

「じゃ、簡単に終わるから測定器に乗るニャ。」

「は、はい！」

カトレアは素直に測定器に乗る。

「うーん・・・身長は158・1で・・・体重は基準値を少し下回るくらいだニャ。」

「そ、そうですか・・・」

「後はバスト。」

「きゃひっ!？ やっ、の、ノブさん、し、締めすぎです・・・／＼／＼」

／＼
「T82・44でUが64・44ニャ。差が18ポッキリだから・
・D十二ャ。」

「ちよつと・・・成長したんですか・・・？」

「そうみたいだニャ。」

「よかった・・・」

「次・・・チェリムル・・・ニャ？チェリムル？」

ノブがチェリムルを探していたら・

<お父さん！何覗きしてるのよ！>

<い、いやなチェリムル。この成長を見守るのも親の務めでな・・・
？>

<やってることは覗きなによっ！！（パチイン！）>
<がふう・・・>

チェリムルがイチヨウにビンタしていた。

「ごめんね、お父さんが覗きしてたから・・・／／／」

「そ、そっかニャ。次チェリムルニャよ？」

「あ、そうなの！？ご、ごめん！」

慌てて服を脱いで測定器に乗るチェリムル。

「そんな焦らなくてもいいのに・・・ニャ。身長は・・・142.5で・・・体重は・・・や、痩せ過ぎニャよ!？」

「えっ!？そ、そんなに体重ないの!？」

「ば、バストは・・・」

「っ!（ピクツ）」

「T75.00のU60.00・・・。差がぴったり15でCニャ。」

「ここまでぴったりって・・・」

「オイラも初めて見たニャよ?次、プリムラ・・・ぶっ!」

「・・・なに?」

ノブがプリムラを呼んだその時、思わず吹き出してしまった。

彼女はなんと、下着一枚で待機していたのだ（上半身は裸である）。

「ぶ、プリムラ・・・大胆・・・」

「だって・・・空気が暑かったんだもん・・・」

「・・・とりあえず測るニャ・・・」

「うん・・・」プリムラはすっと測定器に乗った。

「・・・身長は156.8で・・・体重は・・・軽っ!？」
『えっ!?!』

ノブの驚きは全員にも伝わった。

それは無論、プリムラ本人もだ。

「だ、だって・・・標準体重の3分の1って！」

「し、信じられない・・・」

「さ、ば、バストバスト・・・」

「・・・う・・・く・・・あっ！ひいん！」

「・・・Tが・・・76・53で・・・Uが・・・59・83・・・

差が16・7で・・・C+。」

「アンダーが・・・細いね・・・」

「羨ましいですわ・・・」

シロンとタリスが羨ましがっていた。

「次ー、ニンフー。」

「わ、私が・・・？」

おどおどしながらも測定器に乗るニンフ。

「・・・うーん、身体中が傷だらけにゃ・・・」

「み、見ないでくださいよ・・・。見られたくないんですから・・・

・／／／

「ごめんニャ。身長が150・2で体重が・・・標準値ぴったりニャ。」

「そ、そうですか・・・？」

「それで、バストは・・・」

「くひっ!? んっ・・・んんっ! (必死に堪えている)」

「えっと・・・Tが79・64でUが63・22・・・差が16・42で・・・Dニャ。・・・ニンフ、カクサスに胸揉まれたニャ?」

「そ、そんなことされてませんよ!・・・されたいですけど・・・うう・・・／／／」

「乙女のささやかな願望・・・とは言い難いニャ。次ー、アンリ・・・ニャけど・・・」

「どうしたの?」

「・・・バスト、測る?」

「は、測る! そ、そんなにおっきいわけじゃないけど・・・私のおっぱい・・・(かなり小さな声で)／／／」

「さっさと測るニャ。」

「う、うん・・・」

測定器に乗るアンリ。

「えっと・・・身長は143・0ニャ。体重も身長比較値ぴったり。」

「ほえ?」

「バストは・・・」

「んっ・・・んんっ!」

「Tが72・50で、Uが60・50で・・・差が12・5だからBニャ。」

「やっぱりおっきくなってない・・・」

「まだ将来有望ニャ。次ー、クロス・・・ってあれ? いないニャ?」

「ノブー、クロスとリリースはいないわよー。」

「そっか・・・じゃ、次に飛ばすニヤ。じゃ、キルティス。」
「あうう・・・私かあ・・・」

嫌そうに測定器に乗るキルティス。

「・・・アイリスと一緒に！」
『うそおっ！？』

ノブの一言に驚きが隠せない一同。

「・・・バストは・・・」
「ふあっ！（へなへな・・・ペタン）」
「あらら、擦れて力が抜けて・・・床に座り込んでしまった・・・」
「・・・バストも・・・アイリスと一緒にニヤ・・・」
「・・・アイリスのドッペルさんと言っても過言ではないわね・・・」
「ふああ・・・ら、らめえ・・・ふやあん・・・／＼／＼」
「腰のくだけ方はアイリスより深刻みたいだけど・・・」
「シロン、退かしてねー。次ー、カナー。」
「あ、うん！」

ぴよこんと測定器に乗るカナ。

「身長は・・・140.1で、体重は・・・瘠せ気味！」

「そうなんだ。」

「バストは・・・」

「やんっ！の、ノブう、くすぐったいよお・・・」

「・・・こんなロリっ子がこんな大きさって・・・信じられないニヤ・・・」

ノブが戦慄していた。

「の、ノブ？どうなの？」

「Tが・・・85. 42で・・・Uが・・・67. 30・・・で・・・差が・・・18. 12・・・D＋ニヤ・・・」

『うそっ！？』

「し、新時代到来なの！？」驚きが隠せず、ウィリアに至っては訳の分からないことを言っていた。

「つ、次！セレナ・・・は寝っ転がってもらわないと身長測れないニヤ・・・」

「あ、寝転びますよ？あ、でも・・・そうすると・・・／／／／」
「どうかした・・・あ！」

「・・・胸が・・・丸見えになっちゃいます・・・／／／／」

「すぐ測るから！その間我慢してほしいニヤ！」

レノシアがセレナを寝ころばせ、高速で身長を測り終え、体重を測った。

「ふいゝ。身長が152.3で、体重が標準値ニヤ。」

「そ、そうですか・・・」

「バストは・・・」

「の、ノブさん!きつくしめす・・・やん!」

「・・・T90.00のU67.50・・・差が22.5だから・・・Fニヤ。」

「せ、セレナも意外とおっきかったです・・・」

ナコルが落ち込んでいた。

「次はラキュナスニヤ。」

「わ、私スタイル不安なんだけど・・・だってこんなぺったんこだし!」

「とりあえず測るニヤ。」

・・・

「身長が157.3で、体重がちよつと太り気味・・・かニヤ?」

「えー・・・」

「バストは・・・」

「・・・早くしてよお・・・恥ずかしいんだから・・・／＼／」
「はいOKニャ。・・・残念な報告なんだけど・・・Tが62, 5
0でUが60. 00で、差が・・・2. 5だから・・・4A・・・」
「もう・・・死にたい・・・」

ラキュナスは周りの娘よりも胸が小さいというコンプレックスがある為、ダメージは深刻だった。

「ご、ごめんニャ。次はランニャけど・・・カンナも一緒の話ニャけど、身長体重だけでいいかニャ？」
『いいよ?』

そして二人が別々に測定器に乗った。

「身長は・・・ランが143. 2で、カンナが143. 3ニャ。体重は二人とも基準値。」
「ほっ・・・」

ホッとしている二人。

「次はミズカ。」
「あ、うん。」

すんなりと乗るミズカ。

「身長は・・・164.2で、体重は・・・標準値ニヤ。」
「ほっ・・・」

「バストは・・・」 「くひいん！ やん、あっ！ ダメっ！」

「・・・T85.00のU67.0で、差が18のD＋ニヤ。」
「・・・普通ね。」

「次は・・・プラナ・・・ニヤけど・・・」
「う、うん・・・／／／」

プラナはゆっくりと測定器に乗った。

「身長は155.4で、体重は・・・やっぱりちょっと重めニヤ。」
「あう・・・」

「それでバストは・・・」

「やっ、あん、くう、ひいん！」

「・・・むう、め、メジャーが足りないニヤ・・・」
「ええっ!？」

「そ、そんなにおっきいの!？」

キルティスが驚き、カナが正直なことを言った。

「べ、別のメジャーを！」

ノブがリビングから出て行き、数分後には長めのメジャーを持ってきた。

「くっ・・・」

「ひあっ！だ、だめえ・・・／／／」

「は、測れたニャ・・・えっと、Tが95・73で、Uが64・53・・・差が31・20だから・・・あ、I＋・・・ニャ・・・」

「うわああああああん！」

「理不尽過ぎるのよおっ！」

ノブがプラナのバストサイズを明かした瞬間、ウィリアが泣き崩れ、シロンが運命の残酷さを呪った。

「そ、そんなにあったんだ・・・（ムニムニム・・・）／／／」

プラナが自分の胸を揉むような形でサイズを実感していた。

「リリースはいないから飛ばして・・・リシアニャ。」

「はーい！」

元気良く返事をし、測定器に乗るリシア。

「・・・身長は140.3で、体重は・・・普通！」

「普通なんだ・・・」

「バストは・・・」

「・・・？」

「・・・Tが65.00でUが60.00だから、差が5だから3A。」

「まだ成長期だから大丈夫！きっとおっきくなる！」

「うん・・・そういう期待は大事ニャ。少女よ、大志を抱け、ニャ！」

どこかはき違ったことを言うノブ。

「さて、後は今この場にいるメンバーで測っていないのは・・・マルスニャ。」

「あ、アタイが・・・？あ、アタイはいいよ・・・。そんなにプロポーションいいわけじゃないし・・・／／／」

「恥ずかしがるニャ（な）あゝっ！」

「いやあゝっ！！」

マルスとノブの追いかけっこが始まった・・・

ノブがマルスを捕まえるまでのブレイク。

「くにゆうっっ!!」

「うああ・・・やっ・・・あん・・・はあん・・・／／／」

「は、離れないどころかしっかりと抱きしめてる・・・!」

「・・・っ!!!?!」

アイリスがリリスの引き剥がしに失敗した時、クロスが驚愕に満ちた顔をした。

「く、クロス、どうしたの!?!」

「り、リリスさんが・・・リリスさんが・・・!」

「リリスが・・・どうしたの!?!」

「『もう・・・このままえっちなことしても・・・構いません・・・／／／』って!思ってるんです!」

「だ、ダメ!スバルと最初にそんなことするのは私なんだからあゝっ!!!」

完全に引きはがす目的が180度変わったアイリスと焦るクロスは

リリスを必死に引き剥がそうとし始めた。

が、リリスはというと・・・

「あっ・・・んっ・・・うあっ・・・ひいん・・・んあああああ
ああ！／＼／＼」

「むぐうううううっ！！！！」

限界に達した瞬間、スバルの両足に自らの足を絡め、首に腕を回して喘ぎ声を出した・・・

「あっ・・・うつ・・・ん・・・（へなへな・・・）」

腰砕けとなり仰け反らせていた背中を戻して力なくスバルに倒れかかるリリス。

「も、もっろお・・・もっろひれえ・・・（訳..も、もっとお・・・
もっとしてえ・・・）／＼／＼」

「ダメえ！それ以上はダメえっ！」

アイリスがリリスの服の襟を掴むが・・・

[illegible]

また喘ぎ声を出して・・・

スバルの首が絞まった。

「あ、アイリスさん！ 実力行使はダメです！ そうするとスバルさんの首が絞まってしまいます！」

「じゃ、じゃあどうすれば!？」

「スバルさんに一度行動を止めるように言ってください！そうすれば多分大丈夫かと！」

「わ、わかった！スバルー！一旦息我慢してー！んっ！」

スバルはアイリスに言われたとおり息を止め、抵抗をしないようにした。

「はっ、ひいん……あうう……／＼／＼／」

崩れるように倒れこむリリス。

脚を解放し力が抜けたようにスバルの首から腕が外れていく。

「今です！」

「ええいっ！」

「ああん！いやあっ、あん！」

「あ、するりと抜けた・・・」

するりとスバルからリリースが離れた。

「はっ、はっ、はっ、はっ・・・。あ、アイリスの時から肺活量が増えていたから死ぬかと思った・・・」

「スゝバルゝ！？」

「な、なんだよアイリス！？クロスまで！？」

「私にもやって（ください）！」

「嫌に決まってるだろうが！特にクロス！お前はまだ測定済んでないだろ！？」

「うぐっ・・・」

スバルが救出されたためにブレイク終了。

「マルス、おとなしくするニャ！」

「い、いやよ！なんでアタイが身長体重を測られなくちゃいけないのさ！」

「今後のオイラの作業の資料として！そして、マルスが今想っている相手に少しでもよりよくなったということを実感できるように！オイラが力を尽くすだけニャ！」

「あ、アタイにはそういう相手なんて・・・／＼／＼」

「マルス、オイラにはそういう情報があることを知っているニャ？」
「うっ!？」

「マルスの好きな人は・・・確か・・・」

「い、言うな！恥ずかしいじゃないかい！」

「公表されたくないければ・・・測らせろニャ！」

「いやああっ!!！」

結局リビングに連れ戻されたマルス。

「全く。えっと・・・身長が167.3で体重が・・・筋肉質なんだニャ。ちよっと多めニャけど・・・」

「だから測られたくなかったんだよ・・・」

「そしてバストは・・・あっ！？サラシ！？」

「べっ、別にいいだろ！？」

「さっさと外せえっ！そして測るうっ！」

「いやあああ！」

サラシを外してそのまま測る。

「・・・Tが88、21でUが68、21・・・差が20だから、Eニャ。」

「・・・こんなに大きくなって良かったのに・・・／／／」

マルス、普通に考えたら贅沢過ぎる悩みを・・・

「さて、後はクロスとリリースニャけど・・・」「どうにか・・・連れて・・・来たよっ！！」お、お帰りニャ・・・」

クロスがリリースを引きずって帰ってきた。

「・・・ねえクロス。」

「はい？」

「リリースはなんでこんなにトロンとしているの？」

「・・・今回は内緒の方向で・・・」

「それはまあ置くとして、クロス、早速測るニャよ？」

「は、はい・・・」

ちよこん、と測定器に乗るクロス。

「んー、身長は・・・151.4で、体重は・・・普通！基準値ニヤ！」

「よ、よかった・・・」

「さあバストは・・・」

「くくっ！！（こ、ここでえっちな声を出したくないですうっ！！）」

「・・・めちゃくちゃぷるぷる震えていたニヤけど・・・えっとね？Tが74・43でUが59・33だから・・・差が15・1で・・・Cニヤ。」

「変わってないですう・・・」

「最後は・・・リリスニヤけど・・・」

ノブはリリスを見た。

リリスは顔を紅潮させ、小刻みに呼吸をしていた。

「とりあえず寝ころんだまま身長は測って、体重は寝ころんでも測れるものを・・・あ、とりあえず服は全部脱がせてニヤ。」

「あ、はい。」

レノシアがすぐに服を脱がせ、身長を測り、カトレアとクロスが体

重を量った。

「えっと・・・身長が・・・156.4で・・・体重が・・・やっぱり胸が大きいからかニヤ？太り気味って出たニヤ。」

「はぁ・・・」

「羨ましい・・・」

溜息をついているクロスと、羨ましがるラキュナス。

「最後にバストニヤけど・・・こ・・・これは・・・」

戦慄し出すノブ。

「れ、レノシア、お、起こしてくれニヤ・・・」

「は、はい・・・！」

レノシアがリリスの上半身を起こし、ノブがプラナの時に使ったメジャーを当てる。

「っ！（ピクン！）」

身をよじらせるリリス。

「こ……これは……っ!」

再び戦慄。

「ティ、Tが……109.63で、Uが……74.13……
差が……35.5……で……け、K……」

『け、Kえ!?』

「り、リリス……彼女は……化物か!?」

全員が戦慄した。

「私の個性がアイデンティティあ……くすん……」

サンナはサンナで落ち込んでいた。

「あ、そうそう。今回身体測定した理由ニヤけど……、今後服を作る時に資料として使うつもりだったんだニヤ。」

「ふ、服?」

「そうニヤ。今の段階で『服がきついなく』とか『胸が苦しい……』とかある人は今日中に申し出て欲しいニヤ。そうすれば服をすぐさま作り直すニヤ!」

ノブのこの一言で身体測定が済んだ。

そして、スバルは・・・

「ま、まさか・・・こんな所にあつたのかよ・・・！」

洞窟の中でスバルは驚愕していた。

「こんな所に・・・」

「『無属黒剣・ノワール』が・・・！」

報酬。

入手

鉱石類複数。

魚類複数。

クエストクリア

クエスト未受注のため無し。

その他

娘達の身体測定、修了。

服の修正、開始。

『無属黒剣・ノワール』、発見！

第93話 娘達の身体測定&男の地味な活動（後書き）

ノブが身体測定を行った理由は、服作りのための資料とするためでした。

そして伝説剣の発見・・・

次回、スバルが剣の試練を受ける！相手は何と・・・アイリス達！？

お楽しみに！

第94話 『無属黒剣・ノワール』の試練、対する相手は自らに思いを寄せし者

94話です！

爆弾発言が飛び交うためR-15です！

ノワールがスバルに課した試練とは・・・！？

では、どうぞ！

第94話

『無属黒剣・ノワール』の試練、対する相手は自らに思いを寄せし

「スバル、どうしたの？」

いつまでも戻ってこないスバルが気になって洞窟の奥に来たアイリス。

「・・・アイリス、前に行った伝説剣の話、覚えてるよな？」

「う、うん。覚えてる。確か・・・『真剣・ヴァルキュリア』と『無属黒剣・ノワール』だったっけ・・・？」

「・・・正解だ。・・・それでな・・・、そのうちの一本と思われるものが今、見つかった・・・！」

「えっ!？」

「・・・オババを呼んできてくれ・・・。それが本物の『ノワール』だったら・・・所有者としての資質を試されていることになるんだ・・・。・・・俺が・・・！」

「う、うん!」

アイリスは走り出していった。

【我を見し者は・・・お前か・・・】

「誰だ!？」

何処からか聞こえた声にスバルは臨戦態勢になる。

【お前の前にいる・・・】

「俺の前・・・お前か！」

【我が名はノワール・・・。所有者を求めし黒剣だ・・・】

「お前が・・・『無属黒剣・ノワール』か・・・！」

スバルとノワールが対話していた。

端から見れば奇妙極まりないが。

【お前には・・・我の所有者たる素質がある・・・。我が試練、受けるか・・・？】

「・・・内容によるが・・・」

【我が試練・・・『最愛の者を散らすべからず』とだけは言っておこう・・・】

「『最愛の者』・・・、アイリスのことか!? 『散らすべからず』

ってことは・・・殺すなということなのか!？」

【我は命を散らすなどとは言っておらん……。命意外にも易々と散らすべからぬ物があるであろう・・・】

「他に・・・？」

【・・・分からぬようだな。・・・『乙女の純潔』だ……。ただ・・・有無を言わさぬが・・・な。】

ノワールが言った(?) ことに顔が赤くなるスバル。

「じゅ、純潔って・・・おい・・・／＼／＼」

【そこまで異性に耐性が無い様だな……。安心しろ、我が試練、命までは取らぬ・・・つもりだ。】

「つもりとなると・・・、アイリス・・・来るな・・・!他の皆も・・・!」

だが、スバルの祈りも空しく・・・

「スバル、オババいなかった!」

「スバル、大丈夫!？」

「・・・何もなかった!？」

アイリス、プラナ、プリムラが・・・

「待て！来るな！来たら大変なことになってしまう！」
「ほえ？」

スバルが必死に『来るな』と言うが、アイリスたちには届かず、ついに剣のある場所まで来てしまう。

【試練の始まり・・・だ。】

ノワールがそう言った瞬間・・・

ハラリ・・・

「っ！！！／／／」
『・・・／／／っ！！！／／／』

突如三人の服の中心に一筋の線が入り、それをきっかけとして・・・

服が脱げたのだ。

『いやああああああっ！！／／／』

「待て！これが何の試練となるって言うんだ！？明らかにこれは問題があるだろうが！いや、寧ろこの試練に耐えた奴がいるわけがないだろう！こんなことになるんだったら！」

スバルがノワールに徹底抗議。

【これだけでは我が試練と成り得ぬ……。】

スバルの抗議を無視し、ノワールはさらに……

バチッ！

『あっ……』

三人に何かをし、その三人は誰ひとり違^{たが}うことなく気を失う。

「おい！彼女らに一体何を！？」

【本当ならば真に愛する者だけなのだが……その者らはお前に好意を抱いている。故、この試練中のみの呪いを掛けさせてもらった。
】

「試練中のみの……呪いだと！？」

スバル、驚愕。

【そうだ。その者らは目覚めた瞬間、己に眠りし欲に溺れ、お前に向かって来る。その者らの誘惑に三刻耐えれば我はお前を所有者と認めよう・・・】

「欲って・・・何のだよ!？」

【・・・独占欲、性欲、隷属欲・・・おおよその三欲が襲うだろう・・・】

「・・・隷属欲がよく分からないんだが・・・？」

【隷属欲は・・・『お前に支配されたい』、『好きに使われたい』などだ。】

「うっ・・・」

「プリムラ!？」

スバルがノワールと話していた時、プリムラが最初に眼を覚ました。

「何ともないか!？」

「大丈夫・・・。途中から話を聞いていたけど・・・、スバルにエッチなことをしたいとかそういう気持ち、一切感じないから・・・」

「本当に大丈夫みたいだな・・・」

「・・・氷雪武装展開・・・!」

プリムラは自分の身体に氷の鎧を展開した。

「・・・これで恥ずかしくない・・・／＼／＼」

【ほう・・・我が呪いに自我を失わぬ者がいるとは・・・】

「私は・・・今もスバルが好きだけど・・・今の私の使命は！スバルとアイリスを守ることだ！」

【成程・・・なら、その二人の欲に勝てるのか？】

ノワールがそう言った瞬間・・・

「ん・・・う・・・」

アイリスとプラナが同時に眼を覚ました。

その眼はスバルを向いていた。

「お、おい、アイリス？プラナ？」

「スバル・・・今の二人は危険だ・・・。できる限りスバルを護るけど・・・一人はスバルを襲ってしまうかもしれない・・・」

「・・・いや、俺もできる限り抵抗してみせる。ここに気付いた俺が悪いんだ。」

そう言ったその時、スバルは静かに眼を閉じた。

（プリムラ・・・そっか、瞑想をして二人を意識の端に追いやる訳なんだ・・・）

そのスバルの行動に納得したプリムラ。

「・・・二人とも・・・！スバルの許に行きたければ・・・私を倒してからにしろ！」

眼がトロシとして全く焦点が合っていないような二人にプリムラは勇んで啖呵を切る。

が。

ダッ！！

「速い！？」

二人の意外な速さに驚くしかないプリムラ。

そしてそのままプリムラの許にまで辿り着き・・・

「くうっ・・・ここから先へは行かせない！（ガっ！グイッ！）え
？」

立ち塞がったプリムラを引っ掛け、スバルの許に到達してしまった。

急ブレーキをかけた反動でプリムラは地面へと放り出された。

「うわっ！（ドサッ！）・・・かはっ・・・」

（スバル..プリムラがやられたみたいだが・・・俺は今彼女を心配
している余裕は無い・・・）

プリムラがやられたことを心配できないと諦め、瞑想に励んでいる
スバル。

「ねえ、スバルう、私とエッチなことしようよお……／＼」

（スバル…無視だ無視……瞑想瞑想……聞いちゃダメだ聞いちゃダメだ……）

「スバルう、私のおっぱい好きにしていよいよお？」

（スバル…知らん！今回ばかりは無視させてもらう。皆を傷つけるわけにはいかないから……）

アイリスとプラナが両側から胸を押しつけるように抱き着いた。

更にスバルを誘惑しようとしている。

それに対しスバルは瞑想を続け、意識を蚊帳の外に向けていた（きつちりと突っ込みは入っていたが）。

プリムラが気絶し、アイリスとプラナがスバルに迫り始めて一時間

が経過した。

（スバル・・・一時間が経過したか・・・。三時間が長く感じる・・・）

スバルは時間の経過に焦りを覚えていた。

なぜなら・・・

「スバルうゝ！私にえっちなこととしてよおゝ！」

「ダメえゝ！私とおゝ！」

アイリスとプラナの迫り方が異常に過激になってきたからだ。

更に・・・

（スバル・・・やばい、眠気が・・・）

瞑想ばかりしていたら、睡魔が襲ってきたことにも起因していた。

（スバル・・・寝るわけにはいかん・・・！寝たら・・・何さ

れるか分からない・・・!)

スバルが睡魔と格闘していたら・・・

「スバル!私を抱いて!」

「ぶっ!」

アイリスの爆弾発言に思わず吹き出してしまったスバル。

「げっほ!げほっ!ごほっ!(い、いかん!流される所だった!)」

むせかえすも冷静さを取り戻そうと必死になっているスバル。

「あ、アイリス!ずるい!私我先い!」

「ダメっ!私が!先なの!私がスバルの赤ちゃん産むの!」

「(ゴン!)」

アイリスの『赤ちゃん産む』発言で頭を思い切り床に強打したスバル。

「う、うう・・・ん・・・」

スバルが頭を打ち付けた音でプリムラが目を覚ました。

「あっ！スバル！なにもされてな・・・い・・・」

慌ててスバルの心配をするが、途中で口ごもってしまったプリムラ。

その理由は・・・

スバルが頭を押さえて蹲っていたからであった。

「す、スバル！？大丈夫！？」

「あ、アイリスのやつ・・・思い切った爆弾発言やりやがった・・・！」

「ば、爆弾発言！？」

プリムラが爆弾発言の意味をわかりかねていたら、アイリスとプラ

ナの言い争いが更に激化して聞こえてきた。

「ダメなのぉー！私がスバルの赤ちゃんをー！」

「ちっ、違うの！スバルの赤ちゃんを産むのは私の夢なんだから！」

「・・・（ダバダバダバ）」

「ぶっ、プリムラ！？」

「・・・スバル・・・この話・・・、女の私にでも・・・刺激が
よ、つよ・・・（バタッ）」

「プリムラ！？おい、大丈夫か！？」

「スバル・・・後一時間半・・・頑張ってね・・・」

「・・・プリムラが倒れた・・・」

二人の『赤ちゃん』発言にダウンしたプリムラを安全圏に逃がして
自分は壁に顔を向けて再び瞑想を始めた。

経過時間、一時間半。

そして、残り時間が残り30分となった時・・・

『スバルっ！』

アイリスとプラナが同時にスバルに向かって声をあげた。

スバルは一切の返事をしない。

（スバル・・・大体欲の内容がわかってきた・・・。性欲はそのまま、独占欲は俺の子を産みたいということがいい例、隷属欲は・・・なんだ？それだけは未だにはつきりとしなが・・・。いや、自分を好きにしている、ということが該当しているのか・・・？）

ただ、欲についての自分の見解をまとめていた。

『ねえスバル、お願いだから私の話聞いてえ？』

二人がまたスバルに抱き着くが、スバルは全くの無視。

『・・・私、赤ちゃん欲しいの・・・／／』

（スバル・・・知るか。俺がもしそういう行動とったら即犯罪だろうが。）

スバルは冷静に対処していた。

（スバル・・・いくら俺が好きなの相手の頼みだっつってもな・・・年齢的にも倫理的にも大問題だろうが・・・。あのスケベならお構いなくとりつかれて殺されてるわな・・・）

「ぶえっくしよおいつ！」

「あ、アル？どうしたの大きなくしゃみして・・・」

「ずずっ・・・誰かが俺の噂してんな・・・？」

「・・・噂でくしゃみが出るの？」

「・・・知らね。」

（スバル・・・後1分！これを凌げば呪いは解けて俺は助かるはずだ！こんな理不尽な試練から解放されて！）

スバルがついうっかりと気を抜いてしまったその瞬間だった。

ぐら・・・

「・・・？」

自らの身体が急に傾いた感覚を感じたスバルは、疑問を感じていた。

が、どうにか踏ん張り留まり、倒れることは無かった。

そしてスバルが眼を開いたその瞬間・・・

【・・・我が試練、よくぞ耐えた。今後、我が主はお前だ。】

「主主と言ってもな……。お前はこんな試練しかできんのか！？
こんな倫理的にも人道的にも年齢的にも問題だらけのこんな試練
か！？」

【・・・今、三人の呪いを解いた。】

ノワールがそう言った瞬間・・・

「きゃああああああ！わ、私、何で裸でスバルに抱きついている
の！？あ、あれ！？何言ったのか記憶がないんだけど恥ずかしい
って感じるのは何で！？」

プラナが急に隠すべきところを隠して蹲った。

「・・・プラナは効果が消えたか……。 (クイツ) ……アイリ
ス？」

アイリスがスバルの袖を引っ張り何かを伝えたそうにしていた。

「どう・・・したんだ？そんな切なそうな目をして・・・？」

「あのね・・・スバル・・・／／／」

顔が真っ赤と言いつわすのには不向きだ、というくらい恥ずかしそうにもじもじしながら・・・

「ホントのお願いなんだけど・・・、私・・・私・・・／＼／＼」

「・・・嫌な予感しかない・・・」

「・・・スバルと私の赤ちゃん欲しい・・・／＼／＼」

スバルの予感、的中。

「おまつ!？」

【ふむ。この者は我と対をなす『聖剣を手にする』条件をいち早く達しているのだな・・・】

「え、ちょ、ま、はあっ!？それって『誰かを好いている純潔守りし乙女』じゃないのか!？」

【否。条件は『好きな人を真に想い、その者だけに散る覚悟持つ乙女』だ。】

「ち、散る!？」

【・・・主にとって最も安全な言い方をすれば、『己の身に赤子を宿す』ということだ。純潔を守り続ける必要は無い。】

「・・・（フラァ・・・）」

「す、スバル!？」

スバルはノワールのたった一言でそのまま失神してしまった。

そして結局、アイリスもプラナも全身裸の為にろくに動くこともできず、どうにか意識を取り戻したプリムラが氷雪武装のままで自宅に戻り、ノブを呼んできた為三人の服は無事元に戻った。

スバル宅。

「す、スバル・・・、その黒い剣・・・何？」

「・・・伝説の剣、『無属黒剣・ノワール』だ・・・」

『ということは！もう一対の剣を手に入ればはれてスバルのお嫁さんに！？』

娘達が一斉にスバルに迫ってきた。

「・・・いや、条件があったが・・・、どうやら無意識のうちにアイリス、イシア、レノシアは条件を満たしていたらしい・・・」

『条件（ってなんですか）！？』

「それは・・・その・・・／＼／＼」

「アイリス！あなた、条件わかってるんでしょ！？教えなさいよ！」

「ら、ライラ！？何でライラがそんなに積極的なの！？」

「そうよ！条件を教えてよ！」

全員がスバルとアイリスに押し寄る（その中には聞いていたであろうプラナもいる）。

「言えないよお！だ、だって、い、言うの・・・ものすごい恥ずかしいんだもん！というよりもスバルにしか言えないことだもん！」

「じゃ、じゃあ、あの欠片で一斉検査してみたら？」

「そうか！それなら無意識のうちに条件が満たされているか分かる！」

そしてその欠片をスバルが持って来て、もう一度全員検査（持たせて）した。

結果。

OK…アイリス・シロン・レノシア・サンナ・イシア・キルティス・セレナ・プラナ・リリス

NG…ナコル・ライラ・ダイアナ・カトレア・チェリムル・クロス・
ラキュナス

検査対象外…ウィリア・プリムラ・『アレックスが好き』組・『カ
クサスが好き（一応アスカ含む）』組・クリム・ローズ・カナ・デ
イルカ・カンナ・ラン・ミズカ・リシア

検査基準…スバルが好きかどうか。好きならば測定、そうでなけれ
ば（『お兄ちゃんとして好き』も含む）測定しない。ただし、ウィ
リアとプリムラは自己申告で辞退している

「・・・軽率だった・・・」

「だね・・・」スバルは目の前の光景を見て後悔していた。

目の前に映っているのは、ぐったりしている『NO』判定を受けた
娘達。

全員顔が蕩けてしまっている。

「・・・皆、運搬を手伝ってくれないか・・・？」

「わかった・・・」

「あ、あの！？ろ、ロズウェル君が鼻血の海に沈んでいます！」

「今回はカトレアがこんなだから治療不可能だ！鼻にティッシュか何か詰めておけ！」

「わ、わかりました！」

男性勢でぐったりした面々を運び、そして疲れ果てた男性陣（スバルは一番疲れていた）はそのまま自分の部屋で眠ってしまった。

報酬。

入手

伝説剣『無属黒剣・ノワール』

クエストクリア

クエスト未受注のため無し。

その他

『聖剣・ヴァルキュリア』の本当の条件判明。
アイリスの本音的願望（子供が欲しい。スバルとアイリスの二人の
血を持った）、判明。

第94話 『無属黒剣・ノワール』の試練、対する相手は自らに思いを寄せし

今回は色々話の鍵がありました。

同時に、アイリスの本能的な願いが明らかに・・・

次回は新たな恋の芽生え・・・

お楽しみに！

第95話 新たな恋の芽生え（前書き）

95話です！

今回、ついにスバル争奪戦争から離脱者が！

では、どうぞ！

第95話 新たな恋の芽生え

「・・・あの・・・スバルさん・・・」
「・・・カトレア、どうした？」

カトレアが深刻な顔つきでスバルに相談を持ちかけていた。

カトレアがスバルに相談を持ちかけている理由とは、前日に遡る。

たまたマスバルがカクサスとアレックスと三人でクエストに行ってしまった時。

「・・・あ、雪山草が・・・」

カトレアの部屋にあった雪山草のストックがなくなってしまったのだ。

「・・・摘んでこないと・・・。だけど一人じゃ怖いですし・・・、
そうだ、ラネッサ君に頼んで一緒に行ってもらいましょう！」

カトレアはラネッサと一緒に行ってくれるか頼みに行った。

「え、僕が・・・カトレアと雪山へ？」

「そうですけど・・・ダメですか？」

「ううん？今ちようど暇だったし・・・」

「じゃあ行きましょう！」

「そうだね、日が傾く前に取ってこないかね。」

お互い医学を志している者同士、あつさりと了承した。

クエスト…雪山草摘み

開始。

「そう言えばラネッサ君も私と同じで医学を志している、と聞いたのですが・・・」

「そうだよ？でも、僕はまだまだ未熟だし、カトレアに比べればまだまだだから。」

「そ、そんなことは無いですよ・・・／＼／」

純粹に褒められて顔を赤くするカトレア。

「僕からしてみれば先輩のような存在だから・・・」

「あ・・・う・・・／＼／」

完全に挙動不審になってしまったカトレア。

（カトレア・・・ど、どうしましょ・・・スバルさんと同じ感じが・・・いえ、もっと・・・ドキドキしてます・・・／＼／）

そして雪山に入って行った。

「この辺はもともと僕の縄張りみたいなものだったから・・・今はその主だった僕がいないわけだから危険だよ。気を付けてね。」
「は、はい・・・／＼／＼」

カトレアとラネッサはそれぞれ分かれて雪山草を摘み始めた。

カトレアはただ一人、雪山草を摘んでいた。

（カトレア・・・ど、どうしましょう・・・。ら、ラネッサ君の顔を見たらドキドキして・・・、わ、私は・・・スバルさんが好きなのに・・・ど、どうすれば・・・。）

カトレアがおどおどしていたら・・・

ウオッ！ウオッ！

「ブランゴ！？」

ブランゴがいつの間にかいたらしく、カトレアは囲まれていた。

「わ、私・・・どうなってしまおうんですか・・・！？」

ブランゴたちの眼に怯えてしまっているカトレア。

彼らの眼は殺意に満ちていた。

「やつ、やめてええええつー！！」

カトレアは迫り、飛びかかろうとしているブランゴたちに制止の意

を込めて叫んだ。

「・・・カトレア、一人で大丈夫かな・・・。今ここに来るまでに僕は三度ブランゴに襲撃を受けたから・・・」

血に染まってしまった己の手を見て、カトレアを心配したラネッサ。

「ホントは・・・こんなことはしたくないんだけどね。戦いたくないから・・・」

彼は襲ってきたブランゴを壁の方に殴り飛ばし、全部を気絶させていた。

そう言って雪山草の許に辿り着いた時・・・

<・・・えええ・・・>

「カトレアの悲鳴!？」

ラネッサはすぐさま立ち上がり、声のした方に向かっていった。

「い、いや、こ、こないでください・・・っ!」

じりじりと崖の方に追い込まれてしまうカトレア。

ウオッ!!

そしてブランゴがカトレアに飛び込み・・・

「いやあああああ!!」

カトレアが崖から・・・

「危ないっ! (ゴスッ!)」

落ちることは無く、飛び上ってきたブランゴが顔を殴られて吹っ飛んでいった。

「………?」

死んでしまうのかと、そうでなくても衝撃が来るのかと思っていたの衝撃が来ないのに疑問を持ったカトレアは眼を開けて……

「っ!」

目の前の光景に思わず涙ぐんでしまった。

「間に会って……よかった!お前ら……!こんなことをして許されると思っているのか!」

目の前にいたのはラネッサ。

彼はブランゴに声を上げて怒り、彼自身も殺気を放っていたが……

「た、すけて……くれたんですね……?」

カトレアは不思議と、恐怖を感じなかった。

ラネッサはそんなカトレアのお礼の言葉に気付くことは無いが。

「お前ら・・・僕はこんなことはしたくないけど・・・！この人にそんなことをしようとするなら・・・！僕はこの手を穢してでもお前らを殺す！医学を志す者の禁忌を破ろうとしても！」

そして一人、ブランゴの群れに特攻していった。

数時間後、阿修羅を思わせるようなオーラを纏ってブランゴの死体の山の真中にいたラネッサは、そのオーラを消してカトレアの方に歩み寄った。

「さ、帰りましょうか。あ、でもこの手ではカトレアに触れないか・・・」

ラネッサはそう言ってその血に塗れた手を見てすぐに手をひっこめたが・・・

ガシッ。

「・・・その手は・・・私を護ってくれた手なんですよね・・・？
触っていけないことはないはずですよね・・・？」

「えっと・・・それは・・・」

「そんな手に触ってはいけない、なんてことは無いんですよ？」ラ
ネッサの手を握り、涙目になってそんなことを言うカトレア。

「本当に・・・ありがとうございました・・・ひつく・・・」

「あ・・・泣かせちゃった・・・」

「いえ・・・ぐすつ・・・ラネッサ君は悪くないんです・・・」

カトレアが泣き止むまで彼女と一緒にいてあげたラネッサ。

カトレアの心では、感謝以外の気持ちがあった・・・

そして帰ってきてその翌日。

「はぁ・・・」

カトレアは自分の部屋で溜息をついていた。

彼女の心の中である葛藤が生まれていた。

（カトレア…私は・・・スバルさんとラネッサ君・・・どっちを好きになればいいんでしょうか・・・？このままではいけないんですし・・・スバルさんには振られて・・・すぐに他の人を好きになったなんて言う・・・浮気者って言われてしまうかも・・・）

スバルとラネッサの二人が好きになってしまっていたことに対する罪悪感と自分の決断ができないということに葛藤があった。

「・・・気持ちの整理ができたら・・・スバルさんに相談しましょう・・・」

そして、今に至るのだ。

「・・・話の内容は分かった・・・。俺から言えることは一つだけ
なんだが、かなり残酷な気がするんだ。・・・それでもいいか？」

「いいんです。言ってください。」

「今、カトレアが俺に抱いている恋心は『初恋を捨てたくない』と
いう自分の中の気持ちの整理ができていないからあるものなんだ。
そして君の心はラネッサに傾いているだろうしな。」

「っ！」

スバルに心の想いを当てられて焦るカトレア。

「・・・だから言えることは一つだけ。『自分が本当に好きになった人の所に行く。そして自分の想いを告げてみる』と。」
「は、はいっ！」

カトレアは意を決したかのようにスバルの部屋を掛けて出ていった。

入れ替わりでアイリスが入ってきた。

「ねえスバル、さっきカトレアと何話していたの？」

「・・・新しい恋の問題解決・・・かな？」

「・・・言ってる意味がよく分からないんだけど・・・」

「ラネッサに春が来たのさ・・・」

そして、ラネッサの部屋の前で・・・

「・・・よし！」

意を決したようにラネッサの部屋の戸を叩く。

<開いてるよ。>

「あ、あの、か、カトレアです……。お話があって……。きまして……。／＼」

<あ、どうぞ。>

カトレアはラネッサの部屋に入って行った。

「それで、話というのは……」

「あ、あの……。わ、私……。その……。えっと……。／＼」

「わ、私は……。あなたのことが好きなんです！私とつきあってください！！／＼」

カトレアの告白。

ラネッサは言葉を失った。

「・・・ダメ・・・ですか・・・？／／／」

「・・・ダメじゃないよ。僕の方こそ・・・つきあってほしいんだ・
・／／／」

「それじゃあ・・・」

「うん。僕も・・・カトレアのことが好きだから・・・／／／」
「っ！！」

カトレアがまた泣き出してしまう。

今ここに、新たなカップルが誕生した。

それはある一つの危機を乗り越えて生まれた恋で、お互いがお互いを好いていて成立したものだった。

『ええっ！？カトレアがスバルを捨てた！？』

「捨てたとは口が悪いぞ。彼女が新しい恋を見つけたただけだからな。」

「そっか・・・」

「カトレアがラネッサのことを・・・」

スバルが言ったことに驚きを隠せない面々。

「あの二人を俺たちは応援してあげるだけ、野暮なことをするなよ？」

「わかった！」

皆が散り散りになった後、スバルはラネッサの部屋に向かった。

ラネッサとカトレアは・・・

お互いに抱き締め合い、キスをしていた・・・

「・・・二人とも、幸せにな・・・」

そう呟いてスバルはその場を去っていった。

カトレアに助言をしたが、心の底では不安だったスバル。

彼女がもしフラれたりしたら、彼女は自分のせいで心に傷を負ってしまうのではないかと。

報酬。

入手

雪山草大量。

クエストクリア

特に無し。

その他

ラネッサとカトレアのカップル成立。
スバル争奪組からカトレアが離脱、同時にスバルは彼らを祝福。

第95話 新たな恋の芽生え（後書き）

今回、カトレアがラネッサの彼女となりました。

同じ道を志すもの同士、気が合いましたよね。

次回はまたまた朝騒動が！？未開拓湖で新たな出会いが！？そしてスバルは！？

お楽しみに！

第96話 朝の事件と未開拓湖恋愛戦争（前書き）

お待たせしました、96話です！

R115は相変わらずですが、いつもと違って・・・！？

では、どうぞ！

第96話 朝の事件と未開拓湖恋愛戦争

翌朝。

スバルは自室でおとなしく寝ている・・・

はずだった。

「・・・ふがつ!?!」

朝目を覚ました瞬間、彼は口を何かによって塞がれていることに気

付いた。

「……ぶはっ!!……毛布……!?……どうにか顔を動かしてどかせたが……手が……身体が……動かせない……?」

そしてスバルは身体が動かせないことに気付く。

「……誰かが潜り込んできたか……、俺のベッドに……二人以上……さあ……」

スバルがなぜ潜り込んでいる人数が二人以上だと判断できたか。

簡単にいえば、触られている感覚で分かるのだが、自分の首に腕が二人分回されていることに気付いたからである。

「一体誰が……んっ……」は？」

首を動かそうとした時に声が聞こえ、同時に動きを止めてしまったスバル。

そして、右側がもぞもぞと動き出した。

「・・・スバル・・・、いきなりおしり触らないでよ・・・／／／」

首右側に抱きついていたのはアイリスだった。

「いや、今指一本動かすのがやっとなんだが・・・。つか、なんでここにいるんだ？」

「・・・もん・・・／／／」

「は？」

「皆に取られちゃうって思ったんだもん！」

アイリスが思わず大声を上げてしまう。

彼女はより強く抱きついた為、彼女の胸がより強く押しつけられていた。

「ふに・・・」

「むにゃ・・・」

その声に応じるようにそれぞれ眼を覚ました。

「スバルう・・・おはよおお・・・」

スバルの首左側に抱きついてたのはリリスであり、彼女は起きてすぐスバルに抱き着きなおした。

「おはよお・・・ってああっ！？ずるいよ二人ともお！」

左腕に抱きついてたのがプラナであり、彼女は起きた時の光景に気付いてすぐに抱き着いた。

問題があつたのは右手の方だった。

「・・・アイリス、右手に何か柔らかい感触があるんだが・・・」

「・・・あんなに大声出していたのに誰一人として起きてこなかったのが不思議なくらいだよ・・・」

「は・・・い？」

スバルが恐る恐る右手を見ると・・・

顔を紅潮させた上に呼吸は荒く、衣服が乱れ切って両目がとろんとしてしまっていたセレナがいた。

「い、一体俺は何を・・・」

「私が見たよお？一緒に来たんだけどお、その時にスバルが寝返り打ってえ、セレナの胸を鷲掴みにしたのお。その後にい、ずっと胸を揉んでいたんだよお？」

相変わらずのんびりした口調で説明するリリース。

「はあっ!？」

「ふああああああっ!・・・あっ・・・あっ・・・／／／」

信じられない、といったように飛び起きるスバル。

と同時に、強くセレナの胸を鷲掴みにしてしまった為にセレナはまた大きくよがり艶めかしい声をあげ、力なくスバルに寄り掛かった。

「わ、悪い!」

「い、いいんれしゅ・・・、ひよれひゃひゅまひよひえのひゃひゅひえれひゅひやりや・・・（訳…い、いいんです・・・、これが妻としての役目ですから・・・）／／／、」

「役目も何もないだろうが!？」

だらしなくよがるセレナに一喝するスバル。

「皆！なんで一緒に寝てるの！？一緒に寝てたのは私なんだよ！？」
「むがっ！？」

アイリスが『最初に寝ていたのは自分』というのを主張し、スバルを自分の胸にスバルを引き込んだ。

「違うよお、あれ、違わないけどお・・・、でもでもお、スバルを優しく包み込んであげたのは私なんだよお？」

「あっ！」

「むぐうっ！？」

リリスが慌てて自らが持つ豊満な胸にスバルを引き込む。

「違うの！スバルを癒してあげられるのは私だけ！」

プラナも参戦、三人が己の胸にスバルを引き込み続けた結果・・・

スバルは三人の胸に同時に顔が埋まるという事態に陥った。

「ふあいふいふ！ふいふいふ！ふふあふあ！いふいふあふえふいふあい！（訳：アイリス！リリス！プラナ！息ができない！）」

スバルは必死に胸の間から抗議するが・・・

「スバルを癒すのは私の義務だよ！二人がしているのは癒しじゃないの！」

「違うよぉっ！私の義務なのぉっ！」

「私の役目なの！」

ぐったりと横たわるセレナを尻目に、さらに激化する口論。

「・・・」

スバルは酸欠に陥ってしまった為に気を失っていた。

「おはよう、スバ・・・ちよっと、皆！？スバルが死にかけてるよ！？」

スバルはいつまでも起きてこないスバル達を起こしに来たダフネによって助けられた。

リビング。

「・・・今日は・・・休み・・・、久しぶりに農場へ行くか・・・湖に行くか・・・」

スバルはリビングで悩んでいた。

「・・・農場の手入れをしていないから手入れをしないといけないが・・・新しく農場の近くで見つかった湖の調査もしないといけないし・・・」

「湖行こうよ!」

「そうだよお、湖行こうよお!」

「行こう行こう!」

いつの間にか近くにいたキルティス・リリス・チェリムルが湖に行きたいと主張した。

「・・・それは別に構わないんだが・・・調査だから潜ったりもするんだぞ？」

『うぐっ！』

更にいたアイリスも一緒になって声を洩らす。

彼女らは泳げないのだ。

「・・・そうだ、調査も兼ねて泳ぐ訓練でもするか？今後水中戦が無いとは限らないわけだし。」

『言うんじゃなかったっ！』

家に悲鳴がこだました。

スバルが湖の調査に行くと言った時、ノブがまだ水着を持ってない面々の水着をいつの間にか用意していて、全員で湖に向かった。

また、スバルがセレナの介抱をラネッサかカトレアに頼むが、二人が離れたがらなかったため、結局クリムが残って二人がついていくことにした。

ポツケ農場付近・未開拓湖

「スバル・・・、ホントに水泳の練習するの・・・？」

完全に水に怯えたような顔でスバルに聞くアイリス。

アイリスだけに限らず、リリスやチェリムル、キルティスやランも同じような状況になっていた。

「すぐに、というわけじゃないさ。俺が潜って安全を確認してからやるわけ。」

『ほっ・・・』

スバルが言ったことにほっとする不安組。

「さて、アレックス、ダフネ、周囲の策敵を頼む。俺とカクサスで潜ってくるから。」

「了解した。」

「わかった、僕に任せてくれ。」

「行くぞ、カクサス！」

「了解！」

スバルとカクサスは湖の中に飛び込んでいった。

（スバル…カクサス、右側を頼む。俺は左側を確認するから。）

（カクサス…了解、無茶をするなよ？）

（スバル…お前も人のことを言える口かい？）

（カクサス…否定しない。）

水中で二手に分かれていった。

陸上では・・・

「り、リナト！？何で水着になってるの！？」
「・・・っ！（ドボン！）」

いつの間にか水着になっていた（どうやら中に水着を着てきたよう
だ）リナトが湖に飛び込んでいった。

・・・が。

「だ、誰か、た、助け・・・わぷっ！」

「あ、溺れてる・・・」

溺れた。

「・・・特に何もいないようだな。」

アレックスは見回りを終えて戻ってきた。

「ケガは無い！？」

「大丈夫でしたの！？」

タリス・アルテアがすかさず聞いてきた。

「我は大丈夫だ。問題は水中だな。」

「そうだね……。こっちも何もなかったから。」

「ダフネ……よかった！」

ミズカがダフネに抱き着く。

「スバル、カクサス……。生きて帰ってきてよ……。！」

ダフネも二人を心配していた。

水中。

（カクサス・・・どうやら、こちらは何もないようだ。スバルには悪いが、先にあがるとしよう・・・）

カクサスは湖の中の任された部分を一通り見回り、先に浮上した。

一方スバルは・・・

（スバル・・・うそだろ！？こんな所にガノトトス亜種とラギアクルスがいるとか聞いてないぞ！？）

目の前にいた二匹のモンスターに焦っていたスバル。

二匹はまだ気づいていないため、まだ落ち着いていたが・・・

（スバル…一旦あがって対策を練らないと・・・！）

浮上を始めた時・・・！

くるっ。

ラギアクルス、ガノトス亜種同時に見つかってしまった。

（スバル…しまった、見つかった！？）

慌てて急浮上するスバル。

ラギアクルス達は追いかけてくるような素振りを見せなかった。

「ぷはっ!!」

スバルは湖から顔を出した。

「どうだったスバル!? こちらには何もなかったが・・・」
「海中に・・・ラギアクルスとガノトトスがいた!」
「何だと!?!」

驚きを隠せないカクサス。

「もう一度戻って討伐か捕獲してくる！」

そう行ってスバルは再び潜っていった・・・

一方リナトはぐったりしていた。

(スバル・・・確かこの辺にいた気が・・・っ！いた！)

スバルは再び二匹を見つけた。

二匹もスバルを発見したものの、全く敵意を見せてこない。

（スバル・・・なんだ？一切攻撃してこない気がするが・・・）

近付いてきてはいるものの、速度は殆どなく、ゆっくりと近づいてくる形となっている。

（スバル・・・こいつら・・・一体・・・）

そう思って浮いていたら、ラギアクルスがなんと・・・

（スバル..巻きついてきた!?!）

突然の行動にただただ驚くしかできないスバル。

ガノトトスはその行動を恨めしがって見ていたように感じられた。

（スバル..くそっ!このままじゃ息が・・・!!・・・閃光玉っ!）

スバルは動かせる範囲で手を動かし、ポーチから閃光玉を取り出して目の前で破裂させた。

その時だった。

（スバル…っ！？）

スバルは自分の唇に何か柔らかい感触が感じられたことに驚いていた。

そして目の前には女の子が、更にその横には指を咥えて見ているだけの裸の女の子が・・・

目の前の女の子もまた裸であり、スバルの胸板に彼女の豊かに育った（というか、育ちすぎた）胸が当たっていた。

（スバル…っっっ！っ！っ！）

息苦しくなってきたスバル。

抱きついていた女の子は慌ててスバルを浮上させた。

ザ
パ
ア
ッ！

「スバル！ 大丈夫・・・夫・・・」

アイリスは浮き上がってきたスバルを見て声をかけたが、光景を見て言葉を失った。

（裸の）女の子がスバルを心配そうに抱きかかえていたからだ。

「・・・誰・・・、その子・・・」

アイリス、嫉妬のオーラを出す。

「げほっ！げっほ！溺れ死ぬかと思った・・・」

湖から這い出るスバル。

抱えていなかった方の女の子はそれについてくるように湖から上がってくるが、もう一人の女の子は上がるのに一苦労していた。

直後、ゆっくり上がってきた方の女の子がスバルに抱き着いた。

「だっ、ダメなの！スバルには私がいるんだから！」

慌てて抱きつくアイリス。

「やだもん・・・、私、キスしちゃったんだもん・・・／＼／＼」
『えっ！？』

女の子の発言にアイリス以外の娘達も集合していた。

「き、キスしたってホントなの！？／／／」

「うん・・・／／／」

「わ、私とキスしてえっつ！」

突如実力行使に出たりリス。

「だ、ダメだよりリス！抜け駆けはダメなの！」

「抜け駆けとか関係なしにダメ！いい加減諦めてよ！」

「嫌なの！」

恋愛戦争がちょっと酷くなった。

もう一人の女の子はその光景を羨ましがって見ていた。

戦争がとりあえず一段落して・・・

「・・・さあ、水泳訓練といくか・・・!?!」

「やだあゝっ!!」

「泳げないもん! 泳げないんだもん!」

「浮くことしかできないのおゝ!」

スバルの話に嫌がる娘達。

一方カクサスは・・・

ナデシコとリナトが泳げないことが判明した為、二人の水泳指導をしていた。

「・・・ナデシコは一応・・・、手を掴んでいればバタ足で泳げるようになってるが・・・、リナトは・・・」

カクサスはリナトの手を掴んではいたが・・・

「か、カクサス・・・、は、恥ずかしいよ・・・／＼／＼」

肝心のリナトは顔を赤くしていた。

ナデシコも違うことなく顔を赤くしていたが、彼女は一応手を掴んでさえいれば泳げるようになった。

「リナト・・・、いつまでも恥ずかしがっていたら何もできないぞ？」

「でも・・・でも・・・、恥ずかしいんだもん・・・／＼／＼」

彼女は手を掴むことですら恥ずかしがっていた。

ダフネはミズカと二人きりで泳いでいた。

ラネッサはカトレアと二人きりになって話していた。

アレックスは泳げない二人を差し置いて、アンリに泳ぎ方を教えていた。

ロズウェルは湖の真中に（逃げるように）泳いでいた。

「・・・皆が泳ごうとしないなら・・・、私と一緒に泳ご・・・？」

今まで抱き着いていた女の子がスバルの腕を引いた。

「だ、ダメ！そんなことさせない！」

「じゃあ泳げるようにならないと……。そうしないと私がこの人貫うよ……。？」

「あう……。？」

「というか！水着着なさいよ！」

女の子にダイアナが指摘する。

「……。水着ないもん。元々ラギアクルスだったから……。」

そういつてその子はスバルにひつついた。

その時にその子の胸がムニユン！と形を変えた……

「誘惑しちゃダメえっつ！」

アイリスが慌てて抱きつく。

「二人ともずるいわ！」

ダイアナも少々遅れながらも抱き着く。

「ダメえ〜!!」

リリスまでもが抱き着いたため・・・

「ちょ、待て、それ以上抱き着かれたら・・・、バランスが・・・」

完全にバランスを崩したスバルはアイリス・ダイアナ・リリスとラギアクルスの女の子に抱き着かれたまま湖へとダイブした・・・

ガノトトス亜種だった女の子はその場であたふたしていた・・・

（スバル..しまった、急なことだったから息を吸って・・・なか・・・

・
)

スバルは落ちていく間の水圧で意識を失ってしまった・・・

アイリス達は無論、気を失ってしまっている。

ラギアクルスの女の子はたった一人で全員を引っ張りあげた。

（スバル・・・なんだ？色々ときざかい感づがする・・・）

スバルが眼を覚ますと、先に気付いたのであろうアイリスが膝枕をしていた。

「あつ、気が付いたんだ！」

「・・・なんとかな・・・。全く、何度死にかければ・・・って・・・」

起き上がった時にスバルはあることに気付いた。

「・・・あ、アイリス・・・／／／」

「ほえ？」

「ほ、本当に言いにくいことなんだが・・・／／／」

「なに？」

「水着がずれて・・・胸が丸見えになつて・・・／／／」

「へ・・・？」

アイリスは自分の胸を見た。

「ひやつ、いやん！／／／」

「・・・／／／」

アイリスは自分の胸を慌てて隠し、スバルは眼を逸らした。

「見た・・・よね・・・／＼／」

「すまん・・・／＼／」

「いいの・・・、スバルだったら・・・見られたって・・・。それに・・・／＼／」

「あっ！アイリス！それはダメ！」

「ずるいです！」

アイリスが言葉を言う前に、シロン、ナコルが二人を見つけ、スバルに駆け寄る。

そこで事故が起こった・・・

ガッ！

「ぎゃっ！？」

シロンが石に躓いて転んだ。

その連鎖でナコルも転び・・・

ドスン！！

スバルに倒れてしまい、アイリスを巻き込んだ・・・

「いまだ・・・」

スバルが頭を打ったらしく、呻き声をあげて・・・

「ひあっ!?!?／／／／」

「あんっ!?!?!／／／／」

「んああっ!?!?!／／／／」

アイリス・ナコル・シロンの三人の喘ぎ声が。

状況的に・・・

スバルがアイリスの上に倒れこむ（仰向けで）。

シロンとナコルがスバルに倒れこむ（うつ伏せで）。

結果、アイリスの胸に頭が乗る形となり、ナコルの右胸とシロンの左胸を鷲掴みにしてしまうという形となってしまった。

「わ、悪い!」

「だ、大丈夫です・・・あんっ!大丈夫ですから・・・あっ・・・ん・・・／／／」

「だ、大丈夫・・・だから・・・ふああっ!ああん!／／／」

「す、スバル、う、動いちゃ、あうん!動いちゃめえ!／／／」

「動くなって言われても!とりあえずナコルとシロンは退いてくれ!」

『やらあ!（訳..やだあ!）』

「やだ、じゃない!いい加減にしてくれ!」

スバルの話をまるで無視するかのごとく、三人が同時にスバルを抱きしめる。

それぞれの胸がスバルの動きに応じてムニユンムニユンと形を変える……

三人が力なく倒れこんだりプルプルと震えたりしてもいる。

ちなみにこの光景は、何故か誰にも見られていなかった……

スバルが動けないまま30分が経過した……

「や、やつぱり・・・らめ、これ以上おっぱい揉まれたら・・・うあっ！らめ、きひゃうううう！／＼／」

「らめ、らめええええええ！！」

／
／
／
／

「ふああああああっ！もうらめええええ！！／＼／」

三人が同時にビクン、ビクンと身体を震わせ、ぐったりとした。

それぞれが力なくもたれかかったりしているが、三人とも頬を赤くし、どこか恍惚の表情を浮かべているような状態だった。

「……ぐつたりしているとところ悪いが……退いてくれ……」

もたれかかっている形となつてゐるシロンとナコルを横に軽く転がしてスバルはアイリスの上から退こうと・・・した。

「……アイリス？」

「やらあ・・・、いつひややらあ・・・（訳..やだあ・・・、行っちゃやだあ・・・）／／／」

力こそはないものの、それでも抱きつこうとしているアイリス。

「……今日は……帰るか……」

湖の調査を終え、スバルは三人をどうにか担いで帰路につこうとした。

他の皆は先に帰っていたらしく、スバル達が一番最後・・・というわけではなかった。

「・・・ふう・・・」

女の子が一人、頬を膨らませていた。

「ど、どうした？」

「私だって・・・おっぱい大きいよ・・・？もっと気持ちいいことしてあげられるよ・・・？」

「・・・誘惑ならお断りだ。実際、これも事故だから・・・」

「私じゃダメなの・・・？」

「ダメとかどうかということじゃなくて、色々あるだろ？」

「・・・私じゃ・・・ダメ・・・？」

なおも迫ってくる女の子。

「ちょ、まっ・・・」

「・・・／／（ふにっ）」

「はあっ!？」

女の子がスバルの手を掴んで自分の胸に押し付けた。

「あなたのことが好きだから・・・こんなにドキドキしてるの・・・
分かる・・・？／／／」

実際、スバル自信にもその女の子がドキドキしているのが分かる。

現に、彼女の鼓動がはっきりとその手に伝わっているからである。

「ね・・・？／／／」

「ね、と言われてもな・・・」

その女の子は頬を紅潮させ、スバルを見上げる形で言った。

「好きだって言われてもな、俺にはもう、彼女が・・・」

「あなたは・・・一人ぼっちに等しかった私を殺そうとしなかった・
・・・。そんなあなたの優しさに・・・私は・・・惚れたの・・・／
／／」

「・・・本心では捕獲が無理なら討伐、と考えていたんだが？」

「それでもあなたは・・・私を殺そうとしなかった・・・。私を受
け入れてくれた・・・／／／」

女の子はそう言って更に迫る。

既に密着している。

「受け入れたって・・・なあ、おい・・・」

「こうやって抱きしめさせてくれた・・・／／／」

女の子はスバルにもたれかかるかのように体を寄せた。

「お、おい!？」

「私のこと・・・好きにして・・・良いよ・・・／／／」

「・・・」

女の子の発言に黙り込むスバル。

内心は・・・

（スバル・・・どうすればいい？この状態を打破する打開策を考えない・・・このままだと・・・俺は・・・どうなるか分からない・・・!）

そして、スバルが口を開いた。

「・・・だったら、一旦家に帰ろう。俺一人じゃ皆を担いで帰れるかどうか分からないしな・・・」

「うん・・・」

スバルがアイリスを抱っこし、更にシロンをおぶっていき、女の子がナコルをおぶっていった。

スバル宅・・・

「あつ、お兄ちゃん！お帰り！」

ランがトテトテと走ってきた。

「走ると転ぶぞー。」

「大丈夫。コケな・・・ふみゆ！」

言った矢先に転んだ。

「ぐすっ・・・」

「ほら、泣かない。」

「うん・・・。」

スバルが宥め、それでどうにか立ち上がったランはスバルの元へトコトコ歩み寄った。

そしてそれぞれの部屋にアイリスたちを寝させた後、スバルはリビングへ向かった。

その夜。

「そろそろ・・・、放してくれないか？」

「や。」

「やじゃなくて・・・」

リビングのソファ―に座った途端、ダイアナが抱き着いてきた。

「・・・とりあえず聞かないといけないことは聞かないとな・・・」
「あの子たちの名前？」

抱きついたままのダイアナが聞く。

「・・・名前は・・・キャリー。」

ラギアクルスの女の子が自分の名を告げる。

が・・・

「・・・／／／」

もう一人の女の子は今まで何も話さない。

「紙か何かが・・・いるか？」

「・・・（コクッ）」

その子は一つ頷き、スバルから紙を受け取った。

「私はクルス、といいます。」

「クルス・・・？」

「今まで誰にも名をつけられませんでしたか・・・自分で名付けたんです、人やモンスター、同じガノトトスを殺したことへの償いの意味で・・・」

「償い？」

「口を閉ざしたのも・・・そのためなんです・・・」

「・・・自分の罪を・・・自ら償う・・・ということね・・・」

「はい・・・」

「・・・己の罪を認めるのはいいと思う。だが、我としてはその償いの意図をはき違えている気がするな・・・」

「え・・・？」

「己の罪を償う、ということは、死んだ者の分も生きる、ということとで、自らそれで縛りをつけるということではないぞ・・・」

「・・・」

「皆と共にその罪、償っていきましょう・・・？」

「ふ、え・・・ふええええええ・・・」

「お、おい!？」

クルスはアレックスの言葉に泣き崩れてしまった。

「ふえええ、ふえっ、えぐっ、うっ、ひぐっ・・・」

「・・・今までこのことを重荷にしていたんだ・・・」

スバルが思った事を言った。

「泣きたいだけ泣けばいい。落ち着くまで一緒にいよう・・・」

アレックスの言葉を信じてなのか、わんわんと泣き続けるクルス。

スバルは、『ここにいるのは無粋だ』と思い、自分の部屋に向かった。

キャリアはいつの間にかいなかった。

・
・
・
が。

「・・・何故ここにいるんだ・・・!？」

自分の部屋に着いてからのスバルの第一声だった。

部屋にはアイリスとキルティスとキャリーが物凄い言い争いをしていた。

「スバルは私のおっぱいじゃないと気持ち良くならないの！」

「そんなことないもん！私のじゃないと！」

「敏感な方が気持ち良くてできる！」

「お前ら・・・一体何の言い争いを・・・？」

スバルが半ば呆れたように聞いた。

「スバル！私のおっぱいの方がいいよね！？」

「知らん！そんなことは一切知らん！」

「違うよね！？私のだよね！？」

「だから知らんと言ってるだろうが！」

「私のおっぱい触っていた時にドキドキしてたよね・・・？」

「記憶がない！」

スバルは（ある意味無駄な）言い争いを回避しようと色々言っていた。

「だったら！今決めようよ！誰のが一番スバルを気持ち良くできるか！」

「まずい！」

スバルはアイリスの発言が聞こえた瞬間、逃げだした。

玄関。

「・・・スバル？」

走ってくるスバルを目撃したチェリムル。

「すまんチェリムル！しばらく姿を眩ますつもりだから！」
「え、ちょっと!？」

チェリムルが言い終わるより先にスバルはドアを開けて逃げ出した。

その日はアイリスたちが来ないことを祈ったスバルが家に帰り、部

屋に誰もいないことを確認して眠りについたスバルであった・・・

報酬。

入手・クエストクリア

クエスト未受注のため無し。

その他

キャリアー。

クルス。

胸論争勃発。

第96話 朝の事件と未開拓湖恋愛戦争（後書き）

今回はキャリー・クルスの紹介です。

キャリー

ラギアクルス雌

身長154cm。

見た目14歳。

胸のサイズはFー。

髪は碧色で腰に掛かるほど長い。初めてスバルと会った時はそのままだったが、その後はサイドポニーにしている。

性格は一途で積極的、かなり従順。

スバルに惚れたのは単純に優しいところに惹かれただけ。

名前の由来はカーネーションの学名より。花言葉は『熱愛』。

クルス

ガノトトス亜種雌。

身長153cm。

見た目15歳。

胸のサイズはC。

髪は翠色で背中中央くらいの長さ。

性格は純情、はっきりするところははっきりする。

アレックスに泣きつくまでは口を閉ざしていた。理由は同種殺し。

スバル達を羨ましがって見ていたのは、単純に恋がしたかっただけで、スバルに惹かれたわけではない。

料理は上手。

名前の由来は、何処かの国にて『十字架』を意味する言葉。

以上です。

次回はスバルにライバル登場！？そして今まで気を失っていた子が目を覚ました！

お楽しみに！

第97話 朝騒動、そして見（まみ）えし凍牙の好敵手（ライバル）（前書き）

97話です！

今回も相変わらずR-15が入っております・・・

今回、またようやく採用パターンです！

そして、スバルのフルネーム公開！

では、どうぞ！

第97話 朝騒動、そして見（まみ）えし凍牙の好敵手（ライバル）

スバルが大逃走劇を行ってからその翌日。

（スバル・・・まだ夜か・・・？視界に光が・・・）

スバルは未だ眠っていた・・・

が。

ふにゅっ。

「んっ・・・／＼／＼」

（スバル・・・なんだ？手に何か柔らかいモノが・・・？何か・・・人の肌みたいなの・・・肌！？）

スバルは手に触れているモノに人の肌のぬくもりを感じ、慌てて眼を覚ました。

「んふふ・・・おはよ・・・スバル・・・／／／」

目の前にいたのは、全裸の（ここ重要）アイリスだった。

しかも彼女はスバルの上に四つん這いになっているという、明らかに誘惑していることが分かる体勢だった。

「あ、アイリス！？・・・ということは・・・俺が今触っているのは・・・」

「私の・・・あん・・・おっぱい・・・なの・・・ひあっ！／／／」

今一度改めてアイリスを見たスバル。

彼女は涙目になっていた。さらに小刻みに震えており、力尽きて倒れこむのも時間の問題だということが窺えた。

「・・・いつからこうしていた・・・？」

「スバルが・・・んっ・・・眠ってから・・・ふああ・・・ずっと・・・／／／」

「ずっと！？（ムニユウツ！）」

「ふあああああっ！！らめええ！強く握っちゃらめええ！！」
「あ・・・悪い・・・」

アイリスの言った内容に思わず手に力を入れてしまい、アイリスが艶めかしい声をあげ背中を仰け反らせた後、へたりとスバルの上に倒れ伏した。

「アイリス・・・一体何故・・・？」

「らって・・・、しゅぼりゅがあ・・・きもひいいひゃとおもつれ・・・（訳..だって・・・、スバルがあ・・・気持ちいいかと思って・・・）／／／」

「気持ちいいと言われてもなあ・・・知らんし。」

「・・・うう・・・（むにゅん）／／／」

スバルにひつつくアイリス。

その時に彼女の胸がスバルの胸板に当たった。

「あ、アイリス!？」

「・・・きもひよくにゃい・・・？わらひのおっぴゃい・・・やわらかにゃいの・・・？（訳..気持ち良くない・・・？私のおっぱい・・・柔らかくないの・・・？）／／／」

尚も迫るアイリス。

（スバル・・・何かに焦っているのか？今までのアイリスには全

く考えられない行動ばかりだから・・・。つか、こんな大胆な子だったか？ここまで淫らな子だったか？)

アイリスが何かに焦っていることを考えるスバル。

ちなみに、彼女が焦っていることは当たっているのだが・・・

焦る原因が自分だということには全く気付いていなかったのだった・

一方リビング。

「アイリスとスバル・・・、起きてこないっすね・・・」

いつまでも起きてこない二人を心配するクリム。

「私が起こしてくる・・・」

「あっ、私も！」

「私もおう。」

「私も行く！」

キャリーを筆頭にキルティス、リリス、チェリムルが起こしに行くと主張した。

その頃の二人は・・・

「ね・・・、スバル・・・、キス・・・して・・・？」

いつの間にか呂律が回るようになっていたアイリスがスバルに抱き着き、キスを迫っていた。

「よし落ち着けアイリス。一体何がどうなったらこうなるか説明してくれ。」

「説明は後・・・。それよりも・・・。」

一旦落ち着かせようと目論むものの、全く意味を成さなかったこと

にちよつと愕然とするスバル。

運よく誰かが助けに来ることを祈っていた。

せめて、カクサスカアレックス、ダフネの誰かに・・・と。

だが、彼の望みは奇しくも碎かれた。

「スバルうゝ、朝だよおゝ？起きてえゝ？」

（スバル…この間延びた声は・・・リリース！？）

リリスがドアの前に来たことに狼狽を隠せないスバル。

（スバル…この状態を見られたら何をされるか・・・！？）

焦りは更に募る。

「ちょっと待ってくれ！今起きたばかりだから！」

スバルは今起きたことを主張した。

が・・・

「・・・今の声・・・今起きたんだとしたら・・・はつきりし過ぎ
てる・・・」

キャリーがこの事実気付いてしまう。

「誰か・・・いるんだ!」

「スバルっ!?!」

キルティスがドアを蹴り破った。

「・・・」

一瞬にして空気が重くなる。

「・・・なんで・・・」

その空気を払拭したのはキルティスだった。

「は?」

「なんで私のおっぱい揉んでくれないの!?!」

突如、キルティスが上半身裸になり、豊満な胸を思い切り揺らした。

「ちよっ!?!キルティス! 恥ずかしくないの!?! というか、突っ込むところそこお!?!」
／／／

真横で脱がれたチェリムルは困った。

が。

「スバルにだったらいいんだもん！おっぱい見せても揉まれても！」

「わ、私だってえ！」

リスも負けじと服を脱ぎ、在り得ないほどに育ったその胸を惜し気もなく曝した。

「・・・私だって！」

そしてキャリーも服を脱ぎ・・・

「ちょっとみんな！？ホントに恥ずかしくないの！？？」

この中で唯一の常識人だったチェリムルが制止を呼び掛けた。

だが、そんな制止も全く蚊帳の外で・・・

「私のおっぱいは柔らかいんだよ！？」

「私のは形がいい・・・！」

「私のは一番大きいよお？」

「私のは一番スバルの手に馴染んでるもん！」

激化した論争。

「・・・お前ら・・・そんな論争は俺のいないところでちゃんと服を着て・・・」

『スバルの為の論争なの（お）！！』

当の渦中の本人の話も聞き入れられない。

「あっ！じゃあスバルに決めてもらおうよ！実際に揉んでもらってさ！」

「俺はもう行く！クエストもあるから！」

そう行ってスバルは部屋から出て、足早に家から出た。

クエスト…プライドをかけた戦い

開始。

「久々の雪山・・・、見慣れないモンスターとティガレ・・・」

スバルはどこか底知れぬ不安が頭の中をよぎっていた。

「ご主人、顔色が優れないみたいニャけど・・・大丈夫ニャ？」

「何か色々と不安があつてな・・・」

スバルはノブを連れ、雪山を登っていた。

「・・・だが、受けたクエストを断るわけにはいかねえよな、『相棒』？」

「・・・そう言うことね。了解、行きますか！スバル！」

スバルのノブに対する『相棒』宣言。

この発言の意味する所は、『主従関係を一時的に捨て、お互いを戦友として扱う』こと。

ノブがスバルのことを『ご主人』と呼ばなかったこともこれに起因する。

雪山内部。

「・・・なあ、ノブ・・・」

「どうしたの？ スバル・・・」

「帰ったら、お前の嫁探しでもするか？」

「・・・頼むね。僕ももう、結婚してもいい時期だし・・・」

「・・・人になって、か？」

「今まで何度もスバルの閃光玉の光を浴びて人になってないじゃん！
僕はまた特別なモノになってるんじゃないの？」

「だろうな。・・・お、洞窟を抜けるぞ・・・！」

スバルとノブは洞窟を抜け、銀世界に出た。

彼らの眼先にいるのは・・・

威嚇をしているものの、虚勢としか見てとることのできないティガ
レックス。

その威嚇を冷静に受け流している白いティガレックスに似たモンス
ター。

「・・・今のうちに眼を潰すっ!!」

スバルは持ってきた閃光玉を同時に4つ投げた。

「勿体なっ!」

ノブが半ば呆れたかのような声で言う。

その瞬間。

尋常でない量の光が辺りを包みこんだ。

そして光がはれ・・・

白いモンスターとティガレックスはそれぞれ人となっていた。

「・・・嘘だろ!？」

「・・・オイラも嘘だと信じたいよ・・・」

目の前の現実には驚きを隠せないスバルとノブ。

「・・・誰だ、俺と同等の力を持つのは・・・」

そして、その先の方から低い声が。

その相手はスバルの実力を見切っていた。

「・・・この気・・・。出来る!」

スバルにもその相手の実力を窺い知れた。

「・・・オイラは・・・あの子を助けに行くかな?」

ノブはその隙に気を失っている女の子を安全圏に避難させる為に動いた。

「・・・ノワール、属性変更。『氷刃』！」
【了解した・・・】

ノワールに氷属性を纏わせ、スバルはノワールを抜く。

相手もそれに合わせて剣を抜く。

「お前の名は何だ・・・？」
「・・・俺はスバル。スバルⅡフロストエッジだ！お前は！？」
「俺はシディアⅡスノー。ベリオロスだ・・・」
「・・・凍牙のモンスター・・・か・・・」
「『氷刃』・・・」

お互いすでに臨戦態勢。

「行くぞ！シディア！」

「ああ・・・、いつでも来い、スバル！」

そして、二人の剣が交錯した・・・

「うわーうわーうわー、すごいもの見てる気がする・・・」

ノブは女の子を安全圏に避難させきって、二人の戦いを見ていた。

スバルが横に薙ぎ払おうとすれば、シディアは己の剣でその軌道を

逸らす。

シディアが突きを繰り出せば、スバルはそれを峰で受け止める。

お互い、一進一退の攻防が繰り広げられている状態だった。

「・・・しかも、二人とも剣劇が速いのなんのって・・・」

ノブはそれをただ見ているだけだった。

「・・・なかなかやるな！」
「そっちこそ・・・なっ！」

実際、その剣劇の中でお互いに語りかけているという凄い状態ができています。

「・・・もう既に30分戦った、もうそろそろ決着といかないか！？」

「いいだろう、決着と行こう！」

お互いに距離をとり、間合いを詰める。

「・・・『絶氷龍牙』！」
「『氷碎牙刃』！」

お互いに氷属性の技を放つ。

その技はぶつかり、そして威力に耐えかねず・・・

弾けた。

「・・・なかなかやるな・・・」
「・・・ああ、お前もな・・・」

そして二人同時に雪の上に倒れた。

「って、ええっ！？ちょっと待って！？オイラ一人じゃ運べないよ！？」

「悪い、その子をベースに連れてから俺たちを頼む・・・」
「わかったよ・・・。まったく、バトルマニアめ・・・」

ノブが悪態をついて女の子を運び、そしてスバル達を運んでいった。

「・・・二人ともぶっ倒れるまだ戦うとか・・・バツカじゃないかって思うんだけど・・・」

「面目ない・・・」

「同じく・・・」

似たような言葉を言ってノブに謝罪する二人。

「このティガレの子は後回しにして・・・、シディアはどうするつもりなの？」

「・・・決めてない。どうするかも、何をするかも・・・な。」

「だったらさ、スバルを手伝ってやってほしいんだよ。特にクエストを。・・・何度も死にかけてるから、できるだけそれを回避したいから、さ。」

「・・・まあ、それなら構わない。」

「じゃあ、一緒に住むって事で！」

シディアと一緒に住むことが決定した（ノブの話に協力する、という話で）。

「・・・なあ、なんでシディアはここに？そしてこの子と対立していたんだ？」

「対立ではないが、たまたまここに流れ着いたようなものだ。それでここを素通りしようとしたら勝手に威嚇されていただけだ。」

未だに目覚める気配のない女の子を抱きかかえ、帰路に・・・つけるわけもなくスバルは单身雪山に戻り、討伐の印となる物を探しに行った。

「あ、スバル！『ブツ』は？」

「あった。一番上等な物がな！」

「OK！じゃ、帰ろっか！」

そしてスバルたちは帰路に就いた。

家では壮絶な事態が待っているとは知らずして・・・

「おーっす、帰ってきたぞー。」
「あ、スバル。無事だったんだ。」

リビングにいたのはウィリア一人。

「・・・ウィリア。一つ聞いていいか？」

「なに？」

「・・・皆は？」

「アイリス達ならクエストに行ったよ？会わなかった？」

「ああ、会わなかったが？」

「そうなんだ・・・。アイリスが『上級受けてくるね！』って張り切ってたから・・・」

「・・・死んでなきやいいがな・・・」

「不安？」

「当たり前だろ？こんなんで不安にならない方がおかしいだろ？」

「大丈夫だよ。スバルのボックスにあった閃光玉を持っていたし、何もないと思うから。」

「・・・だといいが・・・」

「それで、リリスとかは農場に行ってる。」

「・・・魚を釣ってないといいな・・・。溺れたら助ける奴が・・・」

「キャリアが行ってるし大丈夫。」

「・・・全部に万能に対応してるな・・・」

「そういえばあのギザミの子、目を覚ましたよ？」

「ほお。・・・男だったよな？」

「うん。名前は確か・・・スズラだったよ。見た目は女の子だけど・・・」

そうこうしているうちにリリス達が帰ってきた。

「ただいまあゝ。」

リリスやダイアナらが、戻ってきた。

「お、帰ってきたな。」

「まだ帰ってきてないみたいね。アイリスたちは。」
「まあな。どこへ行っているかは知らんが。」

和気藹々と話していたら・・・

へやめるのじゃ！ワシは男じゃと言うとろうが！
へいゝじゃゝん！少しぐらいこれ着てよゝ！
ゝ

声が聞こえてきた。

「・・・今のがあのギザミか？」

「・・・うん。・・・あれ？もう一人の声がギザミちゃんじゃない・
・・・？」

「・・・どう考えてもラキュナスだったか？」

ウィリアとスバルが二人で疑問に思っていたら・・・

「うわあああああ!!」

一人の少年が階段を転げ落ちてきた。

「・・・あれか。」

「うん。その人。」

少年　―スズラ―　は豪快に転げ落ちた階段から素早く離れ、スバルのもとに走りこんだ。

「お、お主がこの家の主なのか!？」

「ん? あ、ああ、俺がこの家の主というか持ち主というか・・・、とにかく、そういうもののスバルだ。お前がスズラ？」

「そ、そうじゃ! 頼む! ワシを助けてくれぬか!？」

スズラはスバルの後ろに隠れるように階段を見る。

スバルもつられて階段を見たら・・・

「・・・あ。」

女物の服を持ったラキュナスが下りてきた。

その後、ラキュナスはスバルに30分ほど説教された。

アイリスが帰ってきたが、すぐさま『怖かったよぉっ!!』と泣きついたり、それを発端として堰を切ったかのようにシロンやナコル、キルティスも泣き出してしまい、それを宥めるのに10分ほど費やしていたスバルであった。

そして、スバルはシディアを紹介、カクサスは『良い好敵手^{ライバル}になれそうだ』と言っていたが、ナデシコやリナト、ニンフが必死になっ

てやだやだと言っていた。

もう一人のティガレックスの女の子は、そんな騒ぎがあつたのにも関わらず、目を覚ましていなかった・・・

報酬。

入手

色々と。

クエストクリア

特になし。

その他

シディア。
ティガレの女の子。
スズラが目覚めた。

第97話 朝騒動、そして見（まみ）えし凍牙の好敵手（ライバル）（後書き）

今回は、シディアとスズラの紹介です。

シディアⅡスノー

ベリオロス雄

見た目19才

身長172cm

腰まであるストレートで白髪。

冷静沈着。だが他人への気遣いがとてもうまく、群れではリーダーになるほど。気づかないうちに壊れた物が片されていることもしばしば。

情報整理も得意で戦術を立てることも。

無言で相手を気遣うためたまに心に思ったことを素直に言葉に出してしまう。それが元でフラグを立てることがしばしば。

基本は太刀による抜刀術からの流れ切り。対峙するモンスターにより武器を変える。（片手剣では動き回り敵を翻弄しながら戦い、大剣では味方を護りつつ切り崩してゆく。弓ならモンスターの足元を狙い牽制しつつ味方の援護をする。）

抜刀術を扱う者同士ということでスバルと切り結ぶ事が多い。

アイデア原案…リュウガさん

スズラ

ショウグンギザミ雄（雌っぽいが）

見た目15歳

身長158cm

髪型はサムライ風の長髪結びで群青色の髪を持つ。

心の中で静かに燃える熱血漢。その割に臆病な所もあり、怖いと感じれば素直に身を強張らせる。

率直な意見を素早く判断して口に出ることが出来る。

正直者。可愛い部分もありながら、やはり彼も男の子。一度狩りに出ると、的確な判断を出すことが出来る。

良くも悪くも人付き合いが良い。料理が上手で、料理を作ることも楽しみになっており、食材を選びすぐることが出来る。

誰かから何かをプレゼントしてもらおうとそれ以上の物をお返ししようとして頑張る。

口調が「ワシ」とどう見てもバカテスの秀吉風。女の子っぽく見えることが災いしてローズやラキュナスなどの女性陣から女装を強い

られることもしばしば。

頭がいいのだが、それはごく限定的（料理方面）のみであって他は壊滅的。

歌を歌うことも好きなのだが、周りに人がたくさんいるときは恥ずかしがって歌えなくなる。そんな時は鼻歌で我慢する。

名前の由来はスズランより。

アイデア原案…鴉〱夢の運び屋〱さん

以上です。

アイデア、ありがとうございました！

今回は・・・スバルの昔を知る同い年の幼馴染み系モンスターが！？

お楽しみに！

第98話 スバル、（いろんな意味で）危機一髪!？（前書き）

はい、100話まであと2話となった98話です！

今回は久々にモデルありのキャラが出ます。

そして、アイリスの協力者が!？

では、どうぞ！

第98話 スバル、（いろんな意味で）危機一髪！？

「・・・スバルよ、お前はそろそろG級を受けようとは思わんのか？」

たまたま集会所にいた教官にそう言われるスバル。

「いえ、まだG級を受けて無事帰ってくる自信がありませんよ、俺には・・・」

謙遜したように答えるスバル。

「そうか。だが、そろそろG級を受けることも考えないと、信頼を失いかねないぞ？」

「それは重々承知してます。」

「それに、彼女を早く同じくらいに到達させてやれよ？」

「余計なことを・・・」

「・・・／／／」

「もうっ！／／／」

いつものような感じではない教官にいじられ、スバルは舌打ちをしながら呟き、アイリスは顔を赤くして俯きながら、キルティスは教官にちよつと怒ってからスバルについていていた。

「今日は・・・アイリスのために・・・これか？」

そう言ってスバルが手にしたのは、『新種調査』というクエストだった。

理由としては、新種と戦えることもあったのだが、『万一、想定外の事態が起こった場合にその証拠があれば報酬を二倍にする』という文言があったからである。

「うん。これがいいな、私。」

「私もこれがいい。」

「んじゃ、アイリス。これを受注してきてくれ。」

「はい。」

アイリスがクエストの受注に向かい、それに参加する形としてスバル、キルティスが受けた。

開始。

クエスト…異形の連撃！？

「スバル、密林なんて初めてだよ・・・」

「俺もあまり来たことがないからな・・・。しかも相手は実力未知数だし・・・」

「あうう・・・」

アイリスもキルティスも樹海は初めてな為にすっかり怯えてしまっている。

「怯えてても仕方ない、さっさと終わらせるか？」

「そ、そうしょ！」

「う、うん！」

樹海の雰囲気完全にビビってしまっている二人は、足早に出ようとスバルに言う。

「ターゲットは・・・確か・・・『棘棘の龍・エスピナス』と『電気を放ってくる龍・ベルキュロス』・・・だったな。大雑把すぎるんだよ・・・」

スバルは依頼書に書かれていた情報を見て嘆いていた。

密林・エリア3。

「何もいない・・・か・・・」
「待って、・・・いる！」

「え、え？ど、どこ！？」

アイリスの聴覚によって、敵の存在が明らかになる。

「・・・流石だ、アイリス。しかも棘のある方だから・・・エスピナスの異色版もベルキュロスも見つかったと来た・・・」

「じゃ、じゃあ、あいつら倒せば帰れるの！？」

「そういうことだ。だが、ここでは戦い辛いな・・・。・・・俺が囹になって、あいつらを5へ誘き出して・・・一気に叩く！」

「・・・やだ。」

「アイリス？」

スバルの提案に拒否を示すアイリス。

「やだよ・・・。だって、だって・・・そうするとスバルが死んじやうかもしれないんでしょ・・・？」

「・・・否定しない。あくまで博打的な行為だから・・・」

「だったらやだ！スバル一人だけ死なせたくない！」

アイリスが感傷的になって叫ぶ。

その時。

「・・・あいつらが俺たちに気づいた・・・！」
『え！？』

全身棘だらけの龍と電気を纏った龍がスバルたちの方を向いた。

「よし、まずは逃げるぞ！ エリア5まで！」

そしてスバルたちはエリア5まで走り始めた。

エリア5。

「・・・スバル？」

「どうする・・・俺・・・！」

「スバル！？！」

スバルを先頭に走っていた為に前を見れないアイリス達。

スバルの目の前にいたのは・・・

「青い・・・ヒプノック！？！」

スバルが驚いていた理由となる、青色のヒプノックだった。

「え、青いヒプノック!?」

「何それ!? 聞いたことない!」

「・・・俺も話には聞いたことがあるが・・・、実物を見るのは実際初めてだ・・・」

青いヒプノック。

蒼眠鳥と呼ばれるこのヒプノックは繁殖期に入ったヒプノックである。

繁殖期に入ったヒプノックは普通のヒプノックに比べるとより凶暴になっている、と言うのが特徴である。

「まずい・・・前門の狼、後門の虎・・・とでも言いたい・・・」

「大丈夫! 私たちでやっつける!」

「はあっ!?!」

「ヒプノックは私と同じ鳥竜種だもん、倒せるよ!」

「そして私は飛龍種! 絶対に負けないもん!」

「お前らだけじゃ絶対に負ける!」

スバルは青いヒプノックに攻めかかろうとする二人を止めようとするが・・・

「でやあああああ!」

「うりゃあああああ!」

既に時遅し、二人はヒプノックに攻めかかってしまっていた。

二人はヒプノックについてあまり詳しい情報を持っていなかった。

だから・・・

クエエエエッ！！

プシュウウウウウッ！！！！

二人同時に睡眠ガスを受けてしまった。

「あ・・・」

「はふう・・・」

そして同時に眠ってしまう二人。

「やっぱりか・・・！って・・・！？」

気づいていないであろうはずのスバルの方に顔を向けるヒプノック。

「眠らせたアイリスとキルティスよりも・・・相手にするのが難し
そうな俺を先に潰すか・・・っ!!」

後ろに迫っていた異色のエスピナスとベルキュロス、前にいたヒプ
ノック

「一旦退避だっ！エリア6で迎え撃ってやろうじゃねえか！」

スバルは眠りこけているアイリス達を一旦放置してエリア6まで逃
げた。

普通はモンスターが逃げ、ハンターがそれを追いかけるという構図
が正しいのだが、その逆という奇妙な構図が出来上がってしまった
いた。

エリア6。

「よし、まだ時間がある！・・・一気に捕獲といきますかっ！」

スバルは早急に落とし穴を2つ、自作の打ち上げしびれ罠（感知式）1つセットした。

「あいつらは絶対あっちから来るしかねえ……。……。だから、ここで一気に叩くつもりだ！」

スバルは3匹の襲撃を落とし穴の向こう側で待つ。

「……。ハンターギルドめ……。最近ちょっとおかしいぞ！？不慮もいいところだったの！」

スバルは文句を言いながら見ていた。

数分後、三匹が表れて……

全てが全てに掛かり、さらにベルキュロスに至ってはそのまま落と

し穴に落ちた。

「・・・いつにもなく穴が深いな・・・」

穴に近寄ってみると・・・

穴がなぜか一つに繋がっており、その中に3人の女の子が気を失っていた。

「・・・この力・・・もう要らねえ・・・」

スバルは女の子たちを見てそう呟いた。

「しょうがねえ、一旦この子たちを引き上げて、アイリス達を回収して・・・もう一回ここを歩き回ろう・・・」

スバルは穴に滑って入り、女の子を抱きかかえた。

一人ひとりベースキャンプに運び、そしてアイリスとキルティスを回収、そして一人散策を始めた。

「前回のことを考えれば・・・多分あと一セットはいるだろうし・・・
なあ・・・」

スバルは淡い期待を込めてただ一人樹海へ歩き出した。

そしてアイリス達が起きるまでの間、やっぱりと言っているほどエ

スピナス異色版もベルキュロスもいたためさつさと捕獲しベースキャンプに戻った。

「ふう・・・、ようやくクエスト達成ときた・・・」

スバルは疲れをおしてベースに戻ってきた。

「誰か起きへきやあああああ！！」・・・だろうと思ったよ畜生・・・

・
」

アイリスでもキルティスでもない女の子の悲鳴が聞こえたスバルは、特に焦ることもなくベースに向かう。

「・・・入らずに聞くから、とりあえず答えてくれ。・・・誰だ？」
「わ、私・・・は・・・／／／」

中からは恥ずかしがっていることがはっきりとわかる声が。

「・・・とにかく、名前がわからないと何もできないんだが・・・」
「あ、あの、わ、私には、な、名前が・・・、な、何か、隠せるものを・・・／／／」

中から聞こえてくる女の子の話によると、名前がないらしい。

「あー、それは・・・どうするかは・・・、マジでどうしよう・・・」
」

スバルもついつい考え込んでしまった。

「とりあえず聞くが、敵意はないんだな？」

「敵意はないんです……。ただ……。裸なのが……。／／／」
「……。替え、あったか？多分、外にあっただろうが……。」

スバルはまず外のアイテムボックスを見てみた。

一応、スバルのみ着替えがあった。

「……。小さいかもしれんし、デカいかも知れんが……。これで我慢してくれ。これしかなくてな。」

「は、はい……。／／／」

服を渡すと、ベースキャンプのテントの中から手が出てきてその手が服を引き込んだ。

その直後、キャンプの中からもそと音が聞こえた。

「あの、服が3つもあるのは……」

「ん、ああ。他の二人にも着せてほしいんだ。そうでもしないと入れない……」

「は、はい……」

またもそと音がした。

「も、もう大丈夫です・・・／／／」

女の子がそう告げ、スバルもそれを信じて入っていく。

「・・・確かに問題がなっ!？」

入った瞬間、スバルは言葉を失い、顔を背けた。

スバルの目の前には、奇麗な茶色の髪を持つ女の子が座り込んでいたが・・・

明らかに存在を主張している彼女の胸が原因だった。

「・・・？」

「・・・なんか、ロズウェルがいたらとんでもないことになっていたな・・・」

「あ、あの？」

「あ、ああ、いや、なんでもない・・・」

スバルは女の子の胸を極力見ないようにしている。

「・・・あの・・・、そんなにじっと見ないでください・・・／＼

／

女の子の方も恥ずかしがってしまっている。

「あ、ああ、わ、悪い。」

「・・・／＼／

女の子は俯いてしまっていた。

「ま、まず確認なんだが、君は・・・」

「わ、私は・・・、その・・・、え、エスピナスなんです・・・。」

元・・・／＼

「エスピナス・・・か。」

スバルは何かわかったように納得していた。

「ということはそっちの青髪がヒップノックで、そっちの黄髪は・・・
ってあれ？どこかで見たことがあるような・・・？」

スバルは黄色い紙の女の子を見てふと疑問を持った。

「・・・まあ、気のせいかな・・・さて、皆を起こさないと・・・」
「そ、そうですね！お、起こさないと！（これ以上二人きりで一緒にいたら恥ずかしくて死んじゃいますよお・・・／＼／＼）」

二人が一緒になって全員を起こす。

アイリスとキルティスは、直接睡眠ガスを食らったためになかなか

起きない・・・

「ん・・・う・・・」

「ふみい・・・ふにゃ？」

二人が目覚めます。

「ん・・・あれ・・・？『スー君』・・・？」
「・・・え？」

黄色い髪の子から聞こえた呼び方にスバルは改めて疑問をもちなおした。

「やっぱりスー君だ！」
「うわっ!？」

女の子は急に抱きついてきた。

「え、ちょ、なっ!？／／／」
「今までずっと探してたんだから・・・!小さい時にいなくなった
つきりで・・・!」
「小さいとき・・・?」

スバルは相変わらずついていけなくて混乱してしまっている。

「ふにい・・・？」

そんな騒ぎの中、アイリスが目を覚ました。

「・・・スバル・・・？」

アイリスが女の子に気づく。

「ちょっと！スバルに抱きつかないでよ！」

「・・・スバルを呼び捨てにしてるの・・・！？」

「してるもん！私の恋人なんだから！」

「聞いてないわよ！？ちょっとスバル、どういうことなの！？？」

スバルに問い詰める黄色の髪の子。

「・・・どうしたもこうしたも・・・」

「というか、あなた誰なの！？」

「私の名はヘリアン！」

「ヘリ・・・アン・・・？・・・あっ！！！」

スバルは女の子の名前を聞いて、スバルは声を出した。

「あの時のベルキュロスか！随分昔に分かれたっきりだったから分からなかった！」

「やっと思い出してくれた・・・！」

「え、え、す、スバル、この子、知ってるの？」

「ど、どういことですか・・・？」

アイリスと女の子は疑問を隠せない。

「簡単に言えば、だが・・・、小さい時によく遊んでたベルキュロスだ・・・」

「お、幼馴染み・・・！？」

「違うっての、小さい時に、だが、再びお袋に引き取られてから、だって。」

『ほっ・・・』

アイリスと女の子が同時に安堵の息を吐く。

「・・・スバル、私は許嫁じゃ・・・」

「ない。俺は認めた記憶が無いし、お袋もそういう話をしてくれた記憶も無い。許嫁なんて俺にはないさ。」

「・・・許嫁じゃないって言ってんの！アイリス・・・だったかしら？ちよつとこっちに来なさい！」

「わ、私!？」

アイリスを呼びつけるヘリアン。

驚き、おどおどと歩み寄るアイリス。

「・・・あなた、本気でスバルを愛しているのよね？」
「そ、そうだけど・・・」
「本気！？そんなにおどおどして本気と言うの！？」
「だ、だって・・・」
「・・・分かった、私があなたをサポートするわ！」
「えっ！？」

ヘリアンの提案にまたまた驚くアイリス。

「見たところあなたにはライバルが多いようね。」
「あうっ・・・」
「さらにスバルが鈍感だからよりライバルが多い・・・」
「はうっ・・・」
「私はスバルのことをよく知ってるの。だから、あなたに協力するの！だけど・・・私は厳しいわよ！？」
「わ、わかったけど・・・（こ、怖いよお・・・）」

内心びくびくしているアイリス。

「さ、戻るわよ！」
「えっ、あっ・・・」

結局、ヘリアンのペースに乗せられ続けたアイリスであった・・・」

「一体何の話だったんだ？」
「な、なんでもないわよ！」

戻ってきた瞬間、スバルは二人に聞いたが、ヘリアンはさらっと返した。

「・・・残った問題は、この女の子と、未だに目を覚まさない女の子・・・」

「そりゃ・・・そうだけど・・・、なんか・・・問題がありそうな気が・・・」

スバルが気にした問題に、アイリスは一抹の不安を感じていた。

「あ、わ、私は・・・す、スペリアです・・・／／／」

「・・・スペリア？」

「わ、私の名前です・・・／／／」

エスピナスの女の子、スペリアは顔を赤らめながらも名を告げた。

「そっか・・・よろしく。」

「は、はい・・・／／／」

簡単に言葉を交わす。

「さて、スペリアの問題は解決したけど・・・」

とスバルが振り向いた瞬間・・・

「ふにゃ・・・？」

今まで目を覚ましていなかった女の子が目を覚ました。

キルテイスはまだ・・・

「すぴいゝ・・・」

眠っていた。

「・・・俺、逃げる！」

スバルが踵を返し、外に逃げようとしたその瞬間・・・

「ていつ！（ガシッ！）」

「がふっ!？」

その女の子がスバルに飛びかかって、スバルはその反動で地面に倒

れた。

「にゅふふ♪」

「ちよっ・・・」

「こら！スバルに飛びかからないで！？あんたのじゃなくてアイリスの彼氏なのよ！？」

女の子に食って掛かるヘリアン。

「なによぉっ！私はこの人に惚れたんだもん！私の彼氏なんだもん！」

「勝手に決めない！ちゃんとスバルが告白しているから！アイリスに！」

「ちょ、ちよっと、待って・・・」

「け、ケンカはだめですよ・・・」

アイリスとスペリアがおどおどしながら止めようとするが・・・

「むきーっ！！」

「わーっ！！」

ヒートアップするケンカ。

「・・・お前ら、大人しくしろ。」

スバルがそのケンカを止めようと二人の頭に手を置いた。

その瞬間・・・

『ほにゃああああ・・・♪』

奇声を発し、ふにゃふにゃとスバルに倒れかかった・・・

「え、え？」

「小さい時によく遊んだ、といったろ？だから、こういうことも知ってるわけ。まさか、この子にも通用するとは思わなかったな・・・」

「

手を置いたままなため、幸せそうな顔をしている二人にアイリスはちよっと引いたが、スバルは何の気なしにしていた。

「・・・／／／」

「ん？」

「あ、いえ、なんでもありません！なんでも・・・／／／」

スペリアはスバルに何かして欲しそうな眼をしていたが、スバルに聞かれた瞬間、一気に拒否をしていた。

顔は赤いが。

「・・・とりあえず、キルティス起こして帰るか・・・」

数分後、キルティスが起き、ようやく帰路に就いた。

（この間にヒプノックの女の子がナナという名前だということが判明した）

帰った瞬間・・・

「あ、スバル。お帰り。」

「ウィリア？何かあったのか？嬉しそうだけど・・・」
「なんでもないの♪」

何かうれしそうなウィリア。

スバルが理由を聞いてもはぐらかすだけで、教えてくれなかった。

よくわからないまま机をちらっと見たら・・・

「・・・なるほどね。ウィリア、ちょっと料理ができるようになったから嬉しいのか？」

「あ、ばれちゃった？」

あっさりとした答え。

だが、スバルは内心嬉しかった。

苦手なことを少しでも克服しようとしていることに。

「だけど・・・、今ね？プラナがキッチン独占してるから・・・」
「プラナが？」

「（ボンっ！）わきゅっ！？」

突如キッチンから下爆発音と可愛らしい悲鳴。

慌てて向かうと黒煙を噴き上げているフライパンと、その前に煤塗れになっていたプラナを発見した。

「い、いったいどうしたんだ!？」

「えっと、けほっ、料理の練習してて・・・／＼／」

どこか恥ずかしがりながらも言うプラナ。

彼女も頑張って苦手を特訓していたのだ。

「・・・私も頑張らなきゃ!」

アイリスもキッチンに突貫していった。

「・・・大丈夫だろうか・・・?」

スバルはどこかしら不安を感じていた・・・

報酬。

入手

色々。

クエストクリア

色々。

その他

ヘリアン。

スペリア。

ナナ。

アイリスに助っ人誕生。

第98話 スバル、（いろんな意味で）危機一髪!？（後書き）

今回は、ヘリアン・スペリア・ナナの紹介です。

ヘリアン

ベルキユロス雌

身長158cm。

見た目18歳。

胸のサイズはE。

スバルがシャルナ達に再び引き取られてからよく遊んでいたベルキユロス。

性格は、普段は物凄い高飛車で、自分の話を無理やり押し通したりなどをするが、スバルにだけは過剰なほどに甘えたり尽くしたりする。いわゆるヤンツンデレ（新時代）。そのため、あまり他の人がいないところに限ってはスバルのことを『スー君』と呼ぶ。（ちなみに、スバルを『スー君』と呼ぶのは、ヘリアン以外にも彼の母・シャルナの友人だけ）

一人称は高飛車なのになぜか『私』。

戦闘能力はほとんど落雷ぐらいだが、実の所、魔術を使える。それも、高位の物まで。

アイリスに協力するとは言ったものの、彼女もスバルの事が好きである。

名前の由来は向日葵^{ヒマワリ}の学名より。花言葉は『熱愛』

モデル…『おまもりひまり』の『神宮寺くえす』
CV…松岡由貴

スペリア

エスピナス雌

身長149cm。

見た目17歳。

胸のサイズはE。

ぱっと見は小動物のような子。でも結構気がきく。

スバルの事が好きなのだが、アイリスという恋人がいること、迷惑をかけたくないという思いから本心を伝えられず、心の奥底にしまった。

掃除洗濯料理に裁縫、何でもできる万能な子なのだが、時たまドジを踏んでしまう。

身長のことを言われると頬を膨らます。

名前の由来は雪柳の学名の語源『SPIRA（螺旋）』より。花言葉は『静かな思い』

ナナ

ヒプノック繁殖期の雌

身長162cm。

見た目17歳。

胸のサイズはF+。

スバルには完全に一目惚れした。

もともとが繁殖期のヒプノックのためか、かなり積極的な子。さらに、ライバルには結構敵意をむき出しにするなど問題児。

料理などはあまりできない。

名前の由来は薺なずなより。花言葉は『あなたに私のすべてを捧げます』

以上です。

次回はスバルが黒い祖龍と戦います！

そして、ついにノブが・・・！？

さらに、そのノブに春が・・・！！！？

お楽しみに！

第99話 強き黒猫との会合、そしてスバルが倒れた（前書き）

99話です！

今回、少し前から話し合って決めてきた擬人化がです！

そして、最後にスバルに危機が・・・！？

では、どうぞ！

第99話 強き黒猫との会合、そしてスバルが倒れた

スバルは翌朝、誰にも襲撃されないまま目が覚めた、という珍しい起き方をした。

「珍しい日も（ふらっ・・・）・・・眩暈!？」

唐突にスバルを襲う眩暈。

「今までの疲れが一気に出たか・・・っ!？それとも・・・何かの病気か・・・?」

あまりにも強い眩暈にスバルは片膝をつき、目頭を押さえていた。

「・・・くうっ・・・、な、なんとか歩けそうだが・・・、まだ・・・っ・・・」

スバルは少しフラフラとした足つきでリビングへ向かった。

「あ、スバル、おは・・・どうしたの？」

リビングに向かうと、既にウィリアがおり、スバルの異変に逸早く気づいた。

「・・・何があったかはわからんが・・・、眩暈が酷くて・・・な・・・」

「今日クエストに行かない方がいいよ？なんか嫌な予感がするもん・・・」

「いや、行く。ノブを・・・呼んでくれ・・・」

「・・・無茶しないでね？」

ウィリアは一言スバルに言い、ノブを呼びに向かった。

「・・・ご主人、本当に大丈夫かニャ？今にも倒れそうな雰囲気を醸しだしてるニャよ？」

「今日・・・、皆いないからあたし一人だし・・・、「ウィリア、『あたし一人』ってどういうことかしら？」あ、ヘリアンがいたんだ。」

ウィリアがノブに不安げに言った瞬間、階段からヘリアンが降りてきた。

「スバルがどうしたの？まさか、何か病気になったとか！？それとも、死に行くとか・・・」

「いや、それは無いニャ。さっきから『眩暈が酷い』と言ってるだけニャ。」

「眩暈が・・・」

ヘリアンもどこか不安げな表情を浮かべる。

「いや、今日だけは大丈夫だ。まだもつだろう・・・。それじゃ、行ってくる・・・」

どこかフラフラした足取りでクエストに向かうスバルと、それに続いて行くノブ。

ウィリアとヘリアンは、心配した面持ちで見送るしかできなかった。

この眩暈が、のちに大事件を引き起こすとは、この時、誰も知る由もなかった・・・

クエスト…白と黒の交響曲

開始。

「上級ミラルーツだろうけど・・・、黒いのは・・・なんだ？」

「ただのミラボレアスじゃない？」

「だいいいな。」

「それよりもスバル、途中で眩暈が酷くなって倒れたりしないですよ？協力者いないんだし、オイラ一人じゃ運べないし・・・」

「そんなこと、百も承知だ。簡単に死んでたまるか。」

スバルとノブの二人は城の方へ歩いていた。

シュレイド城。

「・・・なあ、あれ見たか？」

「・・・オイラも信じられないものを見ている気がする・・・」

二人の眼前にあったのは・・・

たった一匹の黒いアイルーがミラルーツを圧倒していた、というもののだった。

「・・・凄え・・・。」

「・・・」

スバルはそのアイルーに感心し、ノブは見入っていた。

「・・・な、なあノブ。あのアイルーにちょっと話をしてみるか。
・・・あくまであれの討伐が終わってから。」

「そ、そうだね・・・」

目の前にいるミラルートは、そのアイルーに翻弄され、全く手が出せずにいた。

それほどあのアイルーは素早いのだ。

「・・・むしろ、オトモアイルーとしてスカウトしたいよ・・・」
「・・・スバル、それは、オイラを解雇して、ということかい？」
「バカ、お前は俺の相棒だろ？解雇なんてできっかよ。」
「だね。ごめん。」

二人が話し合っていた時、ミラルートがついに崩れ落ちた。

「・・・終わったみたいだな・・・」
「そうみたい・・・だね。」
「おーい！」

終わったことが確認された瞬間、スバルはそのアイルーに声をかけた。

「・・・？」

そのアイルーはまるで『何？』とでも言うかのように首を傾げた。

「一体誰だ？一人でミラルーツ倒してたけど・・・」

「・・・邪魔をするつもりはありません。・・・ただの手伝いです。」

「いや、邪魔かどうかというわけじゃないんだ。・・・そういえば、名前は・・・」

「・・・サスケと言います。」

「なるほど・・・な。」

サスケというアイルーは、時たまノブをちらちらと見ながらスバルと話していた。

「本当に凄いな。普通ならかなり苦戦するルーツをあっさりと・・・」

「・・・あっさりじゃないです。」

「いや、本当だよ！」

「・・・っ・・・／／／」

ノブが話しかけた瞬間、サスケは眼を逸らした。

「・・・あれ、嫌われた？」

そう言って雑談をしていたら・・・

「・・・っ！ノブ！第二波来るぞ！すぐにサスケを避難させろ！流石に連戦は辛い！それに、さっきのとは感覚もまるで違う！」

「第二・・・はっ！わ、わかった！」

ノブがサスケの手をつかんで引く。

「・・・え・・・」

サスケ自身、なぜかはわからない。

「一旦墜落でもしてろおおおおお！！！」

スバルが目晦まし目的で閃光玉を投げる。

「わわっ!？」

そしてノブの声が聞こえた。

光
が
は
れ
・
・
・

「ノブ！そのアイルーを・・・」

「スバル、もうアイルーじゃないよ。・・・オイラも・・・」

「はあっ!？」

スバルが墜落した黒い龍から一旦目を離すと・・・

本当に人になっていたノブと、隠すべき場所や腹を隠すように蹲っていた女の子がいた。

「任せた！俺はこのまま戦う！」

「了解！スバル、死なないでよ！」

ノブは女の子を安全地帯に連れた。

「ノワール、属性を『破龍』にしろ！レベルは最大で！」

【だが良いのか？主は今、眩暈が酷いと聞いたが・・・】

「そんなことに構っていられるか!？そんなことは大丈夫だ!」

【・・・了解した。変属・『破龍』、最大!】

スバルは墜落した龍に立ち向かった。

安全地帯。

「自己紹介をしてなかったね。オイラはノブ。まず確認するけど、君はサスケなんだよね!？」

ノブはできるだけ安全地帯にまで連れてきた女の子を見ないように聞いた。

「・・・(コクっ)／／／」

その女の子がサスケだということがまず判明した。

「・・・それで・・・なんでお腹を隠してるの?」

「・・・それは・・・／＼／」
「・・・言いたくないなら言わなくていいよ。無理に見るなんてしないし、言っただとしても僕は笑わないし。コンプレックスがあるんでしょ？」
「っ!？」

まるで凶星。

「・・・(すっ)／／／」

サスケは恥ずかしそうに自分の腹を見せる。

「こ、これは・・・」

サスケの腹にあったのは、斜めに切り裂かれたような大きな傷跡だった。

「・・・あまり・・・見ないで・・・／／／」

「そっか。それをあまり見られたくないんだね。」

「・・・(コクっ)／／／」

「紅い眼も、そのお腹の傷も・・・、綺麗だと思うけどなあ・・・。
お世辞抜きで。」

「っ!？／／／」

ノブに想定外過ぎることを言われて、赤面するサスケ。

「あ、ちょっと待ってて。すぐに服作るから。糸もあるし。」

そう言ってノブは一本の糸から常人には見えない速度で服を編み始めた。

そして3分後、下着を含めた一セットの防具が出来上がった。

「・・・凄い・・・です・・・！」

「そんなに凄いことだとは思えないけどね。さ、着ちゃって。僕はこのまま、スバルを助けに行く！」

サスケに防具を着させ、ノブは先にスバルの許へ走りだした。

一方スバルは・・・

「ちいっ！ やっぱりこいつもミラルートか！ 電撃放つかよそこで！
」？

完全に苦戦、というわけではないが、わずかに押されていた。

そして、恐れていたことが起こった。

「・・・っ！！」

スバルの視界が突如、ぐにやりと曲がった。

そう、眩暈が起こったのだ。

「くそっ！ こんな・・・時に・・・っ！」

【主、尾撃第二波が来る！】

「しまっ・・・」

あわや即死・・・と思った瞬間。

「（ガキン！！）スバル！」

「ノブか！ 助かった！ あの子は！？」

「もう大丈夫！さ、あいつを討伐しよう！」

「ああ！だが気をつけろ、あいつもミラルートだ！」

「変異種！？わかった！スバル、眩暈は大丈夫！？」

「・・・そろそろまずい・・・、さっきも起こった・・・今も、な・・・」

「・・・スバルは少し休んで。オイラが一人で戦う！」

そして二人の共闘が始まった。

安全圏。

「・・・／／／」

サスケはノブが作った服を手にしたまま止まっていた。

「・・・嬉しいです・・・初めて・・・綺麗って言うてくれたことが・・・／／／」

そして自分の腹の傷を見てそう呟いた。

「・・・今、行きます。」

そしてその防具を身に纏い、再びサスケは戦場に向かった。

「おわっ!？」

「ノブ！」

「大丈夫！そう簡単に死んでたまるか、だよ！」

ノブが一瞬ミラルートに踏まれそうになったが、それを辛うじて回避。

「だが、このままじゃ・・・」

「ジリ貧かな？」

そう言うてはいるものの、少しずつ不利になっている現状を回避できなくなってきた。

「ジリ貧覚悟！」

「死も覚悟！」

『だあああああ！！！』

そして最後の突貫を仕掛けようとして・・・

〈ふっ！〉

ドゴォっ！

顔を何者かに殴られ、黒いミラルートは吹っ飛んだ。

「・・・この強さ・・・まさか！」

「・・・助けに来ました。」

「サスケか！やっぱり！」

サスケに助けられた二人。

「さあ、反撃開始だ！とにかく、誰一人として死ぬんじゃねえ！」
「了解！」

「・・・分かりました！」

「あ、スバルは休んでて！これ以上眩暈が起きてもオイラ達じゃ守りきれないから！」

「・・・悪い、そうさせてもらう・・・」

スバルが一足先にベースに戻る。

そして二人でルーツ討伐に入った。

ベース。

ノブとサスケを残して戻ってきたスバルは、着くや否や、地面に倒れ伏してしまった。

「・・・体が・・・動かねえ・・・。やっぱり・・・疲れが・・・」

そして、力尽きてしまったスバルは、そのまま眠ってしまった・・・

一方、シュレイド城はというと・・・

「はっ！（ドゴッ！）」

「ふっ！（ズシャっ！）」

ノブとサスケが見事な連携で黒いミラルーツを圧倒していた。

- ・サスケが攻撃した直後、その隙を埋めるかのようにノブが攻撃し・・・

そのノブの攻撃の合間の隙に、サスケが真逆の位置から攻撃する。

二人の見事な連携に、黒いルーツも二人を見失い、翻弄されてしまっていた。

そして、決着がついた・・・

「よし、これで終了っ！・・・早くスバルの所に行かなくちゃ！」
「・・・えっと・・・」

「サスケも来て！オイラ一人じゃちょっと無理っぽいから！」
「・・・は、はい・・・／／／／」

この後、スバルを二人で支え、近くの町まで歩き始めた。

ものの数分後・・・

「ん・・・く・・・」

「・・・あ・・・、目が、覚めたようですね・・・」

「・・・サスケ・・・か・・・」

「はい・・・」

「ノブは・・・？」

「・・・今は・・・その・・・」

「・・・とりあえず、立てるようにはなった・・・から、そのまま・・・帰ろう。」

「だ、大丈夫・・・ですか？」

フラフラしながらも立ち上がろうとするスバルを支えるサスケ。

「大丈夫・・・とは、言い難いけど、な。家までは・・・もたせる！」

「ってスバル！まだ立ち上がったらダメ！」

「まず、家まで行こう・・・。そうすれば後は何も・・・」

フラフラしながらも家路につこうとするスバル。

「・・・ったく、ほっとけないなあもう！」

愚痴を言いつつもスバルを支えるために彼のもとに向かうノブ。

サスケも心配になりついて行った。

自宅前。

「あ、スバル、お帰り！」

玄関先で待っていたのはアイリスだった。

（どうにか歩けるまで持ち直した）スバルは・・・

「ああ、ただい・・・ま・・・（ふらっ）
「わっ!？」」

自宅について安心したのか、それとも力尽きたのか・・・

本心はわからないものの、アイリスに向かって倒れこんでしまった。

「あ、あの、えと、す、スバル？その、ね？スバルに押し倒されるのは嬉しいんだけど・・・ま、まだ、心の準備ができてないと言
うか、恥ずかしいと言うか・・・、そ、それに、わ、私、クエスト
から帰ってきたばっかだから汚いし・・・／／／」

「アイリス！スバルをよく見て！？というか運ぶの手伝って！？」

「え、えっ！？え、えーと、ひょっとして、ノブ？」

「そう！説明は後で全部するから、まず運んで！スバルの部屋に！」

「そうしたいんだけど・・・その・・・スバルが・・・／／／」

「だーもう！誰か手伝ってよ！」

ノブの叫び声に慌てて飛びだしてきたウィリアがスバルをノブと二
人で運び込み、スバルを彼の部屋に寝かせた。

その後、ノブが自分の姿とサスケについて紹介し、ラネッサがスバ
ルを診ていた。

部屋の外にいたのは、ほぼ全員だ。

ラネッサが診察を始めて数分後、彼がスバルの部屋から出てきた。

「ラネッサ、スバルは・・・？」

開口一番、ヘリアンがスバルの様子をラネッサに聞く。

「えっと、簡単に言えば、疲労による発熱。かなり詳しく言えばなんだけど、左目の傷がかなり熱を持っていてそこから発熱したみたいだし、さらに、クエストの疲労とストレスから熱が酷くなってしまったみたい。」

「そ、それで!？」

「二日くらい安静にしていればすぐに治ってくれるよ。ただ、その間は、ウィリアとプリムラにスバルの面倒を診てもらうつもりでい

「ごめん・・・ね・・・、私の・・・せい・・・で・・・ぐすつ・・・」

彼の部屋の前で、涙交じりの謝罪をしたのだった・・・

報酬。

入手・クエストクリア

後日配送とのこと。

その他

サスケ。

スバル、疲労・ストレスによる発熱。

第99話 強き黒猫との会合、そしてスバルが倒れた（後書き）

今回は、ノブ擬人化設定とサスケの紹介です。

ノブ（擬人化状態）

身長172cm。

見た目18歳。

アイルー時と殆ど変わらず。

裁縫の腕は全く衰えていない。

サスケ

アイルー雌

身長155cm。

見た目16才。

胸のサイズはDー。

深紅の眼を持つ。

髪は艶のある漆黒の長髪。

簡単に言えば才色兼備のクールビューティーだが実際は内気な性格。

IQ130の頭脳の持ち主で素直かつ従順、たまに天然なところを見せる。

祖狼商事？の本社戦闘部門機動アイルー課採取班班長及び悪魔アイルー課第六隊隊長で、コードネームは『ルシフェル（墮天使）』

実力は一匹でG級を受けることが可能。

腹部に幼少時に付けられた傷がありそれが彼女のコンプレックスとなっている。

怒りの沸点は高く、明らかな敵視さえしなければ仲良くなれる。

キレるとミラボレアスも瞬殺。

口数が少ないがそれは内気な性格故。

ハンターとしての活躍前は一匹の雌のアイルーと仲が良かった。

ノブの前では極端に恥ずかしがってしまうためにまともに喋ることができなくなってしまう。さらに、今までに恋愛経験がなかったためになかなか告白ができなかったりなど少々初心なところもある。

発案ネタ…即席兵器さんの実際のデータより。

以上です。（即席兵器さん、ありがとうございました。）

次回はスバルの看病。果たしてちゃんとやれるのか・・・？

お楽しみに！

（次回、100話目です！）

第100話 乙女の手厚い(?)看病(前書き)

(9月30日現在で、長らくお待たせしました!)

記念すべき100話です!

スバルの看病、果たしてうまくいくのか・・・?

では、どうぞ!

(R-15はもうお決まり的なものですね)

第100話 乙女の手厚い(?)看病

スバルが倒れた翌朝。

ウィリアとプリムラは忙しそうに走り回っていた。

「えっと、頭冷やす用の氷は・・・」

「今作ってる！水汲んできてほしい！」

「わかった！」

「これが終わったら料理作らなきゃ・・・」

二人だけでも既に戦争状態。

一方、何もしていない（というよりもしないように言われた）女の子達は・・・

「ラネッサのバカぁ・・・」

「そうだよぉ・・・」

「はぁ・・・」

ラネッサに文句を言ったり、落ち込んだりしていた。

だが、ここにアイリス・スペリアの姿はなかった。

スペリアは・・・

「すう・・・、すう・・・」

朝にめっぽう弱かったらしく、未だに眠っていた。

アイリスは・・・

「・・・ひっく、うつ、うつ・・・」

泣いていた。

アイリスが泣いていた理由とは、ただ単に『スバルに抱きつけない』などという簡単な理由ではない。

『スバルが倒れたのは私のせいだ』という自責の念に耐えきれず、泣いていたのだ。

「・・・ラネッサ君、アイリスさんには酷なのでは・・・？」

「・・・だろうね。アイリスだけは・・・看病、許してあげようか。」

ラネッサも流石にアイリスだけは許すことにした。

「あ、あの、アイリスさん？ちょっと、いいですか？」

カトレアがラネッサの代わりにスバルの看病の件について話しに行った。

「アイリ・・・ってちよっ!? あ、アイリスさん! 顔が涙と鼻水でとんでもないことに!？」

そりゃそうだ。先程まで泣いていたわけだから、『枕を涙で濡らす』という表現では収まりきるわけのないレベルになっていたのだ。

「まず顔を拭いて・・・っと。あのですね、ラネツサ君から、アイリスさんだけはスバルさんの看病をしてもいい、と言っていました。」
「ホント!？」

「ただし、他の女の子には気づかれないこと、絶対にスバルさんのストレスになったりすることはしないこと、だそうです。」

「わかってる・・・ぐすっ・・・」

「もう、泣かないで下さいよ。」

カトレアがアイリスを慰める。

「では、ウィリアさんとプリムラさんに伝えてきますね。静かにスバルさんの部屋に向かってください。」
「う、うん・・・」

カトレアが出て行ったあとアイリスもこっそりと部屋を出て行った。

カチャ・・・

「あ、アイリス。」

「ウィリア、スバル・・・どう？」

「まだ目を覚まさないんだけど、時々『アイリス・・・』って言うてる。」

「・・・」

スバルがうわ言で自分の名を呼んでいた。

その事実アイリスはまた泣きそうになる。

「それじゃ、あたしプリムラのお手伝いしなきゃいけないから。後よろしく。」

「あ、うん・・・」

とててて・・・とウィリアはキッチンへ向かっていった。

「・・・スバル・・・」

アイリスはスバルの方を見る。

そのスバルは、すやすやと大人しく、規則正しい寝息をたてて眠っていた。

「・・・看病、しなきゃ・・・」

アイリスはスバルの頭にかけられたほんのりとあったかくなっているタオルをとり、近くの桶の氷水に浸して冷やし、再び頭に乘せた。

それを一定間隔で行い、時々来るウィリアやプリムラに『氷が解けた』と説明して新しく入れ替えてもらったりした。

ただ、その行為がのちに大問題になるとは、この時、誰もが考えていなかった・・・

夕方。

「んしょ・・・」

アイリスは膝立ちでスバルの頭に乘せたタオルを入れ替えていた。

・ その時、偶然ながら彼女の胸がスバルの手すれすれを動いていた・

そして、それが事件を起こした・・・

「んしょ・・・っと・・・（ふにっ）ひあっ!？」

突如悲鳴（?）をあげるアイリス。

「え? え! ?」

ベッドに腕を立ててあたりをきろきよろと見回す。

自分の胸に感じた、誰かに触られた感触。

だが、周りを見ても、誰もいない。

「・・・わっ!？」

そして、腕を引っ張られた・・・

「痛た・・・もう、スバル、起きて・・・っ!？」

アイリスは動こうとして、スバルに後ろから抱きつかれていることに気付いた。

「や、やだ、スバル、あ、あの、ね?そ、そんなことしたら、は、
恥ずかしいんだけど・・・／／／」

スバルに対し、顔を赤くして抗議するが、スバルは全く聞いていないようだ。（聞いていないのも無理はない。未だに意識はないのだから）

「ちょ、ちょっと、スバル・・・ふあっ!？やっ、あっ、あん!／

／＼

後ろからいきなり胸を揉まれてしまうアイリス（スバルに意識はない）。

「あつ、くうん！はあん！ら、らめ、それ以上おっぱい揉まれたら・・・ひゃうん！／＼／」

必死に拒絶をするものの、全く脱出できずにいる。

「んっ！んー！！んんー！！（こ、声を出しちゃダメ！で、でも、そんなにおっぱい揉まれちゃったら・・・、声、出ちゃうよお！）
／＼／

そして、無意識にスバルがアイリスの胸を揉み、それを声を殺して必死に耐えるアイリス、という図が数分続いた。

「んーんーんー!! (も、もうらめ、な、なんかが、なんかが来ちゃうよおおお!!)」

アイリスが(いろんな意味で)限界を迎えそうになった瞬間、スバルの手の力が急に緩んだ。

「はあっ、はあっ、はあっ・・・／／／」

その瞬間にアイリスはスバルからどうにか離れ、ベッドをころころ転がり・・・

ドテン！

床にうつ伏せに落ちた。

「・・・アイリス？」

その物音を聞いてウィリアが部屋に来た。

「・・・アイリス、うつ伏せになってどうしたの・・・？・・・あれ？スバルの体が横向いてる・・・」

「はっ、はっ、はっ・・・、しゅ、しゅびやりゅにおっぴゃいみよみゃれひゃ・・・（訳：す、スバルにおっぱい揉まれた・・・）／

／
「・・・ということは、スバル、一時的に動いたんだね・・・」

ウィリアがうつ伏せになってぐったりしているアイリスを放置して
見解を述べていたら・・・

「う・・・ん・・・」

「スバル！？目が醒めたの！？」

「にゃ、にゃにい・・・？」

ウィリアがスバルの意識の復活に驚き、アイリスは力が入らないた
めにうつ伏せになったまま聞いた。

「・・・ウィリア・・・か・・・。俺は・・・」

「スバル・・・まだ起きちゃだめだよ！ラネッサから聞いたんだけど、クエストから帰ってきた直後に倒れたって！熱が出て、そのま
ま意識を失ってたんだから！」

「そうか・・・。それで、俺はいったいどれだけ・・・」

ウィリアの制止を無視して起き上がりながらスバルはウィリアに聞
く。

「昨日の夜からだから・・・、丸・・・1日・・・なんだよ・・・、
ぐすっ・・・」

ウィリアが涙ぐみながら答える。

「・・・ところで・・・アイリスは？」

「うぐっ！そ、それは・・・その・・・／＼／＼」

「・・・どうした？」

「今、私の足元でぐったりしてる・・・／＼／＼
「えっ？」

スバルはウィリアに言われ、足元を見たら、やっぱりぐったりしているアイリスが・・・

「・・・俺がやった？」

「・・・みたい。しかも、アイリスが押し付けたわけじゃなくて、寧ろアイリスがやられた、みたいな形・・・」

「・・・すまん。」

スバルはすぐ足元のアイリスに謝った。

「ら、らいりよーぶ・・・。わ、わひゃひらいりよーぶらもん・・・

（訳..だ、大丈夫・・・。わ、私大丈夫だもん・・・）／＼／＼」

「・・・全然大丈夫じゃないじゃん・・・」

ウィリアに突っ込まれたアイリス。

だが、アイリスという犠牲があっただけで、スバルはたった1日で復活したのだ。

報酬。

入手・クエストクリア

クエスト見受注のためなし。

その他

スバル、復活。

第100話 乙女の手厚い(?)看病(後書き)

はい、久しぶりにスバルの超回復能力が発動しました。

あの疲労熱もたった1日で治る神現象・・・

ある意味、羨ましいですね。

次回はスバルが龍車を手に入れようとして・・・!?

お楽しみに!

第101話 スバル、ポポ車を手に入れようとして襲われるのこと（前書き）

101話です！

今回はタイトルから察することが出来るかもしれない内容です。

では、どうぞ！

第101話 スバル、ポポ車を手に入れようとして襲われるのこと

「・・・なるほどな・・・」

スバルはあるチラシを見てそう呟いた。

チラシには、『最新式のポポ車販売開始！ポポを捕まえてくれば使用可能に！！』とあった。

「ポポ車・・・ね・・・。確かに珍しいと言えば珍しいが・・・、そう簡単に捕まえられると思ってるのか？この会社は・・・」

「どうした、スバル。珍しくチラシなんか読んで・・・」

「カクサスか。ポポ車っていう珍しい移動・運搬車両が販売開始になったっていうから見てみたんだが、どうもこうも無茶ぶりにしか見えないからな・・・」

「ポポ車・・・ポポを捕まえて来いということか。確かに普通は無理だな。」

「・・・だろ？ただ、使えるようになればかなり楽できると思うんだが・・・」

「アイテムの運送や移動に費やす日数が減るとかか？」

「ま、そんなところだ。」

「雪山だったら楽に手に入るだろう。下級なら簡単に捕獲可能だったはずだぞ？」

カクサスが提案する。

「なあカクサス。最近生態系がどこかしら狂い始めていることを知らないのか？」

「生態系・・・確かに、先日でも渓谷にいるはずのベルキュロスやクエストに入っていなかったヒプノックがいたくらいだから・・・用心はするべきだと思うが・・・」

「・・・よし。行くか。カクサス、ノブを呼んできてくれないか？」

「わかった。・・・ついでと言っては何だが、スバル。俺も同行してもいいだろうか？」

「いいが・・・、急にどうした？」

「不安がよぎってな・・・」

カクサスの不安は、もし家にそのまま居続けたら当たっていたことは、このとき誰も想像していなかった・・・

「・・・まあいいか。ノブが来たら雪山に行くか。」

「そうだな。善は急げ、というしな。」

「今回は流石にそれは言わないんじゃないか・・・？」

珍しく女性陣が誰一人としていないメンバーでクエストに向かった。

ク
エ
ス
ト
..
異
変
の
雪
山

開始。

「・・・雪山の雰囲気が変わってる・・・」

「ああ。ポポだけじゃなくて、アプケロスまでいる・・・」

「何かの前触れかな？」

3人が目の当たりにしたのは、ポポやアプケロスの群れ、群れ、群れ。

「目標はあくまでもポポ一匹、他の奴には手を出すなよ・・・？」

「わかってる。一匹に絞って行動した方がいいな・・・」

「・・・スバル、道具は使わないでよ？」

「・・・大惨事になりたくないからな。絶対使わねえ。」

群れの中を縫うように進むスバル達。

「頼むから誰にも見つからないでくれよ・・・？」

スバルは進みながらそう呟いた。

だが・・・

「・・・スバル・・・最悪のことが起きた。」

「どうした、カクサス？」

「アプケロスがこちらに気づいたようだ・・・」

「マジかよ!？」

見るとそのアプケロスはスバル達に走ってきている。

「つつ、蔦登れ! あいつらは多分登れないはずだ!」

「無理だ! あいつをどうにか潜り抜けないといけない!」

「だったら高台だ!」

「ここからだと遠いよ!？」

「打つ手なしかよ!？」

「スバル、閃光玉を使い!」

カクサスの提案は正にスバルに対しての死刑宣告と同等。

「・・・俺に死ねって言いたいのか!？」

「俺やノブも共に犠牲になる!」

「任せろ!」

犠牲はスバル一人にさせないという二人。

「俺は知らねえぞ!?!? どうなっても!」

スバルはやけくそになって閃光玉を投げた。

閃光玉は空中で破裂し・・・

「この隙に移動するぞ!」

とスバルが叫び・・・

一度は離脱したが・・・

「・・・こ、ここまで来れば大丈夫だろう・・・」

「な、なんとか高台に着いたからね・・・」

「ぜ、全員いるみたいだな・・・」

息絶え絶えになってベースに着いた三人。

「・・・今回、あの光で何体人になったんだろうか・・・」

「・・・スバル、数え方が違うよ。何体女の子になったんだろうか、だよ・・・」

「その冗談が笑えない・・・」

冗談ももう冗談とは思えない状態になっていた。

30分後。

「・・・もう一度行ってみるか・・・」

「もういない・・・だろうな・・・」

「オイラは？」

『留守番任せた。』

「酷いっ！」

そしてノブを置いてスバルとカクサスが二人で向かった。

エリア1。

「・・・なぜこんなソロソロと動かなければ？」

「・・・仕方ないだろ？ 気をつけないと捕まるだろうしな・・・」

高台にいつでも登れるよう、隅をそろそろ歩く二人。

「今回こそはっ、なにもっ、ないことをっ、祈り・・・た・・・」

スバルはある一点を見て言葉を詰まらせた。

「どうした、スバル？」

「・・・カクサス、高台に上って4経由。一気に逃げるぞ・・・」

「ま、待て、一体何を理由に・・・っ!？」

カクサスも異変に気付いた。

二人の視線の先には、離れた地点ではあるが、女の子が。

珍しく服（？）を着ていたが。

「・・・了解、直ちに逃げよう・・・」

カクサスが踵を返して高台に上ったのが悪かった。

〈あっ！〉

「やばい、見つかった!？」

女の子、スバル達を発見。

「くそっ! さっさと逃げ（がっ!）ブッ!？」

スバル、足が纏れて前のめりに転ぶ。

〈あーん、待ってー!〉

女の子はポポなどに進路を阻まれ、少ししか動けていない。

「スバル、大丈夫か!？」

「やっちゃまった……。足、捻った……」

「……こんな時に足を捻った!？」

スバル、捻挫。

「走ることはできないが……。くっ、なんとか歩くことができるくらいだ……。っ!」

スバルは捻った足を引きずりながらも歩く。

へ待ってよおっ!」

女の子はポポなどの群れの中から『絶対に追いついてやる!』というかのような声をあげた……

一方ベース。

「・・・スバル達おっそいなあ・・・。何してんだろ？まあ、大方女の子に追われてたりして？」

ノブは一人、ベースで苦笑していた。

「ここでオイラが出て行ったら・・・ま、大丈夫でしょ？あ、でも、サスケに迷惑かけたくないなあ・・・？どーもサスケ、オイラに何かしら思ってるみたいだし？」

ノブは何故かサスケのことを言っていたが・・・放置。

「まいっか。オイラもちょっと出てみて代わりにポポ手に入れよっかな？」

あまりにも暇になったノブは一人、ポポを手に入れに向かった。

雪山では・・・

「・・・やべえ、寒い・・・」

まともな装備をしていなかったため、寒さが体力を奪う。

「まさか雪山に上ることになるとは思わなかった上、追われるとは思わなかったからな・・・」

「それに・・・、足首がまだ痛む・・・」

スバルは捻った足を擦りながらぼやく。

「・・・スバル、一旦ベースに戻るか？」

「あの子に気をつけながら、な。」

スバルはカクサスの肩を借りながらベースに向かった。

一方ノブは・・・

「さーて、行きのいいポポはどいつかな〜と・・・」

ノブはポポの品定めに入る。

「こいつは足が弱そうだし・・・、こいつは体力が少なさそうだね・
・・・」

ノブは正確な品定めをする。

「お、これ問題ない！よし、こいつ捕まえよ！ということでまずは
眼潰し！」

ノブは行動を封じるために閃光玉を投げる。

「頼むから女の子にはならないでちょうだいよ〜？スバルから借り

た的な閃光玉なんだからさ・・・」

だが・・・

「・・・目的の一匹はさ、ちゃんと眼潰しできたよ？でもさ・・・」

ノブの目の前には、しっかりと眼潰しに成功したポポと・・・

「・・・（オロオロ）」

丸裸で凄い発育のいい女の子がいた。

「・・・鼻血出そう・・・。・・・ま、まずはとにかくあのポポを眠らせなきゃ！！」

ノブはすぐにネムリ玉を放り投げ、ポポを眠らせた。

「う、うん、眠ったみたい・・・。さて、次はあの子を落ち着かせなきゃ・・・。」

ノブはポポであろう女の子を落ち着かせに向かった。

「・・・！（ビクッ！）」

「えっと・・・そんなに怖がらなくていいよ？君を殺そうなんて思っていないし、武器も持っていないからさ。」

近寄った瞬間、やっぱりびくびくしてしまった女の子を落ち着かせるため、武装していないことをはっきり告げるノブ。

「・・・？」

女の子は本当かを確かめるためにノブに（足を引き摺って）近寄り、触ったりし始めた。

「ホントだって。ただ捕獲用の道具を持ってるけど、危ないものじゃないし。」

「・・・っ!!！」

自分で確認し、そして安全だということを理解した女の子は、ノブに急に抱きついた。

「ちょ、ちょっ!？あ、あのさ、だ、抱きついちゃダメだって!む、胸が当たってるって!!！」

「・・・(うるうる)」

女の子は、まるで『抱きついちゃダメ?』と言いたそうな眼をしていた。

「うー・・・、ダメって言いたいんだけど・・・、ダメって言い辛いし・・・」

「・・・♪」

女の子は嬉しそうにしていた。

「ちょっ、体押し付けないで！？胸押し付けないで！？」

かなり慌てているノブ。

だが、女の子はそんなことお構いなしに体を押し付けてくる。

「・・・もー、一旦ベースに戻りたいからいい？ポポ連れて行きたいし・・・」

「・・・♪（コクコク）」

女の子はにこやかに頷くと、ずっとその場に座り込んだ。

「ふう・・・。どうもセレナと同じように足が不自由みたいだしさ、おんぶかだっこしてかないといけないみたいだけど、ポポ運ばなきゃいけないし・・・」

ポポに近づきながらぼやくノブ。

「・・・そいつー！」

一気にポポを片手で持ちあげ、そのまま運んでいこうとして・・・

「・・・あ。」

あることに気付き、一旦下した。

「首元につかまってくれない？」
「・・・？」

ノブは女の子に首につかまるように指示。

「・・・♪(ぎゅっ)」
「うひゃっ!？」

ノブは抱きつかれたときに感じた胸の感触に思わず上ずった声をあげた。

「~~~~っ!~!こ、このまま・・・、ポポを・・・、はこ・・・ぶっ!~!」

ノブは片手に女の子を抱きかかえ、もう片手でポポを抱えた。

「スバルの苦労は・・・っ、できる限り・・・っ、相棒のオイラが・・・っ、支える・・・っ!!」

一歩一歩のしのしと進むノブ。

女の子は・・・

「・・・っ・・・／／／」

ノブが一歩一歩歩くたびに感じる振動に身じろぎしていた。

一方、スバル達は・・・

「……すまん、スバル……」
「いや、いい……」

スバルは女の子につかまっていた。

いつ捕まったのかというと、ちょうどノブが一人で女の子を落ち着かせていた時だ。

彼女はクリニアという名前だった。

「あのさ、クリニア？俺、足捻っているんだけど・・・」
「私のせいだもん、私がどうにかする！」

クリニアがスバルに抱きついたまま言う。

「いや、カクサスの方が・・・」
「いーの！」

半ば強引にクリニアがスバルを支え、カクサスも支えに回った。

ベース。

「ノブ・・・、その子は？」

「・・・ポポ。どうもね？喉に裂傷があったからさ、多分声帯切れてると思う。声が出ないもん。スバルは・・・犠牲者？」

「犠牲者じゃないもん！」

「クリニアはさっきの閃光玉で人になったアプケロス。」

お互いに紹介をするが・・・

「・・・俺は出ていた方がいいか？それともポポを連れていった方がいいか？」

「・・・とにかくさ、ポポ連れてって？起きないうちに。その後はたぶんウィリアとかが世話してくれると思うよ？」

カクサスは（まるで逃げるように）ベースから出て行った。

「・・・♪」

「うわわっ!？」

女の子はノブに抱きついてきた。

「スバル・・・／／／」

「クリニアはクリニアで変なことしやしないでくれよ・・・？」

スバルは赤面するクリニアに念を押した。

家。

「ふう……。ポポの搬入完了……。だな。」

先に帰ってきたカクサスは、農場の一部を改造して作っていた農場にポポを置いた。

「あ、か、カクサス、お帰り……。／／／」

「リナトか。ああ、ただいま。」

「はうう……。／／／」

リナトは顔を赤くして俯いた。

更に、その数時間後。

「・・・さあ、どうしよう・・・」
「・・・？」

ノブは女の子のことをどう説明するかに困り、

「・・・俺は？」
「大丈夫だと思うよ？」
「大丈夫と思えないの！」

スバルがクリニアにちょっとした突っ込みを入れ・・・

「あ、二人とも、おかえ・・・り・・・」

ウィリアが見かけ、言葉を失った。

「スバル・・・、また？」

「まただ・・・」

スバルとウィリアが二人して項垂れるという奇妙な光景があった。

その
夜。

「・・・スバル・・・」

「アイリス? どうした?」

「ポポ車ありがとう!!」

「うおわっ!」

アイリスがスバルに感謝の意を込めて抱きついたり・・・

「え、えつとですね? この子の名前は『リリィ』だそうです。」

「リリィ、ねエ?」

「それとですね?・・・本当にそう言わせるのですか?」

「・・・(コクコク)」

クロスが得意の気持ち読みでリリィの気持ちを伝えていた。

「えつとですね?・・・あ、ノブさん、退場してください。」

「うそっ!」

「乙女の話なので。」

ノブ、退場。

「サスケさんですが、『あなたはノブさんが好きなんですよね？』と。」

「・・・え、あ、そ、それは・・・その・・・／／／」

「じゃありりィさんの話は合ってるという方向性ですね？」

「・・・（コクコク）／／／」

サスケが頷いて肯定の意を示す。

「それで、『私もノブさんが好きなんです』と。」

「っ!？」

「・・・／／／」

サスケが驚き、りりィは顔を赤くして俯く。

「えっと、『それで、二人で取り合うのはノブさんに迷惑なので、私たち二人で愛し合う、というのはどうでしょうか？』とのことですよ。」

「・・・は、はい・・・。・・・そ、それで・・・／／／」

「・・・共有財産、ということでもいいですね？」

「ぎっ、財産じゃありません！」

「・・・（コクコクコク!）」

サスケが珍しく声をあげ、リリィも激しく首を縦に振った。

報酬。

入手

特になし。

報酬。

ポポ。

その他

クリニア。

リリイ。

ノブ、サスケとリリイの共有財産（笑）に。

第101話 スバル、ポポ車を手に入れようとして襲われること（後書き）

今回はクリニアとリリイの紹介です。

クリニア

アプケロス雌

身長148cm。

見た目16歳。

胸のサイズはG。

髪の色は焦げ茶色で短髪。

スバルに一目惚れし、スバルが足を捻った大元の女の子。

執念深いところはあるが、根は優しい。

本人曰く『胸は非常に柔らかい』らしい。

以外と抱擁型。それ故なのか、抱き着かれると落ち着けるとか。

名前の由来は蛇の目草より。花言葉は『私を見つめて』

リリイ

ポポ雌

身長145cm。

見た目16歳。

胸のサイズはF。

髪は長くてクリーム色、艶がある。

大分前にハンターに喉を切られ、それ以来声が出せなくなっている。
自分の意志を伝えたい時は基本はクロス頼み。

ノブが好きだが、口で何も言えず、代弁をしてもらうには恥ずかしい、という理由で、抱き着きが愛情表現。

サスケにはライバル心がなく、共有財産として、取り合わないことを決めるほど穏やか。

イメージキャラは『魔法戦記リリカルなのはForth』の『リリイ・シュトロゼック』。名前もそこから。

以上です。

次回はスバルに弟子が!?

お楽しみに!

第102話 スバルに出来た弟子（前書き）

短い上に、突貫さが伺える102話です！

彼女はただただスバルに憧れているだけの子なので、恋愛とかは気にしないでください。

では、どうぞ！

第102話 スバルに出来た弟子

「さって・・・、今日はどうするべきかな・・・」

スバルはリビングで考え事をしていた。

「スバル、どうしたの？」

「兄さん、今日のクエストのことです？」

「ロズウェル、よくわかってるじゃないか。まあ確かに、今日のクエストに行くかで迷ってたんだ。」

「今日これ行きたいな。フルフル。」

アイリスがスバルに提案していたら・・・

「クエスト、ねえ？」

ヘリアンが来た。

「スバル、クエスト行くのは構わないけど、心配させないでよね？」
「わかってるって。アイリスが下級行きたがってるから大丈夫だって。」

「・・・私もついていくわ。」

「えっ!？」

ヘリアンが着いていくと言い出し、驚くアイリス。

「アイリス、何か不満でも？」

「ふ、不満というか、その、す、スバルと二人きりで行きたいなんて・・・」

「・・・アイリスだけだと何しでかすか分からないから行くの！」
「な、なにもしないよお！」

アイリス、真っ向から否定。

「二人つきりなんてさせない！（ギユウッ！）」

「二人きりはずるいよお！（ムギユウッ！）」

「ふみゅうつ！？」

リリスが左から、クリニアが後ろから急に抱きついた。

その時、ロズウェルはリリスとスバルの間に挟まる形になった。

「アイリスだけずるいいゝ！！！」

「私も行きたいのおゝ！！！」

「ちよ、スバルに抱きついちゃダメ！」

「んむー！むー！」

ロズウェルはリリスの胸に挟まれ、またスバルの方に押され、呼吸困難に。

「リリス！ロズウェル殺す気か！？」

「ほえ？」

「ロズウェル？」

全員がスバルから離れてみた結果・・・

「あ・・・う・・・あ・・・」

ロズウェルは顔面蒼白になっていた。

「あわわあ、ろ、ロズウェルう、ごめんねえ！？」

「あ~~~~・・・」

「いかん！とにかく蘇生をしないと！！！」

朝から一騒動があった。

「とうかさバル、足大丈夫なの？ クリニアに追われて捻ったって聞いたけど・・・」

「治った。」

「えっ!？」

「俺の場合、一週間程度の怪我・負傷だったら寝ただけで治ってたし。」

「そ、そうなんだ・・・」

こんなやり取りがあった。

「つーことで・・・、フルフル狩りに来たんだが・・・」

スバルは目の前の光景に啞然としていた。

目の前では・・・

「わっ、わー！！きゃー！！わー！！」

新人ハンターであろう女の子が、なぜかガウシカに追われていた。

「・・・」

「す、スバル、こ、これって・・・」

「アイリス、それは言っちゃいけないことだと思うわよ。」
「そ、そうなのかなあ・・・？」

その光景を見ていたスバル達。

「・・・あ、防具に角引っ掛けられた。」

「振り回された。」

「投げられた・・・ってこっちに来てるぞ!？」

『うそおっ!？』

そして、その女の子はスバル達に向かって投げられた。

「きゃあああっ!!」

「ぶふあっ!？」

「わきゅうっ!」

そしてスバルとアイリスに直撃。

「痛た・・・」

「・・・皆、大丈夫？」

「えっ、あっ、す、すいません!」

女の子は慌ててスバル達の上から退く。

「あたた……。あ、あなた、ハンター、だよね……。？」

「は、はい、まだ新米ですけど……」

「それで？なんでガウシカに追われてたの？見た限り牡だったけど・
・・」

「……間違えて牝のガウシカを切ってしまつて……」

どこかとぼけた答えを出す女の子。

「あ、名前聞いてなかった。」

「は、はい、わ、私はレミリアです！」

「私、アイリス。」

「私はヘリアン。それで、あなたの近くで目を回してるのがスバル。」

」

「えっ！？あの『英雄』スバルⅡフロストエッジさん！？」

スバルの名前を聞いた途端、突然興奮しだすレミリア。

「どの『英雄』なのかは知らないけど……。そのスバル。」

「わ、私、スバルさんに憧れてハンターになったんです！」

「スバルに……。憧れて？」

「はい！シエンガオレンを一人で倒して生還し、生還者がいないと言われたクエストから生還したと言われてますから！」

「……スー君、そんなに有名になってたんだ……」

「ヘリアン？」

「なっ、なんでもないわよなんでも！／＼／」

「顔、赤いよ？」

「・・・（バリバリバリバリ！！！）」

「ごっ、ごめんなさ〜い！」

ちよっとキレ気味に体から電気を発するヘリアンに物凄い速さで逃げるアイリス。

「でも、こんな形で会えるなんて・・・」

「・・・あ、あなたって教官さんにいろいろ習ってた？」

「あ、はい。2年ほど勉強しました。」

「でも、スバルが有名になったのってつい最近だよ？」

「そこで噂になってたんです。『とても強いハンターがいる』とか。」

「ふええ・・・」

ただただ驚くだけのアイリス。

「う・・・」

そんな最中、スバルが目を覚ました。

「あ、スバル！」

「・・・一体何が・・・」

「あ、あの！」
「んあっ？」

まだ完全に意識が覚醒したわけでもないために気の抜けた返事をしたスバル。

「わっ、私を、で、弟子にしてください！」
「・・・弟子？」

スバルがレミリアに聞き返す。

「とういか、名前は？」
「あっ、し、失礼しました！わ、私はレミリアⅡレイスレミルです！」

「レミリア・・・ね。弟子になるって言っても何もできないぞ？」

スバルは断りを一応入れる。

確かにスバルには、誰かを弟子として取るような技術も、教えられることも無い。

「で、ですけど！せめて基礎を教えてください！」
「・・・だったら。」

「いいの？」

「基礎くらいなら教えてもいいかも、と思ったただけだ。」

「それも・・・、そうね・・・。」

「あっ、ありがとうございます！」

レミリアが弟子になった。

おまけ。

「・・・とりあえず、ポポを討伐してみて？」

アイリスが急に提案。

「ぼ、ポポ・・・ですか？」

「ああ、そうだな。まず実力を把握しておかないとどのあたりから教えられるかわからないしな・・・」

「じゃ、じゃあ、行きます！」

レミリアはそうしてポポに向かって行ったが・・・

〈てやーっ!!!〉

〈ブオッ!?!〉

〈あっ!?!外れちゃった!?!〉

〈ブオオッ!?!〉

〈きゃあああ!!!〉

「・・・基礎中の基礎から、だな。」

「まさかポポすら狩れないなんて思ってもみなかったわよ・・・」

結局、レミリアはぼーいと放り投げられていた・・・

報酬。

入手、クエストクリア

特になし。クエストはリタイアしたため。

その他

レミリアが弟子になった。

第102話 スバルに出来た弟子（後書き）

今回は、レミリアの紹介です。

レミリアⅡレイスレミル

駆け出しハンターの子。

身長146cm。

16歳。

（どうでもいいかもしれないけど）胸のサイズはC。

教官の許で2年間知識や実力を付けてきた・・・はずだったが、ポポすら狩れないというヘタレな子。

訓練所で男女問わず話題となったスバルを目標としている。

ドジっ子。

以上です。

次回はスバルとアイリスが・・・！？

お楽しみに！

第103話 動けない二人、進展した恋・・・？（前書き）

Rー15は最早定番となった感じでお送りします103話！

何があったのかは自分の目で！

では、どうぞ！

第103話 動けない二人、進展した恋・・・？

「・・・スバル・・・、動いちゃダメ・・・／／／」
「動くなって言われても無理なものは無理だ・・・。というよりも動けない・・・」

現在、二人は崖の下の蔦の群生地にいた。

彼らの足や腕、体には蔦が絡まっており、動けないでいた。

「ひゃあん！だ、ダメ、い、息かけちゃめえ・・・／／／」
「首すらまともに動かせない状況でそれは無理だ・・・。というかアイリスの胸で視界が全くないんだが・・・」
「わ、私のおっぱいで！？」
「う、動くうぷっ！？」
「ふあっ！！」

なぜ、こんなことになっているのかという・・・

時間は2時間前にまで遡る。

二人は密林に来ていた。

「こ、今回は二人きり・・・なんだね・・・／／／」
「ま、まあ、確かにな・・・」

二人は密林の高台に来ていた。

「き、今日はなんだったっけ、クエスト・・・」
「ドスファンゴ討伐、と聞いていたが？」

二人して密林を歩き回り、ドスファンゴを探す。

「でも・・・、嬉しいな・・・／／／」

「・・・だな。」

そして、別の場所へ向かったその時。

「結局、ここもはずれ・・・か。」
「そうだね・・・」

そして踵を返した瞬間。

ブルルア・・・

「いたあっ!?!」

アイリスがドスファンゴ発見。

「明らかに不利だ!逃げ場も無し、想定外過ぎる!」
「ど、どうしよう!?!」

スバルが現状確認をし、そしてアイリスが慌てふためいて・・・

ブルアアアアアア!!

ドスファンゴが突進した。

「まずい、ガードしても防ぎきれない!」
「ど、どうするの!?!」

そして、更に焦りが募り・・・

ドンッ！！

「がっ！」

「きゃあっ！！！」

二人にぶつかり、そのまま下に落ちた。

「きゃあああああ！！！」

「くっ、このままじゃ二人とも大怪我か死ぬか・・・せめてアイリスだけでも・・・っ！アイリス、どうしてもいいから俺に抱きつけ！」

「・・・っ！！（ギュウッ！！）」

そして・・・

バキィッ！ガサガサバキバキメシメシィッ！！

ドサアッ！！

「はうう・・・す、スバル、大丈夫・・・？」

「だ、だいじょう「ひゃああっ！？」ぶだ・・・」

スバルが声を発した瞬間、悲鳴に近いような声を上げたアイリス。

「す、スバル、ごめん、動けないの！」

「お、俺も・・・だ・・・」

「ひゃあん！」

お互いに鳶が絡みつき、動けない状況になっていた。

更に、スバルの上にアイリスが乗る、という状態になっていた。

そして、今に至る。

「誰か、助けにきてくれないかなあ・・・」

「・・・」

「スバル・・・、何か喋ってよお・・・。私が我慢すればいいだけだもん・・・／／／」

「・・・いいのか？」

「んっ・・・、だ、大丈夫・・・だからあ・・・／／／」

「心配だったの・・・。緊急時の狼煙や合図を上げられないしな・・・」

「そ、そう、だね・・・／／／」

ちょっと小刻みに体が震えているアイリス。

「それで、アイリスはどこがどう絡まってる？」

「え、えっと、手が両方とも前で縛られてるようになってるし、腰

にもあつて、足も縛られてる・・・／／／」

「・・・俺はまるで磔にでもされたような気分だ・・・」

「・・・どう・・・なっちゃうのかなぁ・・・／／／」

「・・・下手に動かない方がいいかもな・・・」

そして、そのまま1時間が過ぎた・・・

その頃、スバル宅では・・・

「・・・うゝっ!!」

物凄いいらいるシロンがいた。

「シロン・・・?」

ウィリアが恐る恐る聞く。

「だって！朝クエストに行ったつきりで帰ってこないのよ！？何かあったら私・・・私・・・っ！！」

「し、シロン、お、落ち着いて・・・？」

「わーーーーーっ！！！！」

スバルがいないという理由で苛立ちが募っていたシロン。

へだ、誰か！ナコルを止めてくれ！

へふにゃーっ！！

奥ではナコルが暴走しており、挙句の果てには・・・

「・・・」

「へ、ヘリアン、クリニア、元気出してよ！」

ヘリアンとクリニアが凄い落胆をしており・・・

「・・・ロズウェル君で我慢するう！！」

「わ、私も！」

「わわっ！？ちょ、リリス！プラナ！やめて・・・／／／」

スバルがいないということでロズウェルがリリスとプラナに抱きつかれていた。

「・・・私とスペリアで探しに行こうか・・・？」

「うん、お願い・・・」

「では、行ってきますね？」

スペリアとプリムラがスバル搜索に向かった。

行方を眩ましたとされる密林へ。

「・・・あいつとアイリス、どうしたんだろ・・・」

「ライラ、心配なら一緒に行った方がいいんじゃない？」

どこか心配そうにしているライラに提案をするウィリア。

「ばっ、バカ言わないでよ！し、心配してるわけじゃないんだから
！／／／」

「・・・明らかに心配している感じの発言だよそれ？」

「そっ、そんなわけじゃない！／／／」

ツンデレ発言。

そしてロズウェルは・・・

「プラナ！リリス！ロズウェル君が！」

「ほえ？」

「ふえ？」

ダフネに言われて改めて抱きついていたロズウェルを見たら・・・

ロズウェルは顔を真っ赤にして気を失っていた。

「あわ、あわわわわ！？」

「ろ、ロズウェル君！しっかりするんだ！み、水か！水で濡らしたタオルを！」

へわ、わかった！✓

こんな騒動があった。

「あ、アイリス、腕、引き抜けるか・・・？」
「む、無理い・・・。だ、だって、スバルが・・・」
「俺が何？」

「おっぱい触ってるからぁ・・・ひゃうん!!」／／／

「俺にどうしろって言うんだ・・・?」

「も、もうらめえ・・・／／／」

「が、我慢してくれ!倒れたら息できなくなるから!」

「らめ、らめにゃのお・・・(訳:ダメ、ダメなお・・・)／／

／(へたり)」

「ふぐううっ!」?

「ふぁぁぁぁあっ!!」

今まで体を支えていた腕から力が抜け、そのままスバルの上にへたり込んでしまうアイリス。

同時に彼女の胸がスバルの口まで塞いでしまい、スバルは同時に呼吸ができなくなる。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ・・・、ふにゃぁ・・・／／／」

アイリスはスバルの上でぐったりとしている。

(スバル..そ...ろそろ...、せめて...、腕を抜かないと...っ!!)

スバルはスバルで焦りを覚えていた。

「ふあ、ふあいふいふ！ふおつふおふあふあふえふふあらふあふあ
んふいふおふお！？」（訳…あ、アイリス！ちよつと暴れるから我慢
しろよ！?）」
「えうえ・・・?」

力が抜けているため、謎の答えしかできないアイリス。

「ん・・・ん・・・ぐうつ・・・ぎぎぎ・・・」
「あふっ!?あ、んっ！ふあっ！ら、らめ、あうっ！んあああっ！
!／／／

スバルが渾身の力を込めて蔦から腕を抜こうとする。

その上でアイリスが大変な目に遭っていることなど露知らず。

「・・・だああっ!!」
「あふっ・・・はっ・・・はっ・・・はっ・・・／／／」
「くうつ・・・!はあっ!!よし、抜けた!もう片方も同じように
抜いて・・・!」

スバルは同じように力を入れてもう片方の腕を抜き・・・、

「・・・あとは・・・俺の足と・・・、アイリスの体全体に絡みつ

いた鳶・・・だっ!!」

足は後でどうにかするとして、アイリスの腕の鳶の切断にかかったが。

「・・・アイリス、少しくらい全体を下に下げられない・・・か？」
「む、むりらよお・・・、こ、こひによひょうを・・・（訳：こ、腰の方を・・・）／／／」

スバルの体の方が下にあり、アイリスの腕は完全に上に伸びてしまっていた為にどうしようもなくなったのだ。

なのでアイリスは腰の鳶を切ってほしいと要求。

「腰・・・か・・・っ! だったら・・・とにかく、顔を出さなければ話にならないぞ・・・!」
「・・・んうあ・・・／／／」

スバルが出ることと言った時、アイリスはピクツ、と体をよじらせた。

「ら、らいりよーぶらからあ（訳：だ、大丈夫だからあ）・・・／

／＼

「と、とにかく、まずは顔を出す・・・ぞっ！」

「うあん！／＼／」

スバルが勢いよく顔を出した。

「・・・ぷはあっ！よし、これで腰の蔦を切れる！」

「はあ・・・、はあ・・・、はあ・・・／＼／」

アイリスはぐったりしきってしまったていた。

「左腕も・・・出して・・・っ！！それで・・・、蔦を・・・、よし、切れた！」

「ふあっ・・・、あふう・・・／＼／」

そしてアイリスの腰に絡まった蔦を切ることができた。

「足の蔦を切って、そしてアイリスの腕の蔦切って、それでお願いします。」

なんとなく余裕の表情が浮かびだしたスバル。

「それで・・・よっと!・・・っと!・・・おし、足の蔦切った!」

そして、アイリスの腕の蔦も切り、絡まった部分は無くなった。

「・・・ふう。アイリス、動け・・・そうか?」

アイリスをどうにか仰向けにして聞く。

「む、むりらよお・・・／＼／＼」

アイリスはアイリスで、目の焦点が合っておらず、小刻みに体が震えていた。

「・・・仕方ない、どうにかするか・・・」

明らかに無理そうだったためにスバルはアイリスを抱きかかえていくことにした。

その時・・・

ギュウッ!!

「うおっ!？」

アイリスが不意に抱きついたので。

「あ、アイリス!？」

「はううゝ・・・／／／」

結局訳がわからずになっていたが・・・

「・・・今気づいたんだが、夜になってるんだな・・・」

改めて上を見たところ、星が見えた。

「今日は・・・野宿か？このままあっち行っても通れないことはないが、確実に道に迷うだろうし、鳶はアイリスを抱えながら登るのは不可能だろうし・・・」

決断を下すのも時間はかからなかった。

「・・・とりあえず、火を焚くか・・・」

ぐったりしているアイリスを護るようにしながら火をたいたスバルであった。

一方。

「スバル達はここに来たんだよね・・・？」
「そう聞きましたけど・・・」

スペリアとプリムラは、スバル達が遭難したとされる密林に来た。

「スバルさんとアイリスさん、大丈夫でしょうか・・・？」
「大丈夫だと思う。けど・・・」
「けど・・・？」
「嫌な予感がするの・・・」

「だ、大丈夫ですよ！けど・・・」

「けど？」

「そ、その、へ、変なことしてないかな・・・とか、そのお・・・」

／＼／

「恥ずかしく思うことなら言わなくていいのに・・・」

そんなこんなで話していた。

「アイリス、大丈夫か？」

「お、落ち着いたけど・・・、おっぱい触られたらすぐダメになるかも・・・／＼」

「・・・悪い、事故とはいえあんなことしたことは・・・／＼」
「いいよ・・・／＼」

そして、沈黙が流れた・・・

「・・・あれ、あそこ・・・」
「変に明るいですね・・・？」

火を焚いていた結果なのか、プリムラとスペリアが気付いた。

「ひょっとして・・・、そこにいるのかな・・・？」
「そう・・・かもしれませんね・・・？」
「行ってみよっか・・・」
「そうですね・・・」

二人でその明りの許へ向かった。

「・・・畜生、さっきのドスファンゴめ・・・」

「スバル？」

「・・・また足捻った・・・」

「ホント？」

「ホント。その上アイリスに事故とはいえ酷いことしてしまったし・
・」

「ひ、酷いことじゃないよ！む、むしろ嬉しかったし・・・／／／」
「こんなことが嬉しいとかありえないぞ普通は・・・」

アイリスの発言に引き気味になるスバル。

「あ、ありえないもん！／／／」

「顔赤くして言うかねそこは・・・」

「あう・・・／／／」

スバルが言った正論に顔を赤くするアイリス。

「・・・あとね？スバル、ありがと・・・／／／」

「いや、あれは必然だし。俺も動くようにするためには通過する過程だったわけだし、それに、その、な？・・・言い辛いことだが・

・
／
／
／
「・・・？／／／」

お互いに顔を赤くする。

「好きな人を助けるのは・・・当然だろ？／／／／」
「・・・す、スバル・・・／／／／」

はつきりと言われ、より顔を赤くした。

「・・・ね、ねエスバル・・・」
「・・・ど、どうした・・・？」

アイリスが不意にスバルを呼ぶ。

そのアイリスは体を小刻みに震わせていた。

「さ、寒い・・・」
「・・・こっちに来れるか？」
「う、うん・・・」

スバルの許へちよこちよこと近寄るアイリス。

「・・・どう・・・するの？」

アイリスがスバルに聞いた時だった。

ギュウツ!!

「ふひゃあっ!?!」

スバルがアイリスに抱きついた。

「え、ちょ、す、す、スバル!?!ど、どどど、ど、どうし・・・／
／」

「抱きついていた方が暖くなるだろ?」

「そ、そ、そ、それは、そ、そうだけど、そ、その、は、は、はず、
恥ずかし・・・／／／」

「寒いのと恥ずかしいの、どっちが嫌だ?」

「ど、どっちも嫌・・・／／／」

いつにも無くしおらしいアイリス。

「・・・とりあえず我慢してくれ。俺だった恥ずかしいんだから・・・

・
／
／
／

「うん・・・／／／」

近くで火を焚いているが、それでも寒さは強かった・・・

「・・・あ、あそこだ・・・」

「あつ、火が！」

スペリアが火を発見。それと同時に・・・

ブルル・・・

「ドスファンゴ・・・！」

「スバルさん達があそこにいる理由はこいつですね・・・」

「・・・スペリア、私に任せて・・・！」

ドスファンゴが臨戦態勢に入る中、プリムラは氷の爪を生成し終わっていた。

「一撃で・・・殺す！」

お互いに突撃をし・・・

ドスファンゴの首が空を舞った。

「・・・うぷ・・・」

スペリアは戻しそうになった。

「ふう。・・・スペリア、大丈夫？」

「だ、大丈夫です・・・うぷ・・・」

「・・・ちよつと離れていて？」

「は、はい・・・」

スペリアのために少し離れて、プリムラは一人死体の処理に走った。

「
・
・
・
」
ね
ね
エ
ス
バ
ル
・
・
・
」

アイリスがスバルを呼び掛けるも、スバルからの返事はない。

「・・・スバル・・・？」

スバルを再度呼んだ時・・・

「・・・すう・・・すう・・・」

スバルは眠っていた。

「スバル・・・」

スバルの寝顔を見てアイリスはぼーっとしていた。

ただ、内心は・・・

（アイリス…え、えっと、ど、どういふことなのかな・・・！？こ、これって！？あれ！？う、動けないよ！？）

焦っていた。

そして内心落ち着いて・・・

「スバル・・・ありがとね・・・。やっぱり私、スバルのことが・・・好き・・・／＼」

と呟いた。

そして、スバルにキスしようとして・・・

〈二人ともーっ！大丈夫ーっ！？〉

「わきやうっ！？／＼」

突然した声にびっくりしてしまった。

声の主はプリムラだった。

「え、ぷ、プリムラ！？」

〈・・・ごめん、お邪魔だった！？〉

「あの、その、それは、だ、大丈夫、というかなんというか・・・

／＼

しどろもどろにこたえるアイリス。

「ん・・・なんだ・・・？」

「た、助けが来たの！ プリムラが来てくれたの！」
「そ、そうか！」

目が覚めたスバルもほっとしたようだ。

そして二人は無事に帰路につけた。

家。

「ただい『スバルっ！！！』まあっ！？」

ドアを開けた瞬間、シロン、ナコル、リリス、プラナ、サンナに抱きつかれたスバルはそのまま後ろに倒れてしまった。

「わきゃっ!?!」

アイリスを巻き込んで。

「つつう・・・」

「心配・・・したんだよお・・・」

「もう・・・帰ってこないんじゃないかって・・・思ったんだから・・・」

涙声で言うリリスとシロン。

ナコル、プラナ、サンナは何も言わずして泣いていた。

「お、重いよお・・・」

下でアイリスは別の意味で泣いていた。

おまけ。

「はふう・・・／＼／」

風呂にて、アイリスは湯船に浸かりながら、今日のことを思い返していた。

「スバルに抱きつかれちゃった・・・／＼／」

結局ドキドキしっぱなしになっており・・・

「アイリスさん？大丈夫で・・・アイリスさん！？大丈夫ですかあ！？」

アイリスが長風呂していた為に心配していたカトレアが、湯船にうつ伏せで浮いていたアイリスを発見するという事件が起こってしまった。

報酬。

入手・クエストクリア

失敗と同意義のためなし。

その他

アイリス、スバルがより好きになる。

第103話 動けない二人、進展した恋・・・？（後書き）

今回はプリムラが殺したドスファンゴが二人の恋をより進展させてくれました。

ドスファンゴに敬礼！

今回はスバルに（義理の）娘が！

お楽しみに！

（105話の緊急事態も明らかに！）

第104話 One father, Two daughter, Mother

今回のタイトルはメチャメチャ関係あったりします。
最後の方で爆弾発言あり！

では、どうぞ！

**第104話 One father,
Two daughter,
Moth**

きっかけは、たった一枚の手紙だった。

「・・・封筒？しかも、書いたのは親父・・・？」

やることが無く、たまたま倉庫を掃除していたら見つけた手紙。

スバルの父親が書いた、まるで遺書のような手紙だった。

「なにになに・・・？『Dear My Son（親愛なる息子へ）』
・・・ってふざけてんのか親父は！？」

一行目を読んでスバルは思わず突っ込んだ。

「ま、まあいい。肝心なのは内容だ内容・・・。・・・『突然の話で悪いのだが、実は、雪山に元クシャルダオラと思われる女の子が二人、眠っているのを確認した。まるでそこだけ時間が流れていないようになっていて、その子たちは外見が3歳くらいの幼い子だった。』・・・はあっ！？」

内容を読んでいて驚愕の事実を知り驚くスバル。

「『私からの頼みは、その子たちをどうにか回収できないだろうか、ということだ。』・・・要相談、だな。」

手紙を持って、スバルはリビンググへ向かった。

「へえ・・・、スバルのお父さんが・・・」

「・・・んで、さっきの手紙の話に戻る。親父の遺書の手紙からすると、どうやら雪山にそういう場所があったらしい。それで、今回は特別クエストとしてそこに行ってみようと思う。律儀に親父は地図を作ってくれていた。」

全員が不思議そうな眼をしている。

「とりあえずメンバーは俺と・・・アイリスでいいかな？」

「二人きりか・・・。いーなー・・・」

何気なくチェリムルが呟いた。

「うー・・・、私も行きたい・・・」

「わ、私も行きたいですよ・・・」

「ま、帰ってきたら修行つけるからさ。それで我慢して『我慢（する／します）！！』・・・くれるか。」

あっさりと了承したナコルとシロン。

「いーなーいーなー・・・」

サンナは指を咥えて呟いていた。

「姉さん、羨ましがってもダメなときはだめなんだって。」
「うーらーやーまーしーいーのー!!」

完全に駄々をこね始めたサンナ。

「いい加減にしろ!」
「はひゃい!!」

マルスがついにプツンときて、サンナを一括した。

「そこまでうるさいとき、アタイがいライラすんのも分かるだろ!」
「?」
「はいいい・・・」

縮こまるサンナ。

「・・・じゃ、決まりだな。俺とアイリスだけで行ってくるからな。」
『いってらっしゃーい。』

ウィリアとデイルカとカンナ・ランが玄関で手を振っていた。

クエスト…父の遺言

開始。

エリア7。

「・・・地図だとここに抜け道があるみたいなんだが・・・」
「んゝ・・・。あ、スバル、ここに抜け道があったよ。」
「ホントか!？」

スバルはアイリスが立っているところへ走っていく。

「ほら、ここ。」

「・・・ホントだ・・・。地図の位置と一致してる・・・人一人通るのがやっとな幅だな・・・。」

「スバル、先行って・・・？」

「あ、ああ。」

スバルが先陣を切ってその抜け道を進む。

「く．．．、相当．．．、狭いな．．．」

「．．．ホントに．．．ぎりぎりだよ．．．」

「通れそうか？」

「お、おっぱいが引っ掛かりそう．．．／／／」

「．．．頑張れ。」

「酷いよお！」

そんなこんながあつて。

「よし、抜けた！」

「わ、私も！」

二人とも抜け道を抜けて・・・

「・・・ここ、だな。」

「氷の扉があるね・・・」

「なにになに・・・？ 『優しき心を持たぬ者、通ることを禁ず』？」

「優しくない人は通さない、ということかな？ でもスバルは通れると思うよ？」

アイリスの推測は・・・

ギィィ・・・

「開いた・・・」

当たった。

「親父の言っていたのはこの先に・・・!?!」
「そう・・・だね・・・!」

二人は恐る恐る扉の先に進んだ。

「・・・スバル、あれ・・・！」

「・・・親父の言う通り、かよ・・・！」

スバル達は祭壇と思われる物の前に横たわる二人の女の子を見つけた。

その女の子達は氷で作られたであろう棺のようなものに入っていた。

「ゆ、幽霊とかじゃないよね・・・」

「あのさ、前シロンとかを幽霊話で怖がらせた女の子の態度かそれは？」

「い、言うのは怖くないけど聞いたり見たりするのは怖いんだよ・・・」

スバルにしがみついてふるふる震えているアイリス。

「とりあえず近づいてみる。話はそれからだ。」

「き、気をつけてね・・・」

スバルは慎重に棺に近づいていった。

「
・
・
・
本当に
・
・
、
生
き
て
い
る
の
か
・
・
・
・
?」

スバルが疑問に思うのも無理はない。

まるでまだ生きているかのような肌の色をしているのだ。

「どう・・・なんだ・・・？」

と言って棺に触れた時。

パリン！！

「うわっ!？」

棺を形どっていた氷が割れたのだ。

「スバル!？」

「大丈夫だ、棺は割れたが外傷はない!どこも切っていないから!」

アイリスも慌ててスバルに駆け寄った。

「・・・ホントに・・・いたね・・・」

「ああ。しかも・・・生きているようだ・・・」

と言って女の子に手を触れた瞬間。

パチリ。

「うおわっ!?!」
「きゃあっ!?!」

女の子達が同時に目を覚ましたのだ。

「ふみゆ・・・」
「ふみい・・・」

眠そうに眼をこすった後・・・

スバルの方を見て・・・

「・・・パパあっ!?!」

抱きついた。

「・・・ええええええええええっ!?!?」

二人同時に絶叫。

「す、すす、すすスバル、い、いいいつの間にこここんな子を・
・!?!」

アイリスは完全に焦ってしまっていた。言葉が混乱してしまっていることでよくわかる。

「し、し、知らん! 誰かが妊娠した、なんて話はないだろ!?!」
「そ、そそそうだけど!」

スバルとアイリスが物凄い言い合いをしていたら、片方の女の子がアイリスの方を向き・・・

「ママっ!」
「・・・え?」

アイリスに抱きついた。

「・・・その子は・・・、俺が父親で、アイリスが母親・・!?!」
「じゃ、じゃあその子は・・!?!」
「わ、わからん、一旦帰ってみないとな・・・」

スバルは二人の女の子を連れて帰路に就いた。

家。

「た、ただいま・・・」

「お帰り。・・・あれ、その子たちは・・・」

「親父の手紙に書いてあった場所にいた子。」

『パパ♪』

「・・・（啞然）」

ウィリア、二人の女の子の『パパ』発言に啞然とする。

「スバル、誰かを妊娠させたってことはない「天地神妙に誓ってそれは無いと言おう。」んだね・・・？」

高速で否定するスバル。

「ママ、この人だれ？」

「っ！！？」

ウィリア、更に驚愕。（この時の顔は（○△○；）といった感じか）

「ま、ま、ママ？え、い、いつアイリス子供を・・・」

「あのね、ウィリア？私のお腹がいつ大きくなってた？」

「あ。」

ようやくしてウィリアが気付く。

「そ、そそそうだね！？そうなるとおかしいよね！？だだだ大丈夫だからああああ安心して！？」

「お、落ち着いてウィリア！？全然大丈夫に見えないよ！？」

パニックになりきってしまったっているウィリア。

「ど、どうしたのお？」

そしてリリースが下りてきたとき、騒動は決定的なものになった。

「ママーっ！！」

『っ！？（その時の顔は（○△○○；））』

もう一人の女の子がリリースに飛びついた。

「わ、私がママあ！？」

「ママ〜♪」

リリスに思いきり甘えたそうにしている女の子に戸惑いを隠せないリリス。

「・・・手紙の最後、実は俺だけ読んだんだが・・・『その子たちの面倒は、お前と《母親》と呼ばれたことで面倒を見てくれ。』と。」

「私がこの子で・・・」

「私が・・・この子お？」

よくわからないまま二人の娘を持つことになったスバルと、一人ずつ持つことになったアイリスとリリス。

「・・・名前は・・・二人で決めてくれ・・・」

「あ、う、うん・・・」

「ウィリアあ、スバルをお、運んであげてえ？」

「う、うん、わかった・・・」

ウィリアはウィリアでまだ心の整理がついていなかった・・・

「名前・・・名前・・・」

「私・・・、この子の名前を『ファイナ』にしようって、思ったんだあ・・・」

「なんで？」

「この子の目があ、サファイアの色と一緒にだったからあ。」

「わたしは・・・『ガネット』、かな？」

「うん、いい名前だねえ。」

二人で和やかに名前を決めていた。

スバルはただ一人、自室にいたが・・・

「あの二人、なぜ眠っていたんだ・・・？そしてなぜ俺が近付いた途端に目覚めたんだ・・・！？」

スバルが思案に耽っていたら・・・

ダンダンダンダンダン！！！！！

荒々しくドアを叩く音が。

「まったく・・・。今何時だと思ってんだっての・・・」

半分怒りながら玄関まで歩き、ドアを開けた瞬間・・・

「スバルあっ！！！」

「・・・どうしたんだよ元変態・・・」

アルが訳のわからない声を上げながら入ってきた。

「ど、ど、どうしよう！？」

「あー、まず落ち着け。そんなに慌てていたら全然話がわからん。」

「はあーっ・・・、はあーっ・・・」

そして深呼吸を繰り返したアル。

「落ち着いたか？」

「い、一応・・・」

「そ、それで？何があったんだ？」

「そ、そうだ！あ、あのな！？」

アルが一拍置いて、爆弾を投下した・・・

「サツキとユキが妊娠した・・・!!」

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第104話 One father, Two daughter, Mother

今回のネタは・・・探してみてください。

そして、最後のアルの発言。

その真実は次回で！

刮目（くあくつもく）して次回をお待てええ！（若本さん風）

第105話 真実（前書き）

今回は・・・、今までの中で一番際どくなっております・・・

15歳になっていない人は読まないように！

苦手な人は引き返しをよろしくお願いします！

第105話 真実

前回のあらすじ。

アルが、サツキとユキが妊娠した、とぬかした。
(B Y スバル)

「アル・・・、見栄張ったわけじゃないよな？」

「そんなわけあるか！？ 見栄張ってたらあんなに慌てないだろ！？」

「・・・ということは真実、ということだな。一体どうやって・・・
つか、襲ったろ、お前が・・・」

「いや、襲われたのは俺だ！」

「・・・嘘だな。」

「嘘じゃねえ！！」

やはり、今までのことがあったため、信じてもらえないアル。

「だったら、話を聞かせてくれ・・・」

「OK、聞かせてやるよ、俺の部屋でな・・・」

スバルは、誰にも気づかれないようにアルの家へ向かった。

アルの部屋についてから、アルは話し始めた・・・

「簡単に言うとだな、一昨日の夜に突然サツキとユキが俺の部屋に来て・・・」

「・・・そのままお前が押し倒されて・・・か？」

「押し倒されただけじゃねえ。ユキがそのままホールドしたかと思ったらサツキに食われた・・・」

「おー、見事な連係プレー・・・」

「そして一回やっちゃった、と思ったらそのまま入れ替わりにユキ

に・・・」

「立て続け、か・・・」

「言うな・・・、皆まで言わないでくれ・・・」

アルが思い出して震えだした。

アルの話をもとめるところなる。

一昨日の夜。

「くああ・・・、そろそろ寝るかあ・・・」

アルは大欠伸をして自分の布団に向かう。

（アルはベッドなど、少し高いところで寝るのを嫌う。足をぶつけるのが嫌だから、らしい）

そして、布団をどかし、『さあ寝るぞ』と言った瞬間・・・

カチャ・・・

控え目な音を立てて戸が開いた。

『アル・・・／＼／＼』

入ってきたのはサツキとユキ。

「ん？どうした？」

「ねえ・・・アル・・・／／／」

（アル・・・どこことなくサツキとユキの顔が赤いし、目が・・・
蕩けたような？）

そんなことを思っていたら・・・

『・・・しよ・・・／／／』

「え、ちょ、待って！？なんかもう色々待って！？」

いきなりの発言に完全に混乱するアル。

「し、しよって何を！？」

アルが慌てて聞き返した時。

ガバアッ！！

「うわわっ！！」

二人が急に抱きついた。

『アル・・・、私のこと・・・好き・・・？／／／』

「す、好きと言われれば好きだけどさあ・・・／／／」

『私も・・・好きだよ・・・。だけど・・・、だけど・・・っ!!』

そして一気に布団の方へ倒れ・・・

ボフッ!!

「げふっ!？」

「もう耐えられないの!もう・・・、抱きつくだけしかできないのが耐えられないの!／／／」

「お願い! 私たちとしてよお!／／／」

普通と全く逆の事態に戸惑うアル。

「い、いやね? 普通それは両方の同意があってやるべきことでしょ?」

しどろもどろになりながらもあるが反論したら・・・

バサアっ!!

「ぶっ!？」

「これでも・・・ダメ・・・?／／／」

サツキが着ていたものを急に脱いだ。

「アル・・・／／／」

「だ、ダメだって!ダメだから!ダメだってええええっ!!!／／／」

結局、アルはサツキに食べられました。

「あっ……ん……も、もうらめえ……はふう……／＼／＼」
「お……前は……、俺を……、殺す気……か……!？」

サツキとアルはぐったりしていた（アルは精神的にも、である）。

「アル……、わ、私も……／＼／＼」
「も、もう、無理……だ……。つ、つか、い、いつ裸に……
なった……。んだ……。!？」

アルはもう無理だ、と否定（疑問込みで）。
が。

ちゅっ。

「ふぐむ!？」

「あふ・・・んちゅ・・・はふ・・・／＼／」

口をふさがれ（キスで）、体は抱きつかれていて自由はきかず・・・

「私の初めて・・・、あげるね・・・／＼／」

の一言で、

アルはユキに食べられました。

「はふ・・・、はふ・・・、はふ・・・／＼／」

「・・・（返事が無い、ただの屍のようだ）」

「もっろお。もっろお・・・（やく..もっとお、もっとお・・・）

／＼／

「・・・（返事が無い、ただの屍のようだ）」

結局、朝方ナツキがこの行為を見つけるまでの間ずっと続いていた、
とのことだ。

その時のナツキは、

「ちょ、ちょっと！？アルが真っ白になって何かが口から出てるわ
よ！？これ、襲ったのどっち！？」

と焦ったらしい。

更に、ナツキ曰く『完全に狂っていたわ・・・。目の焦点は既に合

って無かったし、二人の頭は快感に溺れることだけしか考えてなかった・・・と思うわ・・・。というか、あれは普通男がなる状態じゃないの・・・？』とのこと。

（余談だが、ナツキがこの状態を見つけた理由が、『アルの部屋からサツキとユキの喘ぎ声が聞こえたの不自然に思ったからよ？べ、別にアルが気になったわけじゃないんだからね！？』と、ツンデレ込みの話でこうだったらしい。そのことが偶然アルの命を救ったことになった）

翌日昼（このころ、スバルとアイリスは蔦に絡まり、身動きが取れなくなっている）。

「うう・・・」

「うえ・・・」

「どうしたの？」

急に吐き気を催したサツキとユキに、モミジが心配そうに聞く。

「だ、大丈夫だから・・・おええ・・・」

「そ、そうだよ・・・うええ・・・」

「・・・医者さん行ってきたら？」

「その方がいいわよ？・・・あ、あれがあったんだし・・・／／／」

「『あれ』？」

「も、モミジはまだ知らなくていいのよ！」

まだ幼いモミジは、二人が朝までアルを襲っていたあの状態を知らずにいた。

「ところで・・・アルは？」

「ま、まだ寝てるわ・・・。今までの疲れが出たみたい・・・／／

／

「そーなんだー。ごはん、持ってってあげよ。」

とてとてとアルの分の昼飯を運ぶモミジ。

「モミジがいなくなったから・・・。こ、これ使いなさいよ・・・

／／／

とナツキが手渡したのは検査薬。

（何故ナツキがそれを持っているのかは聞いてはいけないお約束だ）

『う、うん・・・』

数分後。

「・・・嘘・・・」

ナツキは結果が出た検査薬を見て驚きを隠せなかった。

「ナツキ、どうしたの？」

「モミジ、このことは誰も言っちゃいけないって、約束できる？」

「う、うん・・・」

「・・・アルが・・・『お父さん』になったの・・・」

「・・・ホント？」

「嘘だって言いたいけど・・・結果が出てるのよ・・・」

（現在、あまりにも苦しそうだったためにサツキとユキは別室で寝させている。）

「モミジ、二人のことお願いね・・・！」

「ど、どしたの？」

鬼気迫るかのような表情を見せたナツキに怯えるモミジ。

そして、アルの部屋にナツキは走りだした。

「アルううううっ！！！」

「なんだよ・・・」

大声で部屋に乱入したナツキに、アルは死にかけたような声で返事

をした。

「あ、あ、あ、あんた、とんでもないことしでかしてくれたわね！
？／／／」

「しでかしたんじゃないくてさせられたんだってばー・・・」

「そ、そんなのはどっちでもいいの！ふ、二人が・・・／／／」

「サツキとユキがどうしたー？」

「妊娠したのよ・・・！」

「バカなっ！？」

そして、今に至る。

「・・・よし、話はよくわかった。今回はお前が被害者だと信じよ

う・・・」

「お、恩に着る！」

「・・・アル、幸せにな・・・」

「スバル・・・？」 「お前は一気に二人の子供の親になったんだ、ちゃんと育ててやれよ？ 絶対に変態にするなよ？」

「すっ、するかよ！ バカかお前は！？」

「それで・・・」

「それで・・・？」

「・・・一人で人生の墓場に行ってこい。」

「お前も最終的にはそこに行きつくんだよこのヤロー！！！」

軽いけなしは入っていたが・・・

スバルとしては祝福をしていたのだった。

報酬。

入手・クエストクリア

非公式クエストのためなし。

その他

ガネット（アイリス母親）。

フィアナ（リリス母親）。

サツキとユキ、妊娠。

アル、結婚決定？

第105話 真実（後書き）

・・・これが、二人の妊娠に至る簡単な真実でした。

アルはリアルに被害者です。

発情期は怖いですね・・・

次回はスバルがこっそり育てていたモンスターが！？

お楽しみに・・・

・・・だ、だめだ、疲れた・・・

第106話 ギギネブラとランポス（前書き）

モンスター案を久しぶりに採用しただろう、の106話です。

予めですが、サンナがスバルを呼んだときの表記が平仮名になって
ますが、仕様です。

では、どうぞ！

第106話 ギギネブラとランポス

アルが被害者になった翌日。

「ふああ・・・（ぷにつ）ぷに？」

スバルが大欠伸をして手を下した時、今まで感じない柔らかいものに触れた。

「・・・なんで？」

そこにいたのはガネットとフィアナだった。

「パパ・・・ふにゆ・・・♪」

「うにゆ・・・パパあ・・・♪」

「何だ・・・ガネットとフィアナか・・・」

スバルもほっとしたようだった。

二人はちゃんと服を着ている、ということもあり、（スバル的に）不謹慎なことをしたという疑いをもたれなくて済んだと思ったのだ。

「すばるー、おは・・・よ・・・」

能天気起こしに来たサンナが言葉を失った。

「え、ええええええええっ!？」

そして、絶叫。

「姉さん、うるさい・・・よ・・・」

イシアも起きてきて・・・

「・・・」

呆然としてしまう。

同時に。

へガネット、どこ？

へフィアナあ？

アイリスとリリスの二人を呼ぶ声が聞こえた。

『ふにゅ．．．』

二人が目を覚まし・・・

『あつ、パパあ!!』

『っ!!』

『パパ』発言に驚愕するサンナとイシア。

「す、す、す、スバル、い、一体誰と・・・」

「そ、そそそうだよ・・・、だ、誰と・・・」

わなわなとふるえる二人。

その時。

「あつ、ガネット、こんなところにいたあ」。

「ママっっ。」

『っ!?!』

再び驚愕。

「あ、あ、ああアイリスが、ま、ま、ママ・・・」

「う、うそ・・・」

信じられないという表情を浮かべてしまう二人。

この後、リリースもやってきてより驚愕が酷くなってしまった。

そして、朝食直後。

「ママー、パパはー？」

「え？スバルいないの？」

「うん。どっか行っちゃったのー。」

アイリスは部屋でうとうとしていたところにガネットが来たため、話し相手になる。1

一方リリースも。

「ママー、遊んでえ〜?」

「お仕事が終わってからねえ〜。」

「やーだーやーだー!」

「パパはいないのお?」

「いないのお。」

食後の皿洗いをしていたところにフィアナが来たため、ちょっと困っていた。

「リリース、フィアナ、預かってあげよつか?」

「ライラあ、お願いねえ。」

「OK、それくらい任せなさいよ!」

「ライラお姉ちゃん、何して遊ぶのお?」

「ん〜とね、おままごとは?」

「やろーやろー!」

意外とライラがこういうことが得意だと判明。

「悪いな、今までバタバタしていたから来れなくて・・・」

・・・♪

スバルは農場の洞窟にいるギギネブラに話しかけていた。

このギギネブラ、昔スバルに懐いたギィギをしっかり育てたものであり、今では野生のギギネブラよりも強いギギネブラになっていた。

「・・・今まで何もできなかった罰的な意味で俺の血、吸え。」

かぷっ。ちゅー・・・

普通のギギネブラと違い、可愛らしく血を吸う。

「・・・よし、ここまで。あまり血を吸われすぎると俺が大変なことになるから・・・」

・・・♪

ギギネブラは大人しくスバルから口を話し、スバルに頬ずりをした。

「・・・また、今度暇ができれば。いつになるか分からないが・・・」

・・・（コクコク）

いつになるか分からない再開を誓い、ギギネブラもそれに了承をした。

そして洞窟から出て・・・

「今まで遊んでやったのにそんな自由が利かなくなっちまっ

たな・・・」

と呟いた時。

ガタン！ バタン ドカン！

「な、なんだ！？」

ギギネブラがいた洞窟から騒がしい轟音がした。

「マジかよ、洞窟から！？ 一体何が！？」

スバルは慌てて洞窟に引き返した。

「・・・？」

「ママ・・・」

「大丈夫、恐くないよ。」

「落ち着いて。ね？」

轟音は家にいたアイリスとディルカ、ガネットにも聞こえた。

「どうした！？」

スバルが洞窟に入って見た光景。

それは、何故かギギネブラが一匹のランポスと共にランポス達に襲われていた。

・・・

ギギネブラもギギネブラで、戦う力が無かったため（野性より強いとはいえど攻撃力だけが強く、今までスバルに育てられてきたため、毒を作る力が無かったのだ）、隅に追い込められていた。

「くっ、数が多すぎる！！・・・仕方ない、眠ってくれ！」

そして、スバルはランポスとギギネブラの間に落ちる様にネムリ玉を投げた。

そして、煙は盛大に噴き出た・・・

・・・が。

「・・・しまった、煙が・・・、こっち・・・に・・・も・・・」
あまりにも大量に煙が噴き出た為に煙はスバルの方へも流れてきてしまい、それをたまたま吸ってしまったスバルにも眠気が襲った。

「くっ・・・、眠っちゃう前に・・・止めを・・・」

スバルは、眠気で朦朧とする体を無理に動かし、3匹のギアノスを煙の中頭を刺して殺す。

そして、最後の1匹を刺した瞬間、ついに力尽きて眠ってしまった。

煙がはれたあとには、スバルと二人の女の子が規則正しい寝息を立てていただけだった。

「・・・ママあ・・・」

「フィアナ、どうしたのお？」

急に不安がりだしたフィアナを見つめるリリス。

「パパに何かあったのかも・・・」 「そうかなあ・・・、でもでもお、パパは大丈夫。」

「ホントお？」

「ホントだよお？ パパはね、とっても強いんだからあ。」

リリスは不安に駆られるフィアナを宥める。

「だからあ、フィアナもパパを信じてあげてね？」
「うん！」

フィアナもリリスの言葉を信じて頷いた。

「・・・」

つんつん。

「う・・・くう・・・」

つんつん。

「う・・・ぐ・・・」

一人の女の子がスバルの頬をつつく。

もう一人は隅で体を隠すように丸まっていた。

つんつん。

「うつ・・・うう・・・」

「もーっ！起きてよスバルーっ！」

「うおわあっ!?!」

ついに大声を上げた女の子。

「え？あ、お？な、なんだ!？」

スバルは無論驚きを隠せない。

「もー・・・」

スバルの目の前にいたのは、灰色の長くも無く短くも無い髪の毛で、真紅の眼を持つ女の子だった。

「え、っと・・・誰？」

「ふう・・・、いつも色々話してもらえたのに・・・スバルのバカ・・・」

「・・・まさか・・・ギギネブラ？」

「うん！やっと分かってくれた〜！」

ギギネブラはスバルに抱きついた。

「あとね？わたしはギギネブラっていう名前じゃないの！ロツサつて言うの!」

「そ、そうか・・・」

甘えたようにするロツサにちょっと引き気味になるスバル。

「そ、それで、あの子は？」

「あ、あの子はね？ここに来たのは無理やりだったの。スバルが起きるまでに仲良くなったの。」

「へえ・・・」

とスバルがその子を見たら・・・

「はう・・・／＼／＼」

恥ずかしくなってより縮こまった。

「・・・はは・・・」

スバルは苦笑いするだけだった。

その横ではロツサがうじうじしていた。

「・・・ロツサ、どうした？そんなにうじうじして・・・」

「ふええっ！？え、あの、えとね！？な、なんでもないの！なんで

も！／／／

必死になって『なんでもない』と否定。

「・・・ま、いいか。後は・・・ロッサとその子をどうするか、だ
けど・・・。・・・というかロッサ、少しぐらいは胸とか隠せ！」

「・・・いいもん、スバルだったら・・・／／／」
「よくない！」

女の子は体を隠してもじもじしており、ロッサはロッサで寧ろ全開
だった。

「・・・少しの間さ、ここにいてくれないか？服とかはおいていく
から・・・」

「え、あ、うん。」

ロッサに女の子を頼み、スバルは上着を全て脱いで家に一旦戻った。

家。

「さーて、服はどこだ・・・っと・・・」
「あ、おかえ・・・はう・・・／＼／＼」

家に帰ってきたとき、上半身裸だったのをレノシアに見られ、レノシアは顔を赤くしてしまった。

「レノシア、俺の上着知らない？」
「あう、あうあうあうあう・・・／＼／＼」
「レノシア？」
「はふう・・・／＼／＼」
「お、おい!？」

そして、レノシアは気絶・・・

スバルはレノシアを近くのソファーに寝させ、自分の部屋に向かった。

その後、誰にも見つかることなく、スバルは再び洞窟に向かった。

「・・・わり、待たせた。」

「私は大丈夫。ただあの子に渡した服だけだね？」

「・・・どうした？」

スバルはランポスの女の子を見てロッサに聞く。

「おっぱいが大きすぎてちゃんと着れなかったんだって。」

「・・・なんか、こんな発言に慣れ切ってしまった自分が悲しい・・・」

ランポスの女の子は、先程スバルが洞窟から出た時の態勢と全然変わっていなかった。

「・・・ごめんな？こんな服しか無くて・・・」
「・・・あの・・・／＼／」

女の子はスバルが話しかけた時、顔を半分隠しながら、上目遣いで、囁くような声でスバルに話しかけた。

「・・・ん？」

「あ、ありがとう・・・／＼／」

「・・・例には及ばないさ。ところで、名前は・・・」

「・・・カガリ・・・／＼／」

ランポスの女の子・カガリはスバルの裾を握りながら言った。

「取り合えず、戻るか。」

「そうだね。」

「・・・／＼／」

そして、家に戻った。

家。

『パパ〜!!』

玄関を開けた瞬間、ガネットとフィアナが飛びかかってきた。

「へえ〜、その子たちが？」

「ん？ ああ、まあ、な。義理だけど、俺の娘。」

「パパ、誰？」

「誰そのお姉さん？」

ガネットもフィアナもロッサとカガリに気付いたようで、早速聞い
てきた。

「ロッサは元々前からこっさり飼ってたギィギがギギネブラになっ

た。それで、ランポスに襲われたときに・・・ね。」

「それで、カガリはその時来たランポス。」

『へえ。』

「それよりも、二人とも迷惑かけなかったか？」

『うん！パパ、遊ばし！』

「わ、分かったから分かったから！」

スバルは二人の義娘に引っぱられていった。

「・・・はあ・・・」

「・・・ど、どうしたの・・・？」

「私の初恋も、終わっちゃったなあ、って。」

「わ、私も・・・／／／」

二人でそんな話をしていた。

後々スバルはロッサとカガリを紹介し、アイリスとリリス以外の娘達にかなり言い寄られた。

その上、サツキとユキが妊娠した、という話を聞いたために聞きに行っていたダイアナがその夜、スバルのベッドの上にちよこんと座っていた、というスバルにとって心配な状況が発生していた。

報酬。

入手・クエストクリア

クエストに行っていないため無し。

その他

カ
ガ
リ。
ロ
ッ
サ。
。

第106話 ギギネブラとランポス（後書き）

今回はロツサ、カガリの紹介です。

ロツサ

ギギネブラ雌

身長152cm。

見た目17歳。

胸のサイズはF。

灰色の髪で眼は深紅。ただ視力は若干弱い。

スバルがクエストに行っている最中に懷き、以後牧場の洞窟で隠しながら育てた。

スバルのことは、本人からよく話を聞かされていた故に誰よりも詳しい。故に想いも強くなった。が、ガネット・フィアナの存在で恋を捨てた。

だが、その恋愛感情が爆発すると・・・？

名前の由来は『オドントブロッサム』より。花言葉は『特別な存在』
原案…rise tteさん

カガリ

ランポス雌

身長140cm。

見た目14・・・だが、本人曰く16歳とのこと。
胸のサイズはHー。

蒼く艶のある長い髪で、琥珀色の透き通った眼を持つ。

性格は極度の恥ずかしがり屋。

仲間を追われ、ロッサがいた洞窟に逃げ込み、ロッサとともに人になる。

ロッサとだけ仲がいい。理由は『話しやすいから』。

スバルは好きだが、恋人の存在や、ガネット・フィアナの存在で見守るだけにすることにした。

ローズ、デイルカ曰く『ロリ巨乳』。

名前の由来は『シクラメン』の別名、『篝火^{かがりびばな}花』より。花言葉は『恥ずかしがり屋』

以上です。

次回から長編です！

お楽しみに！

(原案、ありがとうございます)

第107話 傀儡編 其の1 襲撃と保護（前書き）

今回から長編（十回くらい）が始まります！

ただ、それだけです。

では、どうぞ！

第107話 傀儡編 其の1 襲撃と保護

事件は、いつも唐突に起きるものだ。

スバル宅からちよつと離れた無人訓練場。

「ふっ！はあっ！ていつ！」

朝からレミリアの特訓を見ていたスバル。

「レミリア、振り下ろす時に切っ先がずれてるぞ。」

「ほえ？」

「いいか？切っ先がずれていたら切れるものも切れない。それをま
ずは意識しろ。」

「は、はい！」

基礎を教え込まれるレミリア。

シディアも共にいたが、あくまで補助としているだけだった。

「・・・スバル、切っ先が2mmほど傾いた。」
「だそうだ。」

「は、はいっ！」

同時にスバルは鍛錬の協力をしていた。

相手は・・・

「はぁあっ!!！」

「甘い、当たらないぞそれだったら！」

「くうっ！」

「次は私です！」

「いつでもこい！」

約束通りシロンとナコルの鍛錬をやっていた。

「・・・ほええ・・・」

「レミリア、手を止めるな。」

「は、はいっ！」

レミリアはシディアに言われ、再び素振りを始めた。

スバルはシロン・ナコルと1対2の特訓を続けていた。

ちなみに、アイリスとリリスは朝食の片づけを、ライラは子供の面倒を見ており・・・

カクサスとアレックスは二人でクエストに。

残った面々は、暴走しそうなメンバーを抑えるストッパーになっていた。

「・・・これで終わりっ！」

「ぎゃうっ!？」

ナコルがスバルにひっ繰り返された。

「うきゆう・・・」

シロンは既に疲れきって目を回していた。

「ふにゃあ・・・」

ナコルも疲労からか目を回した。

「それだけで目を回す・・・？」

ちよっとどうすべきか迷ったスバルであった。

レミリアは・・・

「きゅ．．．」

同じく目を回していた。

「シディア、どうだった？」

「ダメだ、やる気と気力はある。だが、体力が無い．．．」

「．．．実際に鍛えなおした方が．．．いいのか？」

「だな。」

そして家に帰ろうとして．．．

「．．．っ！」

「．．．来たか。」

「．．．のようだ．．．。」

スバルとシディア、同時に何かの殺気を感じて足を止めた。

「多分ターゲットは．．．」

ガサッ！！

「．．．スバル、お前だ！」

「やっぱりか！」

近くの草むらから急襲をかけるために飛び出てきた猫耳っ娘。

「させん！」

シディアがそれを止めるために剣を振り、彼女の短剣を弾いた。

「きょうっ!!！」

弾かれた反動で尻もちをついた少女（身長が小さいだけで実際は16〜7くらいとスバルは推定）は、失敗したと見るや、突然懷から短刀を出したが・・・

「ふざけた真似をやめろ。」

の一言でスバルに一蹴された。

「ママ、パパたちレミリアお姉ちゃんと『とっくん』してるの?」

「特訓というよりは・・・ねえ?」

「そうね・・・。多分地獄を見てるわね・・・」

「じごく?」

ガネットはパパ、つまりスバルが特訓していることを聞いたが、アイリスとライラは実際どうなっているかを想像していた・・・

「えとね? まだガネットは知らなくていいんだよ?」

「そ、そうそう! というか、ガネットは見ない方がいいわよ!」

「そう?」

ガネットは大人しくアイリスの膝の上にちょこんと座っていた。

一方、リリスとフィアナは・・・

「ママ、お皿片付けたよ。」

「ありがとう。いい子いい子。」

「えへへえ〜♪」

そんなこと露知らずで片づけをしていた。

「・・・暗殺者か？」

「だな。身なりはそう見えないが・・・」

「・・・う・・・あ・・・」

一度尻もちをつかせた少女は小刻みに震えながら何かを呟いていた。

「・・・種族はどうやらアイルー、誰かの指示を受けてきたか、だな。顔に痣があることから絶対服従を命じられていることは確かだな。」

「叩かれちゃう！！失敗したからまた叩かれちゃう！酷いことされちゃう！痛いのだよお！気持ち悪いのもやだよお！！うわあああああん！！！」

「・・・こう言うことから、このアイルー娘は奴隷、だな。」

「・・・保護、してやるべきか？」

「だな。」

シディアもスバルの意見に賛同したようで、この少女の保護を行うことに決定した。

「・・・と、その前にギルドナイトに報告しとかないと。」

「・・・この少女の処遇は全て俺達で請け負う、と？」

「いや、この少女の元主の処遇を、だ。間接的に、だが、俺を殺そうとしたから・・・」

「・・・なるほど。」

そしてスバルは絶望に浸ったかのような表情を浮かべる少女に声をかけた。

「痛いのだ！気持ち悪いのもやだ！主様ごめんなさい！ごめんなさい！」

「大丈夫、落ち着いて！これからは痛いのも気持ち悪いのも無いから！」

「許してください！ごめんなさい！主様あ！」「落ち着け！ここには君の主はいない！そしてその主とは縁を切るんだ！」

「ひっく・・・、ふえ・・・？・・・くすん・・・」

涙でぐちゃぐちゃになった顔をスバルに見せる少女は、スバルの一言に安堵の意を見せているようだった。

「その元主に何をされたのかはよく分からないけど、顔や手を見た

ら大体分かる。相当酷いことされたっていうことを。」

「うう・・・ふぐう・・・ひつく・・・」

「・・・泣きたければ泣けばいい。すっきりするだろう。」

「ふええええええええん!!」

そんな中、レミリアもシロンもナコルも気がついて、少女が泣いている光景を目撃。

「し、しし師匠!?! いい一体何を!?!」

「ん? 襲われた。」

「お、襲われた!?!」

「だ、大丈夫ですか!?!」

「外相はない。ただ、この子のことでちょっと問題が発生してな・・・」

『問題?』

レミリアとシロンが同時に首をかしげた。

が、ナコルだけは違った。

「くんくん・・・、何でしょうか・・・、よくわからない臭いがしますよ・・・?」

「ナコル?」

「匂いって・・・なんだ?」

ナコルの発言に疑問符を浮かべるだけの面々。

「ええ、葉の臭いとか、蝋燭の臭いとか、タバコの臭いとか・・・、挙げればきりがありませんよ・・・」

「・・・ナコルの鼻は正確だ、相当暴力を受けたんだろうな・・・」
「・・・シディア、ナコル、シロン、レミリア。この子を頼む。俺はこのまま、ギルドナイトへいってこの子の保護の許可を取ってくる。」

「ああ、任せろ。」

そして、スバルはただ一人別のところへ歩いていき、シディア達は少女を護りながら帰路に就いた。

「・・・ただいま。」

スバルが帰ってきたが、先程のことがあり空気は重くなっていた。

「スバル、襲われたのホント？」

「シディアがいたし、俺もそう簡単に殺されないからな。それで・
・」

スバルは少女を見る。

「名前、何？」

「名前・・・無いの・・・」

「やっぱり・・・奴隷の扱いを受けていたからか・・・」

名前が無いということが、ますます感覚を強くする。

「まず確認だけど、君は元々アイルーだよな？」

「うん・・・」

そして、質問が始まった。

分かったことは、

彼女はアイルーの女の子だということ。

元主には無理矢理擬人化させられ、半ば拉致動揺に連れて行かれたこと。

元主にはスバルと同じ擬人化の能力があり、自分以外にこの能力を持つことを許さない、といった人間だ、ということ。

過去何度も同じことを繰り返し、失敗したら身体を叩かれる、タバコを押し付けられ烙印みたいにされるなどの行動をされたこと。自分にはスバルを殺す用に向かわされ、失敗したら『お前を壊す』、と脅されたこと。

だった。

「・・・酷い・・・」

ナデシコは思わずそう呟いてしまった。

「・・・だが、これではつきりした。相手は明らかに俺に敵意を持

っていること、この子を使って襲わせたことで明らかに宣戦布告をした、ということ！」

スバルの声が荒くなる。

「俺は・・・そいつを止める！最悪・・・ハンターとしての禁忌を犯すことになるだろうが・・・」

「スバル、まさかお前・・・」

カクサスはスバルの方をふつと見る。

顔には汗が見える。

「ああ・・・。多分そいつはその子以外にも奴隷としてモンスターを持っているだろう・・・。最悪、感情を持たない傀儡として・・・。俺はそれが許せないから・・・怒り任せに殺してしまうかもしれない、ということだ。」

「スバル・・・」

アイリスはスバルを心配そうに見つめた。

「・・・ハンター同士の・・・戦争だ・・・！」

スバルが静かに、だが明らかな怒りを持って・・・呟いた。

「あのね、パパ？このお姉ちゃん、名前どうするの？」

ガネットが不意にスバルに聞く。

「お姉ちゃん、名前ないままだとかわいそうだよ・・・」

フィアナも立て続けに言う。

「そう・・・だな・・・」

名前を考えていたが・・・

「・・・『レイ』ってどうかしら？」

ライラが不意に提案をした。

「『レイ』？」

「そう。特に意味はないけど・・・、この子、可愛らしいじゃん？」

「そう、だな。今から君は『レイ』だ。よろしくな。」

「うん、よろしくね、ご主人様！」

「い、いやいや、ご主人様って言わなくていいから！」

「でもお・・・」

レイはスバルを新しい主と思ってしまっていたが、スバルとしては例も家族の一人と考えていた為、ちよつと問題が発生した。

結局、アイリス達が妥協してしまい、スバルが折れる形となつてしまっていた。

To be continued...

第107話 傀儡編 其の1 襲撃と保護（後書き）

今回はレイについての紹介です。（一部だけ）

レイ

アイルー雌

身長135cm。

見た目13だが、実際は16歳。

胸のサイズはD。

スバルを『殺せ』と命令されてきた奴隷扱いを受けてきたアイルーの女の子。

スバル殺害を失敗し、『壊される』と泣きじゃくっていた時にスバルから『元主との縁を切れ』と言われ、解放された。

今では、スバルを主として認識しており、スバルを『ご主人様』と呼ぶ。理由は、『この人にならどんな扱いをされてもいい（本人談）』。

名前は、ライラが『可愛いから』という理由で付けた。

以上です。

次回はまたまた襲撃！

お楽しみに！

第108話 傀儡編 其の2 少女の処遇と二度目の襲撃（前書き）

傀儡編其の2です！

レイをどうするかで話し合い、スバルが一人雪山へ！？

では、どうぞ！

第108話 傀儡編 其の2 少女の処遇と二度目の襲撃

「・・・さて。」

スバルが話を切り出した。

「今から話し合わないといけないのは、レイのことだ。」

スバルはレイや子ども組と面倒をみるために行ったりリス以外の全員をリビングに集め、会議を開いた。

「レイは・・・、まず、俺達の許へ置いておくべきか否か。」

『置いておくべきだと思う!』

「置いておく方が妥当だな。」

全員一致で保護が確定。

「次いで、彼女は俺達の何、としておくか。」

「何、って?」

スバルの言っていることが分からず、聞き返すシロン。

「彼女の存在位置、だ。子どもとか同居人とか・・・」
「・・・あの子、昨日の夕御飯の時、自分から手伝おうとしていたわね・・・」

ライラがその時のことを思い返した。

「・・・だったら、メイドさん、っていうのはどう？」
「プラナ、さすがにそれは無いと・・・」

プラナが提案したことはスバル的には引き気味だったが・・・

「それなら問題ないかも！」
「彼女は命令じゃなければ大丈夫です！きっと！」
「私もあの時は『これ運んでくれる？』だったし、きっとOKだよ！」

皆が『メイドとして従事している』という扱いでOK。

「いやいや・・・それは流石に無いと思うぞ・・・？」
「だったら本人に聞くべきだよ！」
「そうですよ！」
「だったら、善は急げ、ね！」

スバルはそれでも困惑気味だったが、アイリス、ナコル、マルスがレイに聞きに向かってしまった。

そして、帰ってきた。

「で、で!?! 結果は!?!」

シロンが待つてましたとばかりに聞き出す。

「レイは『痛いことをしなければメイドでも構わないよ!』って!」
「要は酷いことしなければ大丈夫ってことよ!」

許可を取ってきたようだ。

「・・・これでOKでしょ?」
「・・・好きにしてくれ・・・」

スバルは半ば落胆したかのような声を出した。

「とにかく、レイは俺達で保護、という形で決まりだな。」
「そして、スバルを殺そうとしたレイの元主も・・・どうにかしないと、だね・・・」

・
レイの処遇も決まり、その後の行動も少しは決まりつつあったが・

「あのさ皆、オイラ思ったことがあるんだけど・・・」
「どうした、ノブ？」

ノブが一つ声を上げた。

「相手はスバルを殺そうとしたんでしょ？今回はあくまでレイだったけどさ、戦力はまだまだあるんじゃないの？」

「・・・戦力が未知数、か・・・」

全員で落ち込むしかなかった。

昼。

「スバル、本当にクエストに行くの？」

「・・・ターゲットの完全な確認、だ。レイに聞くのが一番手っ取り早いかもしれないけどな？レイに余計な負担をかけたくないし・・・」

アイリスはスバルを心配するが、スバルは自分を敢えて囹とした作戦に出た。

開始。

クエスト..
雪山草摘み

「今回は俺一人のクエスト、ターゲットが俺なら俺がたった一人の時に襲撃してくるはずだ・・・」

スバルは単身雪山に登って行った。

山頂付近。

「・・・無い・・・か？　だったらターゲットは俺じゃないのか？　・・・
いや、レイは俺に向かって『死んで』と言っていたから・・・」

とスバルが眩きながら歩き回っていたら・・・

ガアアアアッ!!

不意にティガレックスが現れ、突進をしてきた。

・・・が。

「ふっ!・・・首輪・・・だと!?!」

避けたその刹那、そのティガレックスに首輪が付けられていたのを確認した。

体勢を立て直したその時、ティガレックスもスバルの方へ身を翻した。

「・・・確定、かつ!」

この瞬間、スバルは己の疑念を確信に変えた。

（スバル…ターゲットは・・・俺だ！）

そうと分かった瞬間、スバルは相手のティガレックスをできるだけ弱らせて戦闘意思をなくすことにした。

その頃家では、作戦会議が行われていた。

作戦会議の内容は、『スバルを守ろう会議』だった。

議長は無論、アイリス。

「・・・ということでもしターゲットがスバルだったら、どう守ろうかってこと！」

「私だったら相手を徹底的に叩いていくだけ！戦闘の意思をなくせばいいの！」

「私は話し合いができないかな、って・・・」

「あ、あの、お茶入りましたよ・・・」

何気なく白熱する会議。

メイドらしくお茶が入ったと持ってきたレイは、一つ一つ丁寧に置いていった。

「話し合いで通用すると思うの！？相手は殺意丸出しなのよ！？」

「ひうつ！？」

「あ、あのー・・・」

ライラが話し合いを提案したレノシアに食って掛かった時、レイがおずおずと呼び掛けた。

「レイ、どうしたの？」

「あ、あの、元主の情報なんですけど・・・」

「レイ、敬語じゃなくていいよ？」

「あ、じゃあ・・・。元主の情報なんだけど、私と同じ境遇の子が

5人くらいいたの。そのうち3人は徹底的に色々されていたから相当強いと思う。・・・戦ったこと無いから分かんないけど・・・」

レイの発言に全員が驚愕の顔を隠せなくなった。

「う、嘘!？」

「それと、私には名前が無い、って言ってたでしょ？名前の代わりが番号だったの。私の場合、PT-01だったの。PTはプロトタイプの略。」

「・・・試験・・・体・・・」

「それで強そうに見えたのが、PT-03のティガレックスとPT-04のナルガクルガとPT-05のモノブロス。」

「全部上位種じゃない!」

「勝ち目があるかないか、という話じゃ無いじゃん・・・」

シロン、涙目。

「ご主人様だったら大丈夫だって思うけど・・・」

「・・・っ!」

「アイリス?」

レイがそこはかとなない心配や確信をしていた時、アイリスがピクンと動いた。

「・・・嫌な予感がしたの・・・」

「・・・アイリス、不吉なこと言わないでよ・・・」

だが、アイリスの予感は半ば当たっていた。

「今度は尻尾か！くっ、俺を狙ってる奴、一体どれだけ俺を妬んでやがるんだ！？」

スバルはティガレックスの攻撃を避けながら顔も知らない相手に悪態をつくスバル。

「くっ、ティガレックスとは何度も戦ってるから対策は練りようがあるけど、ここまで体力が持つティガレックスは聞いたこと無いぞ！？」

スバルはただただ避けるだけではなく、剣の峰で打撃攻撃をくわえ、戦意喪失、或いは気絶を狙っていた。

だが、相手はそれらの傾向が一切見られない。

「こいつは・・・、レイと違う！俺に一撃加えるまではまず帰らない傀儡だ！」

スバルは避けて攻撃を加えて、という工程を繰り返していた。

「私、スバルのどこ行ってくる！」

「だったら私も行くわ！」

「わ、私だって！」

アイリス、ヘリアン、ナコルがスバルの許へ行くと言い出した。

「ちょっと待ちな！スバルのどこ行くなって言っただって、足手纏いになる可能性だって無くはないだろう！？」

今にも駆けだそうとしている三人をマルスが止める。

「そうだよ！皆が行ったとしても確実にスバルがやられちゃうから！」

ダフネも制止をかける。

「でも・・・」

アイリスが口を開こうとした時。

「もし皆がスバルのところへ行ったとして、スバルがそのPTの子と戦ってたら？」

ミズカが3人に語りかけた。

「助けるだけよ！」

「でも、相手だって無知なわけじゃないでしょ？それで、現実性を取るために3人、特にアイリスをターゲットにしたら？」

「スバルは皆を守ろうと・・・あっ！！」

ウィリアが全てを言う前に気付く。

「そうだ！皆を守ろうとしてスバルがやられちゃう！」

「・・・それだけじゃない。スバルが死んじゃう可能性だってある・
・・・」

キャリーが有り得てほしくない可能性を告げる。

「だ、大丈夫だよ！皆が行かなくても、スバルは絶対勝ってくれる
って！」

クリニアが全員を励ますように言葉を発した。

「そ、そうね！あ、あいつが負けるなんて無いからね！」

「そうですよ！スバルさんが負けるなんてありませんよ！」

「・・・そうじゃのう。スバルのことじゃから、腕か脚に切り傷作
るくらいかのう？」

ライラ、スペリア、スズラがそれぞれの言い方でスバルの勝利を言
った。

「私達は私達で、スバルのことを待っていればいいんだよ。」

締めくくめるかのようにプラナが言って、会議はお開きとなった。

だが、面々はリビングからは離れなかった。

「ぐっ・・・」

スバルはついにジリ貧になっていた。

「一応ダメージは与えているはずだが・・・、そんな風に見えない・・・っ！」

焦燥が募る。

そんな中・・・

「・・・ダメ、このままじゃ・・・ダメ・・・」
「ティガレックスが喋った!？」

不意にティガレックスが喋り、驚くスバル。

そして、突如光が辺りを包んだ。

「うわっ！」

「この隙に・・・!」

ガキン！

光の中、女の子の声が聞こえたかと思ったその時、金属同士がぶつかる音が辺りに響いた。

「・・・失敗・・・っ！」

「まだ・・・、やられて・・・、たまるか・・・っ！」

力負けし、途切れ途切れに言い返すスバル。

彼の眼前にいるのは、短刀をノワールにぶつける、黄色の服を着た16歳ぐらいの少女。

「はぁっ！」

「がっ！」

とうとう剣を弾かれた。

「・・・ふっ！」

「うぐぁっ！」

そして腹を殴られ・・・

「が・・・っ、は・・・っ・・・」

近くの岩に衝突する。

「・・・ご主人様の命令なので・・・、・・・死んでください・・・」
「命令だとかどうかは・・・知らんが・・・、・・・まだ・・・死ねねえんだよ・・・っ！（ボフッ！）」
「・・・しまっ・・・」

反撃とばかりに煙玉を叩きつけ、一時的に視界を奪う。

その隙にスバルは雪山を離脱、クエストリタイアと同等のものになった。

そして、スバルが帰宅。

「スバル！無事だったの！？」

「・・・いや、ティガレックスと交戦した・・・。首輪を確認できなかったから・・・、レイと・・・同様だ・・・」

「まさか・・・、PT-03！？」

レイが驚愕の色に染まった顔を見せた。

「・・・アイリス、俺を・・・俺の部屋に・・・」

「う、うん・・・」

ボロボロになり、アイリスに支えられてやっと立っていられる状態のスバルを連れていくアイリス。

「レイ、後でスバルにPTの子たちのこと話してあげてよ？」

「うん・・・」

スバルとアイリスがいなくなった後、シロンがレイにそう言い聞かせていた。

スバルはなんと、あの殴打のせいで肋骨が一本折れてしまっていたのだった。

「スバルさんのことですから2日ほどで治ると思いますよ?」

「安静にしていれば、だろ? だが敵さんはどうだ? 待ってくれると思うか?」

「ですよね・・・」

とカトレアと話していた時。

「スバル、動けない間はオイラやカクサス、アレックスやシディアやサスケに任せろ!」

「・・・ああ。ノブ、暫く任せた・・・」

スバルはノブに、2日の護衛を任せた後、静かに眠った・・・

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第108話 傀儡編 其の2 少女の処遇と二度目の襲撃（後書き）

P Tシリーズがほぼ明かされました。

次回も襲撃！迎え撃つは・・・！？

お楽しみに！

第109話 傀儡編 其の3 被襲撃者の養療、命懸けの戦い（前書き）

109話です！

今回はカクサスが奮闘します！

ちょっと笑いもあります・・・？

では、どうぞ！

第109話 傀儡編 其の3 被襲撃者の養療、命懸けの戦い

「・・・ぐう・・・」

スバルは自分のベッドの上で呻いていた。

「スバル！？大丈夫なの！？」

「ご主人様！？」

「お、落ち着け・・・、肋骨が軋んだだけだ・・・」
「・・・もう・・・」

ほっとしたような顔をするアイリスとレイ。

「スバル、今日はゆっくり休んでおけ。護ることくらいはできる。」
「ああ・・・、頼んだぞ、カクサス・・・」

弱々しくカクサスに頼むスバル。

「ところで・・・皆は？」

スバルは、自分のことを省みずに他の全員を心配していた。

「一応、一番襲撃されにくい地下に避難してる。避難してないのはスバルと私とレイだけだよ。」

「はい。私はご主人様と奥様を護衛するのが今の仕事ですから。」

「お、おお、奥様って・・・／＼／＼」

「俺達はまだ結婚すらしてないぞ!?!?・・・があっ!?!?!?」

「す、スバル!落ち着いて!?!?」

レイがついつい言ってしまったことに過剰的に反応してしまったスバル。

結局例に漏れること無く肋骨が折れていることを忘れていた為に激痛で苦しんだ。

一方、外。

「今回ここに来るなら人型で来るかも・・・知らないね。」
「・・・そうですね・・・」

ノブとサスケは入り口を護っていた。

『人型で来る』、これが一体どういう意味なのか。

先日、スバルが単身ティガレックスと戦ったときにスバルが見た光景のことである。

それは、眼の前でモンスター形態から人型形態に光を纏って変わった、というだけだが。

「スバルの言ってること信じたくもなるけどさ？なんだったのあの

非現実的な話？アイリス達だってあそこまですべて無いよ？モンス
ターになったり人になったりとかさ？」

「・・・の、ノブ？」

「へあっ！？あ、あれ？オイラ、なんか変なこと言ってた？」

「・・・愚痴言っていました・・・」

「うわぁ・・・、オイラって・・・」

ノブはかなりへこんでいた。

「・・・来たか！」

「カクサス？」

突然声を上げたカクサスに疑問符を浮かべるだけのアイリス。

「来たって？」

「俺の知ってる気でない何かが来た・・・、つまりは敵！」

「そんな・・・」

「アイリスとレイはその場に残ってスバルを守ってくれ！俺はそのまま迎撃に当たる！」

「う、うん！」

「わかった！」

カクサスはレイとアイリスを残し、迎撃に向かった。

外。

「・・・ちっ・・・」

「サスケ、絶対に殺さないように！一旦捕まえてスバルを殺そうとした相手を吐かせる！」

「・・・分かりました！」

ノブとサスケが戦闘を始めていた。

相手は、黒髪の少女。

頭には猫耳。

そう、ナルガクルガだった。

「流石に、剣を使わないとなると、戦い辛いな・・・」

シディアもその少女と交戦をしていたものの、慣れない徒手空拳に戸惑っていた。

「皆、ご主人様のために倒れてよお！スバルを殺させてよお！」

「悪いが、殺させるわけにはいかないのぞな！」

「逆にお前を捕まえさせてもらおうよ！」

わりと子供っぽい言い方をして物騒なことを言う少女に対し、3人で挑む。

傍から見れば大人げない、と思われがちであるが、相手はナルガクルガ、しかも強さは推定G級。

3対1に持ち込んだとしても負ける可能性は否めなくなっているのだ。

〈済まない、少々遅くなった！〉

そして、徒手空拳の猛者・カクサスがついに到着、4対1になった。

「ふーん、こんなか弱い女の子に4人がかりで挑むなんて・・・最低だね。」

「人の寝込みを殺そうとするお前はどんなんだ？」

「私はいいの。ご主人様の命令だから。」

「だったら、捕縛してその主について白状してもらおうか！」

スバルの家の前の広場で、5人はぶつかった。

地下。

「ううっ……」

ナコルが唸っていた。

「ナコル、落ち着いて……」

「落ち着いていられませんか！今この時にスバルがピンチになるかもしれませんよ！？」

ウィリアが落ち着かせようとしても、ナコルは興奮しきってしまった。

「……カクサス……」

『・・・』

ナデシコはカクサスの心配を、リナトとニンフはただただカクサスの無事を祈っていた。

そんな中・・・

「ちょっと！解放してよ！なんで私を縛るの！？」

「イシアあゝっ！姉さんを縛らないでよおゝっ！」

「ふにゅゝっ！」

1番の暴走因子、サンナとヘリアンとクリニアは縄で縛られ、動けなくなっていた。

「だって、姉さんやヘリアンを放置していたら逆に皆が危険でしょ？」

「・・・それに、皆のことを考えるなら大人しくしている方がいいよ・・・？」

『うーっ！！！』

ガンッ！
ゴンッ！
ドスッ！

外に響き渡る殴打の音。

カクサスと少女が拳を振るいながら舞っているような状況が出来上がっていた。

「さあさあさあさあっ！さっさと倒れちゃいなよおっ！」

「ふっ！俺はそうやすやすと倒されたりしないぞ！？」

「うっさいうっさいうっさい！」

途中で大声で何かを叫び合う二人。

「す、凄い・・・」

「あっちのナルガの子は絶対に死なない可能性があるけど、カクサスは殺される可能性がめちゃくちゃ高いからね、本気にならざるを得ない、といったところかな？」

ノブとサスケは考察を述べ合ったり感想を言ったり。

「ノブ、サスケ、ここは任せた！俺はスバルの許へ戻る！」

「わかった！ここは任せて！」

「スバルさんのところへ！急いでください！」

「了解！」

シディアはスバル、アイリス、レイの許へ走って戻って行った。

その頃、スバル達は・・・

「お、俺が・・・、戦わないと・・・」

「ダメ！スバルは寝てないぞ！肋骨折れてるんだよ！？」

「だが・・・、皆を・・・、危険には・・・」

無理にでも起きて戦おうと、応戦しようとするスバルを寝かせようとするアイリス。

「ご主人様！寝てないとだめですよ！」

「止めて・・・くれるな・・・！」

「スバル！寝てろ！」

レイにも止められるが、それでも我儘を言うように起き上がろうとしたスバルに一括するシディア。

「他の者を頼れ！全てお前一人で背負うことはない！」

「・・・だが・・・」

「ダメ！」

「ごふおっ!？」

それでも動こうとするスバルを、抱きついてまで止めるアイリス。

「ダメ・・・！スバルが死んじゃ・・・、やだよお・・・！」

「あ、アイ・・・り・・・ス・・・、い、今・・・死・・・にそ・・・う・・・」

「あ、アイリス！ご主人様が！」

「え？あ、うえっ!？ご、ごめん！」

こんなやり取りがあった。

「くっ・・・」

「どうしたのお！？さっきまでの威勢はどこにあるのお！？」

ついに劣勢になり始めたカクサス。

彼の頬に一筋の傷跡が付く。

「ふん・・・、まだ『まいった』などと言うわけにはいかないんだな！」

「だったら・・・、殺してあげる！」

ナルガクルガの少女は先程よりも攻撃速度を上げ、カクサスを翻弄しようとする。

「カクサス！」

「・・・あの速度じゃ・・・、勝ち目がありませんよ・・・！」

ノブやサスケも心配する。

そんな最中、カクサスは眼を閉じた。

「あっはははは！！本当に死にたいのね！？」

ナルガクルガの少女は狂ったような声を出して迫る。

「・・・」

迫る少女に対してもカクサスは微動だにしない。

『カクサス！』

アイルー二人がカクサスに向けて悲痛な声を上げたが・・・

ドグオツ！！

「か・・・は・・・」

ダメージを受けたのは少女の方だった。

「・・・調子に乗り続けたのが仇になったな。」

「う……ぐ……」

予想外の反撃に遭い、少女は憎しみの籠った眼でカクサスを睨みつける。

「さあ、吐いてもらおうか！スバルを狙う奴の正体を！どうして狙うのかも！どんな奴なのかも！」

「ぜ……、絶対に言うもんか……！絶対に言うもんか！」

そして、少女は再び立ち上がり、バックステップでカクサスとの距離を取り……

「今度こそ殺しに来るからね！？」

と言って逃げていった。

「……ふう。これでおしまいだな。一時凌ぎには……なっただろうな。」

「カクサス！頼大丈夫なの！？」

「……出血が……！」

戦い終わってカクサスの許へ駆け寄る二人。

「大丈夫だ。出血量はすさまじいかもしれないが、あくまで見掛け倒しだ。心配する必要はないさ。」

「ならいいんだけど・・・」

外にいた3人は家に戻っていった。

あんなに激しい戦闘があったにも拘らず、家本体には何も被害が無かった、ということが唯一の救いだった。

「相手は撤退した。一時凌ぎかもしれないが、それだけでも進歩だろうな。」

「だいたいが・・・うぐっ・・・」

脇腹を押え、呻くスバル。

「・・・どうせまた『俺が皆を守る』とか言って動こうとしたんだろ？それでアイリスかレイに抑えられて・・・と言ったところか？」
「・・・なぜに全部的中させるんだよ・・・」

スバルはへこんでいた。

「カクサスから聞いた話なんだけど、今日襲いに来たのはPT-04・・・だったみたい。」

「それで、スバルの肋骨を折ったのがPT-03・・・」

リビングでは作戦会議が行われていた。

「今後スバルを守ろうとしたって、スバル自身が自衛するだけじゃダメだから・・・」

「私達が強くないといけないわね・・・」

「戦闘組だけでも、ね。」

ライラとシロンが結論付け、強くなることを各々が決意した。

全ては、スバルを守るため。

全ては、愛する人を助けるため。

全ては、助けるべきものを助けるため。

目標はバラバラだろうが、最終的に強くなることに逢着していた。

To be continued...

第109話 傀儡編 其の3 被襲撃者の養療、命懸けの戦い（後書き）

今回は、PTシリーズ3人目が登場しましたが・・・、書いてて『・ヤンデレ?』と思ってました。

次回は・・・覚醒。

護るべきもの有る限り・・・負けられぬ戦がある。曲げられぬ信念がある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3447k/>

モンスターハンター 狩人とモンスターの奇妙な話

2011年3月3日00時37分発行